姫勇者ラーニャ

松宮星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫勇者ラーニャ

【Ｎコード】
Ｎ８４４８Ｖ

【作者名】
松宮星

【あらすじ】
大魔王ケルベゾールドの十四回目の降臨。その時、勇者グスタフは謎の奇病に倒れていた……。いとこの代わりに『勇者の剣』と共に旅に出たのは、王女ラーニャ、十八歳！　愛する人の為にこの世界を守ってみせるわ！　と、はりきるラーニャは女王様になりたいお姫様。その暴力娘を支えるのは、死んだはずの弟と、苦しい恋に悩む天才と、勇者おたくに、忍者ジライ。果たして、ケルベゾールドを倒せるのか？　ラーニャの恋は実るのか？　『女勇者セレス』の続編、セレスと忍者ジライの子供達の話です。前作の登場人物が

いっぱい絡んできますので、こちらからだとちょっとわかりにくいかもですが、話が通じるように頑張ってみます。

ケルベゾールドってMだと思う！　十二歳の秋！（前書き）

この話は『女勇者セレス』の続編です。

が、『女勇者セレス』の『旅のはじまり　＊　カルヴェル　＊』の後、ムーンライトノベルズの『女勇者セレス――千人斬り事始め編』のジライ編に話が続き、本編の『終わらない伝説』が無かった事になっている話です。すみません、わかりづらくて。

『旅のはじまり　＊　カルヴェル　＊』→ジライ編→『姫勇者ラーニャ』の流れです。『女勇者セレス』をご覧になった方が人物関係がわかります。１８歳以上の方は『女勇者セレス――千人斬り事始め編』だけでも、せめて。

ほぼ毎日更新だった『女勇者セレス』とは異なり、こちらはほとんど書き下ろしなので、不定期連載となります。

ケルベゾールドってMだと思う！　十二歳の秋！

大魔王ケルベゾールドって、Mなんじゃないかしら。

神の光に満ちた世界を乗っ取り、世界を闇に満たそうとしているとか……

今世を滅ぼし、人を根絶やしにして、魔の世界を創ろうとしているとか……

お題目なんじゃない？

本気だったら、勇者に十三回も負けるはずない。

魔界の王の大魔王なんだもの。

神様と同じくらい強い大魔王が連敗なんて、ありえない。

この世界に十三回も召喚され、十三回も勇者に討ち取られてるなんて……

勇者に殺されたくって、殺されてたくって、しょうがないのよ。

つまり、あれね。

片思い。

勇者に会いたい一心で今世に現われて、Mだから勇者に殺してもらってるのよ。

完璧な答えでしょ？　と、思って答えたのに、家庭教師のリオネルが、やれやれって感じに首を左右に振った。
「ご冗談がお上手ですねえ、ラーニャ様」
冗談じゃないんだけどなあ。この答え、気にくわないのね。
あ、そっか、わかった。
お相手は『勇者』じゃないんだ、人間なんて何十年かで死んじゃうものね。十三人の勇者はぜぇ～んぶ違う人間だけど、持ってる武器はずっと一緒。
大魔王の片思いの相手は、ずばり『勇者の剣』！　愛する『勇者の剣』に殺されたいのよ、ドMの大魔王は！
リオネルは、フーッと溜息をついた。
「……ラーニャ様、魔族学、もう一度、最初からやり直されます？　家庭教師となってからはや半年……何度も繰り返しお教えしてきましたが……」
「魔族学ぐらい、バッチリ覚えてるわよ。あなたに教わる前から、習ってたもの」
「では、質問します。魔族は今世にどうやって現われます？」
「この世に存在する何かに憑依して現われる」
「正解です。では宿主からどのような影響を魔族は被るでしょうか？　木に憑依した場合で説明してください」
「木と同じ性質となるわ。魔族が魔法障壁も張れないクズレベルだったりすると、倒すのは簡単よ。火が弱点になるから、燃やしちゃえばいいんだもん。すぐ殺せるわ」
「正確には、『炎で簡単に宿主を憑依不可能状態の炭レベルまで破壊できる』です」
「同じことじゃない」
「では、次の質問です。宿主が憑依不可能状態となったら、中身の魔族はどうなります？」
「魔界に戻る」

「何故？」
「何故って……宿主が死んじゃったから」
「そうです。魔族は宿主と縁を結ぶ事によって、今世に現われます。その縁を失えば、今世に存在できず、魔界に強制送還されるのです。今世に出現する魔族にとって、宿主のもたらす影響は多大なのです」
「知ってるわよ」
「ご存じならば」
リオネルが鼻眼鏡をかけ直しながら、ジロリと睨んでくる。
「おふざけになるのはやめてください。魔界では絶大な力を誇るケルベゾールドも、今世に出現する場合、宿主の能力に合わせて能力が制限され、その上、宿主の思考パターンに基づく行動をとってしまうのです。魔界では神に匹敵する力を有するケルベゾールドも今世では、そうではない。だから、手を抜いてわざと勇者様に負けているわけではないのです。わかりますね？」
「それって、つまり、憑代がバカでカスで無能なら、大魔王もバカでカスで無能になるってわけよね？」
「そうですね」
「わかったわ。さっきの質問の答え！　何で勇者が大魔王に十三回も勝ってこられたのか！　今まで大魔王の憑代となってきた十三人が馬鹿でどーしようもなく弱っちかったからなんだわ！」
リオネルはにっこりと笑みを浮かべ、右手に握る長い木の定規でバチ――――――ンッ！　と、テーブルをぶっ叩いた。
「先程の『大魔王がMだから』だなんて、ふざけた答えよりはマシですが……歴代十三人の大魔王はそれは、もう、凄まじく強かったって……お教えしてきたはずですけれど？　大魔王の憑代が『馬鹿で弱っちかった』だなんて……ご先祖様の偉業を地に堕としめる発言です」
あ……リオネル、かなり本気で怒ってる。
勇者一族の家庭教師となる学者一族（これも、またこれですごい歴史よね）の出で、私のいとこの現勇者のグスタフ兄さまの教育係

を務めたことを自慢にしている職務に忠実な超マジメ人間で、学問一筋できちゃったもんだから三十過ぎなのに独身……まあ、この手のタイプって、頭かたいわよね。

「答えをお教えします、決してお忘れなきよう、しっかり暗記してください」

バンバン！　と、リオネルが木の定規でテーブルを鳴らす。あ～あ、そんな事してると、又、折るわよ。今月だけで五本も折ってるくせに……

「歴代十三人の勇者様達が高潔な魂をもって『勇者の剣』と心を通わせ合い、剣より無限の力を借りたから……正解はこれです！」

リオネルが荒い鼻息で私を見る。

「わかったわ、勇者が『勇者の剣』と心を通わせ合ったから、勝ててこれたのね」

そう答えなきゃ、このくそマジメな学者が延々と講義してくるのはわかりきってたから、とりあえず、そう答えておいた。

『勇者の剣』ねえ……

不死身の大魔王を葬れる唯一の武器。

正しくは、大魔王が憑依した事によって不死身となってしまった憑代に唯一ダメージを与えられる武器。

しゃべる事こそできないけれど、剣には思考力があり、たいへん気難しい性格をしているそうだ。自分を所持するにふさわしくない者が触れると、怒って雷を落してくるような。

信仰心に篤い初代勇者ラグヴェイ様がエウロペ神より賜ったその両手剣は、ラグヴェイ様の血筋の者しか振るえない。

剣は、十三代目勇者であった私のお母様から、お母様のお姉様の子供、いとこのグスタフ兄さまに渡っている。

十三年前、お母様は、『勇者』の資格を捨てる事によってケルベゾールドを葬った。しかし、剣は不浄となったお母様の手を拒み、持とうとすると大岩のような重量となって床にめりこんでしまったのだそうだ。

それで、八年以上もの間、『勇者の剣』の振るい手が実はこの世にいなかったのだけれども……五年前、グスタフ兄さまがその剣技をもって、剣に持ち手として認められたので、『勇者の剣』は正式にお母様からグスタフ兄さまに譲られていた。

「ラーニャ様は先代勇者様であらせられるセレス様のご長女、たいへん貴いお方です。グスタフ様しかエウロペの侯爵家にラグヴェイ様直系の剣士がおられない現在……考えたくない事ですが、もしも……です、もしも、グスタフ様の身に何かがあった時には、セレス様の血をひかれる唯一の子供となっているラーニャ様が『勇者』となって、この地上を救わねばならないのです！　どうぞ、『勇者の剣』に認められるような、高潔な人物とおなりください！　正義を愛し悪を憎む、心清らかな人物に！」

『道徳』の教科書を左手に、リオネルがまっすぐに私を見つめてくる。

この離宮でのリオネルとの授業も、もう半年。

座学でも魔族関連の知識とか『勇者の歴史』とかならまだいいんだけど、倫理や道徳の授業は勘弁してほしい。ぜんぜん、おもしろく無いんだもの。

私なんて、勇者のスペアなんだし、そんな本格的に教えてくれなくてもいいのに……

しかし……

『お母様の血を引く唯一の子供』……ねえ。

面倒くさいことになっちゃったなあ、もう……

エウロペのおじい様もいろいろ心配して、このマジメ馬鹿を私の家庭教師として派遣してくださったんだろうけど……

もしもの時に、私が『勇者』やんなくたって別にいいのに……

ああ、だけど、世間的には内緒だしなあ……難しいところよねえ。

『もしも』の時がこないように、グスタフ兄さまがずっと健康で元気な『今世の勇者』でおられるように、毎日、神様にお願いしておこう。

それでもって、早く跡継ぎつくってくれないかしら。グスタフ兄さまが子作りで成果をあげてくれないと、私、いつまでも勇者のスペアなのよね。

『勇者の剣』は非処女が嫌いらしいから、結婚する事もできない。まあ、お嫁になんか行きたくないから、それはそれでも構わないんだけど……

でも、やっぱり、乙女としては……

「ラーニャ様はお母上様そっくりで、生まれながらにして高貴なる女人じゃ。きさまが心配せずとも、この世にお二人ほど高潔な存在はない」

あ……うるさいのが来た……

肩越しに顔だけ振り返ると、思った通り背後をとるように、覆面に黒装束の忍者がたたずんでいた。覆面から、にっこりと微笑む目を見せながら。忍者の体術で、扉を使わずに現われたのだ。

「ラーニャ様！　おひさしぶりにございます！」

抱きつこうとしてきたので、ふりむきざまに右のエルボーをいれてやった。

ぐっ！　と、うめいて、身を二つに折り、忍者が床に沈む。

「お久しぶりにございます、ジライ様」

リオネルが慌てて椅子から立ち上がり、私の背後にうずくまる忍者に頭を下げる。王宮でどれほど重要な役に就いていようが、忍者は賤業。上下関係などの礼節にも厳しいリオネルが、本来、頭を下げるべき相手ではないのだけれど……

勇者一族と関わりの深いリオネルは知っているのだ。十二代目勇者の従者として勇者と共に大魔王を倒したこの忍者……今は王宮付き忍者軍団の忍者頭なんかをしているこの男が、お母様にとってどういう相手で、私とどういう関係にあるのかを……

「ラーニャ様は冷たい……ペリシャとの国境でのいさかいを鎮め、ラーニャ様にお会いしたい一心で急いで戻って参りましたのに……」

床に蹲る忍者。もう、うっとーしいなあ。

「嘘ばっかり。お母様にお会いしたい一心でしょ」
「確かに、いつもはセレス様とラーニャ様のお二人にお会いしたい一心で仕事を片付けております。が、しかし！　今日は、ほんにラーニャ様のお顔をはよう見たくて必死に戻ってきたのにございますよ！」
拗ねたように言って、忍者が床から私を見上げる。
黒の瞳は、ただ、ひたすら、まっすぐに、私を熱っぽく見つめている。
あああ、もう！　べたべたべた、暑っ苦しいんだから！
「勉強の邪魔よ、どっか行っちゃって！」
私の言葉に、リオネルが青ざめる。よくわかんないけど、リオネルはジライが苦手らしい。『あの方は、残忍苛烈な白き狂い獅子と東国で鳴らした一流の忍です。不用意な発言は控えられるべきです』と、前、言ってたから、多分、来てすぐの頃にでも『不用意な発言』をしてジライにお仕置きされたのだろう。ジライがMなのはお母様と私に対してだけとは知らずに、尊大にふるまうかなんかしたんじゃないかなあ。
「ほほう、お勉強にございますか」
ジライがリオネルをチラリと見る。
ギン！　と、睨むように。
リオネルの手から、ポロッと定規が落ちた。
「……三十分、休憩としましょう、ラーニャ様。根をつめすぎては集中力に欠け、暗記できるものもできなくなりましょうから」
根性ないなあ、もう。
そっかぁ、リオネル、暴力に弱いのかぁ、て気づいた時には、鬼教師ぶりがひどくなったらぶん殴って黙らせてやろうかと思ったんだけど、その手は使えない。
お母様がにっこり笑って言ったのだ。
『ラーニャ、あなたが召使や民をいじめたら、お母様が愛を込めてお仕置きしてあげますからね』と。

でも、ジライなんてドSで、しょっちゅう部下をいじめて無理やり言う事聞かせてるじゃないって、反論したんだけど……

『いいのよ、ジライは忍者だから、人道に則った行動をとらなくても。人心掌握に必要なら、暴力をふるったって構わない職業よ。それに、肉体の限界を心得てるから、やり過ぎて部下を再起不能にするなんて馬鹿な真似はしないしね』

ずるい！　じゃ、お母様はどうなの？　人徳あふれるもと女勇者で売ってるくせに、しょっちゅうみんなに鞭ふるってるじゃないって、反論も……

『私のは愛を込めたプレイだからいいの。あなたのはわがまま娘の暴力だからダメ。その違いがわかるまで、他人に暴力を振るうのは一切、禁止ですからね』

て、わけのわからない精神論みたいので話を打ち切られてしまった。

私だって、愛と暴力の違いぐらいわかるのに～～～～

リオネルが部屋から出て行くと、ジライが覆面を外した。親しい人間の前では、ジライは素顔となる。白髪、白い肌。せんてんせいはくひしょー（先天性白皮症）って病気で、生まれつき、白髪で肌が白いのだ。

病気持ちのくせに、ジライの素顔は美形らしい。十人の侍女が十人ともそう言うから、そうなのだろう。でも、世間で言うところの『美』なんて私にはわかんないし、どーでもいい。満面の笑顔で迫られるのは、うっとーしいだけだ。

「で？　何で私に会いたかったの？」

予想はついていたが、あえて聞いてみた。絶対、あの事を言いにきたのだ、ジライは。

ジライは片膝をついてかしこまりながら、首にかけていた風呂敷を外し、それを両手に捧げるように持って私に差し出してきた。

「ラーニャ様にこれをお届けしたく……」

「なに、それ？」

「祝いの品にございます」
やっぱり……
ツーンとそっぽを向いてやった。
「いらない」
「そんな、ラーニャ様！」
ジライが泣きそうな顔になる。
「遠き地でアーメットよりラーニャ様のお話を伺い、このジライ、はようお祝いをしたい一心で、敵陣に切り込み敵の頭の首級をあげてまいりましたのに……バレぬようにしかも迅速にやる為に、私めは、まず左翼に陣取る敵諜報部隊の」
むぅ……苦労話をさせると、こいつ、長いのよね。具体的な暗殺方法まで語ってくるから。それは、それで、うっとーしい。
「わかった！　見るだけは見てあげる！　よこしなさい！」
「は！　かたじけのうございます、ラーニャ様！」
受け取った風呂敷はそれなりに重量があった。テーブルの上に置いて、風呂敷を広げて中身を見てみる。笹の皮の包みが入ってた。その中には、黒いお豆の混じった、ちょっと黒っぽいような薄いピンクのご飯がどっさり入っていた。黒ゴマがまぶしてある。
「なに、これ？」
「赤飯にございます」
ジライが嬉しそうに私を見上げる。
「十一日前に、おなごとなられた由、まっこと、おめでとうございます！　東国では娘が初潮を迎えた事を、この赤飯をもって家族で祝う習慣がございます。ラーニャ様が子供を生める大人の女性となられたかと思うと、このジライ、少々、寂しゅうございますが、心よりラーニャ様のご成人をお祝いしたく自ら赤飯を炊いてまいりました」
「……」
とりあえず、笹の皮を閉じて、紐を結び直して……
「しっかし！　これで、ラーニャ様も第二成長期に！　あああああ、

お胸がふくらみ、お尻が豊かとなり、おなごの大事なところに茂みが生まれ……そう遠くない未来に、ラーニャ様もナイスバディのプリンプリンの女王様に……」

よし！　風呂敷も結べた！

赤飯入りの風呂敷は、ジライの顔面めがけて投げつけてやった。

ほぉぉぉんと、嫌になるぐらいデリカシーが無いんだから！

ジライなんか、大嫌い！

『食べ物を粗末にしてはいけません』と、お母様からきつ～～～く言われているから、中身が汚れないようにちゃんと風呂敷に包んであげたわ、感謝しなさい。その変なご飯は、あんたが一人で食べるのよと言って、背中を向けてやった。

ジライ、鼻血出してたみたいだけど、私の知ったこっちゃないわ！

「あら、あら、やっぱり、ラーニャの所に直行してたのね。まったく、もう、親バカなんだから」

お母様だ。ニコニコ笑って扉の前に立っていらっしゃる。

「ジライ……一応、あなた、私の部下なのですから、王宮に戻ったら、まずは報告に来てくださいよ」

お父様だ！　今日はもうお仕事、終えられたのかしら？

あら？　ウシャス様やガジュルシン達まで……

勢ぞろいだわ。

ジライが二十日ぶりに王宮に戻ったんで、これから家族団らんの時間になだれ込みそう。

まあ、それぐらいの役には立ってくれなきゃね、変態忍者も。

私はラーニャ。
勇者のスペアとして日々学問にいそしむ、ラジャラ王朝第一王女。
インディラ国王ともと女勇者との間に生まれた、たいへん高貴な王女……と、いう事になってるけれど、私の本当の父親はデリカシーのかけらもない変態忍者だ。
それは、後宮の公然の秘密だった。

ケルベゾールドってMだと思う！　十二歳の秋！（後書き）

母親はもと女勇者セレス、本当の父親は忍者ジライ、戸籍上の父親はもと僧侶のあの方……

何でこうなってしまったのかは、次回『ずいぶん前の話！　まだ赤ちゃんなの！』で。

ずいぶん前の話！　まだ赤ちゃんなの！

十三代目勇者の従者――武闘僧ナーダはインディラ国ラジャラ王朝第十二代国王に即位した。

大僧正候補であったナーダが還俗し即位せざるをえなくなったのには、むろん、理由があった。

きっかけは、父王の第二夫人一族の国庫流用事実が発覚した事であった。国家の財産を盗み私腹を肥やしていた一族は、国王からその事実を追求されると、あろうことか逆に居直り、第二夫人の長子、第二王子ドゥリヨーダナをたてて謀反を起こしたのだった。

その戦いに敗れ負傷した父王を、インディラ寺院が庇護した。国王は、第一王子であったナーダを出家させた過ちを心から詫びて、後事をナーダに託して息をひきとったのだった。

父王の仇を討つ為、ナーダは還俗を決意した。

その国を取り戻す戦いに協力したのが、後にナーダの正妃となったエウロペの侯爵令嬢、もと女勇者セレスであった。ナーダは、父王の遺した正規兵、インディラ寺院の武闘僧兵、セレスの手勢を率いて、勇猛に戦い、数に勝る賊徒を打ち破り、奸婦一族を葬ったのだった。

国中がナーダの即位を喜んだ。信仰心に篤いインディラにおいて、大僧正は最も神に近い尊い存在。大僧正候補であったナーダに、人々は正道を期待した。

即位と同時に、ナーダはセレスを正妃（第一夫人）に娶った。セレスが改宗を拒んだ為、彼女を第一夫人とする事に異を唱えた家臣も居たが、セレス自身が『異教徒の私が産む子供には、王位継承権を与えません』と、確約した為、大きな騒動とはならなかった。

名門貴族達はこぞって、第二、第三夫人候補を差し出した。けれ

ども、僧侶であったナーダは女性にたいへん淡白だった。セレス以外の女性は眼中にないとさえ言っていた。

即位後、三ヶ月経ってからようやく、ナーダは妃候補の中からウシャスを選び、第二夫人に娶った。が、同時に、以後三年、妃を増やす気はないとも宣言してしまった。

王国の世継ぎを得る為にウシャスを娶るが、心を捧げている女性はセレス一人だけであり、これ以上妃を増やすのは一夫一婦制のエウロペ教徒の彼女への裏切りにあたる。三年経っても、ウシャスが子をもうけられなかった場合には王国の為に第三夫人を娶る。が、ウシャスが世継ぎをもうけた場合は妃はもう一人も増やさない、と。

後宮に妃が二人しか居ないなど、前代未聞の国王ではあったが……治水に力を入れ、税制を見直して国民の負担を軽くし、監察官制度をもうけて貴族の横行を取り締まり、教育・医療の充実をはかり、現状に合わなくなってきた古い律法の見直しまで始めるという、たいへん精力的に善政をほどこすナーダは、国民から絶大な支持を得た。

民は好んで、国王と第一夫人の恋愛を語り合った。

大魔王退治の旅の中、処女であらねばならない女勇者と女性（にょしょう）を絶たねばならない武闘僧の間に恋が芽生える。互いを思いながらも、決して結ばれる事のない二人の、せつなくも美しい恋……やがて、時は流れ、再会した二人は、今までの立場を捨て、愛の為に百万の軍勢に立ち向かってゆくのであった……

国王と第一夫人の話は、詩歌となり、戯曲となり、絵画となって、インディラ国中を埋め尽くした。

その中に、時折、おまけ程度に、共に大魔王を退治した人物が添えられる事があった。

東国忍者ジライ。

今はインディラ国のお庭番の忍者頭として、陰ながら王家を支えている男だ。

ジライは偉大なる国王と美しい女勇者に忠義を尽くす、義理堅い

男として描かれた。又、表舞台にまったく姿を見せないので、『白き狂い獅子』の二つ名から白装束の忍者として描かれる事が多かった。

インディラ国王ナーダは回廊を走り、後宮へと向かっていた。羽飾りつきの絹のターバンを巻き、立派な口髭をたくわえ、逞しい大柄な体を金刺繍をほどこした白のチュニックで覆う姿は、まさに国王。武闘僧であった頃の面影はもう無い。

後宮の手前で護衛役であった二人の近衛兵を残し、もどかしげに豪奢な愛の宮殿へと入ってゆく。女官達への挨拶もそこそこに、贅を尽くした室内噴水の広間を抜け、階を上がり、最奥の第一夫人の部屋を目指す。

「ジライが戻ったそうですね」

その言葉と同時に、第一夫人の室の扉を開くと……

そこには……

覆面を外し、まだ赤子の第一王女を抱いて、べろべろばあとあやしている忍者ジライが居た。

以前は『素顔を見られるのは死に勝る恥辱』と言って常に覆面をつけていた彼も、今ではすっかり人間が丸くなり、親しい者の前では素顔を晒すようになっていた。

そんなジライを、サリーをまとったセレスがニコニコと見つめていた。

他にも、ラーニャの乳母や侍女が数人部屋に居た。が、この部屋に居る召使は、全員、ジライの部下のくノ一、秘密を決して口外しない忍者なのだ。ジライは空気か何かのように彼女らを無視し、『白き狂い獅子』の異名を辱める顔で、楽しそうにセレスの娘をあやしている。

「ほんに、ラーニャ様はかわいらしい」

黒い髪、茶の瞳、セレスによく似た肌のラーニャの赤くふっくら

とした頬に、ジライは口づけをした。
「ラーニャ様がセレス様の血を引いておられると思えば思うほど、愛しさは募ります。昔は己の赤子など生まれたら縊り殺したくなると思っておりましたが……ラーニャ様には、全く、そんな気が起きませぬなあ」
「まあ、駄目よ、ジライ、赤ちゃんを殺すなんて。そんな暗黒系の考え、もう持ってはいけないわ。あなたは正義の忍者になったんですからね」
「はい、セレス様ぁ♪」
ジライはめいっぱい相好を崩していた。
……つまり、そう、なのだ。
インディラ国第一夫人セレスが産んだ、公式上はナーダの第一王女となっているラーニャの実の父親は……
この忍者ジライなのである。

表面はSのくせに、根は女王様趣味のM。その上、大魔王教徒であったジライには道徳観念がない。
そのジライに性の手ほどきを受けたセレスも、又、かなりアブノーマルな性の道徳観念を持っていた。
『私が産む子供には王位継承権が無いんだから、誰の子を産んでもいいわよね』
と、セレスは恐ろしい事を平気で言って、忍者ジライの娘を産んだのである。

そもそも……
ナーダが還俗して国王に即位せざるをえなくなったのは、全てこのジライと、今は亡き老忍者ガルバが謀ったせいなのだ……
後になってから、ガルバの子飼いの部下のムジャが教えてくれた

のだが……

当時、ジライはセレスの身の振りに思い悩んでいたそうだ。

『勇者の剣』が持てなくなった以上、セレスが非処女となった事実は隠しきれない。とはいえ、下賤な忍者を恋人に選んだなどと世間に知られては、侯爵令嬢のセレスの評判にかかわる。彼女の高貴さを損なわぬ結婚相手が必要だった。それも、女王様である彼女の信奉者で、セレスを敬う下僕でなければふさわしくないとも考えていたようだ。

そして、その頃、老忍者ガルバは、臓腑の病にかかっていた。タチの悪い腫瘍ができ、治癒魔法でそれを取り除いてもすぐに再生してしまう為、治療はたいへん難しいと診断された。しかも、治療を行えば脊髄損傷の危険もあるという病状……

老忍者は病の事は主人（ナーダ）には伝えず、一切、治療もしなかったそうだ。

日々、体が衰えてゆく中、老忍者は最後の奉公を望んだ。

僧侶ナラカ、僧侶ナラカの妹サティー、そしてサティーの息子ナーダに仕えた老忍者は、ずっと己の至らなさを恥じていた。僧侶ナラカには供として認められず置いてゆかれ、暗殺の危機にさらされたサティが病に伏し亡くなるのを救えず、王国の世継ぎであったナーダが出家させられるのを止められなかったからだ。

二十数年にわたり、ガルバは、ナーダの母の仇を討つべく計画を進めていた。奸婦一族を葬り、ナーダをインディラ国王に即位させる……。奸婦一族を社会的に『悪』として知らしめられるだけの証拠はつかんでいた。

けれども、老人には自由に動く体がなかった。又、部下の忍者達だけに計画を任せるのもよしとしなかったようだ。

気弱になっていたガルバをみかね、ムジャがジライに連絡をとって助っ人を頼み、二人を再会させたのだそうだ。

セレスの結婚相手が欲しかったジライと、何が何でもナーダを王位につけたかったガルバ。

二人は、互いの主人の為に、結託した。

父王の第二夫人一族の悪行を白日の下に晒したのも、彼等を操り謀反を起こさせたのも、彼等の陣の井戸に下剤を撒き敵の精鋭達をふぬけにしたのも……

ジライとガルバ、それにムジャ達ナーダの忍者軍団の忍達の仕業だったのだ。

事情を知らなかったナーダは父王の死を目の当たりにして還俗を決め、突如現われて味方となったセレスとジライに驚きならも、正義の志をもって父王の仇をとったのだが……どうも、彼等の手に踊らされたらしい。

もっとも、父王の死は計画外のハプニングだったようで、老忍者は死の床で何度もムジャに『この罪はわし一人が負ってゆく。御身様に、心よりお詫びしてくれ』と、言っていたそうだ。

ナーダの即位後、わずか二週間で、老人は帰らぬ人となったそうだ。

ナーダがその死を知ったのは更に二ヶ月後のことだった。

即位して日も浅い主人を自分の死などで煩わせてはいけないと、老人は考えたのだ。遠方の仕事をしているという事にして主人（ナーダ）には死を伏せてくれと、老人は遺言した。

ガルバの最期に立ち会ったのは、ガルバ子飼いの部下ムジャと、ジライだけだった。ガルバは次期忍者頭にジライを指名し、息を引き取ったとの事だった。

老人の死をムジャから知らされ、ナーダは激しく怒った。老人の身勝手さに腹を立てたのだ。

『私の影を自称しながら、何一つ、私の願いをかなえないなんて！

自分勝手に好きなことやって、私が望んでもいなかったものを押しつけて、黙っていなくなってしまうなんて！　最低です！　不忠者です！　最悪の忍者です！』

涙を隠す主人(あるじ)に、ムジャは『長年、頭領に付き従った者としてナーダ様にお礼を申し述べます』と、かしこまって言った。
『ナーダ様のご即位を見届け、頭領は人としてたいへん穏やかな最期を迎えられました。ありがとうございます』と。

忍者としてのジライの力量はやはり非凡で、ジライはインディラ王家のお庭番の忍者軍団も自らの部下に吸収し、ガルバの部下も含め、強力な忍者軍団を作り上げた。人心を掌握する術を心得ていたのだ。
ジライは国内外に部下を放ち積極的に情報収集を行っていた。有益な情報をナーダに報告し、ラジャラ王朝に不利益をもたらす者への妨害活動をし（時には暗殺もしているようなのだが、責めようにも証拠がない……）をし、部下の訓練もしている彼は、超多忙で滅多にセレスの元を訪れなかった。が、それだけに時間を作れた時には、愛しい女性(ヒト)と最愛の娘に惜しげもなく愛をふりまくのだ。
ラーニャを見るジライの瞳はやさしい。ラーニャを愛する最たる理由は彼女がセレスの娘だからだが、彼女が黒髪で産まれた事もジライを喜ばせているようだった。黒髪は東国人の血の証。白髪の己を卑下しているジライは、娘の美しい黒髪をよく愛しそうに撫でている。
「あら、ナーダ、いらっしゃい」
と、扉の前のナーダを見て、にっこりとセレスが微笑み、
「おや、これは国王陛下、ご無沙汰しております」
と、ジライがニヤリと笑う。
ナーダは身構えた。公式の場以外でジライがナーダを『国王陛下』と呼ぶのは、たいてい悪だくみがある時……或いはナーダを揶揄する時なのだ。
「一ヶ月ぶりでしたっけ」

少し警戒しながら、ナーダは二人の元に歩み寄った。
「正確には二十五日ぶりね」
と、セレス。ジライと顔を見合わせ、それから無邪気な笑みを浮かべる。
「ちょうど今日あたりから、受胎可能日ですもの。それに合わせて帰って来たのよ、ね？」
セレスが『ね？』と言って首を傾げると、ジライもそれに合わせ『ね？』に同意するように首を傾げる。
「そろそろおでましの頃にござるな」
「え？」
顔をスーッと青ざめたナーダの背後で……
「ジライが戻ったそうですね！」
勢い良く扉が開き、部屋に女性が入って来る。
「あああああああ……」
頭を抱えるナーダ。
その横で……
ナーダやセレスに優美な所作で挨拶をした後、女性は忍者のもとに駆け寄り、うっとりと見つめたのだ。
「おまえの帰りを、今日か明日かと、私（わたくし）は待ちわびておりましたよ、ジライ」
「これは第二妃様」
「いやぁん、ジライ、ここではウシャスと呼び捨てにしてぇ」
鼻にかかった甘えるような声だ。
ナーダは大きな体を小さくして、ひたすら蹲っていた。気持ち悪くて全身に鳥肌が立っている。顔をあげて今のウシャスを見ようものなら、確実に吐き気を催す。
ウシャスは礼儀正しく信仰心に篤い女性だ。弦楽器を奏でるのが得意で、性格は控え目。体つきはほっそりとしており小柄。色気むんむんの女性よりは遥かにナーダの許容範囲内にあった。アーモンドのような目も印象的で、長い黒髪も美しく、顔立ちも愛らしい。

普段の彼女であれば、共に居てもさほど苦痛ではなかった。
しかし……ジライの前の彼女は最悪だった。
「実は私……国王陛下やおまえに見たもらいたくて」
と、ウシャスは恥らいながらサリーを取り、衣服を脱ぎ捨て、その裸身を一同の前に晒した。
「……自分で縄を打ってみましたの」
「あら、素敵」
ポンと手を叩いてから、セレスがうずくまっているナーダの肩をゆさゆさと揺さぶる。
「ほら、ほら、国王陛下、見てあげなさいよ。ウシャスったら、あなたに見てもらいたくって自分で自分を縛ってきたんですって」
「……嫌です、絶対、見たくありません」
「もう、ナーダったら、わかってないわねえ。あなたが軽蔑のまなざしを向けてあげればあげるほど、ウシャスはう～んと悦ぶのよ、子種も宿りやすくなるわ」
「やっぱり……やるんですか、これから？」
嫌そうに尋ねるナーダに、あっ軽くセレスが答える。
「当たり前でしょ、世継ぎをつくるのが国王の義務。その為に、私もジライも協力してるんだから、いい加減、ウシャスを孕ませてちょうだいな」

騙されたのだ……
ナーダは王位など、絶対に継ぎたくなかったのだ。薄汚い政治の世界も疎ましかったし、何よりも妃を娶りたくなかった。ナーダの女性嫌いは並ではない。女性のそばに寄るだけで鳥肌が立つのだ。妃を娶り性行為をしようものなら気持ち悪すぎて卒倒するに決まっている。
父王の仇を討つ為に還俗はしたが、王位は継がない！　ナーダは強くそう主張したのだが、彼の周囲の人間はナーダ本人の意志など

無視して即位の準備を進めてくれた。貴族達にセレスにジライ、その上インディラ寺院の大僧正もウッダルプル支部のジャガナート僧正までもが『めでたい、めでたい』とナーダ国王即位に動いてくれたのだ。

『今更ひっこみつかないわよ、あなたの王位奪還は美談として世に広まっちゃったんだから、王位を継がなかったら暴動が起きるんじゃなくって？　それにね、ナーダ、妃のこともどうにかなるわ。私と偽装結婚をして、私を形だけの妻にすればいいんだし。世継ぎの王子は、いずれ一族の中から出来の良い子を養子にすればいいんじゃないかしら？』

その言葉を信じて王位を継いだのに……

一ヶ月も経たないうちに、セレスはジライと二人して、和気あいあいと妃候補を選び始めたのだ。

『養子をもらうのは、ど～～～～しても子供が出来なかった時の最後の手段よ。まだ若いんだし子作りの努力をしてみましょう』

あまり色気過剰ではなく、セレスの好みにも合う、Ｍの素質のある女性……二人は数人の貴族の娘を候補に選び、この中から妃を選ぶようにとナーダに迫ってきた。選ぶのは一人でも二人でも構わないし、何だったら全員、妃にしてしまえと言って。

絶対、嫌だ！

聞き届けない！

妃など、死んだって娶るものか！

勝手に妃を選んだら、再出家してやる！

妃を選べとＳの二人は幾日も精神的＋肉体的に責めてきたが、ナーダは頑として拒絶した。

そこで、二人はナーダへの説得方法を変え、ムジャに老忍者ガルバの死と遺言を語らせたのだ。

赤ん坊の頃からずっと側に仕えてくれてきた老人の死を、ナーダは悼んだ。

ナーダを守る為に家族すら犠牲にした老人……部下という立場を

越え、過剰な愛情をもって仕えてくれた老人は……祖父にも等しい存在だった。父王の死よりも、ガルバの死の方が、ナーダの心に重く響いた。

忠義者のガルバが、ナーダの即位を喜び、『世継ぎの王子を一目、見たかった』と言い残して亡くなったとあっては……

故人の為に、やれるだけの事はやるべきだろう。それが、供養というものだ……ナーダは仕方なく、妃を娶る事とした。

でも、一人だけ！　第二夫人しか持たない！　と、言うナーダに、セレスはがっかりした。あなたの妃で、M奴隷ハーレムをつくりたかったのになあ、と。

性格も見た目も比較的マシなウシャスを選んだナーダに、ジライは不敵な笑みを見せてこう言ったのだ。

『おまえに世継ぎを与えてやると、我はご老体と約束をした。我が房中術をもってすれば、おなごが駄目なおまえでも、必ずや女性と最後まで成し遂げられる』

で……

セレス女王様と、ナーダ、ウシャス、ジライの、SM4P関係となったのであった。

まずはセレスとジライが、ウシャスをMに目覚めさせた。虐げられ辱められる事を好む女奴隷に調教し……それからナーダとの初夜を迎えさせたのだ。

ナーダの前で、ジライに愛撫され、ウシャスはあられもなく喘ぎまくった。緊縛された体をくねらせ、大股を開いて。

当然の事ながら、ナーダは嫌悪に顔をしかめ、醜く見えるものから目をそむけようとした。

すると、ウシャスはより激しく悩ましげに喘ぎだした。嫌らしい姿を人に見られ軽蔑されるのが、彼女にとって最大の性的興奮に繋がるのだ。

そこで、ウシャスへの責めはセレスにバトンタッチ。
ウシャスを辱めるセレスの横で、ジライはナーダにしなだれかかり、口を吸い、もてる技術の全てを駆使してナーダを愛撫し始めた。
妖しい笑みを浮かべるジライの魅力に抗えるわけもなく……ナーダのものは元気よく隆起し、そこへウシャスの処女の泉が押し当てられ……
めでたく、正式な夫婦となったわけである……
時には、ジライ、ナーダ、ウシャスのみのプレイもあった。が、基本はセレス女王様と三人の奴隷の４Ｐだった。いずれにしろジライが居なければナーダのものが勃たないので、ジライが王宮にいる時だけプレイは行われた。
ただ、乱交はしていない。ジライはウシャスの肉体を愛撫こそすれ、絶対、生殖行為はしなかった。あくまでも、ウシャスの相手はナーダであり、セレスの相手はジライなのだ。
ウシャスは四人の中で自分が最下層の奴隷である事を教え込まれているので、常日頃から、セレスをたて、ナーダにも敬意を払っている。自分に快楽を与えてくれる三人をご主人様と慕っているのだ。世継ぎの王子を産んでも、決して彼女は増長しないだろう。
趣味と実益を兼ねて二人がウシャスをＭに調教したのは仕方がないのだ……そうは思っても、やはり房中のウシャスはナーダにとって耐え難いほど醜く見えた。彼女との性交は、苦痛以外の何ものでもない
ナーダの嫌そうな顔を見て、セレスが悪戯っぽく笑う。
「もう結婚して一年以上経つのよね。毎回、充実しためちゃくちゃ濃いプレイをしてるのに、どうして赤ちゃんができないのかしら？」
「……さあ、知りません」
「ナーダとウシャス、相性が悪いのかしら？　だったら、かわいそうだけどウシャスは捨てちゃって、新しく第三、第四夫人でも娶ってもらおうかなあ……」
「え――っ！」

ナーダとウシャスが同時に大声をあげる。
「ああ、セレス様、どうか、お慈悲を。私、どんな恥辱プレイにも耐えてみせますから、どうか捨てないでくださいましな」と、ウシャス。
「私は絶対嫌ですからね、セレス！　三年はウシャスだけと頑張る予定だったでしょ！　これ以上、妻を増やすだなんて！　妻が増えたら、それだけ性交回数が増えるんでしょ？　そんな事、想像するだけで……うっぷ、本気で吐きそうです……私」と、ナーダ。
「私としては、かわいいM奴隷がいっぱい増える方が嬉しいんだけど……」
天使とも悪魔ともつかぬ正邪の区別もない子供のような笑みを浮かべ、セレスはナーダの肩をポンと叩いた。
「あなたがウシャス相手にしっかり励んでくれるのなら、もうしばらくは様子をみてあげてもいいわ」
ナーダは糸目で、形だけの妻を睨んだ。
「……私が女性が苦手なの、よくご存じのくせに……とことん、意地悪ですね」
「それはそうよ。だって、私、女王様だもの」
セレスは満面に笑みを浮かべた。
「じゃ、私、女王様スタイルに着替えてくるわ。準備しといてね、ジライ」
「承知」
セレスは侍女を引き連れて隣室に消え、ジライはずっと抱いていた愛娘を乳母に託して下がらせた。
ナーダの目の端に、ウシャスの裸体が映る。少女のように未成熟な体が亀甲縛りに縛られている。あれを自分で縛ったのかと思うと……めまいがした。
「そう嫌そうな顔ばかりをするな」
ジライだった。何時の間にか、ナーダは背後をとられていた。
「おまえが見事、第二夫人を懐妊させたら、ご褒美に我が身を一晩、

与えてやる」
「え？」
「煮るなり焼くなり好きにしていいぞ」
「……本当に？」
ジライがそっと囁いた。
「我が欲しかったら、しっかり励むのだぞ」

セレスと結ばれ一児をもうけ父となっても、ジライの妖しい美しさに変わりはなかった。未だにナーダは、ジライの恋の虜だった。
国王となったのは不幸ではあったが、セレスの為とはいえ、ジライが仕えてくれて、ウシャスとの性交の際には必ず愛撫してくれ、時にはジライを犯る機会すら与えられるのだから……
今のこの状況は、もしかすると……幸せなのかもしれない。

インディラ王家の風紀は、この上ないほど乱れきっていた。
しかし、当人達は、とことん幸せに平和に暮らしているのだから……それはそれでいいのかもしれない。

ずいぶん前の話！　まだ赤ちゃんなの！（後書き）

次は、ラーニャにしてみれば、『私の知ったこっちゃないわ！』の話です。

十八歳以上の方で男性の同性愛話でもＯＫの方は、『ムーンライトノベルズ』の『女勇者セレス――夢シリーズ』の『夢の乱舞』をご覧ください。ナーダとジライに女王様セレスが絡みます。

十八歳未満の方と男性の同性愛話はパスの方は、このまま『小説家になろう』で。『ぼーちゅーじゅつを教えなさい！　恋する九才！』いきます。

ぼーちゅーじゅつを教えなさい！　恋する九才！

「ジライ、『ぼーちゅーじゅつ』を教えなさい」

腰に両手をそえ、えらそうに胸をはっているのは、腰までの黒髪も美しい愛らしい美少女だ。インディラ国ラジャラ王朝第一王女――ラーニャ御年九才。公式的には十二代目国王ナーダと第一夫人セレスとの間の娘という事になっているが……彼女の実の父は、今、目の前で跪いている忍者ジライであった。

ラーニャも実の父が誰かは知っていた。が、王族と忍者では身分が違う。普段から彼女は父親に命令口調で口をきくし、ジライの方も臣下の態度を崩そうとしない。

「房中術にございますか、ラーニャ様？」

ジライは実の娘に対し片膝をついて跪いていた。今は後宮のラーニャの部屋に居るので、覆面を外し、微笑を浮かべる白い素顔を見せていた。最愛の女性（ヒト）セレスと愛娘ラーニャの前では、彼はいつもにこやかなのだ。

「して、その技、覚えられたら、どなたに使われるおつもりなのです？」

「誰でもいいでしょ。おまえには関係ないわ」

ラーニャはツーンとそっぽを向いた。

「しかし、相手が誰かによって教える技の種類が変わりまするが？」

「え、そうなの？」

ラーニャは口元に指をあて、思案するようにうつむいた。房中術は学びたいけれども、余計な事は話したくない。ジレンマだ。

「その相手、男にござりまするか？　それとも女？」

「男よ」

「年上？　年下？」

「……言いたくないわ」
「ですが、それでは」
「良いから教えなさい！」
ラーニャは箪笥まで走ってゆき、引き出しより母の部屋から内緒で借りてきたモノを取り出した。
「この私の命令よ、教えなさい、ジライ！」
そう言って手にした物を滅茶苦茶に振り回した。
「あっ、痛っ、いたたたた」
と、一応、顔はガードしながら、ジライはニコニコ笑っていた。全然、痛そうではない。ラーニャは息を切らし、癇癪を起こして手のモノを床に投げ捨てた。
「なんで、悦ばないのよ、ジライ！」
「はははは」
「お母様が振るえば、メロメロになっちゃって、何でも言う事を聞くくせに！」
「私めはロリコンではございませぬから。女王様には、やはり、それ相応のお色気が必要。ラーニャ様がこれを振るわれるには十年、いえ、六～七年ぐらい早うございます」
床の上に落ちているバラ鞭を拾い上げ、ジライは恭しく拝礼してから、ラーニャへと差し出す。
「セレス様のお部屋に戻してらっしゃいませ」
「うぅ～」
ラーニャは顔を真っ赤にして忍者を睨んでいた。
「……どうあっても教えない気？」
「さあ？　ラーニャ様がもう少し詳しくご事情を話してくださるのなら、場合によってはお教えしてもよろしゅうございますが」
「意地悪！」
「して、誰に房中術を使われるおつもりなのです？」
笑顔を浮かべる忍者に対し、ラーニャは鋭く叫んだ。
「教えなさい！　今、教えなきゃ、ナイス・ボディのプリンプリン

の女王様になった時、鞭で叩いてあげないわよ！」
「あああああああ」
ジライはよろめいてうつむき、額に手をあてた。
「……それは、ちょっと効果的な脅しにござるなあ」
「ねえ、ジライ、十年したら女王様ごっこしてあげるから、ね、教えてよ」
「……」
「鞭以外の事もしてあげる。ローソクでもつるしでも、おまえの好きなことやったげるから。ね？　ね？　ね？」
ジライは苦笑を浮かべた。
「……いた仕方ございませぬなあ」

「それで、教えちゃったの、房中術？」
自室で、伴侶であり最愛の奴隷であるジライからの報告を聞いて、セレスは美しいサファイアの瞳を見開いた。
「はい。ですが、ベッド・テクニックなぞは教えておりませぬ。子供が知っていても差し障りのない、ナンパ・テクニックの一部のみをお教えいたしました」
セレスは、まったくもうしょうがないわねえと愛しい忍者を叱った後、小首を傾げた。
「それにしても……ラーニャったら、一体、誰に房中術を使う気なのかしら？」
「ガジュルシン様ではございませぬか？」
「ガジュルシンねえ。確かに、最近、あの娘、ウシャスの所に入り浸っているけど……」
ナーダの第二夫人ウシャスの長男ガジュルシン。ラーニャにとっては、表向きは二つ年下の義弟にあたる。しかし、ラーニャの実の父はジライなので、本当はまったく血のつながりはない。
ガジュルシンはおとなしく、やさしく、聡明な少年だ。外遊びが

好きなラーニャとは、あまり気が合っているようには見えなかったが……

「ガジュルシン以外に年相応の男の子は側にいないものねえ……後宮育ちだものね……。後、考えられるのはグスタフかしら？　エウロペに遊びに行った時、あの子、金魚のフンみたいにグスタフについて歩いてたもの」

「あれは、グスタフ様を慕うというよりは、現勇者様のお背の『勇者の剣』に興味津々といった感じでしたが……」

「そういえばそうだったわねえ」

二年前、セレスが実家に里帰りした時、子供達は現勇者グスタフに懐きまくっていた。剣や乗馬の稽古をつけてもらい、せがんで一緒に庭で遊んでもらったりしていた。インディラに戻ってから、ずっと、ラーニャはグスタフと文通をしてはいたが……単なる憧れに過ぎない気もする。

グスタフでないとすると、残りは……

「ね、ジライ……アーメットなんて事はないわよね？」

「まさか」

ありえないと忍者は片眉をしかめてみせた。

「あれほど仲の悪い姉弟も、そうそうありませぬぞ」

「そうよねえ」

と、セレスは顔をひきつらせたところで、ノックも無しに扉が勢い良く開いた。

「ジライ父さん！　よくも騙しやがったな！」

と、そこまで怒鳴ったところで、侵入者は口をきけなくなった。

瞬時に背後に回ったジライに拘束され、首を締められたのである。

「このたわけ！　セレス様のお部屋にノックも無しに入るでない！」

そこでジライは腕に入れる力を少し緩めた。腕の中の子供は苦しそうに舌を出し、それからキッ！　と、背後を睨みつける。

「父さん、よくもオレを騙した、うぐっ！」

「『ごめんなさい、お母様』は？」

再び首を締められて、子供はジライの腕の中でジタバタする。が、幾ら暴れても忍の手は振り解けない。

しばらくしてジライが腕を緩めると、子供は悔しそうに顔を歪め、セレスに向かって頭を下げた。

「……ごめんなさい、お母様」

「次は気をつけてね」

と、セレスがニッコリと笑みを浮かべた。

「はぁい」

セレスからお許しの言葉が出たので、忍者はようやく子供を解放してやった。

淡い金髪、青の瞳、小麦色に日焼けした健康的な肌の子供だ。まだ七才なのだが、体格が良いので十才ぐらいに見える。薄手の胴衣に、インディラ風のズボン。いずれも王族の少年らしい上品な作りだ。

「で、我が何を騙したというのだ、アーメット？」

少年はジライを……実の父親を睨みつけた。

「アーメットって呼ぶなよ！　今、オレは忍者装束じゃないんだから、アーメット様って呼べ！」

フンとふんぞりかえる子供に、ジライは満面の笑みで応えた。

「おお、そうですなあ。確かに、今は、第二王子アーメット様のお姿にございますなあ」

にこやかに微笑みながら、ジライは王子の頭を撫でる振りをして、ぐりぐりと力をこめてこね回した。

「いてぇ！　いて！　ててて」

「しかし、王族にしては、いささか言葉使いがお悪いのではございませぬか、アーメット様？」

「やめろ！　頭頂には神が宿っておられるんだぞ！　汚い手で触るな！　インディラ教の教えぐらい覚えろ！」

「ははははは。あいにく私めは無神論者にござりますれば」

「ちきしょう！　どーして、ジライ父さんは、オレばっか苛めるん

だよ！」

「それは心外な！　苛めてなぞおりませぬぞ。愛を込めてご指導いたしておるまでの事」

ジライから無理やり離れ、アーメットはビシッ！　と、父を指さした。

「嘘だ！　姉様には忍者修行させないくせに、オレだけビシバシむちゃくちゃにしごくじゃん！」

「ラーニャ様はおなごにございますゆえ、いずれ、どこぞに嫁がれればよろしい。しかし、アーメット様は男。王位継承権などというやっかいなものと縁がございます。繰り返し申し上げておることながら、アーメット様の父親はこの私、卑しき忍者にございます。つまり、アーメット様のお体には、偉大なるラジャラ王朝の血は一滴も流れておりません。そんな者が、もし間違って王位に継ごうものなら、先祖の霊はお怒りになられる事でしょう」

「それはわかってる！　その話はもう耳タコだ！」

「ですから、アーメット様の未来は二つ……。世俗を捨て髪を剃ってインディラ寺院に入られるか、十才の年で病死の工作をして以後お庭番として新たな人生を選ばれるかの二択。ですが、ハゲはお嫌いでしたな？　ならば、やはり、忍となり、このジライの跡を継いで」

「それだ！　それが嘘なんだ！　もう騙されないぞ！」

「何ですと？」

アーメットはへへんと得意そうに胸をそらせた。

「ナーダ父さんから教えてもらったんだ。臣下の貴族になって生きる道もあるって！　ナーダ父さん、必要なら、すぐ一家系作ってくれるってさ！」

「……」

ジライはチッ！　と、舌打ちをした。ナーダめ、アーメットに余計な知恵をつけおって、と、低く呟きながら。

「でもね、アーメット」

それまで親子のスキンシップに口を挟まなかったセレスが、微笑みながら諭す。

「王族の男子が絶えた場合、臣下となった貴族の家系から王が選ばれる事もあるのよ。ついでに言うと、出家したインディラ僧侶が還俗して王位を継いだ例もあるわ。ナーダがそうだもの」

にこにこにこ。セレスは女神のように微笑んでいる。

「だからね、アーメット。私やジライは、後腐れがないよう、十才になったらあなたには死んでもらいたいの」

「お母様……」

「だいじょうぶ、本当には殺さないから。病死って事にしてお葬式をあげるだけ。王子アーメットは死ぬけれど、新たに忍者アーメットが生まれるのよ♪」

「それが嫌だって言ってるのに～～～」

うわ～んと泣き出して、少年は部屋から飛び出した。

「ひとでなし！　おまえら、それでも実の親かよ！」

との捨て台詞を残して。

それを見送った二人は……

「いつ見ても、気持ちいいぐらい元気な子ね」

「はい。あれならば立派な忍になりまする」

と、子の心親知らずで……というか、子の心を黙殺で、のほほんとしているのであった。

ラーニャの意中の相手が気になるので、その日の午後、セレスは第二夫人ウシャスの部屋を訪れた。

ウシャスは、しっとりとした黒髪もつややかな、細面の美女だ。慎み深く控えめな性格の彼女は、第一夫人のセレスをいつも敬っていた。なにしろ、セレスは彼女にM奴隷の悦びを教えてくださった女主人（女王様）なのだ。ウシャスは、自分に快楽を与えてくれる、セレス、ナーダ、ジライを心より慕っていた。

ウシャスの産んだガジュルシンは、アーメットよりも一ヶ月年上なので、第一王子の位を持っている。外見はナーダよりもウシャスに似ており、小柄で、少女のようなやさしい顔だちだ。武芸よりも学問が好きで、教師達が舌を巻くほどの利発さがあった。体があまり丈夫ではない事と、おとなしすぎる性格こそ心配だったが、王国の跡継ぎとして家臣からは絶大な期待が寄せられていた。

ガジュルシンの弟、第三王子ガジャクティンは五才。ナーダそっくりの糸目の腕白坊主だ。実の兄よりもアーメットに懐いており、彼の弟分となってひがな一日元気に暴れ回っている。

今、ウシャスは三人目の子供を身ごもっていた。間もなく臨月なので、ＳＭプレイはずっとお休みだったが、セレスがジライを伴って現われるとやはり心ときめくのか、頬を染め、うっとりと二人を見つめるのだった。

「お二人でお渡りとは、お珍しゅうございますね」

「ええ、ちょっと、子供達が見たくて」

セレスはきょろきょろと室内を見渡した。

午後のこの時間は、ウシャス親子の憩いの時間だ。『三度の食事の時間と食後しばらくは、用事がない限り、子供と同じ部屋で過ごすように』とのナーダの言葉をウシャスが忠実に守っているからだ。

理解は会話から始まる。王位継承を巡る醜い争いを経験しているナーダは、子供達の精神がすこやかに成長する事を願って、国王として超多忙であろうにかなりの時間を割いて後宮で家族と過ごしていた。その時には、ラーニャもアーメットも自子として扱い、分け隔てなく可愛がっている。

遊び仲間の義兄弟もいるし、国王自らがおもしろい話を語ってくれたり武術をつけてくれたり遊んだりしてくれるので、ラーニャもアーメットも日中はよくウシャスの部屋に居る。

部屋にナーダの巨体はなかった。今日は表で政務なのだろう。

辞書のように大きく厚い本を閉じて立ち上がり、セレスに会釈をするガジュルシン。兄に促され、床の上から立ち上がり頭を下げる

ガジャクティン。戦争ごっこをしていたようで、床の上には兵隊の人形がいっぱい散らばっていた。
しかし、ラーニャは居なかった。ついでに言うと、アーメットも居ない。
「今日はラーニャは来てないのかしら？」
「ラーニャ様ですか？　昼食をご一緒しましたよ。先ほどまでは、ガジャクティンの遊びに付き合ってくださってましたが……」
「ラーニャ、庭だよ」
誰に対してもものおじしないガジャクティンが、セレスの顔をジーッと見ながら答える。
「さっき、出てった」
「あら、そうなの？　庭に何をしに行ったのかしら？」
「しらない」
「そう、わかったわ。ガジャクティン、ありがとう」
ガジャクティンは、まだ、ジーッとセレスを見つめていた。兄のガジュルシンが弟の額をこづくまで、目をそらそうとしなかった。
「いけないよ、ガジャクティン。人の顔をそんなに見るのは、お行儀が悪い。セレス様に失礼だよ」
「あら、いいのよ、ガジュルシン。ねえ、ガジャクティン、何で私の顔をずっと見てるの？」
「セレスさま、おんなゆーしゃ？」
「昔、ね。今は私の甥が、今世の勇者よ」
ガジャクティンが、ニカッと嬉しそうに笑った。
「すっごい、ほんものだったんだぁ」
「え？　本物？」
セレスの口に微笑が浮かんだ。
「おんなじなまえかとおもった」
「あら、そう。別人だと思ってたのね」
「うん、ボクね、ゆーしゃのご本すきなんだ。ぜんぶ、すき。ゆーしゃランツがいちばんだったけど、きょうからは、おんなゆーしゃ

セレスをいちばんにする」
「あら、ありがとう」
「じゅーしゃの、ぶとーそーナーダって、とーさま？」
「ええ、もちろん、そうよ」
ガジャクティンはパァッと顔を輝かせた。
「すごぉい、すごぉい、すごぉい！　ボク、ゆーしゃの、じゅーしゃの、こども！　えいゆーの　子だね！」
「そうよ」
セレスは笑いを堪えられなかった。『国王の子供』であることより、『勇者の従者の子供』である事の方がガジャクティンには重要であり、誇らしい事のようだ。
「父上は自慢話がお嫌いなので、ご自分に関わる話はあまりなさらないんです」
ガジュルシンが、弟が何故、セレスが女勇者本人であるか知らなかったかを説明する。
「ガジャクティンはお勉強となると部屋を抜け出しますから、絵本と父上のお話でしか世の中を知らないのです」
「あら、まあ、そうだったの。ガジャクティン、つまらなくてもお勉強はしなきゃ駄目よ、あなたは王子なのですもの、お国の為にお勉強しなきゃ」
「しない。べんきょーは、にーさまがすればいいの」
ガジャクティンがプンと頬をふくらませる。ガジャクティンの勉強嫌いは半分以上家庭教師のせいだと、セレスも知っていた。ガジャクティンの知能は五才としては平均レベルかそれより上だ。しかし、普通ではないほど利発なガジュルシン王子がそばにいた為、家庭教師達は兄をひきあいに出して『兄上様はこの年にはコレができた』、『この年にはここまで理解していた』、『せめて、これぐらいができなければ恥ずかしいですよ』などと言って、小さな子供の心を深く傷つけたのだ。
その家庭教師達はナーダの大目玉をくらって王宮より追い出され

てはいたが……新しい家庭教師もガジャクティンは嫌い、顔を見るだけで逃げ出してしまうのだ。
「お勉強しないと、将軍にもなれないのよ？」
「いいの。ボク、ゆーしゃの、じゅーしゃになるから。ボーケンのタビに出るんだ」
「あらあら、それは大変」
セレスは真面目な顔になった。
「勇者が従者と旅に出るのは、ケルベゾールドが復活した時だけよ。そんなこと、起こっちゃいけないのよ」
「へーきだよ、ボク、つよいもん。ケンならにーさまに、かてるんだよ！　かくとーも、ヤリも！」
「うん、そうだね。おまえの方が僕より、ずっとずっと強い」
やさしく微笑む兄。ガジャクティンは得意そうに両手をふりあげた。
「マゾクなんか、やっつけてやる！」
「たのもしいわね」
セレスはニッコリと笑みを浮かべた。
「じゃあ、もと勇者として、あなたに従者になる為に必要なことを教えてあげるわ」
「ほんと！」
「ええ、ほんとう」
「やったぁ！」
「いい、ガジャクティン、勇者の従者となる為にはね……まずは語学を勉強しなさい」
「え？」
「勇者はね、世界中を旅するでしょ？　その中には共通語がほとんど通じない所もあるのよ。その国の言葉が読むことも書くことも話すこともできないって、すっごくすっごく肩身が狭いの。周りから馬鹿だ馬鹿だって言われるし、その国の人間から白い目で見られるし、すんごくつらぁい事なんだから！」

実体験に基づく助言だけに、セレスの言葉には深い思いがこめられていた。

「それにね、その国の言葉がわからないと、何を話してるのかさっぱりわからないでしょ？　自分の隣で悪人が悪いことをしようとしてても、気づけないのよ。悪人をつかまえられないのよ！」

「……そっか」

「言葉の他にその国の文化のお勉強も必要よ。その国で何が良い事なのか悪い事なのかわからないと、悪が何だかわからないもの」

「……そっか」

「勇者の従者になりたかったら、まずは語学の勉強、それから各国の歴史やお国事情をしっかり頭に入れなさい。勇者の為に働ける優秀な人間だからこそ従者になれるのよ」

「うん」

「あなたはちょっと習っただけで、あっという間に、剣や格闘や槍が上手になった努力家だもの。大丈夫、従者にとって必要な事なら、きっと覚えられる。頑張れるわ、もと勇者の私が保証する！」

「うん！」

ガジャクティンが元気に答える。父親譲りの糸目をキラキラと輝かせ、尊敬するもと女勇者を見つめて。

ウシャスがありがとうございますと、セレスに頭を下げた。兄のガジュルシンも、見守るように弟を見つめていた。

「かわいかったわね、ガジャクティン。男の子はやっぱり、四、五才の頃が一番」

庭に出てラーニャを探しながら、セレスは上機嫌で忍者に話しかけた。

「アーメットも、あの頃は、もっとかわいかったわよねえ。私達がどんな嘘をついても、何でも信じて。あの子、口裂けオババの話、本気で信じて、怖くて一人じゃトイレにも行けなかったのよね」

と、キャラキャラとセレスが笑う。
忍者ジライは、陽射しの強い外に出たので覆面を被った。
後宮の庭は広い。周囲を見渡しても、一向にラーニャが見つからないので、木に登り高みから辺りを見渡す事にする。
「居りました、ラーニャ様です。両足をぶらぶら揺らしながらベンチに座っておられます……お一人です。誰かと待ち合わせでもしておられるのでしょうか？」
「行ってみましょ」
ジライの案内で木陰や草むらに潜みつつ、二人はラーニャとの距離を詰めていった。ラーニャの斜め正面の背の低い木立の裏に、腰をかがめて潜む。枝の間からラーニャを覗けたが、葉が大変茂っているので相手からはこちらが見えない。
「む？」
忍者が遠方を見やり、小さな声でいぶかしそうにつぶやく。
「まさか！　そんな、しかし……」
そして、小声でセレスに、
「すぐに戻りまする」
と、言い残し、音も立てず、消える。
セレスはジライが見つめていた方角へと顔を向けた。
人が歩いてくる。供を二人、左右に従えて。まだ遠いので、顔の判別はつかなかったけれども……その体つき、身なりから、中央に居るのは誰かはすぐにわかった。
「え？　でも……」
セレスは苦虫を噛み潰したような顔となった。
だいぶ相手が近づいて来てから、ようやくベンチのラーニャも相手に気づき、元気良く立ち上がってぶんぶんと右手を振り回す。
「こっち、こっち」
「はい、はい」
中央の人物は左右の従者に下がるように手で合図をし、一人、ラーニャの元へと近づいて来た。ターバンまで白で統一した高貴な姿。

落ち着いた物腰。品格のある口髭。糸目を細め、その者はにこやかにラーニャに微笑みかけた。

「お手紙受け取りましたよ、ラーニャ。私と二人っきりでお話がしたいとの事でしたが、どうなさったのです？」

「ナーダお父様ぁ」

血の繋がりのない父親を見上げるラーニャの瞳は、恋する少女のものだった。

告白しちゃうわ！　ドキドキの九才！

「戻りました」
ブスッとした声で断り、木立の裏に潜むセレスの横にジライもしゃがみこむ。
「ナーダめの護衛をしている部下に、ここに我とセレス様が潜んでいる事を知らせてまいりました」
「ああ、そうね、伝えておかないと、問答無用で攻撃されちゃうものね」
セレスがチラッとジライを見る。覆面から覗く忍者の顔は、この上ないほど不機嫌そうだった。
「……ラーニャ様は趣味がお悪い」

ラーニャとナーダは恋人同士……と、いうより、まさに親子そのものといった感じで同じベンチに腰かけた。
ナーダがチラリと視線を、木立に向ける。武闘僧であった彼は周囲の気配に敏感だ。セレス達が隠れている事を感じ取ったようだ。が、その事は表に出さずにラーニャへと顔を向ける。
「お話を伺いましょう、ラーニャ」
「あのね、ナーダお父様、ラーニャね、ずっと、ずっと、ナーダお父様を尊敬してるのよ」
「そうですか、嬉しいです」
鷹揚に微笑を浮かべるナーダ。
ラーニャはポッと頬を染めた。
「私のどこをそう思ってくださったのです？」
「ぜんぶ！」
「それは、ありがとうございます」
ナーダの笑みはより優しいものとなる。

「でも、よかったら、具体的に教えてくださいませんか？　ここが良いって」
「えっとね……ナーダお父様は国王陛下でこの国で一番偉いのに、威張り散らさないでしょ？　誰に対しても優しいし、ラーニャやアーメットも可愛がってくださるから！　だから、尊敬してるの！」
「当たり前の事をしているだけですよ」
「当たり前じゃないわ！　ジライなんか、部下やアーメットにすごい横柄よ！　すぐ殴るし、すぐ蹴るし、すっごく意地悪な事を言って、苛めまくるの！」
「はあ」
「だから、ナーダお父様は偉いのよ！」

「房中術初級、くどきの手管、心得一『獲物の美点を褒め称え、獲物の気持ちをほぐす』」
　ジライがぼそぼそとラーニャの手管に解説を入れるのを、セレスはひきつった笑顔で聞いていた。

「私、ナーダお父様に肩車されるの、大好きなの。それから、ぶんぶん振り回されて、空中に放り投げられるのも！　プールに投げ込まれるのも、すっごい好き！」
「そうですか？　そのわりには、最近、やって欲しいとはねだりませんねえ」
「あら、だって、私、もう九才よ。レディなのよ。いつまでも子供みたいな真似はできないわ。はしたないもの」
「ああ、そういう事ですか。残念ですねえ、女の子は大人になるのが早くて。もう間もなく、あなたとは一緒に遊べなくなってしまいますねえ」
「寂しい？」

「ええ、寂しいです」

「房中術初級、くどきの手管、心得四『獲物が知己の場合。過去の思い出を美化して伝え、精神的共有感を促し、相手の信頼を得る』」

「でも……ナーダお父様……ご存じ？」

ラーニャはわざとらしくうつむき、横目でちらりんとナーダを見る。

「あれって、流し目かしら？」

「多分……房中術初級所作『流し目』をお教えしましたから。しかし、鏡を見ながら練習に励まれた方が良さそうですなあ。眠たそうな目にしか見えませぬ」

「ナーダお父様、私もアーメットもお父様の子供じゃないの！　ジライの子なの！」

ナーダは苦笑を浮かべた。

「それは……知ってます。後宮では公然の秘密ではありませんか」

「それが不思議なの。自分の子じゃないのに、どーして、私やアーメットまで可愛がってくださるの？」

「あなたは、ジライとセレスの娘です」

ナーダはにっこりと笑みを浮かべた。

「大切な二人の子供だから、愛しいのですよ」

「あれは、『愛するジライの子供だから、愛しいのです』と、言い

たいのよ、本当は」
「……セレス様」

「でも……ナーダお父様がお優しいからって、浮気していいってもんじゃないわ。私、お母様もジライも許せない」
「ラーニャ、それは違います」
「それに、ウシャス様も同罪よ。ウシャス様、頬を染めてうっとりとした顔でジライの事を話すのよ！　お母様とお二人で、ジライの体がどうの、テクニックがどうのって、しょっちゅう、きゃぴきゃぴ話してるのよ！」

「……セレス様」
ジト目で睨む忍者を、セレスは照れながら睨み返した。
「しょーがないでしょ！　あなた、仕事だ、任務だ、偵察だって、しょっちゅう居なくなるんだもの！　寂しいから共通のお友達と思い出に浸ってるのよ！」
「……子供の前で閨房のことは匂わさぬとおっしゃったのは、セレス様でありましたのに」
「子供達のお昼寝タイムとか、夜にウシャスを可愛がってあげる時だけよ、話してるのは。聞かれてたなんて、こっちもびっくりよ。しかも、しょっちゅうって……三日に一度ぐらいなんだけどなあ」

「それは誤解ですよ、ラーニャ。私とセレスの結婚は、形だけのものです。二人の間に愛はありませんから、裏切る裏切らないの問題ではありません。ジライとセレスは心から愛し合って結ばれています。身分差がある為、婚姻はしてませんが、あの二人は魂で結ばれています。あなたとアーメットは二人の愛の結晶なのですよ」

自分は不義の子だとラーニャが悩んでいると思ったのだろう、ナーダはジライとセレスの関係を弁護した。子供に心の傷を負わせてはいけないと、それは真剣に。

しかし、ラーニャにとって、そんな事はどうでも良かったのだ。ラーニャは他の事でナーダをつっついた。

「じゃ、ウシャス様は？」

「う」

「ジライのことが好きなんでしょ？」

「それは、そのぉ……その、何と言いますか、多分、彼女はジライの事が好きだとは思います。でも、私を裏切っているわけではありません。彼女はとても貞淑な女性ですから」

「貞淑？　ジライと浮気してるのに？」

「浮気なんかしてませんよ、誤解です」

「なら、何で、ウシャス様がジライのベッド・テクニックを知ってるの？」

「……」

「さすがに、良識ある、もと大僧正候補様は言えないみたいねえ。私とジライとウシャスとナーダはＳＭ４Ｐ関係で、しょっちゅう一緒にＨしてる仲なんだとは」

「ナーダめ、正常人（ノーマル）ぶっておるから悪いのじゃ。我など、包み隠さずに女王様趣味を公言しておるのに！」

「でも、ナーダが女性相手には全く勃たないホモだと公言するのはマズいんじゃない？　苦労してつくった三人のウシャスの子がナーダの子じゃないと、世間に誤解されかねないわ」

「む」

「私とジライが子作りに協力してるなんて、ややこしい事情、説明するのも面倒くさいし、説明したところで正常人（ノーマル）な人はわかってくれないと思うもの」

「うまく説明できませんが……本当に、ウシャスはジライとは浮気していません。彼女は私を愛してくれています。私は今の生活で満足していますよ」

「だけど、後宮にナーダお父様だけを愛している妃は居ないのよ！　お父様、かわいそう！　かわいそうよ！」

ラーニャはひしっとナーダに抱きついた。

「私は違うわ！　ナーダお父様が好き！　世界で一番好きよ！　誰よりもあなたを愛しているわ！」

ポキッ。ポキッ。ポキッ。

ジライの足元に折られた小枝が積みあがってゆく。

ふるふると小刻みに震える忍者に、セレスはかけてやる言葉が無かった。

「わかりました、ラーニャ。あなたは、私の為に、心を痛めてくれているのですね？」

「そうよ！　お父様、かわいそうなんですもの！　誰にも愛されてなくって！」

「ありがとう、ラーニャ」

ナーダはしがみついてきている子供の背に、やさしく手を回した。

ラーニャの顔はボッと火を噴き……

「あああああああああああ！」

セレスはジライの口を押さえていた。ぎりぎり間に合ったので、声は漏れていない。しかし、忍者は今にも飛び出して行きそうなほ

ど取り乱していたので、セレスは必死にその体を押さえた。

「ナーダお父様、ラーニャの事、好き？」
「ええ」
「どれぐらい？」
「とても好きです」
「ね、お母様とラーニャなら、どっちが好き？」
「あなたです」
「ほんとぉ？」
「本当です」
「じゃあ、じゃあ、ウシャス様とラーニャなら？　どっち？」
「ウシャスは妃ですから、好きかと聞かれれば、もちろん、彼女は大切な」
「そーじゃないの！　社会的なてーさいは、どーでもいいの！　知りたいのは、お父様のお気持ちよ！」
「はあ」
「私とウシャス様……どっちと一緒にいる方が楽しい？」
「……ラーニャです」
ラーニャの顔がバッと華やかに輝いた。
「じゃ、私達、『そーしそーあい』ね！」
「はあ？」
ラーニャは顔を更に赤く染め、ナーダの頬にチュッと口づけをした。

「あああああああああ！」
じたばたともがく忍者。押さえつけておくのは、そろそろ限界だった。

「待っててね、ナーダお父様。ラーニャ、後十年したら、ナイス・ボディのプリンプリンの女王様になるから」
そう言って両手で真っ赤になった頬を押さえ、キャーンと照れながら走り去って行く。
茫然とその背を見送った戸籍上の彼女の父親は……
「ナーダ！」
木立の陰から現われた実の父親に睨みつけられた。
「……あなた達、そこでさっきから何やってたんです？」
潜んでいた事は最初からナーダにはバレている。セレスは溜息をついた。
「ちょっとね、まあ、いろいろ、と」
ジライはインディラ国王の襟をぐいっと掴み、覆面をつけた顔を近づけ恫喝するように睨んだ。
「この朴念仁が！　ラーニャ様が誤解なさってしまったではないか！」
「は？」
「ええい！　何じゃ、その阿呆づらは！　見てると、益々、腹が立ってくる！」
「あの……ジライ？」
「二目と見られぬ顔に切り刻みたくなってきたわ！」
「そういう痛そうなのは趣味じゃないんですが……ジライ、今夜の事、覚えてます？」
「む？」
「忘れたのですか？　先月から予約していたじゃありませんか、王宮に戻った二日目の晩に、一晩、朝まで付き合っていただく事を」
「ほほう」
ジライは黒の瞳をきらりと輝かせた。
「きさま、我に遊んでもらいたいのだな？」
ジライの様子がおかしい事は、ナーダにもわかっていた。が、そ

う聞かれれば遊びたいと答えるしかない。
「ええ……遊んでいただきたいです」
「良かろう！　首を洗って待っておれ！」
その捨て台詞を残し、ジライはすばやい体術で姿を消してしまった。木の茂みにでも隠れてしまったのだろう。
「どうしたのですか、ジライは？」
「父親の嫉妬よ」
と、セレスは大きく溜息をついた。

「ちきしょう、あのバカ親父……いつか殺してやる」
半泣きのアーメットの背を、第一王子ガジュルシンは優しく撫でた。
「元気を出して、アーメット。父上に相談して、三人で良い方法を考えよう」
いつまでもアーメットが遊びに来ないから、弟のガジャクティンがしびれを切らしたのだ。弟の為にアーメトを探しに来て、ガジュルシンは何時もは太陽のように明るい義弟が自室で落ち込んでいる姿を発見したのだ。
「僕も父上も、アーメットが忍者になるのは反対だ。社交的なアーメットには外交の仕事が向いているし、武術も得意だから将軍を目指しても良いと思う。いずれにしろ表舞台から引かない方がいいよ」
「ガジュルシン……」
アーメットは義兄を見つめた。本当は血の繋がりがないしわずか一ヶ月早く生まれただけなのだが、賢くて優しいガジュルシンは、いつもアーメットの良い兄だった。
「おまえ、やっぱ、いい奴だなあ。おまえやナーダ父さんの百分の一でもオレの両親が優しかったらなあ」
「アーメット……」
「オレ、忍者になんかなりたくない！」

「じゃ、武闘僧になりなさいよ」
と、言って部屋に入って来たのは、第一王女ラーニャだった。
アーメットは姉を睨みつけた。
「僧侶もやだ！　ハゲになんかなりたくない！」
「男のくせに髪の毛ぐらい何だって言うのよ！　あんたは武闘僧になって大僧正候補になりなさい！　お国の事情で仕方なく還俗なさったナーダお父様の代わりに、あんたが立派な僧侶になるのよ！」
「やだ！」
「ま、親不幸ね！」
二人はしばらくぎゃいのぎゃいのと言い合い、最後にはラーニャからのげんこつが飛んだ。アーメットはジライより、人前での忍者の技の使用を禁じられている。破ったら、逆さ吊るしの仕置きなのだ。そんなアーメットが、姉に勝てるわけがない。なにしろ、姉はセレスから直々に、剣や体術の稽古をつけられているのだ。
プンプン怒ってラーニャが部屋を出て行った後、アーメットはガジュルシンに抱きついた。
「ジライ父さんも、姉様も、お母様も大嫌いだ！　おまえだけだガジュルシン！　オレの事をわかってくれるのはおまえだけだよ！」
「アーメット……」
ガジュルシンは少女のような顔を朱に染め、抱きついてきた義弟を強く抱きしめた。
「君がいなくなってしまうなんて、僕は耐えられない。アーメット、ずっと側にいて……」
「居たいよ、オレだって！　ちきしょう、忍者も僧侶も、絶対、いやだぁ！」

まだ子供なので開花しきっていないが、第一王子ガジュルシンは父親と同じ性癖だった。つまり……女性に欲望を感じないという特殊な……。しかも、環境によってそうなってしまった後天的な父親

とは異なり、生まれつきの真性のそれだった。
ホモに、ファザコンに、勇者おたく……王家の子供の中で比較的まともなアーメットは死亡工作後に忍者となる予定……
インディラ王家の未来は明るそうだった……

その夜、国王の寝室では……
指一本触れさせてくれない愛しい男に、ナーダは戸惑っていた。で、ご機嫌伺いをして、怒っている理由を教えてもらい……
ナーダは吹き出してしまった。
「何だ、ジライ、そんな事を怒ってたのですか」
「そんな事？　きさま、ラーニャ様の恋心を何と心得る？」
「ラーニャの私への気持ちなんて、ただのファーザー・コンプレックスですよ。女の子が父親に憧れを抱くのなんて、一過性のものです」
「……きさまは、本当の父親ではない」
「でも、父親役はずっとやってきてますよ。あなたは役目上、ほとんど王宮に居ないし、居る時も一方的に愛情を押しつけるだけですしねえ」
「我の仕え方が間違っているというのか？」
「そーじゃなくって、あなた、父親として接してないって言ってるんです。教育書によると、あの年頃になると、女の子って難しくなるみたいですから、もうちょっと愛情の押し売りを控えた方がいいんじゃないんですか？　父親として尊敬して欲しいなら」
「阿呆。王族が卑しい忍者を尊敬してどうする。尊敬などもったいなくていらぬわ……我はただ……」
「ただ？」
「時折でよい……ラーニャ様から笑いかけていただきたい……それだけだ」
首を傾け、瞳を半ば伏せ、視線をそらすジライ……

ナーダは微笑を浮かべた。
「……本当に、あなたって、変わりませんね」
ナーダはジライを引き寄せ、その唇を自分のもので塞いだ。なかなか応えてくれない相手の舌を絡めとり、何度も深く口づける。
長い口づけの後、ナーダはにっこりと微笑んだ。
「あなたは刃のように鋭く、雷のように激しく、そして溜息が漏れてしまうほど綺麗で……辛い事も悲しい事もありのままに受け容れてしまって、自分の感情を認めない意地っぱり。寂しがり屋のくせに……。本当に、かわいいです」
「たわけ。四十男が三十男をつかまえて言う台詞か、それは」
「あなた、綺麗ですもの、二十代で通りますよ」
「フン。きさまは老けたな、いかにも中年オヤジだ。四十も越えたし、な」
「言い方が憎々しいですねえ、あなただって四捨五入すれば四十でしょうに」
「……そうだな、我も老いた」
「え？」
「三十代でも若いとは言えぬ。我は、もう忍者としての頂点（ピーク）は越えた」
「ジライ……」
「鍛錬を続けても、日々、肉体は衰えておる。技の研磨に心血を注ぎ、人心をきちんと把握しておれば、後二十年は忍者頭としてはやっていけるだろうが……我はもう老いた」
「そんな……三十五、えっと、六でしたっけ？　その年で老いただなんて、いくらなんでも……」
「いや、老いた」
「言ったでしょ、あなたは綺麗です。顔も体も、たまらなく魅力的です。私はあなたに、ずっと恋し続けているのですよ」
そのまま再び口づけしようとしてきた男から、ジライは顔をそむけ、ジロリと睨みつける。

「だから、優秀な跡取りを育てたい。我の知識と技をアーメットに伝えたいのだ」
「……」
「良いか、あやつに、もう二度と余計な知識を与えるなよ。あやつが十歳になったら、本格的に忍者修行をつけるのだ。邪魔をするな」
ナーダはがくっと肩を落とした。
「ジライ……せっかく二人っきりなのですから、子供の話はやめてくれませんか？　私、今日の日を、一ヶ月前から楽しみにしてたんですよ」
「……我を抱きたいのか？」
「そりゃあ、もう……」
「ならば誓え。その一、ラーニャ様の初恋を美しい思い出とする事、その二、アーメットの教育に関し二度と口をはさまぬ事」
「ジライ……」
「誓わぬのなら、我は帰る」
ツーンとそっぽを向く男を見つめ、ナーダは溜息をついた。昔から、この無慈悲で身勝手な男には逆らえない。
惚れた弱味というやつだ……

「しかし、ラーニャ様にキスされても、おまえ鳥肌が立たなかったな？　何故だ？」
「あの年頃の子供は男も女も同じですよ。もうちょっとお肉がついて、お化粧なんかするようになったら、そばに来られるだけで駄目かもしれませんが」
「ということは、ラーニャ様がナイスバティのプリンプリンの女王様になられたら……」
「正視できませんね」
「……お気の毒なラーニャ様……こんな阿呆な男色家に惚れてしまわれて……まさに、前途多難の恋……」

「前途洋々でも困りますよ、私達、戸籍上は親子なんですから」

未来に修羅場となりそうな予感をはらみつつも……

今のところ、インディラ王家はいたって平和であった。

告白しちゃうわ！　ドキドキの九才！（後書き）

次回は、『み～んな、ジライが悪いのよ！　失意の十五歳！』。

しばらく夢と女勇者セレスの方を更新しますので、ラーニャの更新、ちょっと先です。

み〜んなジライが悪いのよ！　失意の十五歳！

インディラ王家第一王子ガジュルシンは、父王ナーダに呼び出され、西の離宮の一室に父と二人っきりで対していた。

ナーダは近習も近衛兵も全て下がらせていた。二人の護衛の忍者は物陰に潜んでいたが、それはインディラの王族にとって常に側に置かねばならぬ存在、忍者以外の者を全て下がらせたのは内々の話がしたいという父王の意志の表れだった。

「ジライから聞きました、又、インディラ寺院に修行に赴きたいそうですね？」

その事を話題にされるとわかっていたのだろう、ガジュルシンは淀みなく答えた。

「はい。できれば総本山に……それが難しいようでしたら、ウッダルプル支部で構いません。俗世を離れ、清らかな時を過ごしたいのです。どうかお許しください」

椅子に座り両手を組む父親の前に、第一王子は佇んでいた。わずか十歳にして帝王学まで究めた賢い継嗣は、十三歳となっていた。線の細さをそのままに、少女とみまごう美しい少年に成長している。

「どれぐらいの期間、行きたいのです？」

「半年でも一年でも……可能な限り、できるだけ長くです……」

ガジュルシンの美貌は憂いに曇っていた。

ほっそりとした少年に対し、武の鍛錬を続けている父王は大柄でたいへん逞しい。ターバンまで白で統一した高貴な国王の衣服の下は、武闘僧時代に鍛えたままの筋肉が隠されていた。

「あなたが信仰心に篤く育った事は、父親として喜ばしく思っています。インディラ寺院で信仰の道、道徳の道、哲学の道、神の御力にすがる魔法の道を学ぶのも、人としての幅を広げるという意味で価値のある勉学だと思います。しかし……」

父王ナーダは片眉を微かにひそめた。

「良い事も度を過ぎれば、意味がなくなります。あなたは先月、総本山での修行を終え、王宮に戻って来たばかりではないですか。しばらくは、第一王子として王宮でなすべき義務を果たしなさい。寺院での修行はせめて半年、間を置くべきです」

「父上……」

ガジュルシンは母親譲りのアーモンドのような目を細め、せつなそうに父王を見つめた。

「一生一度の願いを口にさせてください……正直に申し上げます……僕はもう耐えられません……王子として王宮にいるのがつらいのです……」

父王に対し、ガジュルシンは深々と頭を下げた。

「どうか、出家させてください」

「出家……？」

「それが無理でしたら、廃嫡してください。叔父上達のように王位継承権を放棄したいのです」

先王にはナーダの他に、八人の王子がいた。そのうち、謀反の旗頭とされた第二王子ドゥリヨーダナは処刑され、彼の実弟二人は僧籍に入り俗世と縁を切る事で処刑を免れている。

残り五人の王子はナーダより家系を与えられ臣下の貴族となったが、その内の三人は反乱を企てその咎で処刑されている。臣下としてナーダに仕えている義弟は二人しかいない。

「僕の為に家系をもうけてくださる必要もありません。病ということで、何処ぞに閉じ込めてください。離宮でも王宮外の城にでも……。そこで僕に何ができるのかはわかりませんが……人として何か実のある道を探したいと思います。お願いいたします」

ガジュルシンは王国の世継ぎとして家臣から絶大な支持を得ている。むろん、ナーダも聡明な息子を頼もしく思っていた。その息子からの思いもかけぬ願いに、ナーダは内心ひどく驚いた。しかし、表面上はそんなそぶりは見せず冷静な声で尋ねた。

「理由を聞かせてもらえますか？」

「……王宮に居たくないのです。僕は……第一王子として期待されるのが苦痛なのです」
ガジュルシンは顔をあげ、十三歳の少年のものとは思えない苦汁に満ちた表情を見せた。
「……僕が王国を継ぐのにふさわしくない人間だからです」

姿見の鏡に、王女ラーニャは、もう長い時間、自らを映していた。
少し勝気そうな眉、目は大きく黒く、ちょっとツンとしたような鼻は愛らしく、柔らかな唇は綺麗な桜色だ。
ラーニャは、白粉をぬるどころか紅すら差していない。自然のままの姿で美しくありたい……愛しい人に綺麗だと言ってもらいたいと、入念に肌や爪の手入れはするものの、決して化粧で自らを装おうとはしないのだ。
腰から下に巻きスカートを付けているだけで、上半身を覆うものはない。軽いウェーブを描く黒の長髪が彼女の露となっている胸を半ば隠していた。
ラーニャは体の向きを変え、腰をかがめたり伸ばしたりして、さまざまなポーズをとり、姿見の中の自分を見つめる。
しなやかな両手、白い肌、細い首。
健康的で若々しい裸体が映っている。
ラーニャは自らの胸に下から手をそえ、そっと触れた。
かわいらしい桃色の先端。やわらかそうな胸が微かに揺れる。
そう……微かに……
侍女も下がらせて自分の部屋で一人っきりでいる為か、羞恥を忘れ、かなり大胆なポーズをとったりもした。
両腕を交差させて胸をぐっと持ち上げたり、胸とお尻を強調するように突き出したり……
ラーニャは角度を変え、姿見に映る自らを何度も、何度も見つめ

直した。
しかし……
望み通りのものは鏡には映らない……
「あいかわらず、ちっちぇなあ」
……無遠慮な声は背後からした。
「寄せて集めようにも、肉なさすぎ」
ラーニャは目の前のモノを両手で抱え、振り向きざまに背後にいる者めがけて投げつけた。
身長ほどもある姿見の鏡が宙を飛び、床に叩きつけられ、豪快な音と共に砕け散った。

「半年ぶりに会った弟に、これかよ！　実の弟を殺す気か？　暴力女！」
「私の弟は、三年前に病死したわよ！　あんたなんか赤の他人だわ！」
ラーニャはキッ！　と上を見上げていた。
さきほど無礼な口をきいた者は跳躍して逃れたようで、ヤモリのようにぴったりと天井にはりついていた。黒のチュニックに黒のズボン、黒の兜と口布で顔を隠す、王宮付き忍者の格好をしている。
「下りてらっしゃい！　覗き魔！」
「覗くぅ？　た・ま・た・ま通りがかっただけだよ。興味ないぜ、そんなペッタンコ」
「何ですって！」
「貧乳～」
カッとラーニャが頬を赤くする。
「微乳～」
怒りに任せ、ラーニャはソファーの上のクッションを天井めがけて次々と投げつけた。上半身が裸のまま、少女らしいとてもとても慎ましい胸をほんの微かに揺らしながら。

ヤモリ忍者はササッと動き、ラーニャの攻撃をいとも簡単にかわしてしまう。

「おっかしいよなあ、お母様はセクシー・ダイナマイトなのに。娘が男胸なんて」

「男胸ですって！」

ラーニャはぶるぶると身を震わせてから、ビシッ！　と、天井の忍者を指差した。

「もう許さないわ！　覚悟しなさい！　あんたなんか叩き殺してあげるわ！」

「へぇぇぇ、できるもんならやってみろよ、バカ姉貴」

天井にへばりつく者が、ケラケラと笑う。天井を這い回るなど王女のラーニャが出来るわけがない。天井にいる限りは安全だ。

と、思ったのだが……

「ジライ！　そいつを床に叩き下ろして！」

え？　と、思った時には麻縄が宙を舞っていた。忍者は背後をとられ、両腕を背面に強引にねじ曲げられ、交差するように重ね合わせた手首を縛られ、体に何重にも麻縄が巻きつけられ……地面に叩き伏せられた時には、上半身をがんじがらめに縛られていたのだった。

その緊縛された背を、踏みつける右足があった。

「このたわけ」

麻縄を手にたたずんでいるのは、覆面に黒装束の忍であった。王宮付き忍者の忍者頭、ジライ。インディラ一（いち）の忍だ。ラーニャの実の父親でもある。

インディラ忍者はしまった……と、後悔した。ちょっと考えればわかりそうなものだった。ラーニャが姿見を前にセクシーポーズをとっていたのだ、この娘盲愛の変態忍者が側にいないはずなかった、王宮にいる限り。

セレスやラーニャ関係の情報は、ジライの耳には迅速かつ漏れなく伝わる。後宮の侍女は全員、ジライの部下のくノ一なのだから。

「ラーニャ様のお可愛らしい胸を見た上に、ささやかながらもふくらみのあるお胸を侮辱するなど、不届き千万。万死に値する」
麻縄をしならせ、ジライはインディラ忍者の両脚もあっという間に縛り上げる。ここまで念入りに縛れば、いかに忍とて、そうそう縄抜けできない。相手の自由を完全に奪ってから、忍者ジライは王女ラーニャに対し片膝をついてかしこまった。
「ラーニャ様、不埒な賊めは、この通りジライめが取り押さえました。ささ、どうぞご存分に拳をお振るいくださいませ」
「……」
「さ、ご遠慮なく、貧乳、微乳、男胸と侮辱された仕返しを、ぜひ」
ラーニャは手を組み合わせポキポキと鳴らしながら、二人に近寄り……
「この無神経！」
インディラ忍者ではなく、忍者ジライを右の拳で殴り飛ばした。
「可愛くって悪かったわね！」
「ささやかだの、貧乳だの、微乳だの、男胸だの、ポンポン言ってくれて！」
「どーせ、私は小さいわよ！」
「お母様に内緒であんたに買って来てもらった女王様スーツも胸があまりまくりだし！」

「十五歳なのに××のＡＡＡカップしかないし！」

「それもこれもみんな、あんたが悪いのよ！」

ドカスカバキとひとしきり殴り蹴り終えてから、ラーニャはその場にしゃがみこみ、両手で顔を覆ってわーっと声をあげて泣き出した。

「お母様の血を正しく引いてれば、ナイス・ボディのプリンプリンの女王様になれたのにぃ～～～～あんたの東国人の血のせいで、この有様だわ！　私の胸、もう大きくならないんだわ！　あんたの血を引いたせいで！」

「ラーニャ様、お気を確かに。セレス様の血の方が色濃く、焦らずとも、これから後、ぐんぐん豊かになっていくやもしれませぬ。又、東国の血の特徴が勝っていたとしても、必ず貧乳となるわけではございません。東国人とて巨乳も爆乳もおります。ですから……」

ラーニャが激しく泣いているので、ジライは痛みの余韻に浸るのもそこそこに、愛娘を慰めようとした。しかし……

「あんたの母親は？」

「む？」

「大きかった？　小さかった？」

「むむむ」

「どっち？」

「母とは顔を合わせずに育ちましたゆえ、どちらかと尋ねられてもお答えのしようが」

「じゃ、姉妹、叔母、従兄弟。誰でもいいわ、一人ぐらいいるでしょ、あんたの血縁で知ってる人。大きかった？　小さかった？」

「……」
「どっち？」
「私の妹は……その……着物を着るのにたいへん適した体型をしておりました……」
「それって、どっち？」
「ラーニャ様」
忍者ジライは王女の肩を慰めるように抱いた。
「掌にすっぽりおさまるやわらかな胸にも、巨乳とは違った、趣がございます。貧乳には貧乳なりの愛らしさがございます。胸の大きさなど瑣末なもの。おなごにとって一番、大切なのは心。いかに高貴で残酷な女王様となられるか、それを第一に」

「やっぱり、あんたの血なんじゃない！」

ラーニャの怒りの鉄拳をくらい、忍者ジライが宙を飛ぶ。そのまま泣きながら実の親を踏んづける王女を目の端に映しながら、インディラ忍者――三年前に死んだ事にさせられ今は忍術修行を無理やりやらされている、もと王子アーメットは縄抜けをしていた。
姉の怒りの矛先が父親に向いている間に逃げ出さなければ……せっかく半年ぶりに王宮に戻って来られたのに、このままでは暴力娘に足腰立たない状態にされかねない。
アーメットは必死に縄抜けを続けた。今日は義兄に会いに来たのだ。目的を果たす前に半殺しにされるなど御免だった。
そんな時、扉が開いた。
「あらあら、はしたないわねえ、ラーニャ。家族しかいなからって、姫としてその格好はどうかしら」
インディラの伝統衣装を身にまとった第一夫人セレスの入室である。共に入って来たセレス付き侍女――くノ一が割れた鏡の片付け

に走る。
「お母様！」
忍者ジライを突き放し、上半身裸のラーニャは泣きながら母の胸に飛び込んだ。たいへん豊かで、たわわに実った果実のような両胸がたぷんと揺れる。
「聞いて！　ジライとアーメットがひどいのよ！」
「はいはい」
娘の頭を撫でてあげながら、もと女勇者セレスは床の上の男達にっこりと微笑みかけた。全身ぐるぐる巻きに縛られていようが、殴られてボコボコにされていようが、この後宮ではよくあること。セレスはまったく気にしていない。
「おかえりなさい、アーメット。今日は大切な話をしに来たんでしょ？　ガジュルシンは西の離宮よ。ナーダも一緒だから丁度いいわ、ジライ、あなたも忍者頭として一緒に行って立ち会ってらっしゃい。ラーニャは私が慰めておくから」

一方、その頃……

アーメットの義兄第一王子ガジュルシンは、父王ナーダに対し深刻な告白をしていた。

「国を統べるのに必要なものは、頭脳ではありません、王としての器量であり民を受けいれられる度量です。僕は気が弱く、ほんの少しストレスがたまっただけで熱を出してしまう軟弱な人間です。表の方々の理にかなわぬ言動を目にし耳にするなど耐えられません。僕が王位に就けばこの国は、間違いなく傾きます」

「何故です？」

「僕は、声の大きな押しの強い人間には逆らえません……怖いのです」

「怖い？」

「気おされしまうのです。相手が正しくないとわかっていても……弁をもってやりこめるどころか、萎縮してしまって会話をすらまともにできません。無理に話を聞いていると、動悸が早くなって血の気が引いて、意識が遠のきかけます……。こんな人間が王となったら、国政は大臣達のほしいままにされるでしょう」

「王は国政を必ずしも担う必要はありません」

ナーダは静かに息子を諭した。

「あなたには少なくとも、善悪を見極められる目はあるように思われます。信頼のおける貴族を執政とし、政治を任せてもよいのですよ」

「政を行わぬ国王など、王たる資格はありません。国を統べているからこそ、王族は富の享受が許されるのです。少なくとも、僕はそう考えています。義務を果たさぬ王になど、恥ずかしくてなれません」

「自ら統治できないから、国王になりたくないのですね？」

「はい」
「では、逆に私からあなたに問います。あなたを廃嫡した私は、誰を世継ぎとすればよいのですか？」
「……それは」
戸惑うガジュルシンに、ナーダが問う。
「ガジャクティンは王位にふさわしいと思いますか？」
ガジュルシンは静かに頭を横に振った。
第三王子ガジャクティンは、裏表のない明るい性格だったが、とても頑固でいったんこうだと思い込むと他人の意見は決して容れず、その上、おだてに弱い。ちやほやしてくれる家臣の願い事をなんでも聞いてしまう……そんな王にしかなれないだろう。
「では、ガジュルヤーマはどうです？」
その問いにも、ガジュルシンは頭を横に振った。
第四王子ガジュルヤーマはまだ五歳。王たる資質うんぬんを問題にできる年齢ではない。父王の死で突然王位を継いでも、傀儡の王とされるだけだ。
第二王子アーメットが若くして病死した（ことになっている）今、王家に他に王子は居ない。
「聡明なあなたならば、わかるでしょう。あなたが出家をすれば、あなたの弟が傀儡の王となるだけです。先代十一代国王から始まった改革は全て無に帰し、政治は、又、私腹を肥やす事を第一に考える有力貴族のモノに戻るだけです」
「……」
「求道を俗人が止める事はできません。あなたの信仰の道が、インディラ国の未来の混乱よりも、尚、尊いものだと、そう信念をもって断言できるのでしたら、出家なさい。私は止めません」
「……ずるいです」
「え？」
「父上はずるい……多くの人間の幸福な未来を引き合いにだされては……出家など望めません」

「これが交渉術というものですよ」
ナーダはにっこりと笑みを浮かべた。
「相手の弱点をついてやりこめてしまうのです。声を大きくしなくとも、相手を黙らせる方法は幾らでもあるのですよ」
「……」
「あなたには、より優秀な話術の先生をつけましょう。それから……そうですね、来月から少しづつ表の政務を見学させてあげます。怒声まがいの大きな声を浴びせられるのは、あなたではなく、私です。私が声が大きいだけの無能をどう扱っているのか、その目をもって学んでゆきなさい」
「父上……」
「この国の未来の為にも、私は、あなたに国を継いでもらいたい。聞き届けてはもらえませんか、ガジュルシン」
「……」
しばらく沈黙を守り、それから第一王子は沈痛な声で答えを返した。
「申し訳ございません……ご期待には応えられません……」
「何故ですか？」
「政務に自信が持てないからだけではないのです……国王になりたくない理由は……」
少女のようにやさしげな顔には自嘲のような笑みが浮かんでいた。

「僕は……ダメなのです……」

「僕は……男ではないのです」
「え？」
男ではない？

ガジュルシンは恥ずかしそうに頬を染めていた。
「今年になってから女官長がずっと……僕に成人男性の嗜みを教えようと……夜毎に違う女性を寝所に送って来るのです。子をなすことが国王の務め……妃を娶る前に女性の扱いを覚えておくのが王族の男子の義務なのだと……でも、」
第一王子は父王から視線をそらし、悲しそうに瞳を伏せる。
「触られても鳥肌が立つだけで……気持ちが悪いだけ……どんな女性が相手でも、僕のモノは全く反応しないのです。僕の反応が薄すぎるので、女性はどんどんはしたない姿となり、下品で荒々しい事ばかりをして、一晩中、僕を疲れさせるのです……失望を露に帰ってゆく女性を見送るのも、辛いのです。もうやりたくありません」
「……」
「妃を娶り、子をなすなど、僕には無理です。できません」
「……」
「女性と性交するなど……拷問に等しいです」
ナーダは席から立ち上がり、息子の細い体を抱きしめた。
よくぞ告白してくた！
その気持ち、痛いほどわかる！
女性に興味がないのに、毎夜、迫られていたのなら、さぞ苦しかったろう、かわいそうに！　と、思いながら。
「女官長には私からよく話しておきましょう。思春期のあなたに望まぬ性交を強要するなど、性教育として逆効果なだけだと」
「ありがとうございます……」
そういえば女官長も押しが強い女性だった。職務熱心な彼女が善意で押しつけてくるものを、ガジュルシンは否と言えなかったのだろう。
「あなたの未来を案じて、忠義から、彼女は愚かな世話をしたのです。許してあげてください」
「それはわかっております……彼女を責める気はありません。ですが、父上、今はよくとも……」

第一王子は重苦しい溜息をついた。
「この先、数年、経てば、又、同じ状況となるかと思うと、心は晴れません。後、数年したら僕は王国の世継ぎとして妃を娶らねばいけないのでしょう？　その日を思うと憂鬱で……死んでしまいたくなります」
「自殺は許しませんよ」
「承知しています……ですから、出家したいのです。女性と縁のない清らかな世界で生きたいのです」
「しかし……」
ナーダがかけてやるべき言葉を捜していると、部屋の片隅から声がした。姿を隠している護衛の忍者だ。
「国王陛下、ガジュルシン殿下、お二人にご面会を求めておられる方が、扉の前までいらしています。いかがいたしましょうか？」
「どなたです？」
今は誰とも会う気はなかったが、名前だけは尋ねておこうとナーダが聞く。
「頭領の息子アーメット様にございます」
その答えを聞くや……
第一王子ガジュルシンは、父王の巨体を突き飛ばしていた。
よろめき、尻餅をついたナーダはあっけにとられて息子の背を見た。あの細身で病がちな息子のどこに、こんな力が？
ガジュルシンは部屋を飛ぶように走り、廊下の召使に命令を与えることすらせず、自ら勢いよく扉を開けた。
「アーメット！」
王子は、目の前の小柄なインディラ忍者に抱きついた。
兜に口布で素顔を隠してはいたが、ガジュルシンは目の前の忍者が誰なのかよく知っているのだ。
「会いたかったよ、アーメット」
「恐れいります、ガジュルシン殿下」
「あああ、そんな演技、必要ないよ。ここには父上と忍しか居な

いから、さ、入って。兜も口布も取って、楽にして。ね？」
ナーダは立ち上がり、義弟を嬉々として部屋に招きいれる息子を見つめた。ガジュルシンは頬を微かに赤く染め、瞳をうるませて義弟を熱っぽく見つめている……まるで、萎れていた花が甦り美しい花を開いたようだった。
アーメットはナーダに対し跪き、臣下の礼をとった。
「ご無沙汰しております、国王陛下」
ナーダは苦笑を浮かべた。
「私達の間で演技はやめましょう。おかえりなさい、アーメット、半年ぶりですね」
顔をあげた忍者の目元が、にっこりと笑みをつくる。
「ただいま、ナーダ父さん」
「アーメット、兜も口布も取って」
尚も促す第一王子に、忍者は頷きを返した。
「んじゃ、遠慮なく」
淡い金の髪、青い大きな瞳の、少年の顔が現われる。アーメットはガジュルシンと同じ十三歳。この年にありがちなちょっと生意気そうな、しかし、まだ幼さのぬけないかわいらしい顔立ちをしている。
「君は変わらないね、アーメット……」
一ヶ月月下の義弟を見つめ、第一王子はぽわんと頬を赤く染める。
言われた方はムッと顔をしかめた。
「それ、皮肉？」
立ち上がったアーメットは、義兄にズイッと顔を近づける。睨むように見上げてくる義弟に、第一王子は嬉しそうに戸惑っていた。
「何だよ、また、伸びたのかよ！　ったく、昔は俺のがデカかったのにぃ。ひょろひょろ伸びやがってぇ！」
アーメットは頬をふくらませた。
十になるまではアーメットの方が背が高かったのだ。年頃の他の子よりもずっと体格が良く、十四、五歳に見えたのだ。

しかし、死亡工作を施され、インディラ忍者の隠れ里での忍者修行を始めてから、成長はたいへんゆるやかな上昇しかしなくなっていた。父親に忍者修行のせいだと文句を言ったのだが『阿呆。ちょうど成長が止まる時期だっただけじゃ』と、言われ、『我は東国人、セレス様は西国人にしてはたいへん小柄なお方。おまえの成長、そこまでやもしれぬな』などという不吉な予言までされてしまっていた。

会う度に背が伸びていくガジュルシンには、アーメットはいつも屈辱を感じていた。昔、見下ろしていただけに、悔しさはひとしおだった。

義弟への感情を表情に表すガジュルシン、それにまったく気づかず友人と接しているアーメット……

この二人の仲、昔は違ったはずだが……ナーダは首をひねった。少なくとも、アーメットが第二王子として王宮にいた頃は普通の友人同士のように見えたが……

離れて暮らすうちに早熟なガジュルシンは義弟に恋心を抱き、未だに子供のままのアーメットには義兄の思いを察っせられないといったところか。

「それで、アーメット、挨拶の為に来てくれたのですか？」と、ナーダ。

「あ、そうだった、大事な話があって来たんだ。ナーダ父さんも一緒だから、ちょうどいいや」

ガジュルシンから顔を離し、姿勢を正してから、アーメットは義理の兄の前に片膝をついて跪いた。

「まじめな話だから、忍者モードでやるぜ。ガジュルシン様、」

「……うん？」

「本日付けをもって、頭領の命により、俺はあなた様の『影』となります。いついかなる時もガジュルシン様と共にあり、ガジュルシン様をお守りする盾となる事をお許しください」

「アーメットが僕の『影』？」

第一王子ガジュルシンはブルブルと震えた。

「影って……いざという時に主人の盾となれるよう、いついかなる時も陰より主人を守り、常に主人につき従う特殊な護衛忍者だよね？　危険な仕事じゃないか……」

「ああ。でも、どーせ忍者やるんなら、俺も意味のある仕事がしたい。おまえの影なら、お国の為にもなるし、ずっとおまえの側にもいられるしさ。いいと思ったんだけど……もしかして、嫌？」

「嫌だなんて！　そんな事あるものか！　君が危険な目に合うのは嫌だけど……でも、ずっと一緒に居られるのなら嬉しいよ！」

「あ、ごめん。しばらくは月半分だけ。俺、忍者修行を本格的に始めたの遅かったから、まだまだ勉強しなきゃいけない事が多くてさ。おまえの影を今までやっていたハンサさんと一緒に二人で影をやるよ」

「それでも……月の半分は一緒なんだね？」

「うん。一年か長ければ二年、月半分しか影やれないけど、いずれは正式にハンサさんから俺が影の役を引き継ぐよ」

「正式に影を継ぐ……？」

「ああ」

アーメットは明るく笑った。太陽を思わせる、健康的な笑みだ。

「俺達、どっちかが死ぬまでずっと一緒だ。よろしくな、ガジュルシン。次代の国王のおまえを、俺がバッチリ守ってやるぜ」

感激のあまり抱きついてきた義兄に、アーメットはケラケラと笑った、『変わんないなあ、クールな優等生ぶりっこしてるくせに泣き虫なんだから』と。

その抱擁はあなたが思っているのとは違う衝動からきたものですよと思いつつ口を閉ざしていたナーダの背後に、よく知った気配が現われる。

「これで、ガジュルシン様の出家願望も無くなろう。影を持てるのは俗人のみ。まあ、昔、大僧正候補のくせに影どころか忍者軍団を抱えておった、不信心な男もおったが……そやつは例外中の例外じゃからな」

「ジライ……」

振り返れば、忍者頭でありアーメットの父である黒装束の忍が佇んでいた。

「アーメットが側におれば、アーメットに好かれたい一心で良き国王となる努力もなさるだろう。これでラジャラ王朝の未来は磐石」

「……ガジュルシンの恋心、知っていたのですか。さすが忍ですね」

「忍でなくともわかる。我(われ)が外より王宮に戻る度に、アーメットはどうしている？　怪我はしてないか？　病気ではないか？　寂しがってないか？　手紙を届けてくれまいか？　と、つきまとわられておったのだ。かなりお小さい頃よりガジュルシン様は、アレがお好きなようだ」

「あなたの子が好きだなんて……血のなせる技ですかねえ……。でも、ジライ、ガジュルシン、私そっくりで女性にまったく欲望を感じないようです。結婚となったらさすがに抵抗を示すのではないですか？」

「手はある。妃を娶っていただいた上で我(われ)が房中の手伝いをしてさしあげてもよいし……不能という事にして生涯、独身ですごしてもらっても構わぬ」

「え？　良いんですか？　王国の跡取りは？」

「ガジャクティン様とガジュルヤーマ様に励んでもらえばよいではないか。王弟の子供なれば、王位を継ぐに何ら問題はない」
「なるほど……」
「む？　何だ、不満なのか？」
「いいえ。ちょっと羨ましく思っただけです。私も義弟の子供を養子にもらえればウシャスを妃にしなくて良かったなあって思ったのですが……」
　ナーダは糸目を更に細め、ジライの息子を抱きしめている子供へと視線を向けた。
「そうなっていたらあの子はあそこに居なかったのですから……苦行をのりこえて良かったのかもしれませんねえ」
　ジライに親子そろってよいようにあしらわれている気もしたが……現在、親子共に幸福なのだ。それで構わないではないかと、ナーダは静かに笑った。

　それと同じ頃……
「いいことラーニャ、女性の装いに大切なのは、ありのままの自分をより美しく見せる工夫をする事よ。美しくなる為の努力もむろん怠ってはいけないけれど、その時その時の自分を愛し、美しさを引き出していかなければダメよ」
　侍女にラーニャの採寸をさせながら、セレスは言葉を続ける。
「あなたは今、ぴっちぴちの十五歳。青い果実のようなスレンダーな体には、色気過多になってしまって中年女性にはない禁欲的な美しさがあるのよ。そこを利用しないって手はないわ」
「でも……」
　ラーニャはがっくり頭を垂れている。もう涙は乾いていたが、目元はまだ赤いままだ。
「こんな子供っぽい体型じゃ、セクシーな女王様にはなれないわ」
「馬鹿ね。既製品を着るから悪いのよ。これから毎年、あなたの成

長に合わせて、あなたの個性を引き出す女王様衣装を作ってあげるわ」
「本当？」
「ええ、本当。私お抱えのＳＭ衣装専門のデザイナーに作らせるわ」
「ありがとう、お母様！」
「でも、まだプレイは駄目よ。あなた、まだ、暴力と愛の違いがわかってないから、ファッションとして自室で着るだけよ、いいわね？」
「え～～～～」
「あら、嫌？、なら、女王様衣装の特注やめましょうか？」
「……やめちゃ嫌」
セレスはにっこりと微笑み、娘をやさしく撫でた。
「いい事、教えてあげる、ラーニャ」
「なぁに、お母様？」
ラーニャの耳元にセレスは顔を近づける。
「ナーダはね、凹凸の激しい体型の女性は好きじゃないの」
「え？」
セレスはうふふと悪戯っぽく笑う。
「ウシャスを見ればわかるでしょ？　慎み深くて信仰心に篤くて……胸とお尻が小さくて腰のくびれがあまりない幼児体型だから、ウシャスを妃に選んだのよ。ラーニャ、自信を持ちなさい、あなた、ナーダの好みの体型なのよ」
ラーニャの顔がパーッと輝く。
「ナーダお父様、痩せ型が好みなの？」
「そ。でも、不健康にやつれてるのはダメ。適度に筋肉がついていてひきしまった体が好きなのよ」
ラーニャは拳を握り締めた。
それならいける！
セレスから武術をたたきこまれた、若くしなやかでスレンダーな体。

これでフィットした女王様の衣装さえ手に入れば……
念願の……
夢にまで見た……

ナーダお父様とのＳＭプレイができるかも！

その為にも、お母様のご機嫌をとらなくっちゃ！
私がもう大人で愛があるから鞭をふるいたいと思ってるって、お母様にわかってもらうのよ！
初のＳＭプレイはお父様とって心に決めてるんだから！
勇者のスペアだからご褒美に処女を与えてあげる事はできないけど、その一歩手前の事まではお父様とできるかも！

「これから胸とお尻がぐんぐん大きくなったらお色気で迫ればいいんだし、そのままならその体型の美しさを際立たせる衣装で迫ればいいのよ。ラーニャ、美しくなれるように、日々、お母様と一緒に努力しましょうね」
「はい、お母様」

女王様衣装を手に入れたらラーニャは、きっとナーダを誘惑するだろう。ダメと禁じても親の目を盗んでこっそりと……。
けれども、女嫌いのナーダが、ラーニャを相手にするはずがない。
煽るだけ煽ったところで困るのは、迫られるナーダだけ。ならば、この機会に、ナーダをダシに、ラーニャに女性としての嗜みを教えようとセレスは目論んでいた。

「お母様、私、革は黒と赤が欲しいの、ボディスーツとビキニタイプと二種類づつ」
「ビキニよりコルセットの方がいいわよ。若々しい肉体はあまり露出しすぎない方がいいの、奴隷達の、その下を覗きたいって願望を煽ってやらなきゃ」
「でも、地味じゃない？」
「大丈夫。その分、脚のラインを綺麗に強調すればいいのよ。ね、ラーニャ、ヒールの高さなんだけど、八センチはあった方がいいと思うの。それから徐々に……」

ノンケの義弟への王子の恋と、男色家の義父への王女（しかも女王様変身願望付き）の恋。
インディラ王家の未来は、あいかわらず明るそうだった……

そして、三年後、更にややこしいトラブルがインディラ王家を見舞うのだった……

もしかして超好み？　夢見る十五歳！（後書き）

次回から新章『姫勇者と従者達』に入ります！

最初の話は、『ど～んと私に任せなさい！　旅立ちの十八歳！』で。

人物紹介しちゃうわ！　聞きなさい！（前書き）

「ど～んと私に任せなさい！　旅立ちの十八歳！」直前までの人物紹介です。

前章には出番のなかった前作の登場人物も、今後関わってくる方は、紹介しております。

人物紹介しちゃうわ！　聞きなさい！

第一王女ラーニャ
十八歳。黒髪、茶の瞳。黙って立っていればたいへん美しい姫君だが、
口より先に手が出る暴力娘で、小柄、残念な胸の持ち主。
ナーダとセレスの娘という事になっているが、本当は
ジライとセレスの娘。女王様と奴隷達という特殊環境な後宮で育った為、
女王様によるＳＭこそ究極の愛の形と思い込んでいる。
包容力あふれる義父ナーダに片思いをしており、何度かＳＭプレイを
もちかけ誘惑しているが、やんわりと断られている。
セレス直伝の騎士教育によって両手剣は得意。
勇者に何かあった時のスペアとして勇者教育を施されている。

忍者アーメット
ラーニャの弟。十六歳。第二王子だったが、十歳の時、病死という事にされ
インディラ忍者の隠れ里で父ジライの指導の下、本格的な忍者修行に入る。
淡い金髪に青の瞳。忍者のわりに常識的で道徳的。
おおらかで明るく、ちょっと鈍感。健康美あふれる美形。
非常識な父親のせいで、何度もひどい目にあっている。
ガジュルシンの影をつとめている。

第一王子ガジュルシン

ラーニャの義弟。十六歳。アーメットより一ヶ月月上。
十歳にして帝王学まで修めた天才。インディラ寺院での修行により神聖魔法・回復魔法・強化魔法・弱体魔法等が使える。
ナーダとウシャスの子供で、母親譲りの繊細な美貌の持ち主。
非常に気が弱く病がちな為に劣等感が強く、自分とは正反対の義弟アーメットに惹かれている。が、気持ちを伝えられない。
生まれつき女性に興味のない真性ホモ。

第三王子ガジャクティン
ラーニャの義弟。十四歳。勇者おたく。
ガジュルシンの実弟。
幼い頃から勇者に憧れており、従者となるべく日々努力している。
父親譲りの顔。糸目。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

十二代目国王ナーダ
もとインディラ教大僧正候補。四十九歳。セレスの従者だった。
父である先王の仇を討つ為に還俗した後、周囲によって無理やり国王の座につかされてしまう。名君として民より慕われている。
女嫌いの男色家だが、セレスとジライの協力により三児の父となった。
鍛錬を続け、武闘僧時代に築いた肉体を維持している。
神聖魔法・回復魔法・強化魔法・弱体魔法が使える。
忍者ジライを未だに深く愛している。ラーニャの恋心にも気づいているが、

あくまで父親として彼女に接している。

忍者ジライ
インディラ国王宮付き忍者の忍者頭。四十四歳。
東国の忍の里一の忍者だったが抜け忍となってセレスの従者となり、後に
彼女の人生の伴侶となる。女王様趣味。表面はSで、根はM。
『白き狂い獅子』の異名を持つ冷静沈着・非情な忍だが、
セレス女王様とラーニャへの愛の為に、よく非常識な暴走をする。
虐待していると誤解されがちだが、アーメットにも深い愛情を抱いており、
自分の跡取りとすべく教育している。白髪、白い肌の白子。美形。
『ムラクモ』の振るい手。『ムラクモ』を『小夜時雨（さよしぐれ）』と呼んでいる。

もと女勇者セレス
ナーダの第一夫人。三十七歳。
愛をもって鞭をふるう女王様。ジライもナーダもウシャスも彼女の奴隷。
『虹の小剣』を結婚祝いにカルヴェルから譲り受けている。
西国人にしては小柄。金髪碧眼。セクシー・ダイナマイトの肉体。
強い感情や思いに触れた事がきっかけで、その者の心を我が事のように感じる、
共感能力者（エンパシー）でもある。

第二夫人ウシャス
ナーダの妃。M奴隷。セレスとジライとナーダをご主人様として

慕っている。
ガジュルシン・ガジャクティン・ガジュヤーマの母。
貞淑で子供思いの、良き妻、良き母。

第四王子ガジュヤーマ
ラーニャの義弟。八歳。ガジュルシンの実弟。

学者リオネル
勇者のスペアであるラーニャの教育係。勇者グスタフの家庭教師でもあった。
ラーニャの祖父ヤンセンに乞われ、インディラ王宮にやって来ていた。
木製の定規で机を叩くのが癖。勇者おたく。鼻眼鏡着用。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

大魔術師カルヴェル
セレスの神聖魔法の師。十二代目勇者ランツ、十三代目勇者セレスの
従者となって二度も大魔王を倒した英雄。ランツとは義兄弟。
当代随一の大魔術師（魔術師協会には所属していない）。
攻撃魔法、強化魔法、弱体魔法、神聖魔法の他、暗黒魔法（邪法）まで使える。
しかし、回復魔法だけは高位魔法を使えない。

赤毛の戦士アジャン
もとセレスの従者。本名アジスタスフニル。四十六歳。
アジ族に伝わる両手剣『極光の剣』の使い手だった。

格闘家シャオロン
もとセレスの従者。三十三歳。
右手に『龍の爪』を装備して戦う。

勇者グスタフ
セレスの姉の子供。ラーニャの従兄弟。二十四歳。侯爵家当主。
『勇者の剣』より認められた『今世の勇者』。

ヤンセン
セレスの父。ラーニャの祖父。婿養子。
巡回裁判官を勇退し、爵位もグスタフに譲り、悠々自適の生活を送っている。

勇者ランツ
セレスの祖父。ラーニャの曾祖父。三十四年前に死亡。
カルヴェル、ナラカとは義兄弟の契りを結んでいた。
豪胆放埒な勇者らしからぬ男だったが、『勇者の剣』から最も愛された、
勇者史上最強の勇者と謡われている。

僧侶ナラカ

先々代勇者ランツの従者。ナーダの伯父。もと大僧正候補。
僧侶でありながら有髪で、飲む打つ買うを好んだ不良坊主。
大魔王討伐時に、邪法の魔法陣に囚われ異界に閉じ込められていた。
現在、消息不明。

老忍者ガルバ
僧侶ナラカ、ナーダの母、ナーダに仕えた忠義の部下。
ナラカとナーダを『御身様』と呼び慕い、誠意をもって仕えていた。
ナーダを国王に即位させた後、臓腑の病で死亡。

忍者ムジャ
王宮付き忍者の副頭領。ガルバ子飼いの部下だった。
非常識なジライに振り回されている。平凡な顔立ちの目立たない男。

インディラの大僧正
ナーダが尊敬し慕っている老僧。カルヴェルの茶飲み友達の一人。
インディラの総本山にいる。

ハリの部族王ハリハールブダン
ケルティの上皇。『極光の剣』と対になる『知恵の指輪』の所有者。
カルヴェルの魔法の弟子。

ど〜んと私に任せなさい！　旅立ちの十八歳！

天蓋付き玉座へと続く赤い絨毯の道を、私は進む。
後ろに従者となる二人の男を伴って。
ずらりと立ち並ぶ大臣や名門貴族達が、みんな私を見ている。
今日の私は完璧だ。
お母様から譲っていただいた白銀の神聖鎧をまとい、これも又、お母様から譲っていただいた『虹の小剣』を腰に差し、腰までの黒髪をなびかせ、私は堂々と歩く。
その洗練された騎士の姿に、お母様譲りの美貌（と、言ってもそっくりじゃないんだけど、髪は黒いし、目は茶色いし、私の鼻や口の形は変態忍者に似ている）。
私の男装の美しさに溜息をつく者、みとれる者、頬を染める者、続出中。
ま、当然よね。
ピチピチの十八歳の美貌の姫君なんだから。
インディラ王家では、姫は後宮から出て来ない。表には顔を出さぬまま十三〜五才になったら他国に嫁ぐか家臣の貴族に降嫁するのが、普通だ。
でも、私は違う。
理由あって、巫女のように清らかな身のまま、後宮でこの年まで過ごしてきたのだ。
それは……
今日という日を迎える為だったのだ！　と、今、確信している。
今日の私は主役！
満座の注目を集めているのは、この私！
そして、玉座で待つ方も……
この私を誇らしく思ってくださっているはず！
私はお母様から教わった所作で、玉座の前に優雅に跪いた。

「ラジャラ王朝、第一王女ラーニャ。これより勇者となるべく、エウロペに向かいます」
玉座の方が鷹揚に頷かれる。
「あなたの勇者としての働きに期待していますよ、ラーニャ。『勇者の剣』と共に今世をケルベゾールドから守ってください」
あああああ、よく通る綺麗なお声。男性的なのに甘い響きがあって、ちょっとしっとりとしたような感じで。耳にするだけでぞくぞくしちゃう。
こういう公式の場で聞くと、その素晴らしさも一層、際立つわ。
「ご期待にそえるよう務めます」
ご尊顔を拝したいのを必死に我慢し、形式通り頭を下げていた。
「あなたがこの王宮に無事に戻って来るまで、毎日、インディラ神に祈りを捧げましょう。私の心は常にあなたと共にあります」

お父様〜〜〜〜〜〜
常に共にあるだなんて、そんなぁ……
夢みたい、もぉ。
離れて暮らさなきゃいけないのはつらいけれど……
お父様の為に、ラーニャは旅立ちます！
この世界を、いいえ、お父様を私が必ず守ってさしあげますわ！

＊　＊　＊　＊　＊

おととしの事だった。
離宮で家庭教師のリオネルと不毛な授業をしていた私は、後宮のお母様に急に呼び出された。勇者の勉強の時間にわざわざ呼び寄せるのだから、何かあったのだろうとはすぐにわかった。

お母様の部屋には、ナーダお父様とジライも居た。三人が三人とも深刻な顔をしていた。

何かとてつもない事が起きたのではないかという予感がした。

「落ち着いて聞いてください、ラーニャ」

お父様は静かにおっしゃった。でも、普段よりオクターブが上がっている。これは内心の動揺を隠している時のお声だ。

「さきほど、インディラ寺院に託宣が下りました。おそらく、他の神殿でも同じお告げがあった事でしょう……」

お父様のほっそりとした目が私を見つめる。いつ見ても綺麗な青い瞳。

「大魔王ケルベゾールドが十四回度目の降臨をしました……ラーニャ、あなたが勇者として働く時が来たのです」

初代ケルベゾールドが初代勇者ラグヴェイ様に倒されてから……七百三十、えっと、何年だっけ？　まあ、だいたいそれぐらい。

魔界の王ケルベゾールドは、数十年の時をおいて今世に十三回も現われてきた。憑代の体に宿り今世に現われた魔界の王は、この世の支配者となれぬまま、十三回も勇者（ラグヴェイの子孫。エウロペの侯爵家の者）に討たれて負けている。

イメージ的には大魔王は、弱っちいやられ役だ。この世に降臨して、たいてい一～二年で、勇者に葬られてるんだもの、しかも、十三回も。

でも、実際は、相当、強いらしい。魔界にあれば神様と同じくらい強くて、今世に召喚された場合は憑代の器の大きさによって能力を制限されてしまうものの存在する時が長ければ長いほど魔界での本来の力を取り戻していくのだそう。

ケルベゾールドが今世に存在するってだけで、魔族が活性化しちゃって、この世に魔族がいっぱい現われるようになるという問題も

ある。
大魔王を葬れる唯一の武器『勇者の剣』を持つ勇者は、この世の希望の光なのだ。大魔王ケルベゾールドが今世に現われたら、憑代を倒し、魔界の王をあるべき世界へ帰すのが勇者の義務なのだ。

私のお母様は十三回目に今世に降臨したケルベゾールドを葬った、十三代目勇者。
現在は、『勇者の剣』はお母様の甥、私の従兄弟グスタフ兄様に託され、兄様が『今世の勇者』となっているのだけれども……

先週、エウロペの国王陛下の書状を手に、エウロペからの使者が移動魔法で王宮に現われた。
勇者が不治の病に伏した事を知らせる急使だった。

先々代の勇者十二代目ランツ様、つまり、私の曾おじい様なんだけど、曾おじい様のお兄様エミール様がかかられたのと同じ病を発症したのだそうだ。
昔、お兄様のエミール様がこの病にかかられたから、ランツ曾おじい様はお兄様に代わって『大魔王討伐』の旅に出られたのだ。
手足の指先から痺れが始まり、やがてその痺れが完全な麻痺と変わり、それと同時に黒い模様が麻痺した箇所に浮かび上がる。指先から手首に足首へ腕に脚へと麻痺が広がり、やがて首すら動かせなくなり、全身に黒い模様が広がってそのまま死に至るのだそうだ。
治癒方法不明の奇病『エミール病』。発症者はグスタフ兄様が二人目だ。今世の勇者しかかかった者がいないからエウロペでは『勇者病』と言われ始めているとかいないとか……
呪いの一種と思われるものの、エミール様の時はお祓いができず、

発症後、一年と少しでエミール様は他界されている。
グスタフ兄様はまだ指の半ばまでしか麻痺は進んでいないそうだが、波紋のような黒い模様が指先に浮かんでいるから、間違いなく『エミール病』なのだそうだ。
エウロペの侯爵家には今、ラグヴェィ様の血を引く男子はグスタフ兄様の他には、グスタフ兄様の子供ヴィクトルしか居ない。ヴィクトルはまだ四才。大剣を振るえる年齢ではない。

今週末にも私はエウロペへ赴くはずだった。
グスタフ兄様に代わり『今世の勇者』となる為に。
『勇者の剣』を仮に預かる為に。
『勇者の剣』を扱える適齢の人間はグスタフ兄様を除けば、私しか居ない……と、いう事になっているから。

その準備として、先週から今週にかけて、お母様やリオネルから『勇者の勉強』の復習をさせられていたのだ。
エウロペ語もエウロペの貴族の立ち居振る舞いも完璧だと思う。
でも、私の『勇者』っぷりに、リオネルはかなり不満なようで、興奮のあまり定規を五本も折りながら私にお勉強をつけてくれていた。
今の私では、国王陛下の前に出すのは恥ずかしいレベルなのだそうだ。
大剣の扱いだって、弓だって、体術だって、馬術だって、お母様直伝の腕前なのに！
あんたの心配なんか無用よ！　こ～～～んな美しい姫君が『今世の勇者』になりに行けば、エウロペの王宮中の人間が諸手をあげて迎えてくれるわよ！
リオネルにもムカつきまくりだったけれど、義弟のガジャクティ

ンにはもっとムカついた。
私とリオネルのお勉強に、いまいましいことに何度も立ち会ってくれちゃって……しかも、勇者おたく同士気があうからってリオネルがガジャクティンをやたら誉めちぎるもんだから、あいつ、頭（ず）にのって……ああ、もう思い出すだけでムカムカする！　まあ、それはともかく……

今、お父様もお母様もジライも深刻な顔をしている。
もしもの時を考えて、三人とも準備を進めてくれていたけれど、もしもの時が来て欲しくなかったのだろう、多分。
私は、みんなの、かわいい姫だから。

でも、先週からエウロペへ旅立つ覚悟も準備もできていた。
この王宮を離れなきゃいけないのが、ものすごぉ～～～～く辛いんだけど、お父様の期待に応える為だもの、仕方ないから我慢して行ってこようとそう覚悟を決めていた。
その遠出がいきなり、『大魔王ケルベゾールド討伐』という実戦つきになったっだけだ、どうという事はない。

「わかりました、お父様、エウロペに赴き、『勇者の剣』を預かったら、そのまま大魔王討伐の旅に出立します」
「頼もしいですね……」
お父様がほっそりとした目を更に細められ、微笑を浮かべられる。
ああ～ん、そういう憂いに満ちたお顔も素敵。
「先程、大僧正様と心話でお話をいたしました。インディラ寺院一の実力の者をあなたの従者に、とお願いしておきました」

「ありがとうございます、お父様」
「ラーニャ、勇者となるあなたに渡したいものがいくつかあるわ……まずは鎧から……」
私の目の前に白銀の鎧が置かれる。お母様の命令でジライが運んで来たのだ。手の指先から足の指先まで全身を覆う、神聖防具だ。エウロペ神の祝福によって、鋼鉄よりも硬く、邪悪を退け魔力を防ぎ、そして絹のように軽く着衣者に暑さ寒さを感じさせない優秀な鎧だと聞いている。
魔法の呪文によって着脱可能な鎧の扱いについて、簡単な説明を受けた。
「つづいて武器」
お母様は、手づから、綺麗な鞘におさまった小剣を渡してくださった。空気のように軽く、剣身の清らかな光で邪悪を斬れる、聖なる武器だ。
鎧も小剣もお母様が、お師匠様の大魔術師カルヴェル様からいただいたモノだ。
でも、これは……
「これは受け取れないわ」
『虹の小剣』の鞘を持ち、柄をお母様へと向けた。
「お母様は先代勇者ですもの。魔族は未だにお母様のお命を狙っているのでしょ？　この聖なる武器は、お母様がお持ちになっているべきだわ」
「ありがとう、ラーニャ。でも、私は大丈夫よ」
お母様はにっこりと微笑まれた。
「この王宮は、強固な魔封じの結界で何重にも守られているもの。この中にいる限り、私は安全よ。心配なのは、むしろ、あなたよ。あなたは勇者として、魔族や大魔王教徒と戦わなければいけないのですもの」
お母様は、小剣を持つ私の手をそっと握られた。
「本当はついていってあなたを守ってあげたい。でも、今の私はラ

ジャラ王朝第一夫人。立場上、そういうわけにもいかないもの。これはあなたを守ってあげられない、私の代わりよ。この聖なる武器があなたを魔族から守ってくれるわ、持って行ってちょうだい」

「あら、武器なら『勇者の剣』があるわ。グスタフ兄様からお借りするんだもの。別に、これはいらないんじゃ……」

と、言うと、お父様とお母様とジライは複雑な表情となって顔を見合わせあった。

何か……

三人とも困ったような顔をしている……？

「……ともかく、それをお母様と思って持ってってちょうだい。いいわね？」

そこまで言われたら持っていかないわけにはいかない。

「はい。お母様、大切にいたします」

「そして、最後の贈り物……」

コホンと咳払いをしてから、お母様が目で合図を送る。ジライは頷きを返し、少し進み出て私の前に跪いた。

「セレス様と国王陛下の命により、本日より、このジライ、ラーニャ様の従者を務めさせていただきます。ラーニャ様の旅をお助けし、ラーニャ様が本懐を遂げられるその日まで命に代えても女勇者ラーニャ様をお守りいたします所存。どうぞ、私を従者とお認めください」

えええええ～～～～～～っ！

ジライが私の従者にぃ？

思わず本音が出てしまった。

「……いらない」

それから、ちょっとした騒動になった。

「そんなぁ、ラーニャ様」と、泣いて私の足元にすがるジライ。

「お慈悲でございます、どうかどうか私を従者にぃ～」

と、うるさく媚びまくる。蹴っ飛ばしてもまとわりついてくるんだから、本当、うっとーしい。

「そう言わず従者として伴ってあげてください。ジライは今も尚、インディラ一(いち)の忍者です。あなたの旅の助けになりますよ。聖なる武器『ムラクモ』の使い手ですし」

と、横からフォローをするナーダお父様。

「普段、ベタベタの甘々の親バカ姿しか見せないから、こうなるのよ。本当、馬鹿よね」

と、コロコロと笑って、ジライを嘲るお母様。

結局、お父様とジライに押し切られ、私は嫌々ながらだけれど、ジライを従者と認めた。

父親同伴の勇者なんて……格好悪いなあ……

まあ、公式的には私はナーダお父様の娘となっているから、ジライは赤の他人ってことになってるんだけど……

「なんで、あんたまで私の従者なのよ！」

謁見の間で、諸公に勇者姿をお披露目する当日、つまり、今日、控え室に入った私は意外な事実を知らされ、目の前が怒りの余り真っ赤になった。お父様が決めた私の従者は二人いたのだ。

変態忍者を従者にするだけでも、ものすごぉぉぉぉ～～く嫌だったのに、その上……

こんなクソ生意気なガキを伴わなきゃいけないなんて～～～～！

「そんな無礼な口をきくなんて、馬鹿じゃないの？　僕がいないと困るのはラーニャじゃないか」

軽蔑しきった顔で、私を見下ろしてくる義理の弟。上と横にやたら広がって、すっごく無駄に筋肉をつけてデカくなっている。

ラジャラ王朝第三王子ガジャクティン。

糸目の澄ました顔の嫌な奴。その顔も姿もお父様のお若い頃にそっくりだって言う人が多いけど、絶対、違う。お父様はこんな浅薄な顔をしていない。重厚さのかけらもない薄っぺらな若者とお父様を比較するなんて冒涜だわ！

「僕はね、ラーニャが恥をかかないように従者として一緒に行ってあげるんだよ。お父様から是非にと頼まれたんだから」

「嘘」

「嘘じゃないよ。僕は優秀だからね、頼りにされてるんだ」

「あんたなんか何の役にもたたないわよ！」

ガジャクティンは口の端だけ歪めて笑った。

「そうかな？　僕は、とても熱心にこの年まで武術にも勉学にも励んできたからね。勇者の従者になるべく、きちんと準備を進めてきたんだ。『勇者の血』しか長所がないラーニャよりは、よっぽど役に立つと思うよ」

「そうですよ、ラーニャ様」と、横からリオネルが口をそえる。

「ガジャクティン様はわずか十四歳で、大剣、片手剣、槍で、当代名人より印可をいただいている猛者。その上で、歴代勇者の旅の全てを、魔族の知識を、各国の情勢を、そらんじられるほど暗記なさっておいでの聡明さ。それに、ラーニャ様と違って世界各国の言語に堪能で各地の風習についてもたいへんお詳しい。ラーニャ様の旅をきっと助けてくださいますよ」

おだてられて得意そうにハハハと笑う馬鹿と、鼻眼鏡を直す目の

腐った馬鹿。
　ラーニャ様と違ってって……いくら何でもひどくない、リオネル。他の子と比較されて馬鹿にされると、子供ってグレるのよ！
「ガジャクティン様の旅立ちに立ち会えまして、喜ばしく思っております。どうぞ、従者としての使命をまっとうください。あなた様なら、歴代従者の英雄の方々に負けぬご立派な働きをなさるでしょう」
「うん。ありがとう。リオネル。おまえに師事できて本当に良かったと思う。おまえの勇者哲学は本当に素晴らしかった。機会があったら、又、インディラに遊びに来ておくれ」
　W勇者おたくはつるむと、うるさいしうっとーしい。互いに称えあうとか、気色悪すぎ。この馬鹿コンビを見ないですむようになるかと思うと、本当、せーせーする。
　諸公の前でお父様にご挨拶した後、私は、宮廷魔法使いの移動魔法でエウロペへ向かう。従者のジライとガジャクティン、それにリオネルと共に。
　共にエウロペへ向かうけど、リオネルは従者になるわけではない。勇者のスペアである私の教育担当官だった彼は、私が勇者として旅立つにあたり、お役御免となったのだ。
　長年の厚情に感謝したお父様がエウロペの自宅に帰る彼を共に送るように宮廷魔法使いに命じた……と、いう事で一緒にエウロペへ行く事になっている。表向きは。
　けれども、実際はリオネルはオマケだ。もう一人エウロペに送りたい人間がいるから、リオネルの家来に変装させ、私達に同行させているのだ。
　この王宮には遠距離の移動魔法が可能な宮廷魔法使いが五人いる。でも、魔力消耗の激しい移動魔法は、普通、一度、使うと術師の魔力をほぼ奪ってしまう。再び魔法使いとして使い物になるまで魔力が回復するまで数日から一週間近くかかってしまう。ケルベゾールドが復活した今、いつ、移動魔法が必要となるかわからない。分散

せず、いっぺんに送りたいってのもわかるけれど……
私はリオネルの家来の変装をしている者を、横目でジロリと睨みつけ、小声で話しかけた。エウロペ人の中年の執事……の外見だ。
「あんたも、私の従者になる気？」
その者は大袈裟に肩をすくめてみせ、小声で答えた。
「な、わけねえだろ。俺が表に出るもんか。俺は完全な影役だよ。ナーダ父さんと忍者頭様の命令で、陰ながらラーニャ様をお守りするのさ」
と、答えた声は間違いなく弟のアーメットのものだった。ジライもそうだけど、本当、忍者ってうまくバケるわよね。エウロペ人の中年のおっさんにしか見えないわ。
「いいの？　あんた、ガジュルシンの影のくせに、私についてきて」
「第一王子ガジュルシン様の影役は、おととい正式に降ろされたよ」
「え？」
中年執事は溜息をついた。
「ケルベゾールドが復活した以上、女勇者様の為に働く事を優先せよ、とさ」
おもしろくなさそうにアーメットが言う。望んで影を退いたのではないようだ。でも、
「ガジュルシン……納得した？」
気の弱いガジュルシンは、一人では表の王宮へ行けない。臣下の貴族達に話しかけられるのが怖いのだそうだ。最近は、影からアーメットが守護してくれている事を心の支えに、大臣達に返事をする事ぐらいはできるようになったそうだけれども……
影のアーメットがいなくなったら、又、後宮にお籠もりに逆戻りではないかしら。
「それがさ……おととい、部屋から出てこないんだよ、あいつ」
あらま。後宮どころか、自室に籠もってるの？　完全なひきこもり？
「ずっと、食事にも水にもまったく手をつけてないんだ。影に復帰

したハンサさんに部屋の中の様子を聞いたんだけど……あいつ、寝台でめそめそしてるらしい……本当に、いつまでもガキで困るよな」

アーメットの口調には苛立ちがこめられていた。ガジュルシンをこの国の国王にふさわしい男にしたいと思っているアーメットには、内気で闘争心のないガジュルシンは歯がゆくてたまらないのだろう。

「しばらく会えなくなるんだから、別れの挨拶ぐらい来いってのの。ったく」

しばらく会えなくなる……その言葉に胸がズキンと痛む。

私がインディラに戻れるのは、いつだろう。

数ヶ月でケルベゾールドを倒した勇者様も居たはずだ。でも、たしか討伐までの平均年数は二年ぐらい。お母様の時も、二年かかった。

少しでも早く……インディラに帰りたい。その為には、多少、無茶したっていい。さっさとケルベゾールドを倒して、愛する方の元へ戻ろう！

私はそう思って……いた。

＊　＊　＊　＊　＊

「ラーニャ、久しぶりだね」

そう言って笑いかけてくれたのは、金の巻き毛のハンサムな男性だった。綺麗にカールがかかったお髭も素敵。

肘掛け椅子に身を預けるように座っておられるけれども、お体は騎士にふさわしい逞しさで、腕も脚も太い。

この方が……グスタフ兄様？

びっくりした。前にお会いした時は、ほっそりとした優しそうなお兄さんだったのに……

「お久しぶりです、グスタフ兄様」

グスタフ兄様は十三歳で、私は七つだった。十年以上前だものね。あの時、『勇者の剣』を継いだばかりだった兄様も、今じゃ爵位も継いだし、一児のパパ。昔通りの姿なわけないわ。

私とガジャクティンとジライ、それにリオネルとアーメトは宮廷魔法使いの移動魔法で西国エウロペの首都クリサニアの勇者の家に着いていた。馬で移動したら三ヶ月ぐらいかかる距離を一瞬で移動できるんだから、魔法って便利よね。跳んでった先は侯爵家の玄関ホールで、すぐに召使がグスタフ兄様の所に案内してくれた。

グスタフ兄様はサンルームで日にあたっていらっしゃった。

一見、とても健康そうでお元気そうなのだけれども、両手の指先には黒い模様があった。麻痺しているのはまだ両手両足の指先だけなのだそうだけれども、全身がひどくだるいのだそうだ。

王族に対し座ったままの非礼をお許しくださいとグスタフ兄様がおっしゃると、ガジャクティンはとんでもないと恐縮し、ご本復をお祈りしますとか何とか妙～～～～にかしこまっていた。

何、それ？　って感じ。何しゃちほこばってるのよ！　頬を赤く染めちゃって、不気味！　現勇者に会って感激ぃ？　なら、これから勇者になる私もちょっとは尊敬したらどうなのよ！　と、ムッときた。

リオネルは涙ぐんでいた。グスタフ兄様も、昔、リオネルの教え子だった。私と違って優秀な生徒だったらしい。リオネルは奇病に倒れたグスタフ兄様を慰め励ます言葉をかけ、奇病の治療法を研究すると言った。

ジライは現勇者に対し礼儀他正しく挨拶した。が、それだけ。グスタフ兄様に関心がないのだ。

しばらくしたら、ヤンセンおじい様とアリシア伯母様がいらっしゃった。現在二人目を妊娠中のグスタフ兄様の妻アンヌ様とお子様のヴィクトルは、今、王宮にいるそうだ。

と、いうか王宮で暮らしているそうだ。大魔王復活のお告げがあったと同時にヴィクトルは王宮にひきとられ、魔術師協会の精鋭達

が張る完璧な防御魔法陣の中で育てられる事になったのだ、お母さんのアンヌ様と共に。私が大魔王を倒すまで。

グスタフ兄様は呪われた身なので、王宮で共に暮らせないのだそうだ。その呪いが憑依型の魔族の仕業ならば、魔そのものを王宮の結界の内に招き入れてしまう事になるからという理由らしい。

ムッとした。グスタフ兄様の余命は一年と少ししかないかもしれないのに、その最後の一年を家族と過ごさせないってどういう事？

勇者の血筋が大切なのはわかるけど、妻と子を王宮に軟禁しちゃうなんて、変よ。その保護の仕方って人格を無視してないかしら？

『勇者の剣』の使い手がいなくなったらこの世は滅びるったって、人があってこそでしょ。使い手が人間として幸福に暮らせない世界って間違ってると思う。

召使の担ぐ輿にのってグスタフ兄様は自室へと戻る。私達はその後をついて行った。

兄様の寝台のそばには……

長い長いテーブルがあり……

その上には、柄頭をベッドに向ける形で、人の身長ほどもある巨大な両手剣が横たわっていた。

エウロペ神から初代勇者ラグヴェイ様が賜った、聖なる武器。

『勇者の剣』。

華美な装飾など一切ない、実用的な鞘。両手で握りやすい長さの柄。

寝台に仰向けになった兄様が、私に対し頷いてみせる。

この剣を私に託すと……

今世の勇者の任を任せると、おっしゃっているのだ。

私は兄様に対し一礼してから、向き直り、『勇者の剣』へと手を伸ばした。

この剣を手にした時から誕生するのだ、十四代目勇者となる者が。

女勇者……ううん、姫なんだから姫勇者ね、姫勇者ラーニャの伝説がここから！
私は柄を握り締めた。
お父様、見ていて。
ラーニャはやるわ。
必ず、あなたのいるこの世界を守り通してみせるわ！

と、意気揚々と『勇者の剣』を手に持とうとしたんだけれど……

突然、脚が四本とも折れ、テーブルは床に沈んだ。
『勇者の剣』を握っていた私も、巻き込まれ、そのまんま床に倒れこむ。

「痛っ……」
私は剣を手に立ち上がろうとして……愕然とした。

「何、これ？」

『勇者の剣』はテーブルを突き破り……床にめりこんでいた。
その柄を握って持ちあげようとしたのだが、ぴくりも動かない。
その重さったら、半端じゃない。根の生えた太い大木を相手にしてる気分。まったく微動だにしない。
茫然と私は周囲を見渡す。
グスタフ兄様とヤンセンおじい様は困惑した顔で視線をかわしあい、アリシア伯母様はいかにも同情してますって顔で私を見つめて

いた。ガジャクティンとリオネルは『あ～あ、やっぱり』と言いたそうな呆れ顔で、アーメットは因縁つけられてはたまらんって顔でそっぽを向いていた。

で、ジライは……

「しょせんは剣……ラーニャ様の高潔さがわからない阿呆でも仕方ありませぬ」

と、言って慰めるように肩を抱いた。とりあえず右拳でジライを殴り飛ばしておいたけど……

これって……どういうこと？

何でこんなに『勇者の剣』が重たいわけ？

私の頭の中は真っ白になった。

威風堂々！　姫勇者誕生！

玉座へと続く赤い絨毯の道を、颯爽と歩く麗人。
その背に負うは『勇者の剣』。大魔王を倒せる唯一の武器。人の身長ほどもある武器を麗人は、苦もなく背負っている。
全身を覆う白銀の鎧は先代勇者セレスより継いだものなのだろう、女性らしい体の線はその鎧の下に隠されてはいたが……武骨な禁欲的な鎧が、一層、彼女の美貌を際立たせていた。
腰までの黒の長髪はゆるやかなウェーブを描いており、彼女が歩く度に柔らかく揺れ動く。姫君にふさわしい白い肌、前を見つめる決意にあふれた茶の瞳、意志の強さを示す眉、それでいて鼻はかわいらしく、口元は上品だ。
女性独特のかよわさなど微塵もない。女騎士と呼ぶにふさわしい凛とした気品にあふれた美女だ。
彼女はその後ろに二人の男を伴っていた。
一人は、ラジャラ王朝第三王子ガジャクティン。まだ十四歳であったが、両手剣・片手剣・槍の名手との評判で、その背は成人男性の平均身長よりも大きく、筋肉隆々たる体格だ。インディラの王族らしくターバンまで白で統一している。
もう一人は、インディラ国王宮付き忍者の頭領ジライ。先代勇者セレスの従者としてケルベゾールドを倒した英雄である。東国風の忍者装束に覆面。彼の腰には聖なる武器『ムラクモ』があった。
絨毯の左右に別れ立ち並ぶ大臣や名門貴族達は、男装の麗人を見つめていた。
皆、目を奪われ、心を奪われていた。
彼女はまるで御伽噺の住人か、過去の英雄譚の女主人公のようだった。
美しく高貴で、浮世離れした清らかさを漂わせている。
玉座の前にたどりつき、跪く麗人。背後の二人も女主人に倣う。

「お初にお目にかかります。ラジャラ王朝第一王女ラーニャにございます。従兄弟のグスタフ卿より『勇者の剣』を預かりました。ケルベゾールドをあるべき世界に帰すその時まで、これを所持し、諸国を彷徨う事をお許しください」

玉座のエウロペ国王は、息を飲んで麗人を見つめていた。

先王である父から『女勇者セレス』の話は聞いていた。その性別ゆえに世に軽んじられたが、セレスは正義を愛しエウロペ国への忠義を尽くす高潔なる聖騎士で、見事、ケルベゾールドを討ち滅ぼしたのだ。

セレスは美貌の女勇者であったと聞いていたが、目の前の者も母親に劣らぬ、いや、もしかしたらそれ以上の美貌の持ち主であろう。

侍従から促され、麗人にみとれていた国王は慌てて口を開いた。

「『勇者の剣』より所持を許された者こそ、『今世の勇者』。その剣を手に、勇者の務めをご立派に果たされよ。あなたの旅の成功の為、予はいかなる助力も惜しまぬとここに誓おう」

「ありがとうございます、国王陛下」

「女勇者ラーニャ殿、いや、高貴なるあなたには姫勇者の称号の方がふさわしいか。姫勇者ラーニャ殿、予は、美しきこの世の救い手のしもべとなろう。何なりとご希望を申されるがよい」

間もなく、伝説が始まるのだ。

十四代目勇者ラーニャの大魔王討伐の旅という名の伝説が。

ユーラティアス大陸の西端エウロペから、彼女は何処へ向かうのか。

この大陸には島国ジャポネを合わせ、十一の国がある。

エウロペの東の隣国はシルクド。砂漠と草原が広がる交易国。

その更に東はシャイナ。東端の大国だ。

シャイナより海を渡れば島国ジャポネへ、南西に移動すればラーニャの出身国インディラへと着く。

インディラの西は砂漠の国ペリシャにトゥルク。
トゥルクの西、エウロペの南には海運国エーゲラが位置する。
北方諸国と呼ばれるケルティ、バンキグ、シベルアは南（北方諸国以外の国々）に対し国境を閉ざしている。しかし、ラーニャの母、先代勇者セレスはケルティの上皇及びバンキグ国王とたいへん親しい。望めば、ラーニャは北方へも赴けるだろう。

王宮では数多くの貴族達が、彼女と親交を結ぼうとした。
けれども、インディラの姫君は国王との謁見を終えるとすぐに、滞在先の侯爵家へと戻ってしまった。大魔王討伐の旅の支度がありますと言われては、引きとめられる者もいない。

ラーニャの入国以前から、不必要なほどに派手やかに王宮にもクリサニアにも彼女の噂は広まっていた。大魔王復活時に勇者が奇病に伏しているというたいへん不吉な事実を、明るい話題――美しきインディラの姫君登場でかき消そうと意図する者がいたのだ。
国の準備したお祭りムードに、クリサニアの住民はすっかり踊らされていた。
本日、姫君が国王陛下に謁見すると聞きつけ、侯爵家から王宮までの道には多くの民が押し寄せた。しかし、高貴なる姫君は、行きも帰りも慎み深く馬車に乗っていた。馬車から手を振る事はおろか顔を見せる事すらもなかった。美しき女勇者を一目見ようと沿道につめかけた人々の期待は、残念なことに裏切られたのだ。

「凄い人気だったね」
侯爵家の敷地に入ってから、第三王子ガジャクティンが馬車の窓から敷地の外の賑わいを見つめて溜息をつく。

「王宮もすごかったけど、街中はそれ以上だね。『姫勇者』の称号を賜ったとか、王宮での出来事が噂になって伝わったら、もっと白熱するんじゃない？」

黒髪の麗人と、覆面の忍者は顔を見合わせ、眉をひそめあった。

三人は女勇者人気に辟易としていたのだ。

屋敷に着くと、三人は当主グスタフより与えられた女勇者用の部屋に揃って向かった。

品の良い調度品の置かれた客室だ。

入室は断っているので中には召使もいないはず。先に部屋に入った忍者が中の様子を確認している間に、麗人はさっさと背の大剣を外して壁に立てかけ大きく伸びをした。

「あ～、肩こった」

疲れた～とこぼし、肩をほぐすようにコキコキと動かす麗人。

忍者ジライは、白銀の鎧姿の者をジロリと睨みつけた。

「まだ周囲の確認が終わっておらぬ。地を出すな」

「親父殿が部屋の周りにトラップを張ってるんだ、近づける忍者はいないよ。千里眼防止用の魔法陣もあるから、ここは安全さ」

「きさまは楽天的すぎる。少し周囲を探ってくる」

そう言うや、忍者ジライの姿はフッと部屋より消える。忍の体術で姿を消したのだ。

麗人は髪をかきあげ、汗をぬぐうと、どっかりと椅子に腰かけた。

ガジャクティンは、壁にたてかけられている『勇者の剣』をジッと見つめそわそわしていた。頬を赤く染め、糸目をうるませて。

「……ねえ、触ってもいいかな？」

「ん？」

「昨日、侯爵家に来てからずっと触りたかったんだ。もう、我慢も限界。ねえ、いいよね？」

「いいんじゃない」

「僕、ナラカ様の甥の子供だから、触れても大丈夫だよね？　雷、落とされないよね？」

「さあ？　大丈夫だろ」
『勇者の剣』を振るえるのは、初代勇者ラグヴェイの血を引く、剣の技量が高い者だけであった。
だが、誇り高い『勇者の剣』は、初代勇者ラグヴェイの血を引かぬ者には、触れられる事すら厭う。ラグヴェイと無縁の者が触れると、『勇者の剣』は怒ってその者に雷を落とすのだ。
しかし、例外があった。十二代目勇者ランツの従者――大魔術師カルヴェルと僧侶ナラカ、及びその血縁者は剣に触れられる。二人の従者がランツの義兄弟となるほど親しかったおかげと言われている。
「触らせてもらうね！」
ガジャクティンは顔中を赤く染め、『勇者の剣』に対し話しかけた。
「ずっとあなたに憧れてきました。僕は初代勇者ラグヴェイ様を始めとする十三人の勇者様を尊敬しています。勇者様と共にあり勇者様に無限の力を貸し与え続けている神秘的なあなたにお会いできる日を、ものごころついた日からずっと夢見てきました。夢が叶って嬉しいです」
もじもじとまるで恋する女性に告白するかのように、緊張し、頬を赤く染めながらガジャクティンは『勇者の剣』に乞い願う。
「触れさせてください……本当は鞘から抜いてあなたのお美しい姿を拝見したいけれど、僕はラグヴェイ様の血筋の者ではありませんから、そこまではしたない事は望みません。あなた様の柄だけを……そこだけを握らせてください、お願いします」
カチコチに緊張しながら大剣に手を伸ばし、ガジャクティンは右手だけで『勇者の剣』を持ち上げた。
「うわ！　うわ！　うわぁ！」
顔中に笑みを浮かべ、ガジャクティンが麗人を嬉しそうに見つめる。
「すっごく軽いよ！　手に持ってるのを忘れちゃうくらい！　でも、

手には優しく柄の感触が……」
「持ってるのを忘れるくらいって……そりゃ、最高に軽い状態じゃないか。すごいなあ、ガジャクティン。俺には普通の両手剣並の重さだったんだぜ」
「僕、『勇者の剣』様に気に入ってもらえたのかなあ、嬉しいなあ♪　嬉しいなあ♪」
ニコニコ笑うガジャクティン。
その姿を笑顔で見守っていた麗人の背後に、忍者ジライが現われる。
「これで、旅の間の剣の背負い主は確保できたな」
「もともとそのつもりで、ナーダ父さん、ガジャクティンを従者にしたんだろ？　あの姉貴が『勇者の剣』に好かれるわけないもんな」
取っていいよな？　と、ジライに確認してから麗人は黒のカツラを外した。
淡い金髪の柔らかな短髪が現われる。
目からも茶の薄いガラス膜を外し、部屋の中に置いておいた変装用の小箱に仕舞う。
洗浄液で化粧を落とす麗人は――もとラジャラ王朝第二王子、ラーニャの弟アーメットだった。本物のラーニャは今日は朝から、アーメット用の部屋に籠もっている。
「ラーニャ様とあの剣の相性が良いとは思っていなかったが……」
ガジャクティンが、わーい、わーいと振り回す剣を見ながら、忍者ジライは覆面の下の顔を歪めた。
「まさか、床にのめりこむほど重くなるとは……」
「それって、最高に嫌われてるってことだよな。お母様が処女を失った時、あの剣、お母様に触れられるのを嫌がって床にめりこんだんだろ？」
「とはいえ、セレス様の御子はラーニャ様しか居られぬ。ラーニャ様には勇者をやっていただかねば……」
「いや、お母様の子はもう一人いるだろ、ここに」と、自分を指差

してアーメット。
「おかわいそうなラーニャ様……あのような物の道理もわからぬ剣に侮辱されて……」
「いや、だから、あの剣を使えるラグヴェイ様の末裔がここに居るだろうが」と、ぐいぐいと自分を指差してアーメット。
「勇者に何かあった時の為に、ずっと勇者のスペアとして勉学に励まれ、結婚もなさらず処女を守り続けていたというのに、あまりの仕打ち……」
「いや、だからさ、家族計画が悪かったんじゃないの？」と、アーメット。
「あああ、ラーニャ様、いつか、あの阿呆な剣にもラーニャ様の偉大さがわかる日もきましょう、どうかお心強く……」
「聞けよ！　第二王子アーメットを殺さないで王宮に残しとけば、姉様が勇者のスペアにされる事もなかったろう？　俺が勇者のスペアになって、今も『今世の勇者』を継いでちゃっちゃと旅立てたんじゃないの？　俺を殺したのがマズかったんじゃない？」
「……」
忍者ジライは息子をジロリと睨みつけ、
「そのようなこと……」
両手の人差し指を息子の口につっこみ、口の端を左右に思いっきりひっぱった。
「きさまに指摘されずとも、わかっておるわ！」
「いひゃ！　いひゃ、ひゃひゃひゃ！」
「認めよう！　第二王子アーメットを病死としたのは我とセレス様の誤りであった！　王位継承権に縁のある男子が王宮にあっては騒乱のもとと思い、きさまを殺した！　じゃが、殺さず、侯爵家に養子にやればよかったと今は激しく後悔しておるわ！」
そこでようやくジライが口から手を抜いてくれたので、アーメットは両頬から口元を押さえつけ痛みを堪えた。
「しかし……過ぎた事をどうこう言うても、手遅れよ。現在、『勇

者の剣』を持てる、勇者の血を引く人間はラーニャ様しか居ない事になっているのだ。どうにか策を考えねば……」

「策ねえ……」

頬を撫でながら、アーメットは尋ねた。

「今日はうまく誤魔化せたからいいけどさ、姉貴の影武者、いつまでやらせる気？」

「ラーニャ様が『勇者の剣』に気に入られ、自在に剣を扱えるようになるまで、だ」

「親父……本気で、そんな日がくると思ってるの？」

「この世にラーニャ様ほど高貴な女性は居られぬ。いずれはあの剣もラーニャ様の偉大さにひれ伏すであろう」

「いやいやいやいや！　あんたの腐った親馬鹿目じゃなくって、冷静な目で事態を判断してくれ！　今のまんまの姉貴じゃ、『勇者の剣』に好かれるなんて絶対にありえない。百万年経とうが無理！　姉貴が大魔王を倒す日なんて永遠に来ないよ！」

「む？　きさま、『勇者の剣』に好かれる方法がわかるのか？」

「お母様から聞いたよ、『勇者の剣』は、剣と心を一つにして戦う猛き武人が好きなんだって。しかも、若い男が好きで、かよわい女は嫌いなんだって。姉貴は女ってだけで剣から嫌われてるのに、世界平和うんぬんの正義感はゼロだろ？　わがまま放題に育ってるし、その上、姉貴……」

ガジャクティンの方をチラリと見て『勇者の剣』に夢中でこちらに注意を払ってないのを確かめた上で、小声でアーメットは言葉を続けた。

「ナーダ父さんに恋してるんだろ？　恋愛中の女は最低最悪に嫌いらしいよ、その剣」

「単なるファーザー・コンプレックスじゃ。一過性のもの。いずれは消える感情じゃ」

「て、言って、何年？」

「……」

「ナーダ父さんにちゃんと振ってもらったら？　『その気はありません』って。したら、姉貴、しばらくは落ち込むだろうけど、そのうち浮上するからそうなれば『勇者の剣』とも」
「阿呆！　ラーニャ様が振られるなどありえぬ！」
覆面から覗く目でギン！　と、父親が息子を睨みつける。
「ナーダの阿呆がラーニャ様に振られるのはよい。是非、そうしていただきたい。じゃが、ラーニャ様が男から断られるなど、ありえぬ！　あってはならぬ事なのだ！」
「……だから、その親馬鹿思考やめてくれよ……現実的にいこうよ。話を整理しようぜ。姉貴は『勇者の剣』に嫌われた。しかも、お母様が女勇者となった時よりも、もっともっと嫌われている。ＯＫ？」
「うむ」
「今のまんまじゃ、姉貴は剣を扱えないどころか、持つ事すらできない」
「うむ」
「勇者が『勇者の剣』を振るえなきゃ、大魔王を倒せない。この世は滅びるんだ。あんたの大切なお母様も姉貴も死ぬ」
「それは困る」
「だろ？　なら、姉貴に剣を持てるようになってもらわなきゃ。一度、インディラに戻ってナーダ父さんに告白玉砕してもらうしか手はないって」
「……いや、手はまだある」
ジライはアーメットの顔に、ぴったりと指をさした。
「きさまがずっとラーニャ様の変装を続け、ラーニャ様として大魔王を倒せば良いのだ」
「はぁ？」
「きさまとて忍の端くれ、それぐらいできよう」
「いやいやいや！　寝ぼけたことぬかすなよ、馬鹿親父！　俺、幾つだと思ってるの？　十六だよ？　今は背格好がほぼ一緒だけど、これから俺はまだ背が伸びるし、毛深くなるだろうし、体型だって」

「きさまの成長は止まった、もはや背は伸びん」
「むか！」
「始終その神聖鎧を着ていれば、体型も誤魔化せる。おなごの振りもできるはずじゃ」
「無理無理無理！　声だってどんどん低くなるし、背だって絶対伸びる！　姉貴の振りなんか、絶対、続けられない！」
「……そうか」
ジライは『ムラクモ』と共に腰に差していた小刀を抜き、顔の前に構えた。
「ならばいた仕方がない……父として自ら手を下してやろう」
「へ？」
「鎧を外せ。これ以上、成長せぬよう……成長を止めてやる」
父親の視線が向いている先に気づき、アーメットは青ざめた。
何をする気なのか察したのだ。
冗談や単なる脅しではなく……
娘ＬＯＶＥのこの男ならば、娘の為にその行為を本気でやりかねない事を、アーメットは長年の経験からよく知っていた。
「できる！　俺、まだこれからもずっと姉貴の変装ができるよ！」
「しかし、背も伸びよう……」
「伸びない！　もう絶対に！　俺、東国人の血を引いてるし、お母様も小柄だし！　このまま一生、チビのまんまだ！」
言ってて自分で悲しくなってきたが、今は何としても父親の気を変えさせなくては。この場は逃れられたとしても、こうと決めたら、夜中にこっそり忍び込んでとか、後で忍法や薬で動きを奪ってからじっくりととか、やりかねないのだ、この男は。
「これからも、がんばって姉様の影武者を務めさせていただきます！」
「ラーニャ様の影武者としてケルベゾールドを倒す事となっても、役目を果たすな？」
「喜んでやらせていただきます！」

「ふむ」
ジライは小刀を鞘に戻した。
「ならば、しばらくは様子をみるか……成長が止まっておらぬようなら、それから、又、考えればよいことだしの」
「そうそうそう！　そうだよな！」
一度、切り落とされたら、取戻しがきかないのだ。アーメットは必死に頭を縦に振った。
「アーメット」
覆面から覗く目が細められ、にぃっと笑みが形づくられる。
「我の母親違いの義弟にの、ダイダラという奴がおった。父母共に東国人であったが……そやつ、ナーダより巨体だったわ」
「へ？」
「……きさまの成長、まだ止まっておらぬかもしれんな」
ハハハと快活に笑いながら、ジライは姿を消した。
からかわれたんだよな……去勢も冗談で……影武者役を拒否させない為に誘導しただけ……だよな？
鞘にいれた『勇者の剣』を上機嫌に振るうガジャクティンの横で、アーメットはブルブルと震えていた。

私、負けない！　でも、これはマズいと思う！

寝巻きのまま、アーメット用の部屋のベッドの上に寝転がってボンヤリと天蓋を見つめていた。
今、何時だろう？
今頃、アーメットはエウロペの国王陛下の御前かしら？　と、ぼんやりと思う。
本当なら、私がその場にいるはずだったのに……
新たな女勇者として……
でも、仕方ない、国王陛下の御前になんか顔を出せない。
『勇者の剣』を持つことすらできない女なんて、勇者になんかなれるわけがない。

目にじわ～っと涙が浮かんだ。

むなしかった。

勇者のスペアに選ばれた時は、え～～～、やだぁ、めんどくさ～～～い、と、思った。
私が生きている間に大魔王が復活するかどうかわからないし、勇者そのものではなく勇者のスペアである事も気に食わなかったし、弟のアーメットがいるのに何で女の私が勇者の勉強しなきゃいけないのよって反発心もあった。
家庭教師のリオネルはうるさいし、くっだらない授業ばっかするし、物覚えが悪いって私を馬鹿にするしで……勇者のお勉強はつまらなかった。

それは私が真剣にやらなかったせいでもあるんだけど……

処女でいなきゃいけないのも嫌だった。

そりゃあ、お嫁に行かないですんだのは嬉しかったけど……

本当なら、姫君の私は十四、五には他国に嫁ぐか降嫁させられてたもの。

勇者のスペアだから王家に残れて、ずっとお父様の側にいられたのだ。それはわかっている。

でも、清い身でただ見つめ合うだけのプラトニック・ラブなんて私の好みじゃない。

欲望のままに……激しくぶつかり合いたかった……

鎖や縄で綺麗にからめとってあげて、逞しい体に私の印を鞭で刻み、蝋燭で彩ってあげて、羞恥心をあおる言葉をさんざんかけてあげて、お父様が望まれるのなら張り型だって使ってあげるし、敏感な所に器具をはめ、針でいろんなところを刺してあげて……

愛あるプレイでたっぷりと可愛がってあげた後、よく耐えたご褒美として私の処女を与える……

夢だったのに……

お父様と両思いと確信したあの日からずっと、早くナイス・ボディのぷりんぷりんの女王様となって結ばれたいと思っていたのに……

勇者のスペアにされたせいで、夢はお預けとなった。グスタフ兄様の子が大きくなるまで、私は処女でいなければいけない。三十になるぐらいまで、お父様と愛し合えないのだ。

ならば、せめて、その一歩手前までのプレイを……と、思ったのだけれども、誘ってもお父様、静かに微笑まれるばかりで、決して二人っきりになってくださらなかった。劣情に負けて私に手を出したらマズいと恐れてらっしゃるのか、私の初めてのＳＭプレイで結ばれたいと先の楽しみと思ってらっしゃるのか……

私は勇者のスペアでいるのが嫌で嫌でしょうがなかった。かなうのなら、やめてしまいたかった。

でも、口にはしなかった。

だって、お父様が期待してくださったから……

『勇者はこの世を救える唯一の存在です。世の為、人の為、自らを犠牲にして勇者たらんとしているあなたに、私は敬意を表します』

頬を涙が伝わる。

私はお父様の期待に応えられなかったのだ。

恥ずかしくって、この世から消えてしまいたかった。

ノックがした。

返事をする気力もなかったので無視していると、お声が聞こえた。

「ラーニャ、少し話せるかな?」

ヤンセンおじい様のお声だ。この部屋に王宮に行けなかった私が隠れているのを、おじい様はジライ達から事情を聞いて知っている。

私は慌てて腕で涙をぬぐい、ベッドから体を起こした。

「はい！　どうぞ！」
小柄で柔和なお顔のおじい様がお部屋に入って来る。セレスお母様のお父様だ。武術に縁のない細いお体をしているけれど、昔、巡回裁判官として民の権利を王侯貴族や聖職者の横暴から守り続けたご立派な方なのだとお母様から伺っている。
「ここにおいで、一緒に話そう」
ソファーに腰かけたおじい様。私はその隣に腰を下ろした。
ヤンセンおじい様が、皺がいっぱい刻まれた顔を私に向け、微笑まれる。何処となく……ナーダお父様を思わせるやさしい微笑みだ。
「魔術師協会に連絡をお願いした。間もなく、この屋敷に大魔術師カルヴェル様がいらっしゃるよ」
「大魔術師カルヴェル様が？」
お母様の神聖魔法の師で、お母様の従者だった大魔術師様が？
おじい様は頷いた。
「『勇者の剣』はたいへん誇り高く気難しい剣だ。ラーニャのお母様のセレスも、あの剣が重くて、うまく扱えず、とても苦労をしていた」
「それは……知ってます」
「うん」
「でも、お母様の時はどうにか持てたのでしょ？　私は持ち上げる事すらできなかったけど……」
「それはカルヴェル様のご助力があったからなのだよ」
「え？」
「おまえのお母様の時もね、『勇者の剣』がとことん重たくなって、地中何十メートルにも埋もれてしまった時があったんだ。その後、カルヴェル様が剣を説得して魔法をかけてくださったから、最高に重くなっても成人男性の体重並の重量で済んでいたんだ。ラーニャ、カルヴェル様に間に入っていただいて、剣を説得してもらおう」
剣を説得……
魔法剣相手に話が出来るのかしら……？

「それで……持てるようになるのかしら？」
「どうだろうね」
おじい様は穏やかに笑みを浮かべられた。
「ラグヴェイ様の血筋の方でも、全員が全員、あの剣を持てたわけじゃないんだよ。昔から、あの剣は、気に入らない者に持たれると、とても重たくなったそうだ。腕が未熟であったり、心ばえがよくなかったり、理由はさまざまなようだ……侯爵家の中には剣に認められず、生涯、『勇者の剣』を背負えなかった方もいらっしゃったとか」
「……」
「ラーニャは幼い頃からセレスに両手剣を習ってきたのだよね？」
私は頷きを返した。
「では、腕が未熟な為、嫌われたわけじゃないね。ラーニャのものの考え方の何かを、剣は嫌ったのだろう」
「それって……」
目にじんわりと涙が浮かんだ。
「私が勇者失格のダメ人間って事でしょ？」
「それは違うよ、ラーニャ」
おじい様は私を抱きしめた。
「『勇者の剣』の好悪の感情が必ずしも正しいわけではないんだよ」
「……」
「争いを厭い、非暴力によって、世界を平和に導いた聖人がいらっしゃるとする。世の多くの人間はその方を尊敬するだろうが、『勇者の剣』は戦いを放棄した意気地のない男とその方を嫌うだろうね」
「……」
「おまえと『勇者の剣』は気が合わなかった。ただ、それだけなのだよ。どちらかが間違っているということはない、どちらも正しいんだ」
「……」
「けれどもね、ラーニャ、互いに尊重しあえば、主義主張が違う人

間でもわかりあえる。目的の為に協力しあう事もできる。共に生きる事もできるんだよ」
「……そうかしら？」
「そうだよ。たとえば……おまえのお父様とお母様、そっくりかい？」
「お母様とジライ？」
誰にでもやさしくて正義感にあふれていて、愛あるプレイで皆を幸せにしている女王様のお母様。
部下を容赦なくいたぶって偉そうに威張りまくってるけど、私やお母様にはとことんMなジライ。
「……全然、似てないわ」
「うん」
おじい様はやさしく微笑まれる。
「でも、二人はとても仲の良い夫婦だろ？　全く違う人間だからこそ惹かれ合い、わかり合ったんだ」
「……」
「おまえと『勇者の剣』はわかり合う事もできる。おまえがあきらめず勇者であろうと努力を続ければ、『勇者の剣』も心を開いてくれる。私はそう思うよ」

そうか……

そういうことなんだわ……

何がいけなかったのか、わかった。

私は、ただ、受身だった。
『勇者のスペア』となれと言われて嫌々引き受けて……
押しつけられる勉強を何の為にやるんだかわかんないまま、漫然とやって……
『勇者が倒れたから勇者に昇格』と、言われてそのまんま引き受けて……
勇者様～と、ちやほやされるのも悪い気がしないなと、ちょっといい気になって……
お父様からの期待に応えようと思ったりしていた。

でも、違うんだわ。

それじゃいけなかったんだ。

私に足りなかったのは攻めの姿勢。
言われた事を言われた通りにやろうとしちゃいけなかったんだ。

だって……

私は女王様だもの！

獲物を踏みつけ、なぶり、屈服させ、支配するべき私が……
周りの言いなりに、勇者になろうとしちゃいけなかったんだ。

勇者として絶対的な威厳をもって、全てを支配する！
私がやりたいように、正義を貫く！

こうでなくっちゃいけないんだわ！

『勇者の剣』に認められなかったなんて、メソメソしてちゃいけなかったのよ。
私の偉大さがわからない愚かな奴には、わかるまで徹底的に教え込んでやればいいだけ。
調教してやればいいのよ！

「おじい様……ありがとう」
私はおじい様を真っ直ぐに見つめた。
「私、負けない！　『勇者の剣』に私こそが持ち手と認めさせる！　絶対、あきらめない！　何度でもあの剣に挑戦するわ！」
おじい様がうんうんと頷かれる。とても満足そうに微笑みながら。
何か……やっぱ、似てるわ……お父様に……。素敵なオ・ト・ナ。
包容力にあふれてるのに押し付けがましいところが全然なくって、とっても上品。
「大魔王復活の託宣があってから、まだ四日。魔が勢力を伸ばし始めるのは数ヶ月先の事だ。のんびりしているわけにもいかないが、きちんと準備を整える時間はまだある。焦って平常心を失ってはいけないよ、少しづつでいい、『勇者の剣』と心を通わせ合っていきなさい」
「はい、おじい様」
少しづつ、私の支配下に置いてやる！　屈服させてやるわ！

その時、チャイム音が鳴り響いた。

「おや、もういらしたのかな？」

おじい様が立ち上がり、扉へと向かう。

「今の音、なぁに？」

「移動魔法でどなたかがいらっしゃったって合図だよ。この屋敷には移動系の魔法を制限する防御結界が張られていてね、ここの座標を知っていても家人の許可がなければ外から屋敷に渡ってこられないし、許可を得た場合でも出現する時は必ず玄関ホールと決まっている。ラーニャも着替えて玄関ホールまでおいで」

私達がこの屋敷に来た時も、さっきの音がしたのだろう。出現した場所も、確かに玄関ホールだった。

おじい様が出て行った後、寝巻きを脱ぎ捨て、即行でエウロペ風のシャツとズボンに着替えて部屋を飛び出した。

玄関ホールの壁の模様におじい様が指を這わせていた。

あの模様が防御結界を制御する仕組みになっているのだろう。

正面階段の上からホールの様子を窺っていると、ジライとガジャクティンとアーメットがそばにやって来た。国王陛下との謁見を終えて、戻っていたのだ。アーメットは、兜と口布無しのインディラ風忍者装束だ。もう私の変装はしていない。

「王宮、どうだった？」

って聞いたら、

「広かった」

と、アーメットは答えた。馬ッ鹿じゃないのっ！　て思ったけど、とりあえず怒りはのみこんだ。とりたてて何も言わないんだから、

謁見は無事に終了したのだろう。
玄関ホールの空気が振動し、何もない空間が光り始める。
人の輪郭のようなものが見え始める。
移動魔法で人が出現する瞬間を見るのは初めてだった。
わくわくして待っていると……

「あら？」

空より現われ出たのは若い男だった。
大魔術師カルヴェル様じゃなかった……

でも……
何で？
どうして、ここに？

「おまえ、何しに来たんだよ！」
階段の手すりを乗り越え、アーメットが玄関ホールに着地する。
「こんな所に来てる場合じゃないだろ、おまえ」
移動魔法で現われた者はアーメットを手で制し、正面階段の上にいる私に向かい丁寧に頭をさげて礼をした。
「インディラ寺院を代表して勇者の従者となるべく参りました。どうぞ、僕をあなたの従者の列にお加えください」

て、言われても……
ＯＫなんて言えるわけないじゃない！

「どういうこと？　説明してよ、なんで、あなたがインディラ寺院代表なのよ！」

階段を駆け下り、私は玄関ホールの男の元へと走った。

「寺院代表には僧侶でなくてもなれるんだよ。深い信仰心を持って、寺院で学んだ経験があればね」

「でも、寺院には大僧正候補とか優秀な方がいっぱいいらっしゃるわ！」

「うん。だからね、他の従者候補の方々と力比べをして正式に従者候補の座を勝ち取ってきたんだよ」

「いつ？」

「昨日」

「嘘！　王宮のあなたが僧侶様達と力比べなんかできるわけないじゃない！」

そう言うと、その者はにっこりと笑みを浮かべた。

「僕、さきおとといから王宮を抜け出していたんだ。部屋に幻影を残して、こっそりとね」

「えぇ～？　忍者の監視もあるのに、どうやって？」

「移動魔法で」

「え？」

その者の笑みが少し、悪戯者っぽいものに変わる。

「内緒にしてたから、知らなかったろう？　僕は神聖・回復・強化・弱体魔法が使えるし、攻撃魔法も移動魔法も使えるんだ。さきおとといに王宮から総本山に自分の魔法で移動し、たった今、自分の魔力で総本山からここまで跳んで来たんだよ」

私の横でアーメットがあっけにとられた顔をしていた。アーメットも知らなかったのね、彼が移動魔法が使えたなんて。しかも、国を渡る距離が跳べるだなんて……それも、四日の間に二回も移動魔法を使ってる？　宮廷魔法使いより凄いんじゃない？　超一流だわ！

その者は懐から手紙を出し、私へと差し出した。
「大僧正様からの書簡。これに僕をインディラ寺院代表として、勇者の従者として推薦すると書いてある」
私は手紙を受け取った。が、開きもせずに、目の前の人物をまじまじと見つめた。

インディラ国第一王子ガジュルシン。

王国の跡取りのあんたが……
勇者の従者になるですって……？

「やるねえ、兄様」
と、ガジャクティンが下々の子供みたいに口笛を吹く。

馬鹿！　馬鹿！　馬鹿！
そんなの、ダメに決まってるじゃない！
どーするのよ、ナーダお父様、怒るわよ！

思いがけない再会！　未来の約束！

父上から何らかのアプローチがあるとは予想していた。
ラーニャはファーザー・コンプレックスの持ち主で、父上の意にかなわぬ事は絶対にしない。
僕がインディラ寺院の代表として侯爵家にやって来た事を、すぐさま父上に伝えただろう。昨日、ラーニャ達を侯爵家に運んだ宮廷魔法使いがまだ侯爵家に滞在しているのだ。王宮一の実力の彼ならば魔力も枯渇していないはず。本国との心話での連絡などたやすいはずだ。

心話を通してお叱りを受ける事になると思っていた。
戻って来いときつく命じられるだろうとも。
しかし、何と言われようとも、聞き届けるつもりはなかった。ここで父上のい言いなりになったら、僕は終わりだ。人としても、王国の跡取りとしても、

けれども……
これは予想外だった。

侯爵家の玄関ホールに魔法のきらめきが現われ……
宮廷魔法使い二人と共にインディラから渡って来た人物を見て、僕は茫然とする。
前侯爵ヤンセン様にご挨拶した後、その巨体がまっすぐに僕に向かって進んで来る。

ケルベゾールドが復活して国中が混乱している今、エウロペまでやって来る暇などないはずなのに……

王宮に遠距離の移動魔法が可能な宮廷魔法使いは後四人しかいないのに……その内の二人の貴重な魔力を往復で消耗させる覚悟でやって来られたというのに、こともなげにおっしゃるのだ。

「今夜の睡眠時間を削る事にしました。こちらに三時間、滞在します。納得できる説明を、私にしてください、ガジュルシン」

僕が父上に勝てないと思うのは……この決断力と行動力……そして、施政者としての責任を損なわずに、家族を大事にするその姿勢なのだ。

＊　＊　＊　＊　＊

ヤンセン様の準備した部屋に、ガジュルシンとナーダ父さんは二人っきりで籠もってしまった。

いや、親父もいないから、親父も立ち会ってるのかな？

俺とガジャクティンと姉貴は、姉貴の部屋で顔をつきあわせていた。ここが一番、ガジュルシン達がいる部屋に近いからだ。

「あんた、忍なんだから、中、覗いてらっしゃいよ」

て、姉貴が言ったから、思い切り馬鹿にしてやった。親子で腹をわって話す為に、父さんは国を放り出して来たんだ。絶対、誰にも覗かれたくないと思っているはず。部屋の中には、結界が張られているだろう。屋根裏から覗いたって、何にも見えるもんか。

「せっかく兄様が自分で動いたのになあ……」

残念そうにガジャクティンがつぶやく。

俺も同感。

父さんに連れ戻されるんだろうなあ。
後宮から出る度に貧血を起こしてぶっ倒れまくっていたあいつが……
大臣達の世間話につきあうだけでも、脂汗を流さずにはいられなかったあいつが……
政務の見学もいつも半ばまでしか耐えられず、控え室でゲーゲー吐いてたあいつが……
ベテラン忍者のハンサさんの目を誤魔化して王宮を抜け出したってのに……
全部パーになるのか。
……
……変だ。
嫌なのに、何か……ホッとしてる。
あいつが今まで通りのあいつに戻る事に安心している。
今日のガジュルシンはおかしい。
移動魔法が使えるなんて……知らなかった。
たしかに、あいつがインディラ寺院で修行してる時は、俺達忍者は護衛をできなかった。寺院では決められた時間の決められた場所でしか、俺もハンサさんもガジュルシンと接触できなかった。寺院内での修行場で何してたのかは知らなかったよ。
でも、移動魔法って確か、僧侶には禁忌魔法で、特殊な役職の僧侶しか使えないはず。
寺院で王子が片手間に学んでくる魔法としちゃ、ちょっとありえないほどの高等魔法だし……
それに、あいつ、攻撃魔法も使えるって言ってたよな……いつ習ったんだ？　寺院じゃ、絶対、教えてくれない魔法なのに。
何か……変な感じだ……
俺は影となって三年ちょっとだけど、夜も昼も一緒にいる事が多かった。俺が影として側にいるだけで元気が出ると、あいつは笑っ

ていた。
あいつの勉強家のところも、誰に対しても人当たりがいいところも、体調が悪くなるってわかってるのに表に政務の勉強に行く努力家のところも、あいつの後始末をする者に対して何度も謝る王子とは思えぬ腰の低いところも、みんな見てきた。
情けないほど繊細な奴だけど、涙が出るほどいい奴なんだ。俺が陰から支えてやって、立派な国王にしてやりたかった。
だけど、俺はガジュルシンの全部を知っていたわけじゃなかったんだ……
俺が知ってるガジュルシンなら、王宮を抜け出して、インディラ寺院で他の僧侶様方と争って従者候補の地位を勝ち取ってくるなんて真似はできない。
何か……変だ。
何か……モヤモヤする。
ガジュルシンが自分の意志で何かをやりたいって言うの、俺の知る限り初めてなのに……
それが潰れる事を、オレは心からは残念がっていない。
何でだろう……？
俺ってもしかして……
すごく嫌な人間なのかもな……

＊　＊　＊　＊　＊

「ここで顔をつき合わせても時間の無駄だよ」
僕は立ち上がり、二人の顔を見渡した。
「僕は父様を説得しに行く。二人はどうする？」
「説得？」
アーメットが意外そうな顔をする。

「兄様をラーニャの従者にしてもらうのさ」
「けど……」
アーメットが口ごもる。
「あいつ、王国の跡継ぎだぜ。勇者の従者になったら……魔族や大魔王教徒と戦うんだ、死の危険に晒される事になる……それに、あいつ、病弱ですぐ熱を出すのに……旅なんか無理」
「馬鹿じゃないの、アーメット、何、言ってるの？」
僕は忍者装束の義兄を睨みつけた。
「そんなの全部承知の上で行きたいって言ってるんだよ、兄様は。応援してあげたくないの？」
「それは……応援……してあげたい……けど」
歯切れが悪いなあ、もう。
「それに、兄様に旅の仲間に加わってもらえれば、姫勇者ラーニャ一行にも都合がいい」
「え？　どうして？」と、ラーニャ。
僕はラーニャのマヌケ面を睨んだ。やっぱり何も考えてないんだ、ラーニャは。
「兄様は僧侶の魔法＋攻撃魔法が使えるって言ってたでしょ？　兄様がいれば、ラーニャは従者をこれ以上、増やす必要がなくなる。『姫勇者ラーニャ』としてラーニャとアーメットが入れ代わるのも、身内だけなら気楽にやれるんじゃない？」
「あ！」
「あ！」
アーメットとラーニャが、今、気づいたって顔をした。
もう！　馬鹿じゃないの、この二人！　年上のくせに、頭がまわらないんだから！
どこそこの国の剣の名手とか、一流の攻撃魔法の使い手とか、何とか教の神官とか、従者が増えれば、そりゃあ旅は楽になると思うけど……
一人でも第三者を従者に加えたら、ラジャラ王朝はものすごい醜（スキャンダル）

聞に見舞われる。
今、ラーニャが全く『勇者の剣』を持てないせいで！
これからも、エウロペの王宮の時みたいにアーメットに影武者を務めてもらう時があるだろう。
でも、そーなったら、その姿を第三者の従者も見ちゃうわけだ。
『勇者の剣』が持てない女勇者と、何故か持ててしまう忍者のことを、どーやって第三者に説明するつもりだったのさ。
まさか父様とセレス様が偽装結婚で、ラーニャとアーメットの父親は忍者ジライなんだって……そこから話す気じゃなかっただろうね！　そこまでは馬鹿じゃないよね、二人とも！
旅の従者は余所から増やせない。家臣もできれば避けた方がいい。今回、僕等を運んでくれた宮廷魔法使いも後宮の夜の事情までは知らないしね。
けど、どうあっても、魔法の使い手は必要だ。魔法無しじゃ、魔族相手にまともに戦えるわけないもの。治癒魔法無しじゃ、ちょっとした毒で一行が全滅なんて事態もありえるしね。
魔法が使える身内を一行に加えるのが、ベストだ。身内で魔法を使えるのは、父様と兄様。なら、もう選択の余地はないじゃない。
僕は同じ質問を繰り返した。
「僕は父様達の所に行くけど、二人はどうする？」
「行くわ！」と、ラーニャが立ち上がり、
「俺も行く」と、アーメットが後に続いた。

＊　＊　＊　＊　＊

真剣な面持ちのガジュルシンを見つめ、ナーダが溜息をつく。

この勝負、ガジュルシンの勝ちだな。

単なるわがままや逃避から従者になりたいと望んだのであれば、説得のしようもあった。

しかし……ずっと、大魔王が復活した時には王家を捨てる覚悟であったとは……

ラーニャ様が勇者とならずとも、ガジュルシンは王宮を離れていた。

幼い頃にインディラの大僧正から聞かされた使命を果たすべく。

ナーダの顔が非常に複雑なのは、その使命を果たすべきは、本来ならば息子ではなく、自分であったからだ。

インディラ国という枷がなければ、私が代わりますと即座に言ったであろう、お優しいもと大僧正候補様は。

「一つだけ約束してください、ガジュルシン」

観念したといった顔で、ナーダが言う。

「決して命を粗末にしないこと。あなたが死をひきかえに偉業を成し遂げたとしても、そんなもの、私には何の価値もありません。無事に帰って来てください」

「お言葉ですが父上……大魔王が真の復活を遂げれば、この世界は滅びます。インディラとて例外ではありません。世継ぎの王子が残ったとて国が滅びていては意味がないではありませんか」

「あなたが世継ぎだからその命を惜しんでいるのではありません……」

ナーダは立ち上がり、向かいに座っている息子の肩に手をかけた。

「一人の親として、あなたに願っているのです。子が親より先に逝くのは最大の不孝です。私はあなたを送りたくはない」

「父上……」

「無事に皆の元へ戻る……その願いを常に忘れずにいてください」

抱きあう親子を見ながら思う。

ナーダの頭の中は、未だに僧侶のままだ。実におめでたく、人徳にあふれている。

子の命を惜しむ父など、忍者にはいない。少なくとも、東国には居らなんだ。

我が命はセレス様の為にあり、その分身であるラーニャ様の為にある。

我はこの旅でラーニャ様のお命を守る為に働き……

ガジュルシンの使命を知った今、ラーニャ様の次にこやつを守る為に動かずばならなくなった。

二人を守る為であれば、我はアーメットに死ねと命じるであろう。

あれが第二王子のままであればそうではなかったやもしれぬが……

あれは忍だ。

忍に死にどころを与えてやるのも、上役たる者の務め。

父親の仕事だ。

＊　＊　＊　＊　＊

ガジュルシンが旅に加わると聞いて、廊下で子供達が喜び合う。
アーメットはガジュルシンの健康をひどく気にかけていた。が、本人は『インディラ教の教えでは、ゆえなく自分を癒してはいけないんだ。でも、務めや使命の妨げになる場合は癒していいんだよ。治癒魔法を自分にかけられるから、従者の役についている間の方がむしろ僕は元気かもしれないね』と、笑っていた。
ガジャクティンは『良かったね、兄様』と、従者として旅に出る事を許された兄の幸運を、我が事のように喜んでいた。仲の良い兄弟だ。
『あなたの魔法、頼りにしてるわよ』と、ラーニャが明るく笑う。思ったより元気そうだ。『勇者の剣』がラーニャの手を拒み床にめりこんだと聞いたから、落ち込み、泣いているものと思っていた。予想以上に精神的に強くなっているという事か。
私の視線に気づいたのか、ラーニャがこちらを見てポッと頬を染める。
……これが、多分、いけないのだろう。
あの剣は女々しいものが嫌いだ。恋する乙女も毛虫のように嫌っているはず。
ヤンセン様は、カルヴェル様に願い、あの剣にセレスの時のように重量増加を制限する魔法をかけてもらおうと考えている。
しかし、セレスが処女を失った時、あの剣はカルヴェル様の魔法をはねのけ、自分を触らせまいととことん重量を増した。
剣にも妥協できぬ線（ライン）があるのだ。
ラーニャには勇者として働いてもらいたい。本人の為にも、この世界の為にも、そして、ガジュルシンの為にも……
くだらぬ感情は捨ててもらうべきだろう。
「ラーニャ、帰国までまだ少し時間があります。少し、つきあってくださいませんか？」
「えええええ～～～～～！」

すっとんきょうな声をあげてから、ラーニャが顔の前で両手を組み合わせ、熱っぽい目で私を見つめる。

「はい！　お父様！　喜んで……」

いえ、あの……付き合うってそういう意味ではないのですが……

肩を叩かれたような気がした。耳にボソッとした声が届く。

「……振るなよ」

背後にいる彼女の父からの命令だ。

振るなって……

では一体、どうしろと？　この異常な状況をどうやって打破しろと言うのだ、ジライは……

ヤンセン様に準備していただいた部屋に、ラーニャと二人っきりで入る。ジライも入室させない。二人っきりで話をしたかったので。

＊　＊　＊　＊　＊

夢みたい、夢みたい、夢みたい。

何か、これって、逢引きみたい。

ナーダお父様と二人っきりで部屋で見つめあうなんて……

私が年頃になってから、お父様、私と二人っきりになるの避けてたのに……

それって、あれよね。劣情に負けて、美しい私を押し倒してはいけないっていう大人の判断だったのよね。私、勇者のスペアだったし、今じゃ本当に勇者だから（まあ、『勇者の剣』は持てないんだけど、それは、それ！　すぐに屈服させてやるわ！）。幾ら両思い

でも、私は処女でいなければいけない。結ばれる事のないせつない恋なのよ。

でも、その一歩手前までならやってもいいのに……

私はいつでもＯＫなのに……

婦女子の嗜みとして、女王様の衣装も鞭も蝋燭も麻縄も拘束具も、いつでもちゃんと荷物に忍ばせているのに……一応、張り型も……

お父様がジッと私を見つめている。

すご～～～く何かを言いたそうなのに、言うのをためらってるって感じ。

フフフ。照れてるのね。

勇者として旅立つ私は明日をも知れぬ身となるもの。この逢瀬が今生の別れになるかもしれないって、思いつめているのね。

言っていいのよ、お父様、私、お父様の望みの通りのプレイをしてさしあげるわ。一回、私用の部屋に荷物をとりに行かないといけないけど。

大丈夫、まだ一時間ぐらいあるもの。濃厚な時間を共に過ごせるわ。

「ラーニャ……」

「はい！　お父様！」

「目をつぶってください」

「はい！　お父様！」

目をつぶってだなんて……お父様、意外と積極的……

「口を閉じて……」

「！　！　！」

いよいよ？　いよいよ？　いよいよなのね？

私の乙女の唇を、奪ってくださるのね！

「気持ちを落ち着けて……」

ええ！　大丈夫、お父様、私、いつでも準備ＯＫよ！

「心の中に思い浮かべてください。あなたにとって、この世で一番大切なものを……」

「！」

「私も私にとって一番大切なものを思い浮かべます」

そっ、そ、それって……

何、それ、すっごいロマンチック！

目を閉じ、お互い愛しい相手を心に描き合って、初めての口づけをするだなんて……

いやん、もう、ス・テ・キ。

大好きよ、お父様！

「思い浮かべてくれましたか？」

恥じらいながら頷きを返した。

「私も思い浮かべました」

きて！　きて！　お父様！

早く、奪って！

「その大切なものを……お互い封印しましょう」

え？

「願掛けです。一番大切なものを断って、私はあなた達の旅の成功を祈る事にしました。あなたも、ガジュルシンも、ガジャクティンも、アーメットも、ジライも……誰一人欠けて欲しくない。あなた方が大魔王を倒して無事に戻って来るその日まで、私は大切なものへの思いを封じます」

思わず目を開いてしまった私に、お父様が微笑みかける。とても弱々しく……

「同じ事をあなたにも望んではいけないでしょうか？」
「でも……」
お父様は悲しそうなお顔をしている……
「封じるって、どうやって……？」
私の心にはいつもお父様がいる。
お父様への愛と共に、私は生きている。
「思いを捨てるのではありません。可能な限り、思い出さないようにするのです」
「そんなの……無理よ」
「勇者としての使命を第一に、魔を憎み悪を憎むこと、世を救うこと、『勇者の剣』と共にあること、心強い仲間のことを、常に思ってください。勇者として旅をしている間は、あなたにとって大切なものに心を向けすぎぬようにして、勇者として生きる事を優先してください」
「無理……」
あ、マズい……鼻がツンとしてきたわ。
「あなたならできますよ……」
顔が熱くなっちゃった。体もぶるぶると震えている。
「あなたはジライとセレスの自慢の娘です。やさしく、明るく、強く、頑張り屋で……あなたと共に過ごす時間は、私にとって、いつも楽しいものでした。あなたは素晴らしい方です……きっと、私の期待に応えてくださるでしょう」

お父様が私を抱きしめてくださった。

私が泣き止むまでずっと……

厚い胸の中に抱いていてくださった……

「お願いがあるの……ナーダお父様」
「何でしょう？」
「私が勇者としての使命を果たしたら……その時には……私の夢をかなえさせて……」
「……」
「約束してくださるのなら、私、頑張る。一番大切な思いを封じて、勇者として生きるわ」
お父様はしばらく私を見つめてから、静かにこうおっしゃった。
「私にできる事でしたら……あなたの夢をかなえる為に、力を貸しましょう。その時には、あなたの望む通りにします、ラーニャ」

お父様は、ガジャクティンやアーメットに声をかけられ、ガジュルシンと何か内緒のお話をするみたいに小声でしゃべられてから、しばらくジライと話をなさっていた。多分、子供達をよろしくとか、そういう話をしてるんだと思う。
ヤンセンおじい様にご挨拶をしてから、お父様は私に微笑みかけられた。
「あなたの旅の成功を祈ります、ラーニャ」

宮廷魔法使いの魔法で、お父様の姿が消える。
インディラに帰られてしまったのだ……

私はお父様が消えてしまった空をつかみ、抱きしめた。

ただ、抱きしめていた……

両手剣の達人？　突然の旅立ち！

大魔術師カルヴェル様がいらっしゃらない事には、私達は旅立てない。

と　言っても待つのにも限界はあると思う。

各宗教団体にそれぞれの神からケルベゾールド降臨の託宣が下ってから、国も宗教団体も魔族に対する備えを強化し、大魔王の憑代について調査を進めている。世界中が、誰の肉体にケルベゾールドが降りたのか、今、何処に潜伏しているのか調査しているのだ。

各国の協定で、有益な情報はインディラ寺院とエウロペの王宮に伝える事となっている。

何処かから有力な情報が寄せられたら、それは即座に心話でガジュルシンに伝わる。引き延ばしなど不可能だ。私達は、その有力情報を基に、勇者として旅立たねばならない。

その場合は、アーメットにずっと女装してもらって、私の影武者をやってもらうとジライは言っているけれど……冗談じゃない。そんなの認められないわ。私は勇者として生きるって約束したんだから！

侯爵家の前に人だかりができてるのを上階から遠目に見るぐらいで、勇者一行はずっと侯爵家に滞在して一歩も敷地外に出なかった。

何度かどこそこの国の誰々が従者候補として王宮に到着したとか連絡があったみたいだけど、私の名前を使ってジライが勝手に返事を出し、丁重に、皆、お断りしたようだ。

大魔術師様がいらっしゃるまで、私達は侯爵家で修行をした。

アーメットは両手剣の修行をした。師匠はガジャクティン。
十になるまでしか王宮にいなかったアーメット。その両手剣の腕前は、ガジャクティンに言わせると『お話にならない』レベルのようだ。うまくないなあとは、私も思ってたけどね。
『勇者の剣』が重く感じられるのはアーメットの剣士としての技量が低いからだと糸目の義弟は断じ、自ら教師役を申し出た。アーメットがこれから先ず～っと勇者の身代わりになるかもしれないからねとも言って。
しかし……
二人の稽古を横でたま～に見学して、私は、アーメットの数少ない長所を発見できた。
アーメットは我慢強い。めったに怒らないのだ。
私が生徒だったら、十分ももたないわ。顔の形が変わるほどガジャクティンをぶん殴って、稽古を終わらせている。
教え方は下手じゃないと思う。でも……
ガジャクティンの口のひどさはリオネル以上だ。無神経で、高ビーで、年長者への敬意が欠片もない。何でこんな事もできないの？こんな事もわからないの？　馬鹿じゃないの、の発言と態度を崩さない。
図体は並みの大人よりデカいけど、中身は十四歳のお子様。ガキすぎて傲慢なんだとわかっていても、見てるだけでムカついた。ガジャクティンからは、絶対、何にも教わるものかという気になる。

ガジュルシンは私の修行に付き合ってくれた。
昼は、私の周囲に人が近づいてこないよう結界や幻術を張り、負傷した私を癒す為に、常にそばにいてくれた。
夜は、侯爵家に滞在中の宮廷魔法使いからいろんな事を教わっているようだった。本で読んで呪文だけは覚えている魔法の使い方と

か、魔法の性質とか魔力の込め方とか、実践的な魔法のコツのようなものを。

私は魔法を使えないからよくわからないんだけど、ガジュルシンはどうも魔法の天才らしい。それも、大魔術師レベルなのだそうだ。カルヴェル様の真の後継者たりうる実力なのだと、宮廷魔法使いが興奮して教えてくれた。

数系統の魔法が操れる事も凄いが、もっと凄いのは魔力の膨大さらしい。ガジュルシンの移動魔法には回数制限はなく、跳べる距離も半端ないとか。

移動魔法が得意と言われる宮廷魔法使いですら、国をまたぐ移動魔法を一回でも使えば魔力が尽きるのが普通なのだから、ガジュルシンの魔力は異常とも言えた。

まだ経験を伴っていないので、魔法の使い方に無駄が多いとのことで、宮廷魔法使いはさまざまなアドバイスをしているようだった。

で、私は……

毎日、日が沈むまで、『勇者の剣』と戦っていた。

私は、今まで、いつもお父様の事を考えていた。

お父様、今、何をしているかしら？　ご政務で苦労なさっているのかしら？　お昼には後宮にいらっしゃるのかしら、それとも夜？

勇者のお勉強をする時も、お父様に褒めてもらえるよう頑張ろうと思ってたし（身についてないけど）……

素敵な衣装を見ても、これを着た私を見たらお父様は何っておっしゃってくださるかしらと想像して……

それから、乙女だから、その……初めての×××のことを……あーでもない、こーでもないと妄想……じゃない、夢想したりして胸をときめかせたり……

何をするでもお父様の事を考えてしまっていた。
意識してやってるんじゃない。息をするみたいに自然に、お父様の事を考えてきたのだ。
習慣にもなってしまっている。
意識して何かに集中しない限り、どーしたってお父様の事を考えてしまう。
だから、『勇者の剣』と戦い続けた。
『勇者の剣』に私の偉大さをわからせて、屈服させる事だけを考えた。
寝ても覚めても『勇者の剣』の事だけを考えようとした。

毎日、ガジャクティンに頼んで、『勇者の剣』を裏庭に運んでもらった。
周囲が木で囲まれた場所にガジュルシンに結界を張ってもらって、私は戦った。
『勇者の剣』は私が触れようとすると、地面にめりこむ。
しかし、私は負けない、『勇者の剣』に罵声を浴びせ続け、踏んづけてやった。地面深くにめりこんだら、棒で小突いたり、石を投げてやったりした。『逃げるなんて、卑怯だわ！』って馬鹿にしてやりながら。
重くなるだけじゃなくって、『勇者の剣』は、私めがけて雷を落したり、雷撃魔法を放ったりした。といっても、向こうにしてみれば軽い抵抗なんだと思う。一撃で殺すほどの致死性の高い攻撃はされなかったから。せいぜい失神する程度だ。
神聖防具の鎧をつけてるから、多少は、ダメージは軽減されている。それでも、毎日、傷だらけ、火傷だらけになった。
ガジュルシンは卒倒しそうなほど真っ青な顔で私を見守り、癒してくれた。ずいぶん心配もされたけど、平気と答えておいた。
『勇者の剣』が手ごわいから、私はがむしゃらになれた。

『勇者の剣』とととことんぶつかりあって、私って人間を理解させなくっちゃって、闘志もわいた。

「あんたになんか絶対に負けないわ！」

全身に痺れを感じながら、私は『勇者の剣』を睨んだ。

「今世が滅びたら、あんただって困るでしょうが！　理想を追い求めるのは平和な時だけにしてちょうだい！　馬鹿だろうが阿呆だろうがカスだろうが女だろうが、誰だっていいじゃない！　あんたを使って大魔王を倒したい奴がここにいるのよ！　協力したらどうなの？」

鞘を踏んづけてやったら、燃える鉄のように熱くなって反撃してきた。この馬鹿剣がぁ！

「大魔王が復活したのに、仕事をサボるなんて最低よ！　あんた、我がままだわ！　ラグヴェイ様の血筋じゃなきゃ嫌だの、両手剣が上手に使えなきゃ嫌だの、男でなきゃ嫌だの……ごちゃごちゃうるさい！　理想は理想！　現実は現実よ！　妥協しておとしどころを見つけなさいよ！　あんた七百年以上、この世に存在してるんだから、ちょっとは大人になったら？」

私の説得方法に、おじい様はびっくりしていた。カルヴェル様がいらっしゃったらよく相談なさいとも、おっしゃった。しかし、昨日には、

「あまり賛成できないやり方だけれども……『勇者の剣』には思考力も感情もある。物扱いしないで、ライバルとして扱う事は、あながち間違いではないかもしれないね」との言葉をくださった。

『勇者の剣』に私がズタボロにされるのだ。超過保護なジライが、ああだこうだぎゃあぎゃあわめくだろうと思ってた。邪魔をしたらぶん殴ってやろうとも思っていた。

でも、ジライは勝負中の私には全く接触してこなかった。ガジュルシンがそばにいたから、警護と治療は完全に任せてるって感じだった。

休憩用の飲み物と食べ物を、ほどよい時間にそっと用意してくれてたから、覗いてはいたんだと思うけど。

部屋に戻ると、いつも湯浴みの準備は整っていた。お風呂から上がった私の手足や腰を、ジライは長時間マッサージしてほぐしてくれた。ガジュルシンから回復魔法をかけてもらっていたけれど、ほぐしてもらうと筋肉がこわばっていたんだとよくわかる。ジライのおかげで体は随分、楽になった。

で、その後は、髪やら肌やら爪やらの手入れをしてくれる。座ってるだけで全部やってくれる。気持ちよくってうたた寝しちゃうと、ベッドに運んでくれる。おじい様との夕食の時間の前には必ず声をかけてくるけど、私が眠そうだと、そのまま放っておいてくれた。で、夜にふと目覚めると、夕飯を食べてない私の為に、夜食をサッと準備してくれる。

なに、これ？

なんなの、この細やかなサービス。

私付きの侍女だって、ここまで完璧にお世話してくれなかったわ！

私はジライを見直した……むろん、ほんのちょっとだけど。

お母様がジライを第一の奴隷にしている理由が、少しだけわかったがした。優秀な奴隷っていいものなのねえ。

夜食を食べながら、給仕してくれるジライに聞いてみた。

昼間の私の勝負を見てどう思う？　って。

「お美しいと思いながら、陰ながら拝見しております」

と、ジライは答えた。

「あの阿呆剣を、ラーニャ様は真摯にお相手しておられる。いずれはアレにもラーニャ様の気高きお心が伝わりましょう。ご納得がゆ

くまで、ラーニャ様が思う通りにあやつを躾ればよろしいかと」
発言内容はあいかわらず大ボケだけど、私のやり方を肯定してくれてるのはわかった。
「ラーニャ様こそセレス様の跡を継ぐべき貴きお方。ラーニャ様があの剣を用い、ケルベゾールドを滅ぼす日を私は心待ちにしております」

カルヴェル様がいらっしゃった時、私は『勇者の剣』と戦っている最中だった。

軽い電撃を浴びたせいで、気絶してたんだと思う。
「ホホホホ、無茶しておるのう」
笑い声で、私は目覚めた。
地面に寝っころがっている私のすぐそばには、ガジュルシンが居た。治癒魔法をかけてくれてたみたい。
で、ちょっと視線を上に向けると、空中に黒いローブが浮かんでいるのが見えた。
白髪白い髭の皺だらけのおじいちゃん。魔法使いの杖を持った黒のローブのおじいさんが宙に浮かんでいた……
私は痛む体をどうにか動かして上体を起こした。ガジュシンが背を支えてくれる。
「カルヴェル様……おひさしぶりです」
「うむ。大きゅうなったのう、ラーニャ。今では、すっかり、セレスによう似た別嬪の姫様じゃな」
お母様の神聖魔法の師――当代随一の大魔術師カルヴェル様。
大魔術師様はインディラ王家とは懇意だ。
毎年、年明けには必ず子供達の人数分、変わった魔法道具（マジック・アイテム）を転送魔法で贈ってくださった。萎れることのない花の挿さった一輪挿し

の花瓶とか、空中を泳ぐ魚とか、歌う鏡とか、返事をする小箱とか、玩具のようなものを。

最後にお会いしたのは、確か、ガジュルヤーマの誕生祝いの席。大魔術師様はインディラ王家に家族が増える度に顔を出してくださっていたとか。私が覚えているのはガジャクティンの時と、ガジュルヤーマの時だけだけど。

カルヴェル様の視線が、私から地面に転がっている剣へと動く。私と戦い、踏まれ、土や埃をかぶり、『勇者の剣』も汚れている。

「ふむ」

カルヴェル様は顎髭を撫で、首を傾げられた。

「しばらく、こやつと二人っきりにしてくれまいか？　腹をわって話してみるわ」

やっぱり魔法剣と話せるのか大魔術師って凄いなあと思い、私は素直に頷きを返した。

ガジュルシンに支えられながら、私は屋敷の中へと戻って行った。

「おぬしと戦うのは、もう御免だそうじゃ」

カルヴェル様がホホホホと笑われる。

『勇者の剣』はカルヴェル様の魔法で、私達――ガジュルシン、ガジャクティン、アーメット、ジライの前の宙を漂っていた。

私の部屋に集まった一同は、皆、宙を彷徨う剣を見つめていた。

「おぬし、こやつに持ち手と認められるまで、ずっと挑戦を続ける気じゃろ？」

その問いに、頷きを返した。ガジュルシンに疲労回復の魔法までかけてもらったから、すっかり元気になった。やろうと思えば、今日も夕方までばっちり戦える。

「ラーニャのようなおなごは大嫌いゆえ、何万回挑まれようが、答えは変わらぬ。天地がひっくりかえっても主人と認める気はないそうじゃ」

む。

「じゃが、倒されても倒されてもへこたれず、不死人（ゾンビ）のように立ち上がり、知能のない単調攻撃を繰り返し続けた根性だけは認めてやる。三日も拒絶され続ければ脈なしと気づくのが普通じゃが、その当たり前の判断すらできない馬鹿さ加減には感服する。天晴れ、だそうじゃ」

それって……褒めてるの？

大魔術師様はニヤリと笑った。

「おぬしの根性に敬意を表し、大魔王を倒すまでの間だけならば妥協して力を貸してやってもよいと言ってるぞ」

本当に？

パーッと目の前が明るくなったような気がした。

良かったね、ラーニャと、横でガジュルシンが言った。

「ただし」

ん？

「『力を示して欲しい。持ち手にふさわしい剣の才を見せて欲しい』だそうじゃ」

『持ち手にふさわしい剣の才を示せ』？

「剣術の腕前をみせろってことですか？」

「そうではない。おぬしがどれほどの剣の技量かは、こやつは柄を握られただけで察する事ができる。そうではなく、実戦をせよと言っているのじゃ。剣の名手と名勝負をするとか、魔族を千体倒すとか、目に見える形の実力を示せと言うておるのじゃ」

勇者として活躍してみせろってことね……

「僕が闘ってあげてもいいよ」と、ガジャクティン。又もや、上から目線だ。何だっけ、何とか流の両手剣の印可らしいけど、本当、

生意気。
「いいや、ガジャクティン。おぬしでは駄目じゃ」
と、大魔術師様。
「『勇者の剣』は自分を用いて戦ってみせろと言うておる。岩をも触れただけで切り裂く『勇者の剣』。これとまともに戦えるのは、同じ聖なる武器を持つ者だけじゃが……」
老魔術師様の視線がジライに向く。変態だけど、こいつ、聖なる武器『ムラクモ』の使い手なのよね。
「おぬしは駄目じゃ。絶対、手を抜くゆえ」
そう断言され、ジライはチッ！　と、小さく舌打ちを漏らした。
「又、どうせ戦うのであれば、両手剣同士のがよかろう。しばし、待て、両手剣の達人を呼び寄せてやる」
両手剣の達人？
老魔術師様は懐から水晶珠を取り出され、それも宙に浮かした。呪文を詠唱すらしない。カルヴェル様がほんの少し魔力を高めただけで、水晶珠がまばゆく光り始める。
水晶珠の中に、何かが映る。
何か赤いものがある。
カルヴェル様がホホホホホと笑い声をあげられる。
「久しぶりじゃの、アジスタスフニルよ」
《あんたか……》
水晶珠から声が響いた。
水晶珠には人の顔が映っていた。
赤髪、赤髭の、ワイルドなおじ様。野性味あふれてて、ちょっと格好いいかも。
頭しか見えないから、その人がどんな所で何をしているのかはさっぱりわからない。けど、相手の視線は大魔術師様にぴったりと合っている。魔力の源を目できちんと捉えているのだ。
《何の用だ？》
あからさまに不機嫌そうに眉をしかめて、赤髪のおじ様が尋ねる。

「おぬしはわしに借りがある」
《は？》
「十九年前の事じゃ、大魔王の城からはよう出たがっていたおぬしを、わしが移動魔法でエウロペまで運んでやったではないか。まさか、その恩を忘れたとは言わないであろうな」
《十九年前だぁ？　いつの話してやがるんだ、クソじじい！　ンなもの、時効だ！　俺の知ったことか！》
「ホホホホ。あいかわらず短気じゃのう、おぬし。実はの、セレスの娘の今世の勇者のことで」
《断る！》
　気持ちよいほどの即答だ。
「頼みごとの内容ぐらいは聞け」
《言ったはずだ、あの時！　俺は、あのくそいまいましい女と変態忍者には、金輪際、二度と関わらねえとな！　傭兵時代だって、エウロペとインディラじゃ、絶対、仕事しねえようにしてたんだ。あの二人にうっかり出遭わねえようにな！》
「安心せい、ここにはセレスは居らぬ」
　あら、でも、大魔術師様、ジライはここに居るわよ……ほら、そこに。
　ジライが知らん顔をするようにそっぽをむく……相手にこっちの映像が見えてないから、あえて、伏せる気ね。
「なので、おぬしの都合さえよければ、移動魔法で運んでやるゆえ、ここまでパパーッと来てくれんかの？　『極光の剣』と共に」
《『極光の剣』？》
「うむ。セレスの娘が、セレスの時のように『勇者の剣』に嫌われておっての。すまぬが、おぬし、しばし稽古をつけてやってくれんかの？」
　水晶珠の中の赤髪の男が不審そうな顔をする。
《あんた……見えてないのか？》
「ん？」

《……見えてないんだな？》
「何がじゃ？」
赤髪の男はフンと鼻で笑った。
《『極光の剣』のことで相談したいんなら、ハリハールブダンと連絡をとれ。あの剣は、今、俺の手元にはない》
「何？　しかし、それでは、今、おぬし、先祖の加護がないのか？」
《ああ。だが、心配無用だ。魔族から身を守る術は上皇様からいただいている》
「じゃが、おぬし」
《ハリハールブダンと話せ。俺はもう両手剣は使えん》
水晶珠の中の映像がプッツリと途絶えた。
「お？」
大魔術師様が驚いておられる。相手側から強制的に映像を切られたからだ。大魔術師様の魔力をはねのけるなんて、あの赤髪の男の人、すごい魔法使いって事なのかしら？
「ジライ」
名を呼ばれ、変態忍者が大魔術師様のそばへと近寄る。
「おぬし、アジスタスフニルの事、なんぞ知っておるか？　わしは五年ばかりあやつとは会っておらんのじゃが」
ジライは肩をすくめた。
「私は大魔王討伐の旅の後、会っておりません。そういえば、最近、アレが傭兵として働いているという噂も流れてきておりませんな」
「……ふむ。わしが知らぬ間に、何ぞあったのか」
「さっきの赤毛の人って、もしかして、セレス様の従者だった赤毛の戦士アジャン？」
と、聞いたのは勇者おたくだ。
カルヴェル様は頷かれた。
「さよう。わしが知る限り、この世で最も巧みに両手剣を操る男であった、神魔の器となれる、比類なきシャーマン戦士であった」
すごぉいと無邪気に喜ぶガジャクティン。水晶珠ごしとはいえ過

去の英雄を見て、興奮しているようだ。
でも……
俺はもう両手剣は使えんと、あの人は言っていた。それって……
「……ケルティに行ってみるか」
そう言ってから、私達を見渡した。
「おぬしら、共に来い。ケルティの上皇様に会わせてやる」
「しかし」
慌ててガジュルシンが口をはさむ。
「北方三国は国境を閉鎖し、他国とはまったく交流していません。通行書無しに国境を越えれば、国際問題となります」
「うむ。じゃから、移動魔法でこっそり行くのじゃ」
老魔術師様は口を前に指を一本立てていた、『内緒』という合図で。
「ケルティの上皇様はわしの魔法の弟子での、なかなか話せる奴じゃ。姫勇者一行の非公式の訪問も、気を悪くせず、歓迎してくださるじゃろ。アジスタスフニルのことで会いに行く大義名分もあることじゃし、この機会に上皇様に顔を売っておいて損はないと思う。皆、共に来い」
「でも、そんな突然……先方にも都合が」
「いやいや、その心配は無用。あやつ、分身魔法が使えるでの。忙しいようなら分身をわしの方に寄越すじゃろ。来訪の意思のみ今、伝えておく。一時間後に出発するゆえ、皆、準備をしておけ」

そんなわけで、突然、私達は旅立つ事となった。
いつ旅立ってもいいように、もともと支度自体はしてたから、準備はすぐに整った。
私は、グスタフ兄様のお部屋で、兄様とおじい様にお別れの挨拶をした。
グスタフ兄様はここ数日の私と『勇者の剣』の戦いの事をおじい

様から聞いていた。あまり剣を苛めないでおくれよと言って笑い、
「美しい年頃の姫君に勇者の任をお任せするのは心苦しいが……この世の為、どうか勇者として働いてくれ、ラーニャ。病が癒えたら、僕も必ずラーニャのもとへ駆けつける」
その日が来るといい……ううん、必ず来て欲しい。そう思って、私は指先が黒くなっている兄様の右手にそっと自分の手を添えた。
「はい、兄様。兄様がお元気になられるその日まで、『勇者の剣』と共に頑張ります」
「王宮からは侯爵家から連絡をいれておく」と、おじい様。
「姫勇者の旅立ちを国をあげて見送れなかった事を国王陛下は残念に思われるだろうけれど、『大魔術師カルヴェル様に連れられて、どこぞへ行ってしまった』のなら、皆、納得しよう。大魔術師様の権威はある意味、強国エウロペ以上だからね」
おじい様は愉快そうに笑われた。
勇者一行が向かう先を、おじい様もグスタフ兄様も『知らない』事にした。
通行許可書無しに北方のケルティに行くなんて、馬鹿正直に言えないものね。

『勇者の剣』はガジャクティンに背負ってもらった。
私、ガジュルシン、ガジャクティン、アーメット、ジライの五人は大魔術師様の移動魔法で一瞬のうちにエウロペからケルティに運ばれていった。
本当、魔法って便利だ。

こうして、後に、姫勇者一行、或いは、ラジャラ王朝勇者一行と呼ばれる私達の旅は始まったのだった。

両手剣の達人？　突然の旅立ち！（後書き）

次回から新章　『極光の剣』と『龍の爪』　に入ります！

最初の話は、『北方の上皇様！　父よりは義父の方が……』で。

＋　＋　＋　＋　＋

活動報告の方に書きましたが、ラーニャちゃんの更新、少し先となります。が、どうぞよろしくお願いします。

ラーニャちゃんの更新前に、にじファンの方にちょこちょこっと書くと思います。形となったらアップ前に、活動報告に書きます。

北方の上皇様！　父よりは義父の方が……

正直、ここ何処……？　の気分だった。
ケルティの上皇様に会いに行くっておっしゃってなかった、大魔術師様？
ここ……どう見ても……

田舎の村なんですけど……

エウロペに比べ、陽射しがやわらかい。
よく澄み切った晴天。

牛のいななきやら鶏の声が、ちょっと遠くから聞こえる……

村の規模ってよくわからないけど、あんま大きくないと思う。
建物は結構、並んでるけど、小さいし飾りっ気持のない実用重視みたいな、言っちゃ悪いけど粗末な造り。
どれもこれも平屋。遠くに見える二階建ての建物は家畜小屋っぽいし。
多分、東西南北だと思うけど、四本の道がある。その道の合流する、広場っぽい所に私達は立っていた。
広場には、この村にしては大きな建物が二つ。教会と、もう一つは集会所だろうか？
私の側で『勇者の剣』を背負ったガジャクティンもキョロキョロしていた。

移動魔法で現われた私達を、幼い子供達が遠巻きに見ている。子守をしているのはおじいちゃん・おばあちゃんばっかり。若い人はいないのかしら？　と、思ってから昼間だからかと気づく。畑仕事とか猟とかに行ってるのね、きっと。

目の前に光が広がり、唐突に、人間が現われる。移動魔法ね。

白髪白髭のハンサムなおじ様だ。皮製の服を着て、腰に片手剣を佩いている。

「××××××××××、カルヴェル×」

？

今、何って言ったの、この方？

私の背後のジライが、インディラ語でボソッとつぶやく。

「ハリハールブダン上皇にございます。『よくぞおいでくださった、カルヴェル様』とケルティ語で話しかけられたのです」

上皇？

この平戦士みたいな格好の方が？

いや、それよりも……

ケルティ語ぉ！

嘘ぉ！

知らないわよ、そんなの！

国交のない国の言語まで覚えてないわよ！

ちょっと素敵なおじ様が笑みを浮かべて、私へと手を差し出してくる。

「××××××××××××。××××××、××××××××」

「『ハリ族の王ハリハールブダンだ。部族王の代表、上皇も務めている』と挨拶してます。ラーニャ様、シベルア語をお使いください。北方ではシベルア語が共通語として使われています」

そうなのか！

そういえば、リオネルが『これだけは、絶対、覚えてください！』と、繰り返し繰り返しシベルア語の授業をした。北方に行く準備だ

ったのね、あの授業。
私は大きなあたたかな手を握りながら、シベルア語で挨拶した。
シベルア語なら話せる（感謝したげるわよ、リオネル）。
「はじめまして、上皇様。今世の勇者となりました、ラーニャです」
「母上と一緒だな。ケルティ語は駄目か」
上皇様はシベルア語に切り替えてくれた。
「俺はハリ族の王ハリハールブダン、上皇でもある。セレス殿の娘、おまえは顔もセレス殿によく似ている。良い女だな」
そう言ってニヤリと笑われる。
あら……
そういう表情をすると、ちょっと野性的で素敵。
つづいて他のメンバーが上皇様に挨拶をする。
まずはインディ国第一王子のガジュルシンが、シベルア語で挨拶。
つづいて第三王子のガジャクティンの順番なのだが、糸目の義弟は私の耳元で、
「勇者なら各国の言語ぐらい覚えておきなよ、恥ずかしいなあ」
と、インディラ語でわざわざつぶやいてから、僕は話せるよと言いたそうな顔でフフンと笑ってから、上皇様の前に進み出てシベルア語で挨拶していた。勇者がシベルア語だったから、自分もそれに倣うって態度だ。
ムカッ！　と、したが……
ガジャクティンがケルティ語が話せるって事は……
もしかして……
話せないのは私だけ？
忍者の二人は世界中の言語がペラペラだろうし、優秀な跡取りであるガジュルシンが言語教育を施されてないわけがないし……
やだ、それって……超マズい。
格好悪すぎるわ！
ロマンス・グレーのおじ様が、一同を見渡す。
「まずは宴だ。簡単な食事を用意させた」

上皇様のご自宅は教会の横みたいだ。他の家よりは大きいけど、それだけ。集会所かと思った地味な建物だ。

「勇者殿のご希望は、『極光の剣』の使い手との対戦で良いのだな？」

私は頷いた。私が望んだわけではないが、カルヴェル様が両手剣の達人と対戦せよとおっしゃってるのだから、対戦できるのならした方がいい。

「では、すぐに東の畑につかいをやって、対戦の準備をさせよう。二年前より、『極光の剣』は我が息子ハリハラルドの妻アジンエンデが継いでいる。アレがアジ族一の使い手なので、剣が自らの意志で飛んできたのだ」

族長の館の中は、だだっぴろい一間しかない造りで、間仕切りで幾つかの空間に分けられていた。部屋すらないのか……と、ちょっとびっくりした。それに広いって言っても、王宮の私の部屋よりも狭いと思う。それに換気が悪いのか、ちょっと埃っぽい。壁のタペストリーは綺麗だけど、家具もあんまり置いてない。

私の内心の戸惑いを感じ取ってるのか、ジライが小声でいろいろと説明してくれる。たぶん、他の人には聞こえない、小さな声で。

「部族王の家は富貴とは無縁です。現在ケルティには十一人の部族王がおり、ハリハールブダンはその内の一人であり上皇です。古来よりケルティには国王を頂く気風はなく、部族ごとにそれぞれ王をたて、多くの部族が集まって国という形をなしていました。セレス様がケルティを訪れた頃、この地はシベルアに支配されており、部族王の権威も地に落ちておりました。が、セレス様のご活躍で部族王を束ねる上皇制度が復活し、ケルティ人はシベルアの支配から抜け出られたのです」

そういえばそんな歴史、習ったような気もする。

「上皇の左のニの指にあるのが、『知恵の指輪』にございます。魔

力を増加させるあの指輪のおかげ、そしてカルヴェル様のご指導の賜物で、ハリハールブダンは世界でも三本の指に入るほどの大魔術師となりました。ハリハールブダンが上皇についている事がシベルアへの牽制となり、この国をシベルアの専横から守っているのです」

白髭戦士のおじ様の左手の指には、金の指輪があった。綺麗な細工だ。

地味な格好の女の人が移動式の机と椅子を運んできて、醸造ビールやらパンやらチーズやらを並べてくれた。

全て村人の手作りなのだそうだ。

ガジュルシンとガジャクティンは、宗教上の禁忌であるとビールを断った。

薄荷水を持ってきてもらってたので、私もビールではなくそちらを貰った。

食事は美味しかった。味付けは単純だけど。素材が良いのだと思う。

兜と口布を外したアーメトもぱくぱく食べている。

年配のケルティ人がいれかわりのように顔を出しては、ガジュルシンとガジャクティンに挨拶をしていく。主に声をかけられているのは第三王子のガジャクティンの方だ。何で？　って思ったけど、ケルティ語で話してるので何の話をしてるんだかさっぱりわからない。

「ナーダは上皇制度のたちあげ時に、ケルティ人に協力をしました。知恵を与え、金を渡して。それを覚えている年配者が、義理堅く未だに感謝しておるのでしょう」

と、説明するジライは、ビールを口に運んでいた。家族以外の前で覆面を取るなんて珍しい。お酒を飲んでるのも初めて見る。何か変な感じ。

給仕の女の人が、ジライの顔をジーッと見ている。白子だし珍しい外見だものね。

でも、さすがナーダお父様！　ここでも人徳を示されていたのね。

ガジャクティンの方に注目が集まってるのは、外見のせいなんだろうけど……ううん、違うわ、あの傲慢な義弟がお父様に似ているもんですか！

＊　＊　＊　＊　＊

後宮育ちの子供達が、貧しさへの偏見も悪意もなく、村人の精一杯の歓迎に上機嫌で応えてくれたのは良かった。まあ、あのナーダの子らだ。下々の者を見下げるような阿呆には育っておるはずもないが。

しかし、ジライ、よう覆面を外したものだ。子供達が酒を断っている状況で従者の自分までもが歓迎の食事を拒否しては、女勇者の立場が悪くなると判断したのだろう。病的に素顔を隠していた頃に比べ、ずいぶん人間が丸くなったものだ。給仕の女奴隷は白い外見の美しい男性に心奪われて惚け、主人のハリハールブダンに叱られていた。

「二年前、アジスタスフニルに何があったのだ？」

わしのケルティ語での問いに、ビールを口に運びながら、ハリハールブダンは簡潔に答えた。

「左腕を失った」

「……そうか」

そういう事か……

わしはビールを喉に流し込んだ。

ケルティでは、欠けたる者には王の資格はない。『極光の剣』はケルティのアジ族に代々伝わってきた聖なる武器。アジの王のみが持てる武器だ。アジスタスフニルが左腕を失ったのなら、剣にとってそれは主人の死を意味する。

剣は自分を持つにふさわしい者の元へと、飛んで行ったのだろう。

昔、わしが、アジスタスフニルが死んだ時には跡取りの元へ転送するよう魔法をかけておいたゆえ。

神魔の器となれる優秀なシャーマンであるアジスタスフニルは、よく魔族に狙われた。宿る器が優秀であればあるほど、魔族は魔界での本来の能力を今世で引き出せるようになるからだ。

『極光の剣』が共にあれば先祖の霊の加護を受けられるゆえ、魔を退ける力を身につけられるのだが……

「あやつが左腕を失った事、なにゆえ、わしに黙っていた？」

「あなたには教えるなと言われた」

ハリハールブダンは女奴隷に次の杯を持ってこさせていた。淡白そうに見える。が、ケルティ人らしくこやつ、のんべじゃ。ほっとくとガブガブ、酒を飲み続ける。

「『極光の剣』の代わりを恩着せがましく押しつけられるのは、御免だと言っていた」

「むぅ」

「借りができると、後で返せと言われる。だから、嫌なのだそうだ」

わしは、それほどアコギな要求はしてこなかったつもりなんじゃが……

「返せるアテのない借りは作りたくないとも言っていた」

「……失ったのは左腕だけか？」

「そうだ」

「何があった？」

「それは話せない」

空になった杯を女奴隷に渡し、ハリハールブダンは三杯目に入っていた。昼間っから、よう飲むわ。

「口止めされている。あなたは俺の魔法の師だが、あなたとアジスタスフニル、どちらを取るかといわれれば俺は半身を選ぶ」

「まあ、それはそうじゃろうな」

『極光の剣』の持ち手アジスタスフニルと『知恵の指輪』の所有者ハリハールブダンは、二十年近く前、力を一つに合わせ祖先神を今

世に呼び寄せた。その時、二人の魂は一つに溶け合っていた。アジスタスフニルはハリハールブダンであり、ハリハールブダンはアジスタスフニルであった。二人の間には、以後、ずっと、神秘の絆がある。

「二年前、アジスタスフニルには魔除けの魔法道具（マジック・アイテム）を山のように渡し、片手で扱える聖なる武器も譲った。以後、今日まで無事に生きてきたのだから、俺の助力も的ハズレではなかったと思う」

「うむ」

「だが、俺が与えたものなど、しょせんは道具だ。能力は低い。大魔王ならば壊せるはずだ」

「そうじゃな」

「毎日、遠話で、騒動が静まるまでの間だけでいいから俺の元に来いと説得している。だが、あの男、聞かん。強情だ」

「昔っから頑固な奴じゃったが……そうか、『極光の剣』を持たぬあやつが今世をフラフラしておるのか……」

危険じゃな。

「居場所はわかるのか？」

「おおまかにだが、わかる」

「保護したい。教えてくれんか？」

「……今宵、もう一度、話す約束になっていたのだが……わかった。連絡をとってみる。俺の元に来ないのなら、大魔術師様に居場所をバラすと脅せば、アジスタスフニルも観念するだろう」

だと良いが……

「しかし……遅いな」

戻って来た女奴隷に二言三言言葉をかけてから、ハリハールブダンは立ち上がり、わしとラーニャの方を見てシベルア語で言った。

「『極光の剣』の使い手が支度に手間取っているようだ。カルヴェル様、ラーニャ殿、共に来て欲しい。ああ、他の者は今しばらく、ここで食事を楽しまれよ」

＊　＊　＊　＊　＊

私の抜いた『虹の小剣』は、カルヴェル様の杖によって阻まれた。
「手を出すでない」
厳しい口調で大魔術師様がおっしゃる。
でも……
ハリハールブダン様が案内してくれた建物。
そこの扉を開けた途端、中の者が斬りかかってきたのだ。
大きな両手剣をもって。
賊だ！　と、思い私は聖なる武器を抜いたのだが、上皇様に怪我はない。
刃は上皇様の目の前の宙で止まった。
物理障壁を張ったのだろうか。
刃を持つ者がぎりぎりと歯をくいしばり、上皇様を睨みつける。
赤い髪、緑の瞳の、女性だ。腰までの髪を束ねもせず、背に垂らしている。女性にしては大柄で、私より頭二つ分ぐらい大きそう。
それはともかく……

何、この人……？

変態……って奴？

あっけにとられる私の横でカルヴェル様がホホホホと笑い、上皇様とレイの意味不明の言語でしゃべり、襲撃者の女性も二人に対し怒鳴っていた。

でも、何って言ってるのか、さっぱりわからない。
手を出すなと言われちゃったから、戦う事もできない。
だから、私は襲撃者の体を見てるしかなかった。

何っていうか……

不愉快な体をしていた。

背が高いから余計、そう見えるんだろう。むろん、その衣装のせいもあるんだけど……

「すげぇ！　ボン、キュッ、ボンじゃねえか！」
と、いきなり背後から不愉快な声がした。
アーメットだ。
何であんたがここにいるのよ！　と、思って睨みつけてやったんだが、弟は私を完全（ガン）無視で両手剣の女を凝視していた。
「うぉぉ、お母様よりデカいわ、こりゃ」
へらぁ～と鼻の下を伸ばしながら。

右手は『虹の小剣』で塞がっていたので、左手で容赦なく馬鹿弟をこらしめてやった。
私のパンチをくらい、アーメットが宙を舞う。その両腕は『勇者の剣』を抱えていた。
それを届けに後を追ってきたのだろうけど……
どうでもいいわ、そんな事！

ど～して、男って、こう……

巨乳が好きなのよ！

変態女と私の視線が合う。
顔を赤く染めて興奮している女が、無遠慮に私を睨みつける。
私も、むろん、睨み返してやった。
向こうが何か言ったけど、わかんないわよ、ケルティ語なんて。
だから、インディラ語で返してやった。
「ジロジロ見てるんじゃないわよ！　この変態！　あんたには慎みってものがないの？」と。

この女は……露出狂だ。
間違いない。
ストラップレスの赤いブラに、下半身は赤いハイレグの下着。後は、肘から手首までを赤い腕輪で、膝下から足の先までを赤いブーツで覆ってるだけ。
ほぼ裸じゃない！
そんな格好で剣を振り回してるんだ。
変態だ。
そんなに見せたいわけ？
乳牛みたいな胸と、男の人を窒息させかねないデカい尻を！

上皇様に何か言われ、その女は更に私を激しく睨みこう言った。

「私と戦え、女勇者！」
今度は何って言ってるのかわかった。
シベルア語に切り替えてきたのだ。
「今すぐにだ！　ここで！　さっさとやるぞ！」
上皇様から距離をとるように室内に飛び退り、大剣を構え、女性が私を睨みつける。
彼女の手にあるのは、身長ほどもある大きな両手剣……『勇者の剣』より大きそうだ。
これがもしかして……『極光の剣』……？
「早くしろ！　中に入れ！」
興奮のあまりだろう、顔を赤く染め、女の人が私を怒鳴りつける。
「さっさとしろ！　ノロマ！」
さすがにカチンとくる。
「室内で剣の勝負をする気？　馬鹿じゃないの？」
私もシベルア語で言い返した。
「あんたの剣も、『勇者の剣』も無駄にデカくて小回りがきかない大剣なのよ。何でわざわざ、室内で勝負しなきゃいけないのよ！」
「馬鹿女！　私に外に出ろと言うのか？」
顔中を真っ赤に染め、眉をしかめ、大女の露出狂が唇を震わせる。

「こんな格好で人前に出るぐらいなら死んでやる！」

あら？
よく見れば……
目に涙が……？

あれ？

「その赤い鎧は俺の魔力をこめた魔法鎧だ」と、上皇様。
魔法鎧……？
この下着が……？
よく見れば確かに布じゃないわね……でも、皮でも鉄でもない。奇妙な光沢のある金属のような、骨のような……？
「二年前、我が息子の嫁が『極光の剣』の振るい手に選ばれた記念に造ったものだ。持ち手の成長にあわせ成長する魔法鎧だ。防御力に欠ける見た目だが、四部位を揃えて装着すれば、全身に物理・魔法障壁が張り巡らされる優れもの。並みの刃ならば、我が惣領の嫁が傷つく事はない」
と、上皇様。
「なんでこんなイカれたデザインなんだ！」
大女がブラのところから取り出した紙切れを、上皇様へとつきつける。
「剣の勝負前にこの呪文を唱えろとの、あなたからの命令に従ったらこの始末だ！　どっかから飛んで来た赤いものが、私の体にはりついた！　しかも、外れない！　上に何もまとえない！　どうなっているんだ！」
「わからんのか、アジンエンデ」
心外そうにケルティの上皇様は言う。
「今日はおまえの晴れ舞台なのだ」
「は？」
「おまえが『極光の剣』を継いだ姿を、いずれ、おまえの父や俺の魔法の師カルヴェル様が見に来る日もあろう。そう思い、おまえの美貌が栄える装備を準備しておいてやったのだ。感謝しろ」
「このデザインの、これが、か！」
「デザインは……」
上皇様はそこでいったん言葉を区切ってから、きっぱりと言い切

った。
「おまえの父とカルヴェル様が喜ぶであろうものを、敢えて選んでみた」

「ホホホホ、眼福、眼福」
と、笑う大魔術師様の前で、裸みたいな格好の女の人がケルティの上皇様にやけになって斬りかかっていた。物理障壁に阻まれるので、その刃はどう頑張っても、上皇様に届かないんだけど……

えっと……

この二人って、舅と、息子の嫁って関係なのよね……

まあ……

どこの家庭にもいるわよね、変態って……
それが義理の父親じゃあねえ……
本当の父親よりはマシだけど……

初対面の印象は最悪だった大女に、今では私は同情していた。

「その鎧は『極光の剣』を見事に操らねば、外れん。そういう仕組みになっている」

と、追い討ちをかけるかのように、上皇様。

ひとしきり舅の周囲で剣を振りまくってから、女の人は斬るのをあきらめ、キッ！　と、私を睨むように見つめた。

「すまん！　そういうわけだ！　私と戦ってくれ！　女勇者！」

涙目の理由がようやくわかったわ。
その格好で外に出るのも嫌だろうし、上に何もまとえないんじゃ隠しようがないし、脱げないんじゃトイレにも行けないだろうし……

だから、私と戦いたがっていたのね。

ふ～ん。

かわいそうって思う気持ちも、かなりあるんだけど……

勝気そうな赤毛の美人が、裸同然の姿で屈辱に身を震わせながら、部族一の戦士という矜持をもって私を倒そうとしている……

これって……結構……

好みのシチュエーションかも……

私って、ギャップ萌えなのよね……

お父様が素敵なのも……まったくそんなケがなさそうな聖人風で、誰にもおやさしくって、抱擁力のあるオ・ト・ナで、筋肉質でたいへん逞しいのに……お母様の奴隷の一人なんだって知ったから……。お父様のあの涼しげな美貌が、お母様の愛のプレイでどう変わっているの？　ご抵抗なさってるのかしら？　それとも絶対服従？　苦痛と快楽で、うっとりとなさっているそのお顔を見たい！　見たい！　見たい！　ってずっと思ってきたんだけど……

ハッ！

いけない、つい、お父様のこと、考えちゃった！

私は勇者……私は勇者……私は勇者……

見るからに軟弱そうな、いぢめて～と全身で訴えるようなMは、まったくもって好みじゃないけど……

鼻っぱしらが強そうで潔癖そうな赤毛美人が、すっごい似合ってるけど本人は嫌で嫌でたまらないいやらしい格好で私に挑んでくる……私を倒すことで、誇りを守る為に……。

かなり萌えツボだわ！

これは何としても、たたきのめして、私に屈服させなくっちゃ！

彼女の絶望と屈辱の涙は、きっと美しいわ。

だから、言ってやったの。

「悪いけど、その挑戦は受けられないわ」って。

赤毛の女戦士は眉をつりあげ、緑の瞳で刺すように私を睨みつけ

た。
「何故、拒む？　きさま、剣の勝負をしにきたのだろう？」
激する相手に対し、私は落ち着いた声で答えてやった。
「ええ、私は両手剣の達人との勝負にきたのよ」
私は彼女の背後の室内を見渡した。
建物自体が狭いし、テーブルはあるし、椅子はあるし、炉はあるし、入口から向かって右の壁には食器棚やら衣装ケースやら大箱やらが並んでいる、一間の生活空間。部屋の奥には間仕切りの衝立があった。あの向こうにベッドがあるのだろうか。
「ここじゃ剣は満足にふるえないもの。あなたと戦ったところで、ろくな勝負にならないわ」
「し、しかし！」
女戦士は必死だった。ストラップレスの赤いブラ、下半身は赤いハイレグの下着……にしか見えない魔法鎧は、上皇様いわく、
「『極光の剣』を見事に操らねば、外れん。そういう仕組みになっている」
だそうなので、私と戦って勝ち、早くこの鎧を脱ぎたいのだ。
「剣の勝負は必ず広い場所でやるものではない！　寝込みを襲われることもある！　いかなる時、いかなる場所、いかなる状態であろうが、戦えねば戦士ではない！」
あ、もう、墓穴を掘ってくれた。
やっぱ、見た目通り、直情的な人だわ、この人。
「そう、いかなる時、いかなる場所、いかなる状態であろうと、戦えなきゃ戦士ではないわ」
「その通りだ！　わかっているのなら、私と」
「だから、外で戦いましょ」
「は？」
「あなた、今、言ったじゃない。『いかなる時、いかなる場所、いかなる状態であろうが、戦えねば戦士ではない』って。どんな格好であろうが……それこそすっぱだかだろうが、戦となったら戦うそ

れが戦士じゃなくって？」
「……」
「私も、狭い場所で戦えないわけじゃないわ。お母様から室内戦を想定した訓練を受けてきたもの。でも、広い場所の方が互いの持てる技術をぶつけあえると思うの。両手剣の達人の本当の腕前を拝見したいわ」
「……」
目に涙をためたまま、女戦士が私を睨みつける。
いい顔。
私の言葉が正論だから言い返せないのよね。悔しくって、たまらないって感じ。でも、下着みたいな格好で外にも出たくない。
後、もう一歩ね。
「わかったわ。残念だけど、勝負はあきらめる。今、あなたは戦えない状態なのよね。恥ずかしいんでしょ？　勝負よりも、裸を隠す事の方がず～とず～と大事なんでしょ？　よぉ～く、わかったわ。仕方ないわよね、あなた、女ですもの。戦士じゃなくって、ただの女よね」

「受けて立ってやる！　外に出ろ！　女勇者！」

うぅ～ん、単純。
かわいいかも。

「鬼」
『勇者の剣』を抱え戸口に戻っていたアーメットが、私の耳元でボソリとつぶやく。
鬼じゃないわよ、女王様よ。獲物自らの意志で逃げ場を無くさせ、

網の中にからめとってあげる。お母様の話術を見てるから、これぐらい軽いものよ。

けど、女王様としては……

ここで負けるわけにはいかない。

剣の腕前に自負を持っている相手を負かし、屈辱に酔わせてやらなきゃ話にならない。

むろん、『勇者の剣』に認められる為でもあるんだけど。

アーメットから剣を受け取る。

持てるには持てた。

しかし、剣がずっしりと腕にのしかかる。

なに、これ？

両手剣の重さじゃないわよ、これ。

男の人を抱えてるみたい。腕があがらない……

これで両手剣の名手と闘えっての？

無茶言ってくれるわ、聖なる武器様は。

戦えって言うんならやるけど……

『力を示して欲しい。持ち手にふさわしい剣の才を見せて欲しい』ってのなら、対等の条件で戦わせてほしかった。

『勇者の剣』的には不利な条件をものともせず、私が好勝負すれば満足なのかもしれない。

でも、戦うからには勝たなきゃ意味がない。

私はアーメットを招きよせ、その耳元に囁いた。

戦う理由！　勇者として！

上皇様のご自宅と教会の前は、広場ってほどじゃないけど、空間が開いている。

私はそこで、赤毛の女戦士――アジンエンデと対峙していた。

カルヴェル様、上皇様、ガジュルシン、ガジャクティンは上皇様の家の前におり、周囲の家々の前には老人や子供がいた。窓を開き、家の中から覗いている者もいる。皆、突然、始まったイベントに興味津々って感じだ。白銀の鎧姿の美女ＶＳセクシーな赤毛美人（しかも知人）の大剣対決だ。見なきゃ損よね。

アジンエンデは顔を朱色に染めたままだ。大剣を抜き、様子を見る為か両脚を大きく開いて腰を落とし下段に構えていた。

対する私も下段だが、こちらはその構えしかできないだけだ。まともに持ってたら腕がしびれてしまうので、剣先は地面につけている。しかし、重そうに持っているようには見えないよう、涼しげな表情はつくっている。

家畜の鳴き声が聞こえる。

無邪気にざわめく子供達の声もする。多分、なにやってるの？　とか、なんでアジエンデは裸なの？　とか言ってるんだと思う。

アジンエンデの顔の色が、どんどん赤くなってくから。

勝負に集中できていないのだ。

きっと、とっとと勝負を決めたいと思ってるはず。この公開羞恥プレイ状態から解放されるには剣の勝負を終わらせるしかないもの。

でも、私からは仕掛けない。というか、仕掛けられない、剣が重くて。

私が守りの構えを崩さないとみてとり、アジンエンデは『極光の剣』を右肩に担ぎあげた構えで、私の左側へとまわりこむように走って来る。

私は下段の構えのまま、相手の動きに合わせて体の向きを変え、

半円を描くようにし剣先を振り回した。
私の死角をつこうと大きく動く相手に対し、防御の構えの私は小さく動くだけですむ。向こうが剣の間合いにつっこんできたら、剣先をあげるだけでいいのだ。
むろん、その反撃をかわされたら、重い剣を持つ私に次の手はない。相手がいつ仕掛けてくるか見極めようと、私は必死に相手の動きを目で追った。
アジンエンデがくるっと身を翻した……と、思った時には剣の切っ先が迫ってきていた。
反射的に剣をもちあげて防いだのだが……
何が起きたか一瞬、わからなかった。
届く間合いではなかったのに、剣は私の体を貫くほど迫っていた。
再びアジンエンデが反対側に回転する。
違う角度から、また、ぐんと剣が迫って来る。
彼女は巨大な両手剣を……右手、左手ともちかえて片手だけで握って、まるで細剣（フェンシング）のような構えで仕掛けてきていたのだ。
しかも、軽々と。
二手、三手とアジンエンデの攻撃を防ぐうちに、腕が楽になってきた。『勇者の剣』の重量が少しづつ軽くなってきているのだ。剣の名手に対する私の動きを『勇者の剣』はお気に召しているようだ。
アジンエンデは地面ぎりぎりに身を低くしたかと思うと倒れこむように足を狙ってき、回転と共に立ち上がると振り向きざまに宙を薙ぐ。機敏で軽快、そして奇抜な動きだ。巨大な両手剣を、左右どちらの片手でも扱え、時には両手で握ったりする。
間合いはつかみづらいし、動きの予想がつかない。
防戦一方にならざるをえない。
「思ったよりも、やるな。私の剣をここまで受けられるとは」
アジンエンデの口元には笑みが浮かんでいた。大型肉食獣を思わせる笑みだ。
「だが、きさまのハエが止まるような剣では、私を捉えられん」

ムカッ。

こっちが重たい剣で苦労してるとも知らないで～

アジンエンデの剣は、変幻自在。本来、両手で持つ重量の武器を両の片手で扱え、下半身にバネがある為に瞬時に一気に距離をつめることができる。

だが、それは……

正規の両手剣の鍛錬を積んできた者に、片腕で挑む無謀な行為でもあった。

体重をのせた強力な一撃を当てられれば、アジンエンデは片手では重い剣を支えられず落としてしまうだろう。又、彼女からの攻撃も片手の時はさほど威力がないとみていい。おそらく、突きと牽制のみだ。敵にとどめを刺す叩き斬るような行為は、両手でなければ不可能だ。

勝機はある。

問題は変則的に動く彼女の剣を、いかに捉えるかなのだ。

素早さではどうあがいても勝てない。『勇者の剣』はだいぶ軽くなったものの、『持っていることを忘れるほどの軽さ』には程遠く、並みの両手剣よりも重い。

間合い（リーチ）も負けている。剣を持つ手だけを前に突き出し体を横にして戦える相手に対し、こちらは両手で剣を支えて構えなくてはいけない。攻撃可能な角度も狭い。

私は周囲に視線を走らせ、建物の位置をすばやく把握する。

戦いを始める前、方位は確認しておいたのだ。

私は後退する時は東を背にするよう意識していた。

アジンエンデは余裕の笑みだ。

『それなりには使えるが、自分よりは劣る相手』と、私を見下しているのだ。

『極光の剣』を自在に使える彼女に対して、『勇者の剣』との仲があまりよろしくない私では、確かにその通りではあるけど。

私はひたすら防戦に徹し、機会を待った。

彼女に隙ができる時を。
焦らずに待てば……
その時がやってくることを私は知っていた。
前足で地面を蹴って後方に飛び退ってから、しゃがみ、右で攻めるとみせて左手に持ち替えた剣でひねるように攻撃をしかけかけ……
彼女の動きが鈍る。
その視線は私の後方に向いていた。
彼女の顔がカーッと真っ赤に染まった。
ようやく来たのね……
私はほくそえみながら、『勇者の剣』をできるだけ振り上げ、体重を乗せたそれを一気に振り下ろした。

私の背後からは……
東の畑で働いていた村人達が近づいて来ている。
上皇様は『極光の剣』の使い手に準備をさせると言った時、東の畑に使いをやると言っていた。
私が来るまで、彼女がそこで働いていたのだとしたら……
彼女と近しい者もそこで働いているはず。
そう思い、アーメットを東の畑に向かわせ、勝負前にジライにも周囲で働く者を村に向かわせるよう命じておいたのだ。

案の定、東からは……

「ハリハラルド！　××××××！」
『極光の剣』を地面に落としたアジンエンデはしゃがみこみ、胸を隠すように両腕を組んでいた。真っ赤に染めた顔を、三十代ぐらいの、剣を佩いた逞しい男性に向けながら。

この人が上皇様の息子――アジンエンデの旦那様なわけね。
男は茶色い髪を掻き、朴訥そうな顔で慰めるように彼女に話しかけた。
「××××××××、××××××××……」
東の畑にいる人達に、『アジンエンデは『極光の剣』の後継者として、晴れがましく戦ってる。是非、見に行って欲しい』と、アーメットに伝えさせた。
彼女の夫は純粋に、妻を応援に来たのだろう。
ハリハラルドはさっさと上着を脱いで、アジンエンデの体の上からかけてやった。下着姿にしか見えない彼女の体を隠す為に。
しかし……
彼女の体にかかった途端、それは跡形も無く消え失せる。布切れも糸の一本も残さずに……
上に何もまとえないって、こういうことだったのね。
「××××××」
ハリハラルドは眉をしかめ、上皇様を睨みつけた。
「××××××××××××！」
息子に怒鳴られた上皇様は、チッと舌打ちを漏らし、パチンと指を鳴らす。アジンエンデの体は宙より現われたフードマントによって隠された。
ホッと息をついた女戦士は夫に礼を述べてから、『極光の剣』を手に立ち上がり、私をキッ！　と、睨みつけた。
「今日のところは、おまえの勝ちだ。だが、偶然、勝ちを拾っただけだと忘れるなよ」
夫に肩を抱かれ、女戦士は自宅へと戻って行った。
うぅ～ん、残念、泣かせられなかったわね。
だけど、勝てたのだし良しとしよう。
と、そこで、がっくっと膝をついてしまった。
重い。
手の中の『勇者の剣』の重量が、急に増えたのだ。男性一人分の

重さといったところか。
「まだまだ持ち手としては認められんと言うておるのだ」
大魔術師カルヴェル様が短距離の移動魔法で、私の目の前の宙に現われる。
「もっともっと剣の才をみせよと言っておるのだ」
「もっと戦えってことですか？」
「うむ。セレスとて、剣を魔法剣として使用できるようになるまで一年半、ラヴラヴ状態になるまで二年かかったわ。その剣を持って気長に世直しを続けるしか道はないのう」
私は『勇者の剣』を手放し、地面に置いた。
つまり……当分、軽くなるのは一時的ってことね。
勝負の間は、私の剣の技に応じて徐々に軽くなっていくことはあっても……普段は持って欲しくないと……私に触れられたくないと言っているわけね。
『勇者の剣』を屈服させるまでには、まだまだ時間がかかりそうだわ。
老魔術師様はホホホと笑った。
「今、ハリハールブダンにアジスタスフニルと連絡をとってもらっておる。勇者として旅立つ前に、両手剣の名手だった男と会っておけ。学ぶべきことが、きっと多いぞ」

日が暮れても、お母様の従者だった赤毛の戦士とは連絡がつかないようだった。
上皇様とカルヴェル様、それにガジュルシンが、真剣な顔で、私にはわからない言語で話し合っていた。どうも、居るはずの場所に居ないようなのだ、あの赤毛のおじ様。
探知の魔法っていうのを使って、今、三人で世界中を捜索しているらしい。
たいへんそうだなあとは思うけれど、魔力のない人間では人探し

のお手伝いのしようもない。
村には宿屋はないし、上皇様の家には間仕切りはあるけど、部屋はない。
ので、女の私はアジンエンデの（正しくは旦那様のハリハラルドの）家に、男どもは上皇様のお家に泊めてもらう事となった。

アジンエンデの家まで、ガジャクティンが『勇者の剣』を運んだ。重たい剣を上皇様の家に置いていこうとした私を、『メイン武器を置いて行くなんて、馬鹿じゃないの？』と怒って義弟が勝手に担いで運んでくれたのだ。ジライに連れられてアーメットが（忍者なりの）情報探索の為に姿を消してしまったので、他に運び役はいないのだ。
家の中から出てきたアジンエンデは、室内だというのにフードマントを被ったままだった。そこから覗く腕や靴はレイの赤い装甲だ、まだあの赤い鎧は脱げていないようだった。『極光の剣』の使い手は、ぶっきらぼうに入れと顎でしゃくって家の奥へと行ってしまった。
その背をガジャクティンがポーッとした顔で見送っていたので、その耳元で囁いてやった。
「H」
ガジャクティンはきょとんとして私を見つめ、それから顔をカーッと紅潮させ、大きな声をあげた。
「なに、言ってるのさ、ラーニャ！　馬鹿じゃないの？　僕は、ただ、憧れの赤毛の戦士アジャンの跡取りに出会えた感激で、」
私はふふんと笑って言ってやった。
「スケベ」
ガジャクティンの顔が更に赤くなる。
「違うって言ってるだろ！　どこまで、頭、悪いんだよ、いやんなるなあ、もう！」

『勇者の剣』を私に押しつけ、ガジャクティンは叫んだ。
「僕は女の人の裸になんか興味ないよ！」
ずっしりと腕に重たい剣を抱きながら、私は図体はやたらデカいけど四つも年下な義弟に意地の悪い笑みをみせてやった。
「あらまあ、じゃあ、男の人の裸の方が好きなわけ？　義姉としてあんたの将来が心配だわ」
「バカ！」
ガジャクティンの顔はタコのように真っ赤だ。
「そんなんでもない！」
ガジャクティンは私に背を向け、でっかい背中を見せた。
「ラーニャとはもう口ききたくない！」
そのままズンズン帰って行く義弟に、思わずふきだしてしまった。
女性の裸を意識しまくっているのに、素直に認められない。うろたえながら、誤魔化そうとする……どう見ても、童貞っぽい。王族十四歳にしてそれはちょっと情けないけど、勇者に関わりのないことは全て排除してきたガジャクティンの人生に女性が入りこむ余地はなかったのだろう。
「入らないのか？」
シベルア語で尋ねてきたアジンエンデに、
「今、行くわ」
と、答えた。私とガジャクティンの会話はインディラ語だったから、彼女にはわからなかったはず。
『勇者の剣』と着替えなどが入った革袋を家の壁のそばに置き、中を見渡す。
入口から向かって右の壁には食器棚やら衣装ケースやら大箱やらが並んでいる、しかし、左の壁の前には家具がなく、さまざまな武器が飾られるように設置されていた。弓、短剣、片手剣、槍、棍棒……いざって時もこれだけ武器があったら対応できるだろう。『極光の剣』もその中にあり、取りやすいようにだろう、その周囲には他に武器はなかった。

テーブルの上にはパンとスープと鳥の腿とサラダが二人分あった。彼女の旦那さんはいないのだろうか？

「座れ」

と、言って、アジンエンデはフードマントを外して椅子の背にかけると、客が座るのも待たず、さっさと席についた。

テーブルの上の美味しそうな食事と、赤い下着姿のような彼女を交互に見ながら、私も席についた。

挨拶も祈りも何もなく、無言で彼女は目の前の皿にとりかかった。

私はご馳走になるお礼を述べてから、食事を始めた。鳥の肉はとろとろだし、香辛料に欠けるあっさりとした味のスープもなかなか、青臭い匂いだけど食べてみるとしゃりしゃりしていてサラダは爽やかな味だし、焼いてから数日経っているだろうパンは硬かったけど美味しかった。

「美味しい」と、素直に感想を言っても、

「そうか」と、あっけない。

「料理が上手ね」と、褒めても、

「そんなことはない」と、切り捨てる。

村にはもっと上手な人がいるってことなんだろうけど、私の方を見ようともしないでひたすらガツガツ食べている。

無視されてるみたいで、ちょっと居心地が悪い。だから、私に注目してくれる言葉を選んでみたりした。

「その赤い鎧、脱げなかったのね」

鶏肉をかじりついたまま、アジンエンデが緑の瞳でジロリと私を睨む。

「……おまえに勝てなかったから、な」

「それ、脱げないんじゃ、困るんじゃない？……トイレとか」

「ハリハラルドが舅殿から、鎧を外す魔法を聞き出してくれた。腕でも靴でも一部位を残しておけば、他は外せるんだが……」

鳥の骨を皿の上に投げ捨て、彼女は布で手を拭いた。

「一時的なことだ。一時間もしないうちに外した部位が体に戻って

しまう」
「『極光の剣』を見事に操らないと、その鎧、外れないのよね？誰がどの基準をもって見事に操ったって判断するわけ？」
アジンエンデはフンと荒い息を吐いた。
「知らん。アジ族の剣か、舅殿のいずれか、だろう」
「それまで裸同然でいろと……嫁いびりね」
「舅殿の性的ないやがらせは、今日に始まったことではない。……あの方は色気過剰な格好を私にさせたがるし、媚薬やら、催淫効果つきの幻術やらを、私やハリハラルドにやたら使われる」
え――！　あのロマンス・グレーな上皇様、本当は、×××な変態だったわけ？
「あの方は……私達を本当の夫婦にしたいのだ」
「本当の夫婦……？」
アジンエンデの顔に自嘲の笑みが浮かぶ。
「私とハリハラルドは形だけの夫婦なのだ」
「形だけ……？　じゃ、性交渉なし？」
赤髪の女戦士の頬が朱に染まる。
「そういうことだ」
「じゃ、あなた処女なのね！」
私は両手を伸ばし、目の前の女戦士の手をがしっと握った。
「私もよ！」
十四、五歳になれば女は嫁ぐ今の時代、十八、九になって未通は珍しい。聖職者でもない限り。
「なんで形だけの夫婦なの？」
「……互いに事情があるのだ」
アジンエンデは私の手を払った。
「ハリハラルドには好いた女がいるのだ。この家ではなく、その女の家で暮らしている」
「え？」
「私には年が同じ兄弟姉妹が七人いた」

同い年の兄妹姉妹が七人？

「病で死んだ一人と外の村に嫁いだ二人をのぞき、今もこの村には、親父殿の血を引く者が男がニ人、女は私を含め三人いる」

えっと……

そういえば、読まされたわ、リオネルに。痛快娯楽大衆本『女勇者セレス』を。お母様達の大魔王退治の旅を描いたその本の内容は真実とはかなり違うらしいんだけど、おおまかな出来事は合ってるし、庶民が先代勇者一行をどう理解してるか知る為にも目を通しておきなさい、と。

全七十一巻もあるけど、お父様も登場人物の中にいたから頑張って読んだのよね。でも、あの本、気にくわないことに、従者の中で、お父様を一番、軽く扱ってる。お父様に関する描写が一番少ないのよ！　次にジライが少ないんだけど、それはどうでもいい。大僧正候補で旅の最初から従者だったお父様をクローズアップして当然なのに、お父様に関する描写ってすっごいあっさりしてるのよ。

あの本に、確か……

赤毛の戦士アジャンがHしまくって、女の人を八人妊娠させたって書いてあったわ。自分はケルティに戻りたくないから、王族の血を引く跡取りを残す為に。あの本によると、男三人、女五人が生まれる予定になっていた。

「ハリとアジとの血が混じり合い一つとなることが、親父殿と舅殿の望みだった。それゆえ、五年前、私の義妹アジナターシャがハリハラルドに嫁ぎ正妻となった」

え？

正妻？

「実直なハリハラルドと、おとなしく可憐で料理の上手なアジナターシャとの仲はたいそう睦まじく……翌年にはハリとアジの両部族の跡取りとなるべき男子が生まれたのだ。しかし……」

アジンエンデは赤髪を掻きあげた。

「二年前、私のもとに『極光の剣』が飛んで来てしまったのだ」

おもしろくなさそうにアジンエンデが言葉を続ける。
「私の剣技が兄達より勝ると、剣は判断したのだ」
「実際、そうなんでしょ？」
と、聞くと、ああと、女戦士は頷いた。
「ケルティでは男女の別なく戦の訓練をうける。女の剣は家を守る為にあり、戦には出ないのが普通だがな。私は剣の道が楽しく、適齢期になっても誰に嫁ぐでもなく戦士達に混じって戦の稽古をしていた。それが……悪かったのだ。アジの長老達は『極光の剣』を持つ女の私こそがハリの跡取りの妻にふさわしいと強硬に主張し、譲らなかった。ハリハラルドには私との婚姻の意志はなかった。だが、このままでは部族がまっぷたつになりかねんところまでアジの長老との仲が険悪となったので、」
まあ……『極光の剣』の持ち主といずれ『知恵の指輪』を継ぐ者が結ばれて子供が生まれれば、正真正銘、両部族の王っぽいわよね。
「仕方なく、部族を守る為に、ハリハラルドは最愛の妻アジナターシャを離縁して妾とし、私を形だけの正妻に迎えた。そういう事だ」
ん？
「妾ってことは夫人じゃないの？」
「あたりまえだ」なにを馬鹿な事を聞くというように、アジンエンデ。
「ケルティじゃ、夫人は一人しか持てないの？」
「正妻は一人だ。妾の子は違法な結びつきで生まれた子供だ。母方の財産にしか相続の権利を持てない」
「妾の子は跡取りになれない……？」
「ああ。養子にしない限り、な。アジナターシャが正妻の時に生まれたハリレグネルはハリハラルドの現在の継嗣だが、以後、アジナターシャが産む子にはハリの部族王の世継ぎの権利はない。更に言えば、先妻の子より現在の妻の子の方が優遇される。私がこれから子を産めば、私の子がハリの次期部族王となってしまうのだ」
「インディラでは夫人は何人持ってもいいのよ」

文化差異（カルチャー・ショック）を感じながら、私は言った。
「第一夫人が正妃で最も尊敬されるけど、世継ぎの王子は長男がなるのよ。どの夫人が産んだ子でも、世継ぎになれるの。その王子が王位にふさわしくないと父王が判断すれば廃嫡されるけどね」
「いいな」
アジンエンデはニッと笑った。
「その方がいい……」
アジナターシャって人、仲のいい義妹だったのね、きっと。
「世継ぎを産みたくなかったし……」
アジンエンデの目は、壁に飾るように架けられている『極光の剣』へと向いていた。
「『極光の剣』が私を選んでくれたのなら、その意味を知りたかった。その意味を知る前に、ただの女となり、子を生み、夫と子供の為に生きるなど……嫌だった。だから、ハリハラルドと形だけの夫婦となった」
「意味？」
「その武器と共に『アジの部族王』としてどう生きるべきか……だ」
「『アジの部族王』としてどう生きるべきか……？」
「アジはハリに統合された。同じ祖先神を戴く部族は一つとなった。もはやアジはいない。だが、この剣を持つ限り、私は『アジの王』なのだ。王としてなすべき事をなさねばならない。だが……何をなすべきなのか、ずっとわからないのだ」
聖なる武器と共に生きる意味……
武器に選ばれた意味……
「私が生まれる前、この国はひどい状態だったそうだ。シベルア人に支配され、部族王は次々に殺され、財産を奪われ、重税をかけられ、ケルティは困窮にあえいでいた。女勇者一行の助けを借りて国を救った親父殿や舅殿を、私は偉大だと思う。王である以上、私もそうありたいと思う。村ももちろんだが、この国をも守りたいと思っている」

アジンエンデは苦い笑みを浮かべた。
「今の所、さして王らしいことはしてないがな。魔族の襲撃から村を守るぐらいだ」
「魔族の襲撃……？」
「一ヶ月に一、ニ回ある。だが、小物しか来ない。そんなものから村を守ったとて、王の務めを果たしたとは言えん……おまえには勇者としてなすべき使命がある。大魔王を討伐し、この世界を守る為におまえは戦うのだろう？　いいな。生きる意味がはっきりしていて」

生きる意味……？
大魔王が復活した時……私は……
グスタフお兄様がご病気だから勇者を務めなきゃと思った。
お父様をお守りする為に、勇者として頑張ろうと思った。
『勇者の剣』が私を拒絶したから、悔しくて、何とか屈服させてやろうと思ってきた。
でも……
私は、ケルベゾールドを倒さなければいけないと……実感をもって思っているのだろうか？
私が知っている世界は、王宮や別荘、ごく限られた世界だけ。
私が守らなきゃいけないと思ってるのは、お父様やお母様、家族や家臣達……
勇者は正義と愛の心をもって世界を救うのだと、リオネルは繰り返し説いていた。それは理屈としてわかっている。けれども……
私には守るべき世界も倒すべき魔族も、よくわかっていない。知らないのだ。ずっと後宮に居たから。
生きる意味など、考えたこともない。
私はアジンエンデほど真剣に、聖なる武器の持ち手としての義務を果たそうとはしてきていない。

……私が『勇者の剣』に嫌われた理由がわかったような気がした。

「褒めてもらって嬉しいけど、それ、買いかぶりよ。私、まだ、一度も実戦したことないし……『勇者の剣』ともあんま仲良くないの。まだまだ修行中の勇者なのよ」

「ならば、実戦を積んで、真の勇者になればいい」

アジンエンデの頭は単純だ。私は口元に笑みを浮かべた。北国の女戦士に好感を抱きながら。

戦う理由！　勇者として！（後書き）

次回「初めての戦い！　重たいわよ、あんた！」で、十五話目にしてようやく姫勇者が初めて魔族と戦います！　が、しかし……

初めての戦い！　重たいわよ、あんた！

「ラーニャ、起きろ」

頬をぴたぴたと叩かれ、体を揺さぶられる。

私は目を開けた。

ランプを手に、アジンエンデが私の寝台のすぐそばに立っている。

私はすぐに体を起こした。私は寝起きが良い……と、いうか環境のせいというか、人災のせいというかで、寝起きが良くならざるをえなかったのだ。起きてすぐに動けなきゃ、セクハラを延々とやられかねない。

周囲はまだ暗い。

まだ真夜中だろうか？

「村の外に魔族がいる」

私の精神は、しゃきっと覚醒した。

「魔族？」

「舅殿の結界があるから、奴等は村の中には入れん。とるにたらぬ小物だ。ほっといても朝には消えていなくなるが、周囲に瘴気を撒き散らされるのは迷惑なので処分する。私と共に戦うか？」

小物魔族――ろくでもない器に憑依した為に、力は弱く、知能も低い魔が外に居るのか。

「戦うわ」

私は寝台から飛び降り、呪文を詠唱し、白銀の神聖鎧をその身にまとった。腰には『虹の小剣』を差す。

「どんな小物であれ、退治してゆくのが勇者の務めだもの。教えてくれてありがとう」

「礼には及ばん」

そう言ってアジンエンデは、赤の下着姿としか見えない体にバン

ドを通し、背に『極光の剣』を背負う。
「村の内外の掃除は、舅殿と私、シベルア司祭殿の仕事だ。手伝ってくれるおまえに、私が礼を言うべきだろう」
鎧を装着したので出入口そばの『勇者の剣』をわしっと掴んでみた。思った通り……
「舅殿の『知恵の指輪』に惹かれるのか、魔族の来襲は少なくはない。一ヶ月に、一、ニ回ある　小物ばかりだが、な。光に誘われる蛾のように、『知恵の指輪』のきらめきに誘われ集い、そして、魔は我等に狩られるのだ」
重い！　『勇者の剣』が男の人の体重並に重い。これを抱えて走れと言うの？
アジンエンデは南の方角に顔を向けた。そっちに魔族がいるの？　魔族がどの辺にいるのかも、そもそも村のそばまで来ていることすらわからない。魔の気配なんて感じられない。彼女にはどうしてわかるのだろう？
「行くぞ、ついて来い」
「ちょっと待って！」
こんなモノを担いで村の外を目指してもカメの行進すぎて、朝日が昇っちゃうわ！
私は大声を出した。
頼るのはしゃくだけど、絶対、そばにいるはずだもの。
私が寝起きがよくなったのも、覗いてはちょっかい出してくるあいつのせい。
こういう時ぐらいしか、あいつには使いどころはない。徹底的に利用してやる！
「アーメットを至急、ここに寄越して！　魔族退治をするの！　村の外まで『勇者の剣』を運ばせて！」
「承知！」
頭上から聞こえた返事に、アジンエンデがぎょっとする。ランプを天井に向け、きょろきょろと落ち着きなく辺りを見渡している。

「何だ、今のは？」
「ジライよ」
私の簡潔な説明に、アジンエンデはますます混乱する。
「ジライって……おまえの従者の忍者だろ？　え？　舅殿の家に泊まっているのではなかったのか？　なぜ、天井から返事が？？？？？」
私はため息をついた。
「『姫勇者を護衛する』って名目で、あいつ、しょっちゅう、私をストーキングしてるのよ。覗きが趣味なのよ」
「覗き……？」
「お風呂だろうがトイレだろうが、覗くのよ、あいつ。今日のあなたの家であったことも、み～んな覗かれてたと思った方がいいわね」
庇って嘘をついてやる気も、あたりさわりのない表現を選んで物事を穏便に進めてやる気もない。
ありのままの事実をつきつけられ、アジンエンデの顔がカーッと紅潮する。一軒家に女同士という気安さから、ずっと、彼女、レイの鎧姿の上に何にもまとっていないのだ。ムシムシ暑かったから、さっき盥に水を張って、私、体を拭ってもらったし、お礼に一部鎧を外した彼女の背を濡れた手ぬぐいで拭いてあげたりもしたのよね。
「覗かれているのなら、先に言え！　私、さっき、胸の鎧も下半身のも外してしまったぞ！」
「ああ、それは、大丈夫よ、だって、ジライは」
と、そこまで言いかけた時、背後にフッと気配が二つ現われる。
ジライとアーメットだ。
「この覗き魔！」
アジンエンデは『極光の剣』を抜き、覆面に黒装束のジライへと斬りかかった。
この女（ヒト）、カッとすると剣を抜くのが癖なのね。昼間も上皇様にも斬りかかってたし。斬りかかる前に、ランプはテーブルの上に置いたようだ。投げ捨てて斬りかからないあたり、冷静よね。

ジライはほんの少し、体をずらしただけでアジンエンデの攻撃を避けた。
「アーメット、ラーニャ様の為に、剣を背負い、戦場までお運びせよ」
右左下突きを不規則に素早く放つアジンエンデの攻撃を軽々とよけ、ジライはアーメットに命令したりしている。抜刀すらしていない。アジンエンデの攻撃など、歯牙にもかけていない。
戦士としての技量に差がありすぎるのだ。
くぅ〜〜〜
悔しいけど、ジライの方が私達より圧倒的に強いってわけよね。
「女、安心せい、我はラーニャ様の愛らしいお姿を目で愛でていただけ。きさまなぞ、眼中になかったわ」
ひょいひょいと攻撃をかわしながら、ジライが言う。
て、待って、愛らしいって何処が？　まさか胸のことじゃないでしょうね！
「きさまが乳牛のごとき脂肪の塊の胸を晒そうが、尻を掌でこすろうが、あまつさえ股を大きく開き×××を弄ろうが、何も感じぬ。M女の裸体なぞで、勃起せぬわ」
「体を洗っていただけだ！　誤解を招く言いかたはよせ！　ていうか、やはり行水を覗いていたのだな！　いや、誰がM女だ！」
もう何処から怒っていいかわからないって顔で、アジンエンデが叫ぶ。
二人がそんなやりとりをしている間、黙々と、アーメットは上半身にバンドをかけ『勇者の剣』を背負う。
ジライに振り回される誰かを見るのなんか慣れっこで気にもしてないって感じ。
ちょっとかわいそうね……こいつの育ちも。
私とアーメットが出口へと向かうと、外側から扉が開いた。
そこには、ランプを持った大柄な男が一人。
「魔族退治なら、僕も行く！」

息弾ませているのは、無駄に体の大きい義弟だ。後宮育ちのガジャクティンは、私、同様、魔族に縁のない人生を歩んできている。小物とはいえ魔族との戦いなど、見るのも初めて、戦うのも初めてなのだ。

「村の物見櫓（ものみやぐら）の上からの、見学でよろしければ」

アジンエンデの剣を避けながら、ジライが王族であるガジャクティンに一応の敬語を使いながら言う。

「魔法を使える方々は、未だに、アジャンめの捜索に時間をとられております。防御・回復の魔法を唱えられる者がそばに居りませぬ上、ラーニャ様はこたびが初陣。小物相手でも油断は大敵。このジライ、申し訳ございませぬが、ラーニャ様の護衛を優先いたします。魔族相手に戦う術（すべ）を持たぬ方の護衛までは務められません」

う！

神聖魔法も使えなきゃ、聖なる武器もない奴は、ひっこんでろと！さりげなく、きつい！

ガジャクティンが喉を詰まらせる。

ジライ、私やお母様以外の人間にはSだものね……

ガジャクティンを甘えさせてやる気は、ゼロだわ。

「そこのデカい坊主！　私と一緒に来るか？」

アジンエンデが叫ぶ。

「常に私の背後にいるのなら、守ってやるぞ！」

赤毛の女戦士の意外な申し出に、義弟が糸目を丸くする。

「ついて行きます！　お願いします！」

ジライをジロリと睨んでから、アジンエンデは愛剣を背におさめた。

「なら、来い。こっちだ」

アジンエンデは家を出てずんずん南へと進み、ランプを持ったガジャクティンがその後を追う。同情したわけではない。ガジャクティンを伴うのは、ジライへの面当（つら）てだろう。

しかし、ジライの方は、基本的にガジャクティンには興味がない

ので、あてつけをされても気にしていない。彼の生命をアジンエンデが負うのなら任せたと、あっさりと引いている。

自分が果たすべき義務を果たさず王族の子供を死なせては（お母様に怒られるから）マズいと考えてるようだけど、自分があずかり知らぬところで死ぬ分には構わないと思ってるんじゃないかしら、こいつ。

「さ、ラーニャ様、参りましょう。背中は私めがお守りいたしますゆえ、ご存分に戦いなさいませ」

私はアジンエンデが置いて行ったランプを手に、頷いた。

村の周囲は高い木の塀にぐるりと囲まれている。塀にも地面にも地中にも上皇様の施した魔封じの結界が何重にも張り巡らされている為、魔族は内には入れないのだそうだ。

木の塀に群がるように、木、岩、水、獣、鳥、などに憑依した魔族が集まっていた。

この世に存在する何かに宿ることで、魔族は現世に干渉する能力を得ている。しかし、魔族の能力は、宿主の技量によって制限される。魔界で高位の力を誇っているものでも、知性が低いものに憑けばそれに見合うほど愚かとなり、木に憑けば火が弱点となり、水に憑いて干上がればこの世から消滅してしまう。

どれほど力の強い魔族であっても、この世界に出現した時点で、この世界の理の支配を受けるのだ。

ここにいるのは、無機物や知性の低い動物等、ろくでもない器に憑いたモノばかり。自我の強い人間に比べ憑依は難しくないけど、その分、それに憑いて出現してもたいした力は使えない。できるのは、瘴気を撒き散らし、人を殺し喰らうことぐらい。

朝日と共に消える運命の弱い魔族ばかりだったが、長くとどめておけば地が瘴気に冒されてしまう。

門番に出入口の戸をすばやく開閉させ、私達は外へ出た。背後で

戸が閉まる。
とっとと浄化するぞと、アジンエンデは『極光の剣』をもって魔族の群れにつっこんでゆく。
ガジャクティンがランプを持っているので、彼女の戦いっぷりは闇より浮かんで見えた。
腰までの髪をふわりと舞わせ、赤髪の女剣士が右手へ左手へと武器を持ち替え、迫り来る敵を紙切れか何かのように斬り裂き浄化していく。
その動きは両手剣を扱う者とは思えぬほど軽快。短時間で多くの敵に刃を向けようとしている。
そうか……と、気づいた。
魔族相手に聖なる武器で戦うのなら……
深く斬る必要はない。
切っ先でほんの少し傷つけるだけでいいのだ。相手に与えるのはかすり傷でいい。
聖なる武器が持つ浄化の力が、触れるだけで魔をあるべき世界へ返すから。
だから、彼女は両手剣を片手で使う技術を身につけたのか。その方が多角的に戦えるから。
ああん、でも……
アジンエンデがザクザク斬るから、敵が近くにいなくなっちゃったじゃない。
「ほい、交替」
と、アーメットにランプを奪われたと思うと、ズジンとのしかかる重い武器を握らされた。
何で？　と、思った時には足元に何か黒いモノが迫っていた。
「ひ！」
手の中のものを握り締め、ソレに向かって動かした。
途端。
変な手ごたえがあり……

胸が熱くなった。
「お見事！」
と、ジライが言った。
て、ことは魔族を斬った……のかしら？
勇者の魔族の初退治？
相手の姿も見えなかったし、ただ刃を向けただけなんだけど。
地面すれすれの低いところを、素早く動く黒いものが走ってくる。
それが近づいてくる度に、私は手の『勇者の剣』を振り回した。重くて持ち上げるのがつらいので、剣のきっさきを地面に向けたまま。
勝手に刃にぶつかって魔は四散してゆく。
「お見事！」
私が魔族を倒すと、毎回、ジライがそう言う。
こんなんでいいのかしらと、我ながら苦々しく思う。
ただ剣を振り回してるだけじゃない。
上段・中段から私に迫って来る敵は、『ムラクモ』をの使い手ジライと、左手にランプを持ち右手に『虹の小剣』を持つアーメットが倒してくれる。そう、私の腰に差していた『虹の小剣』は気づかぬ間に弟に奪われていたのだ。まあ、今、使わないからいいんだけど、せめて断りなさいよ。
周囲を忍者二人に護衛してもらって、足元にもぐりこもうとする奴だけを、箒でお掃除するみたいに適当にふりまわしてる剣で倒すだけなんて……
何つう姫ちゃんプレイ。
半人前すぎて格好悪い～～～
でも、このバカ剣が重たすぎるせいで持ち上がらないんだもん。
頭の上の敵とかに対応できるはずもない。
それでも、足元の何かに剣先を当てる度に、ゾクッとした。
心が弾むというか……
何っていうか……
快感？

魔を斬る事に、私は喜びを感じていた。
一匹でも多く斬りたい……
全ての魔を葬りたい……
何か非常に殺伐とした願望が頭をよぎる。
これはもしかして、『勇者の剣』の感情なのだろうか？
持ち手である私にまで感情って伝わるものなのかしら？
とか思ってたら、
「お見事、五匹目！」
と、ジライが褒め称えたもんだから、『勇者の剣』の切っ先を地面に向け、後ろ蹴りをくれてやった。
「いちいちうるさい！　数をかぞえないでちょうだい！」
「承知……」
自分は二十匹以上倒してるくせに～～～
子供扱いして～～～～
ていうか、アジンエンデの剣を軽々と避けてたんだもの、本当は私の攻撃も簡単によけられるのにわざとくらってるでしょ、あんた～～～～
ジライのやること、なすこと何もかも気に喰わなかった。
魔族相手に一人で戦える一人前の勇者に、早くなりたかった……

夜がしらじらと明け始めた頃には、魔族は消え失せていた。
足元掃除だけでも、十匹以上倒したと思う。アーメットはそれ以上。ジライは……言いたくないが、倒した数の桁が違う。正確な数は知らないけど、間違いなく。
けっこう遠くまで倒しに行っていたのだろうアジンエンデが、義弟と共に戻って来た。二人とも怪我はしてないようだ。赤毛の女戦士はきっちりガジャクティンを守ってくれたようだ。
いつもはふてぶてしいほど自信たっぷりな生意気な義弟が、珍しく神妙な顔つきをしていた。魔族との戦闘を目の当たりにして、び

っくりしたのだろうか？　それとも、アジンエンデに守られるだけの役立たずだったのがつらかったのだろうか？

「今日はありがとう、アジンエンデ」

そう言って、ガジャクティンは自分が着ていた夜着の上着を脱いで彼女へと差し出した。厚い胸板の十四歳とは思えない、肉体が露となる。

「着て」

赤毛の女戦士は、一瞬、何を言われたかわからなかったようだが、すぐに顔を真っ赤にしてガジャクティンの上着を受け取った。

赤い鎧の上に剣を担いで来てしまい、裸同然の格好のまま外で戦っていたのだ。夜の間は闇に隠れていたからいいけれども、もう朝日が昇り始めている。物見櫓にいる門番とかにしっかり見られちゃうわよね。

「すまない、ありがとう」

いったんバンドを外し、バンドごと『極光の剣』をガジャクティンに持ってもらってから、アジンエンデは服を着る。『極光の剣』は『勇者の剣』と違って、非資格者が触れても怒らない『性格の良い武器』のようだ。

アジンエンデも大柄なので、ガジャクティンの上着だけではミニスカート状態だった。横の幅は余ってるんだけどね。

下も貸そうか？　と、問うガジャクティンに、気持ちだけで充分と笑みを浮かべアジンエンデは断っていた。笑うときつそうな顔立ちがちょっと幼い感じになる。

私の視線に気づき、『極光の剣』を持ったアジンエンデが私に近づいて来る。

「初陣はどうだった？」

私は肩をすくめた。

「『勇者の剣』と仲良くなりたいって気持ちが、一層、募ったわね」

「大事にしてやれば剣は応えるさ」

すれちがいざまに私に、『かわいい弟だな。私の背後を狙おうと

する敵を殴り飛ばしてくれていた。優しくて女性思いだ。いい男になるぞ』と囁いた。

え～と……

それって……

ガジャクティンのこと……？

あのくそ生意気な義弟のどこが～～～？

反論したかったが、アジンエンデはさっさと歩いて行ってしまう。

アーメットには会釈をしたけど、ジライは完璧に無視して。

「ラーニャ、アーメット」

私の後ろに無駄に図体のデカい義弟が立つ。

「ちょっとだけ『虹の小剣』を持たせて」

アーメットが目でいいよな？　と、聞いてきたので、好きにすればって感じに見返してやった。

『虹の小剣』の装備条件は『美貌』。お父様が昔、使ったこともある武器だから、ガジャクティンも使えるはず。

アーメットから手渡された小剣を右手に、ガジャクティンが宙を切る。体の周囲に張りつけるように振り回すというか、ギリギリの所で刃を避けるように上手に小剣を扱う。さすが、片手剣でも印可のガキね。

「ふーん」

左手に持ち替えて同じ動きをしてから、ガジャクティンはアーメットに『虹の小剣』を返した。左手でも利き腕並に小剣を扱えるとか……本当、ムカつくガキだわ。

「ありがとう」

と、言ったガジャクティンの声がちょっと小さかったような気がした。元気もなかった。あんまそうは見えないけど、落ち込んでるのかしら、こいつ、今。

だから、言ってやった。

「昨夜のことは気にしちゃ、ダメよ。あんた、体だけはデカいけど十四歳の子供だもの、おミソでも仕方ないわ。気にしなくていいの

よ」
ガジャクティンがすごい形相で私を睨む。
あれ？
何で？
慰めてあげたのに？
私、おミソ勇者だもの。おミソの辛さはよくわかるから元気づけてあげようと思ったんだけどなあ。
「そうだね！　僕は武闘も学問も人並み以上だものね！　これで聖なる武器まで持ったら、ラーニャなんか足元にも及ばないほど優秀になりすぎて困っちゃうよね！」
「その通りだと思うわ」
四つも年下な義弟にまで優秀になられたら、そりゃあ、私のおミソっぷりが目立つでしょうね。
そう思って正直に答えたのに、ガジャクティンは一層、怖い顔になって私を睨んだ。
「本当は僕は、魔法だって！　……くそぉ！」
ガジャクティンは己の右の拳を左の拳で受け止め、足早に村へと戻って行く。
何で怒るのよ、あの年頃の子供は難しいわねえ。
「鬼」
私の耳元でそう囁いて、『勇者の剣』と『虹の小剣』を交換してアーメットがガジャクティンを追いかける。
ジライは満面の笑み。
「さすがラーニャ様」
上機嫌で私について来る。

私、何かマズい事、ガジャクティンに言ったんだろうなあ。
後で謝っておいた方がいいかしら？
でも……何を？

初めての戦い！　重たいわよ、あんた！（後書き）

味噌っかすって日本文化圏の表現ですよね。おミソ勇者がぴったりくるのですが、表現変えた方が妥当かも？

三つの驚き！　心を乱す声！

昼までに、私は三度、驚いてしまった。

最初は赤毛の戦士アジャンのことだった。

昨日、大魔術師様の水晶珠でそのお姿を拝見したけれども、私は赤毛の戦士とは面識がない。

家庭教師リオネルから教わった知識と、大衆通俗小説『女勇者セレス』のアジャン像でしか、アジンエンデの父親を知らない。

アジ族に伝わる両手剣『極光の剣』の使い手であった男。

アジの部族王の正統な後継者であった彼は、彼を王にと望む一族の生き残りの願いを退け、大魔王討伐後、故郷ケルティに戻らず、放浪の旅に出たとされている。

父母姉弟妹――家族を全て失った時に部族神への信仰を失った為に部族を離れたのだろうと、リオネルは解説した。

「ケルティの部族王は祖先神に仕えるシャーマン王で、そのシャーマンの才は神からの恵みとされています。神魔や精霊、祖先霊と交信し、時にはその器となる事が、シャーマン王の務め。それ故に、信仰心を失った自分が王となるなどあってはならぬ事なのだと、アジャン様は考えたのでしょう」

その上で、リオネルはこうも言っていた。

「アジャン様は、アジの部族王であったお父上同様、優秀なシャーンマンだったそうです。ラーニャ様もご存じの通り、魔族は今世に出現する場合、宿主の能力に合わせて力が制限されます。人間では器として小さすぎ、高位魔族は魔界での本来の力を今世では発揮できないのだとされてきました。しかし、」

と、そこでリオネルはいったん言葉を区切ってから、ひどく真面目そうな顔となった。

「アジャン様は、大いなるものを、そのままの姿で受け入れられ、且つ、その身を器として使われ続けても壊れる恐れがないほど魂がしなやかだったといわれています。つまり、大魔王ケルベゾールドが彼を器として選んだのならば……ケルベゾールドは魔界での本来の力そのままに今世に現われてしまうかもしれないのです。今世に降臨したケルベゾールドの中で、間違いなく最強の存在となるでしょう」

そんな人間が失踪したと、大魔術師様がおっしゃるのだ。

それって、非常にマズくない？

私達勇者一行、上皇様、その息子ハリハラルドと嫁のアジンエンデが、皆、深刻な顔になる。

本来、魔族は、契約を結んだ体とか、理性や自我を失った人間とかにしか憑依しない。人間から肉体を強奪すれば、魔族もけっこうなダメージを受けてしまうのだとか。しかし、高位魔族ならば、やろうと思えば誰の体でも無理やりのっとれるらしい。優秀な器を手に入れる為ならば、多少、痛くてもがんばっちゃうんだろう。

アジンエンデのお父さんが魔族につかまったのだとしたら……

もしかして……

この世は終わり？

私、おミソ勇者なのよ！　『勇者の剣』をろくに持ち上げられない私に、最強大魔王を倒せとか無理！

「『極光の剣』がアジスタスフニルと共にあれば、『極光の剣』を通じ先祖の霊がきゃつを守護する。退魔の力を有する剣があやつを守ったろう」

大魔術師様は苦々しい顔でおっしゃった。
「しかし、左腕を失い、『極光の剣』を振るう資格を失った今のあやつには……先祖の加護はない。ハリハールブダンの与えた魔除けの魔法道具は優秀であろうが、強引に奴の体を盗もうとする高位魔族から完全に守りきれるかは定かではない。それ故、アジスタスフニルを保護しようと思ったのだが……」
大魔術師様はため息をついた。
「何処にもおらぬ。あやつの現在、アフリ大陸のエジプシャンに住んでたそうじゃが、そこはむろん、世界中の何処にも奴の気はない。探知の魔法を飛ばして確認したゆえ、断言できる。今世の何処にもアジスタスフニルは居らぬ」
つづいて、上皇様が口を開く。
「俺はアジスタスフニルに印をつけていた。奴に何かあれば俺には伝わる。奴の心が闇に染まりかけたり、闇に囚われた時、或いは命の危機が迫った時、いち早く察する事ができる印を、な。昨日から今日まで印には何の兆候もなかった。アジスタスフニルは闇に堕ちてはいないし、死んでもいない。それは間違いない。今のところは……だが」
今のところは……か。ずっとそうであってほしい！
約二十年前、赤毛の戦士アジャンとハリの王族ハリハールブダンは力を合わせ、両部族の祖先神を降臨させたらしい。以後、二人の間には、神秘の絆ができたそうだ。その手のことに縁遠い私にはピンとこないけど、二人はどんなに遠く離れていても、相手が死ねば死んだとわかるのだろう。
けれども、その絆をもってしても、今、彼が何処にいるのかはわからないと上皇様はおっしゃった。
「アジスタスフニルは、今、おそらく異空間に封じられているのだろう」と、カルヴェル様。
「魔族にさらわれたのか、どこぞの宗教団体の保護か、わしら以外の大魔術師の仕業かは不明ではあるがな……アジスタスフニルを欲

しがる奴は結構な数、おる。わしゃ、これから幾つか心当たりを当たってみるわ。大魔王が復活している今、大魔王の器に最適なあやつにフラフラされてはかなわんからのう」

次に驚いたのは、アジンエンデの境遇が激変したことだ。

「アジンエンデ、おまえは『極光の剣』の使い手として、大魔王討伐を果たすまで女勇者と行動を共にしろ」

と、おっしゃったのは上皇様だった。

「アジの王の血を引く者として、おまえの父がどうなっているか見届けて来い。アジスタスフニルの肉体が魔に堕していたら、アジの剣をもって浄化してやれ」

了解し、アジンエンデは唇をきつく結んだ。しかし、その顔は青い。

一度も会ったことのない父親――赤毛の戦士アジャンことアジスタスフニルを場合によっては殺して来いと言われているのだから無理も無い。しかも、相手は、両手剣を手足のように用いた戦の申し子、アジ族最強のシャーマン、誇り高い戦士と言われた男だ。左腕を失った今も、おそらく、尋常ではない強さを誇っているだろう。

「おまえはずっと『極光の剣』の後継者となった意味を探していた。それは前『極光の剣』の使い手の為であったと、今、俺は確信している。魔に囚われているのであれ、光の勢力に守護されているのであれ、いずれ、奴は勇者の前に姿を現す。おまえは剣を振るう時を見極め、正しくアジの剣を使え」

義父に頷きを返してから、アジンエンデは私を見つめた。

「私を勇者一行に加えていただけるか、勇者殿？」

「いいわ」

即答した。

「でも、あなたはケルティ人。北方人のあなたは国境を越えて南へは行けない。そこのところはどうするつもり？」

私の問いに答えたのは、上皇様だった。

「アジンエンデの身分を奴隷に堕とし、カルヴェル様に贈る事にする」

「奴隷……？」

その言葉の重みにびっくりする。

「そうだ。カルヴェル様は南の人間だが、北方三国を自由に移動できる権利をお持ちだ。カルヴェル様の奴隷ならば、共に連れられ南へ行ってもおかしくはない」

「ケルティにおける奴隷はの、土地を失った農民、財産を失った人間などを指す。借財を肩代わりしてもらう為に、奴隷として、他家に仕えるのじゃよ」

と、私の動揺をみてとったのだろう、カルヴェル様が説明を補ってくれる。

「だいたいは年季奉公じゃ。年季があければ自由民に戻れ、普通に暮らせる」

そうと聞いて、安心した。

女王様と奴隷の関係はモロ好みなんだけど、人間を金銭的・肉体的・精神的に一生支配するなんてのは生理的にダメだ。奴隷は自分の意志をもって女王様の奴隷になるところがエロチックであり、主従関係に趣があるのだ。

まあ、正直に言えば、エロい体の女奴隷戦士ってのにはうっとりするものはあるけれどもね。

「そういうわけだ。ハリハラルド、アジンエンデを離縁しろ」

父親の命に、朴訥そうな息子は了承の返事を返し、形だけの妻だった女性を見つめる。

「無事に使命を果たされることを祈る。神のご加護が『極光の剣』の使い手と共にあらんことを」

「ありがとう。ハリの惣領たるあなたに、常に神のご加護があらん

ことを祈る」
「アジンエンデ……剣と共に必ず帰れよ」
と、上皇様。
「『極光の剣』の使い手としての使命を果たした後は、女として、この村で生きよ。もう一度、ハリハラルドに嫁ぐのだ」
「……その話は、大魔王討伐後に……」
アジンエンデは不快そうに眉をしかめつつ、それだけ言った。自分が消えれば、義妹アジナターシャがハリハラルドの正妻に復帰できる。両思いの二人が夫婦として末永く共に暮らせるとアジンエンデは考えているに違いない。しかし、
「今、魔法をかけ直した。大魔王討伐後、この国に凱旋し、もう一度、ハリハラルドの妻となるまで、おまえの魔法鎧は外れん」
「は？」
「その鎧は物理・魔法障壁つきの優れもの。我が惣領の嫁の命も貞節も守護してくれるだろう。安心しろ、術師たるこの俺が死んでもその鎧は外れん。大事な嫁を守ってやる」

怒るとすぐ剣を抜くアジンエンデが『極光の剣』で、上皇様に斬りかかる。魔法で物理障壁を張っている上皇様に、その刃は届かないのだが。
彼女がまとっている赤い鎧は、たいへん特殊なデザインをしていた。肘から手首までの腕輪、膝下から足の先までのブーツはともかく……胸はストラップレスのブラで、腰はハイレグの下着をつけているだけのようにしか見えない。
四部位からなるそれは、全部位を揃えて装着すれば、全身に物理・魔法障壁が張り巡らされる優れものではあったが……
魔法でしか着脱できず、全部位全てをいっぺんに外す事はできず、必ず一部位は体に残さねばならないというシロモノだった。又、外した部位も一時間もたたずに勝手に体に戻ってしまうという……

アジンエンデにとって、義父より贈られたそれは、祝福の鎧というよりは、破廉恥な格好を強要する呪いの鎧であった。
それが大魔王討伐中は外れず、しかも、ハリハラルドと再婚しない限り取れないとあっては……
まあ、怒って当然よね……

「わしは異世界をぐるぐる回ってこようと思う。悪いが、これからは別行動じゃ。アジンエンデはわしがラジャラ王朝に譲渡した事にするで、おぬしらはあれを父王から貰った奴隷戦士として扱い、伴ってやれ。奴隷として北から無理やりつれてこられたのなら、北方の言葉しかしゃべれんでも変ではない。あやしまれずにすむじゃろ」
「わかりました」と、答えておいた。
「彼女には早急に共通語を教えます」と、ガジュルシン。
「魔法道具を渡しておくゆえ、旅の途中で、アジスタスフニルに関する情報を掴んだら知らせてくれ。あやつを保護する事が、急務じゃて」
と、おっしゃる大魔術師様に、私はうなずきを返した。
「で、じゃな」
コホンと大魔術師様は咳払いをした。
「おぬしらを南に戻してやろうと思うが、何処がよいかの？」
ガジュルシンが私へと話しかける。
「僕の所には今の所、インディラ寺院から心話による連絡は何もない。大魔王の本拠地も、大魔王の今世の憑代の正体も不明のままだ。何処へ向かうかは旅のリーダーである勇者が決めればよいと思う」
ガジュルシン、ガジャクティン、アーメットに、ジライの視線が一斉に向いてくる。
私にも何処へ行きたいって計画は特にないけど……。
「魔族とか大魔王教徒が活発に活動している国って何処かしら？」
「それは東国にございましょう」と、ジライ。

「大魔王が復活して間もない今、この世に出現する魔族の数はまだ何処もさほど増えておらぬはずです。しかし、大魔王教徒の数が半端なく多い国はシャイナ、島国という地形も手伝って大魔王教徒どもがよからぬ企てをしやすいのはジャポネと、昔から決まっております」

「じゃ、シャイナかジャポネに行きましょう」

心は決まった。

「そこから、できるだけ移動魔法を使わず、馬で旅をしたいの」

「馬で？」と、アーメット。

「ええ」

私は頷いた。

「私、後宮からほとんど出た事なかったから……世の中がよくわからないの。知識としてどの国にはどんな服装の人間が住んでいるとか、どんな産業が盛んかとかは習ったわ。でも、何っていうのかしら、ただ知ってるだけなのよ。この世界が大事だから大魔王から守るんだと言いたいんだけど、私、この世界がどんなものだかよくわかってないのよ。だから……旅をして少しづつでも知っていって、世界を脅かすものを倒していって、守るべきものの価値を知っていきたいと思うんだけど、どうかしら？」

「ラーニャ」

ガジュルシンが笑みを浮かべて同意してくれる。

「とてもいい考えだと思うよ」

「いいんじゃない」と、アーメット。

「さすがラーニャ様」と、ジライ。

「僕は東国のどっちの国でもいいけど」

と、ガジャクティンは糸目でジロリと私をねめつける。

「ラーニャが行くんなら、シャイナの方がいいと思うよ」

今朝の事、まだ根に持ってるのか凄い不機嫌そうな顔だ。

「あら、どうして？」

ガジャクティンは十四歳にしては大柄な体を揺らし、肩をすくめ

た。
「ジャポネはね、共通語の浸透が最も遅れている地域なんだ。大都市はともかく、田舎じゃ、ほぼ通じないと思っていい。ジャポネ語が話せないと、あの国じゃ、会話も読み書きもできないんだよ」
うっ！
「ま、それぐらい一般常識だからラーニャも知ってると思うけどね」
……やな奴、知ってて当然みたいに言って。
「……シャイナに行く事にしましょうか」
ご想像通り、ジャポネ語なんて話せませんよ～だ！
「そうだね。シャイナなら共通語が通じるものね」
と、言うガジャクティンの決めつけにはカチンときた。
「シャイナ語なら話せるわよ！　インディラの隣国の言語ですもの。王族として話せて当然だわ。ペリシャ語だってできるわよ」
「ふ～ん」
ガジャクティンは意地の悪そうな笑みを浮かべる。
「じゃ、インディラ語、エウロペ語、シャイナ語、ペリシャ語、共通語、シベルア語なら話せるって考えていいのかな？」
「話せるわよ」
「ユーラティアスの言語で駄目なのは、ジャポネ語、トゥルク語、エーゲラ語、ケルティ語、バンキグ語なわけだね？」
私は声を荒げた。
「その通りよ！」
「ふ～ん」
ガジャクティンがニヤリと笑う。僕は全部話せるよと言いたそうな顔だ。あ～、もう！　やっぱ謝るのやめ！　今朝なんか、私、ひどい事、ポロっとこいつに言っちゃったみたいなんだけど、こいつなんかもう知らない！
「シャイナへ行くのなら、『龍の爪』の使い手、先代勇者の従者のもとへ送ろう」
カルヴェルは白い顎髭を撫でた。

「異次元めぐりをする前に、わしもあいつに会っておきたかったのじゃ」
「シャオロンにですか？」と、ジライ。
「うむ」
大魔術師様は重々しく頷きを返した。
「アジスタスフニルはシャオロンとは懇意であったしな。あやつにならば何ぞ話しているやらもしれぬし、シャオロンの霊的な力が何かを感じ取ってくれるやもしれん。会うておきたい……連絡をいれてみるわ」
私達の横で尚も義父を叩きのめそうと剣を振るい続けているにアジンエンデに『一時間後に出立する、支度しておけ』とカルヴェル様は声をかけた。

次に、私がびっくりしたのは、ほぼ一時間後。ガジュルシンもアーメットもひどく驚いていたけど。

一時間後に、又、上皇の家に集まるということで解散となった時、ガジャクティンが真剣な面持ちでカルヴェル様へと走り寄ったのは目の端で見ていた。
激しい口調で何かを言い募るガジャクティンに、その件は二人っきりで話そうと大魔術師様がおっしゃったのも聞いていた。ガジャクティンを伴って移動魔法で消えられたところも見ていた。
しかし……

回復魔法をかけて横になると言う白い顔のガジュルシン。昨晩、カルヴェル様を手伝って探知の魔法を使い続けた為に、体調を崩したのだ。

彼が上皇様の家の奥の衝立の向こうへと消えて行くのを見送った後、私はアーメットに両手剣の稽古をつけた。私やガジャクティンは暇をみつけては、こいつに付き合ってやっている。女勇者の影武者として恥ずかしくない程度には強くなって欲しいから。

二人とも上皇様から借りた普通の両手剣を用いて、対戦した。忍者として軽量な武器しか扱ってこなかったアーメットは、一応、扱えてはいた。が、両手剣は上手じゃない。振りが遅く、攻撃も単調だ。アーメットと両手剣勝負をしたら、間違いなく、百回やったら百回、私が勝つだろう。

なのに……アーメットの方が『勇者の剣』が軽いのだ。普通の両手剣の重さなのだそうだ。ヘボな腕前なのに男ってだけで好かれてる。ずるい。

上皇様の家に戻ると、ガジュルシンの怒声が聞こえた。彼が声を荒げるなんて珍しい。

アーメットと二人で中を覗きこむ。

真っ青な顔のガジュルシンが責めているのは、卓につく大魔術師カルヴェル様とその向かいの大柄な男のようだ。大男は卓に槍をたてかけている……？

扉に背を向けている大男に、目がくぎづけとなってしまう。

小山のようだとまで言ってしまっては過言だけど、たいそう大きい。頭部には白いターバン、逞しく厚い筋肉で覆われた体はインディラ風の鍛錬用の稽古着をまとっていた。武闘僧の僧衣を模したそのデザインは、特注品だ。それをまとえる人間はこの世に一人しか居ないはずだ。

「お父様？」

その背丈、身なりからして、間違いない。そう思い声をかけたのだけれど、振り返った相手の顔を見て思い違いに気づく。

体格のわりに、顔立ちに武骨なところはない。端正な品の漂う顔に、涼しげな細い青い瞳。

顔立ちまでよく似ている。しかし、皺のない肌は若々しく、口元に髭もない。

「ラーニャ……」

大男の声を聞いた途端、心臓がドキン！　と大きな音を立てた。声楽師のようによく通る、澄んだ、甘い、しっとりとした声。声まで酷似している。

大男が口元に柔らかな笑みを浮かべる。

その表情も、最愛の男性の微笑みによく似ていた。

が……

「何、マヌケ面してるのさ。僕がお父様似の美形に育ったから、みとれちゃってるわけ？」

その生意気な口調が誰のものかは、明らかだった。

「……ガジャクティン？」

大男は当然だと言わんばかりに強く頷いた。

けど……

そんな馬鹿なと思う。

確かに十四歳のわりには大柄だったけど、並みの大人よりちょっと大きかった程度だった。

それが今や、座っていてもそれとわかるほど大柄。お父様と同じか、それ以上に大きそうだ。

しかも、声が全然、違う。図体のわりにキャンキャン鳴く子犬みたいなうるさい声をしていたのに……

とても落ち着いた、お父様みたいな声になるなんて……

たった一時間で？

泣きそうな顔のガジュルシンが、私とアーメットを見つめて言った。
「この馬鹿、異次元空間に籠もっていたんだ」
「異次元空間？」
ガジュルシンは頷いた。
「時の流れが今世とはまったく違う、異空間だ。こちらの数秒が向こうの数時間になるような空間で、そこで魔法と両手槍の修行を積んだって言うんだ」
「多分、二年半分ぐらい年をとったと思うよ。今、肉体年齢は十六～七ぐらい。最初は魔法修行だけのつもりだったんだけど、旅の間、聖なる武器『雷神の槍』をお借りできる事になったから、槍の稽古もしてきたんだ。けっこう強くなったよ」
と、ガジャクティンがあっさりと答えると、ガジュルシンは噛みつかんばかりに怒った。
「人は人と触れ合い、年を重ね、共に老いてゆくものだ。他者と違う時間軸に生きる事がどれほど罪深く残酷なことか、おまえにはわかっていない！」
「大魔王が復活してるのに、何、悠長なこと言ってるのさ」
ガジャクティンは大袈裟に肩をすくめてみせた。相手を小馬鹿にするような態度を崩さないところとか、全然、変わってないんだけど……
ダメ！　お父様そっくりな姿でお父様そっくりな声で言われると、変な気になってきてしまう。
「従者の能力が向上すれば、それだけラーニャが楽になるんだよ。僕は従者としてやれる事をやっただけだよ」
「わしは止めたんじゃがな」
と、大魔術師様がため息をつく。
「どうしてもと本人が言うでの、願いを聞いてやったんじゃが……さっき、王宮に顔を出し、アジンエンデのことを頼むついでにナーダに事情を話したら……怒鳴られたわ」

「当たり前です！」
ガジュルシンは大魔術師様に詰め寄った。
「その昔、ハリハールブダン様と異次元に籠もられ、魔法指導をした事は伺ってます。しかし、成人の二年と少年期の二年では、人生における意味が違いすぎます。ガジャクティンは十四歳の子供だったんですよ！　子供時分にしか味わえぬ経験も、精神的成長もあったでしょうに……」
ガジャクティンは快活な声で笑った。
「そんなものいらないし、僕は大人同然に大柄だったから、どうせ子供の経験なんてできなかったよ」
「ガジャクティン！」
「それに、僕は王位第二継承者だけど兄様に何かあっても王国を継ぐ気はないもの。ニ～三才老けたってどってことないよ」
パァァーン！と、派手な音が響き渡った。
私は目をみはった。
ガジュルシンが……
あの誰に対しても人あたりのいいやさしい性格の彼が……
気弱と言うか、臆病な彼が……
弟の左頬を平手で殴ったのだ。
ガジャクティンは茫然と兄を見つめている。
さっきまで青かった顔を赤く染め、涙を流しながらガジュルシンは言った。
「どんな事があろうとも……今後、こんな勝手なことはするな。おまえは父上と母上の大切な息子で、僕の大事な弟だ。おまえが生命を大事にしないのなら、僕はおまえを許さない。おまえを弟と思うものか！」
凄い巨体となったガジャクティンが、少女のように小柄なガジュルシンに抱きつき、謝っていた。

「ごめんなさい、兄様」
と、反省して涙を流すガジャクティンは、内面的には年相応の十四歳に思えた。
でも、その声と姿はお父様そっくりで……あああ、でも、お父様ならこんな泣き方しないし……あああ、でも、お父様、泣き声だとこんな感じのお声になるのね……あああ、もう、どうしてもお父様のこと考えちゃう！　願かけの好きなもの断ちが～～～

「僕は……兄様や父様に比べ、魔法の才がないんだ」
何で大魔術師様に頼み異空間に籠もって修行を積んだか、ガジャクティンは涙をぬぐいながら兄に語った。
「小さい頃から、僕、魔法を習得したかったんだ。勇者の従者になるんなら、使えた方がいいもの。神聖魔法でも攻撃魔法でもいいけど、できれば回復魔法を覚えたかった。回復魔法の使い手はＰＴに何人いても困らないから。でも、宮廷魔法使いが言うには僕にはあまり魔法の才がないみたいなんだ。十年ぐらいかけて修行して初級魔法が使えるか使えないか程度の魔力しかないんだって。だから、父様は僕には魔法教師をつけてはくださらなかった。才のないものを無理やり学ばせて、僕を傷つけてはなるまいという父様の配慮ではあったんだけど……」
ガジャクティンの巨体を、兄のガジュルシンが優しく撫でる。
「なら僧侶魔法をと思ったんだけど、僕は父様や兄様ほど信仰に厚くないから寺院の魔法は覚えられないって、僧侶様に断言されちゃったんだ。それで、僕、ずっと大魔術師様に弟子にして欲しいってお願いの手紙を送っていたんだよ」
「カルヴェル様に弟子入り志願してた？」と、ガジュルシン。
「うん。魔法素人が初級とはいえ魔法を習得するには半年から一年かかるのが普通でしょ？　でも、カルヴェル様はセレス様にたった一月で神聖魔法の初歩を教えた方だもの。僕の微弱な魔力も上手に

伸ばしてくださると思ったんだ」
「十五を過ぎてから、ナーダより許可が得られたら、しばらく教えてやると約束していた」と、大魔術師様。
「ならば……そのようにしてくだされば良かったのに」
と、怨みがましい目でガジュルシンンが大魔術師様を見つめる。
「わしとて、二年半近くも籠もらせる気はなかったんじゃが……まあ、ちと、アクシデントがあってな、わしが失敗したのよ。すまぬ、ガジュルシン。このような事は二度とせん。おまえの身内を魔法で弄ぶ事はもう決してせぬ」
「お言葉通りに願います……」
「でもね、兄様、おかげで、僕、中級までの攻撃魔法と神聖魔法、初級だけだけど回復と補助魔法が」
ガジュルシンは弟へと視線を戻した。
「父上にはきちんと謝ってきたんだろうね？」
ガジャクティンは喉をつまらせた。
「その服、父上のだろ？　許可を得て貰ってきたのだろうね？」
「僕……大柄になりすぎちゃったから合う服がなくて、それで……」
「父上に謝ってきたんだろうね？」
ガジュルシンは同じ質問を繰り返した。小柄な兄に睨まれ、巨体の弟がシュンと小さくなる。
「……逃げてきちゃった」
「ガジャクティン！」
「だって、父様、凄い怖い顔で怒るから！」
「当たり前だ！　馬鹿！」
大男の首根っこをつかまえて、ガジュルシンが大魔術師様を睨む。
「一度、インディラの王宮に戻ります。シャイナへ移動なさるのでしたら、僕等に構わずどうぞ。僕はその座標は知りませんので、後ほど、僕等を拾って、そこまで送ってくだされば結構です」
「うむ。まあ、跳ぶようなら、その前に、おぬしに連絡をいれるわ」
大魔術師様は頷いた。

「わしが悪かったと……ナーダに謝っておいてくれ」
「アジャン様の件もありますし、さほど時間をかけずに戻るつもりではいますが……父上と母上のお心次第になると思います。それでは……」
ガジャクティンごと、ガジュルシンが消える。
移動魔法でインディラの王宮に戻ったのだ。
お父様にそっくりすぎるガジャクティンが消えてくれたおかげで、私はホッと息をついた。ようやく落ち着ける……
けど、魔法の使いすぎて体調を崩してたのに、大丈夫なのかしらガジュルシン。
「異空間で修行か……」
ボソッとつぶやいたのはアーメットだ。
「あんたも籠もって、両手剣の練習してきたら?」と、言ったら、
「冗談!」
アーメットはブルブルとかぶりを振った。
「ニ〜三年も異空間に籠もるなんて無理!」
「あ〜ら、あんた、男だもの。ニ、三歳老けたってどってことないわよ」
華の乙女のニ〜三年は大きいけどね。男なら、別にいいじゃない。
「男だから……そのニ〜三年が問題なのでございます、ラーニャ様」
と、言ったのはいつのまにか、どっかからやって来たジライ。抜いた小刀を、お手玉みたいにポーンと投げては手に戻しを繰り返して遊んでいる。
「異空間に籠もるのであれば、その前にせねばならぬ支度もあるのですよ、男には……。のう、アーメット?」
「籠もらない!」
強い口調でアーメットは否定した。
「このままで、俺、絶対、両手剣、うまくなってみせる! 俺は姉様と同じ時を生きるんだ! 異空間なんかに籠もるもんか!」
あらま、珍しくかわいいこと言ってくれてるけど……顔面蒼白じ

ゃない、あんた。

三つの驚き！　心を乱す声！（後書き）

ガジャクティンの身長は１ｍ８０から２ｍ超へ。更に大きくなりました。

東へ！　龍の爪を持つ男！

ガジュルシン達が戻って来るまでの間、大魔術師様はそれなりにお忙しかったと思う。

赤い鎧のせいで今までの服がきつくなっちゃったアジンエンデに、鎧を隠せ且つ動きやすい服を見立ててあげたりしてたから。

アジンエンデは、今、エーゲラ風の胸元がやや開いた男性用チュニックを着て、その上からバンドを通し『極光の剣』を背負っている。剣士っぽい格好だし、太腿が見え隠れして色っぽいし、私的にはＯＫだと思う。

大魔術師様は私とジライに、青銅の指輪を渡してくださった。赤毛の戦士アジャンのことで何かわかった時、或いは大魔術師様の助力が必要となった時、その指輪をつけて『大魔術師様に会いたい』と思えばすぐに移動魔法で来てくださるのだとか。私達は青銅の指輪を小袋に入れ、それぞれ携帯することにした。

移動魔法の話題が出たついでに、私は疑問に思ったことを質問してみた。

これから行く『龍の爪』の所有者の所へは、ガジュルシンは跳べないと言っていた、どうしてなのか？　と。

「ガジュルシンはその場に行った事がない。だから、跳べんのじゃ」

「あ、でも」

私は小首を傾げた。

「私をインディラからエウロペの侯爵家へ運んでくれた宮廷魔法使い、侯爵家に跳ぶのは初めてだって言ってましたよ？」

「跳ぶ時、足元に魔法陣が無かったか？」

私は記憶の糸をたぐりよせた。そういえば床に円陣があったような気がする。

「ありました」

「本来、移動魔法は自分か同行者が行った事のある場所しか跳べん。

じゃが、外部から魔法援助があれば、初めて行く地にも正確に飛べる。後宮育ちのおまえさんは知らぬかもしれんが、どの国も大都市には魔術師協会を置いておる。魔術師協会には必ず、移動魔法用の魔法陣があるのじゃ」

「移動魔法用の魔法陣……？」

「魔法陣は魔力を増幅する。又、魔法陣から魔法陣へのような移動は、術師が行き先をイメージできんでも、魔法陣が先導（ナビ）し勝手に道を開いてくれるゆえ跳びやすいのだ。侯爵家の玄関ホールにあった防御結界は、まあ、その応用よ。座標を教え導いてはやるが、出現はさせぬ。相手を異空間にとどめおき、その正体を調べられるように、の。あれは気に喰わぬ相手ならば追い返せる仕組みになっておる」

「？」

「つまり、行った事がない場所でも跳ぶ側と跳んだ先に魔法陣かその代替となるものがあれば、移動魔法で行ける。しかし、逆に言えば、跳びたい先にそのような魔法援助がなければ、初めての地には跳べぬということ。わかるかの？」

「はい……『龍の爪』の所有者の所には魔法援助となるものがないから、その地へ行った事のないガジュルシンでは移動魔法で跳べないって事ですね？」

「その通りじゃ」

大魔術師様は鷹揚に頷いた。

三十分もかけず、ガジュルシンがガジャクティンと戻って来た。

ケルティからインディラって、まともに進んだらどれぐらいかしら？　馬の旅で……四ヶ月はかかるわよね、多分。それが行って、話し合いして、帰って三十分ですむなんて、変な感じ。ガジュルシンの魔力が大魔術師様並だからできる事なんだけど、最近、移動魔法を目にしすぎていてその有難みがいまいち実感できない。

「勝手をいたしました、すみませんでした」

上皇様の家に集まった、私達勇者一行、大魔術師様、上皇様親子

に対し、ガジュルシンが頭を下げる。
　大丈夫かしら？　と、ちょっと心配だったんだけど、ガジュルシンは跳ぶ前よりむしろ顔色がよくなっていた。お父様が癒したんだろう。次期大僧正候補だったお父様は、還俗後も出家前と同じく強力な魔法が使えるのだと聞いた事がある。神聖魔法と回復魔法にかけては、超一流なのだ。
「僕のせいで、出立を遅れさせちゃってごめんなさい」
　と、ガジャクティンが謝るもんだから、心が乱れてしまった。あああああ、何ってお父様にそっくりな声！　若くって髭がないことを覗けば姿かたちもそっくりだし……しゅんと落ち込んでる顔を見てるとドキドキする……かわいいわあ……もっとしょぼくれさせたくなっちゃう……
　でも！　冷静になるのよ、私。中身はガジャクティンなのよ、あのクソ生意気なガキなのよ！　見た目と声だけに惑わされちゃダメ！　こいつは、人間的な深みも渋みも全く持ってないんだから！　M奴隷にしたところでぎゃあぎゃあ痛がってわめくだけの根性なしよ、絶対！
　ガジャクティンは大きな荷物入れを持っていた。成長しすぎた彼の為に、お父様が自分の服を譲って持たせたのだろう。王族である私達の服は特注品（オーダーメイド）が普通。まあ、旅の間は場合によっては既製品を着る事になるかもだけど、巨体サイズの衣服なんて普通の衣料品店じゃあるわけがない。しかも、これから行くのは、小柄な人間の多い東国だし。お父様の服、譲ってもらう方がてっとりばやいわよね。
　とりあえず、旅のリーダー勇者としてのお言葉を言っておくことにした。
「時は巻き戻せないんだし、やっちゃったことはやっちゃったことでもう仕方ないわよ。カルヴェル様から聖なる武器の『雷神の槍』をお借りした上に、魔法まで使えるようになったんでしょ。凄いじゃない。私なんか足元にも及ばないほど超優秀になっちゃったわね」
「ラーニャ……」

「けど、私だって負けないわ。そのうち、絶対、『勇者の剣』を自在に扱えるようになってやる。それまで、おミソでみっともない勇者だけど、従者として守ってちょうだい」
「もちろんだよ、ラーニャ」
ガジャクティンの口元が綻ぶ。
「ありがとう……僕、頑張るよ」
ん？　何で、今の話の流れで、お礼を言うの？
ガジャクティンが嬉しそうに笑みを浮かべた。
「僕、命にかえても、ラーニャを守るよ」

ズッキュ～～～～ン！

と、何かが私の心臓に突き刺さった。
私の口は勝手に『軽々しく、命をかけるなぁ！』と叫び、私の右手は勝手に巨体の義弟を殴り飛ばしていた。
壁にぶつかった義弟が『何で殴るのさ！』と、半泣きで睨んできたが、無視した。
慌ててガジャクティンのもとへ走るガジュルシン、鬼と言いたそうなアーメット、ニコニコ笑っているジライ、私の暴力に驚いているアジンエンデともと旦那様、ホホホと笑う大魔術師様、表情すら変えず平然としている上皇様……

微笑むな！　いや、顔を向けるな！　しゃべるのもダメ！
あんた、お父様じゃないんだから！　私を惑わさないでちょうだい！

上皇様と息子のハリハラルドに別れを告げ、私達は大魔術師様の移動魔法でケルティを離れた。

お別れまでの間、ハリハラルドは、何度も、アジンエンデの手をとったり、やさしい言葉をかけたりしていた。

何か……アジンエンデの話と、ちょっと違うような気がした。アジンエンデは、旦那さんは自分の義妹アジナターシャと相思相愛だと思ってるみたいだけど……アジンエンデへのこまやかな気遣いには、友愛以上の感情があるような気がした。

もちろん、女の勘でしかないけど。

跳んでった先も、小さな村だった。

まばらに家が立つ、緑に囲まれた村。家々を見下ろす、低い丘の上に出現したみたい。

丘の上の家から、小柄な東国人の男性が出てくる。黒の束髪、穏やかな顔の……青年？　よね。東国人って若く見えるから、二十代前半ぐらいなのかしら？　東国の格闘家らしい道着を着て、背に革袋を背負っている。

「ようこそおいでくださいました、女勇者ラーニャ様とご一行様……カルヴェル様、ジライさん、お会いできて嬉しいです」

え？

この人……もしかして、お母様の従者だった、格闘家シャオロン？　お母様の従者になった時が十二才だったから……今、三十代前半？　嘘ぉ。

全然、そう見えないわ。

髭を生やしてないせいかもしれないけど……それにしても若く見えるわ。肌はすべすべしてて滑らかそうだし、武骨な感じが全然ない顔立ちは女性的な感じもするし、黒目が大きいし……二十歳と言われても信じちゃいそう。

意外なことに相手が使用してきた言語はシベルア語だった。北方人のアジンエンデが同行している事を、カルヴェル様から聞いていたのだろう。私もシベルア語で答えた。

「はじめまして、ラーニャです。お母様の従者だった方ですよね？」

東国人の男性は頷いた。

「『龍の爪』を預かっています、シャオロンです。この村の村長でもあります」

「何か、昔に戻ったみたいですね」

ニコニコ笑いながら、この村の村長さんは急須と茶碗を持ってきて、自ら私達にお茶を入れてくれた。召使とかいないのかしら、この家……

シャイナ式のテーブルにつく私達をすっごく嬉しそうに見つめて、英雄のはずの方が給仕をしてくれる……

「ラーニャ様はセレス様そっくりだし、ガジャクティン様はナーダ様に瓜二つだし、アジンエンデさんは女性だけど雰囲気はアジャンさんによく似ていて、ジライさんはあいかわらずの黒装束に覆面で、その上、カルヴェル様までいらっしゃるなんて！　懐かしくって胸がいっぱいになります」

お茶、どうしましょう？　と、英雄様が尋ねると、覆面のジライは、

「いただこう」

と、あっさりと覆面を外した。

東国の格闘家はにっこりと微笑み、私の横に座るアジンエンデがぎょっとしてジライの素顔を見ていた。そういえば、アジンエンデの前じゃ、ずっと覆面姿だったわよね、ジライ。アジンエンデが変な顔でジライを見ている。白髪・白い肌の白子が珍しいのね、きっと。

「おまえ、変わらんな」

意外なほど、ジライの目がやさしげ。私やお母様以外の人にそんな顔するの……初めてじゃない？

「多少、体は大きゅうなったが、中身は昔のままだ」

「すみません、成長してなくって」

明るく笑って頭を掻き、先代勇者一行のメンバーの見た目から外れているガジュルシンやアーメットにも『あなたがたのお父上やお母上には、昔、オレ、本当にお世話になったんです。感謝してるんです。そのご恩を万分の一でも返したいと、ずっと思っていました。オレにできることなら何でも果たしますので、何なりと申し付けてください』と、声をかける気配りも忘れない。

何というか……デキた人……

全然偉ぶるところがなくって、低姿勢でそれでいて卑屈なところはなく、爽やか。

『女勇者セレス』に書かれていた通りの、真面目で、素直、何事にも一生懸命で、人当たりのいい方なのだろう。ちょっと惹かれちゃうかも。

お茶がゆきわたってから、東国の格闘家シャオロンも席についた。

「アジャンさんのことですよね？」

懐から手紙を出し、格闘家シャオロンはそれを大魔術師様へと差し出す。

「カルヴェル様がお訪ねになったら渡すようにと、一年半前に預かったものです」

「あやつが片腕になった後じゃな……」

「はい。すみません、オレ、アジャンさんが左腕をなくされたの知ってたんですが、カルヴェル様には内緒にしてくれと頼まれていたので……」

「いや、いい。あやつがわしに知られたくないと思ったのは、わしのそれまでの行いが悪すぎたということよ」

「手紙の内容はオレは知りません。どうぞご覧ください」

魔法で手紙を手元にひきよせてから、開封もせず、大魔術師様は

魔力をほんの少し高められた。手紙の中身を読んでいるようだ。
「……なるほど、な」
大魔術師様の前から手紙が消える。転送魔法で何処かに送ってしまったのだろう。
「やっかいなことになったが……まあ、最悪の事態だけは避けられそうじゃな」
「最悪な事態？」と、私が尋ねると、
「アジスタスフニルが大魔王の器とされること。『勇者の剣』の持ち手が死に絶えるに次ぐ最悪の事態が、それよ。少なくとも、当分は、アジスタスフニルは安全じゃ。奴にはかなり強力な庇護者がついておる。今はそやつの庇護下に居るのじゃろう、おそらくは」
「それは……どなたです？」と、ガジュルシン。
「名を聞かずとも、おぬし、わかっておるのだろ？」
大魔術師様がホホホと笑われる。
「今、おぬしが想像している奴よ」
「……」
「わしゃ、インディラの大僧正とは茶飲み友達ゆえ、インディラ寺院がこたびの大魔王復活劇でどう動くつもりか知っておる。真面目なおぬしが勇者の従者になりたがった理由も含めて、の」
「それじゃあ……」
私の口元に笑みが浮かんだ。
「アジンエンデのお父さんは、インディラ寺院に保護されてるんですね？」
「寺院そのものではないが、そっち方面の人間じゃ」
良かった！　私は隣に座る赤毛の女戦士を見つめた。場合によっては、実の父を斬る覚悟だった彼女も、父親が光の勢力の庇護下にあると知ってホッとした顔をしている。
「わしは、大僧正に会うて今後のこと相談してくるわ」
大魔術師様が席を立つ。
「アジスタスフニルと面談かなうようになったら連絡するで、待っ

ておれ、アジンエンデ」
「ありがとうございます」
と、アジンエンデ。大魔術師様に深々と頭を下げている。
「勇者一行のこと、頼むぞ、シャオロン」
「はい、カルヴェル様」
「馳走になった。それでは、又の」
大魔術師様の姿がフッと消える。移動魔法でインディラの総本山に渡られたのだろう。
カルヴェル様の消えた空を見つめていると、英雄様から声がかけられた。
「ラーニャ様。シャイナにご滞在の間、案内を務めてもよろしいでしょうか？」
「え？　いいんですか？」
「はい。従者となれればもっと良かったのですが……『龍の爪』の現在の所有者であるオレは皇帝陛下の私兵にあたります。大魔王が復活し国に暗雲がたれこめている今、主君の為に、国の災いを祓い続けねばなりません。皇帝陛下のご許可をいただけねば他国へ渡る事はできませんが、ラーニャ様がシャイナで邪悪と戦われるのであればその間、共に戦ってもお役目から外れることはありません。オレの同道をお許しただけますか？」
許すも何も。
「英雄のシャオロン様がご同道くださるのなら、心強いです」
「どうぞ、シャオロンと」
英雄様が、やさしく微笑まれる。
「高貴な姫君がオレなんかに尊称をつけてはいけませんよ」
え、でも。
「ずっと年上の武人を呼び捨てにしたら、お母様に怒られると思います」
「オレの方からそうしてくださいってお願いしてるのですから、問題ないですよ」

かわいいかも。笑うと子犬みたい、この方。
「セレス様によく似たラーニャ様から、『シャオロン』って呼んでいただければ、昔みたいで嬉しいです」
はあ、まあ、そういう事なら……
「では、失礼して……シャオロン、シャイナの案内、お願いします」
「はい、ラーニャ様」
礼儀正しくて、従順そうでいて伝えるべきことはきちんと伝える、しっかりした己を持つ……
この人も……ちょっとツボかも……
ギャップ萌えなところはないけど、アジンエンデとは違った意味で魅力的だわ。M奴隷むき。
私がそんなこと考えてるなんて、多分、全然、想像もしてないだろう、東国の格闘家は人好きのする笑顔を浮かべていた。
「今日はこの家にお泊まりください。明日より、ランケイの街を目指しましょう。入国手続きをお願いします」
「入国手続き？」
東国の格闘家は頷いた。
「国境を越えずに移動魔法で入国した場合でも、可能な限り早く手続きをしなければいけません。でも、この辺は田舎なので、ちゃんとした役所がないんです。一番近いのがランケイで馬で三日の距離です」
あらまあ。けっこう田舎なのね、ここ。
「ここから徒歩で数時間のところに隣村があります。明日朝早くに出発して、そこで馬車を借りましょう」
「そこでは馬は買えない？」
「農村ですから。この人数分の乗馬用の馬など揃えられませんよ。旅の乗馬はランケイで買いましょう」
むぅ……
移動魔法を使わないで移動するって、想像以上にたいへんそうだわ。

大魔術師様にどっか都会の街に送ってもらった方が楽だったかも。
うぅ～～ん、インディラの王宮から物質転送魔法で馬を送ってもらうって手もあるけど……
いつまでも親がかりって、格好悪い。自立してなさすぎ。『勇者の剣』もきっと快く思わない。
どっかの国で魔族が大暴れしてるわけじゃないんから、少しづつ進んでいくんでもいいわよね。
人間が生きている世界を実際に歩いてみて、守るべき世界がどんなものなのか知りたかったんだし。

シャオロンのおうちには客用の寝具が四人分しかないとのことなので、私とアジンエンデとジライが泊めてもらう事になった。
「ガジュルシン様、ガジャクティン様、アーメットさんは、オレの弟子のアキフサの家にお泊りください。彼はジャポネ出身なので、畳部屋がある、シャイナにしては珍しい造りの家なんですよ」
へぇぇ、畳。
『さん』付けはやめてくださいと英雄にお願いするアーメット。忍者の若造に尊称をつけるのは変って言ってる。アーメットも真面目ねえ。シャオロンはわかりましたと頷いていた。
「畳部屋、見てみたいかも」
私がそう言うと、シャオロンはにっこりと笑った。
「後でご案内しますよ。でも、見学だけですよ。畳をお気に召しても、ラーニャ様はオレの家のシャイナ式の寝具でお休みください」
あら、何故？　と、思って聞くと、笑みを絶やさないままシャオロンは言う。
「畳の上だと、開放的すぎるからです」
と、わけのわからない理由を言われる。女の私はそこで寝てはいけないのだそうだ。
ジャポネに行く事もあれば、嫌ってほど畳部屋を経験する事にな

るだろうし……まあ、いいけど。
でも、なんで、私、そこで寝ちゃいけないのかしら？
「一応……用心ですよ」
シャオロンは、あくまで、にこやかだった。

東へ！　龍の爪を持つ男！（後書き）

「女勇者セレス」本編ではジライはずっと素顔を隠していました。が、「千人斬り事始め編」のジライ編ではセレスの命令で覆面をつけるのをやめていたので、その話から続く本作ではシャオロンもジライの素顔を知っています。

私の知ったこっちゃないわ！　男達の夜！

セレス様の従者だった『龍の爪』の使い手シャオロン様は、好人物だった。

忍者ジライがついて来てくれているとはいえ、後宮育ちの僕等は世俗にうといし、アジンエンデは南の文化を知らない。世慣れぬ僕達の後ろ盾となってくれる方が、良いお人柄の方で本当に良かった。

僕とガジャクティンとアーメットは、シャオロン様の格闘の弟子アキフサの家に泊めてもらうこととなった。

アキフサはジャポネの神官のような格好をしていた。赤っつらでぎょろっとした眼の、濃い髭の男性だ。小さい子供ならばその顔を見ただけで泣き出しそうな異相だったが、たいへん愛想のいい、面倒見のいい方だった。

食事の給仕も妻だけに任せず、汁をよそったり膳を運んだりと積極的に手伝う。恐ろしげな外見に似合わず、家庭的な方のようだ。挨拶に訪れた子供達は、男女とも皆、父親によく似た顔をしていたけれども、よく笑う愛嬌のある子供達だった。

八畳の部屋で僕等三人は一緒に休む事となった。僕は荷物より、シベルア語辞典とシベルア語日常会話集を取り出した。シベルア語について共通語で書かれた本は王宮に数冊あったが、その逆の本はなかった。教本なんて作ったことないけれど、アジンエンデの為に、わかりやすい共通語単語帳などの学習本を作ろうと思う。

＊　＊　＊　＊　＊

「三人で寝るのなんて、すっごい久しぶりだよね」
三つ並んだ布団、その左端の布団に寝っ転がっているガジャクティンは、上機嫌だ。ごろんごろん、布団の上を転がっている。う〜〜ん、顔も体も声もナーダ父さんそっくりなのに、中身がまんまガジャクティンだから変な感じ。まあ、そのうち慣れるだろうけど。
王子の二人はターバンも外し、俺らは夜着に着替え、もう後は寝るだけとなっている。
「八年ぶりかな？　昔は、夏の別荘じゃ、キングサイズのベッドで、ナーダ父さんと俺らと姉貴と雑魚寝したよな」
そう口にしてから、ガジャクティンにとっては十年ぶりになるのかもしれないと俺は思った。
「楽しかったよね」
ガジャクティンはニコニコ笑っている。うん、めちゃくちゃ楽しかった。枕投げしたり、拳闘士ごっこしたり、父さんからおもしろいお話いっぱい伺ったり、父さんの体にぶらさがったり……
けど、それは姉貴十才の夏が最後で終わった。『私、もうレディーなのよ、男達と寝るなんてはしたない真似できないわ』と、ませた口を姉貴がききはじめたからだ。
じゃ、姉貴を除いた三人とナーダ父さんの四人で寝りゃいいやって俺は思ったんだけど、姉貴一人だけを疎外しちゃいけないと真面目な父さんは思ったみたいで、子供達との就寝をやめてしまった。
姉貴十一の夏は、父さんに昼間いっぱい遊んでもらった記憶がある。俺もガジュルシンも姉貴も、夜は、一人で、それぞれの部屋で寝た。けど、幼かったガジャクティンは父さんにひっついて、寝つくまでという約束で一緒に寝台に横になってもらっていた。今にして思えば、父さん、持込の仕事、夜中とかにやってたんだろうなあ。本当、子煩悩で働き者の王様だよ。うちの親どもに爪の垢を煎じて飲ませてやりたくなる。

で、姉貴十二の夏には、俺はもう王子じゃなかったし……インディラ忍者の隠れ里で過ごしてたからなあ。

王子達と忍者。身分が違っちまった俺らが、同じ部屋で、同じように布団につくなんて本国じゃありえない事だ。侯爵家じゃそれぞれ個室だったし、昨日のハリハールブダン上皇の家じゃ同じ家の寝台で寝ることになってたけどガジュルシンは徹夜だったしなあ。

布団の上で欠伸をしたガジャクティンが、ガジュルシンの背を見つめる。机に向かって共通語のアンチョコ本を作ろうとしているのだ。赤毛の巨乳戦士の為に。

善意の塊で真面目なガジュルシンだから、多分、ある程度形になるまで、書き続けるつもりだ。共通語もできないんじゃ、あの女戦士、こっちで苦労するのは目に見えてる。早く渡してやりたいんだろう。

でもな、いい奴なんだけど、時々、鈍いんだよな、ガジュルシン。俺はガジュルシンが書いているものを覗き込むふりをして、その耳元で囁いた。

「寝ようぜ、ガジャクティン、待ってるぞ」

机から顔をあげたガジュルシンが、びっくりしたように俺へと視線を向ける。間近で見ると、こいつ、睫、長いよな。

「あいつ、二年半近く異空間に籠もってたんだぜ。カルヴェル様の分身とは一緒だったみたいだけど、ずっと一人だったんだぞ」

「あ」

ガジュルシンの形のいい眉がさがり、アーモンドのような目が細められる。弟思いのガジュルシンは、今、何をすべきかわかってくれたようだ。

「兄様、おしまい？」

机から離れた兄を見て、ガジャクティンの顔がパーッと輝く。犬だったらきっと、嬉しくって振り切れんばかりに尻尾を振っていることだろう。

「うん、昨晩、徹夜してしまったし、今日はもう休むよ」

「それがいいよ！　無理すると兄様、倒れちゃうもの！」
真ん中の布団に入ってとせがむ弟に、僕は端でいいよと答える兄。王子様方をおしのけて、忍の俺が真ん中ってわけにはいかないだろう。ガジュルシンには中の布団に入ってもらった。
蝋燭の火を消さないでってガジャクティンが言うんで、机の上のをつけたままにしといた。夏の別荘でも、そいや、そうだったな。今じゃもちろん平気だろうけど、ウシャス様の寝所から俺らと同じベッドに転がり込んできた時、ガジャクティンは最初は三つだった。真っ暗闇が怖いってよく泣いてたっけ。
あのかわいかった小さなボーズが……今や、俺よりも上も横も遥かにデカい。俺より背が高いガジュルシンでさえ、ガジャクティンのそばじゃ子供みたいに見える。
くそぉ……
親父の東国の血が怨めしい。

＊　＊　＊　＊　＊

又、失敗してしまった。
僕は正論ばかりをふりかざし、人の情を疎かにしてしまう。
異次元空間から戻ったガジャクティンを、僕はずっと叱り続けていた。現実から切り離された空間に、自己の利益をはかる為に籠もるなど、許されざる罪だ。その点においては、僕は、生涯、ガジャクティンを許す気はない。人としてやってはいけない過ちを犯したのだから。
けれども、僕は弟の気持ちをわかっていなさすぎる。
寂しくなかったはずがない。
外見が大人びているせいで誤解されがちだが、ガジャクティンの内面は非常に幼い。未発達な精神は十歳相当ではないかと思う。そ

の昔、周囲の大人達から僕と比較されすぎたせいで対人恐怖症の気があるのだ。劣等感も強い。家族と気の置けない家臣以外とはまともに会話してこなかったので、幼さが残ってしまっている。

社交話術や身につけた知識で表面は取り繕っているが……ガジャクティンは子供なのだ。

異空間に二年半もいたなんて……寂しくって寂しくってたまらなかったろうに、『優秀な従者』となって褒められたい一心でガジャクティンは頑張ったのだ。

ラーニャに『私なんか足元にも及ばないほど超優秀になっちゃったわね』『従者として守ってちょうだい』と、言われた時のガジャクティンの嬉しそうな顔……

怒るべきところは怒った上で、褒めてやるべきだった……

異空間ではどうだった？　と、話をふってやると、僕がまだ怒ってると思ったのか、おどおどとガジャクティンは話し始める。

カルヴェル様の分身と籠もった空間は、ガジャクティンの目には一軒家の中のように見えたそうだ。窓も出入口もなかったけれども、食事はカルヴェル様の分身が三食出してくれ、水と火の魔法を用いて風呂もわかしてくれたようだ。

「最後には分身のお力を借りなくても、水を湧かすのも、火を起こすのも一人でできるようになったんだよ」

と、得意そうに語る頃には、どんな風に自分は頑張ったか話したくてしょうがない感じになっていた。

「魔法授業ばっかだと体がなまっちゃうでしょ？　だから、籠もる前に『雷神の槍』も持って行きたいってお願いしたんだ。僕、槍も印可だからね、雷撃放たれずにちゃんと持てたんだよ」

「すごいなあ、ガジャクティン」

と、アーメットが褒めてくれたものだから、弟の笑顔が一層にこやかなものになる。精神的に幼いガジャクティンはたいへん倣岸だが、よっぽどひどい事を言われない限り、アーメットは怒らない。ただ弟を褒めてくれる。弟が本当は小心で劣等感が強い事を知って

いるからだ。
「勉強の合間に肉体と槍の鍛錬をしたの。分身が魔法で出してくれた木人と戦ったりしたんだ。二年半も籠もっちゃったから、持ってって本当、良かったと思う。魔法関係のものは全然、物質転送できなくちゃってたし」
ん？
「本当は二年半も籠もる気はなかったのか？」と、アーメット。
「うん。できれば一ヶ月、長くても半年にしとけって言われてたんだ。僕、成長期だし、長く籠もったら大きくなっちゃうでしょ？一ヶ月ぐらいなら特訓したのバレないかなあと思ったんだけど、一ヶ月じゃ魔法習得はやっぱ無理だった。父様からも兄様からも怒られるのは覚悟の上で、後五ヶ月と思って修行を続けたんだけど」
明るくガジャクティンが言う。
「帰れなくなっちゃったんだ」
え？
「僕らのいた異空間、大魔術師様の魔法を阻害する強力な力に囚われちゃったんだって。籠もってから三ヶ月後くらいかなあ」
何だって……？
「囚われたってどういうことだ？」と、アーメット。
「外界との通路を全部封じられちゃったんだって」
僕とアーメットが布団から上半身を起こし、弟を見つめる。僕等にあわせて弟も体を起こした。
「誰に？」
ガジャクティンはかぶりを振った。
「知らない。カルヴェル様は誰がやったかご存じだったみたいだけど」
「それで……帰るに帰れず二年半か？」
「うん。次元通路が封じられたといっても、通れないのは魔法素因を含むものだけ。だから、食料も水も空気もこの世界から普通に持ってこられたしね、普通に暮らしていたよ」

そんなニ年半も……
不意のアクシデントだったとしても……
本人が望んでいなかったのに閉じ込めていただなんて……
カルヴェル様は、きっと全力で弟を助けようとしてくださったろう。
でも、それでも許せない。
結果として、カルヴェル様は僕の大事な弟の時間を奪ったのだ。
「……怖くなかったの、ガジャクティン？」
と、僕が聞くと、ガジャクティンは大きくかぶりを振った。
「全然」
そして、明るく笑う。
「一人だったら怖かったと思うよ。でも、分身とはいえ二度も大魔王を討伐した英雄と一緒だったんだもの。当代随一の大魔術師様が、絶対、どうにかしてくださるって信じてた」

僕は父上と同じくらい大きくなってしまった弟を抱きしめた。
本当に馬鹿だ。
臆病でひとみしりなくせに……
勇者とか、従者とか、過去の英雄とか、家族とか……
一度、心を開いた者に対し、こいつは何の疑念も抱かない。無条件に相手を信頼してしまう。
二度と今世に戻って来られなかったかもしれなかったのに……そんな危険な状態にあったことに気づいてすらいない。
二年半も異空間に閉じ込められていたのに……
「おまえが無事に今世に戻ってこられて本当に良かったよ」
「うん」
ガジャクティンが無邪気に笑う。
「半年じゃ、僕、一部の神聖魔法と初級の攻撃魔法の火と雷ぐらいしか覚えられなかったと思う。異空間に籠もったのバレたら半年だ

ろうが二年半だろうが怒られるんだから、二年半かけてばっちり回復魔法や補助魔法まで覚えてきて得しちゃった」

＊　＊　＊　＊　＊

あ～あ。

ガジャクティン、往復ビンタくらってるし。

ガジュルシン、弟相手だと手が早いなあ。

まあ、怒られても仕方ない、しょうもないこと言ったガジャクティンが悪い。異空間のお籠もり、全然、反省してないみたいだし。

しかし……

大魔術師様の分身を閉じ込めただなんて……一体、誰が？

時間軸の違う異空間でのことだ、実時間に残っていた大魔術師様本人が気づくのが遅れたせいもあるだろうけど……数十分、そいつはカルヴェル様を凌駕する魔力でガジャクティンと大魔術師様の分身を異空間に閉じ込めていたわけだ。

巧妙に出し抜いたんだとしても……相当な実力の奴でなきゃできない。世界の三本の指に入るっていうハリハールブダン上皇なら可能かもしれないが……

三本の指って……

そいや、後、誰だろう？

魔術師方面は、俺、あんま情報ないんだよな。残り二本のうちの一本がカルヴェル様なのか？　カルヴェル様は別格すぎて三本の指には入ってない可能性もあるけど。

ううむ。

親父に聞いとこう。

＊　＊　＊　＊　＊

『絶対、もう二度と命を弄ぶような魔法には関与しません。父様や母様を悲しませるような事はしません』

と、誓ったので許してやった。

三人で床につく。

ガジャクティンがしょんぼりしていたので右手を差し出してやった。嬉しそうに僕を見て、僕と手をつないで、ガジャクティンは目を閉じた。

本当に、てんで子供だ。実年齢の十四歳より、ずっと幼い。

まあ、周囲に家臣達の目が全くないから甘えてるんだろうけれど。

僕は何度もインディラ寺院に修行に行っているけれど、ガジャクティンやラーニャは生まれてからずっと忍やら召使やらに囲まれて育ったのだ。王族として常に虚勢を張っていたのだ。

少しぐらい甘えさせてやっていい。

もう二度と馬鹿な事をしないなら。

僕が側にいられるのもあと少しだけかもしれないし。

ガジャクティンが寝息を立て始めたので、そっと手を離し、仰向けになって天井を見つめる。

僕の想像通りなら、もうあまり時間はない。

僕は……なすべきことをなすだけだ。

「眠れないのか？」

すぐ横からの声。

アーメットが心配そうに僕を見ている。

「眠れなくても、目を閉じて体を休めてろよ」

アーメットから見ると、僕は病がちな、かわいそうなひよわな王子だ。

保護欲をかきたてられるのか、アーメットは常に僕の健康を気遣う。

苦い笑みが浮かんだ。
健全な魂のアーメットは知らない。
僕が何で体調を崩しやすいのか。
確かに、僕は体力がない。でも、とりたててどこが悪いわけでもない。無茶をしなければ、普通の生活を送れる。
しょっちゅう吐いたり、熱を出したり、卒倒するのは、ストレスのせいなのだ。
僕は善人でも善良でもない。そうみせようと芝居をしているだけだ。だから、時に、自分の感情を御しきれなくなり、行き場の無い感情が荒れ狂い自家中毒を起こしてしまう……ヒステリーを起こす代わりに自分の体を攻撃している、ただそれだけなのだ。
僕は馬鹿が嫌いだ。
強欲な人間にも反吐が出る。
魂の醜い人間など、この世から消し去ってやりたくなる。
声が大きいだけの愚かな人間を前にすると……腹が立って、相手をズタズタに切り裂きたくなる。困った事に、感情を爆発させれば簡単に僕にはそれができてしまう。強い魔力があるから。
いつも、理性で凶暴さを無理やり押さえつけているのだが……そうなると、何もできなくなる。話すことすらも。その場に棒立ちとなってたたずむ僕は愚かな人間の発言を延々と聞かされるはめとなり、ストレスが高じ、自家中毒となり倒れる……というわけなのだ。
なまじ魔力があるせいで、僕は、幼い頃から、人が言葉にしない感情を知ってしまっていた。
偽りの仮面をつけて媚を売る大人達をどれほど嫌悪したことか……だから、僕は後宮か寺院にしか居られなかった。
人格者である父上と単純明快な忍者であるジライがつくった後宮には、悪人が入り込む余地はなかった。非常に清浄な場所だった。
むしろ、聖域である寺院の方が穢れていた。権力欲にまみれた俗人のごとき者、虚栄心の強い者、嫉妬や憎悪に憑かれた者……聖職者にふさわしくない僧侶も数多い。だが、大僧正様は別格だ。あの

方は何も持っていない、何も拘っていない、全ての者に慈悲の目を注ぐだけだ。魔族すらも、大僧正様は許し、愛しておられる。大僧正様のおそばにいるだけで僕は癒された。

大僧正様は、僕を研ぎ澄まされた刃と例える。刃自らが切れ味を鈍らせたく思っても、それはかなわぬ望み。刃には刃にふさわしい生き方がある。自然であれ、と常におっしゃる。他を切り裂く事を恐れるのであれば、性を変えようとあがくのではなく、己をおさめるべき鞘を探せ、とも。

けれども、鞘とは何だろう？　僕が自然であったら……誰一人、僕の側にいられまい。激しい感情をぶつけられたら、皆、疲れ果ててしまうだろう。

アーメットも、きっと……

「僕のことは気にしないで、先に寝て。体が疲れてるから、どうせすぐ眠るよ」

そう言ったら、アーメットがムッと眉をしかめた。

子供の頃と同じような顔……

裏表がまったくない、綺麗なアーメット。彼の精神には邪気がないので、側にいるのは心地いい。健康的な笑みも、見ていて気持ちがいい。元気よく走り回る彼の姿にはほれぼれしてしまう。

だいぶ前から自覚している。

僕はアーメットが好きなのだ。

身内としてではなく、一人の人間として……。

彼を見ているだけで僕は幸福になれる。

見ているだけでいいんだ。

それ以上は望まない。

前に話してくれた。房中術訓練として、アーメットは女性経験も男性経験も積んでいる。そして、僕に言ったのだ。

『野郎とやっても肉体的には気持ちよくなれるってのはわかったよ。けど、男を女の代替にするのって、犯るのも犯られるのも、やなんだよね。ゾッとするっての？　気色悪いよ』。

彼の言葉を絶望と共に聞きながら……

彼が男性相手につんだ房中術訓練がどんなものだったかを想像し……欲情してしまった。

僕は若い。時折、肉体が勝手に彼に反応してしまう。

知られたら、アーメットに嫌悪の瞳で見られてしまうのに。

それだけは嫌だ。

僕はアーメットに何も望んでいない。最期の時がくるまで、そばにいてもらえたら、もうそれだけで充分だ。

嫌われさえしなければ……それでいいんだ。

「周りに気を使う暇あったら、寝る努力しろよ。ったく、見栄っ張りのガキなんだから」

そう言って、アーメットが何を思ったか、僕へと右手を差し出してくる。

「ほい」

？

「おまえが寝るまで手ェつないでいてやるから、さっさと寝ちまえよ」

僕はどうも……

取り乱し、大声をだしたようだ。

気づいた時には僕はアーメットに後ろから抱きしめられて、口元をおさえられていた。

上半身を起こして布団の上に座る僕を……アーメットが後ろから暴れないように抱きしめ、口をおさえている。

背中に……夜着を着たアーメットの胸や腹や……体温を感じる……

苦しい……

胸が激しくときめいている……

心臓が破れそうだ……

「馬鹿、ガジャクティンが起きちゃうだろ？」

アーメットが頬を、僕の頬へと寄せてくる。
「今更、恥ずかしがるなよ」
なに……を？
「わかってんだからさ」
なに……を？
アーメットの息が熱い。
背筋がぞくぞくした。
「おまえの気持ちぐらいわかってるよ」
「……僕の気持ち？」
頭がカーッとする。
ダメだ……
理性がふっとびそうだ……
アーメット……

「寝るまで手をつないでいてやるよ。おまえ、寝つき悪くって、よくぐずったよな。俺が一晩中、手つないでやったり、抱っこしてやったろ？　忘れたとは言わせないぜ。寝つくまで手をつないでいてやるよ。それとも抱っこの方がいいか？」

＊　＊　＊　＊　＊

不覚……

まさか、あのガジュルシンに手をふりほどかれるとは……
あんな力があるとは思わなかった。

布団を被り、ガジュルシンは俺の布団に背を向けて眠っている。
頭から湯気を出しそうなほど怒りながら。

「馬鹿！　僕を幾つだと思ってるんだ！　抱っことか、二度とそんな恥ずかしい事、言うなよ！」

と、怒りの往復ビンタを三セットも俺にくらわせて、ガジュルシンは布団を被った。
けっこう、腕力あるじゃないか……
ほっぺたが痛い……

まあ、あれから八年なんだし。
昔通りのわけないか。

失敗、失敗。

俺も横になって、目を閉じた。
ふってわいた、兄弟三人で眠れる、今だけの幸運に感謝しながら。

私の知ったこっちゃないわ！　男達の夜！（後書き）

次回からは新章　『シャイナに忍び寄る影』に入ります。

最初の話は、『世界は広い！　くじけそうな心！』で。

＊　＊　＊　＊　＊

明日からはしばらく『女勇者セレス』の更新をしますので、ラーニャちゃん、ちょっとお休みです。

世界は広い！　くじけそうな心！

「今日はこの辺で休みましょうか」
間もなく暮れるけど、まだ日も明るい時間。街道ぞいの雑木林のそばのひらけた野原に、シャオロンのさわやかな声が響く。その声を、私は馬のたてがみに顔を埋めながら聞いていた。
「さ、天幕を張りましょう。ラーニャ様、しっかり働いてください」

馬から降りると、脚ががくがく震える。長時間、馬の鞍に跨って固定されていたから、まだ何か間に挟んでいるみたいで足がうまく閉じない。ずっと体が揺れてたから、地震みたいにまだ周囲がグラグラしてる感じ。全身もしびれていて、手綱を木の幹に繋ぐ指までしびれている。
それはガジャクティンも同様。『勇者の剣』を背負ったまま、変な歩き方をしていた。が、負けず嫌いの義弟はフードマントから糸目をチラリと覗かせて私を見ると、私にだけは遅れまいと馬を木に急いで繋ぎシャオロンが待つ場所へと足早に進む。
ああああ、もう本当、ムカつくガキ！　私もガジャクティンにだけは負けまいと、頑張って歩く事にした。
私の背後ではガジュルシンがアーメットにつきそわれて、馬からおろされ、木陰で休まされている。いつも通り、真っ白な顔でぐったりしているのだろう。これから自分に治癒魔法をかけるんだろうけど。
彼には、私もガジャクティンも勝てる。でも、勝っても自慢できない。向こうには病弱というちゃんとした理由がある。でも、私とガジャクティンはいたって健康だ。役立たず度最下位争いは、私とガジャクティンの接戦なのだ。くぅぅぅ〜私のが四つお姉さんなのに〜〜〜〜

この辺に杭をうって天幕を張りましょう、さあ、やってみてください、と、ニコニコ笑いながらシャオロンが指示してくる。

ガジャクティンが男性用の、私が女性用の天幕を張る。

杭の位置が悪ければ中で二人が眠るんですからもうちょっと広くないと駄目ですねとか、これぐらい広くしてみましょうとか、バランスが悪いですね天幕が潰れますよとか、いろいろアドバイスをしてくれ、こうしたらいいだろうとは教えてくれるんだけど、基本、シャオロンは手伝ってくれない。

三十分以上かけてどうにか天幕が張れる。女性用よりも広い天幕を張るガジャクティンの方が五分以上早く終わらせていたが、あっちは体力バカだし、どうせ私達のスピードでは遅すぎるのだ。シャイナにいるうちに五分で張れるようになりましょうねと、にこやかにシャオロンは言う。

枝を集めてきたアジンエンデ、鳥と兎をつかまえて狩りをしてきたジライ。

生き物をさばくのはさすがに私達にはまだ無理なので、私は焚き火の準備をまかされ、ガジャクティンは追加の枯れ木拾いに行かされる。

最近、火打石は使えるようになった。でも、焚き火の為の上手な枝の並べ方がよくわからない。生木だからどうの、この種類の木は脂が多いからどうの、シャオロンもアジンエンデもジライも教えてくれるんだけど、毎回、同じようにやればいいってもんじゃないからうまくできない。

焚き火を長持ちさせるには、燃やすものがありすぎても、少なすぎても駄目。周囲に火が燃え移らないよう先に注意する。石で周囲を囲むのもいい。少しづつ知識は増えていくが、まだ一人じゃできない。

ジライは、鳥の首をしめ、羽をさっさとむしり、小刀でと肉をさ

ばき鳥を焼く準備をすぐに整えてしまう。でも、火はまだ安定してない。悔しくってジロッとジライを睨むと、失礼して、と、断ってからジライが枝をくべ直す。だから、それで何で火力が安定するようになるのかがわかんないのよ、馬鹿！

ああああああ、お尻が痛い、背中が痛い、頭が痛い、体中が痛い、掌がすりむけてる、疲れた、だるい、眠い、おなかがすいた……

「四日前に出発したランケイがここで、オレ達は今、ランケイからシーアーの間、だいたいこの辺りにいます。中間地点よりややシーアーよりです」

食事の後、地図を広げ、シャオロンが説明する。

「次の街のシーアーまで、通常、馬の旅で五日の距離ですが、明日までには絶対に着きません。到着まで後、三日はかかると思ってください」

そうよね……よく休憩とってるし、馬車の旅の頃からのことなんだけど早めに野宿の準備に入ってるものね、寝る支度が終わるまでに時間がかかりすぎるから……

あああああ、でも、後、三日以上、野宿なわけェ？

水場がなければ水もろくに飲めないしお風呂なんか入れないし、乾燥食は美味しいものじゃないし、天幕に寝袋じゃ背中がゴツゴツして熟睡できないし……

お外でトイレの恥ずかしさにはだいぶ慣れたけど……

体が正直、もう駄目……

体力のないガジュルシンを考慮しての、非常にソフトな馬の旅のはずなんだけど……

自分が世に言う箱入り娘なのだと実感……

馬の旅がこんなにハードだったとは思わなかったのよ、私！

馬術には自信があったのに……

考えてみれば、連日、八時間とか乗るんだものね、狩りや遠乗りだと長くても四時間ぐらいだったし、休憩をけっこうまじえてた。

連続騎乗時間も、連続騎乗日数も、毎日、新記録（レコード）を伸ばしている最中。

変わりばえのしない田舎道、変わりばえのしない並足、代わりばえのしない熱い陽射し……

頭はフードマントのフードで覆ってるし、全身は熱さ寒さを感じない神聖鎧を着てるからマシなはずなんだけど……日中は暑くってたまらない。

馬の背にゆられすぎて平衡感覚もおかしくなる。

それに……

鞍に毛布を敷かせてもらってるんだけど……

それでも……

お尻が痛いのよ！

赤くなってると思う！

触ったら、ちょっと擦り切れてる感じ！

昨晩、大事なところの状態を触って確認してたら、変態が勝手に天幕に入って来て『お薬を塗ってさしあげましょうか？』と覆面から笑顔を覗かせた。むろん、叩き出してやったけれど……

もう体力的に限界って感じ……

「すまない、ラーニャ……僕のせいで旅を遅らせてしまって……」

いかにも落ち込んでますって顔でガジュルシンが言う。

「回復魔法の頻度をあげるから……僕にかまわず、もう少し速く」

「いいのよ。回復魔法ってかけすぎると、効果が悪くなってくんでしょ？　急ぐ旅じゃないんだし、あんたも徐々に旅慣れして体力つ

けてって」
と、いうか、ガジュルシンのおかげで、案内人のシャオロンも今のペースで旅を進めてるわけだし。これ以上、ハイペースになられたら、私だってやってけないわよ！
「今日の火の番は休みはアジンエンデさん、ガジャクティン様、アーメット、オレ、ジライさん、ラーニャ様の順にしましょう」
焚き火の番というのは、一晩中、焚き火を欠かさないように交替で起きて周囲を警戒することだ。
はっきりいって、治安がそれほど悪くない街道ぞいではやる必要はないことなのだそうだ。盗賊警戒のトラップならジライが張れるし。
けれども、充分な焚き火が手に入る時には火の番の練習をしましょうと、シャオロンは言うのだ。
「全員の命にかかわることですから、危険な地域では、交替で見張りが立つのは大事な事なのです。何事も経験です。シャイナにいるうちに練習しましょう。睡眠時間を削って役目を果たすのはつらいことですが、頑張ってなしとげましょう」
シャオロンはやわらかな物腰に似合わぬ、鬼教師だった……
けど、火の番の中の番には自分かジライを入れるし、自分とジライ以外の誰か一人を休みにするし、ガジュルシンは休息こそ仕事と火の番にはわりふらない。ちゃんと考えた上で鬼教師やってる人には、逆らえない。

「ラーニャ！」
さっさと天幕に入って少しでも寝ようと思ってたら、ガジャクティンに呼び止められた。
何の用よと睨もうとすると、バカでかい義弟はキョロキョロと周囲に視線を走らせた。
「あのさ……話があるんだけど……ちょっと向こうで」

と、雑木林の方を顎でしゃくる。
私は動くのが嫌だったので、ムッとして聞いた。
「ここじゃ話せないことなの？」
「いや、そういうわけでもないんだけど……」
困ったような顔で、ターバンをつけた頭を掻くように右手を動かす。
う～～～～む。
そのためらう顔がなんとも……似てる……くそぉ……中身がガジャクティンなくせに、お父様に似てるなんて生意気だわ。
「その……僕や兄様は回復魔法を使えるけど、ラーニャは駄目だろ？」
「ええ、使えないわよ」
「だから……気になって」
「何が？」
ジロリと睨んでやると、義弟はデカい体をかがめ私へと顔を近づけてきた。
ちょっ！
やめてよ！　近づかないで！
その糸目！　ごっつい体のわりに端正な顔！
あんた無駄にお父様にそっくりなんだから！
か……かお……
顔はやめて！
「大丈夫、ラーニャ……？」
顔を近づけて、囁いてきた。
大丈夫って……
な、な、な、に、が！
息が！
息がかかる！
近いわ、あんた！
「……お尻、真っ赤にずる剥けてない？　回復魔法かけたげようか

？」

無神経なバカ義弟をぶん殴ってやったのは、言うまでもない。

「おまえを心配して治してやろうとしたんだろ？　やさしい義弟だと思うが」

問題の箇所は、天幕の中で、アジンエンデに薬を塗ってもらった。

「乙女のお尻をどうこうしようなんて、十年早いわよ、あのエロガキ！」

「十年たったらいいのか？」

「……ものたとえよ」

「終わったぞ」

アジンエンデはやる事を終えると、荷物から本を出した。箱入り王族の私達と違って、体力あまりまくりなのだ。昼間も馬の背に揺られながら共通語の単語帳を見てるし、夜も火の番の最初と最後の相手に共通語の会話練習をしてたりする。

教師役をやりたがってたガジュルシンが沈没しているので、勉強道具だけもらって彼女なりに頑張っているようだ。

「寝て、休んどけよ」

アジンエンデが手を振って、天幕を出て行く。

『虹の小剣』はすぐそばにあるし、変態忍者がどうせ『護衛』って名目で私を覗いてる。

火の番はガジャクティン。

眠っても平気。

大魔王教徒や盗賊が来ても大丈夫……

眠りに落ちる前にふと思った。

今、ガジャクティンとアジンエンデが共通語の会話練習をしてるのか、と。アジンエンデは妙にガジャクティンを気に入ってる。あ

の二人は、最近、仲がいい。私にぶん殴られた義弟を、アジンエンデは慰めてるのだろう。
何か、ちょっとだけ……
おもしろくないような気がした。

「ラーニャ様♪」
声をかけられた瞬間、右手が動いていた。
ズボッ！　と、私の拳が相手の頬を殴り飛ばす。
私の横のアジンエンデが騒動に気づき、ムクッと体を起こした。
が、私が殴った相手が誰か気づくと、さっさと横になった。変態には極力関わらないようにしているのだ、彼女。
「お疲れかと思いましたが……お目覚めはよろしゅうございますなあ」
左頬をおさえながらジライが残念そうにチッ！　と、舌打ちをする。
当たり前だ。
まず声をかけろと命じてある、次に体を揺さぶれ、と。
それでも起きなければ……『いた仕方ございませぬな♪』と、嬉しそうに変態が何をしてくるやら。『起こす』という大義名分をもってセクハラされちゃたまらない。起きてやるわよ！　眠いけど！

火の側でつい、うとうととしちゃいそうになるんだけど、すぐにセクハラされそうな殺気（？）を感じて目を覚ます。私を寝かさないようにという親心なんだろうけど、もっと他の方法で起こしといてくれればいいのに、まったく、もう変態は……
あくびを殺しながら、空を見上げる。
空の色はまだ暗いけど、だいぶ明るくなってきた。
間もなく夜が明けるのだ。

焚き火の側に座る私のそばにジライが控えている。
日中覆面つけっぱなしのせいか、今は取って素顔を風に晒している。白子で肌の弱いジライは直射日光を浴びられない。長時間、浴びてると、肌が真っ赤になって火ぶくれができてしまうのだそうだ。
今は、伸びすぎの前髪は額当てで後ろに流しているので、両目を見せている。私と視線が合うと、にっこり笑う。いつも通りの、むかつく変な顔。全然、眠そうな感じじゃない。
アーメットは『俺には無理。真似できない』って言ってたけど、ジライはほとんど寝ない。一晩中、私の護衛をしてて、昼間も普通に動いていたりする。
本人曰く、動く必要がない時には半睡しているだそうで、周囲の気配を読みながら、私の天幕のそばで半分寝てて、昼間は馬に乗りながら半分寝てるらしい。で、会話はしっかり聞いてたりするんだから、器用だ。
そんなんで疲れがちゃんととれるのかしら？　とれるんだったら……その特異体質ちょっと羨ましい。
私は眠くて眠くてしょうがない。
眠い目をこすりながら、私は忍者に尋ねた。
「お母様も、昔、こうやって火の番をしたの？」
先代勇者であったお母様。侯爵家令嬢だったお母様も、きっと、旅には苦労なさったはずだわ。
しかし……
「いいえ」
忍者がけろりと答えた。
「セレス様は火の番などいたしませんでした」
え？
「旅の間、寝ずの番が必要となることなど滅多にありませんでしたし、さような時は南の頃は私かアジャンめかナーダが、北に行ってからはナーダの忍が務めました。勇者であるセレス様には有事に働いていただけるよう、夜は休んでいただいておりました。『勇者の

剣』の阿呆めが重うございましたから、セレス様は連日お疲れでございましたゆえ」

じゃ……じゃあ……

「じゃあ、火の番の練習なんて必要ない？」

ジライがポリポリと頭を掻いた。

「かもしれませんなあ」

「じゃ、どうして、練習させるのよ！」

眠いの我慢して無理やり起きてるのよ～～～

一時間でも二時間でも余計に寝たいのにぃ～～～

Sなの？

もしかして、あのMっぽい物腰やわらかな東国の格闘家は、本当はS？

疲れてへばる、温室育ちの勇者達を見てあざ笑ってるわけ？

「シャオロンの考えてることは私にはわかりませんが……おそらくは、シャイナより離れて後の、勇者一行を思ってでしょうな」

「え？」

「シャイナにおる間は、シャオロンがあれこれ勇者一行の世話をするでしょう。が、あれはシャイナを離れられません。他国へ行った後は、王家のお子様と忍と北の女だけとなります」

「……」

「私とアーメットは、常に勇者一行と行動を共にするわけではありませぬ。また、アジンエンデは旅慣れているとはいえこちらの文化に疎い。周囲の者らが必ずしもラーニャ様達をお守りできるわけではありません。もしもの時に、ご自分らで考え、ご自分らで行動できねば、ラーニャ様達がお困りになられると思い、一人であれこれできるようにさせようとさまざまな体験をさせているのでしょう」

親切心なわけ……か。

「先代勇者一行の旅に私が仲間に加わった時、シャオロンは十三で、アジャンめにあれせいこれせいと命じられて働く半人前でした。人につれられての旅での身の置き所のなさは、あれはよう知っており

ます。ラーニャ様がシャイナご滞在中に、旅のイロハを教えてさしあげたいのでしょう」

わかったわよ、私達のことを思って、あれこれやらせてるわけね。召使がいない生活なんて、初めてだもの。できない事だらけだわ。何もかもできるようになるまでは、まだまだ時間がかかりそうだけど……一人で迷子になっても夜をきちんとしのげるぐらいには確かになっときたいわ。

「夜が明けてきましたな」

見上げれば東の空が少し白い。

雑木林の向こうの空から白く輝くものが姿を見せ始めている。

暗い夜を照らしゆく光。

闇を払う太陽……

黄色みがかかった土やまばらに生える雑木林の木、草むらに明るい朝の光がかかってゆく。

夜の闇が払われ光が満ちてゆく光景……

ああ、綺麗だ……

と、思えればいいんだけど……

あ～あ、朝が来ちゃった、又、馬の旅が始まるのか……とかしか思えない。

お尻が痛い……

「まだいたのか……」

背後からのあからさまに不機嫌そうな声。

赤い鎧の上にチュニックをまとったアジンエンデが、ぶすっとした顔をしてたたずんでいた。『極光の剣』を背負った彼女は、ジト目で変態忍者を睨んでいる。

「勇者殿の護衛は私がする。水くみでも狩りでも周囲の探索でも、働いてこられたらどうだ?」

「フン」

ジライは口元を歪め、妙な雰囲気を漂わせて、横目でアジンエンデを見つめた。ちょっと眠たそうな眼。あれ? これって『房中術

初級所作』のアレじゃなかったかしら？
アジンエンデがカッと頬を赤く染め、ジライから眼をそむける。
あれ？
何で頬を赤く染めるわけ？
「我がそばに居ると、心が落ち着かぬようだな？」
「変態が嫌いなだけだ。早く何処かへ行ってしまえ」
「ふふふ」
その場から跳躍すると、ふわりと体重を感じさせぬ動きで、ジライがアジンエンデのすぐそばに降り立つ。女性にしては大柄な彼女の方が、長身とはいえ東国人のジライよりやや背が高い。
ぎょっとして体を強張らせるアジンエンデ。その顎をとり、まるで口づけをするかのようにジライが顔を近づける。
「してほしいのならそう言え。願いをかなえてやらんこともないぞ」
「なっ！」
アジンエンデが顔を真っ赤に染める。
「な……に……を」
「さてな」
にぃぃぃと薄く笑って、ジライが姿を消す。
忍の体術で姿を消してしまったのだ。
にしても……
「アジンエンデ、ジライが好きなの？」
私の問いに、彼女がギクッと体を硬くする。
「やめといた方がいいわよ。あれは変態よ。お母様と私にはドMで、それ以外の人間にはドSでボージャクブジンだもの。あんなのに惚れると苦労するわよ」
「そんなわけあるか！」
アジンエンデが声を荒げる。
うん、そうよね、あんなの好きになるわけないわよね。
「ラーニャ！　もう一回、聞く、アレはおまえの父親なのだな？」
「そうよ。そうだけど、あんま大きな声で言わないでね、一応、内

緒のことなんだから。ジライが実の父って事は、私、ラジャラ王朝の血を一滴も継いでないってことなのよ」

「あ……そうだったな、すまん」

と、謝ってから、アジンエンデは声を潜めて聞いてきた。

「アイツ、おかしくないか？」

「ええ、おかしいわよ、変態だもの」

「いや、そうじゃなくって……」

アジンエンデが視線を彷徨わせる。

「……若すぎないか？」

若い？

「そんなことないわ、もう四十五……ぐらいだもの」

「え？」

信じられないという顔をするアジンエンデ。うん、でも、だいたい、それぐらいのはず。

「髭と皺がないから若く見えるのよ。東国人って皺ができにくいんですって」

「いや……だが……」

納得がいかないといった顔のアジンエンデ。何を気にしてるんだか、さっぱりわからない。

「あいつが先代勇者の従者とは信じられない……いや、たしかに強いが……私よりも明らかに強いが……しかし、」

？

「あいつがケルティを救った英雄の一人とは……とうてい思えない」

ああ……

ようやく何が言いたいのかわかってきた。

『極光の剣』の使い手の彼女は、困窮にあえいでいたケルティを救った父親と舅の上皇様を尊敬していた。きっと、女勇者のお母様も尊敬している。先代勇者一行全員を尊敬してるんじゃないかな。そのうちの一人が、あの変態じゃ、嫌よね、確かに。

「アレは気にしなくてもいいわよ、アジンエンデ」

「え？」
「勇者の従者ったってピンキリよ。あれはキリなの、無視していいのよ」
「はあ」
「いくら強くてもね、あれは忍者だもの、政治的思想とかそういうのはないの。あれはお母様が戦ったから、一緒に戦っただけ。あなたの国を救おうなんて意志はなかったわよ、絶対」
「はあ」
「でもね、勇者の従者があんなのばかりだとは思わないでね。世界は広いわ！　キリもいればピンもいるの！　強く逞しく人徳にあふれ正義に燃える従者だっているわ！　下ばっかり見ないで上も見てちょうだい！」
そう！　お父様がいらっしゃるもの！
「世界は広い……強く逞しく人徳にあふれ正義に燃える従者もいる……」
アジンエンデが私の言葉を繰り返し、何かを思案するように両腕を組んだ。
「そうだな……世界は広いのだ……ハリの村のような狭い世界とは違う。強い男ならばまだ数多くいるよな……」
「強く人徳にあふれる好人物だっているのよ！」
「そうだな……」
アジンエンデが弱々しく笑う。そこで赤毛の女戦士はシベルア語で話すのをやめ、共通語での会話に切り替えてこう言った。『ありがとう、ラーニャ』と。

この時、彼女が何に拘っていたのか、私は後になってから知るんだけど……この時は知らなかった。
知ってたら……アジンエンデの為に、ジライをぶん殴ってでもいうことをきかせたと思うんだけど……

知らなかったんだ、しょうがない。

波乱に気づかぬまま、私の旅は続いた。

と～～～ても、順調に。

雨にたたられて二日も足止めをくらうわ、ガジュルシンが日射病で倒れるわ（ガジャクティンが治癒魔法をかけて癒してた）、村があったのに宿泊断られるわ（収穫前で、皆、忙しいのですよとシャオロンは笑ってた。けど、世直し勇者の宿泊を断るなんて勇者の大切さがわかってないんじゃない？　魔族に殺されてもいいわけ、あんたら？）で、さんざんの旅……

あっちこっち虫にさされるし、お尻は痛いし、汗まみれの体はべとべとして気持ち悪い。髪を洗いたい。

街までシャオロン推定あと二日……

街から街まで、十日近くかかるなんて……

カメの足勇者……

と、いうか……

世界は広大だわ！

行けども行けども、森と林と畑と小さな村しかない

すれ違う旅人もまれ。

都会はどこ～～～

移動魔法と縁のない庶民はみ～んな、歩いたり馬で移動するのよね。

移動魔法で世界を飛び回ってたら、この広さは実感できなかったわ。

人が住んでいない場所にも世界は広がっている。

無人の森、無人の山、無人の野原、無人の荒野、無人の街道……

世界はとっても広い。

人は分散して暮らしている。

どっか一箇所を守ればいいってわけじゃない。

勇者である私は、世界を魔族から守るわけだけど……

こんな広い世界、私、一人で守れるのかしら……？

あああああ、ベッドで寝たい……

街は遠い……

できる事とできない事！　戦う為に！

穴があったら入りたい……

馬での移動の間も、ずっと寝込んでいたようなものだった。夜はアーメットに介抱され、日中の移動も彼に支えられてようやくの状態だった……

彼に抱きかかえられての馬での旅なんて本来は興奮しまくりのシチュエーションのはずなのだけれど、体調が悪すぎて、ただぐったりしてただけだ。

僕は本当に体力がない。

けれども……

ここまで無能な役立たずだったとは……

シーアーで、今、僕は久しぶりの寝台に横になっている。

本当はインディラ寺院に行きたかったのに……

北方三国を除く各国の首都や大都市には、必ずインディラ寺院がある。寛容と慈悲の心をもって和を貴び魔族のみを敵とするインディラ教は、他宗教と摩擦を起こした例（ためし）がない。国々は、国内での宗教活動を許可し、寺院の建立を教団に許可している。

シーアーも街中に巨大なインディラ寺院がある。この付近の宗教活動を統括する、僧正位の上級僧もいらっしゃる。

お訪ねすれば、インディラ教団の情報網を利用しての情報収集ができるはずなのに……

僕は絶対安静をラーニャから命じられて、宿屋で寝ている。

少なくとも、明日までは布団から出るなと言われている。

皆の前で吐いて、目をまわし、卒倒したのだ……

病気だと思われても仕方が無い。
僕が気絶している間に、ガジャクティンが治癒魔法をかけてくれたそうだ。肉体的な不快はおかげでだいぶおさまった。
しかし……
僕の体調不良の原因は、肉体にあるわけではないのだ。

慣れぬ馬の旅でバテてたせいで、ついおろそかな精神障壁を張ってしまったのだ。ほぼ無防備な状態で街に入った僕は、街に充満する人の気にあてられた。幾百、幾千の人間。僕の強すぎる魔力は、敏感に数多くの人間の思考や感情を読み取ってしまい、絶え間ない思念の嵐に翻弄され、自我を支えきれなくなったのだ。激しい自家中毒を起こし、吐いて、昏倒……

情けない……

大魔術師級の魔力があったって、これでは駄目だ……
全く役に立ってない……
戦力外どころかお荷物だ……

これではいざという時に働けない……

じわっとあふれてきた涙を急いでぬぐった。
泣いてるわけにはいかない。
何とかしなくては……

僕が勇者の従者として働く為に、どうすればいいのか考えるのだ。

扉のノックが響いた。

「ガジュルシン様、起きていらっしゃいますか？」

東国の格闘家シャオロン様の声だ。

「はい」

少し間を置いてから廊下から声がかかった。

「失礼します」

扉が開き、きびきびとした動きでシャオロン様が部屋に入って来られる。体を起こそうとした僕に、どうぞそのままでと体を休めるようにうながし、シャオロン様は僕の前に来ると丁寧にお辞儀をされた。

格闘家にしては細い体つきだが、その動きに隙はない。年齢不詳の若々しい顔もたいへん知的で、僕を見る目には病人へのいたわりの感情と共に観察者の鋭さを漂わせている。

「お体はいかがですか？」

「おかげさまで……だいぶ楽になりました」

どうぞ座ってくださいと頼むと、シャオロン様は、では失礼してと、寝台のそばに椅子をひっぱってきて座られた。

「教えていただきたいことがあります、今、お話しても大丈夫でしょうか？」

「はい」

「ラーニャ様から、ガジュルシン様の魔力は大魔術師級でカルヴェル様の後継者たりうる実力と伺ったのですが、本当のところはどうなのでしょうか？」

そう質問され、僕は胸の痛みを感じた。

確かに、魔力は強い。

だが、その魔力に翻弄され、人とまともにつきあえないのだ、僕

は……

「魔力に関してはそうだと言ってくれる者もいます……」

「カルヴェル様のご使用になられる魔法が使えるのだと考えて差し支えありませんか？」

「僕の魔法知識など、カルヴェル様の足元にも及びません。僕は書物に書かれている代表的な魔法ぐらいしか知らないのです。カルヴェル様と同列にはどうぞお考えにならないでください」

「そうなのですか……」

シャオロン様は思案するように首を傾げた。

「実は提案があるんです。でも、それは非常に魔法に関わりがあることで、魔法知識のほとんどないオレには実行可能かどうかわからないのです。なので、非常識なことを言うかもしれません。しかし、話を最後まで聞いてください。その上で、可能かどうかご自身の魔力と魔法知識に照らし合わせてご判断いただけますか？」

「わかりました」

シャオロン様はにこやかに微笑んだ。

「ガジュルシン様……これより先、勇者一行の旅から外れていただけませんか？」

＊　＊　＊　＊　＊

顔見せだと親父に連れて行かれたのは、ユーラティアス大陸一の情報屋の店だった。

フードマントを被り、砂漠の民のように口布で顔の半分を隠して変装して向かった先は……魔薬屋だった。

魔薬屋――麻薬、媚薬、興奮剤、しびれ薬、眠り薬、自白剤、成長抑制剤、何でもござれの怪しいクスリの店だ。常連には毒も売っているって噂。

ナーダ父さんは魔薬屋撲滅を望んでいるんだが、医療用という用途もある麻薬の販売ルートを全部潰すわけにもいかず、国民の生活に馴染んでいる魔薬屋をなかなか取り締まれないようだ。

魔薬屋が、情報屋の元締めの表の商売なのだそうだ。シーアーのこの店は支店で、本店はナーダ父さんのお膝元、インディラの首都ウッダルプルにある……

で、俺らは、シャイナではただの薬屋を装うその店の更に奥の隠し扉を通って、情報屋の店へと入って行った。

応接室で俺達を迎えてくれたのは、口髭が似合う、嫌んなるぐらい二枚目のインディラ人だった。

「これは、どうも、ジライ様。アルダナの店にようこそ。大魔王教徒の動きから、国々の悪巧み、果ては後宮のおなごのあそこまで、人の領域で探れぬものはありません。何なりとお尋ねください」

情報屋の元締めは、馬鹿丁寧に親父に頭を下げる。インディラの王宮づき忍者の忍者頭って、最上級な上客だからだけじゃない。親父はアルダナの恩人なのだ。

先代情報屋の元締めグジャラには、母親違いの息子が八人ほどいたそうだ。

実力主義の先代は、生まれてすぐ息子達を手元にひきとって同じ環境の下で同じ教育を受けさせて競わせて育て、商才と度胸と処世術の高さからアルダナを後継者と選んだ。

が、兄弟の中にはそれを快く思わなかった奴らもいて、裏社会の人間同士の争いらしく血で血を洗う闘争になりかけたらしい。

そこを、うちの親父が解決したそうだ。アルダナと敵対していた兄弟を四人ほど、ちょちょいとぶっ殺して。で、情報屋組織を五分割しての闘争は避けられたらしい。

親父にしてみれば、先代グジャラからの依頼を果たしただけだし、情報屋組織が内部分裂して情報収集能力を落とされてはかなわん程

度の気持ちでやったんだろう。
けれども、アルダナにしてみりゃ、自分が元締めになれたのは親父のおかげ。親父には、さまざまな便宜をはかってくれてる。もちろん、金はとるけど。
親父がフードマントと口布を外したので、俺もそれに倣った。
「魔族と大魔王教徒の情報を買いたい。後は顔見せだ。こやつにも店の会員証をくれ」
「ご子息アーメット様ですね。はじめまして、アルダナにございます」
俺に対し情報屋の元締めが礼儀正しく挨拶したんで、こちらも同じく挨拶を返した。この店に入る前から、アルダナは俺の情報を俺以上に詳しく握ってるだろうから、挨拶なんか必要ないんだがまあ一応。
「ジライ様のご子息でしたら、不足はございません。アーメット様、本日より、どうぞ俺の店をご利用ください」
俺には親父同様、インディラ王宮という後ろ盾がある。情報料取立て不能になりづらい、上客なわけだ。
親父は、アルダナが事前に用意していた書類に目を通している。姫勇者の移動ルートからこの街に来る事、一行が着いたら親父が情報を買いに来る事を見越して事前に準備しといたわけだ。
俺は出された茶には手をつけず、店の中や店の主人を観察していた。
主人がちょいと合図を送れば、あっちこっちから護衛が現われそうな造りの部屋だ。仕掛け床やら、隠し扉もある。まあ、親父が本気になったら一瞬で殺せるから、親父相手には意味ない防衛システムだけど。
「こちらの古い銅貨に模したコインがうちの店の会員証です。当店は北方諸国を除くユーラティアス大陸及びジャポネ、アフリ大陸北部に支店を置く情報屋組織です。支店の位置はジライ様が全てご存じですが、地図をご覧ください、この……」

召使に持ってこさせた銅貨を俺に手渡し、元締め自らが店の説明をしてくれる。

しかし……

商売第一（ビジネスライク）の話し方のわりに、所作がいちいち気障ったらしいんだよな。俺に対し浮かべている笑みも、肉食獣のような余裕の笑みだし。顔がいいし、妙に貫禄のある男だ。まだ三十前のはずなんだが……格の違いってやつか。大物組織のボスなだけはある。

資料を見終えた後、親父はしばらくアルダナと話し、幾つか依頼をしていた。

で、それで引き上げとなったわけだが……

「お待ちを、アーメット様」

情報屋組織の元締めが、席を立った俺を引き止める。

「当店の料金システムはさきほどお話しましたが……不測の事態で本国とご連絡がとれぬ場合、或いはインディラ王家と縁が切れあなた様が主人（フリー）無しの忍となった場合でも、何処の支店でも構いませぬゆえ、ご連絡いただければ、俺が部下に移動魔法を使わせ直接面会に参ります。条件次第では、その場で情報をお売りしても構いませんし、当店の会員証を持続して有効とする事も可能にございます」

はあ、そういうものなのか。

「条件次第とおっしゃいましたが、どのような？」

「それは……あなた様のお心次第です」

「……」

情報屋の元締めの熱っぽい視線。

て……

ヤバ……

これは獲物を狙う肉食獣の目だ。

舌なめずりするように、俺を眺めている。

顔からサーッと血が引いた。

横で親父が俺をジーッと見ている。

わかってるよ、相手は情報屋組織の元締めだ、『気色悪い目で見

るんじゃねえ、このホモ！』っつうて殴ったりしねえよ。キモいけど……我慢するよ。

「いざという時の、忍としての生きる道が残っているのは心強い限りです……ご好意、感謝します……」

「いつでもおっしゃってください……あなた様なら、代価は無粋な金でなくとも構いません……」

手ェ握るな、くそ！　鳥肌が立つ！

わかってる、睨むな、親父、暴れねえよ！

「良いではないか。アルダナは、亡くなった父親とは違って魔薬にはまっておらぬ。いきなり睡眠薬やらしびれ薬やら媚薬やら麻薬を使われる事もない。性癖もいたって正常。楽な相手だぞ」

いやいやいやいやいや。十六の男に手を出そうとする時点で、正常じゃないし！

姉貴達の宿屋に帰る前、再び顔を隠した俺ら。街を歩きながら俺はオゾオゾする全身を押さえていた。

「俺を人身御供に出したら、出奔するからな！　元締めにはちゃんと金を払えよ！」

「情報収集にきさまの体などアテにせぬわ。ラーニャ様の為の情報収集は公費でまかなえる。払うのは、ナーダじゃ。ケチケチする理由はない」

あいかわらずの鬼発言。ナーダ父さんにもラジャラ王朝にも敬意のカケラもない。お母様と姉貴さえ安穏なら、後はどうでもいいのだ、この男は。

「きさまが個人的に何ぞ知りたくなったら、体で払えばいい。良かったな、公費を湯水のように使えぬヒラの忍者のくせに、情報屋の元締めと懇意になれるのだ。未来が開けたぞ」

「ンな未来、開けんでいい！　俺は男は嫌いなんだ！　任務でど～～～～～しても必要ってんじゃなきゃ、絶対、男とは犯るもんか

！」

「……」

親父が何か言いたそうに俺を見てる。

何だよ、その眼。

「ンだよ？」

「別に……」

ふいと親父が眼をそらす。

「……任務ならよいのかと思っただけじゃ」

待て！

「だからって、無理やりな任務を振るなよ！　男相手なんて、あんなキショいの二度と御免なんだから！　思い出すだけで鳥肌たっちまうんだぞ！」

「嫌だ嫌だ言いながら、楽しんでおったくせに……」

「やかましい！　二度と言うな！　馬鹿親父！　出奔するぞ！」

親父相手に『ぶっ殺す！』なんて実現不能な脅し文句は意味ない。俺の最高の脅し文句は『出奔する』だ。現実世界にいりゃあ、インディラ一（いち）の忍者様から逃げおおせるわけがない。しかし、親父が苦手な魔法方面、つまり魔術師協会やら宗教団体を頼ればうまくすれば逃げおおせる。忍者として修行をつみ、できる事とできぬ事がわかった俺には『有効な脅し』とはどんなものか理解できているのだ。

「出奔か……」

親父の目がふふんと笑う。できるものかと言っている。

くそぉ。見透かされてる。今、俺は出奔できない。というか人間として、今、出奔するのはどうかと思う。先日、降ろされたとはいえ俺はガジュルシンの『影』だったんだ。あんな弱ったあいつを見捨てて、勝手するなんて、できるわけがない。

＊　＊　＊　＊　＊

「それは実現可能です……しかし、それでは……僕は」
あまりにも身勝手ではないだろうか？　自分一人だけのうのうとするなんて。
戸惑う僕に対し、シャオロン様は穏やかに言葉を続ける。
「お気が進まないのはわかります。ラーニャ様達と共に旅をなさりたいと思われるのも、従者として当然です。しかし、それでは」
シャオロン様は遠慮なく言い切った。
「ラーニャ様の大魔王討伐の旅で、あなた様は何の役にも立ちませんよ」
「……」
「よくお考えください。しがみついてでも旅にどうにかついてゆく事だけが、あなた様の望みですか？　移動で体力を使い果たし夜は倒れるように寝る為に、あなた様は王宮を離れたのですか？　あなた様の使命はラーニャ様の旅をお助けして、大魔王討伐の旅を無事に終えられる事ではないのですか？」
「……目的の為には恥を捨てろと？」
「そうです。目的を達成できない方が、オレは恥ずかしいと思いますけど？」
シャオロン様がにっこりと微笑む。
その通り……だ。
さすが先代勇者様の従者様だ……正しい助言をしてくださる。
うつむいた僕に、シャオロン様があたたかな声をかけてくださる。
「この街にニ、三日は逗留する事となります。今すぐ答えを出さなくても大丈夫ですよ。今日一日よく考えて、明日にでも」
「いいえ、シャオロン様……」
僕はかぶりを振った。
「答えは自明です。僕はご助言に従います……ご助言、ありがとうございました」
僕は顔をあげ、口元に苦笑を浮かべながら言葉を続けた。

「今、頭を思い悩ませているのは……何と言って、この事をラーニャ達に話そうか……それだけです」
「オレの口からご説明しましょうか？」
「ありがとうございます。しかし、これは、僕の問題です。僕が皆に話します」
僕がそう言うと、シャオロン様は心から嬉しそうな笑顔となられた。
「さすが、インディラの第一王子様ですね。お顔はガジャクティン様の方が似ておられますが、ガジュルシン様はナーダ様によく似ておられます」
え？
「王者であられながら、下々の声にも耳を傾けられ、過ちに気づけば自ら正す……そっくりです」
父上に似ているだなんて……初めて言われかも……
胸が熱くなる。
嬉しい……
僕は不肖の息子である事をずっと恥じていた。
国を統べる重荷を負いながら、家族を愛する時間をつくり、周囲の者を大切にされる父上……
非常に安定した精神、強い意志。
魔力にふりまわされ怯えて小さくなって暮らす僕とは、次元の違う偉大な方だ……
ずっと、そう思っていたのだ……
「お～い、ガジュルシン、起きてるか、入るぞ」
廊下からのノック。アーメットだ。
僕は目線を扉に向けた。
「手始めに……彼を説得してみます」
「ご健闘をお祈りします」
うまくいかなかった時はご相談くださいとシャオロン様がおっしゃった時、扉が開いた。

今日のアーメットは、忍装束ではない。砂漠の民の旅人のような格好だ。口布やフードマントのフードは外しているけれど。

「あれ？　シャオロン様、こちらでしたか。姉貴の部屋にご足労願えますか？　親父から話があります」

「わかりました」

「今後のことでちょっと、みんなで話し合いたいんです」

僕も寝台から起き上がろうとしたのだけれども、すばやく歩み寄って来たアーメットに布団の中に戻されてしまう。

「おまえは寝てろ。まずは体を直せ」

「もう大丈夫だよ」

「ンな言葉に騙されるか！　痩せ我慢は禁止！　親父からみんなに何の話をするのかは俺から話してやる、寝てろ！」

又、特別待遇か……情けない。

「秘密の話なら結界を張るよ？」

僕の提案に、アーメットが眉をしかめる。

「千里眼防止の結界、必要じゃない？　ここに寝ながら、ラーニャの部屋にも結界が張れるけど？」

「その方が安全ですね、魔族や大魔王教徒が勇者一行の動きを探ってるかもしれませんから」

そうシャオロン様に言われ、アーメットは『じゃ、頼む』と言った。僕等に挨拶をしてシャオロン様が部屋を出てゆかれる。しかし、アーメットは動かない。

「ジライの所に、戻らないの？」

「結界の件はシャオロン様が話してくださるさ。俺はおまえとここにいる」

でも……

「結界の術師である僕には、部屋の中の出来事が伝わる。ここで寝ながら、皆の会話を聞けるんだ。戻ってくれていいよ？」

「俺がここに居たいんだよ」

さきほどまでシャオロン様が座っていた椅子に、どっかりとアー

メットが腰を下ろす。
「おまえに、話があるんだ」
「僕も……君に話したいことがある」
「あ、そ。じゃ、おまえからでいいや。話して」
「ちょっと待って」
心の眼で、シャオロン様がラーニャの部屋に入って行くのを見る。
ラーニャ、ジライ、ガジャクティン、アジンエンデ達、全員が中に居る事を確認してから結界を張った。
これで、もうあの部屋を外部から覗く事は不可能だ。
「もういいよ。ラーニャの部屋に結界を張った」
ジライの声が聞こえる。あの部屋の会話を頭の片隅で聞きながら、僕は一ヶ月違いの義弟を見つめた。アーメットは少し不機嫌そうな顔をしている。
「んじゃ、話せ。話って何？」
「ん……この一週間の馬での旅、僕はまったくの役立たずで、君にもラーニャ達にも迷惑のかけどおしだった、それで、」
「迷惑じゃない」
強い口調で否定されて、びっくりする。
「まっとうな旅をできる体力が、おまえにはない事は最初からわかってた。わかってて、勇者一行に加わってもらったんだ。迷惑とは思っていない」
嬉しいような、嬉しくないような……微妙な発言。
アーメットは僕が落ち込まないように迷惑をかけられたとは思っていないと言いたいんだろうけれど……
役立たず前提で話を進められると、さすがに男としての誇りが傷つけられるよ、僕だって……
「アーメット、最後まで口をはさまないで僕の話を聞いてくれないか？　君にとって非常識と思えるような事も言うけれど、話を全て最後まで聞いた上で、僕の考えが正しいか正しくないか判断して欲しい」

先ほど、シャオロン様が僕に言った言葉をアレンジして伝えてみる。いちいち話の腰を折られてはたまらない。

アーメットはムスッとした顔のまま、わかったと答えた。

「僕、これから馬の旅はやめようと思うんだ」

アーメットは何を馬鹿な事を言うと叫びたそうに口を開いた。が、言葉をぐっとのみこみ、僕の次の言葉を待った。

「これからも僕が旅に同行したところで、状況はよくならない。多少は体力がついて、馬に乗っていられる時間が延びるかもしれないけれど、皆についてゆけない。長時間連日の馬の旅なんて僕には不可能だ」

だからって逃げるのか？　と、言いたそうな顔。まっすぐな気性のアーメットは、考えが顔に出やすい。わかりやすい。

「僕は……旅について行きたいんじゃない。勇者の従者として魔に連なるものと戦いたいんだ。移動で体力を使いたくない……というか、移動で体力を使い果たしたくない。疲れきっていざという時に倒れているようでは、王宮を離れ勇者の従者となった意味がない」

「……で？」

「総本山の大僧正様のもとへ、僕は帰ろうと思う」

「なっ！」

ガタンと席を立つ、アーメット。その反応は予想通り。思わず笑みが漏れた。

「肉体鍛錬を積んだりして、ひよわな体を総本山で少しでも鍛えておくよ」

僕が安全に暮らせる場所なら何処でもいい。

しかし、王宮に戻ればいらぬ騒動を招くし、異次元に籠もるのはガジャティンが二年半も閉じ込められた事を考えるに避けた方がいい。

と、なると総本山しかない。奥の院の最奥ならば、立ち入れる僧侶様も限られる。僕がそこにいる事を内緒にしてもらった上で、大僧正様の下で修行して暮らせるだろう。

「けど……」
「それで……勇者一行には僕の分身を同行させようと思う」

「分身……？」

僕はアーメットに頷きを返した。
「分身魔法だ。見た目は僕にそっくりにするけれど、体力バカに作るよ。疲れも暑さも寒さも感じず、飲食睡眠の必要もない体にね」
「けど、それじゃ……」
「分身は僕と精神が通じている。僕と同じような思考をするし、君達との会話内容も僕に伝わる。時には分身の口を使って直接、会話もできるよ」
「だけど……分身だろ……」
アーメットが顔をくしゃりと歪める。
「おまえじゃない……」
「そう分身は僕じゃない。微弱な魔力しかない。まあ、ガジャクティンのよりは強いけれど……一流半の魔法使いって程度かな。だから……必要になったら、僕本体が分身と入れ代わる」
「え？」
「戦闘とか王宮へのご挨拶とか皆と直接話をした方がいい時とか……そういう時は移動魔法で戻って来て、僕が君達と行動を共にする。分身を通して常に君達を見ているから、必要な時はすぐにわかるから大丈夫だし、話が合わなくなる事もない」
「……」
「ちゃんと旅をせず、美味しい所だけをさらう卑怯な方法だけれども……僕が勇者の従者として働くにはこの方法しかないと思うんだ。賛成してもらえないだろうか？」
「……」

アーメットがジロリと僕を睨む。
「はっきり言う！　俺的には嫌だ！」
「アーメット……」
「俺はおまえの『影』だったんだ！　おまえを守りたい！　分身なんか相手にしたくない！」
「分身は守る必要なんかないよ？　僕と違って役立たずじゃないし」
「おまえは役立たずなんかじゃない！」
声を荒げてから、アーメットは泣きそうな顔をつくり僕を見つめる。
「わかってるよ、わがままだって。ずっと一緒にいたいなんてのは、ガキっぽい俺の感情だ。冷静に考えれば、おまえが正しい。ピンチの時、動けるように体力を温存しとくべきだ。おまえ、体力ないから！　けど、俺は気に食わないんだ！　おまえが一人だけになるなんて！　俺達から離れて一人寂しくインディラにいるなんて！　だから、」
キッ！　と、アーメットが僕を睨む。
「体を鍛えて、とっとと体力つけてこい！　俺達とずっと一緒にいられるように早くなれ、馬鹿！」
「アーメット……」
僕は義弟に微笑みかけた。反対するのも僕の孤独を思いやってだなんて……ますます彼が愛しく思える。
「すぐには無理だと思うけれど、頑張るよ」
「おう、頑張れ」
「それで、アーメット……君の方からの僕への話というのは……今、ジライが話してること？」
「ああ」
アーメットはため息をついた。
「今夜、おまえが動けるかどうか聞いて来いって親父に言われた。襲撃となれば、魔法の使い手が欲しいからな。無茶させたくないけど……声もかけずに俺らだけで乗り込んだらおまえ落ち込むだろし

……痩せ我慢なしで冷静に判断してくれ。今夜、戦えるか？」

できる事とできない事！　戦う為に！（後書き）

アルダナの父親、先代情報屋の元締めグジャラは亡くなっています。
刹那的快楽主義者で、魔薬を愛用した末の死でした。

勇者としての初仕事！　魔族召喚阻止！

こういうのを待っていたんだ！
僕は拳を握り締めた。

忍者ジライが情報屋から買って来た情報によると、今夜、シーアーの街の郊外の遺跡で大魔王教徒のかなり大きな集会があって、魔族召喚の儀式が行われるのだ！
正確には、今夜も、だ。大魔王復活後、定期的にあっちこっちでやってるらしい。
魔族を召喚してるなんて、もう、どこをどう見ても悪！　大魔王教徒だし！　姫勇者一行に討伐されて当然の敵だ！

どの程度の魔族が召喚されているのかは不明だそうだけど、僕には『雷神の槍』もあるし、神聖魔法もある。戦えるさ。
シャオロン様には『龍の爪』が、ジライには『ムラクモ』があり、アジンエンデには『極光の剣』がある。アーメットは多分、『虹の小剣』を借りるだろう。ラーニャも……『勇者の剣』、多分、使えるだろう。魔族が相手ならば、『勇者の剣』様も我慢なさってラーニャに使われるだろう。
兄様は……大丈夫なのかな？　兄様が動けないのなら僕がしっかりしなきゃ。補助魔法や回復魔法使えるの、僕だけなんだから。初級魔法しか使えないけど、あるとないとじゃ大違いだ。僕が皆を守らなきゃ。特にラーニャを。

ノックの後、アーメットが部屋に入って来た。

兄様、大丈夫みたいだ。
今夜、一緒に戦うって言ってるって。良かった、兄様の強力な魔法があれば、戦いもぐっと楽になる。怪我人が出てもすぐに癒してもらえるし、いざとなったら移動魔法で全員逃げられる。本当に安心だ。
え？
……これから、寺院に行く？　本気なの、兄様。
ここから十分ちょっとの距離だけど……僕等わざわざ寺院の近くに宿をとっとから。
でも、今から出かけるなんて大丈夫なの、それ？
「寺院の情報網の情報も手に入れて来たいって言っている。高位の回復魔法をかけたから大丈夫だそうだ。明日まではぶっ倒れないと本人がインディラ神にかけて誓った」
アーメットがぶすくれた顔でそう言う。反対したんだけど聞いてもらえなかったんだろうな。見かけによらず、兄様、すごい強情だから。
「寺院への護衛に俺がついて行く。この部屋の千里眼防止の結界は離れてても可能だそうだけど、後一時間ぐらいで解きたいそうだ。体調を整えるのを優先したいんだって」
「承知した。一時間で作戦をたてておこう。おまえは、ガジュルシン様に付き従い、命にかえても護衛を務めるのだぞ」
「言われなくても」
手を振って、アーメットが部屋を出て行く。まあ、アーメットがいれば、兄様も大丈夫か。
「さて」
忍者ジライが遺跡の地図をテーブルに広げる。
「見ての通り、遺跡は左右対称の造りです。南向きの本殿に東西に脇の神殿がついており、回廊で繋がっております。何処で魔族召喚の儀式をするかと推測すれば、当然、本殿があやしゅうございます。が、意表をついて東西の神殿という可能性も捨てられません」

「三手に別れます？」
と、シャオロン様。
「オレ、一人で東西どちらかの脇の神殿、見て来ますよ」
さすが先代勇者一行の一員だった方だ。ただの大魔王教徒相手ならば遅れはとらないということか。
「戦いに慣れぬ方が三人おられるからな……無茶はしたくない」
僕とラーニャと兄様のことだよね。わかってるよ……
「したが、まあ、移動魔法の使い手がおられるのだ。多少の無茶はできよう。三班に分け、状況に応じ、各班ごとの単独行動とするか共に動くか判断いたそう。第一班がラーニャ様・ガジャクティン様・我、第二班がガジュルシン様・アーメット、第三班がシャオロンとアジンエンデで」
「わかりました」
と、シャオロン様は答えたのだけれども。
「ちょっと待って、何で、私が変態とガジャクティンと一緒なわけ？」
非常に不満そうな顔で、ラーニャがジライを睨む。
動きやすさを考慮してと言うジライの答えに、ラーニャが絶対、嫌だと言う。
僕とジライとは組みたくないそうだ。
頭、悪いなあ、やっぱり、ラーニャはもう。
「あのさ、魔法の使い手は僕と兄様しかいない。この二人を別の班にふりわけるのはわかるよね？　治癒魔法の使い手を一班にいれたらもったいないもの」
「そうね」
「姫勇者ラーニャの身に何かあっちゃいけない。だから、僕か兄様はラーニャと行動を共にしなきゃいけない……そこまではわかる？」
「わかるわよ」
「兄様は決してご健康じゃない。いつ体調を崩されるかわからない。だから、護衛役が側にいた方がいい。その役は、兄様と阿吽の呼吸

で動けるアーメットが最適だ……そこまでも大丈夫？」
「……大丈夫よ」
「なら、ラーニャの相棒には僕しかいないってわかってくれるよね？」
「……別に、私がガジュルシン達と同じ班でもいいじゃない」
「よくないよ、兄様は遊撃もしくは援助として動いた方がいいと思うんだ。移動魔法の使い手だもの。いざという時に、他の者の援護にいけるよう、身軽な方がいい。アーメットと二人っきりで動いた方がいい」
「で、でも……」
「それにさ、ラーニャ、今夜の襲撃、『勇者の剣』で戦うつもりだろ？　少しでも仲良くならなきゃいけないから」
「使うわよ」
「なら、『勇者の剣』の運び手の僕と一緒に動いた方がよくない？」
ラーニャがぐっと喉をつまらせる。
「アーメットに運んでもらうって手もあるわ……」
「兄様の護衛に忙しいアーメットの仕事を増やすわけ？　『勇者の剣』の運び役と、兄様の護衛、わけた方がバランス良くない？」
「……」
何で僕と一緒にいたくないんだろう？　前からすぐヒステリー起こしてたけど、このところラーニャ怒りっぽいんだよな。本当、女って面倒くさい。感情的で、わけわかんない理由で、すぐわめく。ベタベタベタベタしててうっとーしい。
アジンエンデは違うけど。彼女も怒りっぽいけど、怒る理由が納得いく。理解しやすい、話しやすい。ラーニャとは大違い。
「わかったわよ、あんたと一緒にいなきゃいけない理由は……でも、ジライは何で一緒なの？」
「戦力の均等化の為」
「均等化？」
「先代勇者の従者の二人は、ものすごく強いから別の班に振り分け

るべき。で、世間知らずで戦闘経験のないお荷物の僕等をシャオロン様に任せるよりは、僕らの性格や行動パターンをよく知っている自分が側に居た方が守りやすいとジライは考えたわけだ」

そうでしょう？　と、問うつもりで視線を向けると、ラーニャの父親は頷いた。まあ、娘ＬＯＶＥだから一緒に行動したいって気持ちもあるんだろうけど、ジライの護衛の方が僕も安心だ。

「後は、アジンエンデのせいです。私と居るのは嫌と言っております、二人で組んではまともに動けぬでしょう」

アジンエンデが、フンとジライから顔をそむける。アジンエンデがジライを嫌っている理由は知らないけど、多分、ジライがＳ発言をしたんだろう。王子の僕に対しても口調こそ丁寧なものの、ジライは無遠慮にひどい事を言う。ラーニャは猫っかわいがりしてくるせに……それ以外の人間にはとことん冷たいんだ。

「と、いうわけで、ラーニャと僕とジライがワンセットなんだ。納得した？」

「……仕方ないのわ、わかったわよ！　でも、納得いかない！　あんた達とは組みたくない！」

なんでこんなわがまま言うんだろう……感情的すぎて、嫌になるぐらい、頭悪いよな、ラーニャって。

こんな女が『勇者の剣』様の振るい手なんだから、おかしいよ。血筋だけじゃん、ラーニャなんて。アーメットは両手剣はへっぽこだし……あ～あ、僕が勇者様の子孫だったらなあ……

「あのさ、ラーニャ、もう十八なんだから、感情を爆発させるばっかりじゃなくって、少しは頭、使ったら？　そんなんだから『勇者の剣』様に嫌われるんだよ」

と、言ったら、又、ラーニャに殴られてしまった……

もう！　ラーニャの馬鹿！　暴力女！　大嫌いだ！

＊　＊　＊　＊　＊

右手に変態、左手にお父様そっくりな生意気な義弟。

いつセクハラされるかドキドキしている上に、心にズキンと響く声でむちゃくちゃ腹立つ発言されて、見ないように気をつけてるんだけどお美しい顔そっくりなアレな顔を目にしてしまう……中身はガジャクティンなのに～～～～

全然、落ち着かない！

どうしろってのよ、これ……興奮しすぎで血管、切れそう。

シーアーの郊外の森の中、森に埋もれるように古代の遺跡があった。どうもシャイナ教の神殿跡らしい。だもんだから、インディラ寺院的にはあまりこの場所に関わり合いになれないらしい。シーアーの街には大きなシャイナ教団はないし。うまいぐあいに大魔王教徒が利用しやすい集会所なわけだ。

全員で森に潜み様子を窺う。

ガジュルシンが探知の魔法で探ったところ、建物の外は三箇所の出入口に二人づつ計六人、巡回役が二人セットで二組計四人がいる。建物の中は東西の対屋と本殿にそれぞれ十人前後分散しているらしい。

三つの建物にはそれぞれ魔法陣があって、それぞれに大魔王教団の神官がついて儀式を行っているらしい。三箇所で召喚の儀式を行っているのだろうか？

魔力のある者は八名で、皆、あまり能力は高くないとガジュルシンは言う。中級ぐらいの攻撃魔法・補助魔法・暗黒魔法ぐらいしか

使えないだろうと。一応、千里眼防止の結界を張ってるらしいのだが、ガジュルシンにとってはあってなきがごとき結界。気づかれぬよう難なく覗けるのだそうだ。

普段、ぶっ倒れてばっかのひよわな義弟だけど、魔法に関してはやっぱりすごい。

ガジュルシンに姿隠し＋消音の魔法をかけてもらって、遺跡の西の入口へと向かう。

入口の見張り二人は、ジライがあっさりと始末する。いきなり殺したのだ。すっごく長い針のようなものを二人の眼球めがけて投げつけて、それで終わり。派手な音をたてて相手が倒れないようジライは二人の体を支えて、その場に座らせる。

えっと……普通、入口の監視って気絶させるとかで侵入しないかしら、正義の味方って……

しかも、目を刺しただけで相手を絶命させちゃうってどういうこと？　脳まで達してるのかしら、あの針……。やだなあ。普段、のほほんとした変態だからうっかりしちゃうけど、こいつ忍者で、一流の暗殺者でもあるのよね。

色のはげた円柱をぬけて遺跡の中に入る。

廊下をぬけてゆくと、妖しげな儀式が行われている部屋が見えた。処々に灯る蝋燭によって中が照らされている。

大魔王教団の神官であろう黒づくめの男が血だらけの両手を高くあげ、何か聞き覚えの無い言葉で呪文を唱えていた。男の左手には血に染まったナイフ、足元には喉を切られた鶏と血だまり……魔族への血の生贄は鶏を使ったようだ。人間はまだ手をつけていないようだ。

と、いうのも……

魔法陣の中央に、縛られ猿轡を噛まされ寝転がされている全裸のシャイナ人の女性がいるのだ。ぐったりしてるから気絶してるか怪しげな薬を飲まされて正気じゃないか、いずれかだ。鶏の血で汚れたナイフで、あの女性に更に何かやる気なのだろう。

神官の他には、その助手ともいえる儀式に必要そうなお香を抱えた若い男と、魔族の召喚を待って床にひれ伏す信者達が七人ほど。いざって時の護衛でもあるのか信者達は帯剣している。

ガジュルシンがほんの少し魔力を高めるだけで、いっぺんに四つのことが起きた。

神官の手のナイフが砕け散り、魔法陣の模様が崩れ、神官とその助手が昏倒したのだ。

魔族召喚の儀式の型を壊し、魔力のある人間を二人とも気絶させたのだ。

立ち上がり襲い来る大魔王教徒は、シャオロンとアジンエンデに任せ、私達は本殿への回廊を走った。

狭い回廊の先の扉が開き、中から弓を手にした男達が飛び出てくる。

やはり、魔法陣は連動していたのだ。一つが壊れると、他に異常が伝わるかもしれないと、ガジュルシンが推測した通りだったのだ。侵入はあっけなくバレてしまった。

が、それならそれで力押しで。

迫り来る矢は、全てガジュルシンの張った物理結界に阻まれ、私達に届かない。

で、矢の雨もなんのその、矢をかいくぐったジライが走り寄り『ムラクモ』でばっさばっさと扉そばの敵を斬り倒してしまう。殺人スキル高すぎ……出番ないじゃない、私。

魔法陣は本殿の広間の中央にあった。さっきのモノよりも大きい。ここに大物を呼ぼうとしているのかも。円陣の中央には、やはり全裸で縛られたシャイナ女性。その周囲に武器を手にした男達と、大魔王教の神官。

「雷よ、来たれ！」

ガジャクティンの声。円陣の前に佇んでいた大魔王教団の神官らしき男の体を雷が貫いた。『雷神の槍』の持つ電撃魔法を使ったのだ。雷が落ちたのは槍の先端が向いた相手だけで、建物は無事……

のようね。シャイナ教の古代遺跡に穴を開けたら、さすがに県令かシャイナ教団から怒られそう。

「行くよ、ラーニャ」

『勇者の剣』を背負い、『雷神の槍』を持った義弟が私を促す。

わかっている。

本殿は、私とジライとガジャクティンの担当。

魔法攻撃を仕掛けてくる奴等を無効化したら、ガジュルシンとアーメットは東の脇の神殿に走る。西の神殿が片付いたら、シャオロン達も駆けつけてくれるだろうけど、それまでは三人で敵を倒すのだ。

私が剣を抜きやすいようにと義弟が膝をつき、しゃがんでくれる。

私達二人の周囲を襲い来る矢は、ジライが器用に落としてくれる。

私は『勇者の剣』の柄に手をかけた。が、重たいわ、長いわでなかなか鞘からぬけない。力もうまくはいらない。

ので！

ガジャクティンの背に右足かけて踏んづけることでふんばり、超クソ重いわがまま剣をどうにか抜いた。

踏むなんてひどいと言いたそうな義弟を無視して、私は剣を下段に構える。重いから、持ち上げられないのだ。床に剣の重さを半分預けながら、敵の出方を待つ。

斬りかかってきた敵を、ジライが峰打ちしてよろめかせ、ガジャクティンが槍の棍底で背をぶんなぐってコースを狭めて私へと誘導してくれる。

ありがとう……二人とも……

もう、どんだけ姫ちゃんプレイよ！

一人で戦わせろ、この馬鹿剣！

私は下段から剣を突き上げ、敵を斬った。

初めて、人を斬った。

しかし、興奮も恐怖も後悔もない。

『勇者の剣』を用い、悪とされるモノを斬る限り、私に良心の呵責

は、絶対に訪れない。
『勇者』とはそういうものだから。
『勇者』となれば大魔王教徒とも戦い、魔に味方する人間を斬る事となる。だから、その為の精神暗示が教育の一環として私にかかってるのだ、リオネルの手によって。
だから、狩りで動物をしとめるのと同じ感覚で、大魔王教徒を斬れる。歪んだ洗脳のような気もするが、即席勇者なんで、暗示は利用させてもらう。人の死と正面から向き合い、その死の重みを考えるのは大魔王を倒してからでいい。
二人が弱らせた敵をどんどん私へと送ってくれる。とどめを刺さず、武器で私のいる方へ突き飛ばしてくれるのだ。ジライはともかく……さすが槍でも印可ね、突いたり、薙いだり、足元をすくったり、うまいわね、ガジャクティン、くそぉ。
私は、敵を気絶させたり武器を奪ったりして、戦闘不能にしてやった。まあ、大魔王教徒だけど、雑魚だし。殺すまでもない。
戦っているうちに、剣が少しづつ軽くなってゆく。
敵を斬る度、その血を吸う度、剣は輝く。
ケルティのハリの村で魔族を斬った時と同じだ。
勘違いなんかじゃない。
剣は喜んでいる。
魔に連なる悪を斬るのが楽しくってたまらないのだ、こいつ。
剣に片足を刎ねられ、悲鳴をあげて転がる大魔王教徒の男……
哄笑……のようなものを感じた。
この剣、もしかしなくても、かなりヤバイ性格してる……
わがままってだけじゃなくって……
『正義』だから何でも許されるものじゃないと思う。
この剣は歪んでいるのだ。
と、そこで、ずっしりと再び、剣が重たくなる。
私の思考を感じ取って、『うるさい』とでも思ったのだろう。
『ぶった斬るのが楽いんだから、水を差すんじゃねぇぇぇ！』って

感じ？

私は『勇者の剣』をどうにか持ち上げ、床へと切っ先を落とした。

魔を召喚する魔法陣が描かれた床の上に落としたのだ。

それを破壊する事に剣は喜んだのだろう……床は陥没した。

捕まえた大魔王教徒二十四。救出した女性三人。死体、多分、十七。

変態忍者は全て殺せば楽ですのにと文句を言いながら、大魔王教徒の生き残りを縛ってくれた。

『楽』かどうかはともかく、ガジュルシンにシーアーの軍に連絡をとってもらって魔法で牢にまで送ってもらうんだから、悪いなあとは思う。今日大活躍のガジュルシンの顔色は白い。魔力はまだまだたっぷりあるらしいんだけど、魔法を行使するとその分の疲労がくるのだそうだ。

体力のないガジュルシンには、魔法の使用はもうかなりきつくなっているのだろう。

ガジャクティンが疲労回復の魔法を兄にかけてあげてるけど、多分、その程度じゃおっつかないと思う。

魔法って便利だけど、その分、負担もあるのね。

ここにふん縛って転がしておいてシーアーの軍に回収してもらうんでもいいんじゃない？　って、提案したんだけど、それじゃ僕等がいなくなった後に逃げられかねないよとガジュルシンが笑って却下する。むぅ、あんたの事を思いやっての提案だったんだけど。

私は本殿の魔法陣そばに腰を下ろした。『勇者の剣』はそこにぶっ刺したままだ。剣を中心に床がちょびっと陥没してるけど、平気よ、これぐらいすぐ修復できるわよ……多分。

捕まえた大魔王教徒が今はまだごろごろしてるから、人目が無くなるのを待ってから剣はアーメットに鞘に戻してもらおう。抜き身のこいつに触れられるのは勇者の血筋の者だけだから、面倒だけど、

お母様の子供ってことを内緒にしてるアーメットには人前では『勇者の剣』に触ってもらうわけにはいかない。

兄への治療を終えると、ガジャクティンが私のそばにやって来た。と、言っても、目的は私じゃないけど。ほんわ～と幸せそうに頬を緩めて、魔法陣に突き刺さっている剣を見つめている。凝視だ。舐めるように見てる。もう、眼をそらす気ゼロね。本当ぉ～おかしいわ、こいつ！　なぁにが『勇者の剣様』よ！　何で剣の刃見て、頬を染めてるのよ！　憧れるんなら女の子にしときなさい、馬鹿！

私以外の者にお父様が夢中になってるみたいに錯覚しそうで、非常に不快だ。私はガジャクティンからツンと顔をそむけた。

シーアー軍と連絡がとれ、心話で女性の保護と大魔王教徒の収容許可がもらえたとガジュルシンが言った。

本殿に集められた大魔王教徒と、女性達。魔法陣をはさんで彼らは北側にいる。女性の拘束はアジンエンデが解き、物質転送でガジュルシンが運んだ貫頭着も着せ、毛布をかけていた。薬を使われたみたいで三人ともぼんやりとしている。

ガジュルシンがまず女性達を送ろうとした時、そのうちの一人が上体を起こし、かぼそい声でこう言った。

「あの……もしかして……女勇者様ご一行ですか……？」

共通語だ。苦しそうな声でそう言い、すがるように私達を見つめる。

「そうよ」

私の答えに女の人が、泣きそうな顔で笑みを浮かべる。

「よかった……お会いしたかったのです……どうか……私の話を聞いてください……願いをかなえてください」

ふらふらと上体を揺らす女性。『無理は、いけない』と、アジンエンデがたどたどしい共通語で言って、女の人の背を支える。

「助けてください……」

「わかったわ、聞くわ。話して」
「ありがとうございます……ありがとうございます……ありがとうございます」
女の人が何度も頭を下げる。そんなにお礼しなくても……
「それで、話って？」
「実は……私……」

「ラーニャ様！」

ジライの叫びを聞いた時には……

周囲が血の雨に染まっていた。

何が起きたのか……

頭が考えることを拒否してしまっている……

私の前にジライが立っている。
見えるのは背中。
肩や脇から血を流しながら、たたずんでいる。

私の横にいたはずのガジャクティンは床に倒れている。

「アーメット！」
真っ白な顔のガジュルシンが、血だらけの私の弟の体を揺さぶっている。

「油断しましたね……」
と、苦笑を浮かべているのはシャオロン。右手の『龍の爪』を前方に向け構えている。

アジンエンデの衣服もボロボロだ……彼女も仰向けに床に倒れている。

周囲は血の海。捕縛されていた大魔王教徒は、皆、床に倒れている。体中に穴を開けて。
女の人も、皆、死んでいるようだ。
ただ一人を除いて……

「私、お願いがありますの……」
アジンエンデのすぐそばにいた女が立ち上がる。ただ一人生き残っている女の人が、にぃぃっと笑う。

「死んでくれません？　女勇者様、ケルベゾール様の為に」
その女の人から歪んだ黒い気がゆらゆらとたちのぼった。

いきなり四天王！　絶対、許さない！

「私、エーネと申します。初めまして、女勇者ラーニャ様。ああ、違ったわ、姫勇者様でしたっけ？　フフフ、ごめんあそばせ、間違えてしまいましたわ」

エーネと名乗ったシャイナ女性は、黒髪黒目の細面の美人だった。髪を優美に掻きあげたエーネは貫頭着を脱ぎ捨て、再び全裸となった。

無防備そうな姿だが……多分、この方が戦いやすいのだろう。

先ほど、エーネは瞬時に四方にいる私達を一斉に攻撃した。

何をしたのだろう……？

正直、私にはわからなかった。

気がついたら、周囲から血が吹き上がっていたのだ。

「かなり高位の魔族の方とお見受けします」

非常に静かな落ち着いた声が響く。

シャオロンだ。

どこも怪我はしていない。さっきの、魔族の奇襲を完璧に防ぎきったのだ。

『龍の爪』の先端を魔族に向けたまま、シャイナ語で話しかけている。

「シャイナ女性のその肉体に宿っておられる、あなたは魔界でも高貴な方なのでしょう？」

話しかけながらじりじりと摺り足で進むシャオロンに対し、女魔

族は媚びるような笑みを浮かべた。
「あら、いやだ。ふふふ、おわかりになるなんて、さすが英雄様ね。あなた、シャオロン様でしょ？　よぉく存じていますわ、この体の母親が『女勇者セレス』のあなた様の大ファンでしたの」
「光栄ですね……シャイナ女性の脳を共有している今のあなたには、僕は多少は魅力的に見えますか？」
「ええ、とっても。ここに罠を張ってお待ちしてた甲斐がありましたわ。あなたの魂、私が食べてさしあげます」
「やはり待ち伏せでしたか……そのシャイナ女性の体にはいつから入っていたのです？」
「もう五日前からです。情報屋に魔族召喚の情報を配下の者を通じて流させたのに……あなたがた、来るの遅すぎでしてよ。召喚ごっこもあきていたところですわ」
ホホホホと笑う魔族に、シャオロンは静かに頭を振った。
「黒の気を隠すの、上手ですね。オレ、魔の気には敏感な方なんですけど、あなたは、ただのシャイナ女性にしか思えませんでした」
シャイナ女性ってやたら連呼するんで、私もようやく気づけた。
そうか、シャオロンは……
この魔族はシャイナ女性の体を乗っ取っているんだってことを、私達に意識させようとしているのだ。
つまり……
シャイナ人として得た知識を基本に、今、こいつは行動してるんだ。
少しづつ魔族との距離を詰めてゆくシャオロン。
魔族の目はそっちへ向いている。
チャンスをつくってくれてるんだ。私達が死角へと入る位置にシャオロンは移動してゆく。まあ、人間の眼以外の眼でも周囲を見てるだろうけど、うまくすれば虚がつける。
攻撃もしたいけど、今、まずすべきことは……
「ジライ……まだ戦える？」

私を庇い、血を流したたずんでいる忍者にシベルア語で尋ねた。
普通のシャイナ女性なら、母国語と共通語しか話せないはず。北方の言葉なんか知ってるはずがない。こっちの思考を魔法で読もうとしない限り、向こうには会話はわかるまい。
綺麗に姿勢を伸ばしたその姿は、おそらく『ムラクモ』を魔に向けて構えているのだろう。私に背を向けたまま、ジライが答える。
「愚問にございますな。私めの動きに衰えはございませぬ。何なりとご命じください」
肩や脇から、だらだら血ぃ流してくるくせに、強がって。
馬鹿。
でも……さすが、先代勇者の従者ね……頼もしいわ。
「ガジュルシンを正気に戻さなきゃ、彼のもとへ行くわ」
「承知」
言うが早いか……
ジライは行動に出た。『ムラクモ』を手に持ったまま、私を抱きかかえたのだ。いわゆるお姫様だっこで！
で、ふわっとしたら、もうガジュルシンとアーメットのそばに来ていた。
びっくりするほど素早い。
何か鞭状のものが私達へと飛んでくる。
私はジライの腕からすぐに降りた。ジライは『ムラクモ』を一閃した。
『ムラクモ』が何かを浄化した。
でも、何を？
あの女魔族から飛び出したように見えたけど……蛇みたいななんかが、もの凄いスピードで私達を狙って飛んで来てたのだ。
「アーメット！」
ガジュルシンの叫び声。
そうだ、今は魔族よりこっち。私は泣きながら弟を抱きしめている義弟へと視線を向けた。

背後に風を切る音がする。ジライが魔族の攻撃を防いでくれているのだ。

ジライが負けるわけがない……

変態だけど、強いもの！

今は、魔族はジライとシャオロンに任せた！

ガジュルシンが、その名を呼び、その体を揺さぶってるんだけど、アーメットはぴくりとも反応しない。体に穴が開いているし……左足が膝から下が無い。

でも、死んだわけじゃないわよね……

血まみれだけど、忍者装束もあっちこっち破けてるけど……馬鹿はそう簡単には死なない！

自らを盾にしてガジュシンを庇ったぐらいで死ぬもんですか！

馬鹿の馬鹿の大馬鹿だけど……さっきの、あんたの行動は正解だわ！　褒めてあげる！　だから、起きるのよ、アーメット！

私はガジュルシンの胸倉をつかみ、かなり遠慮なく平手でぶっ叩いてやった。

「ふぬけてるんじゃないわよ！　早く治して、馬鹿弟が死んじゃうわ！」

「ラーニャ……」

「しっかりして！　治癒魔法を使えるのは、今はあんただけよ！　みんなを助ける気があるんなら、しゃきっとしなさい！」

ガジュルシンが泣きながら、かぶりを振る。

「でも、もう、アーメットは……」

「やんないうちから投げ出すんじゃないわよ！　あんた、インディラ寺院の代表でしょう！　高位の回復魔法でも何でも使いなさいよ！」

「でも……もう……」

腹が立ったから、もう一発、ひっぱたいてやった。

「何の為に、アーメットがあんたを庇ったと思ってるのよ！　あんたさえ無事なら、みんな、助かるからよ！　あんたを信じて、代わ

りに攻撃をくらってやったのよ！　あんた、アーメットの期待を裏切る気？」

「！」

「ダメもとでもやってみなさい！　うまくすりゃ生き返るわよ、そいつ、油虫なみにしぶといから！」

涙をぬぐい、ガジュルシンが精神集中を始める。

良かった……冷静さを取り戻してくれて……

彼がパニくってたら、アーメットはお陀仏だろうし、多分、ガジャクティンもアジンエンデも……。二人とも床から全然、動かない。

早くあの二人にも治癒魔法をかけてもらわなきゃ……

『龍の爪』を振るい、シャオロンが女魔族に攻撃をしかけている。

高々と跳躍する彼。

女魔族の髪がざわりと揺れる。

見えた。

髪だ。

髪の毛だ。

髪の毛が女魔族の頭から抜け、礫のようになって襲っているのだ。

空中のシャオロンが爪を閃かすと、水飛沫が生まれた。ジライの『ムラクモ』と一緒だ。聖水だ。

聖水のかかった髪が、浄化され今世から消えゆく。

そうか……聖なる武器で、敵の攻撃を浄化してたのか……シャオロンも、そしてジライも。

ジライは尚も私達に向けて放たれている髪の毛の礫を、ムラクモの刃、もしくはそこから生まれる聖なる水で浄化し続けてくれている。

守る人数が増えているから動きづらそうだ。しかも、怪我してるし……。

私は周囲に視線を走らせた。

シャオロンの速攻を、女魔族はひらりひらりとかわしている。甲高い笑い声を上げながら。聖水も器用によけている。で、逃げなが

ら、シャオロンやジライに髪で攻撃をしかけてる。
アーメットの足元には『虹の小剣』……あれを拾えば私も戦える。
『勇者の剣』は部屋の中央の魔法陣のところにぶっ刺したままだ。
すぐそばには、ガジャクティンが倒れている。
アジンエンデはそこよりやや北側にいる。魔法陣をはさんで北、
あの女魔族が身を横たえていた場所の近くに。
「あきてきましたわ」
女魔族が口元に手を添えて笑う。
「そろそろおしまいにしましょうか……」
シャオロンの攻撃を避けながら、首だけを私の方にむけ、女魔族が笑う。
「さようなら、姫勇者様。あなたの命は大魔王四天王の一人エーネがいただきますわ」
大魔王四天王？
て、ちょっと待って！
四天王っていうからには、大魔王の部下のトップ・フォーじゃない！
何でそんな大物が、私の初仕事に出ばってくるのよ！

エーネの体から爆発的に黒の気が広がる。
髪の毛からだけじゃない、手足、体、顔……全ての毛穴から黒の気が広がったのだ。

黒の気が全て礫となる。

幾百幾千幾万の魔の礫が……

部屋中に広がるのだ……

黒の気のひろがってゆくさまを、私の目は非常にゆっくり捉えていた。

エーネと対戦しているシャオロンにも……

倒れているガジャクティンやアジンエンデにも……

瀕死のアーメットと治癒しているガジュルシンにも……

私を庇って戦ってくれているジライにも……

逃げ場はない。

いや、聖なる武器を構えている二人ならば、命を拾える可能性は残っている。彼らの超人的な戦技をもってすれば。

しかし、他の者はダメだ。

死ぬ。

防げない。

この攻撃で、私の弟達が死ぬ。

確実に。

そんなこと……

あってはならないことだ！

絶対、許さない！

私は怒りのまま、声をはりあげていた。

「庇いなさい！　あんたと共に生きる仲間を！」

命令だ。

誰をと意識して言ったわけじゃない。

でも、心の奥深いところで理解していた。

私は命令できるのだ。
する資格があるのだ。
だって、私は……

姫勇者だから！

「馬鹿な！」
エーネが驚き、身をすくませる。
彼女の放った礫は一つとして、私にも私の仲間にも届かなかった。
全て防いだのだ。
私の両手が握り締めているモノが。
私の仲間の周囲に、物理・魔法障壁を張って完璧に。
私の命令に従って。

「きさまが、それを操れるはずが……」

「ごちゃごちゃうるさい！　あんたは、絶対に、許さない！　よくも、私の弟達に手を出したわね！」

私は両手を振り上げた。
私の求めに応じ、私のもとへ宙を渡ってやってきたモノが……軽い。
持っている事を忘れてしまうほどに……
『勇者の剣』が軽かった。

「ひぃぃ！」

エーネに達したはずの攻撃が、ぐにゃりと歪んでそれてゆく。
空間を歪曲させたのだ。
馬鹿な女！
そんな手、一回しか通じないわ！
移動魔法も無駄よ！
させない！
あんたの魔力なんか全部、封じてやる！

あんたを殺すのなんか簡単だわ……
今の私には全部、わかるのよ！
その肉体のどこに本当のあんたがいるのか……

消滅させてやる……

魔族よ……
穢れたものよ……
無残に砕いてくれよう……

あんたなんか嫌いよ！
消えちまいなさい！

私の剣の一振りを、かろうじて身をそらしてエーネは避けた。

斬る！
斬る！
斬る！
斬る！
斬る！

遅い！　きさまなど、斬ってくれるわ！

私の振り上げた剣は……
しかし、エーネには届かなかった。

斬り裂く前に消えてしまったのだ。

浄化されて……

私は茫然と、聖なる武器の使い手を見つめた。
自分の身長ほどもある大剣を振り下ろした姿勢で、その者はたたずんでいた。
燃えるような赤い髪に、赤い鎧。鎧を隠していた衣服は裂けて破れてしまっていたが、彼女はまったく怪我をしていない。
そうだ、と思い出す。下着姿にしか見えないその赤い鎧は、四部位を揃えて装着すれば、彼女の全身に物理・魔法障壁を張り巡らす

のだった。無防備に見える頭部にも、だ。彼女は最初から無事だったのだ。

気絶したふりをして攻撃する機会を伺っていたのか……

「ラーニャ」

『極光の剣』を右手だけに持って、彼女は私へと近寄る。

そして、左手をあげ、私の頬をはたいた。

「剣は使うものだ。使われるな、未熟者」

両手の武器が重くなる……

私は『勇者の剣』を支えきれずに落とし、そのまま、その場に崩れ落ちてしまった。

痛い、痛い、痛い、痛い～～～～

意識がはっきりするにつれ、猛烈に左腕が痛くなった。
「縛って血は止めておきました。可能ならば治癒魔法でお癒しください」
シャオロン様に支えられ、どうにか体を起こした。
痛すぎて、精神集中しづらい。
でも、しなきゃ。
痛い……
うぇぇ～、見たくない。
左腕、ぐちゃぐちゃの、血まみれ。
見たらますます痛くなってきた。
顔をしかめて初めて、泣いているのに気づいた。
みっともない……
でも、止まらない。
いいや、今は涙は！
ともかく、治療！
こんだけひどいと、応急処置しかできない。僕の魔法じゃ、骨を繋いだり傷口を塞いで血を止める事はできるけど、失った下腕の肉をもとに戻す再生や、神経や血管を繋ぐような細かい治療はできない。
下腕の肉がざっくりと削られてる。
くそぉ……手首から先、感覚がないや……。
左腕が一番ひどい、きちんと処置しなきゃ二度と動かせなくなる。
左の太腿も、脇腹も痛い。そっちも怪我してるみたいだ。
腕の傷の応急処置が終わったのを見て、シャオロン様が腕を固定

してくださる。裂いた衣服と添え木を準備しておいてくださったんだ。

脇と太腿は傷を塞ぐぐらいにしといた。そろそろ魔力も尽きそうだ。

見れば……

兄様がアーメットを抱えて魔力を高めている。けっこうな重傷の僕を放置してるってことは、大怪我でもしたのだろうかアーメットが。そのすぐそばにジライが立ってた。

ラーニャは気絶していて、アジンエンデがつきそっていた。『勇者の剣』は二人のすぐそばの床に転がっている。

「運が良かったですね、ガジャクティン様」

シャオロン様が穏やかにおっしゃる。

「『勇者の剣』のすぐそばに立っていらっしゃったから、その程度ですんだんですよ。あの剣は剣そのものに浄化の力がありますから、ガジャクティン様の体に達するはずだった魔族の攻撃の大半を剣が浄化して消滅させてくれていたんです」

『勇者の剣』様が？

そうか、僕は魔法陣に突き刺さっているそのお美しい銀の刃をうっとりと眺めていた。位置的に、魔族と僕の間に、『勇者の剣』様があったんだ。

結果として、『勇者の剣』様が僕の盾となってくださったのか。

「敵は……？」

しゃべると泣いてるの、バレバレだ。格好悪いなあ、もう。

「ラーニャ様とアジンエンデさんが倒してくださいました」

ラーニャが？

僕は床の上に倒れ、意識を失っている義姉を見つめた。

「さきほどのエーネという魔族、四天王の一人だったようです。姫勇者一行はもう四天王を一人、討伐したんです」

四天王？

ケルベゾールドは今世に降臨する度に、必ず四人の腹心を魔界か

らつれて来ている。
その時、魔界で最も強い奴らを四天王にしてるのだろうとされている。大魔王に次ぐ実力の魔族だ。
それを倒したのか、ラーニャとアジンエンデで……
すごい……
あの、ラーニャが……
血筋だけのお飾り勇者かと思ってたけど……
やっぱ、勇者だったのか……うぅぅぅ、今更、尊敬するの、難しいよ。
あああ、痛っ！　ちょっとでも動くと傷に響く。
「立てますか？」
僕は頷き、立ち上がった。
くぅぅぅぅ、すっごく痛い！　でも、痛いけど、平気！
シャオロン様の後を、ひょこひょことついていく。左太腿も怪我してるんでまともに歩けない。
で、見えた……
兄様とアーメット達が……
これは……
ひどい……
アーメット……衣服の破れ具合や床の血だまりからいって、体に少なくとも三箇所は大穴が開いていたんだ。今は傷一つないけど……左太腿から下が露出してるってことは……左脚はひきちぎれていたのか……傷口を合わせてくっつけたんだな、兄様が……
呪文を詠唱する兄様の顔は、本当に真っ白だ。完全に血の気が無くなっている。
もう魔法なんか使っちゃいけない状態だ。
でも……
今やらなきゃ、間に合わなくなるんだ。
僕は呪文を詠唱し、右手で兄様の背にそっと触れた。
僕の魔力なんて微々たるものだけど……

雨の雫みたいな小さなものだけど……
無いよりはマシ！
僕は疲労回復の魔法を兄様にかけ続けた。

魔力を完全に枯渇させ、気を失うまで……

＊　＊　＊　＊　＊

あれ……？

覆面の親父が見える。
目を細めて、俺を見ている……

「死に損なったな、たわけが」
親父……笑ってるみたいだ。
「ガジュルシン様に感謝せい。今、おまえが生きているのはあのお方のおかげだ」
ガジュルシン……？
いきなり攻撃されたから……
俺はガジュルシンの前に立って盾となって、それで……
『虹の小剣』で頭部から胸部までの攻撃はできるだけ防いだけど……
何発かモロくらったはずだ……
あれ？
ガジュルシンは無事かって聞きたかったんだけど、声が出なかった。

親父の右の掌が俺の顔を覆う。
「ガジュルシン様はご無事じゃ。ようやった。きさまにしては上出来じゃ……今は、眠れ」

褒めるなんて、珍しいじゃん……
明日は雨だな……

ガジュルシンが無事なら、もういいや……寝よう……

俺は目を閉じた。

＊　＊　＊　＊　＊

「『勇者の剣』を置いて行くのか？」
いぶかしそうにアジンエンデが問う。
「剣を鞘に収められる者も、運べる者もおらぬのだ、運びようがない。あの剣は魔法剣じゃ、放っておいても、帰りたくばラーニャ様のお手元に飛んでまいるであろう」
我の説明を聞いても、北方の女は、尚も納得がいかぬと言いたそうな顔をしておった。
突然、ガジュルシン様からの心話が途絶えたゆえ、シーアー軍所属の魔法使いが移動魔法で遺跡に現われた。エーネ討伐後、三十分も経ってからだが。間もなく、将校と治癒魔法の使い手及び移動魔法用の魔法使いがここまで来る手筈となった。
一命をとりとめたアーメット、魔法の使い過ぎで倒れられたガジ

ユルシン様、重傷のガジャクティン様には治療が必要。ラーニャ様はしばらく休まれればお目覚めになられるだろうが……

既に、我が配下の忍が周囲を固めている。姫勇者一行に陰ながらつき従えさせておる者ども。その数、八。我が配下にラーニャ様達のお体を運ばせても良かったのだが、今、緊急を要す危険な状態の怪我人はいないのだ、護衛の忍が表に出て動く必要もない。

シーアー軍も事情聴取もしたかろうし、魔族戦の跡の調査もしたかろう。軍はラーニャ様達の護送と治療もすると申しておるのだ、それぐらいの相手をしてやってもいい。

「ラーニャ様達の護衛役として、二人は移動魔法で共に街へ戻ってください」

シャオロンが我とアジンエンデに言う。

「軍への説明はオレがします。オレ、この国の英雄ですから」

任せるに異存はない。

「ラーニャ様やアーメットさんについていてください」

「すまんな……任せた」

漏れる息が重い。まったくもって……情けない。

「ジライさんも、ちゃんと治療受けてくださいよ？」

笑みを浮かべながらシャオロンが言う。

「血止めを塗ったからそれでいいとか言わないでください。振りがいつもより遅いです」

うむを言わさぬ態度だ。

我は肩と脇に浅いながらも傷を負っている。

シャオロンは無事だ。怪我などしておらん。

年は取りたくないものだ……敏捷性が衰えている。

ラーニャ様の盾となった後の『小夜時雨（さよしぐれ）』の抜刀が遅れたがゆえの、負傷だ。セレス様と共に旅をしていた頃とは比べようもない遅さ。昔であれば、主従共に傷一つ負わなかったものを……

怪我は現在の技の衰えの証だ……

「おい、忍者」

北方の女が我を睨んでいる。使っている言語はシベルア語だ。
「アレは離れたが、アレに憑かれた時、あいつは混ざり合っていた。本人でありながら武器だったのだ。破壊する喜びに狂っていた」
む？
アジャンの娘……こやつも、シャーマンか。
いや、シャーマンであり剣の才が高かった為、『極光の剣』に選ばれたとみるべきか。
『勇者の剣』を振るわれていたラーニャ様から何かを感じ取り、危険と思うたがゆえに、代わりにエーネを討ったのか。
「目覚めた時、苦しむと思うぞ。ついててやれ」
フッ。
らしくないことを言う。
軍の魔法使いも同室しておる為、はっきりとは言わぬが『父親なら落ち込む娘の側にいてやれ』と言いたいわけか。
じゃが……
「我にはせねばならぬことがある。ラーニャ様のお相手はきさまが務めよ、巨乳」
「なっ！」
「護衛も任せた。その露出狂まがいの鎧があれば、きさま、物理にも魔法にも強かろう？　空っぽの脳みその代わりに膨らんだ巨大な胸と尻をもって、しっかりと盾役を務めよ」
「どうして、おまえは、そうHで、無礼なんだ！」
顔を真っ赤にしてぶるぶると震えてはおるが、剣を抜いてはこない。
こちらが怪我人ゆえ、我慢したか。
意外と冷静だな。
どこぞ安全な場所に王家の子らを預けたら、護衛は巨乳女と配下に任せ、アルダナの店に行かずばなるまい。あやつが魔族とつるんで我等をはめたとは思えんが、あの店にどの程度、大魔王教団が入り込んでいるのか、主人はそれを把握しておるのか、確かめねばな

るまい。今後の情報収集の為にも。
　我とアジンエンデを見つめていたシャオロンがポツリとつぶやく。
「破壊する喜びか……なるほど、そんな感じでしたよね、ラーニャ様」
『勇者の剣』を呼び寄せた時のラーニャ様は、お強かった。旅の終わりの頃のセレス様に匹敵するほどに。だが、あの時、ラーニャ様は正気ではなかった。怒りのあまり我を忘れ……剣に憑かれていた。
「武器に憑かれるだなんて、能力ゆえですね。ラーニャ様も共感能力者（シー）だったとは驚きです」
　我とて、知らなかったわ。あのお方が赤子の時よりお仕えしてきたが、まったくそのような特徴も兆候もなかった。
　共感能力とは、他人の強い感情や思いに触れた事がきっかけで、その者の心を我が事のように感じる能力。
　セレス様もそうだが、先々代勇者ランツも共感能力者であったと聞く。共感能力は勇者の血ゆえなのだろうか？　記録には特にないが、歴代勇者は、皆、共感能力者なのか？　『勇者の剣』に触ると、眠っていた才が目覚めるものなのか？　では、アーメットも？　それとも、この三人だけなのだろうか？
　移動魔法で魔法使いとシーアー軍士官が現われたので、思考はそこまでで止めた。

＊　＊　＊　＊　＊

『ラーニャ』

お母様の声がする……

『そんなブスくれた顔てしちゃダメよ、女の子は笑顔が一番』

だって、ひどいのよ……アーメットも、ジライも……

『そんな事で怒っちゃ駄目。カッ！　と、しても、そこはグッとこらえて我慢よ。軽がるしい暴力を振るってると、愛の鞭の価値が下がっちゃうわよ』

違うわ……そんなんじゃない、私はもう大人よ……暴力と愛の違いぐらいわかってる……

『私の鞭は愛を込めたプレイだからいいの。でも、あなたのはわがまま娘の暴力だからダメ。その違いがわかるまで、他人に暴力を振るうのは一切、禁止ですからね』

愛？

誰に愛を持てというの……？

私の大切な弟を……義弟を……ジライを……

傷つけたものを……

魔族まで愛せというの……？

私が愛したいのはそんなものじゃない……

魔族は愛するものじゃない……

魔族は……

滅ぼすべきものだ……

消滅させてやろう……

穢れし魔族を……
無残に砕いてくれよう……

斬る！
斬る！
斬る！
斬る！
斬る！

『斬ればいい』
若い女性の声が響いた。
『おまえが望むのならな』
その声が私を覚醒に導いた。
「アジンエンデ……？」
見知らぬ天井が見えた。シャイナ風のけっこう豪奢なお部屋だ。
私が寝ている寝台の横に、アジンエンデが座っていた。レイの鎧の上に男物の袍を着ていた。『極光の剣』は背から外し、鞘に入れて壁にたてかけている。
「ここ……何処？」
「県令の館の客間だ。怪我をした勇者ご一行を保護してくださった」
「県令……」
たしか地方領主みたいな身分の人だ。
移動魔法で運んでもらったのかしら……？
ぼんやりしていると、アジンエンデが私の知りたかった事を口にしてくれた。
「ラーニャ、おまえの弟は一命をとりとめた」
私はガバッ！　と体を起こした。
「本当？」
「ああ」
アジンエンデが口元に微かな笑みを浮かべる。
「左足も臓器も血も肉も、もとの状態に戻った。以前通りの動きができるかどうかはまだわからんそうだが、死の危険はなくなった」
「……」

私の頬を熱いものが伝わった。
「……よかった」
「病弱な王子様は治癒魔法の使い過ぎで倒れた。おまえと仲の悪い義弟も大怪我だったが無事だ、たぶん、左腕も治してもらったろう。それから……」
ちょっと口元を歪めてから、アジンエンデはフンと荒い息を吐いた。
「忍者は軽傷だ。もう何処かへ情報収集に行っている」
「ありがとう、アジンエンデ……」
「ん？」
「教えてくれて、ありがとう……」
ケルティの女戦士の頬が赤く染まる。
「別に！　知ってることを話してるだけだ！　東国の格闘家は軍隊と一緒だ！　遺跡で事後処理をしてるはずだ！」
「うん……わかった」
ポロポロと頬を涙がつたわってゆく。
死ぬだなんて思ってなかったけど……と、いうか思わないようにしてたけど……正直、あの血の量を見た時には、相当、危ないってことは私にもわかってた。
だけど、怖くなって泣いたら負けだから……
アーメットは死なない！　って思い込んだのだ。倒れてたガジャクティンも無事だって、そう思い込もうとしてた。
無事でよかった……
「……」
アジンエンデが無言で差し出してきたハンカチを受け取り、私は顔をぬぐった。
「ラーニャ」
「ん？」
「今日のおまえはおかしかった」
「うん」

「だが、身内にひどいことをされたんだ。冷静でいられなくても仕方ない。気にするな」
「……うん」
「怒りは怒りだ。それは否定しない。だが、怒りで魂を無くすのは愚かだ。怒りながらおまえはおまえであり続けろ」
難しいことを言う……どういう意味？
「つまりだな」
多分、私、？マークでも浮かべてたんだろう。アジンエンデが言い直す。
「おまえの怒りを利用されるなと言っているのだ。おまえは怒った。おまえの武器も怒っていた。それぞれが自分の怒りをもって戦うのはいい。しかし、武器の怒りに飲み込まれ、おまえがおまえでないまま戦うのは愚かだと言っているのだ」
武器の怒りに飲み込まれる……？
あれは……
そうだったのだろうか？
アーメット達を傷つけられて怒りまくっていた私。
あのエーネとかいう魔族に、むっちゃくちゃ怒ってたわ。
あいつをぶった斬ってやりたいって思った。
だけど、それって……
途中から、何かズレたのだ。
私にもわかっていた。
『勇者の剣』の感情に私が圧倒され、流されたということだろうか？
「聖なる武器は持ち手を選ぶ。自分を振るうに値する者を武器は求めているのだ。おまえを操りおまえを傀儡とするなど、武器も望んでいないだろう」
さっきの妙な同化は、私にとってマズいことだけど、武器にとってもよろしくない事だというわけね……
「武器を相棒として、共に戦え。剣を使ってやれ。おまえが剣にふ

さわしき者なら、剣は応えてくれる」
剣にふさわしい者……
「前にも言ったが……未熟なら、実戦を積み続けて真の勇者となってゆけばいい。一足飛びにはうまくいかないかもしれんが、気概を持って戦うおまえを剣は好ましく思ってくれるだろう」

アジンエンデの言葉って、しっくりくるのよね……
境遇がちょっと似てるからかな。
望んでもいなかったのに『極光の剣』の振るい手になっちゃったアジンエンデ……
剣に選ばれた理由をずっと探していた彼女に比べると、私、不真面目極まりないけど。

今は馬鹿弟達が無事で良かったとぐらいしか思えない。まだ頭がボーッとしてる。けど、アジンエンデの言いたいことはわかる。
剣にふりまわされて、使われちゃうなんて勇者じゃない。
女王様じゃない。
次からは失敗しない。
それだけは硬く誓った。

で……
そっから十日ほど、シーアー県令様のおうちにご厄介となった。

シャオロンとジライは居たり居なくなったり。大人の付き合いやら、情報収集で忙しそうだった。

馬鹿弟は五日目になってようやく寝台から離れられたけど、最初は生まれたての小馬状態だった。他人の足を動かしてるみたいだと泣き言を言ったから、ちょんぎれたものがくっついたんだから贅沢言うな！と、怒鳴っておいた。

一日で歩行可能になり、次の一日で日常生活が可能になり、その次の一日で走ったり飛んだりの運動が可能になった。それから……

「きさま、それでも忍か！　何じゃ、そのトロい動きは！　小僧以下じゃぞ！」

と、鞭を片手にビシバシしごくジライ（嬉々としてやってたような。さすがドS）に二日、う～～んと可愛がられてた。でも、まだまだ本調子ではない。筋肉っていったん衰えさせちゃうと、取り戻すのたいへんよね。

ガジュルシンは三日間、昏々と眠っていた。

魔力の使いすぎて、体が疲れきってしまったのだ。魔力は枯れなかったけど、体力の方が尽きてしまったわけだ。

毎日、寺院から僧侶様がいらして疲労回復の魔法をかけてくださったんだけど、それでも目を覚ますまで三日もかかった。治癒魔法ぬきだったら、一週間以上寝てたんじゃないかしら。

目覚めた彼が、普段は分身を私達に帯同させ本体は総本山に籠もっていたい、そこで体力をつけたい、いざという時には合流して難事にあたりたいと言ってきたので許してあげた。

是非とも体力をつけてもらいたい。

それに今のところ、普段は休んでてもらって、有事に動いてもらった方が効率よさそうだしね。

彼には移動魔法があるから、離れていてもすぐに合流してもらえるし。

ガジャクティンはインディラ僧侶様に怪我を治癒してもらって、ひどかった左腕もほぼ元通りにしてもらっていた。
で、あの騒動の次の日から、動きが鈍くなった左手を早くまともにしようと、武術鍛錬を始めてた。本当、体力バカ。槍も普通に扱えてた。本人は『遅い』って嘆いていたものの、一般人から見ればむちゃくちゃ早い振りで槍を使えていた。
枯渇した魔力の方はもとに戻るまで一週間かかったようだけど。

アジンエンデは私と一緒にいるか、共通語の勉強をしているか、ガジャクティンの武術鍛錬の手伝いをするかって、感じ。
本当、仲いいわよね、ガジャクティンと……

でもって……
私はジライとアジンエンデの護衛つきで、魔族戦との三日後、ガジャクティンと共にシャイナ教の神殿遺跡に又、行った。
というのも……

いくら呼んでも戻ってこなかったのだ、馬鹿剣が！

『勇者の剣』様は、私が床に落とした状態で、つまり抜き身のまま遺跡本殿の床の上に落ちていた。
勇者か十二代目勇者の従者だったカルヴェル様・ナラカ様の血筋の者しか、剣には触れられない。だから、置きっぱでも盗難の危険はない。剣自身が持ってる魔力で常に鋭利さを保ってるから、この

まんまでも錆びの心配はない。
が……
ここに置いとくわけにはいかないだろう、勇者のメイン武器なんだから。
こいつは魔法剣で、攻防の魔法で勇者を守ってきた。勇者抜きで、移動魔法を使った事もあったらしい。
なのに……こいつ……
県令様のおうちから、私が呼んでも全然、戻ってこようとしなかったのだ！
仕方ないから、わざわざ迎えに来てやったのに……
柄を持ったらクソ重かったのだ！
成人男性の体重並！
本当、ムカつく！
鞘に入れてやろうとしてんだから、軽くなれっての！
鞘に収まってる状態じゃなきゃ、ガジャクティンは剣に触れない。
ナラカ様の身内ってだけのこいつは、持つのはいいんだけど、振るおうとすると雷を放たれちゃう。
抜き身のこいつに触れるのは、私かアーメットだけ。

今、アーメットは動けないんだから、私しか触れないのよ！
ちっとは協力しろ、馬鹿剣！
鞘に入れ終えてから、頭にきたんで蹴っとばしてやったら、雷撃を放たれた。
神聖鎧のない箇所の皮膚に多少火傷ができる程度の弱い攻撃だったけど……

あんたなんか、大嫌い！
いつか、絶対、屈服させてやる！

私は『勇者の剣』を睨みつけた。

シャイナ皇宮へ！　闇に光る眼！

姫勇者一行が大魔王四天王エーネを討伐した噂は、瞬く間にシャイナ国中に広がった。

インディラを旅立ってから一ヶ月と経っていない。『勇者の剣』と共にエウロペを離れてからたった二週間ほどで、姫勇者は大魔王の腹心の一人を倒したのだ。

旅立ちより、一ヶ月たらずの四天王討伐は新記録だった。

四天王全員の討伐が最も早かった二代目勇者ホーランでも一ヶ月半、わずか八ヶ月で大魔王を討伐した十代目勇者ウォルトでも一ヶ月と三週間かかっているのだ、最初の四天王を倒すまでに。

最速の四天王討伐は、ラーニャの勇者としての技量の高さを示していた。まだ十八歳のうら若き美しき乙女でありながら、武にも優れているのだ。

『姫勇者』の他に、『迅速の剣』、『美しき刃』の呼称も広がり、『最強勇者』とまで称える者すらいた。

シャイナの首都ペクンへの道すがら、姫勇者一行は大魔王教団討伐を続け、盗賊・山賊の退治していった。

『女勇者セレス』発祥の地であったシャイナでは、もともとその娘

ラーニャへの期待が高かったのだが、エーネを討伐したことで人気は更に拍車がかかった。

熱狂的な興奮がシャイナ全土を覆っていった。姫勇者を一目見ようと、その進路にはシャイナ国民が群がった。

母親譲りの美貌の男装の麗人。美しい黒髪、白銀の鎧姿の高貴なる姫君。彼女と出会った者は口々に、姫勇者ラーニャは美しく慎み深く、姫君とは思えないほど親しみやすい愛らしい女性であったという。

彼女のペクン到着とほぼ時期を同じくして、『女勇者セレス』の作者として有名な伝説の作家Ｇ・Ｎの最新作「姫勇者ラーニャ」が発売された事で、姫勇者人気は更に燃えあがったのだった。

昨日から、姫勇者一行はペクン郊外の貴族の別邸に滞在していた。ペクン市民の姫勇者人気の熱狂ぶりを軍が警戒しての、措置だった。正門より騎乗で一行がペクンに入都しては、群がった市民による事故、暴動の危険がある。

姫勇者一行は宮廷魔法使いの到着を待って、直接、皇宮へ向かう事となった。

ラーニャ一行がこの館に入って行くのを目撃した者がいたのだろう、噂が噂を呼び、貴族の別宅の周囲を囲う鉄柵の周囲には黒山の人だかりができていた。群がる人々は時間を追うごとに増えていった。

インディラ王宮付き忍者の副頭領ムジャは机につっぷしていた。

頭領ジライの留守を預かり、インディラで王宮の警備、情報収集、部下の統括をこなす非常に多忙な日々を送っていたのだ。大魔王復活という一大事件（イベント）をインディラ王家が中心となって片付けてゆくことに誇りを抱き、真面目に精力的にムジャは働いていた。

そこへ、ラーニャ一行に同行しているジライより『急用、至急来られたし』の知らせが届いたのだ。

とるものもとりあえず、不在の間の代行を副官ヴァーツィに頼み、魔術師協会の移動魔法システムでペクンへ運んでもらい、勇者一行滞在中のこの屋敷に忍んで来たのだ。人だかりを器用にかわし忍らしくひっそりと。けれども……

「そのようなくだらない用事で私を呼びつけたのですか……頭領」

ムジャは頭を抱えた。頭領は超優秀な一流の忍者なのだ。その実力は認めている。自分など足元にも及ばないとわかっている。だが、しかし……頭のネジが確実に五、六本抜けているのだ、頭領は……

「たわけ、くだらぬことではない。緊急を要すことゆえ、きさまを呼んだのだ」

「これの何処が緊急なんです！」

ムジャは机の上に積みあがっていた本を数冊、手に取って体を起こした。大衆娯楽小説本『女勇者セレス』だ。もう二十年近く前にシャイナの版元から発行され、全世界的流行となった痛快冒険活劇本だ。

時には事実と合わない話もあるものの、女勇者セレスの冒険にそって一～三ヶ月後にはその戦いが物語として伝えられる『女勇者セレス』は読本としても情報本としても面白く、大衆に大人気のシリーズ本だったのだ。

「できれば、シリーズ中最高傑作と名高い十五巻の作者を、無理なら三十二巻から三十五巻を担当した奴を、そやつらがもうおらぬのならは四十七巻から六十八巻を書いた者でもいい、『姫勇者ラーニャ』の執筆役をその三人の誰かに交替させよ」

ムジャはいまいましいとばかりに、本を机に叩きつけるように戻した。

謎の作家Ｇ・Ｎが書いたと世に知られているそのシリーズ本は……実は武闘僧ナーダが部下の忍に書かせた本なのだ。

ナーダが現実を題材とした冒険活劇本『女勇者セレス』を出版し

たのは、地の底を這っていた女勇者の評判を高める為だった。『女勇者セレス』はシャイナで予想以上の大評判（ベストセラー）となり、ジャポネ、インディラ、トゥルク、エーゲラ、エウロペで同本は出版され、各地で大評判となった。ナーダは話の大筋を書く原作者、その原作を元に部下が文章をまとめ、版元に渡す仕組みだった。

しかし、金銭目的で始めた事ではないので、ナーダは一年ほどで出版から手を引いた。セレスを勇者として認める風潮が高まってきたので、扇動（アジ）本はもう必要ないと判断して。

けれども、『女勇者セレス』の新刊を求める声は強く……結局、部下達は副業（アルバイト）として続刊を書き続けていた。勇者一行が北方に行った後ですらも。大魔王討伐後にセレスがナーダの国奪還に協力しインディラ国第一夫人となるまでの、その後の勇者一行の話を含めた全七十一巻が発行されている。

ムジャは大きなため息をついた。

嫌な予感はしていたのだ。

愛娘ラーニャが勇者として出発するにあたって、忍者ジライが『女勇者ラーニャ』の執筆の準備をせよと命じてきた時には。

ラーニャの従者としてインディラを旅立ったジライが毎日のように今日の報告を、鳥を使って送って寄越してくるのも重圧（プレッシャー）だった。今日、ラーニャ様は何をなさった、ラーニャ様はこうおっしゃった、ラーニャ様はかくも気高く振舞われた等々……紙面の八十パーセントから九十パーセントはラーニャ王女に関して。残りの十パーセントが従者達のことで、紙の端に各国の動向、魔族や大魔王教徒の情報がなぐり書きのように書いてあるという本末転倒な報告書が毎日のように届くのだ。

エウロペについてじきに『緊急』の印のつけた報告書をジライは鳥を通して送ってきたが、実はそれと同じものをムジャはナーダ国王からも受け取っていた。『ジライからあなたに急ぎ渡してくれと頼まれました』と。鳥を放った後で、ナーダ国王が都合よく侯爵家にやって来たので国王を伝言係（メッセンジャー）に使ったのだ。国王への敬意のかけ

らもない頭領ならではの行為にムジャはあきれ、その内容に更にあきれたのだった。

重要と書かれたその報告書には……『タイトル変更の知らせ……女勇者ラーニャではなく、姫勇者ラーニャとせよ。印刷済みのものも全て破棄し差し替えるように』と記されていたのだ。

本を出せと命じられてから、三、四日で印刷うんぬんまで進んでるわけねえだろう～～～と、誰もいない部屋で壁に向かってムジャはむなしく叫んだのだった。

ジライからの報告書はほぼ毎日届く。重圧（プレッシャー）が日に日にひどくなるので、ジライからの報告書をムジャがまとめ、書類書きの得意な部下に『活劇風にまとめてくれ』と三日で原稿を書かせ、シャイナの馴染みの版元にG・Nの名で渡したのだ。

迅速出版をとりえとする版元は、魔法で版木を削り、魔法で印刷し、魔法で製本し、わずか一週間で『姫勇者ラーニャ』の第一巻を仕上げ、姫勇者のペクン入都前に出版までこぎつけたのだった。

しかし……

その内容がえらく気に入らないようなのだ、ジライは。

「淡々、淡々、淡々と、事実を羅列するばかり。面白味も深みもまるでない。こやつに、文才はない。ナーダよりもご老体よりもない。書き手を替えさせよ」

シリーズの最初の十巻まではナーダがあらすじを考え今は亡き頭領ガルバが、文章にまとめていた。が、それらの巻の頃は勝手もわかっていなかったこともあって文章が硬く、たいへん説明的だ。面白味が無いと、二人のコンビの巻を、前々からジライはメチャクチャけなしていた。

忙しくなったナーダとガルバが出版に関われなくなってからの頃の方が読み本として面白くなったと、ジライは言う。実際、その通りだとムジャも思ってはいた。真面目なあの二人が執筆に関わらない方が破天荒な話に作りかえられたからだ。

『姫勇者』一巻の作者は、そのナーダやガルバよりも物書きに向か

ないとジライは不満たらたらなのだ。ムジャにしてみればそれほど悪くない出来だと思うのだが、ラーニャ王女の描写がないがしろで主役なのに登場シーンが少なすぎるとジライはお冠なのだ。それでも、六割はラーニャ王女が関わっているシーンなのだが……

『女勇者』の十巻までが不満なのも、単にセレスへの美辞麗句が少なくて、未熟な勇者であった彼女を褒め称える文章がそっけなかったせいではないか？　ムジャはそんな気がした。

「おまえ、ご老体の腹心の部下だったゆえ知っているであろう？　北方にはおぬしも行っていたゆえ、四十七巻から六十八巻の作者は或いは知らぬかもしれぬが、序盤、中盤の書き手ならば知っていよう？　十五巻の作者は？　三十ニ～三十五巻の書き手は誰じゃ？」

どうでもいいことにやたら熱心な上司に心底あきれながら、ムジャはため息をついた。

「私です」

「む？」

「十五巻と三十ニ巻から三十五巻までは、ちょうど暇だった私とバイトゥーキが書きました。私の書いたものにバイトゥーキが手直しをいれる形式でした」

「おおおお」

ジライは副頭領であるムジャの手をはしっと握った。

「バイトゥーキはもう鬼籍に入っておる。と、なれば、おまえしかおらん。ムジャ、今日からきさま、執筆業に専念せよ」

「へ？」

「副頭領としての仕事はヴァーツィに任せ、おまえは『姫勇者ラーニャ』を書き続けよ。ラーニャ様の偉大さを世に知らしめる尊き仕事。その栄誉をきさまに与えてやる。ありがたく受けよ」

泣いてわめいて懇願し『姫勇者ラーニャ』の監修を務める事を交換条件に、ムジャはどうにか副頭領の座を守り通した。が、しばらくは版元との打ち合わせでペクンに留まるよう、ジライより命じられてしまった。

今はお国の大事なのに……と、泣きたい気分のムジャの前で、じきにシャイナ皇宮へあがるゆえ今のうちにとジライは嬉々としてラーニャ礼賛の文章を書き上げてゆくのであった。

その姫勇者ラーニャは……

ここ数日、ずっと不機嫌だった。

人通りが少ない街道を盗賊退治しながら歩いている頃は良かったのだが……

物見高い性のシャイナ人がまとわりついてくるせいで、変装せざるをえなくなったからだ。

『勇者の剣』を背負えない勇者であることは秘密なのだ。ラーニャに扮したアーメットが『勇者の剣』を背負ってエウロペの王宮を堂々と歩いて来てしまった以上……今更、重すぎて担げませんとは言えない。

『勇者の剣』を背負ってひぃひぃよろけていては、勇者と『勇者の剣』は不仲になったなんて噂が世に広まってしまう。

ラーニャは、女勇者付きのくノ一という設定で、インディラ風忍者装束姿だ。

でもって、女勇者ラーニャの役は……黒髪のカツラを被り、白銀の鎧を装備した弟が演じていた。青の目が薄いガラス膜を入れたと

かで、今は、茶色になっている。薄化粧しかしていない弟が女性のように見えるのも、ラーニャにとっては腹立たしい事だった。

ジライを除く勇者一行は、今、ラーニャの部屋に集まっていた。その部屋の扉の前、窓のそばには王宮から遣わされた護衛役の兵士が佇んでいる。国賓である姫勇者一行の安全を守る為に。

「綺麗だね……アー、じゃない、ラーニャ」

総本山に籠もっていたガジュルシンも姫勇者一行が王宮にあがると知って、先ほど、移動魔法で合流していた。両手を顔の前で組み合わせ、ぽわ～んとアーメットにみとれる義弟にも、ラーニャは馬鹿じゃないの！　と、冷たい視線を送っている。

「だよね、気品にあふれてるよね。移動中や宿屋でのふるまいで、顔が美しいばかりか心まで美しいって評判。下々の者にもおやさしくお声をかけてくださる姫君だって、すっごく受けがいいんだ。どっかの誰かさんとは大違いだよね」

と、言ったガジャクティンを忍姿のラーニャが殴り飛ばしたのは言うまでもない。

「しかし……ご挨拶だけならば問題ありませんが、皇宮に滞在となったらどうするんです？」

と、尋ねたのは東国の格闘家シャオロンだった。

勇者にどのような接待をするかは、各国の国主の心次第だ。

シャイナ皇家が、勇者一行を歓迎の宴に招待し、そのまま、情報を提供する或いは魔族退治に協力するという名目でひきとめてくることもありうるのだ。数日、話し相手として皇宮に滞在させる為に。

「そうだな。二人は似てはいるが、そっくりではない。暗闇でもない限り、無理だな。（入れ代われば）すぐバレる」

と、北の国の女戦士アジンエンデも首を傾げる。

北方から大魔術師カルヴェルに連れてこられた女奴隷戦士と会話する為、勇者一行はよくシベルア語で話す。彼女が北方の言葉しか理解できないから……と、いう理由を掲げ、他人の目があるところでシベルア語で内緒話をしているのだ。語学に堪能な者が聞いても

バレない程度の話し方で。
本当はアジンエンデは、もうかなり共通語がわかるようになっているのだが。
「滞在となっても、きっと姫勇者様がうまくやってくれるわよ」
ラーニャがツーンと弟から顔をそむけて言う。
「姫だもの！　頭も眼もそのまま、お化粧も落さずに何日だって過ごしてくれるわよ！　鎧も着たまんま、お風呂にもおトイレにも行かないでね！」
「それ、俺に、死ねって言ってない？」と、小声でアーメット。扉や窓の前の警備兵には聞こえないぐらいの小さな声だ。
「一週間ぐらいおトイレ行かなくても平気よ！　姫勇者になってるんだから！」
「いやいやいやいや、無理だから、それ」
化粧道具を取り出し、鏡を見ながら、アーメットが化粧を直し始める。眉を濃く描き、アイラインを太く描きアイシャドーを濃くする。顔だちをキツめにみせる、はっきりとした化粧をほどこした上で、化粧にあわせ唇にも濃い赤を塗った。
ガジュルシンが、又、ぽわ～んとした顔をする。そういうお化粧も凛々しくていいね、と。
『あんた、アーメットが化粧するならなんでもいいんでしょ』と、第一王子を睨んでから、ラーニャは弟へと容赦のない瞳を向けた。
「なに、その下品なお化粧？　姫勇者はノーメイクが売りなのよ？」
ナーダお父様が化粧の匂いがお嫌いだから、メイクはしない！が、ラーニャの信条だったのだ。
アーメットはわざとらしく、にっこりと微笑んだ。
「皇帝陛下の御前にお顔を出すのですもの。綺麗にしなくっちゃ失礼だわ」
弟の声にラーニャが鳥肌を立てる。明らかな女性声なのだ。しかも、気持ち悪いことに、多少、低くかすれているものの、ラーニャ自身の声によく似ている。

「これだけ濃くすれば、素顔、ちょっとわからないでしょ？　ガジュルシンもいるし、大丈夫よ、素顔の時と化粧の時とで切り替えれば」

「なるほど」

と、シャオロン。『勇者の剣』を背負う時はキメキメ・メイクのアーメットが、普段の生活は素ッピンのラーニャが、姫勇者役をこなし、入り変わり時にはガジュルシン王子に千里眼防止結界と目くらましの幻術を張ってもらうということか、と。

「それなら何とかなるかもしれませんね」

何とかならなくってもいいのに、と、ラーニャが不機嫌そうに唇を尖らせ、壁の前の大剣へと視線を向ける。

『勇者の剣』……エーネを倒した時のような一体感はアレから二度と訪れず、ラーニャは剣と不仲なままだった。

ペクンまでの盗賊や大魔王教徒退治の時もそうだった、男性体重並みに重いそれを持ち上げる事ができず、ジライに上段・中段からの敵の攻撃を防いでもらって、ラーニャは下段で剣を振り回すだけだったのだ。

戦っていれば少し軽くなる事もあった。が、別の時に鞘から抜けば、剣は、又、成人男性並の体重に戻っている。

一向に良くならない剣との関係に、ラーニャは正直、かなりうんざりしていた。

貴族の別邸から現われた姫勇者一行に、門前、鉄柵の前に群がっていた群衆が歓声をあげる。

皇宮移動前に姫勇者様は自分を慕い集まって来たシャイナ国民の前に姿を見せたいとおっしゃったのだ、そこより有難くご挨拶するようにと、皇宮の兵が叫んだ。が、その声は熱狂の渦の中の人々の耳に届いたかどうか。

にこやかな笑みを浮かべ、手を振る麗人。噂通り、美しい姫君だ

った。遠目からもはっきりとわかる美貌で、白銀の鎧の似合う颯爽とした所作をしている。背にある巨大な大剣が『勇者の剣』なのだろう。

その左背後に控えている覆面に黒装束の忍者が、先代勇者の従者でもあった忍者ジライなのだろう。インディラ王宮付き忍者の頭領、切れ者と噂の超一流の忍だ。『白き狂い獅子』という二つ名に合う白装束ではない事にがっかりする見物人もいた。

ジライのすぐそばには、兜に口布、チュニックにズボン姿の、小柄なインディラ忍者がいた。ジライの部下なのだろう。群集はそちらへはほとんど目を向けない。

更にその後ろの赤毛の派手な顔だちの女性の方が注目を浴びていた。北方から来た女奴隷戦士だ。エーゲラ風の男性用チュニックをまとったその肉体は、はちきれんばかりに胸も尻も豊かだ。性奴隷としても使えそうな魅力的な肉体だったが、その背には『勇者の剣』に劣らぬ巨大な大剣があり、臆することのない態度も、奴隷とは結びつかない。

姫勇者の右隣には、色白の王子が立っていた。インディラ国第一王子ガジュルシン、たいへん聡明で、魔法の才にあふれ、信仰心に篤いと評判の王子だ。在家でありながらインディラ寺院代表として姫勇者の旅に加わったという特異な立場の彼も、注目の的だった。儚げな少女のような美貌の為、特に女性から熱い視線を送られていた。

ガジュルシンの背後には筋骨逞しい大男が立っていた。ガジュルシンと同じくターバンに白を基調とした王家の衣装。第三王子ガジャクティンだ。その小山のような巨体で十四歳だと聞いて驚く者も少なくない。儀礼用のような刃に雷を示す彫刻や透かし彫りが施された、長刀としても使えそうな槍を持っている。

そして、その後ろに控えめに佇んでいる者こそが……シャイナ一（いち）の武闘家シャオロンだ。シャイナ人の目から見ても若々しい美青年のように見える彼が、『龍の爪』の使い手、皇帝の私兵なのだ。今

は爪は背の革袋に収められているようだ。
物語の中から現われたように美しい姫勇者一行の姿に、群集の興奮は更に高まっていった。

群集の中で妙な動きを見せた男は早々に始末され、周囲にそれとわからぬようにひきずられ物陰へと連れてゆかれる。
時々、何処からか魔法攻撃があるのか空が揺れた。が、それも屋敷の周囲に張ってある物理・魔法結界に阻まれる。
周囲をインディラ忍者が固め、屋敷の周辺は魔法が得手のガジュルシン王子が結界を張っているのだろう。
姫勇者の護衛達の見事な働きに、監視者の口元が笑みに綻んだ。
「なかなかやるじゃないですか、インディラ忍者もがんばってますね」
「さようにございますな」
監視者もそれに返事を返した者も闇の中にいた。通常空間とは異なる異空間。そこに籠もって監視者は、魔法で現実――姫勇者一行とその周囲を切り取り、闇の中に映像として映しているのだ。
「あの姫勇者様は偽者ですね……と、いうか弟の方ですね。本物のラーニャ様はあちらのインディラ忍者に扮してますね」
「さようにございますな」
「あの赤毛の女戦士から妙な魔法の波動を感じます、強力な防呪を施された強い物理結界が常時張られている感じです。あの魔力は……カルヴェルのものではありません。他の大魔法使いが彼女を守護しているようです」
「さようにございますな」
そこで、監視者はキッ！　と、自分の背後に控えている者を睨みつけた。魔法に関しては才の無い相棒が、『さようにございますな』などと答えられるような話題はふっていないのだ。
「忍者ジライはあいかわらずだし、シャオロン君も見た目、そんな

に変わってないみたいですね」
「さようにございますな」
と、おざなりに答えた相手の目が何処へ向いているかは一目瞭然だった。食い入るように闇に浮かぶ映像の、その中の一人を見つめている。
忌々しく思いながら、監視者は吐き捨てるようにつぶやいた。
「……あの第三王子、ナーダにそっくりですね」
「さようにございます！　まさにそっくり、いきうつし！」
相棒の熱っぽい反応に、監視者が多少、ひるむ。
「あの高貴な凛々しいお顔！　逞しいお体！　勇ましくも品格のある優美な所作！　あああああ、どれをとっても御身様そのもの！　御身様がお若い頃に戻り、お姿を見せてくださったかのようです！」
感激のあまり眼を涙でうるませながら、相棒は闇に浮かぶ映像を見つめている。
「王宮よりほぼ出られないあのお方の姿は、穢れたこの身では、もはや二度とお目にできぬと覚悟しておりましたが……ガジャクティン様のお顔を拝見でき、御身様に再びお会いできたように思え……胸がいっぱいとなっております」
「……よかったですね」
涙もろい相棒にハンカチを貸してやりながら、監視者は言う。しかし、その顔は超不機嫌だった。
「ナーダそっくりの息子を覗き見られて」
「はい！　ガジャクティン様は御身様そっくり！　そして、あちらのガジュルシン様は御身様によう似ておられます！　あの賢そうなお顔、一見、少女のようにたおやかな雰囲気を漂わせておきながら腹では何を考えているかわからない奥深さもあり、根は図太くお気難しそうで、御身様によう似ておられます！」
「それって褒めてるんですか？……と、いうか、あなた、いい加減、その癖、直してください。私とナーダを二人とも『御身様』と言うのはやめろと、二十年近く繰り返し繰り返し言い続けてきたはずで

すけれど？」
「申し訳ございません、御身様。ですが、私の頭の中ではお二人はきちんと区別されておりまして」
「あなたが良くても、私が嫌なんです！　あなたが、『御身様』って未だにナーダを慕ってるのが気に喰わないんです！」
「はあ、申し訳ございません」
「ナーダへの慕情を捨てろなんて、そこまで無茶なことは言ってないでしょ？　ただ、私とナーダをいっしょくたに『御身様』とくくるなと、それだけ命じているのですよ」
「申し訳ございません、直そうとはしているんですが、生前、お二人ともお名前でお呼びしたことがなく、『御身様』とお呼びした方がしっくりする為、つい」
「もう！」
監視者は相棒の顎をとらえ、その口を自分の唇で塞いだ。
珍しく抵抗を示す相手。口づけを楽しんでから、監視者はよく整ったまるでつくりもののように完璧な美貌に、意地の悪い笑みを浮かべた。
「あなたが悪いんですよ、私を怒らせるから……」
「ですが、御身様、あの……」
相棒が闇に浮かぶ映像を指差し、懇願するように見つめてくる。
「今、せっかく、ラジャラ王朝のお子様方のお姿が……」
「そんな映像、後で何度でも再生してあげます。あなたが私の機嫌をちゃんととってくれれば、ですけれどね」
「御身様……」
「ガルバ……あなたは私のものになったのです……私だけのものに……あなたが『御身様』と呼んでいいのは私だけです」
監視者は相棒の体を抱きしめ、忍装束を脱がせていった。
二十代前半の、小柄だが、忍らしいしなやかな肉体が露となってゆく。その肉体は監視者が相棒に与えたものだ。二十年近い時を、まったく老いることなく、相棒は忍として全盛期の肉体を保ってい

る。
死の縁にあった相棒の魂を呼び戻し、偽りの肉体を与えた監視者は……
かつては光の教えの中に生きていた。神の覚えめでたい、比類なき僧侶であった。
しかし、今は……
闇の中に監視者の眼が赤く煌く。
それは魔に堕した者が持つ、血の輝きでもあった。

闇に浮かぶ映像に変化が訪れる。
宮廷魔法使いの移動魔法で、姫勇者一行は皇宮へと渡って行ったのだ。

貴族の別邸の前にできていた人垣も消え、護衛の忍者達も去り、辺りに静けさが戻る。
何の変哲も無い映像が浮かぶ中、二人は闇の中で絡み合っていた。

シャイナ皇宮へ！　闇に光る眼！（後書き）

次回からは新章『過去の亡霊』に入ります。

最初の話は、『いい加減にしろ！　姫勇者って誰？』です。ラーニャちゃん、超不機嫌です。

最後に出てきた監視者と相棒……彼等の正体や何故そうなったのか何が狙いなのかは、この先の展開で。

＊　＊　＊　＊　＊

明日からはしばらくムーンライトノベルズに新作『女勇者セレス――ジライ十八番勝負』をアップします。五番勝負までアップしたら、ラーニャちゃんに戻る予定です。ラーニャちゃんの更新、少し間があきます。すみません。

ムカつきまくり！　王女は女王様！（前書き）

予告の『いい加減にしろ！　姫勇者って誰？』からサブタイトルを変更しました。

まだ九つの今世皇帝は、姫勇者一行との謁見を楽しみにしていた。人の身長ほどもある巨大な大剣を背負い、大魔王を討伐する為に、故国を離れた美貌の姫君。美しく、強く、かしこく、やさしく、まるで物語から抜け出てきたかのような高潔なる剣士なのだとか。

伝え聞く姫勇者の噂に少年皇帝は夢をふくらませ、姫勇者の登城を楽しみにしていた。

それゆえ、摂政ドルンから会見の席が宝玉の間であると聞いた時、皇帝は癇癪を起したのだ。皇帝と貴人との会見の席は宝玉の間と決まってはいた。が、玉体である皇帝の座る座は最奥の上段にあり、謁見者との間には三重の御簾がある。そんな遠くからでは姫勇者がよく見えない、姫勇者も従者もインディラ王家の者と聞いている高貴なる身分の者達だ、もっと近寄らせよと。

「申し訳ございません、陛下。姫勇者様の御身分を慮れば、会見の場は確かに内廷でしかるべきと心得ます。が、皇帝陛下と勇者との会見の場は二代目勇者ホーランの時代より外朝と定まっております。その伝統を陛下の御代より崩すわけにはいきません。何卒、ご寛容ください」

又、伝統かと少年皇帝はムッと表情を曇らせる。何をしたいあれを変えたいと口にしても『それはシャイナ皇家の伝統にございます。どうぞご寛容ください』としか摂政ドルンは答えてくれない。二代目勇者からの伝統とはいっても、その時代と今では都も王宮も違うものを。

謁見の後、内廷に姫勇者をお招きし歓談の場を設けるとドルンが約束した為、皇帝はぷぅと頬を膨らませたまま、宝玉の間へと向かう輿に乗る事を承知した。

少年皇帝は飾りのついた重たい冠と衣装に埋もれ、玉座に腰かけていた。

三重の御簾の手前二つがあがり、ようやく視界が開ける。決してあがることのない最後の御簾のせいで、どうしてもはっきりとは見渡せなかったが。

壁際に衛士の詰める、宝玉の間。絢爛たる飾りの施された謁見の間の中央で、勇者一行は玉座へと跪いている。

前列三人真ん中の黒髪の騎士が姫勇者であろう。少しウェーブのかかった腰までの黒髪、美しいと評判の顔は御簾のせいでよくわからなかった。が、整っているように思われた。白銀の鎧で首から下を覆っているので、女性らしいなよやかさはない。

姫勇者の背には、たしかに、彼女の身長ほどもある大剣があった。あれが伝説の『勇者の剣』かと少年皇帝は頬をほころばせた。

彼女の左のターバンまで白い衣装の痩せた男がインディラ王家第一王子ガジュルシンで、右にいる大男が第三王子ガジャクティンであろう。十四歳と聞いていたガジャクティンの体格に皇帝は不快を覚えた。が、相手はインディラ人なのだと自らを慰め、すぐにその感情を忘れる事にした。

彼等からかなり離れた背後に、四人の人間がいた。

父親が皇帝の私兵であった武闘家シャオロンと、インディラ王家の忍ジライ、後は忍と赤毛の女だ。

インディラ王家の者より控えるのは当然ではあったが、英雄であるシャオロンとジライはもっと御前に近づいてしかるべきだろう。皇帝は不満に思った。よく見えないのだ。

しかも、この部屋では玉体である皇帝は、自ら客人に声をかける事はできない。

摂政か侍従に言葉を伝え、彼等の口を通して意思を伝える事ぐらいしかできないのだ。

摂政ドルンが儀礼通りの歓迎の言葉を述べるのを、皇帝は不機嫌に聞いていた。

あんな挨拶ではダメだ。謁見を楽しみにしていた皇帝の気持ちが、あれでは相手に微塵も伝わらない。

少年皇帝は重たい衣装で身じろぎできないまま思案し、右手を微かに動かして侍従長を呼び寄せ、己の考えを伝えた。

「皇帝陛下のお言葉をお伝えする。もったいなくも内廷の貴種なる牡丹を姫勇者殿にお送りせよとのおおせである。晩夏に華麗に咲く見事な牡丹である。謹んでお受けするように」

「この時期に牡丹の花が咲くのですか？」

姫勇者の声には驚きの響きがあった。

シャイナ国の国花である牡丹の知識があるのだ。皇帝は更に姫勇者に好意を抱いた。

「先代皇帝の御世より内廷にのみ咲く花である。春から秋にかけて半年、花をつける」

「それはすごいですね。半年だなんて……シャイナ皇家の偉大さを牡丹も称えているのでしょう。珍しい貴重なお花を、ありがとうございます、皇帝陛下」

そう答えた姫勇者の声は可愛らしかった。ツンとすました女官達とは違う、若い女性の声だ。少し鼻にかかったようなくぐもった声なのは、風邪気味だからかもしれない。再び侍従長を手で呼び寄せ、謁見前に姫勇者に侍医を派遣するよう命じた。

「なぁにが華麗な牡丹よ、珍しい品種だか何だか知らないけど、女に花を送るだなんて九つのくせにマセてるわ。エロガキなんじゃないの？　だいたい御簾の奥にかしこまっちゃってさ、一言もこっち

に声かけてこないのよ。えっらそうに！　お父様だったら、他国から来た使者には必ずねぎらいのお言葉をかけるわ！」

「それがシャイナ皇家の伝統なんだよ、ラーニャ。皇帝は人間ではなく神龍なんだ。龍が軽々しく人と口をきくはずないだろ？」

「あんなガキが神龍なら、お父様は大神龍よ！　あんな子供が龍だなんて笑っちゃうわ！」

ガジュルシンが苦笑する。

「今は結界を張ってるからいいけど……今後、皇宮で皇家批判は慎んで。不敬罪になる。姫君の君は拘束軟禁程度ですむ。でも、シャイナとインディラ王家の仲が険悪となり、僕らのお目付け役のジライは責任をとって自害させられるだろうね」

「ジライがどうなろうが知ったこっちゃないわ」

プンとラーニャがそっぽを向く。その格好は紺色のチュニックにズボン。シャイナの忍の姿だ。

「そうなったら身代わりたてるに決まってるじゃん、あの馬鹿親父なら。やめてくれよ、姉貴のわがままや癇癪で、罪もない下っぱ忍者を殺すのは」

そう言ったのは、ラーニャとガジュルシンが背を向けている人間だった。

黒のカツラをとり、濃い化粧を落としたその人物は、金の短髪の健康そうな美しさにあふれる人物だった。ボーイッシュな女性にぎりぎり見えなくもなかった。が、呪文で姫勇者の白銀の鎧を脱いで現れたその体は若々しい筋肉に満ちた男性のものに間違いなかった。ラーニャの実の弟アーメット。十歳まで王族の一員だった彼は、今ではジライの跡取りと目されている忍者だ。

「ほい、姉貴」

下着姿のアーメットが呪文詠唱で外した鎧一式を、姉へと渡す。

『勇者の剣』を背負っての皇帝との謁見は終了した。慣れぬ旅のさなかの『姫勇者』の健康を気遣い、皇帝陛下が侍医を派遣してくださったのだ、『姫勇者』役を交代してありがたく受診せねばならな

いだろう。
　ラーニャは横のガジュルシンをジロリと睨みつけた。アーメットが姫勇者の変装を解き、ラーニャが忍の変装をやめて姫勇者に戻る様を第三者に見せるわけにはいかない。ガジュルシンが周囲から覗かれぬよう目くらましと消音の結界を張ってくれているのだが。
「私、着替えるんだけど？」
「あ？　ああ、ごめん、ラーニャ！」
　ガジュルシンは慌てて義姉に背を向けた。勢いよく後ろを向いた彼は、見ないようにしていたモノをまともに見てしまい、カーッと頬を赤く染めた。
　そんな義弟の様子を横目でチラリと見て、ラーニャはますます不機嫌となった。十八歳の乙女の裸を気にせずそのまま見てようとしていたくせに、下着姿のアーメットに何で照れるのよ！　と。
　前々からそうなんじゃないかと疑いの目を向けてはいたものの、旅に出てから、ラーニャの疑念は確信に変わっていた。
　義理の兄弟と道ならぬ恋に堕ちるんなら、せめて女相手にしろ！
　ガジュルシンなどまったく好みではなかったが、アーメットばかりがちやほやされる現状は頭にくるばかりだった。

　入室してきた三人を、皇帝は笑みと共に迎えた。
　中央の白銀の鎧の人物は、右耳の上に牡丹の生花の飾りを挿していた。黒髪に薄紅色の大形花がよく映える、姫勇者は艶やかな美貌の姫君だった。形の良い眉、印象的な茶の瞳、すらりとした鼻、かわいらしい唇。紅すら差していないまったく装っていない顔は、若々しさと愛らしさと気品に満ちていた。
　召使に案内させ、皇帝のすぐそばの席に姫勇者と第一王子を、少し離れた席に第三王子を座らせる。
　ドルンの準備した茶会だ。皇帝の点心と茶の軽食の時間に姫勇者

と従者の王子二人を招き、同じテーブルにつき同じものを食す栄誉を与えたのだ。

姫勇者は最初に、『お招きいただき光栄に存じます。侍医の御診察及び綺麗な贈り物も誠にありがとうございました』と、生花の飾りにそっと手を触れ、皇帝を喜ばせた。が、その後は静かに茶を楽しむばかりで自ら口を開こうとしない。

旅の話は第一王子が語ってくれ、姫勇者も質問すれば答えを返してはくれるものの非常にそっけない。皇帝は笑みをみせてくれない姫君をじっと見つめた。

「姫勇者ラーニャ、我が国の菓子は口にあわぬか？」

「いいえ、とっても美味しくいただいております」

「そうか。ならばよい」

しかし、姫君の口元はまったく綻ばない。にこやかなのは第一王子だけだ。

「なにか心にかかることがあるのならば、口にせよ」

そう命じると、姫勇者の茶の瞳が真っすぐに皇帝へと向けられた。

「口にできません」

「何故だ？」

「私、今、インディラ王家の第一王女としてこの席についております。非礼なふるまいはできません」

「非礼？」

「心の内を飾らずに口にするのは、王女としてあるまじき非礼とお思いになりません？」

「思わぬ」

皇帝は静かにかぶりを振った。内廷の皇家の私室にいる為、冠も比較的簡素なものとなっている。頭を振る事もできる。

「そなたは、今、皇帝の客人として予の側に侍っておる。その立場は、公式の客人ではなく私人だ。お国のお立場を慮る必要はない。お心のままにふるまわれよ」

「『心のままにふるまってよい』とのお言葉に二言はございません

ね？」

「ない。皇帝の言葉が翻ることはない」

姫勇者はにっこりと微笑んだ。

皇帝はハッと胸をつかれた。愛らしく何と魅惑的な笑みか。

「お許しがいただけたので、遠慮なく言わせていただきます」

首を振って制しようとする第一王子に対し一瞬だけきついまなざしを送ってから、姫勇者は満面に笑みを浮かべこう言った。

「澄まして格好つけてるんじゃないわよ、アホガキ。皇帝への謁見だありがたく出席しやがれって威張りちらすんなら、全員、招待しろっての。王家の人間しか人間扱いせず、それ以外の人間を使用人扱いとか間違ってない？　私の従者はいずれは大魔王を倒し、『英雄』になるわけよ。今は無位だって将来は『英雄』だし、現在、既に『英雄』になってる人間が二人もいるのよ。なのに、内廷に私達用の部屋は三間しか準備されてなくって、私用とガジュルシン用とガジャクティン用とはっきりと決まってたわ。王族以外は召使だから、部屋なんていらないってわけよね？　ふざけんじゃないわよ、このクソガキ！　シャイナ皇室がこんな無礼なところだったなんて、がっかりだわ！」

「今の姫勇者の言葉は、まことか？」

皇帝は姫勇者から侍従へと視線を向けた。

「予は姫勇者一行を手厚く迎えよと命じたはずだ。全員分の部屋を何故、用意しなかった？」

「恐れながら皇帝陛下、内廷に室を賜る客人は王族もしくは上級貴族、或いはそれに準ずる者と定められております。それがシャイナ皇家の伝統にございます。どうぞご寛容ください」

摂政が用いる常套文句は、少年皇帝の怒りを煽っただけだった。

皇帝は席を立ち、自分のそばに控える侍従を叱り飛ばした。

「愚か者！　勇者一行は、『上級貴族、或いはそれに準ずる者』に

あたる。勇者と従者がおらねば、この世は闇に満ちるのだ。このシャイナ国とて無事ではすまぬ」

「しかし、そのような解釈の前例はなく」

「ならば、それを否定する解釈の前例もあるまい。侍従長にすぐに室を勇者一行全員分用意するように伝えよ」

「しかし、陛下」

「皇帝の命令である！　客人の前で予が口にした言葉を果たせぬ事の方が、シャイナ皇家の恥だとは思わぬか？」

「ですが、恐れながら陛下、無位の者に部屋をお与えになるなど」

カッとして皇帝が右手を振り上げる。侍従は頭を低くした。癇癪を起した皇帝に殴られるのには慣れていた。

しかし、皇帝が右手を振り下ろす前に、

「待って」

部屋に姫勇者の声が響き渡った。

「もういいわ。部屋は今のままでいい。三部屋ぐらいの方が、互いに護衛しあえて安全だもの」

「だが、姫勇者ラーニャ、それでは予の気持ちがおさまらぬ。予はそなたらを歓迎せよと命じたのだ」

「うん。あんたの気持ちは、今のでよぉくわかったわ。だから、もういいの。部屋のことはもういいから、食事とか待遇とかそっちの方で差別しないよう、部下に命じてくれる？　いずれはみんな『英雄』になるんだし、私の仲間なわけだし、大切にしてほしいの」

「……姫勇者の言葉通りにできるか？」

皇帝の質問に、侍従は平伏する。

「善処いたします」

「善処では許さぬ。予に恥をかかす気か？」

「申し訳ございませぬ、陛下、ですが、シャイナ皇家には伝統がございまして」

少年皇帝の顔がカーッと赤く染まる。彼が怒りを爆発させる前に、第一王子ガジュルシンが静かに二人を仲裁する。

「シャイナ皇家の伝統を辱める意思は勇者一行にもありません。僕らの希望を伝えた上で、お国の伝統と照らし合わせそこから逸脱しないような形で、過ごしやすい環境を整えていきたいと思うのですが、いかがでしょうか？」

「できますれば、そのように」

おろおろと侍従が、すがるようにインディラの第一王子を見つめる。

しかし……本来、この場で客人と会話できるシャイナ側の人間は皇帝だけのはず。皇帝が発言を許す前に侍従は、皇帝よりも先に第一王子に答えを返したのだ。『伝統』を盾に皇帝の意思を聞かぬ態度といい、皇帝をないがしろにしすぎている。

少年皇帝は怒りのあまり小刻みに体を震わせた。

「小物なんか相手にしない」

さらっと言ったのは姫勇者だった。

「真龍は大空舞う気高き存在なんでしょ？　地上のゴミなんかほっときなさい」

その皮肉に皇帝の口も綻ぶ。姫勇者は見かけに似ず、辛辣な言葉を使うようだ。皇帝は席についた。

「勇者一行が内廷で暮らしやすいよう、一行の意見を伺った上で配慮せよ」

「ははッ」

「下がれ、侍従長に伝えて来い」

「ははッ」

侍従の退出を待ってから、姫勇者が再び口を開く。

「あんたもたいへんねえ。子供なのに皇帝だなんて。周りに嘗められっぱなしじゃない」

「子供ではあるが、予は皇帝だ。この国の頂点にある者なのだ。しかし……」

少年皇帝は溜息をついた。

「見ての通りだ。『シャイナ皇室の伝統』に阻まれ、予の意志は通

らぬ」
「それは、あんたが馬鹿だからよ」
その爆弾発言に、第一王子と第三王子がお茶をこぼしかける。が、皇帝はただ姫勇者の美貌を見つめるばかりだった。
「自分こそ正義！　なんて信じてる奴を、正面きって批判したところで通じるもんですか。しかも、相手はあんたを子供扱いして見下してるわけだし、ハナっからまともに話を聞く気なんかないのよ」
「だが……口にせねば、周囲はますます勝手に物事を進める」
「だから、発言相手と発言場所を考えろって助言してるのよ」
『それ、本当に助言？』って顔で姫勇者に視線を送る第三王子。姫勇者は無視した。
「今日の『宝玉の間』の会見にしても、このお茶会にしても、何これ？　ってのが私の正直な感想。さっきあんたが怒らなきゃ、皇帝陛下は私達を歓迎してないんだと思ったわ」
「歓迎の意は伝わらぬか？」
「あったり前じゃない。皇帝でござ～いって御簾の奥に隠れてるのも、インディラ王家の子供しか招かないお茶会も、まっとーに私らとつきあう気のないセッティングに見えるわよ。あんた、私の従者に興味ない？　あんたの国の英雄シャオロンと会話したくないの？」
「そのようなことはない」
皇帝は強い口調で否定した。
「予は護身術として、剣技ばかりではなく格闘も教わっている。『龍の爪』の所有者の腕をみたいと、かねてより思っていた。勇者一行全員と会話したいと思っている」
「なら、何で、『宝玉の間』の会見とか、王族のみ招待のお茶会なんかセッティングしたわけ？」
「それは……ドルンが、あ、いや、摂政が準備したゆえ」
「どんな形で会見が準備されてるかわからなかったのね？」
「うむ」
「摂政に、勇者一行全員と会話できる会見にしろって、注文はつけ

たの？」
「いいや」
「なら、あんたが悪いんじゃない」
姫勇者はふぅと溜息をついた。
「ほぉんと、馬鹿ね、あんた」
皇帝は目を見開いて姫勇者を見つめた。内心、少年皇帝を軽んじていても摂政も侍従達も、褒め称える言葉しか皇帝に向けない。面と向かって『馬鹿』などと罵倒されたのは、今日が初めてだった。
「馬鹿……か？」
「ええ。部下に全部任せたら、そりゃあ、部下に都合のいいように、警護しやすいように、セッティングされちゃうに決まってるじゃない」
「そうなのか？」
「そうよ。部下だって楽ちんな方がいいもの。全部、他人に丸投げしといて、それで希望がかなってないって怒るなんて、あんた、ガキだわ。ちょっとは足りないオツムを働かせて、どの場所でどんな形で会うのが無難か、考えてみたら？　実現可能な希望なら、あんたの部下もダメ出ししないんじゃない？」
「なるほど……」
皇帝は敬意のこもった瞳で、姫勇者を見つめた。
「そなたの言う事はもっともである。きちんとドルンに希望を伝えなかった予にも正すべきところはあったようだ。姫勇者よ、助言、感謝する」
『馬鹿』だの『クソガキ』だの『オツムが足りない』だの、かなりな侮辱をラーニャは口にしていた。が、皇帝に気分を害した様子はない。
悪口など言われない身分の為、悪口すら新鮮な助言と感じているのかも？　と、ガジュルシンがそう思った時、更なる侮辱をラーニャは口にしていた。
「あんた、鼻もちならない嫌なガキだと思ったけど、過ちを認めら

れるんなら救いようもあるわ」
「うむ。姫勇者ラーニャの言葉は鋭い刃のように胸に刺さるが、正しきことを教えてくれているとわかる。そなたの声をもっと聞きたい。予にいたらぬところがあれば、遠慮なく教えてほしい。そなたの言葉にならば予は従う」
「あら、かわいいこと言ってくれるわね」
ラーニャはにっこりと微笑んだ。
「言葉責めを喜ぶなんて、Ｍっ気あるじゃない。滞在中、Ｓにふさわしい女王様として、かわいがってあげてもいいわよ」

「Ｍ？」

目をぱちくりとさせる皇帝のすぐ傍で、席を立った第三王子が姫勇者の口を覆い、第一王子がにこやかに皇帝へと話しかける。
「ＭとはＳという特殊な人間と特別な秘め事の関係となる者です。二人の間には他人には入れない深い絆があるのです。姫勇者は皇帝陛下と深い絆を持って親交を結びたいと望んでいるのです」
「おお」
少年皇帝は身を乗り出した。
「願ってもないことだ。予は姫勇者のＭとなろう」
「それはありがたき幸せ。姫勇者も喜んでおります」
ニコニコと第一王子が微笑む。
「ですが、二人の特別な関係はあくまでも秘め事。又、無粋な第三者を絡めては美しき絆が穢されましょう。姫勇者と二人っきりの時以外、今後は、ＳとＭの関係である事はお口になさらぬよう願います」
「他言無用ということだな？」
「さようにございます」

「わかった。他言無用だ、よいな？」
皇帝は室内の召使や近衛兵を見渡す。皆、ぶんぶんと首を縦に振っていた。が、姫勇者からのM奴隷の誘いに皇帝が応じたとの報告が、きっと間もなく、侍従長の元にもたらされるだろう。
第三王子のゆるんだ手を強引にはらい、ツンと顔をそむける姫勇者。その美貌を幸せそうに見つめながら、皇帝はこう言った。
「明日の午前中、格闘の授業がある。この時間に勇者一行全員と会えぬものかドルンに話してみよう。その時間ならば、我が国の英雄も喜ぶであろうし、な。早ければ、明日、又、会えるな、我がSラーニャよ」
ラーニャはチラリと少年皇帝を見つめる。
「二人っきりの時は、ラーニャ女王様って呼んでくれる？」
「女王様？　インディラでの身分は王女と聞いているが？」
「SMの絆での呼称よ。嫌？」
「嫌ではない。あいわかった。二人きりの時には、そなたをラーニャ女王様と呼ぼう」
「うふふ。あんたチビだけど、素直でかわいいわね、気に入ったわ」
最も劣等感を抱いている身体的特徴を指摘された時には、さすがに皇帝も眉をしかめた。が、すぐに『かわいい』と言われたので表情をゆるめた。
背の低さを指摘されて皇帝が怒らないなど、初めてだった。召使達はこの事も含め、侍従長に報告しなければと目くばせをし合った。

姫勇者とアジンエンデ、ガジュルシンとアーメット、ガジャクティンとシャオロンとジライで別れて内廷の三部屋に泊まる事となった。
王族三人への特別待遇は変わらなかったが、残りの者への対応も決して瑣末なものではなくなった。
夕食の後、各部屋に摂政ドルンよりの使いが現れ、『明朝十時よ

りの格闘の時間に皇帝陛下の傍らに侍る事を許す。御前であるゆえ武器は所持せぬように』との伝言を伝えた。上から目線な物言いに、ラーニャは不快を隠さなかったが、怒りを露とする事はなかった。

「何でこんなあっちこっち歩かされるわけ？」

ラーニャはうんざりした。勇者一行はもう十分ぐらい内廷を無為に歩かされている。丸腰で来いとの事だったので、『勇者の剣』も『雷神の槍』も『極光の剣』も『龍の爪』も部屋に置いて来ている。忍者装束のジライとアーメットの二人は、或いは武器を隠し持っているのかもしれなかった。が、見た目からではわからなかった。

「練習場所の庭園って私達の部屋から北に真っすぐじゃなかった？　なのに、なんで建物の中、あっちこっち連れまわされるわけ？」

不満をこめて案内のシャイナ教神官を見つめるが、相手は済ました顔を崩さず、何故入り組んだ道順で進むのかを説明しない。

「方違えだよ、ラーニャ」

溜息をつきつつ、ガジュルシンが言う。

「シャイナは日常生活から占いを重視している。本日、北へ直進することは僕ら勇者一行には不吉という卦が出ているのだろう。徐々に目的地へ進む道を選んでくださっているんだ」

「正確には北北東が忌むべき方角にございます」

ラーニャのつぶやきは無視したくせに、知的なガジュルシンの言葉にはシャイナ教神官は反応した。

女を相手にする気はないってわけ？　不機嫌そうに眉をしかめるラーニャに、背後からガジャクティンが小声で話しかける。

「あのさ、ラーニャ、昨日のことなんだけど」

義弟の声にぞくっと背をすくませつつ、肩越しにふりかえり、ラーニャは大きな義弟を見上げた。

「ＳＭってどの程度やる気？　皇帝陛下を鞭でビシバシとか、蝋燭

とか、外で脱げとか、そんな無茶はしないよね？」
「あったりまえでしょ、馬鹿」
ラーニャは肩をすくめた。
「公開羞恥プレイなんかしないわよ。やっても、言葉責めくらい」
「本当に？」
ラーニャはしばらくジーッと義弟を見つめる。
「何もプレイらしいことはしないわ。本格的なプレイは今は誰ともやる気はないもの。それより……その、」
ラーニャの頬がポッと染まる。
「さっきのもっかい、ううん、何回か、言ってくれない？　ＳＭ、鞭でビシバシ、蝋燭タラタラみたいなの」
「何で？」
「何でって」
ラーニャは頬を更に赤くした。
「私がうっかり皇帝陛下に暴力ふるわないようによ。今のうちにときめきワードを聞いといて、心落ちつけとくの……ついでに『公開羞恥プレイ』も言って……」

そのわけのわからない理由を信じたのか、『鞭』やら『蝋燭』やら『外で脱ぐ（脱げから脱ぐに変えてくれとラーニャから注文されたのだ）』だの素直に口にするガジャクティン。
アーメットは溜息をついた。父王そっくりな声のガジャクティンに変態用語をしゃべらせときめいている姉を、実の姉ながらダメな人間だなあと思いながら。

一行は牡丹園に入った。ラーニャは低木の枝先に咲く紅、紫、白の大型花の美しさに見とれた。
「普通は春か秋に一週間ぐらいしか咲かないんだ」

と、ガジュルシンに教わりラーニャはへぇと周囲を見渡した。この牡丹は半年咲くと侍従長は言っていた。晩夏の庭園に綺麗に花は咲き誇っており、道を歩くだけで華やいだ気分となった。

皇帝の父、先代皇帝は殊のほか牡丹を好み、趣味が高じこの牡丹園を造ったのだそうだ。そうジライから教えられたラーニャは、父親の形見の花なわけねとポツリとつぶやいた。贈られたのを無下に捨てなくて良かったとも。

牡丹園を抜けてしばらく行くと、煉瓦敷きの通路のある庭園に繋がった。護衛の近衛兵達が周囲を大きく囲む輪の中で、皇帝は小柄な男に対し向き合って拳法の型を構えていた。冠も外し動きやすいシャイナ風の武闘家の衣装（といってもすごい刺繍だらけなのだが）をまとった皇帝が、嬉しそうに顔を向ける。

「姫勇者ラーニャ」

女勇者に対し、皇帝は満面の笑顔だ。

「こちらへ。英雄シャオロン、おまえもそばに参れ、許す」

インディラの王族達よりも後方に控えていたシャイナ人へと、皇帝は呼びかけた。シャオロンは皇帝への礼をとってから進み出る。

「予の格闘の教師だ。おまえもよく知っていよう」

皇帝に頷きを返し、皇帝と対していた拳法着の男が前へと進み出る。格闘家とは思えない、小柄で痩せた人物だ。

「皇帝陛下の格闘指南を務めております、リューハンにございます」

王子と王女に恭しく挨拶してから、その男はシャオロンへと頭を下げた。

「シャオロン師、お久しゅうございます」

「シャオロン師？」
首をひねる私。
皇帝の格闘教師が、私に頭を下げながら答える。
「四年前まで、シャオロン師のお教えを受けておりました」
小柄だけど官僚のような立派な鬚を生やした、このオジさんが？
私はシャオロンをマジマジと見つめた。二十代前半、ともすれば十代に見えてしまいそうだが、英雄シャオロンは三十三だか四なのだ、本当は。それでも、お師匠様って感じじゃないわよね、若すぎて。
「お久しぶりです、リューハン様」
シャオロンが元弟子に対して礼儀正しく挨拶をする。元弟子とはいえ、相手は今は皇帝の格闘の師匠なのだ。閑村の村長さんと比べれば、そりゃあ、まあ、現在、どっちの身分が上か考えるまでもない。
「四年前に、皇帝の拳法の師にとの話がシャオロンにありまして、な」
いつの間にか、私の背後にはジライが来ていた。覆面に忍装束のいつもの姿だ。そっぽを向きながら独り言のように小声でボソボソとインディラ語をつぶやく。たぶん私にしか聞こえない、小さな声で。
「村長として動けぬあやつに代わり、一番弟子のリューハンが皇帝の拳法の師となった……と、いう事になっております。表向きは」
と、いうことは本当は違うのか。
「ま、そこそこは拳法の才のある、野心あふれる如才ない男……小物にございます」
なるほど。まあ、権力が絡むと駄目になる人間っているものねえ。
皇帝の拳法の師なんて、いわば格闘家のアガリみたいなものだもの。

不義理を承知で師匠を捨てて、目の前にぶらさがってた御馳走に飛びついちゃったってことかしら？

一見、にこやかに挨拶を交わしているようだけど……シャオロンとリューハンの間にはドロドロのグチャグチャのネチャネチャの怨みつらみの人間関係がある……のかしら？　シャオロンが爽やかすぎるんで、そうは見えないけど。

皇帝の求めに応じて、シャオロンが演武をする。素早く、しなやかで、一挙一動が美しく無駄がなく、全ての動きが流れるようだった。舞を舞っているような感じ？　動きに合わせるかのように宙を舞う黒の束髪までもが綺麗だった。

大はしゃぎの皇帝が、次に私たちにインディラ武術の披露を求めた。となると、ここはねえ……。私とガジュルシンの視線がガジャクティンに向く。三人の中じゃ、絶対、一番、こいつが、うまいはずだもん。

『英雄の演武の後では恥ずかしいばかりですが』と、断ってからガジャクティンが、インディラ式武闘の型を披露する。軽く流れるようなシャオロン様の動きに比べ、もっと大地と一体化したような重厚さがあってそれでいて愚鈍ではない。

でも……うん、まだまだね。お父様の足元にも及ばないトロくてカタい動きだわ。

皇帝が義弟にも拍手を送る。お父様より動きはずっと劣るけど、それでも観賞に値するレベルなのよね……何で、格闘まで上手なのよ。まったく、もう、ムカつく、義弟だわ。

それから、組み手になった。けど、体術は知っていても南の格闘は知らないアジンエンデは参加せず、忍者の二人も暇そうに立っていた。病弱なガジュルシンも当然、パス。

私は皇帝たっての頼みで、皇帝のお相手をする事になった。ガジャクティンはシャオロンと組んでいて、リューハンは審判って名目で私と皇帝のお目付け役となっていた。私がうっかり手をすべらせて皇帝を大怪我させちゃったら、リューハンの首が飛ぶでしょうしね。目を光らせて当然だわ。

格闘は昔、子供の頃に、お父様に習ったぐらい。体術はお母様から習ってはきたけど、武器無しの戦いは正直、あまりうまくない。アーメットの両手剣よりも下手っぴって感じ。

格闘は不慣れだって伝えたら、リューハンが私の両の手に包帯みたいのを巻いてくれた。拳を痛めないように、だ。

皇帝はやる気満々。

私をレディと思ってないな、こいつ。まあ、ただの姫君じゃなくて、勇者だけどね。

年は九つも上だけど格闘は素人同然、リューハンや近衛兵よりは楽な相手だろうし、シャオロンやガジャクティンよりは明らかに素手では弱い。

けど……

私は開始と同時に足元をすくって皇帝に尻もちをつかせ、慌てて立ち上がり挑んできた彼の右腕をつかみ腹に拳を入れる一歩手前で止めた。私の背後にはいつの間にやら、リューハンがまわりこんでいる。う～ん、忍みたい。私が皇帝を殴ろうとしてたら、リューハンに抑え込まれていただろう。

「姫勇者ラーニャ、格闘は苦手ではなかったのか？」

「苦手よ」

茫然と尋ねてきた皇帝に、私はきっぱりと答えた。

「受けて流すとか見切って避けるとか、できないもの」

「だが、予の攻撃を止めた」

「あったりまえよ、あんたのトロい攻撃を私がくらうもんですか」

周囲からうっという声があがってるが、私は気にしない。だって、事実だもの。

「私、格闘は下手っぴだから、あんたの拳を上手に受けてあげられないのよ。私にできるのはケンカ拳法だけよ」
「ケンカ拳法？」
「相手の気勢を削いで自分のペースにもってゆく。喧嘩の極意よ。遊び（スポーツ）でない戦いなら、剣であれ槍であれ拳であれ一緒よ。くらったら負け。相手のペースを狂わせて、自分が有利に動けるようにならなきゃ」
「なるほど」
「シャイナの拳法って一連の動きの中から攻撃も防御も身につけてゆくものなんでしょ？　確か、そんなような事、私のクソ生意気な家庭教師が言ってたもの。けど、あんたの格闘なんて、今のところ子供のお遊戯レベルよ。実戦じゃ何の役にも立たない。拳法の師匠に対戦してもらって、もっとちゃんと教わりなさい。素人同然の奴に勝ったって、何の自慢にもならないのよ？」
「え？」
「これに懲りて、格闘が苦手な人と組み手しようなんてもう考えないで。あんたの我がままにつきあわされる方が迷惑だわ」
「それは違う、姫勇者ラーニャ」
皇帝が大きく目を見開き、私へと迫って来る。
「予はそなたと何事かをなしとげたかったのだ」
ん？
「予とそなたは、昨日、深い絆で結ばれたではないか。そなたは予と親交を結んだただ一人の女性。大切な女性と同じ時間を過ごしたかったのだ」
あら。
まあ。
まあ。
かわいい事言ってくれるじゃない、このマセガキ。好きな女性とやれる事なら何でもいい、格闘でも構わないってあたりはお子ちゃまだけど。

チビだし東国人っぽい目鼻だちのはっきりしない平たい顔だけど、よく見れば愛嬌もある。満更、外見は悪くないかも。

それに『皇帝が私の奴隷』って……究極のギャップ萌えよね。萌えるわ！

あああああ、もちろん、『お父様が私の奴隷』にはかなわないけど！

とりあえず、かわいいおチビちゃんに、女王様として一言何か言ってあげようとした。

時だった。

「みんな、走れ」と、アジンエンデが共通語で叫び、

「失礼いたします、皇帝陛下」

彼女と共にガジュルシンが私と皇帝のそばに駆け寄って来る。二人の動きに近衛兵がざわめく。が、彼等が制止する前に、周囲の空気が淀み始めた。

「全員、中央へ！」

ガジュルシンが魔力を高めた。が、間に合わなかった。

近衛兵が悲鳴をあげ、何人かがばったりと倒れる。私達の周囲には人ではない黒いものが蠢いていた。その黒いものに襲われたのだ。

魔族？

嘘！

皇宮の内廷よ、ここ。

強力な魔封じ結界が何重にも施されている皇帝の居住区に、魔族が入り込めるはずはない。

本来なら……

駈けて来る近衛兵にアジンエンデが早くと促し、腕をひっぱったりして側に引き寄せていた。

ガジュルシンは、周囲に、半径五メートルほどの半球状の結界を張った。聖なる守り。魔は中へは入れない。

結界の外側に黒いものが群がってくる。皇帝が怯えて私にすがりつく。皇帝陛下をお守りするのだと、リューハンや近衛兵が私達の

周囲に立つ。
結界の外を、二人の忍が駈けている。あの二人、やはり武器を隠し持っていたのだ。『虹の小剣』を振るっているアーメットはともかく……ジライは何で『ムラクモ』を使ってるのよ！　あんな長いジャポネ刀、体の何処に隠していたのよ！
二人が外の魔族を次々に浄化してゆく。
私は周囲を見渡した。黒いものがひしめくばかり。ガジャクティンとシャオロンの姿がない。あの二人、聖なる武器は所持していなかったのに。ガジャクティンが、多少、魔法が使える事だけが頼り。あいつは、神聖魔法も中級まで使えるはずだ。
私のすぐそばのリューハンも、群がる魔族を見渡している。シャオロンの安否を確かめようとしているのだろう。
私は手の布を解いた。
腕の中で皇帝が震えている。黒く蠢く魔族は不気味だものね。初めて見たら、そりゃゾッとするでしょう。
木やら石やら鳥やら土やら水やら、庭園のその辺にあったものに憑依して魔族はこの世に現れたようだ。ろくでもないものに憑いて今世に現れたから大した力は振るえないはずだけど、真昼間に動き回れる以上、この前のハリの村ほどには雑魚敵ではないはずだ。
「ちょっと離れてくれる？」
私は腕の中の皇帝に尋ねた。
皇帝はぶるぶると頭を振り、必死に私に抱きついてくる。ここが一番、安全と信じてるわけだ。その信頼はかわいいちゃ、かわいいけど……いつまでも殻の中に籠って小さくなってるわけにはいかない。
だって、私は姫勇者だもの。
「魔族を退治してくるわ。離れなさい」
嫌々と皇帝が頭を振る。
まったく、もう。
だから、ガキは嫌なのよ。

「いつまでもブルブル震えてるんじゃないわよ、馬鹿ガキ！　この結界の中にいりゃ、あんたは絶対、食われない。怪我一つ負いやしないわ！　そして、魔族が消えるまで、この結界が解けることは絶対にないのよ！」

「絶対……？」

何故、そう言い切れるのだ？　と、いう顔の皇帝に私は断言した。

「絶対よ！　だって、私が今、魔族を退治してくるんだから！」

私はその辺にいたテキトーな近衛兵に皇帝の体を押しつけると、群がる魔族達の元へと走った。

「ラーニャ！」

背後でガジュルシンが叫んでいた。が、無視。

私は両手で宙を握り、頭の上へと振り上げた。

飛んで来い、馬鹿剣。

私は魔族の中につっこむわ。

あんたの大好きな獲物がそこにいっぱいいて、振るい手はここにいるのよ。

早く来なさい。

来なきゃ、魔族を斬れないわよ。

ちょっとでも遅れたら、私、死ぬわよ。

無防備な勇者なんて、魔族の格好の餌なんだから。

ガジュルシンの張った結界を、私は突き破る。魔族を阻む聖なる結界は、私には無いも同然のものだもの。

周囲の黒く蠢いていたものが、一斉に私へと向かってくる。大波のように、私を取り囲む。

闇に包まれる！　と、思った瞬間、私の前に一人の人間が立ち、私をガジュルシンの結界の内へと突き飛ばした。

体をはって私への魔の攻撃を防いだのは、アジンエンデだった。

エーゲラ風のチュニックがビリビリに裂け、胸と腰と手と脚の四つの赤い鎧が露わとなる。ケルティの上皇様お手製の魔法防具だ。四部位を同時に装備すると物理・魔法結界が頭部を含む全身に張り巡

らされるのだ。
「無茶するな、ラーニャ。おまえの命は一つしかないんだぞ」
結界外に出てしまったアジンエンデを魔が襲う。しかし、魔族の攻撃は彼女にぶつかる瞬間、脇へとそれてゆく。彼女の結界には浄化の力はないけれど、魔からの攻撃をはじく力はあるようだ。
「武器無しでは戦えん。忍者達に任せて今はおとなしくしてろ」
「そういうわけにもいかないのよ」
ガジャクティンとシャオロンが魔族の中に取り残されてるんだもの。ガジャクティンがちゃんと魔法を使ってたら、二人とも無事なはずだ。絶対、生きてる。
従者を見捨てるなんて、勇者じゃない。
守られて結界の中に小さくなってるのも、勇者のふるまいじゃない。
魔族を浄化し、今世に清浄をもたらすものこそ勇者なのだ。
「来なさい、私と共に魔族を浄化する為に」
剣は私の声に応えた。
私の両手は『勇者の剣』の柄を握りしめた。
魔法剣が私の求めに応じ、空間移動して来たのだ。

どう敵を斬りたいのか、どう振るって欲しいのか、『勇者の剣』の望みが私にはわかる。
それは、私の望みでもあるから。
空気のように軽い剣を、意のままに操り、目の前の黒いものを祓ってゆく。
剣を振るうだけで光が広がり、魔族が消えてゆく。
魔を斬る度に、穢れたものを滅ぼす歓喜が、私へと伝わる。
私にしても、命を狙ってくる醜い存在が消えうせてくれるのはありがたい。魔族の消滅は私にも喜びだ。だけど、それはあくまでも私の思い。剣に同調しすぎて、剣に精神をのっとられたわけじゃな

い。少なくとも、今は。
闇を祓う存在。ジライとアーメットの持つ聖なる武器の波動が私へと伝わってくる。
そして、後、二人。
聖なる力を用いている人間は他に二人いる。
拳に聖なる魔法をこめて、敵を殴っているガジャクティン。
燕のように身軽に拳を振るい、闇を切り裂くシャオロン。その手には聖なる武器がないのに、シャオロンは魔を切っていた。
『そんな馬鹿な』と、誰かがつぶやいた。つぶやきみたいな小さな声が魔族と戦闘中の私の耳に届くなんてありえない事なんだけど、確かに聞こえたのだ。

魔が全て消え、探知の魔法で周囲を確認してからガジュルシンは結界を解いた。
それでもって私は、ガクッと庭園の煉瓦の通り道に倒れた。
気を失ったわけではない……
馬鹿剣が重たくなって、まともに持っていられなくなったのだ。
剣は成人男性一人分ぐらいの重量。魔族が消えた途端にこれだ！
腹立つ～～～そんなに私に持たれるのが嫌なの？
「姫勇者ラーニャ、無事か？」
走り寄ろうとした皇帝を、周囲の近衛兵が押しとどめる。うん、その判断は正しい。私が魔に穢されていたら、皇帝の命が危ないものね。
私のそばにシャオロンが跪いた。
「このまま、気絶した振りをした方が楽ですよ」
私を介抱する振りをしながらシャオロンが小声で言う。
「それとも、鞘をここまで持って来て『勇者の剣』をお部屋まで運びますか？」
まっぴらだ。『姫勇者』アーメット様にあの馬鹿剣は引き取って

もらおう。
私の顔の前にシャオロンの右手があった。その三の指には、格闘家の彼には不似合いなものがあった。大粒の金剛石の指輪。清らかな光を放っている。浄化の光だろう。見れば両手の指にある。
私の視線に気づいたのか、シャオロンがにっこりと口元に笑みを浮かべる。
「妻が持たせてくれたお守りです。『龍の爪』は装備まで時間がかかりますからね。突発的な戦闘には、あの武器、向かないんですよ」
そうか、この指輪で魔を浄化していたのか。
指輪を外し小袋にしまったシャオロンが、『姫勇者様はご無事ですが、勇者の剣と感応しすぎ、ひどくお疲れになっています』とか何とか皇帝達に言ってるのを私は寝っころがって聞いていた。
かわいそうな近衛兵が数人亡くなったみたいだけど、勇者一行は全員無事。皇帝も、ね。
気絶した……ということになった私は変態忍者にお姫様だっこで部屋まで運ばれた……
ジライが上機嫌で熱っぽい視線を私に送ってくるんだもの。どさくさまぎれに頬ずりまでしやがるし。私が動けないのをいいことに、好き勝手して～　後でぶん殴って蹴っ飛ばしてやる～～～と、思いながら私はひたすら寝た振りを続けた。

部屋についてすぐにガジュルシンがベッドでダウンの姫勇者の幻を作って結界を張ってくれたんで、入れ替わった。私はインディラ忍者の格好となり、アーメットは姫勇者になった。
二時間したらこの幻は解ける。で、その後、顔色の悪さを隠したくてドギツい化粧をした姫勇者が『勇者の剣』を拾いに行くという事にした。具合が悪いって事で、皇帝やら摂政やら侍従長からのお誘いは全部断り、手紙はジライに代筆してもらった。
事情聴取には、シャオロンと結界を張り終えた後のガジュルシン

に行ってもらった。

庭園の魔封じの結界はやはり全部壊されていたらしい。

犯人は現在調査中で、新しい結界を張り巡らせる為に、シャイナ教とインディラ教の神官・僧侶達が内廷に呼ばれた。シャイナは国教はインディラ教だが、皇帝はシャイナ教を信仰していて国民の五分の一もシャイナ教という複雑なお国。宗教儀式の場には両宗教の代表が呼ばれる。普段は仲良しの両宗教団体が、今日はちょっと険悪だったらしい。

魔封じの結界を壊すにはある程度の魔法知識がなきゃ無理。何が魔因でどの術式でどこまでが結界の有効範囲かとか、素人にはさっぱりわからないから。内廷に出入りできる聖職者同士、互いを怪しいと疑い合ってるわけだ。

両者は不穏な空気を漂わせたまま庭園に仮の結界を張り巡らし、それぞれのやる事を監視し合っていたそうだ。摂政ドルンは両宗教団体に混合チームを組ませ、内廷の他の結界は無事か早急に調査するよう命じたとか。

皇帝との面会で私の部下の忍が武器を所持していた事は、不問となった。シャイナの内廷が魔族侵入し放題の結界無し状態だった事を内緒にするのを交換条件に、ドルンと取引したらしい。世に広まったら、シャイナ皇宮の面目丸潰れだものね。大っぴらにはされたくないはずだ。

交渉したのはガジュルシン、でも、知恵をつけたのはシャオロン。

インディラでは、ガジュルシンは大臣やらの偉そうな貴族の前に出ると体調を崩し、吐くやらひっくりかえるやらのたいへんな状態になった。なのに、何故かシャイナ皇宮では体調を崩さない。理由を聞くとシャオロン様のおかげだという返事が返ってきた。シャオ

ロンの精神が安定しているからそばに付き添ってもらうと落ち着くらしい。そのへんがどうもよくわからない……

でも、まあ、皇帝の御前で武器所持なんて本来は斬首ものにマズイ事なんだから、不問になってよかった。

魔族騒動がおさまるまでという条件で、勇者一行全員の内廷での武器の所持も認められた。

苦しそうな声……

痛い？　痛いって言ってる？

息も絶え絶えな声……

誰かが泣いてる……？

死にかけているのだ……

わからない……とも言った。

血を流し朦朧としながら、つぶやいている。

誤ったのか……？　と。

花瓶の牡丹の香りが、やたら甘く濃く感じられる。

目を覚ました私は周囲を見渡した。まだ夜だ。真っ暗だ。

すぐ近くに運びこませた移動用寝台から、アジンエンデの規則正

しい寝息が聞こえる。
貫頭着のまま、私はベッドを離れた。
少し歩いて気がついた。旅に出てから夜中にトイレに起きた日には必ずお供いたしますとちょっかいを出してきたジライが、珍しく姿を見せない。
どっかに情報収集にでも行ったのかしら？　そう思ったら、又、うめき声が聞こえた。
声に誘われるまま、私は内廷の姫勇者の部屋を出た。

処々に燭台のともる廊下。
私は声に誘われるまま、一人歩く。
誰ともすれ違わない。
警備兵も召使もいない。
無人の廊下を、苦しそうな泣き声を頼りに歩く。

歩けば、歩くほど……
理由もなく不快になった。
足の裏から汚れてゆくような気がした。
素足だと気づいたのはだいぶたってからだけど、足が汚れるとかそんなんじゃない。この場に居たくない、この廊下を歩きたくない、穢れてしまう……そんな風に思ったのだ。

扉を開いた覚えはないんだけど、私はいつの間にか広い部屋の中にいた。
がらんとした暗い部屋。窓から月明かりが漏れ入るそこの最奥は少し高い段になっていた。
声はそこから聞こえるようだ。

そこで苦しげな声で泣きうめいているのだ。
暗くてよくわからないけど……
奥に何かが光っているようだ。
赤い小さな炎が二つ、宙に浮かんでいる。
何とわからぬそれに向かい、私は静かに進んだ。
「なるほど……それは気がかりでしょう……あなたの心残りが無くなるよう、力をお貸ししましょう」
私はハッと前方を見つめた。
最奥の上段に誰かがいる。
そして、それが誰かは、私にはわかるのだ。
「お父様！」
胸響く、低く甘い声。しっとりとした優しいお声は、お父様のものに間違いない。
私は、声がした方へと走って行った。
「お父様、どうして、ここに？」
何かが動く。
赤い二つ並んだ炎がふいに消え、周囲は月明かりだけの暗い部屋となる。
「……ここまで来られるとは、さすがは姫勇者ラーニャ様ですね」
お父様が他人行儀に私を『姫勇者ラーニャ』などと言う。
「お父様？　何処？　何処なの？」
「違います、姫勇者様。私はナーダではありません」
え？　別人？　でも、呼び捨て？　相手はインディラ国王よ？
ポッと周囲が明るくなる。魔力による光球の明かりが灯ったのだ。
部屋の最奥の上段には宝石がゴテゴテついた絢爛な椅子があり、そのそばに、魔法使いの杖を持った、黒の魔術師のローブの人間がいた。
夜の河のように長い黒髪。踝ぐらいまであるかもしれない。それを一つの三つあみにしてる。相当重そうな髪。
フニャとしたヤサ男タイプだ。妙にすました顔をしている。

お父様じゃなかった、でも……

「はじめまして、姫勇者様、あなたのお噂はかねがね伺っております」

声もしゃべり方も、お父様によく似ている……ガジャクティンよりも、お父様にそっくりだ。

「あなた……誰？」

ヤサ男は肩をすくめた。

「カルヴェルの友人……と、だけ名乗っておきます。すみません、姫勇者様、私、今、隠密活動中なのです。シャイナ皇宮に不穏な動きがありましたので、調べていたんです。潜入先で本名を名乗るわけにはいかないので、今は名は伏せさせてください」

「あなた、忍なの？」

「いいえ。でも、今、やってる仕事はそんなものですね。探し物をしてましてね、ここが怪しいなあと思って調べてたのですが……」

にっこりとほほ笑むその顔には、邪気も悪意もない。とても、穏やかだ。

「別のものを見つけてしまいました。夭折した天才です」

「夭折した天才……？」

「この世界の三本の指に入る権威をもうならせたであろう天才です。そんな優秀な方が、誰にも才を知られぬまま果ててただなんて……残念な事です」

「ここで誰かが死んでいるの？」

「ええ」

魔法使いは豪華な椅子を見つめた。

「その時、アレも使用されたかと思ったんですが、ただの刀剣による殺人だったようです」

「なんでわかるの？」

魔法使いは静かに微笑む。

「過去見の魔法で見ましたから。誰からも邪魔されないよう、時の結界を張ってね。ここ以外の時を凍結さててもらったんです。ここ

で数日過ごそうとも、外では時がずっと止まっているはずだったんです。でも、」

時の結界？

なに、それ、聞いたことないけど？

「あなたには通じませんでしたね。あなたは自分とその周囲を、私の時と同期させています。さすがは姫勇者ラーニャ様」

「どういう意味？」

何か変。

何か違和感がある。

「私があなたの魔法を破ったみたいな口ぶりだけど？」

「いいえ、破ったのは、あなたではありません。あなたの相棒、たぐいまれなる魔法剣です。姫勇者であるあなたは常にあれと共感しているから、無意識に力を借りられるのでしょうね」

「共感？」

「ご自覚がないみたいですね」

男の人はニコニコ笑う。

「あなたは共感能力者（エンパシー）です。その能力は、あなたのお母様のものよりも強く、ある意味、ランツのものよりも強い。方向性は違いますけどね」

過去は過去！　今ではすっかり……

私が共感能力者（エンパシー）？

共感能力者（エンパシー）って確か、他人の強い感情、思いに触れた事がきっかけで、その者の心を我がことのように感じる能力だ。リオネルがそんなような事を教えてくれた。

私のお母様や先々代勇者のランツ曾おじい様がそうだったって聞いている。殊にランツ曾おじい様の能力は強く、周囲の人間全員の感情が全部丸わかりだったとか。

「共感能力は、魔法による心話とは別種のもの、魂の共鳴なのです。ランツには魔力はなく、当然、心話も使えませんでした。でも、彼は『勇者の剣』が何を感じ、何を思っているのか常に直感的にわかっていたのです」

へえええ。

「ランツの能力は、聖王に準じるレベルでした。対面するだけで、目の前の人物の心の中が透けて見え、どんな人間かおおよそわかってしまうという……ある意味、便利で、ある意味、不便な能力でした」

黒髪三つあみの魔法使いは溜息をついた。

「彼は周囲の者全てに無防備に共感していたのです。知りたくない相手の知りたくない感情まで全て、ね。善人面した悪人とかを容赦なく排除しまくったから、現在、彼はたいへん粗暴な勇者として認識されていますが、周りの思念全部を感じてしまうのです、精神衛生上、汚い思考の人間をそばに置きたくないと思ったのは当然です」

はあ。

「あなたの能力は……ランツのものとは違うようです」

それはさっきも聞いた。どう違うの？

「あなたの共感能力者（エンパシー）としての能力レベルはお母様とさして変わりません。精神が高揚した時に、ふとしたはずみにその能力を発動さ

せてしまう程度です。日常生活には支障なしのレベルです。でも、」
でも？
「あなたはランツ以上に、『勇者の剣』に共感しています。あなたの高い能力が発揮される相手は、あの剣が限定。まあ、ものの考え方も、義侠心にあふれたところも、怒りっぽいところも、プライド高いところも、魔を憎み仲間を愛する情が深いところも、理性よりも感情を優先するところも、暴力が大好きなところも、よく似てますものね。非常に相性がいいんです。思考や感情を感じ取るばかりではなく、あなたは剣と人格を一体化できてます。だから、今も、剣から自在に力が引き出せているのですよ」

へ？

今のソラ耳？
よく似てるって、何、それ失敬な！
あの馬鹿剣と私のどこが似てるのよ！
それに、私と『勇者の剣』が相性がいい？
そんなことはない！
戦闘以外、あの剣、わざと重たくなって私に持たれまいとしてるのよ！
全然懐かないのよ！　仲良くしようとする意思すら感じられないわ！　あの剣は私を嫌ってるのよ！
「それは違いますよ、姫勇者様」
クスクスと魔法使いが笑う。
「剣は拗ねてるんですよ」
剣が拗ねる？
「ええ。あなた自身が嫌いなわけではありません。自分の相棒であるあなたが、自分を第一の相棒と認めていない事が、剣には許せな

いのですよ」
私が剣を相棒として認めていない……？
魔法使いはまるでジライみたいに妖しく笑って、横目で見てきた。
房中術基本所作、流し目かしら、これ？
「あなたの心を占めているものは『勇者の剣』ではないでしょ？
剣は使い手のあなたが、自分以外のものに夢中になっているのが嫌なんですよ」
え？
「恋する乙女は、大嫌いなんですよ、あの剣は」
カッと頬が熱くなった。
なに、この人、何者？
ずけずけと私の内面を口にして……無礼だわ！
魔法使いは悪戯っぽく笑うばかりだ。
「あの剣の心を読むのは、カルヴェルよりも私の方が上手なんです。
ねえ、姫勇者様、むくわれない恋なんて、忘れてしまってはいかがです？　ナーダにとって、あなたはかわいい大切な娘。真面目で道徳的なナーダは、あなたを決して恋人とは思いませんよ」
そんな事……
あんたに指摘されるいわれはない！
お父様そっくりな声で、『むくわれない恋』だの『決して恋人と思わない』だの言わないでちょうだい！
私の怒りに何かが同調する。
私以外の何かも、こいつに怒っている。
何、ニコニコ笑ってるのよ、ムカつく男だわ！
あんたなんか、黒いくせに！
「おっと」
笑みを苦笑に変えて、魔法使いが私を見つめる。
私の右手は宙へとあがり、空を渡ってきた剣を、その掌に握りしめる。
「黒の気は完全に消しているのに……もうバレてしまいましたか」

「黙れ、魔族」
『勇者の剣』からも怒りが伝わる。
いや、怒りだけではない。
悲しみ……
『勇者の剣』は泣きながら怒っているのだ。
そして、目の前の者をすぐさま浄化したいと願っている。
「もっとゆっくりあなたとお話したかったのですが、別の機会にしましょう」
逃げもせずその場にたたずみ、魔法使いが楽しそうに微笑む。
「シャイナ皇宮をよく調べて御覧なさい、三年前に何があったのかを含めてね。あなたの可愛いM奴隷ちゃん、このままでは魔の手に落ちますよ」
うるさい！
黙れ！
消えなさい、あんた！
私も剣もそれを望んでいる！
『勇者の剣』が魔族を斬り捨てる。
確かな手ごたえ。
剣の放つの光に飲まれ、魔法使いの姿であったものが消えうせる。
あいつがつくった明かりの光球も消滅した。
魔族を浄化できたのだ。
しかし……
『勇者の剣』が残念そうだったので、私にもわかった。
今のは分身だ。本体ではない。だから、敵は逃げようともしないで斬られたのだ。
お父様そっくりな声の、ムカつくニヤケたヤサ男。カルヴェル様の知り合いと言っていたけれど、本当かしら？
そこで、手の中の剣がグンと重たくなる。思い出したように重量を増すな、馬鹿！　私は馬鹿を床に落っことした。
でも、重くなったってことは魔族はそばからいなくなったってわ

けで……

月明かりしかない広い部屋で、私は溜息をついた。

ここ、何処だろう？

謁見の為と思われる広い部屋だった。夜中に内廷を勝手にうろつきまわって、入り込んでいいわけもない場所だ、常識的に……

う〜〜ん。

この場合、おとなしく待つのが吉！

気絶したふりをして、床の上に寝っ転がった。

警備兵が先に来たら、移動魔法で魔族に運ばれてここで戦闘をしたと説明しよう。

ジライが先なら、アーメットを来させてあの馬鹿剣を運んでもらおう。ついでに、あの魔族とのやりとりをシャイナ皇宮には内緒にした方がいいか相談しよ。私の『可愛いM奴隷ちゃん』って皇帝のことよね。皇帝が魔の手に落ちそうって本当かしら？　それに皇宮で三年前にあったことって？

床は硬くて痛いけど、心地いい冷たさだ。床でも眠れそう。私は瞼を閉じた。

ジライの迎えの方が早かった。

偉い！　さすが、私のストーカーね。よくぞ部屋からいなくなった私を見つけ出した。うっとーしくって、いつもはうざったいだけだけど、今日だけは褒めてあげる！

ここは王族クラスの客人と皇帝が謁見する間で、内廷参内可能な高貴な家臣と皇帝が政務を行う事もある部屋なのだとか。

ジライに連れられ、警備兵にも召使いにもバレないようもとの部屋に戻った。重たい馬鹿はアーメットに運んでもらった。

翌朝、私の部屋で、ガジュルシンに千里眼防止の結界を張っても

らってから、みんなに、昨晩のことを話した。
お父様と声がよく似た魔族の外見を簡単に説明すると、『青い瞳の女性的な顔だちの高貴な美貌の方でしたか？』と、シャオロンに聞かれた。
『高貴な美貌』？　高貴というのはお父様のように品格の備わった方の事だと思う。ニヤけた顔のイケすかない奴だったとしか言えなかった。まあ、確かに眼は青かったような。
魔法陣に立っていたかと聞かれたから、好き勝手に歩き回っていたわと答えた。
「昔、オレ、ラーニャ様がおっしゃった通りの外見の、カルヴェル様の知り合いの魔法使いに会ったことあるんです、セレス様とジライさんと一緒に。魔法陣に囚われたまま、強力な魔力を操り、聖なる魔法でオレ達を助けてくださいました。『魔法使いナーダ』だと名乗られましたが」
「偽名に決まっておるわ。カルヴェル様の知り合いで、勇者ランツと『勇者の剣』とも親しかった者など、おそらくこの世に二人とおるまい。おぬしとて察しはついているのであろう？」
腕を組んだジライがそっけなく言い、シャオロンはそうですねと苦笑を浮かべる。
ガジュルシンも、妙に表情が硬い。
ガジャクティン、アーメット、アジンエンデは顔を見合わせるばかりだ。事情がわかってないのは私を含め四人のようだ。
「昨日の魔族、有名な奴なの？」
「有名ですな」
ジライがガジュルシンへと視線を向ける。話してもよいのか？と、問うように。
ガジュルシンが大きく溜息をついた。
「僕から話すよ……ラーニャ、君が昨日会った魔族は、先々代勇者の従者だった僧侶ナラカだ。父上の伯父……つまり、僕とガジャクティンの大伯父だ」

えっと……

「僧侶ナラカ様って、先々代勇者ランツ様が大魔王を討伐した時に殉死なさったんでしょう？」

と、勇者おたくが兄に尋ねる。

私も、そう習っている。大僧正候補で結界魔法が得意だった、僧侶ナラカ。神聖魔法も回復魔法も超一流だったと教わっている。

「そういう事になっている」

え？　嘘だったの？

「大魔王との戦いで、僧侶ナラカは大魔王の呪いを受け、魔界に封印されたんだよ。魔法陣の呪ごと魔界に飛ばされ、『時間』が止まった結界の内に三十六年間、繋がれていたそうだ」

「魔界に三十六年？」

糸目を丸くしガジャクティンが聞く。

「魔界って瘴気に満ちてるっていわれてるよね？　今世に出てきた魔族がまき散らす瘴気ですら人体にも自然にも有害なのに……そこに住むもの全てが瘴気を吐く世界で、人間が生きていられるはずないよ」

「うん。生身なら、ね。僧侶ナラカは呪ごと魔界に飛ばされ、『時間』が止まった結界に封じられた。だから、瘴気を大量に浴びても死ななかったし、魔に体をのっとられる事もなかった。大魔術師カルヴェル様の魔法によって、精神だけ魔界から救出されたのは封印から十七年後、肉体が解放されたのは三十六年後のことだった」

ガジュルシンの顔に苦いものが浮かぶ。

「魔界より戻った僧侶ナラカの肉体は瘴気にまみれ、穢れきっていたそうだ。総本山で僧侶ナラカが闇に堕ちぬよう大僧正様がつきっきりで治癒にあたられ、カルヴェル様も大僧正様を助けられたのだ

けれども……完治を前に大伯父は失踪したんだ」
失踪？
「何で？」と、思わず、私は聞いた。
「私情からの行動だ。後、半年、いや三か月、おとなしく治療を受けていれば大伯父は魔に堕ちなかったのに……置手紙を残し、僧侶ナラカは総本山を離れた。それには『二十五年後に戻る。それ以前に大魔王が復活した時は、自分の心が魔に堕した証。討伐を頼む』と書かれていたそうだ」
「二十五年？」
なに、その期間？
ガジュルシンがちょっと皮肉めいた笑みを浮かべた。
「大伯父は完治後の自分の余命を五十年と考えたんだ。憎まれっ子だから意地汚くそれぐらい生きるはずだ、と。総本山を離れ、勝手をするので余命は半分でいい、だから見逃してくれ、ってことだよ。二十五年後に、浄化されに総本山に戻るから、と」
「『大魔王が復活したら自分の心が魔に堕した証』というのはどういう意味だ？」と、アジンエンデ。
「僧侶ナラカは大魔王の呪で魔界に封じられていた。三十六年、大魔王の呪と共にあったんだ」

「同化するには充分な時間だ……大伯父が魔に堕ちるということは、ケルベゾールドの力の一部が今世に復活することを意味したんだ」

むぅ……
「大魔王の力の一部ってことは……大魔王そのものではない？」
との鋭いつっこみは、シャオロン。
「そうです」
と、ガジュルシン。

「でも、大伯父が今世にいる限り大魔王の復活もありえず、ある意味、今世は平和となります。ですから、大僧正様は大伯父を信頼し、魔に堕した大伯父を放っておいたのです。むろん、監視はつけていましたがね。しかし……大伯父は十年ほどおとなしくしていた後、監視の目をごまかして逃走してしまったのです。そして、この度の大魔王復活……インディラ寺院としてはもはや僧侶ナラカを神の名において浄化しなければいけないのです」

「何故、僧侶ナラカがいれば大魔王が復活しないはずだったんです？」と、シャオロン。

「同じものは地上には出現できないからです。先代の大魔王がセレス様にかけられた呪いがありましたよね、その……」

そこまで言ってガジュルシンは顔を赤く染め、顔を下に向ける。口はぱくぱくしてるのだけれど、後の言葉が続かない。言いにくそうな第一王子に代わってズバッと、ジライが言う。

「『千人斬り』を例にとる。十三代目大魔王の憑代よりかけられたあの呪、祓えねばセレス様の体をのっとり、憑代及び十三代目大魔王が今世に再び復活するというしろものであった。大魔王が今世から消えても呪は今世に残り、その呪より地上に舞い戻る事すらありえたのだ」

え？　それで？　だから、何なの？

「先代大魔王の呪の影響が今世に残っている限り、次の大魔王召喚はありえぬ。呪での復活と再召喚が同時に起きては一つの世界に大魔王が二体存在する事となるゆえ」

ん……と？

「先代の力の一部が今世にある場合、そこから復活できる可能性もあるから、別の奴に召喚されても大魔王が拒否るってこと？」

私の問いに、『さようにございます、さすがラーニャ様』とジライ。『さすが』は余計。

「なるほど」と、シャオロン。

「なのに、大魔王が復活してしまったんですね、ということは」

「可能性は二つです」と、ガジュルシン。
「大伯父が新たな憑代となった……これが一つ目。無理やり憑依されたのか、自ら降ろしたのかはわかりませんが……大伯父が地上にいる限り、大魔王となれるのは大伯父だけなのですから」
「二つ目の可能性は？」と、シャオロンが促す。
「大伯父は今世に既にいない、です。死亡したのでも、異空間に籠っているのでも、別の世界に移住したのでも……何であれ、大伯父さえこの世界にいなければ、次のケルベゾールドが今世に出現できます」
死亡していたのなら良かったのですがと、ガジュルシンが溜息をつく。
「大魔王となっていないのだとしても、大僧正様との約束を反古（ほご）にして今世から消え、しかも封じられたのではなく好き勝手に行動しているとわかった以上……大伯父の堕落は明らかです。僕は大伯父の血族として、又、インディラ寺院の代表として、僧侶ナラカ浄化に全力を尽くします」
「二つ目の可能性が真実だったとして……現在、別の人間に大魔王ケルベゾールドが降りている場合……僧侶ナラカが異次元から今世に戻って来たらどうなるんですか？」
シャオロンの問いに、ガジュルシンは首をかしげた。
「わかりません、前例がないので……。惹かれあって同化するか、異分子として大伯父が処分されるかだと思います」
「では、僧侶ナラカを見かけたら大魔王と思えということですね」
「はい、そう思ってください」
ガジュルシンは氷みたいな表情に固まっている。柔和な彼とは結びもつかない表情だ。
「でも、大魔王なら……」
私は口をはさんだ。
「『勇者の剣』でしか斬れないわ。あんたがいくら望んでも、あんたの力じゃ僧侶ナラカを浄化できないんじゃないの？」

「うん」
ガジュルシンは頷いた。
「でもね、血族だからこそ使える神聖魔法というものもあるんだ。僕ならば、超一流の僧侶であり攻撃魔法すら使えた僧侶ナラカの能力の大半を封じられる。憑代が優秀であればあるほど大魔王は今世で魔界本来の力を使えるようになってしまうだろ？　僕は憑代の能力を狭める魔法が使えるんだ。君が大魔王を倒す時に僕は役に立てると思うよ」
「血族だから使える神聖魔法って何？」
ガジャクティンが兄に尋ねる。
「僕だって僧侶ナラカの身内だ。その魔法、僕にも教えてくれる？」
「おまえには無理だよ、ガジャクティン」
ガジュルシンが静かにかぶりを振る。
「高位の神聖魔法だもの」
「う」
中級までしか神聖魔法が使えないガジャクティンが、顔をしかめる。
「でも……もしかしたら、これから精神力が強くなって唱えられるようになるかもしれないじゃない。何って魔法？　呪文だけでも教えて」
「おまえには無理だ」
「兄様！」
「呪文のさわりを詠唱しただけで、おまえの魔力は枯渇するだろう。おまえでは信仰心も魔力も足りない。術にみあう素地がなさすぎるんだ」
ぶるぶると身をふるわせてから、ガジャクティンがぷいっとそっぽを向く。納得はできないが、兄を説得するのは無理だとあきらめたのだ。
私は話題を変える事にした。
「で、その僧侶ナラカが言ってた事なんだけど……三年前、皇宮で

何があったの？　あいつ、その事を調べてたみたいよ。霊と交信してたっぽかったわ」

「三年前に今世皇帝が立たれました」と、シャオロン。

「それは、父君の先代皇帝が崩御なさったからで……謁見の間の玉座のそばに幽霊がいたのなら、先代皇帝陛下かもしれませんね」

え？

「先代皇帝の死因は？」と、アジンエンデ。

「公式発表では病死となっています」と、シャオロン。

ふ～ん。

て、思って聞いていたら、アジンエンデの他は皆、表情に変化がない。あ、そ、知らなかったの、又、私だけ？

覚えてないわよ、隣国の王様が何時頃、何で亡くなったのかなんて。後宮の住人の私が他国に赴く事なんて、普通、ないんだから、関心ないわよ。

あれ？　てことは……

「シャオロンのお弟子が皇帝の格闘の教師に誘われたのって四年前じゃなかった？」

突然の話題の変化。それも、かなりどうでもよさげな話題だったのに、シャオロンは普通に答えを返してくれた。

「はい、そうです」

「じゃ、先代皇帝の格闘の師匠だったわけね、最初は？」

「そうですね。先代皇帝が亡くなったので、ひきつづき今世皇帝の師匠として、リューハン様は皇宮に残られました」

それが何か？　と、問うシャオロンに、何となく気になったから聞いただけと答えた。

何か……ひっかかるんだけど、何にひっかかってるんだか、わからない。モヤモヤする。

「先代皇帝が死んで得したのって誰？　今の摂政？」

「いいえ」

他国の政治事情にも詳しい、インディラ王家の御庭番の頭領であ

るジライが答える。
「現在の摂政ドルンは、先代の下でも同じ職に就いておりました。病弱な皇帝に代わって、国を治めていたのです」
「先代皇帝って病弱だったの？」
「と、なっておりました。表に滅多に姿を見せず、内廷に籠っておりましたゆえ。政務に向かぬ阿呆だったとの噂もあります」
「幾つで亡くなったの？」
「二十二にございます」
それは若い。
「先代の時代からドルンは実権を握っていたってわけね？」
「さようにございます。今世皇帝が即位してからの三年、摂政は特に不穏な動きもしておりません。せっせと私腹を肥やしているぐらいで」
それは不穏とは言わないのか。まあ、先代の頃も同じ事してたんだろうから、特別、不穏でもないのか。
「不正がバレたから、先代皇帝を口封じしたとかありえない？」
「どうでしょう。不正の口封じ程度に、デメリットの大きい殺人はそうそう選びません。実権のない皇帝なんぞ騒いだところでたいした脅威ではありませんから」
むぅ。
「本当に殺人であったのなら、それ相応の理由があったとみるべきでしょうなあ」
先代皇帝が生きてたらマズい事……
何だろ？
何で殺されたんだろ？
いや、まだ殺されたと決めつけるのも早いか。
三年前、何か事件が本当にあったのだろうか？
僧侶ナラカの言葉を全面的に信頼するのも何だけど、あの謁見用の部屋で彼は死者と語らっていた。私があそこに行ったのはナラカにとって予想外のハプニングなわけだから芝居をしていたとも思え

ない……皇帝が魔に狙われているとか言ってたしね、あいつ。
「それよりも、気になることがございまして」と、ジライ。
「昨晩、お部屋からいなくなられたラーニャ様を探し、私は内廷をしばし探索したのですが……」
ジライが見てきたものを聞いて、一同の目が点になる。そんなモノが内廷に本当にあるのだとしたら……ここは相当ヤバいということだ。
ジライは鳥でムジャと連絡をとり、三年前の皇帝の死を含め皇宮の事件調査にあたらせると言った。インディラ王家の御庭番の副頭領であるムジャは、今、たまたまペクンに滞在中らしい。情報屋組織と接触して必要な情報を買わせ、ペクンのインディラ寺院・シャイナ教神殿などを調べさせるそうだ。
皇宮内はジライが調べる。まあ、任せとけば大丈夫か。千里眼防止用の結界が張られている場所があるのなら、その場所だけチェックしといて、後でガジュルシンと調査すればいいわけだし。
私達はできるだけかたまって行動することを決め、魔族のたくらみを潰すまで何か理由をつけて皇帝と行動を共にすることにした。
その理由として最適なのは……
ガジュルシンの提案に私は「え〜〜〜〜〜〜」っと、思いっきり不満を伝えたんだけど、それはいいですねと強くシャオロンが支持したのでそれに決定してしまった。
え〜〜〜、嘘ぉ……
やらなきゃ……ダメ？

過去は過去！　今ではすっかり……（後書き）

日替わり後に更新をしてきましたが、リアル事情により難しくなりました。
今後は、一日一本ペースで何らかの作品をいろんな時間にアップしていきます。

「姫勇者ラーニャ」
「はぁい、皇帝陛下」
満面笑顔の皇帝が呼びかけてきたので、お愛想たっぷりに答えを返した。
「許す。もう少し近くに参れ。予の隣を歩け」
「ありがとう、ラーニャ、嬉しいわぁ」
護衛としてやや後ろをついて歩いていたんだけど、並んで歩けとのおおせなので従った。九才にしてはちびっこい皇帝は、私の胸より小さい。私も小柄だから、東国人の基準からいっても、相当、こいつは小さい。良いモノ食べてるはずなのに。
今、皇帝は日課の朝の散歩の途中なのだ。近衛兵の護衛ぞろぞろ、姫勇者とインディラ第三王子・インディラ忍者ジライ・赤毛の女奴隷戦士をひきつれて、先日、魔族襲撃のあった庭園とは違う庭園を歩いているのだ。
勇者一行は私以外みんな、武器を所持している。私は丸腰だった。が、いざとなれば剣を呼び寄せられるのは皇帝も知っているので別に不審に思われていない。どころか、背にあの大きな剣がない方が抱きつきやすくていいなとかぬかしている。
「姫勇者ラーニャ……許す、予の手を握ってもよいぞ」
頬を染めながら、何言ってやがる、このクソガキ！　あんたが私と手を繋ぎたいんだろうが！　拳骨を落としたいのをかろうじて我慢して私は、とびっきりの笑顔を浮かべた。
「喜んで、皇帝陛下」

内々の事なのだが……
次代国王たるガジュルシンが、義姉と『結婚を前提とする関係』

を結んでくれないかと皇帝にもちかけたのだ。
勇者である義姉は世に平和をもたらすまで女性として生きる事はできない。が、心から皇帝を慕っている。せめて、皇宮にいる間は、女性としての夢を義姉に見させてもらえまいか？　と。
ようするに婚約者ごっこをしてくれって頼んだわけだ。H抜きの。
私にベタ惚れの皇帝がOKしないわけがない。
口やかましい摂政ドルンや侍従長も、さほど文句をつけてこなかった。賄賂でも配ったのかしら？　皇宮中がごっこ遊びに付き合い、私を皇帝の婚約者として扱う。常にそばに居るのをなしくずしのうちに認めさせてしまった。
まあ、先日、魔族襲撃があったばかりだしね。婚約者の姫勇者が皇帝を警護するってもっともらしい理由づけができたわけだけど……このうすら寒い婚約者ごっこも、今日で五日目。今のところ、魔族の襲撃はなし。早いとこ、やめたいわ、本当……
外朝では所作の一つ一つにまで伝統がつきまとい、内廷でも皇帝の行動は侍従長が管理し移動は全て『方違え』をふまえシャイナ神官の先導がつく。
一緒にいればいるほど皇帝が憐れに思えてくる。九つのガキのくせに、真の自由な時間など一分もないのだ。
ただ、私との婚約ごっこのおかげで、皇帝はほんの少しだけ自由になれた。内廷での衣冠がかなり簡素なものとなったのだ。
魔の脅威が去るまでの間、皇帝も走れる格好でいていただきたい、皇帝の象徴（シンボル）である重い衣装のせいで身じろぎすらできぬまま皇帝が殺されるのも、動けない皇帝を守って義姉が亡くなるのも、両国にとって望ましくない結末だ、ってガジュルシンが摂政や侍従長達を説得したみたい。伝統にこだわりまくるドルンが譲らなかったので政務の時の衣装は今までのままらしいけど、内廷での普段着はこちらの要求を汲んでもらえたわけだ。
政務以外の時間、内廷で最も軽い外着――格闘の授業の服でずっと過ごせる事となり皇帝はご機嫌だ。頭の冠もたいして飾りがつい

ていない。散歩中、突然、走り出したりするのも、体が軽くなって嬉しいからなんだろう。こいつがチビなのって六つから、重たい衣装に上からも横からも押さえつけられてたからかもね。

「姫勇者ラーニャ、そなたといると毎日が楽しい。全てが輝いて見えるぞ」

それは私のおかげじゃなくって、体が軽くなったからじゃない？

そうは思ったけど、あえて指摘する必要もあるまい。にこにこ笑って走る活発な姿は年相応で、かわいい。

皇帝の婚約者の義弟であり次代インディラ国王であるガジュルシンは、義姉の為にと、あれやこれやと侍従長に相談し、摂政ドルンを交えて持参金がどうのって話を進めてるらしい。

偽装婚約に何故そこまでするんだろう？　今日も、ガジュルシンは外朝に行ってドルンや大臣達と交渉している。シャオロンとついでにアーメットもその場に同席させて。シャオロン同席はガジュルシンの精神安定の為で、そこにアーメットが加わったのはシャオロンの役をアーメットに継いでもらいたいからなのだそうだ。理由を聞いてもあいかわらず何だかさっぱりわからない。

「来た」

アジンエンデの声に、私は頷きを返した。赤毛の戦士アジャンの娘である彼女は、魔の気に敏い。魔が具現化する前に接近を察知できるのだ。この前の襲撃も彼女が真先に魔を察知し、ガジュルシンに結界を張れと指示したみたいなのだ。

剣と妙に通じ合わない限り、私には黒の気はわかんない。けど、彼女が来ると言うのなら来る。

今日あたり襲撃があるはずと、ガジュルシンは言っていたが、その通りになったわけだ。

私は皇帝の手を引き、バカでかい義弟のもとへとひっぱった。
庭園の樹木より黒い気が立ち上る。
ゆらゆらとのぼる瘴気。
そこにあるものに憑依して現れる魔界の住人。
怯えて抱きついてきた皇帝を、私はしっかりと抱きしめた。
木やら草やら岩やらに憑依したモノが、黒い津波のようになって私達に向かってくる。
私達を飲み込む瞬間、それは四散し、形を保てず消えうせる。
ガジャクティンが張った聖なる結界によって。
近衛兵達全員と私達を覆うサイズの結界だ。迫りくる闇のような魔に対し、結界内はきらきら光っている。インディラ神のご加護にあふれているのだ。
ジライが近衛兵達にできるだけガジャクティンのそばに集まるよう指示を出す。結界サイズが小さくなるほど、術師の負担が軽減されるからだ。
しかし、近衛兵のうち何人かは、結界内のきらめきに包まれたまま苦痛にうめき、消えていった。肉の一片も残さず、空にのまれるように消滅したのだ。
「殺されたのか……？」
と、問う皇帝に私は簡単に答えた。
「浄化されたのよ」
皇帝が、びっくりして私の顔を見る。
「魔族だったのか……？」
「そう。近衛兵の中にもいっぱい紛れてたのよ。この聖なる結界の内では魔は形は保てない。外側から触れるのも、魔には無理。この中にいれば安全よ」
私は皇帝の背中をポンと強く叩いた。
今、無駄に背の高い義弟はしかめっつらで、一生懸命、呪文を唱えている。そのデカい右手に握りしめている魔法道具（マジック・アイテム）から能力を引き出し続ける為に。

ガジャクティンが掌に握っているのは、ガジュルシンの魔力がこめられた水晶だ。水晶にこめられたかなり大量の魔力を利用して、ガジャクティンは強力な結界を張っている。魔族浄化効果すらある聖なる結界。信仰心も魔力も乏しいガジャクティンでは本来は張れない結界だ。

それを一時間ほど張ってもらう。結界があれば、魔に襲われる危険はない。

とはいえ、長すぎるとガジャクティンの体が危険だし水晶が割れる恐れもある。一時間以内に全ての決着をつけなきゃいけない。

近衛兵の中にまだ大魔王教徒が紛れてるかもしれないから、アジンエンデにはここに残ってもらう。皇帝と術にかかりっきりになっているガジャクティンの護衛役として。

「ここで待ってて。悪玉を全部やっつけてくるから」

「姫勇者ラーニャ……」

皇帝は青白い顔で、私を見つめた。

「又、そなたは戦うのか……」

「ええ。魔を滅ぼすのが私の使命だもの」

皇帝が悲しそうに私を見つめる。

「シャイナ国の頂点にあるべき者が妻を守る事すらできぬとは……守られるばかりの我が身がなさけない」

こら、誰が妻だ。

「ガキは素直に守られてろ」

私は笑った。

「背伸びはしないの。今、できる事だけをしっかりやりなさい」

「……この結界の内でそなたの帰りを待ち、そなたの無事と武勇を祈る」

「うん。でも、できれば、私だけじゃなく勇者一行全員の無事と武勇を祈ってくれる？」

「あいわかった。そなたの言葉通りにいたす」

「頼んだわよ」

私はもう一度、皇帝の背中を強く叩いてから、彼の体をその辺にいた近衛兵に託した。

アジンエンデとジライに目で合図を送り、走る。高々とあげた右手に、私の相棒が宙を渡ってやって来る。目の前に獲物はたくさん。『勇者の剣』は身震いせんばかりに喜んでいた。

＊　＊　＊　＊　＊

敵が動いたのは僕のせいだ。

僕が敵の準備した計画を根本から無意味なものにしてやろうと動いたからだ。

ラーニャには偽装だと嘘をついたが、皇帝との婚約は正式なものだ。まだ仮婚約の段階だが、心話で連絡をとって父上からも許可を得ている。

皇帝の婚約者の身内という立場を得た上で僕は、昨日、シャイナ皇家にこの上ない名誉があると伝えたのだ。

姫勇者の義弟である僕は、在家でありながらインディラ寺院の代表、しかも大僧正様の直弟子だ。僕の義姉の婚約を知った大僧正様がいたく感激され、義姉とその伴侶となるシャイナ皇帝を祝福したいとシャイナ皇宮への御幸をご希望されたと。

インディラ教大僧正様が総本山を離れられるなんてありえないとシャイナ皇宮の者はうろたえた。が、僕は歴史書を紐解ききちんと教えた。八十七年前の御幸を最後に総本山に籠られたが、大僧正様はそれ以前は歴代大僧正様の中でも最も御幸を好まれた方で、二百歳も間近な現在もたいへんかくしゃくとしておられお元気だ。移動魔法でシャイナ皇家に半日ほど滞在しても何の問題もない。

皇家の宗教がシャイナ教である事を理由に抵抗をみせた大臣もいた。が、インディラ教最高指導者だけを皇宮に招いては釣り合いが

とれないなのならば、シャイナ教最高神官長も皇宮にお招きすればよいだけのこと。両宗教の最高指導者の祝福を受けられるなんて、このうえなく幸福なご縁ですよねと僕は笑みをみせた。

それでシャイナ皇宮側は黙った。が、大僧正様のご訪問ですら困るのに、シャイナ教の最高神官長にまで皇宮を訪問されてはたまったものではないだろう。

なぜならば……

シャイナ皇宮は大魔王教徒の巣窟であり、シャイナ皇宮の内廷にはその建物を守護すべき結界も魔封じも全く存在しないからだ。

力のある聖職者が中に入れば、一発でわかる。シャイナ皇宮の内廷に聖なる守りはない。外朝からではそれとわからぬよう、うまくめくらましをかけてあるけれど。

その破壊に関与したのは、皇宮付きのペクン在住のシャイナ教神官とインディラ教僧侶だ。彼等はグルなのだ。この前の庭園の事件の後は、互いに相手宗教側が正しく結界を張らなかったせいで魔族の襲撃があったのだといがみ合った振りをしていたが、その実、互いに手を結び、なすべき仕事をせず、皇宮の実質指導者ドルンからの要求のままに内廷に本来あった魔封じを破壊していたのだ。

ペクンの両宗教団体の長の堕落は、ムジャが報告してくれた。権力者そばの聖職者は誘惑に負け、堕落しやすい。残念なことに。彼等の堕落は、聖職者にあるまじき女色に満ちた私生活からもよくわかった。

先代皇帝は病弱な政治無能者とされている。が、ジライ達に調べてもらった結果、それは摂政ドルンによって作られた偽りの皇帝像であったとわかった。

本当は、シャイナ教の信仰に篤く、知的で、植物研究に熱心な学者肌の人物だったらしい。皇宮に着いた当日、ラーニャが皇帝より送られた牡丹、半年も見事に咲き続けるあの花は亡き先代皇帝が品

種改良したものなのだそうだ。
　ドルンによって内廷に軟禁されていた先代皇帝は、趣味の植物研究をして日々を送っていた。花壇や温室や牡丹園だけではなく、庭園全体の植物を観察し庭師達の仕事を手伝ってもいたそうだ。
　そこからは推測だけれども……
　常人は呪文を読めず、複雑な術式の必要な結界の描き方がわかるはずもなく、魔法道具の効果的な設置場所も知らない。結界が正しく機能しているかなんてわからないのが普通だ。呪を破壊しても代わりに似たような模様を描いておけばバレることはない、そう油断していたのだろう、聖なる結界を壊させた者達は。
　けれども、知識人であれば神聖魔法に関する書物に目を通している可能性がある。信仰に篤ければ尚更。庭の手入れをしているうちに先代皇帝は庭園に施されている呪が狂っている事に気づかれたのではないだろうか？
　そして、摂政、侍従長、大臣、召使達……身の回りの誰かにその事を伝えたが為に、暗殺されたのではないだろうか。或いは、シャイナ教の最高神官長に非常事態だと連絡をとろうとした為かもしれないが。
　外部に異常を訴えられては困るのだ……内廷は大魔王教徒の巣窟だから。
　ここに来て二日目の朝の、シャイナ教の神官による方違えだと案内された時からおかしいと思っていた。北北東が禁忌の方向だとしても、その為だけに道を選ぶのならあんな複雑な道順にはならない。
　その後も、内廷出仕の神官達は皇帝や僕らの移動には方違えだなんだと制限を加え続けた。見せたくない場所があるのだろうとすぐ推測できた。
　ラーニャが消えた夜、既にジライは妖しげな祭壇のある部屋を見つけていた。もと大魔王教徒だったジライは、それが大魔王教のものであると断言した。更なる調査で武器庫やら魔薬倉庫やらも発見している。内廷で怪しい儀式をしつつ、反乱でもくわだてていたの

か？

内廷は、外朝が許可を与えた高貴な人物しか入れない場所となっている。シャイナ皇家の伝統で。この三年、大魔王教徒達はその伝統をめいっぱい利用して、外部の者をできるだけ内廷に入れないようにしていたのだろう。

そんな所によく勇者一行を招き入れたものだ。皇帝の強い要望があったにせよ……

聖なる結界の乱れに気づけない、大魔王教団の存在にも気づけない、無能集団とでも思われていたのか？

確かに勇者一行七人のうち五人は十代でその中心は王女に王子、世間知らずの集団だ。

でも、ジライとシャオロン様は英雄だ。あの二人の存在は大魔王教団には脅威だろう。僕が大魔王教団の者なら、あの二人は絶対に内廷に入れない。身分の低さを理由に外朝にとどめ置く。

なぜ勇者一行全員を内廷に入れたのか……？

見通しが甘いというか……計画が杜撰すぎる。

僕等がいても、正体を隠し通せると信じきっていたのか？　だとしたら、お粗末だ。

それとも……

あちらは一枚岩ではなく、上層部は混乱しているのか？　内廷の秘密を守り通したい派閥と、自由に動ける内廷で僕等を始末したい派閥、それぞれ勝手に動いているとか？

格闘の授業の襲撃も、気になる。あれは、数こそ多かったが小物魔族ばかりだったし、僕等から聖なる武器を奪ってはいたが魔法は放置していた。危機的状況に追い込みながらも、詰めが甘い……と、いうか、打開できる道をわざと与えていたような……本気で殺す気だったとも思えない。僕らがどう動くか手並みを見たかったのか？

それに、皇帝の扱いも謎だ。何故、味方にひきこもうとも洗脳しようともせず、皇帝として奉っていたのか？

敵の狙いがわからない。

しかし、動かざるをえなくなった大魔王教徒達は動く。姫勇者一行を抹殺し、皇宮の秘密を守り通そうとするだろう。

内廷をのっとっていた彼等。摂政に侍従達、召使、近衛、外朝の大臣貴族達。敵はかなりな数だ。

魔族の襲撃は予想済みだった。ふいをつかれることもなく、シャオロン様とアーメットと共にさして時もかけず、全ての魔を浄化した。

しかし、僕らとの話し合いの場にいた摂政ドルンも侍従長も僕らを襲って来た大臣達も全て……人間だった。神官職にない、ただの大魔王教徒だ。

魔族襲撃をたくらんだ者達は、ジライの忍達にあっさりと捕縛された。シャイナ外朝のまっとうな警備兵も、魔族襲撃劇の為に遠ざけられていたせいだ。ムジャ達インディラ忍者がやすやすと外朝正殿に侵入できたのは、摂政達のおかげともいえる。

捕縛した摂政達は、とりあえず異次元の牢へと送らせてもらった。彼等がガジャクティンのような時の檻に閉じ込められようが、構うものか。邪魔だから異次元に閉じ込めておく。

僕は皇宮に探知の魔法を飛ばした。

雲霞のごとく魔を召喚するなど、大魔王教の最高神官とて難しい。何処かに強力な魔がいるはずだった。

魔界との異次元通路を開き、それを維持し続け、魔界の住人達を強制的にこの世に呼び出しているものが。

黒の気は上手に消しているのだろうが……

そいつが、摂政達すら操り、皇宮を我がものにしていたのだと思う。

だが、それらしいあやしい存在はどこにもない。外朝にも内廷にも。

「ガジュルシン様」

右手に『龍の爪』を装備し、僕のすぐそばにたたずんでいたシャオロン様が何所か遠くを見つめるように頭を上げ、こう言った。
「アーメットと一緒に、ラーニャ様達と合流してください。あちらはひっきりなしに魔が召喚され続けているみたいです。ガジャクティン様、相当、結界維持に、苦しまれているはずですよ。昔、ナーダ様から、魔の数が増え瘴気が増すと結界の効力自体が弱まると聞いた事があります」
「それは、たしかに、そうですが」
シャオロン様は霊感体質とのことで、黒の気に敏い。離れていても、ラーニャ達のいる方角に魔の気が充満しているのがわかるのだろう。
「行ってください。オレはまだこっちでやる事がありますから」
にっこりと微笑むその顔から、何か芯の通った強いものが感じられた。
「……お一人で大丈夫ですか？」
思わず口に出た僕の問いに、シャオロン様は微笑まれるばかりだ。
「一人でなければいけないんです。大丈夫ですよ、オレは負けませんから」
それだけ言って、床を蹴って、開いた窓から外へと向かわれる。素早い。まるで忍のようだ。
インディラ忍者の姿のアーメットが何か言いたそうだった。僕はアーメットに静かにかぶりを振った。賢いあの方が一人が良いと判断したのなら、何らかの理由があるはずだ。外朝はシャオロン様に任せる。
ムジャに指示を与えてから、僕はアーメットを伴い移動魔法でラーニャ達のもとへと向かった。今は一刻も早く、ラーニャと合流するべきだ。

＊　＊　＊　＊　＊

オレには魔法の知識はない。

だから、現在地が、魔法の影響下にあるかどうかわからない。魔族が出現しようとしている気配を感じて初めて、その場所が魔に対して無防備なのだとようやくわかる。

ガジュルシン様のお話では、内廷とは違い外朝は、他国の王城同様、物理結界も魔法結界も魔封じも何重にも張り巡らされているとのこと。

しかし、先ほど、摂政達と話していたあの会議室は、オレ達との会合の前に結界が壊されていたようで、魔界から魔が次々に召喚された。その異次元通路は開く度にオレが爪で封じた。もうあの部屋には別世界へと繋がる扉は残っていないはずだ。

そして、これから俺が向かう先も、外朝でありながら結界が壊された場所のようだ。そこにわずかながら黒の気を感じる。小物魔族のような微々たる気だったが……それに混じってよく知っている人間の気配までするのでは無視できない。

石畳を走り、オレは外朝の南東側、門そばの水路のような人工の川へとやって来る。

水が好きなのは変わらないんだなと思うと、笑みが漏れた。

昔、彼は南東の海のそばの街を愛していた。そこで修行を積み、そこで伴侶を見つけたんだ。そこで、ジャポネの龍神湖に向かったオレを待っていてくれた事もあった。

川のそばの建物に重なるように次元通路があり、その間（はざま）に彼はいた。

黒の気を隠すのをやめるとあまりにも大量の気を放出してしまう為、自分の正体を顕示してしまう。『勇者の剣』に居場所を気づかれないように、次元通路に半ば体を埋めた格好でオレを待っていたのだろう。

「相当、高位の魔族に憑依されたみたいですね」

オレがそう言うと、彼は口元を歪めて笑った。
「なるからには一流のものに。だろ？」
そう言っておどけたように笑う。皇宮向けの顔はやめたようだ。
「ゼーヴェって奴だ、俺に憑いたのは」
「……どうしてそんな事に」
「なりゆきだ。魔族召喚の魔法陣のそばにいたら、俺んとこに降ってきやがったんだ。俺の魂はゼーヴェには魅力的だったらしい」
顔は笑っているが、その顔に明るさはない。
「ほんの半月ぐらい前のことだ……それまで俺は、ドルンの数多くいるカスのような部下の一人だった。皇帝の拳法指南役ってことになってたが……いざって時には皇帝の暗殺役も、ツボをついて半身を不随にする役もやる事になっていた。だが、今は……」
そこで言葉を区切って、彼は笑う。
「ドルン達が俺の下僕さ。笑っちまうぜ。あいつらが無能だったおかげで、俺にゼーヴェが憑いたのさ。大魔王四天王がな……」
「混ざっていますね」
オレは彼を見つめ、尋ねた。
「魔族に体を乗っ取られたんじゃない。自ら望んで体と脳を明け渡し、同化しましたね？」
当たり前だろ、と、彼が笑う。
「復讐の機会を得たんだ。棒に振るほど馬鹿じゃない」
「棒に振って欲しかったです」
オレは彼に微笑みかけた。
「道を誤った弟子を見過ごすわけにはいきません、師として、あなたの肉体と魂を魔の呪縛から解き放ってあげましょう……リューハン」
腰をややかがめ、両脚を大きく開いて『龍の爪』を装備した右手を上に左手を下に向けてオレは拳を構えた。
対するリューハンは、足をあまり開かず膝を曲げ、背はほぼ直立で、拳を構えた。

「十分だ！　十分あれば俺が勝ってみせる。すぐに勝負をつけてやるさ」

リューハンが懐かしい事を言って、ニヤリと笑う。

「できるものなら俺を浄化してみせろ、シャオロン。大魔王四天王ゼーヴェのついたこの俺に、おまえごときが勝てるかな？」

友として！　目覚めた時、そこにあるもの！

オレの生まれ育った村はもうない。
十二の夏に炎の中に消えてしまったのだ。

大魔王四天王サリエルとその配下の大魔王教徒の襲撃を受けたのだ。サリエルは、父ユーシェンの『龍の爪』を奪ったばかりか、父や兄や村の男達の遺骸に魔族を憑依させ、父達の魂の安息すら奪ったのだ。

オレが生き残れたのは、セレス様達のおかげだ。ナーダ様が瀕死のオレを治癒し、アジャンさんが大魔王教徒を倒してくれ……
セレス様が何もかも失い傷ついた子供の魂を癒してくださったのだ……

今でも鮮明に覚えている。
死の淵から戻って来たオレが最初に見たのは、セレス様の青い瞳だった。
せつなそうな、悲しそうな……泉よりも澄んだその瞳が、オレに微笑みかけてくれたのだ。
たった一人生き延びてしまった子供を元気づけようと、セレス様は笑いかけてくださったのだ。

村の仇を討って『龍の爪』を取り返し……
セレス様の従者として大魔王ケルベゾールド討伐まで共に戦い……

地上に平和が戻ってから、オレは故郷の村に帰った。

けれども、そこには何もなかった……

村が焼けてから二年の月日が流れたそこには、青々と夏草が茂るだけだった。

それから龍神湖に向かう旅の途中、オレはリューハンとアキフサに出会った。

リューハンは、オレと同じで小柄で、筋力が強くなく拳が軽かった。けれども、身の軽さと並行感覚、そして、そこにあるものを何でも利用する柔軟な発想で、自分よりも大柄な武闘家をも倒す彼にはオレも大いに刺激を受けた。

オレ達は、拳を交わし、共に技を高め合っていった。

オレが旅を終え村があった場所に帰った時に、リューハンはアキフサと共に駈けつけてくれ、そのままオレの一番弟子となって新しい村を共につくってくれた。

でも、オレはリューハンを弟子と思った事はない。村づくりの頃にはリューハンの拳の型はもうほぼ完成していたし、南拳の流れを汲む彼と父の北拳を学んだオレとでは拳法に対する姿勢からして違っていたからだ。

彼がオレを師匠に立てた理由はただ一つ……オレがユーシェンの息子だった為だ。

皇帝の御前試合十連覇を遂げた父ユーシェンは、三代前の皇帝陛下から『皇帝の私兵』という名誉を与えられ、土地の所有及び納税の義務の免除の権利をいただいていた。それは『いざという時に皇帝陛下の為の拳となる約束の下に、武闘家ユーシェンとその家族及び弟子の末代まで』認められた権利だった。

土地と言っても田舎の山のそば……オレの生家のあった場所なの

だが、『土地も家も財産も持たない貧乏格闘家には家つきの土地にタダで住めるなんて夢のような暮らしさ』と、言ってリューハンはオレの弟子となったのだ。

処世の為にオレの弟子という事にしただけなのだ。

リューハンは、年上で、世慣れていて、明るく、拳法仲間の面倒見もよかった。

弟子ではない。友だった。一緒に村を支える仲間だった。

四年前、皇帝の格闘の教師にという話をいただいた時、オレはお断りをした。『いざという時、皇帝の拳となる』約束をしてはいたが、それは有事に皇帝をお守りするという意味であり、『皇帝の教師役の栄誉を与える』などと尊大にそっくりかえってしゃべる使者に諾々と従う理由はなかった。

又、妻の預言もあった。『一年間、土地を離れるべからず』と妻が預言してからその時まだ二カ月も経っていなかった。皇宮に行くべき時期ではないと、オレは使者に答えた。

怒り狂う使者をなだめたのは、リューハンだった。『師は願かけ精進潔斎中で今は土地から動けないのです』ともっともらしい嘘をつき、『格闘家は都にも数多くおられます。他のお方ではいかがでしょう?』ともちかけ、ユーシェンの息子を連れ帰らねば役目を果たせぬと怒鳴る使者に折れ『一番弟子の自分が師の代理を務めます。一年後に、師がこの地を離れられるようになる時まで』と代役を申し出た。

オレは妻の預言をリューハンに話し、止めた。オレ一人の身だけに関わる預言ならばいい。しかし、オレが誘われるがままに向かう先が問題なのだとしたら、代役にも同じ災厄が降りかかるはずだ。行かない方が良いと。

けれども、彼は皇帝のお声がかりを拒否するわけにはいかないと明るく笑った。権力者に逆らっていては、ユーシェンの息子とその

弟子に認められている権利を取り上げられてしまうぞ、と。
妻子を連れて彼が村を去ったのが四年前、それから八カ月ぐらいで皇帝は崩御され、リューハンは新皇帝の格闘指南役となった。先代の時には格闘指南役代理を名乗っていたが、新皇帝の代からは『代理』を外すようになっていた。
オレは何度もリューハンに手紙を送った。が、返事は返ってこなかった。
皇帝の格闘指南役の地位に興味などない。何の問題もなくリューハンがその地位に就いているのならそのままの方が良いし、一年後に代役を終えたいのなら礼を言って代わるべきだ。そう思ったのだが、まったくリューハンの意思がわからなかった。
約束の一年が近づいた頃、アキフサに頼んでペクンのリューハンの家を訪ねてもらった。しかし、弟子のアキフサもリューハンとは面会かなわなかった。リューハンは皇宮の外朝に部屋を賜っているとのことで、アキフサのペクン滞在中、一度も家に戻って来なかったそうだ。
三カ月後、アキフサはリューハンの妻子を伴って村に帰って来た。新皇帝の格闘指南役となってじきにリューハンは妻リーファさんを離縁し、下級貴族の娘と再婚していたのだ。下町の薬屋で下働きをしていたリーファさんをアキフサが見つけ出し、村に戻るよう説得してくれたのだ。実家と不仲の彼女に戻れる場所は村しかなかった。
オレはリューハンに手紙を書き続けてきた。だが、今日まで一度も、返事をもらえなかったのだ。
リューハンはうまいこと出世したと、弟子達の中には陰口をたたく者もいた。アキフサはあのショウキのような顔で、そんな噂話をする者達をジロリと睨みつけて黙らせてくれている。
何か理由があるはずだとオレは信じてきた。たとえ友が闇に堕ちたように見えたとしても、オレは信じ続ける。昔も今も同じだ。それが、無能なオレができる、唯一の正しい事だからだ。

大魔王四天王ゼーヴェの力を使えば、オレを殺すなど簡単だ。魔法攻撃をしかければいいのだし、異空間に放り出せば魔力のないオレなどすぐに死ぬだろう。

けれども、リューハンは空気のある今世と変わらない異空間にオレを呼び込み、拳を構えている。

格闘勝負を望んでいるのだ。

魔族ゼーヴェとしては、本当は、オレなどより姫勇者ラーニャ様と戦いたかろう。

だが、今世に現れる魔族は、宿主からさまざまな影響を受ける。人に宿った魔族の場合、思考もそうだ。今、リューハンの望みをゼーヴェも己の望みとしているわけだ。

目の前のリューハンは、ゼーヴェでもある。

よく知った格闘の好敵手と思ってはいけないのだ。

右手に『龍の爪』、左手に妻より貰った浄化の指輪。触れられさえすれば、リューハンを浄化できる。

だが、それはゼーヴェが憑依したリューハンも同じだ。拳に魔力をこめているのだ、一撃でオレの肉体を粉砕できるだろう。

避けきれぬ方が負ける。

オレは周囲を見渡した。だだっぴろい空間。上空にも四方にも果てはなく、足元は銀色に輝いている。光源などないのに、昼間のように明るい。

足をすって、足元を確認した。平らな金属のような感触。靴のままでは滑りそうだ。

「靴、脱いでもいいですか？」

「ん？」

「せっかくの勝負をコケて終わらせたら、もったいないので」

オレがそう言うと、リューハンは緊張感がないなあとケラケラ笑った。

好きにしろと言われたので、爪を装備していない左手のみで靴を

脱ぐ。勝負前に時間ができたので、リューハンに尋ねてみた。
「何故、手紙に返事をくれなかったんです？」
「書けなかったんだ」
リューハンは笑いながら答えた。
「ペクンの俺の家ってのは、大魔王教団が準備してたもんだった。着いてそうそう、妻子はそこに軟禁状態、俺は皇宮の奴等のアジトに連れ込まれた。仲間になりゃ贅沢放題ならなきゃ妻子を殺すってベタな脅迫をされ、ずっと家に戻れなかった」
「……そうだったのですか。皇宮にあがったリューハンは全く家に帰らなくなって、そのまま離縁となったってリーファさんは言っていましたが」
「そうか……監視役の召使はごまんといたが、一応、約束通り、あいつらリーファ達には怖い思いはさせなかったんだな。よかった……」
そう言ったリューハンはほんの少しだけ、口元をほころばせた。
「……先代皇帝の暗殺には俺も協力した」
オレは左の拳を握り締めた。リーファさんが離縁されたのは新皇帝が立ってから間もなくのこと。家族の解放を交換条件に、リューハンは大魔王教団の一員となり、シャイナの民として最も罪深き行いに荷担したのだろう。
「その後、教団の女を嫁に迎えたんで晴れて俺は家に帰れるようになった。監視付きだが、一応、自由にはなったわけだ。あんたからの手紙も読める身分になったんだが……一度も、開かなかったよ。みんな焼いちまった」
「何故、大魔王教団は、最初からリューハンを仲間にひきいれる気だったんだろう？」
「皇帝の私兵だからさ」
皮肉な顔でリューハンは笑った。
「武闘家ユーシェンは皇帝の私兵……その子孫も弟子もそうだろう？　格闘教師を招いたのは、先代皇帝本人の本当の希望だったらし

い。けど、それが内廷の大魔王教徒達には目ざわりだったのさ。皇帝の味方なんざ一人も増えて欲しくないのが本音。しかも、あんたは勇者の従者だった英雄だ。あんたから昔の仲間へ、そしてエウロペの勇者様にシャイナ皇宮の悪だくみがバレちゃかなわねえから……最初から皇宮に来る格闘師範を抱きこむつもりだったのさ」

……オレのせいなのか？

「皇宮をのっとった大魔王教団が何をしたがってたか知ってるか？」

いくつか予想はしていた。が、真実は知らない。オレは静かにかぶりを振った。

「召喚魔法だ。あいつらは、現皇帝の体に大魔王ケルベゾールドを降ろそうとしてたのさ」

え？

「神代から続く聖なる血統。その上、穢れなき子供だ。生贄として最上級。皇帝陛下の体ならケルベゾールド神も満足して、降臨するだろうと考えたわけだ。大魔王の直の家来となり、新時代の到来の為に働きたかったんだとさ。皇宮には大魔王教の魔法陣が複数並んでいて、現皇帝の寝所が召喚魔法の中心部となっている。皇帝陛下のご就寝中に、大魔王降ろしの儀式がこれまで何十回も行われてきた」

「しかし……」

オレに皆まで言わせず、リューハンは愉快そうに笑った。

「そう。見ての通り、皇帝陛下はまだ人間のままだ。降ろしたかったけど、降ろせなかったのさ。術が間違ってたんだか、神官の力量が足りなかったのかは、知らないけど、な。この計画、何年がかりだと思う？　六年だ！　六年間、術は失敗しどおしで、バレそうになって先代皇帝を暗殺までしたってのに」

リューハンは腹を抱えて笑った。

「先月よその神官にケルベゾールドを降ろされちまったんだ。馬鹿みたいだろ？　シャイナ皇宮をのっとり六年もかけて召喚し続けて、あいつら、失敗しやがったんだ」

声をあげ楽しそうにリューハンは笑う。だが、その目は笑っていない。

「で、そっからは悔しがりながら路線変更さ。大魔王がダメなら四天王をと思って頑張った。俗物のあいつらは、大魔王やら四天王の配下になれれば地上の富が独占できるって本気で信じてたんだ。それで、憑代に選ばれちまったのが俺なんだから笑える。あいつらにとって、三下部下のこの俺が四天王なんてな」

狂ったようにリューハンは笑う。

セレス様の代の四天王のイグアスとゼグノスは、心に闇を抱いた人間に憑依していた。憎悪、殺意、妄執、羨望、強欲……人の心の闇を魔族は好む。リューハンの絶望と憎悪を、ゼーヴェは美味とでも思ったのだろうか。

「俺に四天王が降りたって知って、今まで威張り散らしてた奴等が俺に平伏してご指示をいただきたいってんだから笑っちまうよな。なので、四天王として命令してやったのさ。皇宮で姫勇者を討つってね。大魔王教団の悪事の証拠がいっぱいの内廷こそが舞台にふさわしいって思ったんでね」

「リューハン……」

「あんたとの感動の再会の時の魔族襲撃、あれね、俺のスタンドプレイ。ドルン達、あんたらを毒殺しようなんてつまんねえ策たてやがったから、ド派手な騒ぎを起して内廷を注目させてやったんだ。悪事の露見を恐れて、こっそりなんて許さねえ。大魔王教団らしく派手に暴れて、姫勇者様達と命のやり取りをすりゃいいのさ」

魔としてのリューハンはラーニャ様の死を願い、人としては摂政ドルン達の罪の告発を望んでいるのだ。

復讐の機会を逃すものかと、さっき、リューハンは言った。だから、喜んでゼーヴェと融合したのだと。

その相手は……彼の人生を狂わせたドルン達大魔王教団。

そして……

「あの襲撃の時、オレ、『龍の爪』を所持していませんでした」

オレは静かに友人を見つめた。
「……オレを殺しても構わないと、そう思っての襲撃だったんですか？　そこらの雑魚魔族に食わせても構わないと？」
そうだとしたら、何故、今、同じ手を使わない？
何故、格闘で決着をつけようと望む？
単にオレが邪魔なだけなら……オレが憎いのなら……魔力で引き裂けばいいものを……何故、自らの手で結末をつける事を望む？
リューハンの行動は矛盾している。
そして、その矛盾を本人も自覚しているのだろう。
リューハンは肩をすくめた。
「靴、脱いだんだろ？　そろそろ始めようぜ」
リューハンの目には、オレへの憎悪が宿っている。
怨まれても仕方がない事だ。
リューハンはオレの身代わりに皇宮に来て……全てを失った。
家族を、仲間を、格闘家としての矜持を……
全てを失い……そして四天王ゼーヴェの器となってしまったのだ。
四年前に、オレが皇宮に来ていたら……要職の者のほとんどが大魔王教徒である皇宮で、家族を人質ととられてはなす術はなかったろう。妻が自由に動けたら、外部と連絡がとれたらと、少しづつ条件を変えて考えてみたが、駄目だった。ここに四年前に来ていたら、大魔王教団の罪を告発する事すらできず、オレは謀殺されていた。
むろん、先代皇帝も救えずに、だ。
予言は絶対だったのだ。
四年前、動くべきではなかったのだ。
オレも……リューハンも……。
殴ってでもオレはリューハンを止めるべきだったのだ……
オレが友を闇に堕としたのだ……
――その決めつけは傲慢ですよ。相手は子供じゃないんです。あな

たの助言を聞きいれず、都行きを選んだのは彼です。自分の行動ゆえの堕落とわかっているから、彼はあなたを責めまいとしているのです。友の誇りを踏みにじる憐れみはやめなさい。

突然、俺の内に知らぬ思念が入り込んだ。

そして……

「後、ひとつだけ教えてください」

オレの口が意思に反して、勝手にしゃべりはじめたのだ。

「ドルン達は大魔王を降ろすのに、闇の聖書を用いたのでしょう？それは今、どこに？」

「知らん」

「降臨儀式の中心は、シャイナ神官になりすました大魔王教団幹部の神官でしたね。彼等がそのまま持ってると思っていいのでしょうか？」

「知らんと言った」

リューハンが歩を進めオレに近寄って来る。

ふっと何かが体から離れた感覚があった。

が、そんなものにかまっている暇はなかった。

オレの眼前にリューハンの右手が迫っていた。

オレは身を沈めて右拳を避け、素足で足元をすり、体を横にずらすことで続けて放たれる左拳もよけ、『龍の爪』で相手の右わき腹を狙った。

長く鋭い銀の爪は、しかし、リューハンと捉えること事はできなかった。オレがそう動くと読んでいたリューハンは左拳の突きも不十分のまま後方に飛び退っていた。

そのまま、爪を閃かせ、上段、下段で宙を切る。

爪はリューハンに届かない。間合いを正確に見切っているのだ。

オレの攻撃の癖、爪の攻撃可能範囲をよく知っているのだ。

体勢を崩した振りをしてリューハンは身をかがめ、オレの軸足を

蹴り飛ばそうとした。
だが、オレも虚をつく闘いを好む彼の戦法はよく知っている。跳躍してかわし、着地と同時に速攻へと移った。
互いに手のうちを知りつくしている友との闘い。
この四年、絶望の日々にありながらもリューハンは肉体の鍛錬を続けたのか、動きに衰えはない。以前と変わらぬ技の切れだ。
掌に魔力をこめこそすれ、魔法で動きを有利に運ぼうともしていない。あるがままの肉体で、オレに挑んできてくれる。
だから、オレも聖水も竜巻も使わない。肉体をもって彼に勝ちたかった。
オレはリューハンの拳を避け、リューハンはオレの拳を避ける。
繰り返される攻防に、オレの口元は緩む。
見れば、リューハンも笑っていた。
昔に戻ったようだ……
毎日のように、二人で組み手をして切磋琢磨した。
リューハンはオレの拳法は素早く綺麗だが、素直すぎて、動きを読みやすいと言っていた。奇抜な攻撃をとりこんではいるが、それが一連の拳法の型に綺麗におさまらず、直前で動きの流れが止まってしまっているのだ。だから、次は奇襲攻撃でくる気だな、と、リューハンにはわかってしまうのだそうだ。
やるぞと大声をあげて宣伝してからの奇襲では、効果などあるはずがない。たいていのオレの奇襲戦法はリューハンには通じなかった。
距離をとって睨み合うこと数秒。
リューハンはふいに顔を斜め前方に向け、残念そうに唇をとがらせた。
「時間切れだ……」
ずっと闘っていたかったんだけどなあと、リューハンが溜息をつき、悪戯っぽくオレに笑いかけた。
「一分後にこの異次元空間を閉鎖する。一分を、あんたにやるよ。

俺は手だししない。俺を浄化してみせな」

一分後にこの空間が消えれば、異次元に残されオレは死ぬ。

この空間を維持している術師であるリューハンを殺しても、空間が消滅し、異次元に放り出されてオレは死ぬ。

どちらにせよ、死ぬのか……

オレは笑みを浮かべたまま、リューハンに挑みかかった。右の爪、左手の指輪、接近する浄化の光を放つものから、リューハンは器用に距離をとる。

リューハンも楽しそうに笑っている。わざと大きく動いておどけたように避けたりする。

「あと、三十秒」

オレは胸元から小袋を出し、それの口を緩めると、リューハンめがけて投げつけた。中に浄化の指輪が入った小袋だ。全部の指用にと妻が用意してくれたので指輪は小袋の中に九つ残っている。

中から飛び出してくる聖なる宝石達を、リューハンは距離をとって避ける。追いかけ、オレは『龍の爪』を閃かせた。

届かない。

そんな奇襲攻撃通じるものか、と、リューハンが笑っている。

うん。オレも駄目だろうと思っていた。

「二十秒」

爪を避けられたオレは左足を高々とあげて、回し蹴りをいれようとする。リューハンはそれを受けて流そうとした。

しかし……

オレの左足に触れたリューハンの右手から浄化は始まった。

リューハンはびっくりしたようにオレの左足を見た。

靴を脱いだから、オレの足は素足だ。

左足の親指と二の指の間に、オレは指輪を挟んでいた。指輪を小袋ごと投げたのは目くらましだ。小袋を投げると同時に足元に指輪を一つ落として足指の間にはさみこみ、蹴撃での浄化を狙ったのだ。

やるじゃないかというようにリューハンが笑う。おまえにしちゃ

うまい奇襲だよと、その口が言ったように思えた。
けれども、浄化の光に包まれたリューハンの表情を目で追うことはかなわず、圧縮の始まった銀の世界は耳障りな音をたてて崩壊を始めていた。

オレは静かに目を閉ざした。

せめて『龍の爪』だけでも、もとの世界に返せないものかと思いながら。

オレは真龍に対し、祈った。
爪の振るい手となれた幸運に感謝を捧げ、今世に爪を返せず命果てる身の未熟さをお詫びして。

――祈る相手が違〜う！

ハッとして目を開けたオレは……
セレス様を見たように思った。
美しく靡く髪は黒く、オレをまっすぐに見つめる瞳は茶色いが、『勇者の剣』を右手に、何もない空間を走りオレへと向かって来る白銀の鎧姿は……お慕いしていた方そのものに見えた。
その名を声に出してお呼びしたかったが、声は出なかった。

――シャオロン、手を！

セレス様が左手をオレへと伸ばされる。
右手には爪がある。オレは左手を懸命に伸ばそうとした。
息をすることも、目をあけていることも、動くことも、全てが辛い。
周囲の気が痛く、重く苦しい。
だが、従者たる者、勇者の求めに応じなくては……

オレはどうにか手をあげ……

セレス様と手が触れ合ったと思った瞬間。

呼吸が楽になった。

「しっかりしてください、シャオロン様！」
あたたかな癒しの光がオレを包む。治癒魔法だ。
今世に戻れたのだ。
そうとわかっても、目を開けられなかった。
ひどく疲れていた……

意識が遠のいてゆく。

さっきの声はガジュルシン様だ。

そう気づいてようやくわかった。
オレを異空間から救い出してくださったのは、セレス様ではない。
姫勇者ラーニャ様だ。
『勇者の剣』から無限の力を引き出し、異次元にいたオレを探し出し連れ帰ってくださったんだ。
前に、カルヴェル様から伺った事がある。異次元空間というものは万とも億ともつかぬ世界が短時間で生み出される複雑怪奇な場所で、ちょっとした刺激で新たな空間が百も二百も生まれたり、千の世界が一度に閉じてしまう事もあるそうなのだ。
そんな空間にいたオレを正確に見つけ出すなんて……おみごとです、『勇者の剣』と一体化しておられる証拠だ。
さすが、セレス様のお嬢様。
リューハンが『時間切れ』と言ったのは、勇者に居場所を見つけられたしまったという事かもしれない。勇者が挑んでくる以上、大魔王四天王として戦わざるをえない。オレに関わっている暇などなくなったと……そういう意味だったのだろう。

リューハンとアキフサがいた。
夢なのかもしれない。
そう思いながら、オレは二人に微笑みかけた。
夢でも過去でも今でも未来でも、一緒だ。
オレ達は友人だ。
これからも、ずっと……

またいつか！　遺されていた思い！

シャイナ皇宮は混乱していた。

大魔王教徒だった摂政・侍従長・大臣達の半数以上は逮捕、内廷勤務の近衛兵も召使も大多数が大魔王教徒、内廷は聖なる守りのない無防備状態、大規模戦闘で内廷の建物の多くが半壊（『勇者の剣』がぶっ壊したんじゃないわ、魔族が暴れたのがいけないのよ！）、あの綺麗だった牡丹園も見るも無残なありさまとなり、国庫は大魔王教団に使いこまれほぼ空っぽ。

何処からどう手をつけていいかわかんないほどひどかったそうだ。

そんな中、皇帝が九才の子供とは思えないほど立派に働いているのは知っている。

お気に入りとなった格闘服に軽い冠という、たいへん簡素な格好で。内廷の修復は今は無理！　と、とっとと見切りをつけ、外朝に居を移してもいる。

残った大臣やら官僚を集めた上で彼は、インディラ国に援助を頼む事を提案したのだそうだ。

大魔王が復活した今、大魔王教徒の活動が活発化するやら不穏分子が反乱を企てるやら魔族増加の備えをするやらで、どこの国も自国だけで手一杯で、他国を援助する余裕などない。けれども、インディラは皇帝の婚約者姫勇者の生国であり、英雄ナーダ国王の国、シャイナの国情に配慮した人道的な支援を必ずやしてくれるだろう、と。

皇帝のそばには、常にガジュルシンと英雄シャオロンそれにおまけのようにアーメットがつきそっている。ガジュルシンやシャオロンが皇帝に知恵をつけてるんだろうけど……

ちょっと、待って！
誰が誰の婚約者よ！
皇帝との婚約は偽装でしょうが！

私がいくら怒鳴ろうが、ガジュルシンは涼しい顔だ。
「でも、ラーニャ、君と皇帝の婚約がなければ、援助は無理だと思うよ。今、インディラだって国庫が豊かというわけではないんだ。正統な理由がなければ大臣達だって猛反対するだろうし、父上も援助に踏み切れないよ」
「もしかして……話したの、お父様に？　私と皇帝の偽装婚約を？」
「最初にドルンに婚約話をもちかける前から、ご相談してるよ。王家の人間の婚約は、僕の一存では決められないから」
なに、それ！　無神経！　愛するお父様に、偽装婚約の悪だくみの手伝いをさせてたなんて！
「大丈夫だよ、ラーニャ。数年経ったら破談にするから」
「ど～やって！」
「貸付の条件にするんだ。シャイナが借り入れ金を返済した後にインディラ側から婚約を解消するとの密約も交わしておく。グスタフ様のお子様ヴィクトル様が『勇者の剣』の持ち手と認められるまで、君は勇者のままだろ？　結婚に話が進むまで、後、十年はかかる。それまでにシャイナ国も借金を返せるから、貸し借り無しで婚約も破棄できるよ」
「婚約解消の理由は？」
ガジュルシンは首をかしげた。
「その時、適当な理由がなければ、神のお告げでいいと思う。君は姫勇者という神秘的な存在だから、神がかり的な行動をとっても変に思われない。こちらからの口上さえきちんとしてれば、皇帝の面子を潰さないで婚約解消もできるよ」

だけど……

「よろしいではありませんか、ラーニャ様」

と、妙に上機嫌なジライがガジュルシンの肩を持つ。

「シャイナ国皇帝が婚約相手ならば、まずまず。ラーニャ様のお相手として遜色はございません。しかも、相手はラーニャ様の高貴さにひれ伏しM宣言もしております。東の大国シャイナの皇帝を、その貴き鞭にてご支配なさいませ」

いや、あんたのSMの薦めはこの際、どーでもいいから。

「実際には嫁がないってわかってるから、ジライさん、余裕ですね」

と、シャオロンがにっこりと笑う。

「大丈夫ですよ、ラーニャ様。ラーニャ様が本当に他国に輿入れなんて事になったら、絶対、ジライさんが全力で妨害しますから。自分の目の届かない外国に、ラーニャ様やセレス様をジライさんが行かせるものですか」

まあ、そうね……よくわかってるじゃない、うちの変態のことを。

「シャイナ国の為に、しばらくの間でいいです、皇帝陛下とご婚約という形をとっていただけないでしょうか？」

別に、偽装婚約を続けるのは構わないのよ。でも……

「皇帝と二人っきりで話をしたいんだけど……セッティング頼める？」

政務を終え、食事も入浴も着替えも終え、後は寝るだけとなった皇帝と一時間ばかり面会する事にした。皇帝の寝室の前の私室で。

婚約者同士とはいえ道徳的にはどうよという時間であり場所であるが、忙しい皇帝とゆっくり話すのなら寝る前しかない。『勇者の剣』を振るえる限り私の処女性は明らかなわけだから、まあ、いいか。

召使は全て下がらせた。扉の前やら隣室やらに警備の兵士が残ってるけれど、それは国のトップである以上、仕方のない護衛だ。

皇帝は私に同じソファーに座るよう命じ、熱っぽい視線で隣の白銀の鎧姿の私を見上げている。今は寝間着だから、頭の重たい冠もない。

「二人っきりであるな、姫勇者ラーニャよ」

護衛は空気か何かのように無視しての発言だ。

「いや、許せ、ラーニャ女王様であったな……政務が忙しくそなたとの時間がとれなくて寂しかった。顔を見せてくれて嬉しいぞ、ラーニャ女王様。そなたがそばにいてくれると、予は生きる気力に満ちてくる」

「頑張って皇帝のお仕事してるみたいね」

「うむ。予はシャイナ国の頂点にある者だ。国が混乱している今こそ先頭に立って働かなくてはいけない。何ができるか何をせねばいけないのか誰をとりたてればよいのか、まだわからぬことばかりだが、そなたの義弟と我が国の英雄の助けもあり、どうにかこなせている」

ガジュルシンの命令でムジャ達シャイナ国にいるインディラ忍者は、皇帝の為に働く事となった。人材発掘やら法整備やら税制度の見直しやら緊縮財政やらの為の必要情報を集め、シャイナ国中の現在情報も収集し、ガジュルシンを通じ皇帝に伝えているのだ。

シャイナ国にもむろん諜報機関はあるんだけど、ドルンの息がかかりすぎてて、そこもすっかり大魔王教団化されちゃってた。だもんで、幹部クラスはみんな牢屋行き。残った下っぱ達をムジャは配下に入れて再教育しつつ働かせている。いずれは、彼らにこの国の諜報機関を任せる為に。

「インディラとの心話での話し合いも来週には終わる。遅くとも来週末にはインディラより執政が来るであろう」

莫大なお金を貸す分、政治的介入もするわけだ。けど、お父様がなさる事だ。インディラの国益の為じゃない。シャイナ国の立て直しができる優秀な人格者を送ってくるだろう。

「執政が来たら……そなたは旅立つのだな」

政治的混乱がおさまるまでと、ガジュルシンは皇宮にとどまる期間を決めていた。皇宮が安定したら世直しの旅に戻る。

「そなたが居らぬ皇宮など……太陽の消えた蒼天のごとし、だ」

うるうると目をうるませて、おチビが私を見つめる。

まあ、かわいいっちゃかわいいし、けなげないい子よね。でも、言うべきことはきちんと言っとかなきゃ。

「あんただって、神話は知ってるでしょ？　確か、シャイナにもあるわよね。太陽を手に入れようとして燃えちゃった男の話」

「うむ」

「太陽は地上に縛りつけておけない。そうでしょ？」

「……うむ」

「私は姫勇者だもの。この地上の闇を祓う光として戦わなきゃ。私は、あんたのそばにはずっといてあげられない」

「……わかっている」

「それから」

泣くかなあと思いながら、言葉を続けた。

「大魔王討伐後も、あんたのもとへは帰らない」

「……」

「あんたと私の婚約は形だけのものよ。嫁ぐ気はないわ」

皇帝の東国人らしい細い眼が、さらにうるうるする。だけど、皇帝は泣きだす事も、癇癪を起す事もしなかった。大きく深呼吸をしてから、私をまっすぐ見つめた。

「この婚約、インディラ側にのみ解消の自由がある。そなたが望む時、望む形で婚約は解消される。予からは不服は申し立てられない。借入金によって変更となった婚約の条件は、インディラ国第一王子よりきつく教えられた」

「うん」

「だが、今は婚約者である。そうだな？」

「うん」

「まだ数年の間は、予はそなたの婚約者だ。そうだな？」

「そうね」
「ならば、予はその猶予の間に、良き皇帝、良き男となろう」
ん？
「ラーニャ女王様、予はまだ子供だ、これから大きく変わる。数年後には、そなた好みの男性に成長できるかもしれぬ。婚約解消前に、何度か予に男としての機会を与えてはくれまいか？　そなたごのみの男となれるよう己を磨いておくゆえ、たまにでよい、予を試しに来てはくれまいか？」
あら、あら、あら、あら。
まあ、まあ、まあ、まあ。
……かわいいじゃない！
ちょっぴりグラっときちゃったわ！
私のお父様への深～い愛には及ばないけれど、あんたのはけなげさはかわいいとは思う！
「お友達ってことでよければ、遊びに来てもいいけど」
皇帝の顔がパッと輝く。
「どのような形の訪問でも構わぬ。そなたと、又、会えるのであれば」
おおおおお、かわいい！
「それに、ラーニャ女王様はSで、予はMだ。友としても、深き友情の絆で結ばれている。婚約が解消されたとしても、我らの絆は永遠だ。そうであろう？」
「友達でもいいの？」
「むろん……できれば、そなたの婚約者であり続けたい。その為の努力もする。ラーニャ女王様、教えてはくれまいか、そなた、どのような男を伴侶としたい？　そなた好みの男とはどのような型（タイプ）だ？」
どんなって……
そりゃあ、あんた……

＊　＊　＊　＊　＊

「わがままを言ってすみません」

頭を下げられたシャオロン様に、ガジュルシンが慌てて頭を振る。

「とんでもありません。本来のお立場でのお務めを望まれて当然です。今までありがとうございました。シャオロン様のご助力がなければ僕達はここまでこられませんでした。本当にありがとうございます」

ガジュルシンと一緒に俺も、シャイナの英雄に感謝の意をこめて頭を下げた。

執政の来朝が本決まりし、俺らも数日後には皇宮から出発できるってなったんだが……

シャオロン様は勇者一行を離れ、皇帝の私兵として皇宮に留まられる。まあ、シャイナの英雄としちゃ、幼い皇帝をほっぽっておけないよな。あんなにちっちゃいのに、国の責任者としてけなげに頑張ってるんだから。

ここ二週間近く行動を共にしたんで、皇帝も誠実で控え目でそれでいて鋭い助言をしてくれるシャオロン様を、すっげぇ信頼するようになった。

ナーダ父さんが選んだ執政が無能なわけないけど、皇帝には信頼のおける自国の家臣も必要だ。シャオロン様が皇帝の支えになるのはいい事だと思う。

ちょっぴり寂しくて、かなり不安だけど。

シャオロン様から、俺は平常心を保つよう指導されてきた。

『ガジュルシン様にとってあなたは大切なご友人です。けれども、公式の場においては、あなたはガジュルシン様の影だったのでしょう？　常に貴人につき従う影として、己の感情に溺れず、ガジュルシン様に同調しすぎず、心を穏やかに保つのです』

シャオロン様がおっしゃるには、魔力の強い人間は周囲の影響を

受けやすいんだとか。周囲に悪意をまきちらす人間がいたりすると、精神的なダメージをモロに被り、それが体調の悪化に繋がってゆくのだそうだ。

インディラでガジュルシンが政務見学の度に倒れまくってたのも、そのせいだろうとシャオロン様は教えてくださった。

周囲の攻撃的な悪意に負けない、穏やかな精神に満ちた場を提供することこそ、影の役目ではないかとも。

実際、俺は見学して驚いたんだ。インディラじゃ体調は崩すわ大臣達とまともに話せないわだったガジュルシンが、シャイナじゃ摂政達を手玉にとって交渉してたんだから。シャオロン様がそばにいてくださると落ち着いて話せるんだと、ガジュルシンは言っていた。

つまり……馬鹿がムカつく発言をしても、俺は怒ってはいけない、不快に思ってもいけない、ガジュルシンの身を思いやって不安になってもいけない、ひたすら穏やかな気分で精神を安定させて聞いていなきゃいけないんだ。

俺が感情を昂らせてもガジュルシンの不調を煽るだけだ。けど、俺が無心なら、ガジュルシンは落ち着いて話せ体調も悪くならない。

俺はガジュルシンの為に、余計な感情を持ってはいけないんだ。

精神操作（マインド・コントロール）は忍者にゃ必須なんで、平常心を保つ修行は俺も積んじゃいる。

でも、ガジュルシンが侮辱されても怒っちゃ駄目なんだ。その内容を記憶した上で、ひたすら平常心ってのがな……難しい。

友情と仕事とは別！　と、思ってもうっかりすると、俺は感情的になってる。

何を言われても、何をされても、笑みを絶やさないシャオロン様って……すごいよな……何処でどんな精神修行をつんだんだか……

こっから先に行く国の王様やらお偉いさん相手にガジュルシンがまともに話せるかどうかは俺にかかってるんだ、しっかりしなきゃな。

シャオロン様がメンバー落ちする以上、これからは交渉ごとはガ

ジュルシンほぼ一人の仕事になる。
親父がな……まっとうな交渉も出来る人間なら良かったんだが…
…脅迫しか出来ないんだよな。『邪魔な奴は暗殺』なんて主義の人
間、表に出せん……
姉貴もガジャクティンも単純馬鹿だし、アジンエンデは南にうと
い。そして、俺はヒラのインディラ忍者。
駄目だ、どう考えても、ガジュルシンしか偉いさんと交渉できる
人間がいない。
でなきゃ、女装した『姫勇者』の俺か。
何にせよ、平常心修行つまなきゃな。
平常心を保つ極意、何かないか、後でシャオロン様に聞いてみよ
う……

＊　＊　＊　＊　＊

ムジャからの報告に我は顔をしかめた。
「今度は溺死体か」
ペクンの街中に突如、死体が現れる。転送魔法で通りのまん真ん
中に送りつけてくる、悪趣味な男が居るのだ。
首と胴の離れた者やら、大岩に潰されたようにひしゃげた者やら、
全身から血が無くなった者やら、焼死体やら、腐乱死体やら、さま
ざまだったが……
全て、シャイナの大魔王教団の幹部だった。皇宮に潜み、捕縛前
に逃走した奴等だ。どいつもこいつも体はひどく破壊されていたが、
顔だけはまともに残されていた。わざわざ復元して送ってきたもの
もあった。殺害した事を我々に親切にも教えてくださっているのだ。
死体の数は九。
皇宮にいたシャイナ大魔王教団幹部は、これで全滅した。

いや、かっさわられてしまったというべきか。
僧侶ナラカに。
「で、確認はとれたのか？」
我の問いに、ムジャは渋い顔でかぶりを振る。
「いいえ。わかりませんでした」
思わず舌打ちが漏れた。

皇宮をのっとっていた大魔王教団に『闇の聖書』があったか否かはわからずしまいだ。

初代ケルベゾールドは初代四天王それぞれに、この世界で使える闇の力を記した本を与えた。暗黒魔法のアンチョコ。ケルベゾールドが生み出した暗黒魔法の全てがそれに記されている。
『闇の聖書』と呼ばれる四冊の魔法書を、大魔王教徒どもは仲間を殺し奪い合ってきた。なにせ、大魔王の聖書は人の手では決して写せない魔法の書。文字にした途端、文字が具現化して逃げてしまうやっかいなシロモノ。暗黒魔法の秘儀を手に入れたい者は、四冊しかない貴重な本を命がけで手に入れねばならぬのだ。
聖書の中身は皆、同じだが、最初の所有者の四天王の格づけから、一の配下グラウスの本が一の書、二の配下ディウスのが二の書、三の配下ゼグスのが三の書、四の配下ウインゼのが四の書と呼ばれてきた。
そのうちの三の書は、三百年以上前に消滅している。三の書を使って邪龍を操っていた神官ごと、七代目勇者ロイドが『勇者の剣』で分断したのだ。三の書は現存していない。
二の書は、五十五年ほど前、先々代勇者ランツがシャイナの大魔王教団から奪った。おそらく、それは、現在、僧侶ナラカが所持しておる。

残るは一の書と四の書。
大魔王降臨の儀式は、闇の聖書を読み解いた者が行ってきた。当代に、大魔王を降ろした者の所にも聖書はあるだろう。

闇の聖書を、何ゆえ、僧侶ナラカは追っているのか……

シャオロンから聞いた話から推測するに、ゼーヴェと対戦中だったシャオロンの口を使ったのは僧侶ナラカであろう。
大魔王教団幹部を拷問して在り処を吐かせ、奴は聖書を手に入れたのか？

中身が知りたければ、手持ちの聖書を読めばいいこと。
欲しいのは情報ではなく、本そのものなのだろう。
闇の聖書を集めて何をする気なのだ、あの僧侶。

我は四の書を利用したことがある。
獣の毛皮のようなもので覆われた表装の、黒い瘴気を吐き続ける禍々しき本。触れるだけで手が腐ってゆくように思えた。
あんなものを集めてどうする気なのか……

皇宮に乗り込んだ狙いが、闇の聖書であるのなら……

三冊、集めた時、あれは動くだろう。
まだ手元に揃っておらぬのを祈るばかりだ。

＊　＊　＊　＊　＊

別れの場所は、外朝の正殿前の広場。
皇帝は最近の服よりちょっぴり豪華だけど、首も手足も動かせる立派な衣装で私達を見送ってくれた。
その左後方に控えているシャオロンも、にっこりと笑みを浮かべ私達に手を振ってくれた。彼にしては豪華な衣装のそれは、亡くなった弟子の遺品だそうだ。あのおヒゲのリューハンって人の礼服だ。つまり、大魔王四天王が着てた服なんだけど、シャオロンはまったく気にしていない。公式の場で着られる服は持ってないんで形見分けにもらっときましたと、爽やかに笑っていた。
あのリューハンって人のこと、普通に話すのが不思議。魔族に堕ちてたのに。しかも、四天王に。何故、軽蔑しないんだろう？　四天王が着てた服なんか、私だったら燃やしてるわ。まあ……四天王の力の大半を封印して格闘で勝負をつけようなんてバカな真似をしたのは、人間っぽかったとは思う。シャオロン相手には人の情が残っていたのかもしれない。
でも！　悪は悪！　魔族は魔族よ！　魔族に堕ちた人を友人扱いするなんて、おかしいと思う。
皇帝の右後方にはインディラから来た執政、その他の新大臣達も、私達の旅立ちを見送ってくれている。
私、ガジュルシン、ガジャクティン、アジンエンデは、それぞれ一頭に、ジライとアーメットは同じ馬に騎乗している。皇宮を離れたらガジュルシンはインディラ総本山に戻ってしまうので、彼の乗馬はアーメットに譲る事になっている。
ペクンの街中を姫勇者一行が行進したら大衆（ファン）が詰めかけて大混乱になるんで、宮廷魔法使いに騎乗のままペクンよりやや南の街道に

送ってもらう。
宮廷魔法使いが呪文を詠唱する。移動魔法の光が私達を包む。
「勇者一行の無事と武勇を祈る」
涙を必死にこらえているおチビに、私は手を振った。又ね、と。

街道は大きな川沿いの針葉樹の森のそばにあった。背後を振りかえって見たけど、ペクンの街も皇宮も見えない。
宮廷魔法使いが去り、ガジュルシンも自分の分身を置いて移動魔法で消えてしまった。
アーメットはガジュルシンの分身が乗っている馬の背に乗り、手綱をとった。分身と二人乗りだ。
勇者一行は南東へと進む。
シャイナで大魔王教徒討伐を続けながら、ジャポネに渡る船が出るシャングハイを目指すのだ。
「ラーニャ、振り返るの七度目だぞ」
え？
私、振り返ってた？
アジンエンデがちょっぴり下品に笑いながら、馬を寄せて来る。
「そんなに婚約者との別れがつらいのか？」
「ンなんじゃないわよ」
でも、何か気になるのよね……
何かし忘れてきたような……
「早めに次の街へ行きましょう」と、ジライ。
「ラーニャ様の旅立ちが知れ渡りましたら、追っかけも増えましょう。移動できるうちに、少しでも前へ」
「そうね」
覆面から覗くジライの目はニコニコしてる。
「なにせ、旅立って一月半で四天王を二人までも倒した神速の勇者様にございますからなあ。シャイナでのラーニャ様人気は止まるこ

とを知りません」
　追っかけなんかいらないのに。うんざりした気分でいたら、『勇者の剣』を背負った無駄に大きい義弟があっけらかんとこう言いやがった。
「でもさ、エーネを斬ったのはアジンエンデだし、ゼーヴェを倒したのはシャオロン様だよ。ラーニャ、勇者のくせに、まだ大物魔族を一匹も倒してないよね」

（……）

「……ジライ」
「は」
「……そのクソ生意気な義弟に口のききかたというものを教えてやって」
「承知！」
　忍の体術で、ガジャクティンの馬の首と鞍の間に一瞬のうちに移動すると、そこに立ったままジライは、勇者をおとしめる発言を従者が口にするのはいかがなものかの説教を始めた。
　突然、重量が増した馬は驚き暴れだし、視界を塞がれたガジャクティンはさすがに焦っていた。ふ～んだ、殴られないだけありがたいと思いなさい！
　なにさ！
　シャイナじゃ、ちょっとだけ、巡り合わせが悪かっただけよ！
　次の四天王は私がぶった斬ってやるわ！

＊　＊　＊　＊　＊

『緑の手』の異名を持つ大魔法使いエルロイ。
彼の魔力に満ちた庭園には、一年中、世界中の春夏秋冬の花々が咲き乱れている。

シルクドの中央砂漠にある彼の城を訪れる者は、滅多にいない。
砂漠の真中に緑の楽園が存在している事を知る者は、ほんの一握りだ。魔法使い仲間のごく一部と、三百年前よりそこにあると言われている伝説の緑の楽園に憧れる植物学者達。この地上の全ての植物が揃っていると噂されるその城を目指し、目的地にたどり着けず砂漠に果てた者も少くない。

ある日、エルロイの城の門の前に、苗が置かれていた。魔力で文字がしたためられた羊皮紙の手紙の束と共に。
手紙は死者の念を記した代筆である事を断った上で、とりとめもない死者の思考を綴っていた。
死者は植物学者のようだった。異常成長をする植物を発見しそれが土地と水に起因するものだと気づいた彼は、魔法の基礎知識すらないのに、それが魔力の流出によるものだという真実に辿り着いた。
彼は理想の植物を作る為に、計算に計算を重ね、魔力が集積する場所を絞ってゆき、植物の栽培を続けた。
けれども、それは後一歩というところで理想に届かなかった。植物学者は畑違いの魔法関係の本を読み続け、流れ込む魔力量を増やす方法を探した。しかし、何所にも彼の求める知識は載っていなかった。
何事も一人で研究をするという信念を曲げ、彼は身近にいた魔法使いに相談した。
庭にある多くの魔法道具、結界の配置、その全てを記した図画を

見せ、何処からどれほどの魔力が漏れ、何処へ流れていっているのかを彼は説明した。

理想の植物を作る為には、魔力の奔流が三～五倍必要だ。現在、流れている魔力量を増幅する術はないものか、魔術師協会の大魔法使いを内廷に招き尋ねたい、仲介を頼めるか？　と、魔法使いに相談した。

その翌日、植物学者は死者となった。

突然の死。

何故、警護の者に殺されるのかわからないまま、彼は命を失った。

しかし、彼は己の死にはあまり頓着しなかった。

それよりも、気になることがあったのだ。

己の理論が正しかったのか否か？

血を流し切り刻まれ果てる瞬間にふと意識にのぼったせいだ、計算が間違っていたかもしれないと。

最後の思念が死後も頭から離れず、彼は命を無くした場所で同じことを何度も繰り返し続けた。

魔力流動計算だ。

エルロイは植物学者の執念に感心した。

正確な魔力分析は、魔法素人とは思えない。常人には感知できぬ『魔力』の流れを、植物の成長状況、土地の扶養分の減衰から、正確に読み切っているのだ。

植物学者の模写から、破壊されていた魔法道具や結界の種類は知れた。

そこより流出する魔力量、四散する量、逆に自然界から吸収する量を計算し、エルロイは死者を褒め称えた。

あなたは正しかった、と。

後、三倍の魔力があれば一年中、枯れぬ花が咲き、
後、五倍の魔力があれば永久に咲く花が生まれただろう。
大魔法使いエルロイとは全く違った方法で、あなたは永久の花を
生み出す方法を見出した。

あなたは天才だ。
志半ばで今世を去られたことを残念に思う、と。

あなたの研究を私が受け継ごうとエルロイが告げると、羊皮紙に
書かれた文字が少しづつ消えてゆき、全ての文字が消えた後に羊皮
紙自体も千切れ崩れ去った。

後には、牡丹の苗だけが残った。
吸収した魔力によって半年の間花を咲かせ続ける低木の苗だけが、
エルロイのもとに残された。

またいつか！　遺されていた思い！（後書き）

次回からは新章『サムライと忍者と巫女の国』に入ります。
姫勇者一行、東の島国ジャポネに入国。
抜け忍のくせにジャポネに戻ったジライ、何やらたくらむガジャクティン、悩み事のあるアジンエンデ。そして、巫女さんです！
巫女さん登場ｗ　ナラカも出ます。

＊　＊　＊　＊　＊

明日からムーンライトノベルズに『女勇者セレス――ジライ十八番勝負』をアップします。六・七番勝負をアップしたらラーニャちゃんに戻る予定ですが、両話とも長い話なので、次の更新、間があきます。すみません。

ちょっとおさらい！　人物紹介なの！

姫勇者ラーニャ

私の事！　十八歳。黒髪、茶の瞳。ぴちぴちの処女！
ナーダお父様とセレスお母様の長女という事になってるけど、
残念ながら、本当の父親は変態忍者なの！
インディラ国第一王女として後宮で育ったから、箱入り姫！
大好きなお父様をM奴隷とする日を夢見て姫勇者として活躍中！
でも、『勇者の剣』は普段、成人男性体重分ぐらいクソ重い！
魔族との戦闘中は、持ってること忘れるくらい軽いのに～
私、共感能力者（エンパシー）で『勇者の剣』と相性がいいみたい。
剣から常時、神秘の力を引き出せるって言われたけど、
制御の仕方は、全然、わかんない。勝手に発動する感じ。
シャイナじゃ『シャオロンがピンチ！』って感じて、
異空間まで行けた。けど、どうやったかよくわかんない。

忍者アーメット

私の弟！　十六歳。金髪、青い瞳。
第二王子だったけど、十歳の時、病死って事にして忍者になった。
ちょっと鈍感だけど、我慢強くて、根は素直。
私の影武者として、たまに『姫勇者』になってるわ！
両手剣の腕前はヘボいのに、『勇者の剣』の重量が並の大剣並って
どういうこと？　ずるい！　男ってだけでヒイキして！
魔族戦では『虹の小剣』を使う事が多い。
ガジュルシンの影を務めてて、二年前からべったりだったんだけど
旅に出てから急接近中……義兄のヤバイ視線に気づいて
ないみたいだけど、あんた、ピンチなのよ……

第一王子ガジュルシン

私の義弟！　十六歳。黒髪、青い瞳。アーメットより一ヶ月月上。
十歳にして帝王学まで修めた天才で、魔法も超天才らしい。
でも、気弱で病弱。大魔法使い並の魔力があっても、
魔法を使いすぎると昏倒しちゃうんじゃねえ……
世継ぎの王子のくせに、大伯父ナラカを止めるんだって
はりきっちゃってインディラ寺院代表として一行に加わる。
普段は分身を一行に同行させてて本人はインディラの総本山に
いる。移動魔法ですぐに合流できるからいいけどね。
お偉いさんとの交渉は代わってやってくれる。
ブラコンで、実弟に過保護、ちょっと甘やかし気味。
最近、確信した。こいつ、アーメットに気があるみたい。

第三王子ガジャクティン

私のくそ生意気な義弟！　黒髪。青い目……
べっ……別に、お父様そっくりじゃないんだからね！
こっ……声だって、そんなに似てないわ！
大人の渋みがない、ただのガキ！　勇者おたく！
十四歳だけど肉体は十六歳以上で、お父様なみに体が大きい。
『勇者の剣』から愛されていていつも空気並の重さとか、
武闘全般が上手いとか、私より年下のくせに世界中の言語が
ペラペラとか、魔法も使えるとか、いろいろ腹立つ奴。
『勇者の剣』は持てるけど、振るえない。
カルヴェル様から借りた『雷神の槍』を使っている。
最近、アジンエンデと仲がいい。

アジの現王（？）アジンエンデ
赤毛の戦士アジャンの娘。赤毛、緑の瞳。ケルティ人。十九才！
きつい顔立ちの美女！　現在は女奴隷戦士（設定萌えっ）！
ハリの跡継ぎハリハラルドと離婚した×イチ。だけど、処女。
もと舅のハリハールブダン上皇から贈られた、
呪の赤い鎧四点セットのせいで半裸状態を強要されている。
ので、その上から服を着ている。恥しい外見のわりには
優秀な鎧で、たいていの攻撃はふせいでくれる。
『極光の剣』に選ばれた理由をずっと探していた。
行方不明の父を探す為にハリの村を離れ私達と旅をしている。
父譲りのシャーマン能力も高いらしい。

忍者ジライ
変態忍者。私のストーカー。白子。『ムラクモ』の使い手。

格闘家シャオロン
お母様のもと従者。シャイナ人、黒髪、黒目。霊感が強い。
『龍の爪』の使い手。閑村の村長さん。妻帯者。
にっこり笑顔の似合う爽やかな人なんだけど、なにげに
人使いが荒いし、伝えるべき事はきつい事でも遠慮なく言う。
現在は、シャイナ皇宮で皇帝の私兵として、
お子様皇帝を助けている。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

『勇者の剣』

不死身のケルベゾールドを葬れる唯一の武器。
初代勇者ラグヴェイがエウロペ神より賜った聖なる武器。
話す事こそできないが、剣には思考能力や感情があり、
好き嫌いの激しい気分屋らしい。
超我ままで意地悪。恋する乙女や非処女が嫌いって
あんた一体、何様よ！　私と性格がよく似てるって、
僧侶ナラカは言ってたけど、絶対、嘘だと思う！
魔族が大嫌いってところだけは似てるけどね。
勇者ラグヴェイの子孫しか剣を振るえない。
勇者の子孫じゃなきゃ触れただけで雷を落とされるが、
大魔術師カルヴェル様と僧侶ナラカ、その身内だけが
例外で剣に触れて運ぶだけならＯＫとなってる。

『ムラクモ』
ジライの刀。『小夜時雨（さよしぐれ）』とジライは呼んでる。
非資格者だと刀を鞘から抜けない。
正しい持ち手が振るうと、刀身から聖なる水の飛沫が飛ぶ。

『雷神の槍』
ガジャクティンの両手槍。カルヴェル様からの借り物。
槍の名手以外の人が触れると雷撃を放つ。
先端を向け『雷よ、来たれ』と叫ぶと対象に雷を落とす。

『極光の剣』
アジンエンデの両手剣。
アジの部族王が代々受け継いできた、神との契約の証。
非資格者が柄に触れると抵抗する。掌を焼いたり、

雷を落としたり。聖なる武器って性格悪いのばっか。

『虹の小剣』
お母様がカルヴェル様から結婚祝いにいただいた小剣。
私かアーメットが使うことが多い。
装備条件は美貌！　美しくないと鞘から抜けない。

『龍の爪』
シャオロンの爪武器。右手用のみ装備している。
左手用の爪はジャポネの龍神湖にある。
龍神湖の龍と共鳴できると爪が振るえるらしい。
精神を集中すると爪から、聖水を放てたり、
竜巻を生み出せたりする。

『聖王の剣』『エルフの弓』
カルヴェル様所有の聖なる武器。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

十二代目国王ナーダ
もとインディラ教大僧正候補！　現在は国王！　四十九歳！
落ち着いた黒髪に、理知的な青い瞳……
名君として民から慕われていて、信仰心に篤くて、
武闘僧時代と変わらない輝かしい肉体で、魔法も超一流で、
芸術にも理解が深くて、誰にでもお優しくて、

包容力にあふれていて、とても涼しげでお美しいのに……
お母様のM奴隷なのよ！　あああ、もう素敵！
大魔王ケルベゾールドを倒したら、絶対、お父様と
愛あるプレイをするんだから！

もと女勇者セレス
後宮のお立場はお父様の第一夫人だけど、本当はお母様がご主人様。
愛をもって鞭をふるう女王様なの！　インディラの真の支配者！
ジライが第一の奴隷で、お父様もウシャス様もお母様の奴隷！
金髪、碧眼で、その……女王様スタイルがよく似合うスタイルをしてらっしゃるわ。早く私もああなりたい……
お母様も、昔は『勇者の剣』のわがままにふりまわされていたみたい。
お母様も共感能力（エンパシー）者だけど、私の方が能力が高いらしい。

第二夫人ウシャス
ガジュルシンとガジャクティンのお母さん。M奴隷。
万事控えめの良き妻、良き母で、お父様との仲もいい。
お父様好みのあまり凹凸のない体型……そ、そうよね、胸なんか別に出てなくてもお父様の目さえ楽しませることができればいいのよね……ううう……

第四王子ガジュヤーマ
一番下の義弟。八歳。ウシャス様と一緒に後宮にいるわ。

学者リオネル
私の教育係。今はエウロペに戻ってグスタフ兄様の
病気を治療する方法を調べている。
木製の定規で机を叩くのが癖で、やたらガジャクティンと仲がいい、
嫌ぁな勇者おたくだったわ……鼻眼鏡をしてた。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

大魔術師カルヴェル
お母様の神聖魔法の師。十二代目勇者の曾おじい様と、
十三代目勇者お母様の従者となって二度も大魔王を倒したのよ。
ホホホと笑うのが好きな、当代随一の大魔術師様。
ガジャクティンの肉体が十六歳になったのは
カルヴェル様が失敗したせいらしいんだけど、何をどう失敗したんだか
私は知らない。赤毛の戦士アジャンのことでいろいろ動いている。

赤毛の戦士アジャン
もとお母様の従者。本名アジスタスフニル。四十六歳。
赤毛、緑の瞳のちょっとかっこいいオジ様。
アジ族に伝わる両手剣『極光の剣』の使い手だったんだけど、
左腕を失って振るい手の資格を失ってしまった。
神魔の器になれる優秀なシャーマンの為、彼の肉体が大魔王に
奪われると、私が大ピンチになるみたい。
現在、行方不明で、異次元空間にいると思われている。

勇者グスタフ
お母様のお姉さまの子、私の従兄弟。二十四歳。侯爵家当主。
『勇者の剣』より認められた『今世の勇者』だったんだけど、
勇者病にかかり指先から黒い模様が現れ始めている。

ヤンセン
お母様のお父様！　つまり、私のおじい様！
ちょっとお父様に似てて包容力にあふれる素敵なオ・ト・ナ。

勇者ランツ
曾おじい様。『勇者の剣』から最も愛された、
勇者史上最強の勇者だそうで、共感能力（エンパシー）者。
お母様が三つの時に亡くなった。

僧侶ナラカ
勇者ランツのもと従者で、お父様の伯父なんだけど、
今は魔族。でもって、大魔王かもしれない。
すっごく髪が長くて、いけ好かないヤサ男だった。
声はお父様にそっくり。

老忍者ガルバ
お父様と、お父様のお母様、僧侶ナラカに仕えた忍者。
お父様が即位してすぐに亡くなった。ムジャのお師匠様。
ジライに『ご老体』と呼ばれていたらしい。

忍者ムジャ
インディラ王宮付き忍者の副頭領。
非常識なジライに振り回されている、かわいそうな常識人。
知らない間にシャイナに来てて、そのままジャポネまで
ついて来るみたい。忍者頭も副頭領も国をあけてていいの？

インディラの大僧正
インディラ教団のトップ。二百歳近いって本当？
お父様がすっごく尊敬してるから、絶対、とっても偉い方。
ガジュルシンのお師匠様。
インディラの総本山に籠りっぱなしで外に出ないみたい。

ハリの部族王ハリハールブダン
ケルティの上皇様。渋くて素敵なんだけど、ちょっと変態。
『極光の剣』と対になる『知恵の指輪』の所有者。
カルヴェル様の魔法の弟子で、世界の三本の指に入る
大魔法使いなんだそうだ。

シャイナ国皇帝
あれ？　そういえば名前、何だっけ……
私の婚約者ってことになってる、九才のおチビ。
シャオロン達の助けを借りて、国の立て直しをがんばっている。
出会ってすぐに私の魅力に心酔し、M奴隷宣言をした、
なかなかみどころのある子供。

情報屋アルダナ
　ユーラティアス大陸一（いち）の情報屋。表の商売は魔薬屋。
アーメットを気にいったらしい。
男に好かれやすい弟だなんて、姉として心配だわ……

忍者ヤマセ
　東国の忍の里の上忍。ジライの知り合いらしい。

サムライ　カズマ
『ムラクモ』の正当な所有者。

巫女ミズハ
『破魔の強弓』の振るい手タカアキの妹。ミカドの従兄弟。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

四天王エーネ
　シャイナ女性の体をのっとっていた。
アジンエンデに斬られて今世より消滅。

四天王ゼーヴェ
　シャオロンの弟子リューハンと同化していた。
シャオロンに浄化されて今世より消滅。
（シャオロンとリューハンの話は『女勇者セレス』の
『風花』参照だ、そうだ）。

王様が二人？　抜け忍は大忙し！

ジャポネには王様が二人居る。
西の都キョウのミカドと、東の都オオエのショーグン。
なんで二人いるのか、よくわかんない。
分割統治をしてるわけじゃない。
神の子孫のミカドがジャポネで一番尊い存在で、ショーグンはミカドを守る戦士長なんだそうだ。
だけど、実質、国を支配しているのはショーグンらしい。
じゃ、国王と摂政みたいなものかしらと思ったんだけど、そういうわけでもない。ミカドの仕事は、ショーグンを任命する事とこの国の暦やら神事を司るだけで俗事には関わらないらしい。
それなら、神官長と国王かしら？　と、思ったのに、ミカドは聖職者というわけではないってガジュルシンの分身に言われた。
ジャポネっの風習とか身分制度とか、変すぎて理解できない。
昔、この国についてもリオネルから習ったんだけど、もう忘れた。
ようするにあれよね、王様が二人いる、どっちも偉い。だから、両方にご機嫌伺いしとけばいい。そういうことよね。

シャングハイからの船はジャポネの西南の端にあるナガンサに着いた。
そこで入国手続きやら何やらを一日ですませ、そっからジャポネの船でオオエを目指すのだそうだ。
西南にいるんだから、まずは西の都キョウを目指せばいいんじゃないの？　と、思ったんだけど、それだと礼儀にかなってないのだそうだ。
先にショーグンに挨拶をしてショーグンの許しをいただいてから、ジャポネで最も高貴なミカドに拝謁する。それが正しい順番なのだ

そうだ。

めんどうくさい国だなあ、もう。

姫勇者一行は、私、ガジュルシン、ガジャクティン、アジンエンデ、アーメット、それとインディラ忍者のくノ一のセーネの六人。セーネはジライの部下の一人で護衛任務のうまい中年のくノ一。普段は、兜に口布のインディラ忍者スタイルだけど、素顔はなかなかの美人。

ジライはいない。

ジライはシャイナに残り、ジャポネには入国していない……と、いう事になっている。表向きは。

実は先行して入国しているのだ、副頭領のムジャと一緒に。

抜け忍で『ムラクモ』の振るい手のジライが、普通にジャポネに入国するといろいろとマズい。

まず、東国忍者の里の問題。忍の里は、抜け忍は面子（メンツ）をかけて殺す事にしている。だから、ジライが一緒だと、滞在中ずっと姫勇者一行はジャポネ忍者の襲撃を受ける事になってしまう。

次に『ムラクモ』の所有権の問題。『ムラクモ』は三代目勇者の従者のサムライがミカドから賜った刀。んでもって、代々のその家の家長が『ムラクモ』を管理してきた。

なのに、その刀を、今、何故か忍者のジライが振るっている。

ジライの持ってる奴、どうも盗難品らしい。

ジライの刀こそが本物となったら、インディラ国としては、王宮付き忍者頭であるジライにサムライに返還しろと命じざるをえなくなる。

本物とわかれば、だが。

現在、サムライの家にも『ムラクモ』がある。そちらはすり替えられた偽物なんじゃないかって疑いが、二十年前からあった。

冒険活劇本『女勇者セレス』に、ジライが『ムラクモ』の使い手と描かれているせいだ。

『ムラクモ』は有資格者でなければ、鞘から抜く事すらできない聖

なる武器。サムライの家からは五十年以上、有資格者が出ておらず、現当主カズマも『ムラクモ』が抜けない。

抜けない以上、こちらこそ本物！　とは言い難いけど、抜けないのは自分達の力量のせいかもしれない。手元の『ムラクモ』が本物で、ジライの刀は『ムラクモ』と性質のよく似た他の聖なる武器の可能性もあった。

なので、サムライの家は、この泥棒め！　と、ジライを非難してるわけじゃない。盗難届も出していない。

でも、どちらが本物か真贋を見極めたいと、ず～～～と思っているわけだ。ジライがインディラ国の王宮付き忍者頭となってから、毎年、王宮にジライとの面談を求める手紙を送り続けてきている。それをお父様がうまくのらりくらりとかわしてきてくれたんだけど……

ジライがジャポネに入国しちゃったら、逃げようがなくなる。衆目の場でジライの刀こそ本物となったら……インディラ王宮付き忍者って立場上、正当な持主をぶったぎって黙らせて逃走ってわけにもいかないしねえ……

現在、お父様の指示で、ムジャがジライを拉致している。東国忍者の里とカズマと極秘裏に会談し、波風をたてぬよう話をまとめるそうなんだけれど……そんなうまくいくものなのかしら？

何にせよ、ストーカーがいないのはいい事だ。

就寝中や着替え中やおトイレ中やお風呂タイムで覗かれる心配がないしね！　よくも覗いたなって（私のとばっちりなんだけど）、アジンエンデが怒って剣を振りまわすこともないし。

私もアジンエンデも、ジャポネ語はちんぷんかんぷんだ。

でも、護衛役のくノ一のセーネがいつも一緒に居てくれる。通訳してくれるし、ジャポネの奇怪な風習も解説してくれる。

セーネはやさしくて真面目なおねーさん。美人だし、一緒にいて

楽しい。
夜はアジンエンデと三人で同じ畳部屋に寝る。船旅の間も、ずっと一緒に行動するのだそうだ。なんかちょっと楽しみ。
このままジライが帰ってこなくても、私としては、全然、困らない。全然、不自由じゃないもの。
あんな変態忍者どうなろうが知ったこっちゃない。
ただ……
姫勇者の従者としてあるまじきことをしてないか……
姫勇者の従者のくせに、怨みを持った奴にうっかり殺されるなんてみっともない真似してないか……
それだけが心配。
それだけが、ね！

＊　＊　＊　＊　＊

「ほんにようございましたな。両陣営にとって良きお話をインディラ国からいただけましても、三年前までは無理でした。忍者ジライのジャポネ入国などありえぬ事。頭領の命に服し、我が忍の里は一丸となって抜け忍ジライを討伐したでしょう。どれほどの被害が出ようとも……里の面子（メンツ）は守らねばなりませんからな」
そこまで言ってから、皺の刻まれた柔和な顔で兄弟子は微笑まれた、
「しかし、現頭領シラヌイ様は、無用な争いも、効率の悪い戦闘も好まれぬ理知的なお方にございます。裏の世界で生きる忍者同士、争うことなく、それぞれがそれぞれの領域で、より一層、繁栄していきましょうぞ」
「かたじけのうございます、ヤマセ様」
副頭領ムジャが兄弟子に対し深々と平伏し、我も頭を下げた。

今、我はジャポネのサムライの姿。カツラを被り、染め粉でジャポネ人の色に肌を染めてもいる。

ムジャはインディラからの観光客の姿、下級貴族のような身なりだ。

対する東国忍者側はヤマセとハンシロウ。現頭領の幹部の中でも信任が厚い、上忍二人だ。二人とも大店の主人のような格好じゃ。

今、我らは、オオエの料理茶屋で対面している。十畳ほどのその部屋には、芸者も給仕の者も居ない。インディラ忍者のトップと東国忍者の幹部がおるだけだ。

むろん、部屋の周囲は東国忍者の者が固めておるが。東国忍者との衝突を避け、更に外縁で待機するよう部下達には命じている。

争いとなる事は、まず、ない。

交渉は、もうまとまっている。今日は顔見せ、そして、我(われ)が頭を下げ『東国忍者の里に対し、寛容を感謝する』態度を示す為の茶番の会合なのだ。

国家予算的な金額を用意して、インディラ国は抜け忍ジライの命を東国忍者の里から購った。

その金は、ナーダの私的な財産――亡きご老体の一族が受け継いできた古代王朝の遺産の一部から支払われた。現在、その莫大な財宝はムジャが管理している。

追い忍に命を狙われる危険はなくなったのだが、それはあくまで秘密裏の決めごと。

忍者の里としては、表だっては抜け忍は見逃せぬ。一人許せば後に続く者が増え、抜け忍を始末できぬとあっては裏社会への示しにならぬ。

つまりは、現在、忍者ジライはジャポネにはいないと、里は知らぬ振りをする。それ故、我(われ)が正体を比する限りはジャポネにおっても、命は狙わぬ。だが、忍者ジライがジャポネに居ると世に広まれ

ば、話は別。抹消にかかる。殺されたくなくば、その存在を匂わす行動をとるな、とっととジャポネから出て行けという事だ。

ヤマセ兄弟子から頂戴した杯を、我は飲み干した。

上忍ヤマセは、初代『白き狂い獅子』の内弟子の一人、我にとっては兄弟子だ。里に居った頃は、ほんに、世話になった。

我(われ)が里を抜けてから初めての、実に二十年ぶりの再会じゃ。

兄弟子は年をめされ、体にだいぶ脂肪をたくわえられた。その恰幅の良さといい、人あたりの良さそうなお顔といい、泰然とした物腰といい、変装通りの大店の主人に見える。

忍者らしからぬ外見だが、見かけ通りの人物などではない。

武の腕は正直さほどではないが、情報収集・分析能力の高い、人心を掌握する術に優れた忍者だ。里の影の実力者の一人なのだ。

現頭領のシラヌイも、兄弟子の後押しがあったればこそ頭領となれた。先代頭領には我を含め男児が多かったのだが、我以外、傑出した忍者は居らなんだ。我(われ)が里を抜けた後、跡目争いは揉めに揉め、跡目候補どもが長い間、醜い争いをしていたのだ。

兄弟子が我が義弟シラヌイを推した理由はよう知らぬが……無能ではなく、且つ、兄弟子の望む里の改革に協力の意志を示したゆえであろう。

下忍・子供・老人の待遇改善と中忍選抜に規定をもうけること、兄弟子の改革はその二柱だ。

里の者の命を軽く扱わせぬこと、無能を中・上忍とさせぬこと……初代『白き狂い獅子』が望んだことだ。師匠(せんせい)の魂を兄弟子は継いでおられる。

里を捨てた不肖の弟弟子(おとうとでし)としては、まぶしすぎる兄弟子だ。

「ジライ様、ジャポネにはどれほどご滞在のご予定ですか？」

ニコニコと笑いながら、兄弟子が尋ねてくる。

我の今の身分は、インディラ王宮付き忍者の忍者頭じゃ。

一枚岩の里とは違い、インディラ忍者の頂点は一つではない。王宮付き忍者、寺院付き忍者、インディラ忍者の里、それぞれが別の頭領をたてている。

だが、頭領は頭領。我と対等に口をきけるのは、里では忍者頭シラヌイのみ。兄弟子はシラヌイの配下として、我には敬語を使われる。

「姫勇者様次第じゃな」

再び注がれた酒を飲み干し、我は嘆息した。

「勇者様のお心なぞ、凡人にはわからぬわ」

「さようにございますな」

にこやかな兄弟子に対し、もう一人の上忍ハンシロウの笑顔は実がない。兄弟子に比べ、役者が落ちるようだ。

「なるべく早く去ぬるようにはいたす。又……」

我は視線を刀掛へと向けた。そこに、我が愛刀『小夜時雨』がある。

「可能な限り、『ムラクモ』は封印する。やむをえず抜刀した折は、その場より漏らす口はなきようにいたす」

誰ぞに見られたら、その口は封じる。

忍者ジライがジャポネに居るなどという噂は広めない。

それだけは確約しておかずばなるまい。

「是非、そのように願います」

その後は歓談という形になった。が、ハンシロウはほとんど口をきかず、我もあまり話す方ではない。

兄弟子がその場を仕切り話題を提供し、ムジャが相槌を打つ形で食事と歓談は続いた。

時間の無駄だ……

はようラーニャ様のもとへ戻りたい……

じゃが、今は、ムジャには逆らえぬ。こやつこしゃくにも……我が弱点を押さえおったのだ。

ジャポネ渡航前に、こやつ、懐から出して見せたのだ、我から叛

意を奪う指令書を……

『忍の里との交渉と『ムラクモ』の正式な持主との話し合いは、ムジャに一任します。彼が話をまとめてくれるわ。その二つの話し合いが終わるまで、あなたはムジャに絶対服従すること。どんな指示にも従いなさい。　セレス』

その後、正式な命令書ですとムジャは、ナーダ直筆の命令書を見せたが、そのようなものはどうでもいい……

セレス様から直々にご命令いただいては……逆らえぬ。

ムジャがシャイナでの仕事をクルグにおしつけて皇宮を離れたことも、『姫勇者ラーニャ』の執筆をサボっていることも、勝手に交渉のお膳立てをしおったことも、全て腹立たしい。が、今は文句は言わぬ。

まずはジャポネで自由に動ける身とならねば。

「しかし、おまえは変わらないねえ」

ハンシロウが中座した折、兄弟子は楽しそうに小声でおっしゃった。昔と変わらぬ口調で。

「サムライに変装しているせいもあるが、二十代でも通るぞ」

それは言いすぎであったが、とりあえずは礼の言葉を伝えておいた。

「滞在中、姫勇者一行をこっそり覗かせてもらうよ。おまえの娘と息子が見たい。さぞ綺麗だろうねえ」

ラーニャ様とアーメットが我の子である事はインディラでは後宮の者しか知らぬ事だが……まあ、東国忍者の里の情報収集能力からすればバレていて当然だ。

「里でのおまえへの風当たり、今はさほどでもないんだよ。先代が亡くなったおかげだけれど……昔から、内心、おまえに喝采を送っている者も少なくないんだ」
「む？」
「だって、痛快じゃないか。東国忍者が、インディラ忍者組織をのっとって頂点に立つなんて。しかも、インディラ王家に東国忍者の血まで入れてしまったんだ、インディラへの最高の侮辱だ」
ムジャはそっぽをむいている。私はこの話は聞いていません、どうぞお好きにお話くださいという態度だ。
「基本、おまえは国の防衛しかしないから、こちらから絡んでいかない限り、忍の里の商売の邪魔もしないしね。その上、今回、莫大な身代金をインディラ王宮からぶんどってくれたわけだし、里での心証はますます良くなるだろう」
「ありがたいことですな」
「里とおまえの配下と、今後は良好な関係を築いていけると思う。まあ、里の者もいろいろだから、すぐにもというわけにはいかないけれど、ね」
そう言ってから兄弟子は胸元から、木の細長い小箱を取り出された。
「今日、こういう形で、おまえと会えて良かった」
兄弟子が膳をよけられ、我が前へと進み、我に差し出すように、木の小箱をそっと畳の上に置かれる。
「ここならば部下達が覗きまくっている。私があやしげなモノを渡したんじゃないって、皆の目が保障してくれる。今なら渡せる」
兄弟子が、我の前で蓋を開けた。髪の毛の束が入っている。細く黒い髪の束。カモジのようだが。
「おまえの妹の遺髪だ」
兄弟子が静かに微笑まれる。
「おまえの手に収めてはくれまいか？」

アスカは八年前には亡くなっていた。
その数年前より消息は知れなかった。忍の里に籠っている人間の情報では、情報屋に頼んでも満足に買えん。だが、亡くなったのはわかっていた。八年前の盆に、顔を見せたゆえ。
セレス様以外のおなごを抱いて欲しいとアレの魂が願ったので、その通りにしてやった。
心残りは無くしてやった。
もはや輪廻の輪に入っておるはずじゃ。
「彼女は私が看取った」
意外なことを聞き、眉をしかめた。
「先代頭に願って、十年前に妻としてもらいうけたんだよ」
「は？」
さすがに聞き返してしまった。
「兄弟子が？　妻？　しかもアスカをですか？」
兄弟子は稚児趣味を公言なさっていた方で、里中の美童・美少年と懇ろになっておられたはずだが……
「おまえの大切な妹だったしね」
照れたように、兄弟子が笑われる。
「頭の家から払い下げられると聞いたのでね……放っておけなかった」
「……」
そういうことか。忍としてもおなごとしても働けなくなったゆえ、頭から捨てられたわけか。買取先次第ではアスカは十年前に無残に亡くなっていたということだ。
「ありがとうございます……兄弟子に救っていただけたのなら、アレも穏やかな晩年を過ごせたことでしょう。兄として心よりお礼申し上げます」
兄弟子は静かに頭を振られた。
「アスカは最期までおまえに会いたがっていた。おまえに送っても

らいたい」

ハンシロウが戻るまで、木箱は受け取らなかった。予想通り、中を改めたいとハンシロウは願った。ハンシロウが箱を不作法に触り、束ねられたアスカの遺髪の間に指を入れる。

弟弟子に対し兄弟子が何ぞあやしげなものを渡しはしないか、疑っておるわけだ。

我でも兄弟子でもなく、ムジャがハンシロウを睨んでいるのがおかしかった。ご老体に似てムジャは人がいい。遺品を手荒く扱うハンシロウに不快を覚えているのだ。

ハンシロウから渡された木箱を手に取って、中のものを見つめ、そっと手に取る。

アスカとの対面も、ほぼ二十年ぶり。

ずいぶん小さく、軽くなったものだ。

＊　＊　＊　＊　＊

オオエの唯一の西国風の高級旅館に、私達は泊まる事となった。

そこからショーグンのお城の門まで、徒歩十分ぐらい。畳のお部屋は外国人には不評なので、外国からの高貴なお客はこの旅館に泊まるのが慣例なのだそうだ。

国賓級のお客様用の豪奢な三間続きのお部屋に通される。が、ベッドのある部屋よりも何よりも、共通語が従業員に通じる事のが私は嬉しかった。

アジンエンデと、くノ一のセーネが召使って事で同じ部屋に泊まる。アジンエンデ用に別にお部屋を取ろうと思ったんだけど、同室の方が護衛しやすいし、南の習慣はよくわかんないから一人部屋じ

ゃない方がいいと断られた。
明日の朝、お城まで行く。ショーグンに御挨拶をして、今後の事をちょっと相談するだけの登城だ。『姫勇者』役はアーメットにやってもらう事になっている。私は忍に変装して気楽な立場で城を見る。
分身と入れ替わったガジュルシンは、さっそくあれこれ仕事を始めるようだ。アーメットと今、部屋で何か話し合っている。
武術バカの義弟は、中庭で武術鍛練を始めた。そうと知っているのに、アジンエンデは私と居る。武術鍛練に付き合わないの？　って聞いたら、行かないと言われた。
「あの馬鹿と喧嘩でもしたの？」
シャイナでは、よくガジャテクィンの鍛練に付き合っていたのに。
「そういうわけではない。が、今はおまえと居る」
変なの、と、思ったけど、ちょっと考えて、ああそうかと気づいた。
ジライが居ないからだ。
普段は、私にべったりとあの変態が付きまとっている。護衛はジライに任せておけば大丈夫と思って、アジンエンデは別行動をしたりしてたんだろう。
「私にあんま気をつかわなくても大丈夫よ。危機になれば、『勇者の剣』が飛んでくるし」
「だが、あの剣も万能ではない」と、アジンエンデ。
「エーネの初撃では、剣は動かなかった。あの忍者が身を持って防がなければ、おまえの体中に穴が開いていたろう」
それは……そうかもしれない。
あの時は、私も白銀の神聖鎧を着ていた。でも、アレはアジンエンデの赤い魔法鎧に比べるとお粗末な性能なのだ。
アジンエンデの鎧は物理攻撃も魔法攻撃も、不浄なる魔族の攻撃も防ぐ。
だけど、私の神聖鎧って物理ダメージを多少やわらげてくれるだ

け。すっごく軽くて着てても全然蒸れないのは有難いんだけどね。
神聖防具ってのは、鋼よりも硬く、絹よりも軽く、熱や冷気から装備者を守り、邪を退け、魔力を防ぐスグレモノのなんだけど……どれほどの守護力を見せるかは装備者次第なのだ。
信仰心、精神、肉体、その全てがすこやかでなければ、鎧は真の性能を発揮しない。今、あんまたいした防御力が無いのは、多分、私に信仰心が欠けてるせい。精神と肉体のすこやかさには自信あるもの！
「忍者が帰ってくるまで、おまえは私が護衛する。この地上の救い手を守るのが従者の役目だ」
アジンエンデは真面目だ。北方ケルティ人で南の言語も風習も全然知らないのに、私達についてきて、従者の務めを果たそうとがんばっている。『極光の剣』の使い手として。行方不明の父親、赤毛の戦士アジャンを探す娘として。
「ラーニャ様」
声と共にインディラ忍者が、ふっと部屋の中に現れる。
もう！
移動魔法並に唐突！
アジンエンデもびっくりして両手剣に手をかけてるじゃない、斬られても知らないわよ、あんた。
私は慣れてるからいいけど。
「何の用？」
私は床の上にかしこまる忍者に尋ねた。インディラ忍者装束なんで、素顔が隠れてて誰だかわかんない。
「実は少々、お願いが……」
そう言って顔をあげた。声と兜と口布の間から見える目から判断するに、たぶん、ムジャ。……あれ？　ムジャが何でここに？
目的地には、すぐに着いた。

私が泊ってる西国風高級旅館から、歩いて五分ぐらい。
ジャポネ風の宿屋。
一般庶民や下級武士が泊まるような感じ。清潔に掃除されてるけど、あまり宿泊料は高そうじゃない。
宿屋の前に立ってこんな所に泊ってるのかと思ってたら、突然、背後に知った気配が現れた。
頭巾で顔を隠した、着流し姿のサムライ。腰の大小は見慣れたヤツ。『ムラクモ』と小刀。
私の気配を察して、宿屋の中から出て来たのだ。
私に対し軽く会釈してから、ジライは容赦のない目を頭巾から覗かせジロリとムジャを睨んだ。
ムジャはインディラ風行商人の格好で、私は西国人の商人の娘風だ。二人ともどうあがいてもジャポネ人にバケられないから、旅の商人風の格好をしている。けど、護身用に『虹の小剣』は持ってたりする。
「きさま、かような場所に何故、ご案内した？」
見るからに不機嫌そうだ。声も冷たい。
「いいじゃない、私があんたに会いたかったのよ」
私の声に、ジライが意外そうに目を細める。
「私に会いにいらしたのですか？」
「そうよ。話があるの。あんたの部屋でもいいし、どっか外でもいいから二人っきりで話せるところに案内して」

私とサムライ姿のジライが並んで歩く。そのだいぶ後ろを、ムジャとアジンエンデがついて来る。護衛の為に。
小柄だけど働き者のオオエの人々が行きかう通りを、私達は縫うように歩く。
ジライは無言だ。
何か変。

いつもは私をやたら褒めちぎったり、私の目に入るモノを尋ねる前からアレは何だソレは何だと解説したり、いかに私を愛しているかを滔々と語ったりするのに。

東国忍者の幹部との面談の後からジライが変なのだと、ムジャは言っていた。正しくは叔母さんの遺髪を貰ってからだそうだが。

『脱走しようとしません！　ラーニャ様命の頭領です、姫勇者一行がオオエに近づけば、私の監視の目をかいくぐり、ラーニャ様のもとへ走られるはずなのに！　セレス様の書きつけがあっても、今までの頭領なら私にバレなきゃいいって、絶対、脱走してます！　罠を多数配置し、手だれの部下達に監視させ警戒していたのですが……頭領は五日もの間、ずっと宿に大人しくしているのです！　おかしいです！』

いや、まあ、待機命令中に動かないのは普通なんだけどね、本来は。

心ここにあらずって感じでボーッとしている。明日はカズマとの面談なので、頭領に活をいれてはもらえませんか？　と、ムジャに頼まれたわけだ、私は。

ジライは私を橋のたもとの河原へと連れて行った。

大きな川だ。遠くに荷を積んだ舟が見えたが、河原の近くには船着場が無いんで人影もなく静かなものだ。

「で、お話とは？」

むぅ。そんなものはない。

面倒くさいから単刀直入に言おう。

「明日、カズマってのと会うんでしょ？」

「はい」

「なら、命令よ。みっともない真似すんじゃないわよ」

「む？」

「昔はどうあれ、今、『ムラクモ』はあんたの剣よ。この世界の決

めごととか、その武器の歴史とか、どーでもいいわ。その武器が気に入ってるのは、あんただもん。誰が何と言おうが、その武器の振るい手はあんたなのよ。歴史にあぐらをかいてるサムライなんぞに渡すんじゃないわよ」

「ラーニャ様……」

「あんた、私の従者なんだから、聖なる武器、ずっと持ってなさい。あんたが戦力ダウンしたら、私が迷惑なのよ」

むぅ？　私が命令している間に、頭巾から覗く目が変わってゆく。いつもと同じ感じになる。ニコニコ笑っているような、そんな目。

「承知」

声まで何か嬉しそう。怒鳴って命令してやると、喜ぶんだから、本当、駄目な変態だわ。

「じゃ、私、帰るから。その前に叔母さんの遺髪を見せて。ジャポネ式に手ぐらい合わせてあげるから」

「叔母さん……」

「叔母さんでしょ？　あんたの妹なら、私にだって血縁よ。叔母さんだわ」

「なるほど……」

フッと目を細め、ジライが笑う。

「確かに、さようにございますな」

「叔母さんって、前、あんたが言ってた人？　胸が、その、着物向けだって言ってた？」

胸が小さいとは言いたくない……私の胸、こいつの家系からの遺伝じゃないかって思うのよね。

「さようにございます」

懐から髪の束をジライは取り出した。直接、胸元に入れていたのか。

「ラーニャ様、よろしければ、もう少し、ご一緒していただけませぬか？　今日、送ってやろうと思っておったのです。少々、臭いがよくないのですが、灰となり消えるまで共に立ち会っていただけれ

ば嬉しゅうございます」

遺髪持って帰らないのか？　と、聞くと、何故、インディラなぞに持って帰るのです？　と、逆に聞かれた。

何で灰にするのか？　と、問うと、魔族に利用されたくありませぬと言われた。

せめて灰ぐらい拾えばいいのにと言ったら、拾っても使い道がありませんとの答え。

やっぱり、ジライは変だ。

「この五日、共にいてやりました。浮気はせず、アスカの事だけを考えてやったのです。だから、もう良いのです」

亡くなったのって、妹よね？　恋人じゃなくって……

やっぱ、変。ジライは変だ。

王様が二人？　抜け忍は大忙し！（後書き）

忍の里では中・上忍のみが家を持て、女性を家に置けます。部下と自分の性欲処理の為と家事をさせる為に端女（はしため）を複数置くのが普通ですが、家主専用の女性――妻を抱える場合もあります。家主の継嗣は妻から生まれた子供がなりますが、端女の子供でも家主が認めれば継嗣となれます。妻の待遇は家主次第、その寵愛が無くなれば、端女に落とされたり、他家に売りに出されます。

ジライの兄弟子のヤマセは、ヤシロの妻の長男。父より中忍の位を継ぎ、一族の直接の上司である上忍ミカサにとりいり彼の死後にその役を継いでいます。

ショーグンとの謁見！　第三王子の逃亡！

正直、疲れた……

ショーグンとの拝謁を終えて、西国風高級旅館に戻って来たところ……

ガジュルシンに結界を張ってもらって、私の部屋で『姫勇者ラーニャ』様ことアーメットと衣装を入れ替えする事になってたんだけど……

気力がない。

昼ご飯を食べる気にもならない。

ベッドに直行。

「俺、着替えるぞ。鎧とかここに置いとくからな。姉貴は寝間着に着替えとけよ」

わかった、わかったと、アーメットにはおざなりに答えておく。

お着替えお手伝いしましょうか？　と、問うセーネに大丈夫っと答えた。アジンエンデが『おやすみ』と言ったので手だけ振って、寝室の扉を閉めた。

ガジュルシンが、寝室&居間サイズの結界＋幻術を張ってくれる。

忍者装束はとっとと脱いで、貫頭着に着替えて私はベッドに倒れこんだ。

言葉も通じなきゃ、風習もわかんない。かたっ苦しいしかめっつらのサムライだらけの城。

ンな中に三時間ぐらい居たんだ。

わかんない事だらけなんでセーネに小声であれこれ質問したんだけど……まともに答えてくれる事はほとんどなかった。公式の場での会話はお控くださいと、言葉短く、会話を勝手に打ち切られてしまうことも多々。

私にしか聞こえない小声で、ずっと解説してくれればいいのに～
こっちから求めなくても、言葉を翻訳してくれ、この人物とこの人物の関係はこうだと説明してくれ、その土地独特の風習や儀礼を必要な点（ピンポイント）だけ教えてくれる奴がいないのが、こんなに疲れる事だとは思わなかった。
くそぉ……
腹だたしい……
ジライに側にいてもらいたいわけじゃない。
居ないと不便ってだけ！

ショーグンのお城は、でっかいお城だった。
石の階段を昇り、庭をぐるぐる歩かされて、どデカイ城に入って、やっぱり結構歩かされて……
そうして通されたのは、襖をとっぱらわれて一間つづきとなった三部屋の段々部屋だった。
ショーグンとの謁見の間だ。
一番上の段の部屋の御簾の中が、ショーグンの席だった。その中に人影は見えたけど、どんな顔のどれぐらいの年齢の人か最後までわからなかった。本人、一言も私達に声をかけなかったし。御簾の中の侍従（しょ）とはボソボソ話してたみたいだったけど。椅子もどきの床几（うげ）ってのに座ってるっぽかった。
二段目、三段目の部屋の左右にはサムライがズラ～と並んで座っていた。ショーグンの家来達だ。正座って座り方で、ピシッ！とずっと背筋を伸ばしてた。中年からお年寄りまで、みんな、全然、姿勢を崩さなかった。
『姫勇者』アーメット様とインディラの第一王子と第三王子は、ショーグンより一段下の中段の間って所に通された。外国人である姫勇者と王子達の為に折りたたみ式の腰かけが三つ準備されていた。
床几ってヤツ。ショーグンが座ってるのと同じヤツ。

『勇者の剣』や『雷神の槍』を床几の前の武器掛けに置いてから、アーメット達は床几に座った。

普通、だいたいどこの国でも謁見の間は、武器携帯禁止だ。その国の異分子に武器を持たせとくなんて危険だ、刺客の可能性もある。警備も気が気じゃないだろう。

けど、ジャポネはちょっと違う。武器礼賛というか、名武器を見ることを眼福とか言って喜ぶんだそうだ。城には武器は是非持って来て欲しい、謁見の間ではショーグンの目によく見えるよう願う、お手並も拝見したいと、事前に連絡があったそうだ。それもあって、今日は『姫勇者』アーメット様に代役を頼んだ。

謁見の後は庭で武芸者との対決だと聞いていたので、私はけっこう気をもんでいた。

両手剣の腕がへっぽこなアーメットでは、武芸者とまともにやったら勝てるはずがないからだ。

姫勇者が負けるなんてありえない事だ。

だけど、人間が相手じゃ、私が持っても『勇者の剣』様はまともな重量になってくれないだろう。勝負をアーメットに任せないといけないのがもどかしくって、私はいらいらしていた。上段の間の下の中段の間、それよりも更に下の下段の間で。

インディラ忍者の格好の私とアジンエンデ、それとくノ一セーネの三人は、アーメット達よりさらに下の下段の間に通された。しかも、床几も貰えなかった。畳の部屋に正座なんて無理！　と、思ってたらセーネが深々と上段に頭を下げて跪いたので、その格好を真似といた。アジンエンデも倣っていた。彼女も『極光の剣』を持って来てたが、武器掛けがなかったので畳の上に置いていた。

ショーグンはよく見えないし、サムライの偉いさんとガジュルシンの会話はジャポネ語だからちんぷんかんぷんだし、武芸対決は心配でしょうがないし、私はずっとイライラしていた。

何がどう進行して、どうなってるのかよくわかんないってのが、あんなに居心地が悪いものとは知らなかった。

その後、庭で武芸対決となった。

ショーグンは部屋から見学。やっぱり、御簾を下ろしてた。よく見えないだろうに。

私らは庭の床几席に座って観戦した。

『雷神の槍』を持ったガジャクティンが、まず、両手槍の演武をした。

ええ、そりゃあ、もう……腹が立つほど……上手だったわよ。シャイナでやった格闘の演武の百倍は確実に上手、鑑賞に値したわ。

それから、何とか流の槍の高弟との勝負になった。互いに真剣だったんで、相手の武器を落とすか、『参った』を言わせれば勝ちってルールで勝負は始まった。

この勝負は、あっさりガジャクティンの勝ち。馬鹿力で相手の武器を叩き落としたのだ。どこ殴れば効果的か考えた上の打撃だったとは思うけど。

次に、師範との対決となった。白髪のおじいさんで、見るからに名人って人。

だけど、この勝負は……残念なことに、最初から勝者が決まっていた。

最初の数分は、おじいさんも真面目にやっていたと思う。守備に徹していたけど。

果敢に攻めたガジャクティンの槍を、おじいさんは器用に流し、距離をとって避ける。連続攻撃にも姿勢すら崩さない。有効打は絶対にくらわない。

槍の名手だ。

経験に基づく無駄のない動きをしている。

力量差は、ガジャクティンも感じ取ったろう。

攻めあぐね、距離を開いて対峙した。
じりじりと距離を詰め、或いは開き、様子を窺うガジャクティン。
おじいさんは、そこで急に攻めに転じた。
上段、中段、下段と突き分ける素早い連続攻撃を、ガジャクティンはかろうじて避ける。
その美しい攻めが一瞬、乱れた。
姿勢が崩れたのだ。
その乱れをガジャクティンは見逃さず、相手の槍を払い、踏み込んだ。
槍の穂先はぴったりとおじいさんの心臓を狙い、貫く寸前で止まった。
おじいさんは『参った』と言い、槍を引いたガジャクティンに対し礼儀正しく頭を下げた。
ガジャクティンはムスっとした顔をしていた。
おじいさんは、わざと隙をつくった。わざと姿勢を崩したのだ。
勝ちを譲られたのだと、気づいていたから、義弟は不機嫌なのだ。
外国の王族とはいえ、王族は王族。だから、勝ちを譲ったんだろうな。見る者が見れば、力量差は歴然だったし。ショーグンの御前試合では、身分の上の者に家臣が勝ちを譲る事がままあるそうだ。
ガジュルシンが言っていた。
この調子で、アーメットも勝ちを譲ってもらえるかも……
あああ、でも、それはある程度打ちあってからだろうし……
立ち合ったら、じきに、素人に毛が生えた程度の実力だって見破られちゃうわ、きっと。
姫勇者が両手剣が下手っぴじゃ話にならない～～～
と、頭を抱える私の前で次の勝負が始まる事になった。
『勇者の剣』の振るい手『姫勇者』アーメット様と、ジャポネの武芸者との対決……
と、思いきや……
アーメットではなく、『極光の剣』を手にしたアジンエンデが勝

負の場に進み出た。
え？
何で？
どうして？
と、思ったら私のそばのセーネが小声で、
『姫勇者様の剣では相手の武器を一撃で破壊してしまう為、姫勇者様ではなくそのお弟子のアジンエンデ様が代わりに闘う事となりました。先ほどの話し合いで』
と、教えてくれた。
そういえば、さっきガジュルシンがアジンエンデに何か耳打ちしてたなと思いだしたけど……
誰が誰の弟子よ！
ガジュルシンの奴、又、その場に都合のいい、いい加減な事言って～
シャイナじゃ、あいつのせいで、おチビと婚約させられて……
ジャポネじゃ、私はアジンエンデの剣の師匠となってしまった。
武器は同じ両手剣でも、戦法が全然違うわよ！

勝負は、私の弟子が勝ったわよ！
ジャポネ刀の名手との勝負も、おじいさんとは別の槍の名手との勝負も、鎖鎌の使い手との勝負も！
そりゃあ、もう、あっさりと、ね！

武芸勝負が終わった頃には、もう疲れきっちゃった……

ショーグン配下の部下がまとめた『ジャポネの大魔王教団の情報

及び魔族被害の報告』は、後日、私達の宿に届くのだとか……
情報屋からの情報も三日後にもらいうける事となっているんだとか……
この後、オオエのインディラ寺院に御挨拶に行って来るだの……
旅館に帰るまでの間、ガジュルシンが説明してくれたけど、もう、どうでもいい。
疲れた……

ようするに、三日はオオエに居るってことだ。
その間に、ジライも帰ってくるだろう。
キョウのミカドと対面する時には、絶対、勝手はさせない。解説者としてそばにいさせてやる～

ベッドの上で目を閉じた。

けど、窓から入って来る日の光が気になる……

面倒くさかったけど、カーテンを閉じようと思って、窓に近づいたら……
窓の下にガジャクティンが見えた。
『雷神の槍』を背負って、中庭を歩いている。
武術練習……？
今日、勝ちを譲られて腹立ててたものね……
あれ？　でも、足を止めない。
外に向かってる。
どこまで行く気？

＊　＊　＊　＊　＊

「どっか行くの？」
頭上からの声に、肝が冷えた。
え？
嘘！
ラーニャ！
今、『姫勇者』入れ替え中じゃなかったの？
三階の窓にラーニャの顔がある。
ラーニャの部屋から中庭が見えるのは寝室だけだ。もう寝る気だったの？
「どこに行く気？」
あああ、もう！　そんな大声で！
兄様にバレちゃうじゃないか！
「ちょっと街まで」
「一人で？」
窓際のラーニャが首を傾げる。
「あんた、仮にも王子様なのよ。一人でフラフラ街に出るなんて、不用心じゃない？」
うるさいなあ……もう……
「ラーニャと違って、僕はジャポネ語ペラペラだからね！　一人でも大丈夫だよ！」
それだけ言って、走り出した。
ラーニャが三階から尚も、叫んでいた。が、無視した。
急いで通りの雑踏の中に埋もれた。
早めに移動しないと、兄様に捕まっちゃう！

＊　＊　＊　＊　＊

「ガジャクティンが街へ？」

寝室の扉から顔だけ出してるラーニャが頷く。

オオエの街に、あいつが何をしに……？

僕等ラジャラ王朝の子供がジャポネに来るのは初めてだ。知り合いもいない。

外に行く理由なんかない。

アーメットが弟の部屋に走ってくれる。

僕は魔力を高め、探知の魔法でガジャクティンの気を探ってみた。

変だ……

ガジャクティンの気は、旅館の自分の部屋の中だ。

しかも、その気は動いている。

しばらくすると、弟の気配は、アーメットと一緒に僕等の方まで近づいてきた。廊下へ通じる扉が開き、アーメットだけが入って来る。手に一枚の紙を持って。

「置手紙があった。ガジャクティン、槍の修行に行ったみたいだ。オオエにはいっぱい道場があるから、武者修行して来るって書いてある。今日中には帰るって書いてあるけど……どうする？」

御前試合の槍勝負がそんなに悔しかったのかなあと、首をひねらせるアーメット。

槍修行……？

嘘だ、と思う。

僕は、アーメットから弟の置手紙を受け取った。

弟の気が、その手紙から伝わってくる。

魔力を手紙にこめ、それを自身の身代わりに仕立てたのだ。本人は、今、魔力の気配を消す魔法道具（マジック・アイテム）を使用しているのだろう。今、探知の魔法ではガジャクティンを追えない。

この紙自体も魔法道具だ。紙から、ガジャクティンの魔力の他に、強い魔力の痕跡を感じる。僕をだしぬけるほどに強いそれが誰のものであるかは……嫌というほどにわかった。

「カルヴェル様……」

何時の間に、弟にこんな魔法道具を与えたんだ？

こんなめくらましまで弟に使わせて……それで呼び出したに違いない。

僕の身内を魔法で弄ぶようなことは二度としないって言ったのに……

よくも……

僕は掌の中でガジャクティンの手紙を握りつぶした。

＊　＊　＊　＊　＊

「すみません、カルヴェル様、出がけにラーニャに見つかっちゃって……今頃、兄様に僕の外出、バレてると思います」

「ホホホホ。まあ、バレるのも予想の内よ。外出中に用事を全て済ませてしまえばよい事。気にせずともよい」

黒のローブの大魔術師様が、体を揺らして愉快そうに笑う。

この笑みを見ちゃうと、僕の不安もなくなってゆく。

どうにかなるんじゃないかって気になってくる。

この前から、兄様はカルヴェル様に怒っている。

異次元空間で、僕に魔法修行をさせたからだ。

あの時は何者かに異次元空間の通路を閉鎖され、帰るに帰れず異

次元空間で僕は二年以上の時を過ごすはめとなった。
いきなり二歳以上老けた僕を見て、兄様はむちゃくちゃ怒った。
僕に対しても怒ったけど、内心では、僕以上にカルヴェル様を怒っているようだった。子供をいさめる立場の人間が無謀な子供を止めもせず、魔力で命を弄ぶなんてもってのほかだって。
でも、それは違うと思う。
魔法修行をつけて欲しい、しかも性急に成果が欲しいってねだったのは僕だ。
僕はものの道理がわからないほどには子供ではない。十四歳なんだ。異次元に籠ればどうなるか承知の上で行動したんだ。
責められるべきは僕であって、カルヴェル様じゃない。
兄様は僕を子供扱いしすぎる。
子供だって思いこんで……守ろうとしている。
その愛情はありがたいとは思う。僕も兄様は大好きだ。
でも……
僕は子供ではない。
姫勇者の従者なんだ。
僕は姫勇者を守るべき戦士であって、兄様に守られていなければいけないかよわいものじゃない。
本当は兄様を説得して僕の考えを理解してもらうのが一番なんだけど……
頑固で口がたつんだもの、兄様。話してるといつの間にか本筋から違った話に変えられていたり、うやむやにされたり、ごまかされたりなんてのは、しょっちゅう。
だから、カルヴェル様を頼る事にしたんだ。
不測の事態で僕を異次元に二年以上籠らせてしまったお詫びに、カルヴェル様は僕のお願いを何でも三つ叶えてくださる。そういう約束なのだ。願い事がある時に使えと、カルヴェル様召喚の指輪まで渡してくださって。
一個目のお願いを叶えてもらう為に、さっき、僕は指輪を使って

カルヴェル様に連絡をとった。
これから三日は、オオエに留まる。私的な時間もとれそうだから、今のうちに気になっていたアレをどうにかしようと思って。
そしたら、移動魔法で運んでやるから外へ出ろと言われた。旅館の中で強力な魔力を消費する移動魔法を使ったら、さすがに兄様にバレるだろうから、旅館から少し離れろと言われたのだ。
僕の願いは、兄様が決して許さない類（たぐい）のものだ。バレたら、絶対に、止められる。
前にカルヴェル様からいただいた魔法道具の紙を身代わりを置いて、こっそり部屋を後にした。槍修行に行くって嘘を書いておけば、いなくなったのがバレても時間を稼げると思ったんだけど……
まさか、出がけに、ラーニャに見つかるとはね……
カルヴェル様に会いに行ったってバレてるだろうなあ、兄様、勘がいいから……

今、僕とカルヴェル様はオオエからずっと西、西の都キョウに近いある里の近くの森の中にいる。
カルヴェル様といっても本物じゃない。
分身だ。
本物はこの森の側の里の中にいる。
仲介役兼護衛役として、実はジライに付き添っている。
『ムラクモ』の真の所有者カズマとジライの話し合いを、カルヴェル様が仲介してるんだけど……
カズマは同門の剣士やらをいっぱい側に侍らせて、妙にジライを威嚇しているらしい。
ジライがブチ切れないといいけど。
で、いざとなったら、ラジャラ王朝の王子として協力して欲しいとカルヴェル様（分身）に頼まれたのでＯＫした。僕にできる事なら何でも。

あっちがややこしくなるまでは僕の出番は無い。
僕はカルヴェル様にお願いを伝えた。
それは……
大魔術師カルヴェル様ならばおそらくご存じの魔法……
血族だからこそ使える神聖魔法……
僧侶ナラカの能力の大半を封じられるという高位の神聖魔法……
それの呪文を教えてほしいと、僕はカルヴェル様に頼んだ。
「呪文自体は知っておる」
やっぱり！　さすがカルヴェル様！
「だが、おぬしの兄上の言う通りじゃ、おぬしには操れぬ魔法じゃぞ」
「その魔法を御すには、僕では魔力も信仰心も足りないんでしょ？」
「うむ」
「でも、世の中、何があるかわかりません。魔力が足りなさすぎて何十年修行してもろくな魔法が使えないだろうって言われてた僕が、今では、中級の攻撃・神聖魔法、初級の回復・補助魔法が使えるようになってるんです」
「努力や根性でどうにかなるレベルの魔法ではないのだ」
大魔術師様は渋い顔をなさる。
「ナラカ封呪であの魔法を用いた場合、制御するとなると、ガジュルシンとて己が魔力の四分の一から半分を失う事となる。並の魔術師五百人分から千人分の魔力があって初めてなる封印なのじゃ。おぬし一人では無理じゃよ」
ちょ……
えぇ～～～～
兄様の魔力の総量って、並の魔法使いの二千人分ってこと？
嘘！
移動魔法をバンバン使えるから、凄いだろうなあとは思ってたけ

ど……

ちょっとそれって桁が半端なくない？

「大魔法使い専用の魔法なんですか……？」

「そうではない。封じる相手がナラカである為、封呪をかける側にも膨大な魔力が求められるのじゃ。同じ魔法をおぬしにかけるのなら、ガジュルシンは己の魔力の二千分の一か二の損失ですむ」

く……

「あの呪が使えるのは、ガジュルシンとおぬしの父親だけじゃ。ナーダでは正直、魔力は足りぬ。だが、あの男にはそれを補って余りある信仰心がある。神のおぼえめでたいあの男が正しい心をもってナラカ封印を願えば、神のご助力を得て奇跡を起こせるじゃろう。じゃが、おぬしの求めでは神は動かれぬ」

くぅ……

僕だって、朝な夕なインディラ神に祈りを捧げているんだ。決して、不信心ってわけじゃない。だけど、父様や兄様の信仰心と、僕のそれでは、天と地ほどの開きがある。

一体、何が違うのか？

神への祝詞を唱えて、神を敬うだけじゃ駄目なんだろう……だが、いったい、どうすれば信仰心ってアップするんだ？　さっぱりわからない。

「その呪文が僕には使えない理由は、よくわかりました。でも、呪文を覚えておきたいんです。教えてください」

「ふむ……まあ、それが希望とあらば教えよう」

「それと、後もう一つご相談がありまして、僕の目的にそう魔法があるかどうか知りたいんです。いえ、あるのなら呪文を教えてほしいんです。使えるようになりたいんです……それを二番目のお願いとしたいんですが」

＊　＊　＊　＊　＊

なるほど……
子供は、やはり、面白い。
思いもよらぬ発想をする。
「どうでしょう？」
ナーダそっくりの糸目で、ガジャクティンが不安そうに尋ねてくる。
「その魔法はある」
わしがそう言うと、まじめそうな顔が少し綻ぶ。
「素のおぬしには制御不可能じゃが、魔法道具を駆使すれば一時間ぐらいならば使用できよう」
そう言うと、更に顔がパーッと明るくなる。
わかりやすい反応じゃ。
ほんに、素直で愛らしい。
デカくてごついが、根はほんに愛くるしい子供じゃ。
ガジュルシンが猫っ可愛がりするのも無理からぬ。
「僕、その魔法が使えるようになりたいんです。制御用の魔法道具もください。それを三つ目のお願いにしますから」
「三つのお願いをいきなり三つとも使うのか！　豪快じゃのう」
「だって、僕、どうしても覚えたいんです。兄様の為にも、ラーニャの為にも……」
「先に言うておく。一時間が限度。それ以上、おぬしの目的の為に魔法道具を使うな。無茶をすれば、臓器に負担がかかり、血流は悪くなり、身体機能が停止してゆく。それでも、尚、使用し続ければ……当然の報いをその体に受ける」
「わかりました、一時間以内しか使いません」
と、ガジャクティンは元気よく答えた。
だが、さて、どうかのう。
こやつ、無茶なところはナーダに似ておるしのう。

死ぬと承知の上で魔法を使いかねんな……兄と義姉の為ならば……。

この魔法をわしが教えたと知ったら、ガジュルシン怒るであろうなあ……

その時がくるまで呪文を思い出せぬよう、記憶を封じておくか。

今日のわしとの会話ともども、な。

ガジャクティンに二つの魔法の呪文を教え、魔法制御の為の魔法道具を準備したところで、ジライの方の話がややこしくこじれた。

インディラ第三王子様に登場していただく頃合いじゃな。わしが伝えようと思っていた事じゃが、インディラ王家の者に登場してもろうた方が、うまく話はまとまるはず。

わしは手短に策を伝え、ガジャクティンを本体のもとへと送った。

サムライの矜持！　ムラクモの運命！

師より賜った時、この刀には名がなかった。
ゆえに、我は『小夜時雨（さよしぐれ）』と名付けたのだ。
我が剣の師は刀剣類の収集家ではあったが、盗んだだけで満足し収集物を納戸に適当に放り込んでしまう……そんな方でもあった。
刀の真の名を師は失念してしまわれたのだ。
だが、伝え聞く特徴からして、『小夜時雨』の真の名前は『ムラクモ』であろうとは思う。
有資格者しか鞘から抜けぬ、刀身から聖水を降らす、聖なる武器……
ジャポネ刀の形状でその特徴の武器は『ムラクモ』しか記録にない。

だが……だから、何なのだ？

カズマの先祖がマヌケゆえ、師匠に本物と偽物を盗術ですり替えられた、ただ、それだけの事であろう。
何故、阿呆の子孫に『小夜時雨』を渡さねばならぬ？

道場に入って来た我とムジャに対し、一斉に刺すような視線が向けられる。
カズマの師匠ムネヨシ、カズマの同門の子弟、そしてカズマ本人。
道場の中はサムライだらけだ。
カズマは睨むように我を目で追っていた。まだ二十そこそこ。家

督を継いだばかり若造では、サムライらしい余裕を持った態度などできぬようだ。

カズマは己の前の床に、刀を置いていた。実に金と手間暇をかけたような外見だ。木製の柄には鮫の皮をかぶせており、鞘にも黒や金の漆で模様が描かれておる。

『ムラクモ』であろう。

我が手元にある『小夜時雨』こそが本物であれば、カズマのモノは師匠が用意した偽物。抜けぬよう細工を施された刀のはず。抜けぬ理由を己が技量ゆえとあきらめ、カズマの父祖は偽物と気づかぬままでいたのだろう、二十年ほど前までは。

上座に仲介役のカルヴェル様と、カズマの師匠ムネヨシが座している。

我はカズマと対面する位置に座った。ムジャがその隣にくる。我は東国忍者の姿。ムジャはインディラ忍者装束。二人とも忍者ゆえ、素顔は秘することは事前に了承を得ている。

我も『小夜時雨』を自らの前に置いた。こちらの鞘はただの黒塗りだが。

カズマの一族はミカドより『ムラクモ』を賜った。三代目勇者の時代のことだ。

その後、ミカドの『武』を担っていたカズマの一族は、ミカドの戦士長を自称するショーグンに強引に吸収され、ショーグンの配下となった。三百年前のことだ。

しかし、『ムラクモ』を守護する一族は、ショーグンを敬いながらも、ミカドを奉じ続けた。『ムラクモ』を賜った恩義ゆえに。

それは、今世まで続いておる。

つまりは……『ムラクモ』にサムライの存在意義を見出し、『ムラクモ』を後生大事に抱えてきた一族なのだ。

その大切な家宝が、盗まれたとあっては面目丸潰れ。

世に『女勇者セレス』が広まり、あの本に我(われ)が『ムラクモ』の使い手と描かれておっても、カズマもその父シュメも盗難届は出さな

かった。
サムライらしく泰然と構え娯楽本など相手にせず、自分達の『ムラクモ』こそが本物と言い続けてきたのだ。
その実、不安なので、裏で我との面会を求め続けてはおったのだが。
世間に対しては自らの『ムラクモ』こそ本物と主張してはおるが、本物と言い切る根拠も自信もない。五十年近くその刀を抜ける人間が一人もいなかったからだ。
オオエではなく、剣の師匠の里で我と面談したいとあちらが願ってきたのは、あちら側も極秘裏に事を進めたかった故だ。
オオエに居ると思っていたカズマは、西のキョウ近くの山の中の里に移動済みと知ってこちらとしては困ったが。
カルヴェル様に移動魔法で運んでいただけねば、ラーニャ様との合流が更に十日近く遅れるところであったわ。

挨拶の後は、怨みごとから始まった。
我との面談はカズマの亡くなった父シュメの願いであった。我に会うて、どちらの手のモノが真の『ムラクモ』か真贋をつけることを望み続けていた父はおととし亡くなった、インディラの忍者頭と父との面談がかなわなかったのは残念だが、今日のことは父の墓前に報告しておく……
粘着気質とみた。カズマの周囲のサムライどもはシュメ殿おいたわしやとか涙を流しおる。
次に、カズマは『小夜時雨』の来歴を尋ねてきた。
亡き師匠より三十七年前に譲り受けた刀である事、師匠は刀剣の収集家であった事、師匠はこの刀を『小夜時雨』と呼ばれ他の名は一切用いなかった事。話せるのはその程度であった。
師匠の名は忍の里の秘密に関わることゆえ、話せぬと伝えた。
先日、ヤマセ兄弟子からカズマに教えるなとも釘を刺されている。

二つ名の『白き狂い獅子』も口にできぬ。『白き狂い獅子』が個人名であるのか、暗殺者集団の名前なのかも、それすらも里は秘密としているのだ。

次にカズマはカルヴェル様に尋ねた。

「その忍者所有の刀を『ムラクモ』と看過されたのは、カルヴェル様と聞いております。何を根拠にそう思われたのですか？」

龍神湖の戦いの時だ、我が刀を見て、カルヴェル様が『ムラクモ』だと見抜かれたのは。

聖なる武器に関する知識が豊富なカルヴェル様は、振れば刀身から雨を降らすジャポネ刀など『ムラクモ』しかないとおっしゃったのだ。

『女勇者セレス』第十三巻に、そう載っておる……

あの本に載っている話の全てが真実だというわけではない。読み手もそれは理解している。

じゃが、真実も多数含まれておるゆえ、世間は疑いを抱いたのだ。忍者ジライの刀こそが『ムラクモ』であり、カズマの一族は偽物を掴まされているマヌケなのではないかと。

カルヴェル様は、はっきりとご自分の知識の確かさを相手に伝えた。

「わしはインディラ寺院所蔵の『聖なる武器に関する記録』にも目を通しておる。ジライの刀は、あの本に載っていた『ムラクモ』と特徴が合致する」

おお！　とカズマ側から歓声があがる。

我が刀こそ本物とわかれば、カズマ側はインディラ国に対し返還要求ができる。

じゃが……

「したが、あの本に全ての聖なる武器が記されているわけではない。代々の勇者の従者であった僧侶達によって、新たに発見された武器が書き足されておる。わしは忍者ジライの刀を『ムラクモ』と思うた。じゃが、真実は『ムラクモ』によう似た『小夜時雨』という刀

やもしれん。本当のところはわからぬ」
カズマ側が、がっかりする。
しょせん、幾ら話したとて堂々めぐり。
『小夜時雨』が盗品の『ムラクモ』の可能性は高くとも、カズマ側は確たる証拠を見つけられない（事実はその通りなのだが）。
話の進展などない。
尚も、ネチネチネチネチ、カズマが昔の資料をひっぱってきて、ああでもないこうでもないと言うので……
聞いているのが面倒になってきた。
我は『小夜時雨』をつかみ立ちあがり、周囲が騒然とする中、その柄を粘着気質サムライに向けた。
「我が刀を『ムラクモ』とお思いならば、抜かれてみるがいい。正当なる所有者である方がな」
そこで顎をしゃくり、フンと笑ってみせた。
「抜けぬと思うが、な」
カズマは我を睨むように見上げた。
まったく動こうとはせぬ。
我が刀が真実『ムラクモ』であるのなら……自分には抜けぬとわかっているのだ。
『ムラクモ』の装備条件は、『無私無欲』。
『ムラクモ』奪還にやっきになり、『ムラクモ』に執着しておる以上、この男の心は、我欲にまみれておる。
刀が好くわけがない。
「父ならば抜けたであろう……」
カズマの声には悔しそうな響きがあった。
「我が父、先代シュメの気性は、カルヴェル様もようご存じのはず。父シュメは、『ムラクモ』をミカドより下賜された刀として敬い、丁重に扱っておった。それが偽物かもしれぬと世間から嘲笑われても尚、死ぬまでその態度を崩さなんだ」
カズマは感極まったような顔で、瞼を閉じる。父との思い出にで

も浸っているのであろう。
「サムライたる者、主君よりいただいたお役目を果たすまで……『ムラクモ』が鞘より抜けぬ理由も、己が未熟故と考え、父は精進潔斎を欠かさず、日々、清廉な生活を送ったのでござる」
興奮のあまりか身も震わせている。
「父は世の声などまったく意にかけておらなんだ。インディラの忍者頭殿との面会を求めておったのも、『ムラクモ』を取り返さんが為ではなく、あくまで真贋を見極める為。偽物の刀を奉じていてはミカドへの不敬にあたると……父は死の床まで、ただそれだけを気に病んでおったのだ」
カズマはカッと目を見開き、我を見る。
『小夜時雨』の所有者である我を。
「父の墓前に真の『ムラクモ』を供えることこそ孝行。それがしはそのように心得る」
「……なるほど」
我は『小夜時雨』を己が腰に戻した。
「くだらぬ執着じゃな」
周囲が殺気だつ。
馬鹿サムライどもを見渡してから、我は若造を見下ろした。
「『ムラクモ』が欲しいのは、死人ではない、きさまであろうが。『小夜時雨』がまこと『ムラクモ』であろうがなかろうが、どうでもいいくせにな」
「なに？」
「我は優れた武器ゆえ『小夜時雨』を愛でておる。だが、抜けぬとなれば無用の長物。その時には捨てるわ」
「その刀を捨てる……？」
「さよう。刀とは生命を守る為にある。きさまら一族にとっては、違うようじゃがな。『ムラクモ』は家宝……主君への忠義の証。それゆえ、きさまの父は『ムラクモ』を敬い、奉じていたのであろう」
「その通りだ」

「それゆえ、あるべきモノが手元には無いかもしれぬ事に、きさまの父は不安を覚えた。だが、きさまは違う。偽物を掴まされておると、世間から嘲笑われるのが嫌なのだろう？」

「……」

「『ムラクモ』かもしれぬモノがきさまの手元にない、それが気に喰わんのだろう？　家宝を盗まれた愚かな一族とそしられるのが悔しい、だから、『小夜時雨』も手に入れておきたいのだ。違うか？」

「……」

カズマはしばらく無言の後、口の端を微かに開いた。自嘲の笑みだ。

「さようでござるな。今、それがしにもわかりもうした。我が手元の刀が真の『ムラクモ』であろうとも、世間の者が『小夜時雨』こそ『ムラクモ』と信じておれば、我が心は休まらぬでござろう。それがしは、『ムラクモ』の守り手として生きてきたご先祖様を辱められとうない」

挑むようにカズマが我を見る。

「それがしは『小夜時雨』が欲しい。それが『ムラクモ』か真贋がわからずともよい。我が手の内にさえあれば」

「ならば、立ち合え」

我は口元を歪ませた。

「きさまの剣技を見せてみよ。あっぱれな腕前であれば、『小夜時雨』、譲ってやっても良い」

え？　と、いう顔で、横に座るムジャが我を見る。この程度でうろたえるな、未熟者めが。

「じゃが、こちらは『小夜時雨』にて勝負いたす。あまりにもつたない腕であれば、きさま死ぬるだけだぞ」

その刀、できるだけ封印しとくんじゃなかったんですか？　と、ムジャがボソボソ。うるさい。

阿呆め。向こうは他に漏らさぬわ。『ムラクモ』盗難を認められぬ立場上、『ムラクモ』と思われる刀を他の者が振るっていたなど

と断じて認められぬのだ。
それに……この刀を直に目にせねば、カズマとて納得はできんだろう。

我が抜刀すると周囲から溜息が漏れた。
青白く輝く、冴え冴えとした刀身。
亡き師匠がこよなく愛された、玲瓏たる刀だ。
素振りをしてみせたのは、カズマへのサービスだ。
刀身から雨が降る。聖なる水の飛沫が床へと飛び散る。
カズマの顔に複雑な感情が浮かぶ。
伝え聞く家宝そのものの刀を、卑しい忍者が使っておるのだ。
誇り高いサムライには、さぞ屈辱であろう。
家宝『ムラクモ』とされる刀を同門の者に預け、カズマは刀掛のものを取る。日頃、腰に差しているのだろう実用刀を抜いたのだ。

白刃を構え、我とカズマが対峙する。
カルヴェル様にカズマの師匠ムネヨシ、カズマの同門の者達が見守る中、我らは真剣を手に睨み合う。

幼き頃より剣術修行を積んできたサムライだけあって、真剣を構える姿勢も堂々たるものであった。
才もあり、良き師につき、それなりに剣は使えるようじゃ。
あくまでそれなりだが……。
剣術でまともに勝負してやっても勝てるが……
まともな剣で叩き潰しては、サムライの面目を潰してしまう。
我が卑怯な手を使った故、負けたのだと思わせてやった方がいい。
予想通り、じりじりと距離をつめてきおる。

若造は堪え性がない。
我が実力とてある程度読めるであろうに、早う勝負を決めたがる。
上段から斬りかかってきたので、体をずらし、それから高々と跳躍した。
あまり高くない天井に左手だけでわざと一度ぶらりと垂れ下がってから、カズマの背後に降り立ってやった。
慌てて振り返り、真剣を振りまわす。
それを刀で受けてやりもせず、体術だけで全てかわしてやる。
若造の顔が朱に染まる。
たわけめ。
力量差を思い知れ。
二度とつまらぬ願望など抱かぬように、な。
きさまが『小夜時雨』を手に出来ぬのは、未熟なる腕ゆえ。
己が実力の為。
そうと思い知れ。
きさまなぞに、我が刀は譲らん。
袈裟掛けに斬りかかってきたところを身を低くしてかわし、カズマの右腕を下方から蹴りあげる。
「ぐっ」
カズマが跳ね上げられた手から刀を取り落とす。
勝負はあったが……
その瞬間をより屈辱たるものにする為に、我は『小夜時雨』を一閃していた。
刀身から生まれた水が、カズマの顔を濡らした。

「そこまで」

上座からの声に、我もカズマも周囲のサムライどもも一斉に上座

へと顔を向ける。
カルヴェル様とカズマの師匠ムネヨシとの間に、たいそう大柄な男がいる。サムライの中では浮きまくる異質な姿をしている。
何故、ここに？　カルヴェル様の仕業であろうが……
「刀をおさめよ、ジライ」
「……」
とりあえず、ここは命令に従っておくべきだろう。
ムラクモを鞘に収め、我は上座に対し平身低頭した。
ムジャも我に倣う。
上座の大男は、上座のムネヨシに対し顔を向けた。が、微かにすら頭は下げぬ。
「インディラ国第三子ガジャティンだ。前触れなき訪問、非礼を許せ」
異国の王子の突然の出現。
身分制度にこだりのあるサムライ達は、慌ててガジャクティンに対し、頭を下げた。
「カルヴェルの魔法にて、ここに運んでもらったのは他でもない」
サムライ達に顔をあげさせてから、インディラ国第三王子は突然出現した理由をまず説明してから、本題に入った。
「我が父からの言葉を伝える為だ」
ナーダの？
「そなたらも知っておるとは思うが、我が父はインディラ教大僧正候補であった。又、先代勇者セレスの旅に同行し、聖なる武器についての見聞も広めた方でもある」
まあ、そうだな。
「刀身から聖水を生み出し、有資格者以外は鞘から抜けぬジャポネ刀の形の聖なる武器は『ムラクモ』以外ない。父はそうおっしゃった」
む？
「ゆえに……『ムラクモ』にあまりにも酷似した『小夜時雨』が、

『ムラクモ』と無縁であるはずがない。両者には浅からぬ縁があるはず」

むむ？

「古の時代より伝わる刀ゆえ、聖なる武器『ムラクモ』の誕生は伝説にて伝わるのみ。伝説は、数多くの人間の手にて変遷しがちなもの。今日までの間に重要な情報が欠落した疑いもある」

むむむ？

「すなわち……『ムラクモ』と『小夜時雨』が共にこの世に誕生した、夫婦（めおと）刀の可能性も否定できぬ」

むぅ？

「しかし、おそれながら……」

ムネヨシが戸惑いながら口を開く。

「夫婦刀というものは普通、大小に大きさが分かれており」

「ならば、双子刀だ。共に生まれたゆえ、大きさも、性質も、特徴も、皆、同じなのだ。外装は後人のなしたものゆえ、異なるがな」

何が言いたいのだ、こやつ……？

「我が父の願いを伝える。共に生まれしものならば共にあるべき。今世の『小夜時雨』の使い手忍者ジライが没した後は、インディラ国は双子たる聖なる武器が共にある事を欲し、『ムラクモ』を所有する一族に『小夜時雨』を寄贈する事を望む。我が父の望み、受ける意思があるか否や」

ほほう。我が死後か……

「それは……願ってもなき事。しかし……」

カズマが我をチラリと見る。

「その事をご配下の忍は納得しましょうか？」

「納得する。な、ジライ？」

「はい、ガジャクティン様」

インディラ第三王子に対してだけ、我は恭しく答える。カズマの視線など無視。

「私がこの刀と共にあるのは、共に戦う為にございます。死後のこ

となど預かり知りませぬ。お国のご意思に従います」
誰ぞに譲りたいわけではない。棺桶まで武器を持ってゆく気も微塵もない。
我は我、『小夜時雨』は『小夜時雨』じゃ。
死後のことなど、どうでもいい。『小夜時雨』が誰の手に渡っても構わん。
この若造の手に渡るのならば、それはそれで『小夜時雨』の運命。
ガジャクティンは満足そうに頷いた。
「では忍者ジライの死後、インディラ国は『小夜時雨』を『ムラクモ』の所有者に寄贈する」
「ははっ。謹んでお受けいたします」
頭を下げ、かしこまるカズマに対し、ガジャクティンが王者然たる笑顔を見せる。そういう顔をすると、つくづくナーダに似ておるわ、こいつ。
「共に生まれたもともとが一つであった刀が、一つ所に集うのは喜ばしいことだ。刀も再び巡り合えたことを喜び、混じり合い、ひとつの刀に生まれ変わる奇跡を起こすかもしれぬな」
ガジャクティンの言葉に、カズマは一瞬、呆け、それから深々と頭を下げた。『さようにございますな』と言って。
『小夜時雨』もカズマの手の内の『ムラクモ』も両方本物としておき、有資格者が現れた時には偽物はこっそり処分してしまえと勧めているのだ。世間に対しては、双子刀ゆえ、二刀が合体して一つとなったのだと発表して。
聖なる武器には、神秘的な奇跡はつきもの。見え透いた大嘘とて、堂々としてればまかりとおるであろう。
なるほど。
普段、第一王子の陰に隠れて子供然としておるが、結構、頭が良いではないか、この王子。
まあ、シナリオを書いたのはカルヴェル様であろうが。

『小夜時雨』と『ムラクモ』は双子刀であり、カズマ所有の『ムラクモ』も偽物ではないとインディラ王家は認めたのだ。その上、我の死後には『小夜時雨』をもらえる事となって……

カズマに不服などあろうはずがない。

たった今、この場でもらったところで、我欲の強いカズマでは『小夜時雨』は抜けぬ。

しかし、手元に無ければ、抜けるかどうか試す必要もない。我が手元にしばらくある方が、若造サムライも誇り（プライド）が守れるというわけだ。

『姫勇者ラーニャ』の新刊には、双子刀『小夜時雨』と『ムラクモ』の話を載せねばなるまいが……

我はジャポネに来ておらぬ事になっておる。

どんな話にすべきか……悩ましい。

まあ、いい……

ムジャに考えさせよう。

はよう新しい話を、名作家様に書いてもらわねば、の。

兄と弟！　キョウに向かって！

「おかえり、ガジャクティン……」

宿泊先の西国風高級旅館ではなく人通りのないオオエの大川のそばの河原に転移してきたというのに、いきなり第一王子に声をかけられるとは。

おそらく、カルヴェル様の魔力を探知するかガジャクティンの気配を感じたら、そこに転移するよう事前に移動魔法でも仕込んでおったのだろう。

薄暗い夕日に照らされた河原には、第一王子とアーメットがたたずんでいた。ラーニャ様達は宿か。

第三王子は豚か何かの獣のような奇怪な叫び声をあげ、慌てて我の後ろに回った。それは無理であろう……その身長と横幅で我の後ろに回っても姿は隠せん。

「わざわざのお出迎えいたみいるのう」

カルヴェル様は、不機嫌そうなガジュルシンなど意にかけず、余裕の態度。ホホホホといつも通りに笑われる。

「わしらがどこで何をしてたか、おぬし、すんごく気になっているであろう？　遠慮はいらぬ。わしらの誰の記憶でもいいから読め。何なら全員でも構わぬぞ」

ガジュルシンは、我らを見渡した。大魔術師様と第三王子、それに我とムジャ。全員の顔を見てから、

「ではお言葉に甘えて……まずはガジャクティンとカルヴェル様の心を読ませていただきます。その後、必要があったら、ジライとムジャの心も見せてもらう。そういう事でいいでしょうか？」

＊　＊　＊　＊　＊

やはり予想通り……
何って馬鹿なんだ、こいつ……
カルヴェル様に、僧侶ナラカの能力封印魔法を習いに行っていただなんて……
無理だって言ったのに……
カルヴェル様から魔力がどれほど足りないかを教えてもらって、ようやく納得して諦めたようだけど……
そうか……ガジャクティンみたいな子には頭ごなしに駄目だ、ではいけないのか。どれぐらい能力が足りないのか数値をもって教えてやれば、納得してひきさがるのか……
そこまでの知識しか与えないのなら、大丈夫だし。呪の種類さえ教えなければ、どれほど危険な呪なのかはわからないのだから。
幼い頃から決めていた。魔に堕した大伯父のことを総本山で教わった日からずっと、大伯父がケルベゾールドの復活に関わった時には血族としての義務を果たすのだと。
その為に必要とあらば命だって惜しくない。
この世界が……
僕の愛する者達が暮らす世界が……
大魔王に蹂躙されるなど許せない。
魔族は優秀な器に宿れば宿るほど、今世で大きな力をふるえるようになる。
優秀な僧侶であった大伯父の体に大魔王を宿らせるのは、危険だ。
まだ大伯父こそが大魔王だという確証はないが……
そうとわかったら、僕は迷わない。
生きて帰ると約束した父上には申し訳ないけれど、僕は術に全てをかける。
大伯父を僕の呪で封印し続けるなど、無理だ。それこそ命をかけない限り……
だからこそ……

呪の種類をガジャクティンには教えたくなかった。僕が命がけだと気づいて欲しくない。やさしい性格のこいつは、僕を救う道はないかと模索し無茶をするだろうから。

能力封印魔法を教われない代わりに、ガジャクティンは魔力増幅アイテムをカルヴェル様から受け取っていた。

その魔法道具（マジック・アイテム）を見せてと願うと、びくびくと怯えながらガジャクティンは二つの腕輪と足首用の足輪を見せた。

アイテムにこめられたカルヴェル様の魔力を引き出せる造りのようだ。ガジャクティンが微力な魔力を魔法道具に注ぎ込むと、数十倍の魔力が魔法道具から放出される。

四つの輪を上手に利用できれば、シャイナのエーネ戦の後のように魔力枯渇で気絶する事もなくなるだろう。

僕はカルヴェル様をチラリと見つめた。

ガジャクティンにはこのアイテムで充分だ。ガジャクティンのレベルの魔法使いなら、これで、魔力増幅及び安定維持が可能になる。

しかし、当然のことながら、この程度のアイテムでは、僧侶ナラカの能力封印魔法は無理だ。四つの輪のアイテムを同時に用いても、僧侶ナラカ封印に必要な魔力に遠く及ばない。無茶な魔法を発動させようとすれば、アイテムは粉々に砕けるだろう。

ガジャクティンの記憶にもカルヴェル様の記憶にも、おかしな所はない。弟がもらったアイテムもさして能力のあるものでない。

何の問題もないはずだ。

カルヴェル様との緊急連絡用指輪を使って、ガジャクティンは大魔術師様に泣きついた。

ジライとカズマの話し合いの仲介中だったカルヴェル様は、インディラ第三王子が会見に現れた方が話が丸くおさまると考え、渡りに船とばかりに、移動魔法でガジャクティンを運んだ。

置手紙の『槍修行の為の外出』は、嘘。カルヴェル様に能力封印

魔法を教わりに行こうとしたら、僕に止められると考えてガジャクティンはこっそり出かけようとした。
ガジャクティンが話し合いに加わった事により、『ムラクモ』騒動は綺麗におさまった。その礼として、能力封印魔法は教えなかったが、魔力増幅用の魔法道具をカルヴェル様は弟にあげた。
話には矛盾はない。二人の記憶もその通りだった。
だが、どうも……釈然としない。
何か見落としているような気がする。
それに、記憶を操作されているかもしれない。カルヴェル様ならば、僕に察知されないように、自分やガジャクティンの記憶をいじる事もできる。悔しいけれど、僕とカルヴェル様では、経験においても能力においても開きがある。
都合の悪い事を隠している可能性もある。
疑い始めたらキリがないことだけど。
とりあえず……ガジャクティンから、カルヴェル様との緊急連絡用の指輪は奪っておこう。こいつにこんなモノを持たせておくと、又、脱走しかねない。
「良いアイテムを弟の為にありがとうございました」
僕はカルヴェル様に対し、微笑んだ。
本音を言えば、『てめえがこのまえやった事だって許したわけじゃねえ。僕の大事な弟にこっそり会うんじゃない、殺すぞ、こら』ってところだろう。
全身をドス黒い感情が駆け巡り、負の感情に魔力が混ざってゆく。
……暴発させてしまいそうだ。
僕は、アーメットの左腕を握りしめている。さっきから、相当強く握っていると思う。痛いんじゃないかとも思う。
でも、手を離せない。アーメットが、普段通りの穏やかな心で側にいてくれているから、どうにかなっているのだ。
彼の穏やかな魂が、僕の怒りを鎮めてくれている。
彼がいなければ魔力を暴発させ、カルヴェル様めがけ灼熱のマグ

マを振りかけるか、地割れを起して地中でその身を潰してやるかなんかしてる……

でなきゃ、自家中毒だ。魔力を無理に抑えこんだ反動で、吐いて倒れているだろう。

「なぁに、たいしたモノではない。収めておいてくれ。せめてもの詫びじゃ。わしはおぬしの弟に対し、償っても償いきれぬ罪を犯したからの」

当ったり前だ、馬鹿ッ！

「今日のところは、わしはここで退散する。今はアジンエンデに会いたくないで、の」

それは……

「その後、新情報はないのですか？」

「うむ」

カルヴェル様の顔が渋いものとなる。

「残念ながら、の。まだまだ、父親と会わせてやれそうもない。今、会うても、あの娘をがっかりさせるだけじゃ」

「……」

ガジャクティンは首を傾げている。ムジャも話についてきていない感じだ。

ジライはいつも通りの無関心そうな態度。赤毛の戦士などどうでもいいのだろう。

シャオロン様が預かっていた赤毛の戦士からの手紙を、僕は読んではいない。

だが、左腕を失った赤毛の戦士アジャンが己が身を魔族から守る為に選んだ守護者が誰かは、察しがいっていた。

大伯父だ。

反発心からカルヴェル様を頼らず、故郷に戻りたくないが為にケルティの上皇様にも助力を求めなかったのだ。

伝え聞く性格からして、大伯父と何か契約を結んで守護者になってもらったのだと思う。

大伯父の行方が知れぬ今、赤毛の戦士の行方もわからない。
まだ堕落はしていないが。赤毛の戦士が魔に堕ちれば、彼の半身である上皇様にその事実は伝わる。相手が異次元にいようとも伝心するとのことだ。そうとわかったら知らせてもらえる事になっている。
最悪の事態にはなっていないが、アジンエンデを安心させてやれる情報も何もない。
この前伝えた嘘ではない事実『赤毛の戦士アジャンはインディラ寺院関係の者に保護されている』よりも詳しい事実を話したくない、だから、カルヴェル様はアジンエンデを避けているのだ。
「そのうち、明るい情報が手に入った時にでも、おぬしらに会いに行くわ。それでは、またの」
忍者ジライが『本日はご足労ありがとうございました』と頭を下げ、ムジャも丁寧に頭を下げる。
『カルヴェル様、また～』と、明るく挨拶をして、手を振る弟。
無邪気に、いや、敬意をこめた瞳を消えゆくカルヴェル様に向け、元気に力いっぱい手を振っている弟。
自分を二年以上もの間、異次元空間に閉じ込めた相手を、まったく怨んでもいない人の良い弟……
カルヴェル様の姿が移動魔法で消えた後、さすがに何か感じ取ったのだろう、父上なみに大きい弟は、おそるおそる僕を見つめる。
満面の笑顔で僕は弟に、優しく言った。
「ごめんよ、ガジャクティン。僕がわからずやで、おまえを追いこんでしまって……」
にっこりと僕は笑う。
「だけど、不満があるのなら陰でこっそり解決するのではなく、直接、僕にぶつけてくれないかな？」
ニコニコニコニコ。顔面の筋肉がひきつりそうなほど、僕は微笑んでいる。
「今夜、一緒に寝ないか？　おまえが心に思ってること、全部、僕

に聞かせておくれ。おまえを委縮させないように、僕は余計な口出しはしないから……ね、ガジャクティン、いろいろと話してくれるよね、この僕に、おまえの不満を？」

ビク！　ビク！　ビク！

毛を逆立てて今にも泣きそうな顔で、弟が僕を見る。

僕との間にジライをおいて、ジライを盾にして僕から身を縮まらせている。

ほぉんと、馬鹿だなあ、ガジャクティンは……

ジライがおまえを僕から守るわけないじゃないか……

「こんなに優しく接してやってるのに、何でそんなに怯えるんだい？……ねえ、ガジャクティン……」

「アーメット！」

半泣きの弟がジライの陰から、僕の横の忍に向かって叫ぶ。

「アーメットも一緒なら行く！　ねえ、一緒に寝て！」

「え？　俺も？」と、アーメット。

「けど、兄弟水入らずに俺がお邪魔しちゃ」

「アーメットも僕の義兄じゃないか！　男兄弟仲良く三人で寝よう！　僕がデッカくて邪魔だけど、あそこのベッドなら三人で眠れる！　ね、ね、そうしよう、ね？」

あんなこと言ってるけど、どうする？　って、アーメットが僕を見る。アーメットは僕の怒気に気づいてない。兄弟のスキンシップを邪魔するのも悪いなあという顔をしている。

「アーメットが一緒じゃなきゃ、僕、兄様と寝ない！　ジライの宿に泊めてもらう！」

あからさまに迷惑そうな声をあげる王宮付き忍者頭。

あそこまで言うんじゃしょうがないかと、とりなしをしを始めるアーメット。

チッ。ガジャクティンを精神的に責めた上で、カルヴェル様に何か体に仕込まれていないか徹底的に調べてやろうと思ったのに……

まあ、今日やると、怒りのままにやりすぎるような気もするし……

三人で寝るというのもいいか……

正直、嬉しいし……

分身を皆に同行させてたから、シャイナ皇宮以来、僕本人はほとんど別行動だった。

アーメットの寝姿とか、目の毒とは思うけど……ああ、でも、護衛役だから眠ってはくれないかあ……

うん。ガジャクティンを調べるのは、又、後日で……

＊　＊　＊　＊　＊

デバガメ忍者が帰って来た。

基本、セーネと入れ替わる。必要に応じては別行動をとり、セーネに護衛役に復帰してもらうのだそうだが……

ジャポネにいる間、あのド変態と同じ部屋かと思うとうんざりだ。しかし、ほっといても物陰から覗くのだから、最初から女の振りをするあいつと同室となったとて差はない。

どうせ、あいつはずっとラーニャの側にいるのだ。着替えや、風呂など、あいつに見られては困る事をする時は、ラーニャから離れればいいこと。

あいつは、ラーニャ以外の人間には関心がないのだ……

ラーニャ達には話していない事がある。

『極光の剣』に継承者と選ばれる前の事だ。

私は女としては、剣を学び過ぎた。同年代の女達が嫁ぎ、子をなしても、尚、私は男達と混じって剣術修行に明け暮れていた。

若者の中に、女が一人混じるのだ。いかに男装で通そうとも、剣仲間は私を女として意識し、性的なからかいをしかけてきたり、恋

の相手としようとした。
剣の道を極めたい私には、修行仲間の感情はうっとうしいばかりだった。
だから、誓いを立て、その誓いを剣仲間にも聞かせた。

『私の操は、私以上の実力の戦士に捧げる。私の目にかなう者が現れぬ限り、穢れを知らぬ身で神の戦士として戦う』……と。

この私の誓いを尊重し、結婚後、ハリハラルドは私を処女妻としておいてくれた。彼の剣の実力は私には及ばない。『知恵の指輪』を受け継いで舅殿のような魔法戦士とならぬ限り、ハリハラルドでは私に勝てぬ。
舅殿は私の誓いを無効だと考えた。一介の戦士であった時代と、アジの王たる立場に立った後では、義務が異なる。王には豊穣の義務……すなわち、子作りの義務がある。
誓いを破るのが嫌ならば、誓いに新たな条件を加えろ、そうでなければおまえの処女は俺が貰う。と、舅殿は私を責めた。ハリハラルドが止めてくれねば、舅殿に女にされていただろう。
それで仕方なく、私は条件を加えた。

『私の操は、私以上の実力の戦士に捧げる。私の目にかなう者が現れぬ限り、穢れを知らぬ身で神の戦士として戦う。しかし、アジの族長となった今、魂が求める相手とであれば神聖な子作りをなす』

魂の求める相手＝惚れた相手。
舅殿は私とハリハラルドを相思相愛にしようと、あれこれ仕掛け

てきた。
ハリの跡継ぎたる惣領とアジの王の証を継いだ私との間の子供が、
欲しいゆえに。

この誓いのせいで……

今、困っている。

今、私の身近に『私以上の実力の戦士』がいる。
私の剣術がまったく通用しなかった相手。
剣を抜きもせず、私の攻撃を全て避けた男……

忍者ジライが……側にいるのだ。

あんな変態、冗談じゃない。
ラーニャと国にいる妻以外の人間には冷淡で冷酷で……
道徳心の欠片もなく……
神族を敬う心もなく……
ラーニャに殴られ罵倒されて喜んでる変態なんか、御免だ。

だが……
戦士としての技量は素晴らしい。まともに立ち合ってはいないが、
勝負となったら百本中、百本、私が負けるだろう。
更には……

顔が……
女性のように美しく、それでいて女々しいわけではなく、凛とした気品があり、白い髪も肌も人離れしており、まるで精霊のようで……目を奪われてしまう。

違う！
断じて違う！
あんな変態が『魂の求める相手』のはずがない！

ラーニャも言っていたではないか。ジライなんか無視していい、『世界は広い……強く逞しく人徳にあふれ正義に燃える従者もいる……』と。
世界は広いのだ、ハリの村のような狭い世界とは違う。強い男ならばまだ数多くいる。強く人徳にあふれる好人物だっているはず。
世界の何処かで、『魂の求める相手』と出会えるかもしれない。
そうだ、立ち合ってはいないが、あのシャイナの格闘家シャオロンだって、私より強かった。
あの男の格闘は見事なものだった。
しかし、あの男は……男という感じがしなかった。いや、牡ではないというべきか。非常に淡泊そうで、神官のようだった。
正直、ときめかなかった。

いや、違う！
だからといって、あの変態にときめいているわけではない！
気になるだけだ、あいつが側にいると……
素顔が、その……雪の精霊のようで……いや、あの気性からいうと、吹雪を司る風の精霊か……

冷たく、無慈悲で、全てを凍らせ、切り裂き、葬る、圧倒的な力……

死者の亡骸を包みこむ死を司るもの……

人の力では御する事かなわぬ、美しい吹雪の化身……

あああああああ！

だから、違う！

あんな変態、私はどうでもいいんだ！

＊　＊　＊　＊　＊

私は馬上であくびをかみ殺した。

このところ、毎晩のように、アジンエンデが夜中にうなされる。

うるさくって目をさますと、『ラーニャ様の安眠を守る為』とか何とかぬかす変態が、アジンエンデの顔に濡れた布のせようとしてたり（暗殺する気か、馬鹿！）、アジンエンデをスマキにして部屋から放り出そうとしたり、アジンエンデを縛って猿轡を噛まそうとしてたりする場面にでくわす。

いちいちアレだめ、これも駄目って言わないと、いけないんだから、もう……ジライの馬鹿は面倒くさい。

アジンエンデが夜中にうめいていてもほっときなさいって言ってるんだけど……私の為だって言って、アジンエンデの口をジライはどうにかふさごうとする。

夜中、うるさいのぐらい大目にみてやればいいのに。

慣れない南の国に来て、アジンエンデもいろいろストレスためてるんだろう。特にジャポネはせっかく覚えた共通語がほとんど通用しないしね。家に入る時に靴を脱ぐとか習慣も独特だし。

お父さんの赤毛の戦士アジャンの行方も、ちっともわからないし。お父さんが魔に走るようなら『極光の剣』をもって止める覚悟で南に来たのにねえ。

私とジライと三人の相部屋ってのもストレスの原因なのかも。とはいえ、ジライはたまに偵察とかでいなくなるし、アジンエンデが同室の方が護衛の観点からすると便利なのよね。

でも、つらそうだしなあ。一人部屋になってもらった方がいいのかなあ。

私同様、夜、熟睡できないアジンエンデも眠そうだ。

私達は、今、キョウを目指し、街道を西に進んでいる。

途中、山賊が出た。でも、たいした数じゃなかった。ジライと義弟達があっさりと退治した。私、出番なし。

ジャポネって大魔王教徒があれこれたくらむ国って事前情報だったんだけど……

今、拍子ぬけしちゃうぐらい平和なのだ。

ショーグンから貰った資料にも、情報屋から買った情報にも『大魔王教団は現在、表だって活動していない』って書かれていた。

大魔王ケルベゾールドが復活した直後は、やった～！　これからは俺達の時代だぜ！　と、ばかりにジャポネの大魔王教団は各地で大暴れしたらしいんだけど……

各地のサムライ達とこの国の神官職の大魔法使いによって、あっけなく沈静化されてしまったらしい。

そうなのだ、今、ジャポネには大魔法使いがいるのだ。

神官タカアキ。『破魔の強弓』の使い手にして、ミカドに仕える神官長。んでもって、ミカドの従兄なのだそうだ。つまりは、皇族。

そんな偉いさんが率先して、大魔王教団退治をしているのだ。

タカアキの魔法の才能は母方の血で、タカアキの母方のおじいさん達は神主（ジャポネの古代神に仕える神官）なのだそうだ。

移動魔法をバンバン使えるタカアキが、どっかで大魔王教団が暴れると、自身か母の一族の者をその場に送りこんでドデカイ浄化魔法で悪を一網打尽にしてしまうのだとか。

そんなスーパーな大魔法使い様とその親族がいるなんて、ジャポネに来るまで、私は知らなかった。

タカアキがどれぐらい大魔法使いかというと、この世で三本の指に入るレベル。その超大魔法使いに、最近なったらしい。

この三本の指に入るレベルってどういうものかわかんないので、私はガジュルシン（本人はインディラ総本山にお籠り中。なので分身）に聞いてみた。

したら、利用可能な魔力量が多い人間のトップ三（スリー）が、三大魔法使いになるのだと教えてくれた。

魔術師協会本部には魔力を測る超巨大な魔法水晶があって、それが協会に不定期にお告げとして三大魔法使いを告げる。水晶は世界中を探知し、世界中の人間の魔力量を純粋に測るだけの単純な仕組みなのだそうだ。そこに、政治的思惑はない。北方の魔法使いだろうが、魔術師協会未所属の魔法使いだろうが、構わず教えてくるらしい。

水晶が伝えてくるのは、居住している国と名前と魔力量だけ。年齢、人相、性別、得意魔法等々の情報は教えてくれないので、どんな魔法使いなのかはわからないみたい。

現在の三大魔法使いは、シルクドのエルロイ、ケルティのハリハールブダン、ジャポネのタカアキ。

ガジュルシンが言うには、エルロイは二百年以上ずっと三大魔法使いな凄い人らしいんだけど、残り二人はコロコロ変わるらしい。

そのうちの一人は、アジンエンデのもと舅の、ちっぴり変態なケ

ルティの上皇様。上皇様の場合、本人の魔力は微々たるものなんだそうだけど、『知恵の指輪』という超グレイトな魔法道具を持ってるおかげでのランクインだ。その時点で使用可能な魔力量を単純に測って、三大魔法使いは決まるらしい。

で、残り一人がタカアキ……

と、聞いた時は、あれ？　と、思った。

何でそのランクづけにカルヴェル様がいないの？　と。

それに対しは、カルヴェル様は規格外なんだという答えが返って来た。

水晶はしょせん、人の手で作られたアイテム。能力にも限界がある。多分、カルヴェル様は計測不能なのだろうと、ガジュルシンの分身は言った。魔力量を測れないから、その能力を他と比較できず、ランキングから漏れるのだろうと。

はあ、人間級じゃないってこと？　どんだけ凄いの、カルヴェル様……

まあ、ともかく、その三大魔法使いの一人が親族を率いてジャポネで大暴れしているわけだ……

キョウでミカドに御挨拶をしたら、もうとっとと出国しちゃってもいいんじゃないかと思う。ジャポネは大魔法使いタカアキ様とその親族にお任せして……

大魔王の本拠地がわかんないから、行先なんて特に決まってないけど……

ジャポネにいても活躍のしようがないしねえ。

こんな拍子抜けの国なら、ジライ、無理して入国する事なかった

わよねえ。

てか、入国自体、しなきゃ良かったのに。

ジャポネ行きを決めたのは、ガジュルシンだ。

まあ、もともと、私も行きたいとは言っていたけど、それは大魔王教団が暴れてると思ってたからだ。平和な国ならスルーして良かったんじゃないかと思う。

ガジュルシン、何でジャポネに入国したかったのかしら？

ライバル登場！　姫勇者ＶＳ姫巫女！（前書き）

ガルバの視点の『御身様』はナラカを指す時とナーダを指す時があります。どちらの『御身様』のことかは話の流れからご推測ください。お願いいたします。

ライバル登場！　姫勇者ＶＳ姫巫女！

ジャポネでは東と西で言語が違う。
おおまかに言えば東西で二言語、正確に言うと確認できてるだけで七十八に言語に別れているそうだ。
島国の北と南では、それこそ異国語並に言語が違う。だもんで、島国の北と東はオオエの言語を共通語とし、西と南はキョウの言語を共通語として意志の疎通をはかっているんだとか。
同一民族、同一の島国に暮らしてるくせに、言語が統一化されてないなんて……ジャポネって変。
ショーグンの配下の地方領主達が自分の所領で『お国言葉』という独特な言語を使わせたり、身分によって言語を変えなきゃいけないとかで、少なくとも言語は七十八種類あるのだそうだ。
もう正気とは思えない。ついてけない。
こんな変な国だから共通語も通じないんだ……

キョウはきちんと区画が整理された、綺麗な都市だった。
せかせか歩いている人間が多かったオオエに比べ、何っていうか、のどかな、ぽややんて雰囲気。
背が低くて痩せた人が多いのは一緒だけどね。
都市としての歴史はキョウの方がずっと長いんだって、ガジュルシンの分身が教えてくれた。
オオエは誕生から三百年、キョウは千年。キョウの歴史は大魔王がこの地上に現れる前からってわけだ。それは古い。
今日は、私達はキョウの街のお宿に泊まる。サムライや貴人用のお宿で、普通のお宿よりはちょっぴり豪華な造り。そこでミカドからの使者を待つのだそうだ。
私名義の手紙をガジュルシン（分身）が何度か、ミカドのお城に

あたる御所に送ってる。けど、キョウに入っても迎えはなかった。
『宿屋から改めて来訪の意思を伝えれば返事はくると思うけど』と、本人そっくりの分身は、やはり本人のような苦笑の表情を浮かべ『キョウの人はとってもおっとりしているから、返事が明日、明後日にくるとも限らない。のんびり待とう』と言った。
まあ、いいんだけどね、今、急いでどっか行かなきゃいけないってこともないんだし。

早いところ、共通語が通じる国に移動したいってのが本音だけど。

＊　＊　＊　＊　＊

正直に言うと、俺はガジュルシンの分身が好きじゃない。
姉貴は鈍いから、ガジュルシン本人でも分身でもどっちでも一緒だわ、なんて言う。
だけど、本人と分身では全然違う。一緒にいればすぐにわかる。
分身は、疲労知らずで、飲食睡眠を必要としない。それだけで非人間的なのに、更に、動きがおかしい。周囲に人がいるかいないかで、動きが全く変わる。
人の目のない時、分身は固まる。本を読んでいる態を装っている時なんか、その姿勢のまま何時間も動かなかったりする。
布団に入っている時も、そうだ。目を閉じ、石のように動かない。けど、周囲に探知の魔法を走らせているらしく、誰かが周囲に接近すると、急に寝息をたてはじめたりする。
人形が生きてる振りをしているみたいで、気持ち悪い。
とはいえ、分身は、インディラの総本山にいるガジュルシンと繋がっている。分身と会話中に、突然、本人の意識が憑依してくるこ

とがある。前日に分身に尋ねた事を、翌日、分身の口を使って本人が答えてきたりもする。
分身もガジュルシンの一部なんだ。頭ではわかっている。でも、側にいるのが不快なんだ。
ガジュルシンの偽物がガジュルシンの振りをしているみたいで…嫌なんだ。

「ミカドの従兄弟の姫君？」
ガジュルシンの分身が眉をしかめる。本人そっくりな表情で。
「そんな高貴な方が、お忍びで僕等に会いに来たの？」
俺は分身に頷いてみせた。先ほど、宿の者と共にお伴のサムライと口をきいてきたばかりだ。
「従者はたったの二人、サムライと神官の男だ。姫君本人は笠に薄衣で顔を隠していたので、顔は確認できなかった。着物は豪華なものだったけど」
サムライから渡された手紙を、俺はガジュルシンに手渡した。
分身は中を改めた。
「ミカドの手跡に間違いなさそうだね……」
「何って書いてあるんだ？」
「御所でのミカドとの面会の日取りは、ミズハ姫が決められるそうだ。参内の意思のある者を全て一室に集めて欲しいとある」
「ん？」
「僕等と会ってから、託宣をするのだそうだ。ミズハ姫はタカアキ様の妹君、優秀な巫女なんだ」

「へぇえ、ミカドの従兄弟が巫女、んでもってその姫のお兄さんのタカアキが三大魔法使いなの」
その話は前にしたはずだけど、姉貴はもう忘れてたのか、妙に感

心していた。
「そのお姫様って美人？」
廊下を歩きながら、どうでもいいことを聞いてくる。
姉貴の他に、アジンエンデとガジャクティンと親父も拾って、下段の間へと向かう。上段の間で待つミズハ姫と対面する為だ（オオエの城と違ってこの宿屋の貴人と面談用の部屋は、上段・下段の二部屋構成で成り立っている）。
姉貴はいつもの白銀の鎧姿、護衛役のアジンエンデは『極光の剣』を背負っている。が、ガジャクティンは丸腰、くノ一セーネに扮しているインディラ忍者姿の親父も『ムラクモ』を部屋に置いてきている。
「素顔は見えなかった」
「年は幾つ？」
「はっきりしない。タカアキと同じかそれより下」
「え？」
「戸籍上、タカアキに妹はいないんだよ。だけど、タカアキの幼児の頃から、タカアキの側にはミズハ姫がいた」
「……どういうこと？」
「庶出の姫とも、不義の子とも、言われてる。が、真実はわからない。皇族側から何のコメントもないんだ。有力な説は、タカアキとミズハ姫、双子だったんじゃないかっての」
「双子なら何なの？」
「ジャポネじゃ縁起がよくないんで、双子が生まれると片っぽを養子に出しちゃうんだ。で、養子に出したものの、成長したミズハ姫が優秀な巫女だってわかって養子先から連れ戻したんじゃないかって言われている。皇室は神事を司るから、神官の才能のある子供は大事にされるんだよ」
「へぇぇ」
下段の間に近づいた時だった、背後から変な音がしたのは。
振り返ると、アジンエンデが床に尻もちをついていた。真っ青な

顔で、下段の間を指さしている。
「そっ……こ、に……入るの……か？」
がくがくぶるぶる震えている。
綺麗な顔が、妙にひきつっていた。
顔も青ざめている。
睨むように、下段の間の入口の襖を見ている。
「どうかしたの？」
と、姉貴が近づくと、アジンエンデは突然、立ち上がった。
「帰る！」
「へ？」
アジンエンデは目に涙を浮かべ、情けない声で叫んだ。
「私は部屋に帰る！　帰らせてもらう！」
長い赤髪を揺らし、アジンエンデは一目散に廊下を駆け戻ろうとした。
したんだが……
「ぐっ」
素早く逃走路に回り込んだ親父に鳩尾を殴られて、アジンエンデの逃走は失敗。
意識を失って気絶した彼女を、親父がひょいと抱えあげる。『極光の剣』ごと大柄な彼女を軽々と抱く。意外と腕力あるなあ、親父。
「さ、参りましょう」
と、親父が姉貴に声をかける。
参内の意思のある者を全員連れて来いってのがお姫様の命令だから、アジンエンデを部屋に帰らせるわけにはいかないわけだが……あいかわらず、親父は無茶をする。
けど、何で急に部屋に帰るって言い出したんだ、アジンエンデ？
俺が首をかしげた時だった。
下段の間から悲鳴が響いた。
ガジュルシンの声だ。
あまり長く姫君をお待たせするのも失礼なので、インディラ第一

王子のあいつが先行してご挨拶に伺っていたのだ。
急ぎ、走り、襖を開ける。
俺は信じられぬものを、見た。
俺達の方に背を向けたたずむガジュルシン。苦痛の声をあげ身をよじらせる彼の、その背から指が生えていたのだ……血まみれの細い指が四本、ガジュルシンの身体を貫き通している。
ガジュルシン！
俺は『虹の小剣』を抜き、跳躍しようとした。
が、肩をがっちりとおさえられ止められる。振りかえると、親父がいた。アジンエンデはガジャクティンに向けて放り投げたようだ。
何故、止めるんだ？
ガジュルシンが……
「よう出来とるわ」
若い女の声がした。耳に心地よく響くくくせに、ひどく冷淡な印象の声だ。
「苦痛に喘ぐ顔も、ええものやわ」
ガジュルシンの体が一瞬でしぼみ、消え失せる。髪の毛も衣服の切れ端すら残さずに、この世から消滅した。
後には……
血まみれの左手を突き出している女が残った。豪奢な模様の着物も肘のあたりまで血まみれ、血の飛沫が衣装を汚していた。
豊かな黒髪の、美しい女性だった。しかし、異常なほど肌が白い。白粉のせいだけじゃない。西国人よりも肌そのものが白い。まるで白子の親父の肌のようだ。血行が悪いのか青白くさえ見える。
ほっそりとした涼しげな眼を更に細め、血のごとく赤い唇に微笑を浮かべて、妖しく微笑んでいる。
「ガジュルシンは……？」
その女が更に口を横に広げる。にぃぃと笑うように。
「食べさてもろうた」
食べた……？

ガジュルシンをこの女が……？
全身を怒りが駆け抜けた。
食べただと！
俺のガジュルシンを！
斬りかかろうとした時、突然、横から声がした。
「美味でしたか？」
よく知った声だった……
俺は茫然と視線を向け……
不快そうに眉をしかめて佇むガジュルシンを目にした。
え……？
「そもじの魔力は悪うない。分身やなく、直接、そもじさんからもらいたいものやわ」
女が楽しそうに笑う。
そうか……
分身だったんだっけ……
この部屋に向かったのは、ガジュルシンの分身だ。
俺の横のガジュルシンが本物だ。分身をこの女に喰われたから、ガジュルシン本人が総本山から移動魔法でここまでやって来たんだろう。
この女に喰われたのは、分身だったんだ……
良かった……
深く安堵の息をついた俺の耳元で、親父がつぶやく。
「未熟者」
くっ……
この部屋にいたのが分身だっての忘れてたのは確かにミスだけど……
俺、ガジュルシンの影だったんだ……いや、役職ははずされたけど、今でも影のつもりだ。
主君を殺される姿をみせつけられて、冷静でいられるものか……
「ふん」

女は不躾に俺達をジロジロと見渡した。
「もう分身はおらぬようやな。つまらんわぁ。いたら食べてやろと思うたのに」
なに？
と、いうか魔力を喰うって、この姫、何者？
て？
あれ？
血が消えた。
袖が真っ赤に汚れていたのに……血が跡形もない。
魔力で消したのか？
「はよう部屋に入れ、下郎ども。このミズハをいつまで待たす気や？」
下郎って……
インディラの王族の方々が三人もいるんだけど……
しかも、そんなセリフ、わざわざ共通語でおっしゃってくださって……
背後から凄まじい怒気を感じる。
ガジャクティンも、ものすご～く怒ってるようだが……
それよりも、姉貴が……
これはかなりヤバイことになる……

＊　＊　＊　＊　＊

「ミズハや。以後、見知りおきや、下郎ども」
誰が下郎よ！
この女、何サマ！
上座にデンと座っちゃってさ！　お伴のサムライと神官を背後に侍らせて！

私らは下段の間でこいつに対し正座（っぽい格好。あんな座り方、私はできないわ、今、白銀の鎧つけてるし）をさせられた。失神中のアジンエンデは部屋の端に寝かされているけど。

何でこいつに頭下げなきゃいけないのよ！

ミカドの従兄弟なんでしょ！　しかも、出生がはっきりしてない、あやしい姫なんでしょ！

こちとら、インディラ国王の息子と娘よ！　次期国王の第一王子だっているのよ！　明らかにこっちのが身分が上でしょうが！

優秀な巫女だか何だか知らないけど、ガジュルシンの分身を勝手に始末して、涼しい顔！

信じられない、なに、その厚かましさ！　ボージャクブジンさ！

ふてぶてしさ！

「さて……参内やったな……」

ジーッと私達を見回し、女はフンと笑う。

「いつでも好きな時に御所に参り。ミズハが許すわ」

はぁ……？

託宣するんじゃなかったの、このクソ女！

お伴のサムライが、高ビー女にボソボソと何かを言う。

女は大げさに溜息をついた。

「明日の午後でどうや？　昼過ぎより御所に参ればええ。明日があかんのやったら明後日にしい」

サムライに日時を決めておけと意見されたのだろう、女は話すのも面倒だが、仕方なく口をきいてやるという態度だ。

「それでは明日の午後、御所に伺います」と、ガジュルシン。

「さよか」

女は偉そうに頷いた。

「分身も、身代わりも許さんで。心しい。偽りは、麿（まろ）にはわかる。弟を身代わりにたてるやないで、醜女（しこめ）」

醜女（しこめ）……

誰が醜女よ！

全身がカッカッする～～～～
この女、すっごくムカつく。
言動も、顔も、雰囲気も、何もかもが嫌い。
ぶん殴りたい……
「どないした、そないタコのような赤い顔を見せおってからにして……醜き顔がより醜うなっとるやないの、穢れ女」
なっ！
「そもじが身代わりをたててたことに麿が気づいとるんで、驚いたんやな？」
「ンなことは、どーでもいい！」
私は声を荒げた。
「偉そうにしてるんじゃないわよ！　この白粉お化け！　あんたの不健康そうなその面（ツラ）が見ててムカつくのよ！」
女はジロリと私を睨む。
「化粧も知らぬ南国のイナカ猿が、面白い口をきくなあ」
「イナカぁ？　馬鹿言ってるんじゃないわよ、東の外れの島国の方がよっぽどド田舎じゃない！　あんたの方が、お山の大将だわ！」
「下品な口を使うんやない、姫勇者とやら」
「下品な顔を見せるんじゃないわよ、姫巫女とやら！」
上座の女がすっくと立ち上がる。
私も負けじと立ち上がる。
「姫巫女たるこのミズハを愚弄して、ただですむと思うてか、山猿」
「姫巫女？　おあいにくさま、こっちは姫勇者よ！　姫が付けばありがたがって、誰でも大人しくかしこまると思ったら、大間違いよ！　このブス！」
「ブスぅ？　そもじ、美醜の見分けもつかぬのかえ？」
「ブス、ブス、ブス、ブス」
「しょうもない山だし娘が！」
「ブス、ブス、ブス、ブス」
「その言葉しか知らぬのかえ！　この低能！　名ばかり勇者！」

ミズハにはサムライと神官が、私にはガジュルシンとガジャクティンが、気を静めろととりすがる。
でも、もう止まらない。
「姫巫女たる麿は全てを見通すんや。そもじなんぞ、『勇者の剣』に嫌われた無能勇者やないか！」
「ブス、ブス、ブス、ブス」
「えぇ～い、黙りゃ！　そもじが姫勇者なんて滑稽やわ。その自称、犬にでもやった方がよろし」
「自称じゃないわ、『姫勇者』は、エウロペの国王陛下からいただいた尊称よ。あんたみたいな、自称姫巫女と一緒にしないでちょうだい、真似っこ～」
女はカッと目をむいた。
「真似はそもじや！　麿は前から姫巫女と呼ばれておるわ！」
「あ～～ら、そぅお？　そうだったの、ジャポネのド田舎女のあだ名なんて聞いたこともなかったわ。今日が初耳。大陸中でも、きっとそう。み～んな、あんたが私を真似て『姫巫女』なんて恥ずかしい呼称を始めたんだと思うでしょうよ」
「なんやて！」
「私、超有名な姫勇者だもの。島国の無名なイナカ巫女とじゃ、知名度が違いすぎて勝負にならないわよね、ごめんなさい。私のせいでパチモノだと思われちゃうわよね、ヒ・メ・ミ・コ様」

＊　＊　＊　＊　＊

異次元の暗闇の中に浮かぶ現実。
現実を切り取った映像をご覧になって、声をたてて御身様が笑われる。
黒の直毛で気味が悪いほど肌が白い妖艶な美女と、ゆるやかなウ

ェーブの入った黒髪の健康そうな美貌のラーニャ殿が、向かい合って唾を飛ばし合っている。
今にも取っ組み合いを始めそうな雰囲気だ。
御身様が現実から拾ってきた映像に、時々、雷が走る。
御身様がおっしゃるには、姫巫女の怒りが魔力と結びついてラーニャ殿を攻撃しているのだそうだが、ラーニャ殿は無意識にその全てを防御なさっているのだとか。『勇者の剣』から守護の力を引き出して。
二人を止めようとしているサムライと神官、そしてガジュルシン様（あああああ、理知的なお顔だ）とガジャクティン様（あああああ、凛々しいお姿だ）は、防御結界を張っている。結界無しで触れれば、落雷で丸こげ状態になるとか。
感情がたかぶれば周囲に雷を走らせるという姫巫女の噂、嘘ではなかったのだな。
水を統べる姫巫女。
三大魔法使いタカアキの妹とされているモノ。
やはり、バケモノであったか。

「残念」
御身様がパチンと指を鳴らされる。
「美形二人の殴り合いデスマッチが見られるかと思ったのに、お伴と従者達にひきはがされちゃいましたねえ。残念、残念」
ニコニコ笑いながら、御身様が映像を眺められる。
お伴と従者達が主人を無視して話を進め、先程の決めごと通り明日の昼過ぎに姫勇者一行は御所に伺うという事でまとめた。
姫巫女はお伴に連れられ、御所へと戻って行く。
映像はまだ宿屋の上段・下段の間を映している。
「さて」
姫巫女の無礼な態度にお腹立ちであろうに、従者としてラーニャ

殿の気持ちを鎮めようと頑張るガジャクティン様。お役目を忘れぬけなげさ。さすがは御身様のお子様！

　あああああ、なぜ、ガジャクティン様を殴るのだラーニャ殿！　ガジャクティン様とて姫巫女にはお怒りであったのだぞ。しかし、あの場で喧嘩をしかけても姫勇者一行に理なしと必死に怒りをのみこまれたというのに！

「さて……」

　あああああ、蹴りまで！　やつあたりならば、そこの東国忍者にしてくだされ！　なにゆえガジャクティン様に！

「さて！」

　プッツン！と……

　現実を切り取った映像が消える。

　異次元空間は元通りの闇へと戻った。

「……」

　たいへんご機嫌がよろしくない御身様が、わしをご覧になっておられる。

　しまった……夢中になって食い入るように映像を見つめてしまっていた……御身様そっくりなガジャクティン様が無体に扱われていたので、つい。

「申し訳ございません、御身様」

　わしはすぐさま平身低頭した。

　が、頭上からかかってくる声は、御身様の麗しくないご気分そのものの冷たい声であった。

「いっそ、あっちに行って第三王子をストーキングしてきてはどうです？　いいですよ、二晩でも三晩でも好きなだけあっちに滞在してらっしゃい」

「いいえ！　今はそのような遊びに興じている時ではございませぬ！　ジャポネでの作戦にこのガルバめをどうぞお好きにお使いください！」

「……」

お声すらかけてくださらぬ。
あああああ、この沈黙が怖い……

たっぷり五分ぐらい黙られてから、ようやく御身様はお口を開いてくださった。
「あぶり出しをしようと思うのです。が、さすがに御所はマズい。あそこは魔封じやら聖なる結界が山のようにありますからね。そこで……」
暗闇に地図と現実の映像、二つが浮かび上がる。
「姫勇者一行とタカアキを、ここにおびきよせます」
わしは土下座をしたまま、上目づかいに地図と映像を見つめた。
「適当な魔をここで暴れさせ、頃合いをみて私の分身を出現させます。キョウの守護に命をかけているタカアキはもちろん、姫勇者様達も必ず罠にかかってくれます」
ここ一か月ほど、御身様はキョウの街に分身を出現させ、わざと人目に触れるような場所で騒動を起こしたりしている。
情報屋組織が、僧侶ナラカの出没情報を、姫勇者一行に渡している事だろう。
御身様抹殺を望まれているガジュルシン様への挑発……姫勇者一行をジャポネに来させ、駒として使用する為の策じゃ。
ガジュルシン様は御身様に似た賢い御子じゃが、御身様に比べまだまだひよっこ。
御身様が姫勇者一行をジャポネに呼びこんだ理由など、まったく推測できておらぬじゃろう。
「ガルバ、あなたに頼みたいのは、大魔王教団への情報漏洩です。もったいぶって情報を売って来てください。二の書の持主である男がここに現れるだろうとね」
「承知」
「さてさて、うまく踊ってくれますかね、ジャポネの方々と姫勇者

一行は」

臈たけたお美しいお顔に、月のように清かな笑みを刻まれる。何度、目にしても、溜息が漏れてしまう。御身様ほどの美貌の持ち主は、この世に二人と居らぬ。

御身様の前では、あの気色の悪い姫巫女も、姫勇者殿も、ガジュルシン様も霞んで見える。御身様が一番じゃ。

「この地でラーニャ様は、更にすごい勇者となりますかねえ、楽しみです」

少しご機嫌が直ったのか、御身様の笑みが少し楽しげなものに変わる。

「まことに。申し分のない敵となっていただければ、ありがたいですなあ」

わしの言葉がお気に召したのか、御身様の笑顔が一層、明るいものとなる。

姫勇者一行に、タカアキに姫巫女……御身様の為、働いてもらう。

わしの口にも笑みが浮かんだ。

ライバル登場！　姫勇者ＶＳ姫巫女！（後書き）

次回からは新章に入りますが、今のところ章名は未定。
最初の話は『初恋の味？　触れ合う心！』。ちょっぴり百合っぽいようなＢＬっぽいような展開もあります。

エセ宮中京言葉えらそうバージョン楽しかったけれども、嘘まんさいです。次章も嘘っこ口調続きますが、関西の方、どうぞ、あたたかい目でお見逃しください。

＊　＊　＊　＊　＊

明日からムーンライトノベルズに『女勇者セレス――ジライ十八番勝負』をアップします。八・九番勝負をアップしたらラーニャちゃんに戻る予定です。

初恋の味？　触れ合う心！

「私は行かない！」
泣きそうな声で、アジンエンデが叫ぶ。
「ラーニャ達だけで行け！　私は留守番をする！」
さあ御所まで向かいましょうとなったら、これだ。
五、六才の駄々っ子じゃあるまいし、廊下の大きな柱にしがみついて外出拒否って……本気？
妙に余裕ぶっこいた、いかにも姉御！　って感じで私を護衛していたアジンエンデが……
ガジャクティンにひっぱられても、やだやだやだやだとばかりに激しく頭を振って、必死に柱を抱き締めてる。
この場所、通行の邪魔だと思うけど……今は遠巻きに見てる旅館の人にじきに文句言われるだろうなあ。
アジンエンデ……
壊れちゃった……？
熱でもあるの……？
「そういうわけにはいかないんだよ、アジンエンデ」
困ったようにガジュルシンが、手紙を彼女に見せる。
「ミカドからの手紙だ」
ジャポネ語を読めない彼女（私も読めないけど）に、ガジュルシンが内容を要約して伝える。『決められた期日に、姫巫女の許しを得た者は一人たりとも欠けることなく参内せよ』、そんな内容らしい。
「私はあの部屋に入りたくないと言った！」
あの部屋というのは、姫巫女が居た上段・下段の続き部屋のことだ。
昨日、託宣するはずに来たタカビー女は何もせず、『明日か明後日』つまりは今日か明日に部屋にいる者、全員、御所に来いと言っ

たのだ。その際、本人が来いとも言っていた。身代わりなんぞ絶対立てるな、と。

だから、私は姫勇者スタイルで行く。アーメットとジライはこのまえと同じ、インディラ忍者装束姿だ（ジライはジャポネに来てないって事になってるので、東国忍者姿じゃないし『ムラクモ』も装備してない）。

で、『勇者の剣』はガジャクティンが背負っている。

「君の了承を得ないで部屋に連れて行った事はすまないと思う。でも、今は勇者の従者として」

「おまえ達、おかしい！」

柱にしがみついたまま、アジンエンデがキッ！　と、私達を睨む。

「何で平気なんだ？　あんなバケモノがいる場所になど、死んでも行くものか！」

バケモノ……そうね！　その通りだわ！　バケモノだったわ、あのクソ馬鹿女！　ジライと同じくらい肌が真っ白っというか青白くて、厚化粧。髪は黒かったけど、あいつも白子じゃないかしら。顔も姿も態度も声も、みんなムカつく。魔族並に嫌い。

「バケモノだってのは同意するわ！」

私は拳を握り締めた。

「でもね、アジンエンデ、だからこそ、御所に行かなきゃいけないのよ！　あの白粉オバケに『麿（まろ）に恐れをなして逃げたんやな』とか嘲笑われたくないもん！」

「嘲笑われてもいい！　私は行かない！」

むぅ。

「あんな恐ろしい気のもとへ行くものか！」

気絶させて連れてくしかないか……

目でジライに合図を送ると、変態忍者は頷きを返した。

が……

あれ？

兜と口布を外して、アーメットに預けちゃった？　ジャポネ人と

同じ色の肌に染め、黒の直毛のカツラ被って、薄化粧をしている。
女性っぽく見える。そっか、くノ一のセーネの役だからか。本人には全く似てないけど。
何をする気だろ？
私もガジュルシンもガジャクティンも、アーメットですら、ジライの意図はわからない。
だから、ただ、見守ってしまった。
アジンエンデのそばに膝をついたジライが、彼女の顎をとって顔の角度を変えさせて……いきなりムチュ～と、アジンエンデの唇を奪うのを。

へ？

頭が真っ白……

突然、目の前で始まった濃厚なキスシーンに、私達は硬直する。
黒髪の忍装束おねーさんが、赤毛の勝ち気そうな娘さんを押さえつけてキスをしている……
アジンエンデは瞳を大きく見開き、喉の奥で声を鳴らし、暴れている。
しかし、彼女の抵抗などものともせず、抱き寄せ、顔の角度を変え、ジライがちゅーちゅーとアジンエンデに接吻する。
くちゅくちゅねちゃねちゃ、なんかイヤらしい音がする。
アジンエンデの顔は、真っ赤だ。
その緑の瞳は、やがてとろんと濁り……
暴れていたアジンエンデの体から、くたっと力が抜ける。
こっ……これが、もしかして……落ちたってヤツ？

私、箱入り姫だから、濡れ場って見たことないのよ！　想像力は逞しいんだけどね！

お母様のプレイルームを覗いた事はあるものの、すぐに見つかってお仕置きになっちゃったから……

こういう本格的なキスを見るのは初めて！

いやん、ドキドキしちゃう。

アジンエンデが無抵抗になっても、ジライは、尚も、アジンエンデと口づけをしている。

何か……

胸が苦しくて、息まであがってきちゃう……

綺麗……

女同士の愛の世界っぽくって……

倒錯的で素敵……

「何してるのさ、ジライ！」

お父様の声……？

「アジンエンデに何をしてるんだよ！」

顔を赤く染め、泣きそうな顔でジライに怒鳴っているのは……

お父様じゃない。

ガジャクティンだ。

ジライは横目でチラリと私の義弟を見てから顔を離し、ガジャク

ティンに対してではなく、ほんわ～とした真っ赤な顔のアジンエンデに言った。
「きさまの内は、我が気に満ちた」
そう言ってから、不敵に笑う。
「我が気に染まったおまえは、誰からも狙われぬ」
なんというか悪魔的な笑みってヤツ？　魂を抜かれたようにアジンエンデはただボーッとジライを見ている。
「充分に送ってやったが……欲しいのなら、もっと与えてやる。他の口からでも、な」
「ダメ～～～～～！」
ジライを突き飛ばすようにして、ガジャクティンがジライとアジンエンデの間に割って入る。ジライから守ろうと、彼女を必死にその腕に抱く。
「アジンエンデはそういう女性じゃないんだ！　二度と、軽々しく触れるな！　ジライでも許さないから！」

ズキン……と、胸が痛んだ。

何でかわかんないけど……

息をするのすら苦しくなった。

ので！

とりあえず、思いっきりジライを右拳でぶん殴っておいた！

「このド変態！　私の友達に何をしてるのよ！」

＊　＊　＊　＊　＊

「アジンエンデめが姫巫女の『気』にのまれて怖気づいておりましたゆえ、対抗できるよう我が気を送ったのです。そうせよと、ラーニャ様のお目が」
「命じてない！」
「しかし、あの場であのようなお目をされては」
「あんたなんか、忍者失格よ！　主人の意図も汲めないゴミ忍者なんかいらない！　このボケ！　カス！　マヌケ！　色ボケ！　二度とそのアホ面を私の前にさらすな！」
「あああああ……」

いや、姉貴、ゲシゲシと踏んづけながらのその罵倒じゃ、罰になってない。親父にはご褒美だから……。

俺の兄弟達も、いつの間にか廊下にできた人だかりも、みんな、女同士（親父が女装してるんで）のラブシーンを見せつけられたみたいに思ってる。
けど、あの接吻に関しちゃ、親父は別に変な事はしていない。
忍者は気を練って、忍法を使う。魔力ではなく『気』をもって忍法を行使するのだ。親父は有事に備えて最低五つは大技が使えるように、気を練っている。俺もそれには及ばぬものの、三つは大技を

使える状態を保っている。
さっき、親父は自分の気の一部をアジンエンデに分けた……本当にそれだけなんだ。
忍者間では練った気、つまり、練気（れんき）を他人に譲る事がたまにある。でもって、練気の受け渡しに、口吸いやら性交関係の接触を用いるのは普通なんだ。
俺も親父の口から練気もらった事がある……みんなの反応が怖いから、今はあえて伏せておくが。
練気は房中術（性技）から発達した法だけに、理論も用い方も、結構Hだ。その成り立ちの妖しさから、練気（れんき）や忍法を邪法と混同する学者もいるぐらいに。

と、まあ、今となっては、何で、親父があんな行動をとったのかわかるんだが……
さっきは駄目だった。
いきなり目の前で、実の親が身近な女の子と濃厚なキス・シーンを始めたんだ……度肝ぬかれて固まったってしょうがない……
練気をもらった事はあるけど、親父が他の奴にやってるのを見るのは初めてだったんだ。

俺以上に、後宮育ちの王子様・お姫様はショックだったはず。
練気の受け渡しなんて、忍者じゃなきゃ、普通、知らないだろうし……童貞&処女だもんな。
ガジュルシンはまだ茫然としてるし、親父を踏む姉貴の顔も紅潮している。
それにガジャクティンも、顔が赤い……『しっかりして』と、アジンエンデの頬をぴたぴたと叩いている顔は、すげぇ必死だ。
けど、そうか……

そうだったのか……
ガジャクティン、アジンエンデが好きだったのか……
このところ、そういういや、よく一緒に居たもんなあ、武術鍛練とかで。
昔っから、勇者オタクで……女の子なんてつまらないと、見向きもしなかった、あの小さかったガジャクティンが……
初恋か……
変わったのは、デカくなった体だけじゃなかったんだな……
義兄として、なんかちょっと複雑……

あ。
待てよ……
俺がこんだけ心乱れてるんだから、当然……
俺は慌てて、ガジュルシンを見つめた。
目を見開き、ぶるぶると震えている。頬は赤いけど、でも、こいつが、これほど不自然に体を揺らすのは、マズい時だ。インディラで政務見学をしてる時とかによくなった。
ストレスをためて自家中毒を起こす寸前なんだ。
自分を追いつめている時に、こうなるんだった。
限界が近い。
やばい！　平常心を忘れてた！
シャオロン様に言われてたのに、魔力の強い人間は周囲の影響を受けやすいんだって。
周囲が変だとダメージをモロに精神に被り、それが体調の悪化に繋がってゆくのだそうだ。
インディラでガジュルシンが政務見学の度に体を強張らせ倒れまくってたのも、周囲の攻撃的な悪意のせいだったんだって。
だから、側にいる俺が常に平常心を保って穏やかな精神に満ちた場を提供してやるべきだって言われてたのに……

周囲がこんな異常なピンク状態じゃ、真面目で潔癖なこいつは……
「ガジュルシン」
俺は、慌ててガジュルシンの袖を引いた。
その刺激に、ビクン！　と、ガジュルシンが体を硬直させる。
アーモンドのような瞳。その眼球がゆっくりと、俺の方へと向く。
俺と目と目が合った途端だった。
ガジュルシンは顔をボッと更に上気させ、力なくその場に崩れていってしまった。
うわぁぁぁ！　やっちまった！
ごめん、ガジュルシン！　俺、影失格だ！

そんなわけで……
二名急病につき、御所参内は明日以降という事になった……
全員で来いって言われてたし、アジンエンデはともかく交渉役が沈没しちゃ御挨拶も何もないしな……

俺は、ガジュルシンの部屋で彼に付き添っていた。
熱が出てしまったんだ。低くうなされてもいる。
兜も口布も外して、ガジュルシンの枕もとに座って、時々、額の濡れた布を替えてやっていた。

隣室から派手な音がした。
男子禁制！　って、姉貴が叫んでる。それに対しボソボソしゃべってるのはガジャクティンだ。ぶっ倒れた二人に気を使ってガジャクティンは小声になってるってのに、まったく姉貴は……
しばらくすると襖を開けて、左頬を押さえたガジャクティンが部屋に入って来る。又、姉貴に殴られたのか。

好きな女の子が具合が悪きゃ気になって当たり前だろうに、姉貴もひでぇなあ。
「兄様は？」
と、聞かれたので眠ってると答えた。
アジンエンデは？　と、問うと、
「セーネが介抱してる」
との答えが返った。
そばに来るな～！　と、怒鳴られて親父は姉貴の部屋に入るのも覗くのも禁じられた。親父はもちろん、男は誰一人、アジンエンデに近づけない気なんだろうけど、それにしてもなあ……
「……元気だせよ」
って言ったら、ガジャクティンは変な顔をして、細い目で俺を見つめた。
「僕は元気だよ？」
言い方がマズかったか。
「大丈夫だよ、アジンエンデは」
って言ったら、
「何を根拠に、そう言い切れるわけ？」
って、糸目でジロリと睨まれた。う～ん、扱いが難しいなあ。
「見てりゃわかるよ、アジンエンデはびっくりしただけだよ。大嫌いな親父に、急に変なことされてさ。気持ちが落ち着きゃ、元に戻るから大丈夫だって」
ジロジロと俺を見て、ガジャクティンは超不機嫌そうに言った。
「……アーメットってさ」
「ん？」
「馬鹿だよね」
「……」
うわ。ひさびさにきた。お子様独特の、傲岸な決めつけ発言！
「人間観察眼ができてないよ。向いてないんじゃないの、忍者？」
うわ、うわ、うわ。容赦ないなあ。

「そんなんだから兄様まで倒れちゃうんだ……」
え？
何で、そういう話になるんだ？
「あのさ……この後、兄様、多分、部屋を出てけって言うと思うけど、命令通りに行動しないでよ」
「何で？」
「兄様、本当は側を離れて欲しくないって思ってるから」
「……何で、わかるんだ、ガジャクティン？」
義弟は大きなため息をついた。
「そんなの兄様を見てればすぐにわかる事じゃないか。本当、アーメットもラーニャも馬鹿すぎて嫌になっちゃう」
プンと頬をふくらませて、ガジャクティンが襖を閉めて部屋を出て行く。
えっと……
俺が馬鹿すぎて、ガジュルシンからのサインを何か見逃してるのか……？
「……ガジャクティン？」
消え入りそうな小さな声がした。
「……そこにいるの？」
ガジュルシンはうっすらと目を開けていた。が、まだモノを目で捉えられていないようだ。帰り際のガジャクティンの声が耳にでも入ったんだろうな。
「……ガジャクティン？」
「俺だよ」
布団のそばに座り、ガジュルシンの視界に入る位置に顔をつきだした。
「ガジャクティンは出てった。部屋に居るのは俺だよ」
そのままボーッと天井を見上げていたガジュルシンは、しばらくして目の焦点が合うと、熱で赤くなった顔を更に赤くしてぶるぶると震え出した。

「出てって」
ガジュルシンは横を向いて額の布を落とし、頭から布団を被った。
「出て行って、アーメット……」
すげぇ、当たった。
ガジャクティンの言った通りじゃん。
て、事は出て行っちゃいけないわけか。
「早く！　出て行って！」
布団の中でガジュルシンが震えている。
このまんまじゃ、又、ストレスを溜めに溜めて意識失っちゃうよな。
仕方ない。
俺は掛け布団をひっぺがし、狼狽するガジュルシンを抱き寄せ、腕に抱いた。くそぉ、座っててもこういう体勢になると、こいつの方が背が高いのが嫌ってほどわかる。
「や」
ガジュルシンはびっくりして暴れたが、俺はぎゅっとその背中を抱いた。
こうすりゃ落ち着く。
悪い夢を見たって泣いた時も、寝つきが悪くってグズってた時も、俺が抱っこしてやりゃガジュルシンは落ち着いたんだ。
「やめて！」
もう子供じゃないんだってこのまえ怒ってたけど、俺にとっちゃ、昔も今も同じだ。
俺のガジュルシン。大切な俺の義兄。

「あぁ……」

あれ……？

俺と視線が合って、ガジュルシンは赤かった顔を更に更に赤くする。泣きそうな顔で視線をそらす。

「ごめん……気持ち悪いよね……」

うん、まあ……

気持ち良いもんじゃないな。

ガジュルシンの下腹部が、とても元気になっている。向かい合って抱っこしてやってるんで、俺の体にぶつかってくる。

そっか……

さっき、周囲につられて欲情しちゃったのか。

ンで、恥ずかしがって俺に出ていかせたがってたわけね、納得。

女性経験はないって言ってたしなあ。迫られた事はあったけど、うまくいかなかったって。

周囲の影響を受けやすい体質の童貞には、あのエロっぽい空気はたまんなかったろう。

「アーメットには迷惑をかけない……だから、ごめん……忘れて……」

小さく体を震わせながら、ガジュルシンが瞼を閉じる。まつげ長いなあ……

悲しそうなその顔が……

何とも……

かわいかった……

＊　＊　＊　＊　＊

え？

世界がぐるぐる回る。

そんな馬鹿な。
ありえない。
夢だ。
夢に違いない……

あぁ……

アーメットと唇が重なっている……

舌まで……

彼からこんな事をしてくれるなんて……

ありえない……

どれぐらい触れ合っていたのかはわからないけれど……
僕にとっては永遠とも一瞬とも思える時だった……

「ごめん……」
罰が悪そうな顔で、アーメットが僕を見る。
「何か、おまえさ……女の子みたいにかわいかったから、つい……」

かわいい……？
かわいい？
僕が？
今の言葉、もう一回、是非！
「俺も、さっきの馬鹿親父につられてたみたいだ……もうこんな事はしないよ、ごめんな」
え～～～～～～！
そんな！
絶対ありえないってことを、一回でもしてもらっただけで嬉しい。
嬉しいけど、でも、これきりだなんて嫌だ！
「待って」
離れようとするアーメットの背に、手を回した。
離れられたくない！
「謝らないで……」
捕まえはしたけど……
えっと……
この後、どうしよう？
「怒ってないのか？」
僕は、すぐさま頷いた。
「……嫌じゃなかったのか？」
首を傾げ、意外そうに、アーメットが尋ねてくる。
僕は頷きを返した。
「何で？」
『君が好きだから！』って、正直に告白できたらいいんだけど……わかってる。そんな事したら、破滅だ。アーメットは男同士は嫌いなんだ。
『気持ち良かったから。もっとして』なんて言ったら、色情狂と思われる。やはり、嫌われてしまう。
何って言えば……
「アーメットの……その……」

『気持ちが嬉しかった』でも変か……
でも、何か言わなきゃ……
僕は口元を押さえて、うつむいた。
「もらえて……嬉しかったから……」
意味不明！
支離滅裂！
アーメットは不思議そうに僕を見る。
うん、わからないよね。わかるよ、僕も自分が理解できない……
けれども、アーメットは、何かが合点いったらしく、ああ！　と声をあげた。
「気か！」
「え？」
「俺の気か！」
え？
アーメットがにっこりと笑って、再び僕に唇を重ねてきた。

ちょっと待って、そんないきなり！
心の準備というものが！

さっきよりも深く口づけをされる……

アーメットうまいなあ……
房中術修行の成果か……

意識が朦朧とする……

顔を離したアーメットが、僕の額に手を当てる。
「あれぇ？　もしかして、熱、よけい、あがっちまった？」
そんなの当たり前じゃないか……あんなに口を吸われたら……
「フラフラしてる？」
「力が抜けちゃったよ……」
「う～～ん？　逆効果？」
残念そうにアーメットが言う。
「口から俺の練気を送ってやれば、体力向上＆精神安定になるかと思ったんだが」
練気？
そういえば、ジライも、アジンエンデに気を贈る為に接吻したんだって言ってた……
気か！
「見こみ違いかぁ、ごめん、ガジュルシン」
「吐き気がおさまった！」
僕は拳を握りしめて、アーメットに力説した。
「直後はちょっと虚脱状態になったけど、急に、体中に力が漲ってきた！　アーメットの気を全身に感じる！」
「本当？」
半信半疑そうな彼に、畳みかけるように言った。
「アーメットの気と一緒なら、何でもできそうな気がする！　周囲がどうでも僕が僕でいられると思う！」
「そうか。少しでも役に立ちそうなら、良かった」
アーメットが笑う。
とても健康的に。
太陽のように。
あああああああ、何ってかわいいんだ！
僕はアーメットの背にまわした手に、力をいれた。
「もう一度、試したい……もう一回、気を送ってくれる……？」

僕の言葉を言葉通りに信じて、アーメットは望みをかなえてくれた……

欲深い僕のことだ。

キスだけでは、そのうち物足りなくなってしまうだろうけれど……

いいや……今は幸福に酔いしれておこう。

逃げ出したい！　あの妹にしてこの兄あり！

アジンエンデが変だ。
何を話しかけても生返事で、ボ～と座っていたかと思うと、突然、ポロポロ涙を流して泣き出したりする。
セーネが背中から抱っこしてあげて、ケルティ語で優しく囁いてあげている。ケルティ語だから、私には全然、わかんない。でも、慰めてるんだと思う。

考えたくない事だけど……
処女妻だったアジンエンデ……
口づけすらハリハラルドとしてなかったんだとしたら……

さっきのアレが初キッスなわけ……？

あの変態が初めての男性（ヒト）？

それは超かわいそう。
同性として同情する。

初めてのキスは好きな男性としたかったろうに。

たとえば……

ガジャクティンとか……？

ズッキン！　と、胸が痛む。

違うわ……

ガジャクティンはアジンエンデが好きみたいだけど、アジンエンデはあんなお子様、相手にしていない。年上のおねーさんとしてガキの面倒をみてやっていただけよ……アジンエンデは姉御肌で優しいから……それだけよ。

あああああ、でも……思い出すだけで腹が立つ。

ガジャクティンの馬鹿……本当、潔くない。ごまかしてばっかなんだもん、格好悪い。

お見舞いと称して部屋を覗こうとした義弟。『男子禁制！』って怒鳴って叩きだしてやったら、あいつ言うにことかいて……

『具合の悪い友達の様子を気にかけちゃいけないの？』とか言って！

嘘ばっか！　何が友達よ！

好きなら好きってはっきり認めなさいよ！　って言ったら……

『好きだよ。当然じゃないか。アジンエンデは初めてできた、本当の友達だもの』

とか、何とか、もう～～～～～～

絶対、認めようとしないのよ、みっともない！

去り際に、あいつ、

『いい加減にしてよ。友達だって言ってるだろ？　ラーニャの馬鹿。わからずや。顔も見たくない』

なんて言いやがって……

馬鹿！　馬鹿！　馬鹿！

ガジャクティンなんか大嫌い！
お父様そっくりな顔で、お父様そっくりな声で……
あんなひどい事、言わなくたっていいじゃない……

＊　＊　＊　＊　＊

「何か用？」
入室した我に対し、第三王子が棘々しい声をかけてくる。
「用がなきゃ出てってくれない？　今、ジライの顔なんか見たくない」
兜に口布のインディラ風忍者装束を着ていては、たいして顔は見えんと思うのだが。
「むろん、用にございます」
我は第三王子に対し、深々と頭を垂れた。
「宮中よりの使者にございます。ミカドが従兄弟タカアキ様が、病気見舞いにみえられております。上段の間にてお待ちですので、お相手を願います」
「僕が？」
不満そうに第三王子が、眉をしかめる。
「姫勇者はどうしたのさ？」
「ラーニャ様の方が使者のお相手に向いているとお考えでしたら、どうぞガジャクティン様からラーニャ様にお頼みくださいませ。私はラーニャ様のお部屋の五メートル四方への接近を禁じられておりますゆえ」
ますます不機嫌そうに、第三王子が眉をしかめる。
「いいよ。僕が応対する。誰か一人、僕に付けて。兄様とラーニャの部屋にも連絡用の忍を。使者との対面が可能かどうか連絡とって」
「承知」

「ラーニャにも下段の間に向かってもらって。部屋の前で合流して一緒に入室しよう。使者とのお話は僕がするって、ちゃんと伝えといてよ」

「心得ました」

物陰に潜む部下に対し、暗号で指示を送る。その間に、第三王子は鏡で着衣を改めていた。何でまだいるんだと言わんばかりに睨みつけられたので、問われる前に答えておいた。

「私が付添います。交渉事に不慣れな方々だけで、お使者と対面させるわけにもいきませぬから」

第三王子は子供扱いをされるのが大嫌いだ。しかし、

「あ、そ。じゃあ、僕が暴走しそうになったら、止めてよね」

と、意外とあっさりと同席を許した。

このまえも思ったが、この王子、馬鹿ではない。我に対しものすごく腹を立ててはいるが、追い出すのが無理とわかれば無駄な行為はやめる。

あまり忍耐強くなく思慮深くもなく感情的になりやすい自らを自覚した上で、こちらを利用する方が上策と頭の中を切り替えたようだ。

第一王子に人物が及ばぬのは明らかだが……

これが世継ぎでも悪くはないという気がしてきた。ナーダも第一王子も、この王子は王位に『向かぬ』と前に決めつけていた。が、年を経て、だいぶ己を御せるようになってきている。

これからしっかり調教……ではない教育を施してやれば、王の役を務められるようになろう。

第一王子がこの旅で死すとも、こやつが生き残れば、インディラは安泰。

王家が無事ならば、セレス様もラーニャ様も心安らかに過ごせる。

将来の為に、こやつも、ラーニャ様と第一王子の次に護衛してやるか。

＊　＊　＊　＊　＊

「ひゃぁ、えらい、別嬪はんやないのん。ミズハに、かつがれたわ。山猿や言うから、どないおもろい顔しとるかと思とったのに、艶やかやし、おサムライみたいにキリリとしてて、かっこええわぁ」

えっと……

このナンパそうな男がタカアキ？

ジャポネの神官（神主）の格好をしてる。烏帽子って変な帽子は被ってない。首の後ろに一つに束ねた髪が腰まである。お貴族様の男にしては長いような……この軽そうな兄ちゃんが、三大魔法使い様なの？

顔だちはあのバケモノ女とよく似てる。鬚を生やしていないわ、なよなよしてるわ、男のくせに顔に白粉ぬりたくって化粧してるわで、気色悪い。あの女と違って肌の色は普通だけどね。

わりと若いと思うんだけど……化粧のせいで年がわかんない。二十歳前？

「それで、そもじさんが、インディラの第三王子か。でっかいなあ。衝立かと思うたわ」

ホホホと扇子で顔を隠しながら笑う。

うわ。

うわ。

うわ。

キショ！

カルヴェル様も『ホホホ』って笑うけど、カラッと笑う感じ？なのに対し、タカアキの声は、ネチョ、ネチョ、ネチョなのよ、『ホホホ』が。大違い。

嫌。

嫌。

嫌。
なんか、すごく、嫌。
生理的に駄目。おぞおぞする……
良かった……こいつへの挨拶とか、ガジャクティンがやってくれて。
口なんかききたくない。顔も見たくない。同じ部屋に居たくもない……
退出したい～～～～
目が合った途端、タカアキが扇子ごしに、流し目を送ってくる。
ひぃぃぃ……
全身から血の気が下がった。
ごめん、アジンエンデ！　わかったわ！　駄目なものは駄目よね！
白粉オバケ女に軽蔑されてもいい！　こっから逃げ出したい……
「姫勇者はんは奥手やなあ」
目をそむけた私をどう誤解したんだが知らないけど、タカアキはご機嫌だ。
「宮中には居ないタイプのおなごはんや。遊んでみたいわぁ」
「申し訳ありません、義姉にはシャイナに婚約者がおりまして……」
ん？
「シャイナ皇帝にございます。彼の方に貞節を誓っていますので、義姉は恋の相手には不向きかと。それに、ご存じのとおり、義姉は勇者です。純潔を守るのが義務です」
おおおお！
もしかして、庇ってくれてるの、ガジャクティン！
嘘ぉ！　あんたがそんな良い子とは知らなかったわ！　ちょっとだけ見直してあげる！
タカアキは、又、気色悪く笑いやがった。
「ホホホ。そない怖い顔せんとも、大丈夫や。麿は最後までできひんさかい。麿の神通力な、おなごはん断ちの誓いで成り立ってるん

やわ。おなごはんのアソコ使ぅたら最後、神の怒りに触れてまう。命賭けても惜しゅうないおなごはんと巡りあえるまで、麿は童貞を捨てる気ないよって」

はぁ……？

インディラ教の僧侶にも女犯ってあるけど……女性と親しくつきあう事そのものが駄目だったはずよ。××しなきゃいいってもんじゃなかったはずだわ。

「神通力に関しての事、僕達にお話になってよろしいんですか？」

と、ガジャクティン。

「かまへん、かまへん。宮中のみぃ～んな知っとる事やさかい。てなわけで、姫勇者はん、童貞と処女同士、清いおつきあいしてみまへんか？　最後の一線は必ず守るよって、安心して楽しめるで」

「お・こ・と・わ・り・します」と、私。

××手前までのHなことはぜ～んぶするぞってな、ナンパ・キモ男なんぞご免だわ。

「ホホホ。麿の誘いを断るおなごはんがこの世に居るなんて……新鮮やわぁ。ますます、そもじ、欲しゅうなったわ」

だから、やめてよ！　その気色悪い笑い方！

ひとしきり笑ってから、タカアキは急に真面目な顔となった。

「さて。麿は今日、第一王子はんのお見舞いに来たわけやけど」

扇子をパチンと閉じて、タカアキはその先端だけを口元に当てる。

「それな、表向きの理由なんよ」

むぅ？

「本当は相談に来たんや。宮中で一度会うてからと思うとったんやけど、今日、潰れたし、ミズハもそもじら闇くさくない言うとったから、まあ、信用してもええかなあと」

闇臭くない……？　魔族の影響を受けてないって意味よね。

「第一王子はん、起きてはる？」

ガジャクティンは、私達より少し下がって控えていたジライへとチラリと視線を向けた。ジライが頷きを返してから、義弟は上段の

間にしっかりと向き直った。
「まだ床についてはいますが、意識ははっきりしています」
「ほな、お見舞いや。第一王子はんのお部屋まで案内して」
立ちあがる所作まで、何と言うかもったいつけた動き。優雅な動きってやつなんだろうけど、いちいち神経に触る。
タカアキの後ろの神官とサムライも立ち上がる。お見舞いの、大きな磁器の瓶と、紙にくるんだデッカイ果物か野菜みたいなのを恭しく持って。
あれ？　昨日の姫巫女のお伴と一緒……よね？　お髭のサムライとタカアキ同様白くのっぺりした顔の神官。この二人、姫巫女専用の家来ってわけじゃなかったのか。
ガジャクティンが先頭に立って歩き、私達はガジュルシンの部屋に移動していった。

移動したのはいいんだけど……
どういう事……これ？
布団から上体を起こして座っているガジュルシン、お顔イキイキで、お肌つやつや。
どー見ても病人じゃない。
倒れる前より元気そうじゃない。
「病室までのご足労いたみいります。お見舞い、誠にありがとうございます」
「気にせんといて。勝手に押しかけた不作法者はこっちやし」
ガジュルシンの床のそばに置かれた座布団に、タカアキはやっぱりゆっくりと腰を下ろす。え～～～い、しゃきしゃき動かんか！
お伴のサムライと神官がその後ろにつき、私とガジャクティンは布団の反対側に座る。ジライは廊下前の襖のところで待機。
お見舞いの品を受け取ったアーメットがガジュルシンにも見える位置に設置し、廊下側に移動して控える。

「ふぅん」
扇子を開いて顔を半ば隠しながら、三大魔法使い様はアーメットを見ていた。
「良さげな精気やないの」
視線をガジュルシンに向け、タカアキは、にんまりと目元に笑みを浮かべた。
「……吸ったやろ？」
そう言われたガジュルシンの頬が朱に染まる。
精気を吸う……？
「ホホホ。照れんかてよろし。誰かて、体、大事にせえへんと、神通力、まともに使えんもん。そもじの魔力の高さは生まれつきみたいやけど、麿は、年々、強うなってゆく類（タイプ）や。毎年、内のモノと折り合いつけ直しや」
「お察ししします」
「ありがとさん。ホホホ、良かったわ、そもじさんの魔力もミズハの見立て通りそうやし、体もまともに動きそうやし、本題に入れるわ」
タカアキが手にしていた扇子を開いたまま、宙へと投げる。
それはガジュルシンの布団の上で止まって、空に飲み込まれるように消えた。
代わりとばかり、宙に幻影が現れる。縮小五分の一サイズくらいだろうか、魔法使いのローブの男だ。
「あ」
私は思わず声をあげた。
一つにまとめた黒髪の三つ編みがたいへん重たそうなヤサ男……シャイナ皇宮で会ったあの男だ。
「僧侶ナラカ」
私の声に、え？　って顔をしたのはガジャクティンとアーメットだけ。
ガジュルシンもジライもナラカの顔を知っていたみたいだ。

タカアキは懐から別の扇子を出し、開いては閉じ、開いては閉じと、弄び始める。

「最近、キョウでオイタしとる魔族や。祓っても祓っても、すぐ舞い戻って来る。ごっつい魔力持っとったくせに、どれもこれも分身だったらしくてなあ、キリがない」

「僧侶ナラカがキョウに出没しているという噂は存じておりますが」

と、ガジュルシンは言った。が、私には初耳！　嘘、ジャポネにいたの、あの魔族。

「目的を察せられずにいます。僕が知っているのは」

ガジュルシンがそこまで言った時、僧侶ナラカに重なるようにキョウの地図が現れた。所々に白丸の点々と数字が付いている。

「僧侶ナラカの出現場所と日時だけです」

「これやと足りんわ」

タカアキが扇子をパチンと閉じると、十ぐらい点が増えた。全部で……えっと、数えるのも面倒だけど三十以上ありそう。けっこうごちゃごちゃしてるんだけど、後ろのナラカの映像も地図も見やすい。不思議。注目している所だけよく見え、数字も読める。残りは視界に入っていても、目ざわりならず、気にならない。

「現れるんは、たいてい、魔族の封印塚やら、魔封じ結界の礎の箇所やら、さびれてまったお寺はんとかやな。聖なる遺物を壊して、魔の領域を広げる……実に、地味ぃな、わかりやすい勢力拡大しとるんが……いやらしくてなぁ」

扇子をバッと広げ、タカアキが顔を半ば隠す。

「こいつ祓うんは、麿とミズハしかできひんかった。他の者の祓いやと、はねのけるんよ。聖なる力をはじく、えらい変わった結界、張りおってな……結界こじあけねば、こっちから何もできんちゅうこっちゃ」

そういえば、僧侶ナラカって結界魔法が得意だったんだっけ。

「三十五の分身放ちおってからに、まだ本体、姿、見せへん。こんだけ強いんや、三十五体を同時に出すとか、御大自らおでましとな

れば、一瞬でキョウの街の半分ぐらい消し去れるやろ。なのに、分身を一体づつしか送ってこんのや、気味悪ぅてかなわんわ」

それは、確かに。

「第一王子はん、この魔族の狙い、何やと思う？」

「僕はキョウの歴史にも建造物にも都の宝にもさほど詳しくないので、正直、量りかねます」

「そない冷たいこと言わんといて。お身内のことや、何かわかるやろ？」

「僕の生まれた時には魔に堕ちていた方なので、身内などと感じた事は一度もありません」

ぴしゃりと言ってから、ガジュルシンは冷たく笑った。

「ただ、欲しいものがあればどうとしても手に入れる方だったと聞いていますので……キョウの街に関わるものが目的なら、注目をあびる前に大破壊も恐れず暴れて目的を達成していたと思います」

「せやな」

「となると、考えられる可能性の中で最も有力なのは……」

そこでいったん言葉を区切ってから、ガジュルシンはタカアキに言った。

「デモストレーション」

「誰への？」と、タカアキ。

「姫勇者一行……が、一番、自然でしょうね。キョウに居るから討伐に来いって、僕等を誘いこんでるとか……」

「そうやないかと思っとる、お母様（たあ）のお身内の伯父もおってな」

タカアキがフンと笑う。

「うるさくてかなわんのや。もう身内が五人、分身にやられとってな……死者はおらんが、神通力、奪われてまった」

え？

こいつの言う神通力って、魔力のことよね？

魔力を吸われた？　僧侶ナラカに？

「それは枯渇ですか？　それとも、魔力の源そのものを奪われたの

ですか？」
「枯渇ではないなあ。一カ月たってもまったく回復せえへんからな。源そのものがのうなったと思うべきやろ」
「魔法使いをただの人間にしてしまう……そんな能力が僧侶ナラカに……？」
「あるみたいや。そもじさんらの大伯父、ほんまにすごいわぁ。魔族も魔族、大魔族やで」
扇子を閉じ、タカアキがチロリとガジュルシンを睨む。
「身内の不始末、償ってくれるんやろ？」

＊　＊　＊　＊　＊

話の雲行きが怪しくなってしまった。
僧侶ナラカが僕等の大伯父だと知ってるから、タカアキは強気だ。でも……償うって何をさせる気なんだ？　僕やラーニャには何も言わず、最初から兄様と交渉する気だったから、魔法関係の償いだろうとは思うけど……
「……身内の不始末を償うのが一族の務めと、タカアキ様がお考えならば」
兄様が静かに微笑む。おぉ！　あの顔の兄様なら大丈夫だ！　タカアキの言いなりになる気はない。何か言い返す気だ。
「八代目勇者フィリップ様の時代のことはいかがお考えなのでしょう？」
おおおお！　そうだ、その件があった！
タカアキの母方の一族は、『破魔の強弓』を受け継ぐ神官一族で七代目勇者ロイド様の時代には勇者の従者も排出している。本来なら尊き一族として宮中でも高い地位にあるべきなのだが、近年まで冷遇されていた。

八代目勇者フィリップ様の時代のケルベゾールドが、その一族の本家の庶子だからだ。しかも、八代目勇者の時代のケルベゾールドは、初代様と七代目ロイド様の時代に次ぐ凶悪な大魔王で、世界中に大被害をもたらし、あげく勇者一行全員を殺している。

全員が死亡してしまった為、勇者一行とケルベゾールドがどのような戦いを繰り広げたのかは謎に包まれているものの、ケルベゾールドの玉座の間には全身から血をふき出した勇者&従者の遺骸が倒れていた事から、凄まじい戦いが繰り広げられたのだろうと言われている。ケルベゾールドが消滅していたから、討伐自体は果たせたのだろうが……

その時、亡くなった従者の一人が、ラジャラ王朝の元王子なのだ。第九王子で十二の時に出家した方だ。

タカアキは苦い笑いを口元に浮かべて、又、扇子を開いた。

「あ～あ。だから、嫌やったんや、身内うんぬんで脅迫するんは」

特大の溜息をついてから、

「その話、もちだされたらこっちは黙らなあかんもんなあ。財産らしい財産、あんまないよって、賠償金なんぞ払ってないもんなあ、お母様のご先祖様」

タカアキは宮中の人間らしく、女性的にホホホと笑った。

「さっき言うたやろ、伯父がうるさいって。跡取りの神通力取られてカンカンなのがいてな、うるさいんよ。形なりにも伯父らの要求伝えとかなぁ、一族の長の面目がたたんでな。かんにんえ、脅すような事、言うて」

形では頭を下げた。が、兄様が脅迫に屈するようならずけずけと要求を通しただろうし、本気で謝ってるわけではないだろう。

「けど、話、聞くだけ聞いてくれへん？　やってもええ思ったら、そもじさんの気持ちで協力をお願いしたいんやけど」

「わかりました。伺いましょう」

「ありがとう」

タカアキが、又、扇子を閉じる。どうも、大事な話をする時に扇

子を閉じるのが癖のようだ。
「僧侶ナラカ除けの結界になって欲しいんや」

魔法の知識の無いラーニャは「？」って顔をしている。
多分、ジライもアーメットもよくわかっていないだろう。
タカアキの要求を要約すると『僧侶ナラカのキョウの都への侵入を阻止する為に、新たに結界を張る。それを強固なものにする為には、魔力の強いナラカの血縁の者をキョウの守護神に捧げる必要がある。神に下る形で神と交わって欲しい』という事だ。
「礼ちゅうたら何やけど」
タカアキは扇子でお見舞いの品を指した。
「それの作り方、教えたるわ」
陶磁器の瓶。中身は酒、多分、御神酒（おみき）だろう。
「心と体を馴染ませるお薬や。そもじの従者の『気』みたいなもんや。今のそもじさんには役たつと思うえ」
精神安定＆魔力行使時の肉体負担軽減の薬か。まあ、兄様は、最近、確かにアーメットを利用してるよな。アーメットが落ち着いた状態でそばにいれば、ストレスなく暮らせるみたいだし。
「タカアキ様の神と交われと？」
嫌そうに兄様が言う。
それに対し、タカアキはホホホと笑って扇子を開いた。
「婚姻の形はとるけど嘘っぱちやし、邪法やないから命までは取らん。そもじさんの血と『主さん』の血を混ぜるだけや。『主さん』の御心次第で、そもじさんの身内は都から締め出される。ただそれだけのもんや」
「血の制約ではないですか」
兄様がツンと澄ました顔となる。
「僕はあなたの『主さん』の眷族にされてしまう。ご酒では、見合いませんね」

「あちゃあ」
タカアキは扇子で完全に顔を覆った。
「若いのに、異国の術まで、よう知っとるなあ。たいしたもんやわ」
言いくるめて利用するつもりだったと白状してから、タカアキは扇子を少し下げ、目元だけを見せた。
「しゃあないわぁ、神様と契約結んでくれはったら、代わりに麿が契約を結んだる。そもじさんが『インディラ教』の加護の下にある限り、そもじさんが主人で、麿が眷族。そないな契約、結ばへんか？　それなら釣り合いとれるやろ？」
三大魔法使いが兄様の眷族？
つまり、部下？
契約を結んだら、兄様が望めばタカアキ様を召喚できるようになるってわけじゃないか！
それは凄い！
大魔王戦で一緒に戦ってもらう事だって可能じゃないか！
ラーニャはあいかわらず『？』な顔をしてるけど、もの凄いことなんだよ！
「人間の召喚やからいろいろ制約つくけどな。そもじさんらとミカドの神官長の麿の立場が相対さん限り、力、貸したる。確実に働かせたい時は、事前に心話で連絡くれたらええ。ご主人様のご希望の日時に体をあけて、移動魔法でお側に駆けつけたるわ」
「それでも、まだ僕の方が損ですね」
え～～～～！
三大魔法使い様使い放題なんだよ、兄様！
「タカアキ様とではなく、ミズハ様と契約を結べませんか？」
パチンと……タカアキが扇子を閉じた。
責めている時ですら軽く朗らかだったタカアキが、顔にありありと不快の色を浮かべている。
「そもじ……食えないなあ」
扇子でポンポンと己の口元を叩き、タカアキはチラリと僕を見る。

「そっちの第三王子はんで我慢しとけば良かったわ。そっちやったらだまくらかすの、簡単やったのに」
え？
僕？
騙くらかすって何？
「強力な結界をお望みでしたね？　弟では役不足でしょう？」
「まあな」
タカアキはゆるゆると立ち上がった。
「一日、待ち。ミズハに聞いとくわ。明日、第一王子はんと姫勇者はんは必ず御所においで。後の者（もん）は来られるもんだけでええわ」
「わかりました」
じゃ、アジンエンデは留守番でもいいんだ。良かった……
「あぁ……せやなかった。赤毛の女いたやろ、アレは連れて来てくれへんか？」
え？
「ミズハがえらく気に入ってなあ、もう一回、今度は起きてるところ見たい言うとったんや、忘れとったわ」
気に入られた……？
あの姫巫女に？
「申し訳ございません。彼女、姫巫女様に気後れしているようで」
と、兄様が言うと、タカアキは扇子を広げ楽しそうに笑った。
「それはそうや。怖くてしょうがないんやろ、わかるわぁ」
ホホホとひとしきり笑ってから、
「縛ってでも一服盛ってでもいいから連れて来て。頼んだえ。それと聖なる武器、持って来てかまへんよ。いつナラカの襲撃あるかわからんよって、すぐ戦えるように頼むわ」
タカアキはお伴のサムライと神官を連れて退出して行った。
お見送りにと、僕とラーニャとジライが後を追う。
部屋に残った兄様がうつむいて何かを考えこんでいるようだったけど、遅れては非礼なんで三大魔法使い様の後について行く事にし

た。

私、ガジュルシン、ガジャクティン、アジンエンデ、アーメットは御所へと向かった。

御所に行くとなっても、アジンエンデは『そうか』としか言わなかった。『極光の剣』を背負って、私達の後を黙って騎乗でついて来る。縛って担ぐ必要も、薬で寝かせる必要もなかった。昨日あれほど嫌がって抵抗したのが嘘みたいだ。

ジライは宿に置いて行く事にした。ジライが一緒だと、アジンエンデが取り乱してしまうかもしれないから。あのストーカー、こっそりついて来てるかもしれないけど、とりあえずアジンエンデの視界に入らないのならよしとしよう。

ガジャクティンが馬を寄せて、あれこれと話しかける。武術のことやら、キョウのこと、キョウのお菓子とか料理、着物の話とか、今、話さなくてもいい、どーでもいい話題ばかり。気を紛らわせようとしているんだろう。

それに対し、アジンエンデはほとんど返事を返さない。自分の思いに沈んでいる。

ガジュルシンも、妙に緊張した顔をしていた。

ミカドに会う為じゃない。昨日、タカアキからもちかけられた取引の為だ。

いまいちよくわかんないんだけど、ガジュルシンがキョウの守護神と仮の婚姻を結ぶと凄い結界が張れて、キョウの都からナラカを追い出せるらしい。

その婚姻の返礼として、ガジュルシンは白粉お化け女と契約を結

びたいと要求した。これもよくわかんない。
契約を結ぶと好きな時に相手をそばに呼べるようになるんだとガジャクティンが偉そうに教えてくれたけど……
ガジュルシン、あの高ビー女が好みだったわけ？　アーメットに惚れてるんだと思ってたのに。
趣味悪ぅ……
義姉として許さないわ！　あんなのを義妹なんて冗談じゃない！

御所は、たいへん歴史ある建造物だった。
うん、多分、こう言っとけば、当りさわりない。間違ってもオンボロとか廃墟寸前とか言ってはいけない。
だだっぴろいお庭はあんま手入れされてないみたいだし、よくお掃除はされているけれど廊下に継ぎ板とか当てられてていかにも貧乏くさい。客人の通り道ですら、こんな状態なのだ。ひとつの街ぐらいデカそうな御所全体は、きっとほとんどが使い物にならない状態だろう。
オオエのショーグンのお城は、きらびやかだったんだけどなあ。
ミカドがジャポネの真の王様で、ショーグンってその戦士長だったんじゃなかったっけ？
神官みたいな仕事を担うミカドと、国の実権を握るショーグンとじゃ、貧富の差が露骨に出ている。

ミカドとの対面は、やっぱ御簾ごし。シャイナの皇帝も、オオエのショーグンも、そして、ミカドも！　もったいぶるの好きだなあ。
お父様の玉座にも天蓋はついてるけど、正面に立つ客人に対し、お父様はいつもきちんとお顔を見せてお話なさってる。
素顔を隠し神秘ぶるのが高貴なふるまいだなんて、間違ってると思う。客人と同じ高さに立っても、人なりが素晴らしいからこそ、

高貴さって伝わるんじゃないかしら？

どデカイ御簾の向こうに、広間がある。ミカドはその真ん中の四面を帳（とばり）で覆われた天幕みたいなのの中にいる。ミカド以外の皇族の方々もいっぱいその周りにいるけど、顔の判別なんかつかない。左手の神官っぽい格好の男の一団の中にタカアキも居るのかしら？

ミカドはおろか皇族も貴族も顔を見せない気だ。貧乏なくせにプライドたけは高いのねえ。

飛び交うジャポネ語。ガジュルシンも西のジャポネ語を使ってるんで、会話が妙にスローモー。何って言ってるんだかさっぱりわかんないけど、まだるっこしい感じ。くそぉ、解説者を側に置けなくて腹立たしい。ジライがアジンエンデにキスしたばっかりに～

やたらホホホと笑って、御簾の向こうがうるさい。ガジュルシンやガジャクティンまで『ホホホ』と笑ったらぶん殴ってやろうかと思ったけど、さすがに笑わなかった。

妙にのんびりした会話の中、アジンエンデと私はただボーッと座っていた。

ミカドとの会見の後、女官に通されて奥まった離れみたいな所に通された。

開け放った襖の先に、小山と緑と綺麗な池泉からなる庭園があった。足元の草はけっこうボーボーだけど、池泉は濁っておらず、そこへと通じる敷石の周囲は草が刈られきちんと掃除されていた。

案内された部屋に座って見るとはなく、庭を見ていた私達。聖なる武器は壁に立てかけたりして、部屋の端に置いといて。

間もなく……

アジンエンデがびくっ！　と、肩をすくめたかと思うと、三つの足音が近づいて来た。

シュッシュッシュッシュへんな絹ずれの音を響かせて、裾の長い内かけを羽織った白粉女がまず廊下から現れる。

その後に続くのは、お馴染みの顔のサムライと神官。二人とも足音をほとんどたてない。タカアキ兄妹ってもしかして……貧乏すぎて家来がこのふたりしか居ないとか？

当然のように高ビー女は上座に座り、その左右に別れてサムライと神官が座る。

ガジュルシンが頭を下げ、弟も倣う。馬鹿女の入室前から、アーメットやアジンエンデは平伏していた。

だけど、私は挨拶なんかする気もないので頭をあげたままだった。

白粉女は眉をしかめ、いかにも意地悪そうな顔で私を睨んだ。

当然、その視線には強い視線で応えてやった。

しばらくは視線の応酬。

絶対、負けない！

「ふん」

白粉オバケのが先に目をそらした。いかにもつきあってらんないって顔で私を小馬鹿にするよう見てから、視線をガジュルシンに向けた。

いちいち何するにもムカつく奴～

でも、視線合戦を投げ出したのは、あんたよ。私の勝ちだからね！

「タカアキから話は聞いたわ。麿が欲しいんちゅうは、本気か？」

「できますれば……」

馬鹿女がフフンと余裕の顔で笑う。

そんな女のどこがいいのよ！

もぉ～、ガジュルシンの悪趣味！　義姉さんは、そんな女、絶対、許さないからね！

「そもじさん美味やしな……ええよ、契約したっても。どうせ短い間やろし」

「ありがとうございます」

「マサタカ」

サムライが文机を運んで来て、

「キヨズミ」

神官が何かを書かれた紙をガジュルシンに手渡す。
「条件、それでええやろ？」
文面を目で追い、ガジュルシンが頷く。
「結構です」
「ほな、はじめよか」
と、白粉お化けが言うと、
「お待ちを」
と、膝をついたまま、ガジャクティンが進み出る。
「申し訳ございません、その契約書、僕にも拝見させてください」
「ガジャクティン」
出過ぎるなという風に怒るガジュルシンを無視し、ガジャクティンが必死にタカアキの妹に詰め寄る。
「兄はインディラ国第一王子、国の世継ぎです。兄の一挙一動に国の浮沈がかかっているんです。兄が軽挙に及んでいないか、常に気を配るのが臣下となる僕の義務です」
そうよ！　言ってやって！　あんたなんか『兄の嫁』には向かないって！
「かまへんよ。好きにしたらええ」と、姫巫女。
「ありがとうございます」
と、ガジャクティンが立ちあがってガジュルシンのもとへ向かったので、便乗した。そしたら、アジンエンデが後をついて来た。青い顔で私の左腕をとり、背中からぎゅっと抱きついてくる。
えっと……？　まあ、いいか……
ガジャクティンの背後から契約書ってのを覗き見たんだけど……ミミズがのたくったような文字が並んでるだけだった。ジャポネ語なんて読めないわよ、くそぉ！
何って書いてあるの？　と、小声で聞いたんだけど、義弟の奴、無視しやがった。糸目を更に細め、文面を必死に目で追ってる。
「『キョウ守護』と兄の召喚が重なった時は『キョウ守護』を優先する……『破魔の強弓』の使い手及びその一族が不利益となる行為

を望まれた場合は拒否する権利を持つ……」
「当然やろ」
「契約は、兄が『信教の加護を失うか、魔力の源を無くす時まで、一代限り』？」
「麿がいなくなっても、そこまでやけどな」
姫巫女が兄のようにホホホと笑う。何かムカつくのよね、その笑い方。タカアキのほどおぞとはしないけど。
「失礼しました……」
白粉お化けに契約書を改めた非礼を謝ってから、ガジャクティンはその紙をガジュルシンに手渡した。
それにガジュルシンが署名して、姫巫女と二人で何かジャポネ語で問答みたいなものをした。
までは良かったんだけど……
「！　！　！」
声にならない悲鳴をあげ、アジンエンデが私にしがみついてくる。てか、これ何？　私もドン引きなんだけど……
ガジャクティンもアーメットも固まってる……
固まるわよね……普通……

＊　＊　＊　＊　＊

刃物を貸してとガジュルシンに頼まれたんで、最初『虹の小剣』を手に取ったんだが、聖なる武器じゃない方がいいってんで、クナイを一本、手渡した。
ガジャクティンがクナイの先端で左手の小指の先を傷つけた……と、思った時だった。すると、いや、ぬるっとした動きで一気に距離をつめた姫巫女がガジュルシンの前に跪いたのは。
そして長く赤い舌を伸ばし、ガジュルシンの指から滴り落ちるも

のをその口で受け止めたのだ。
「！」
部屋の空気が凍りつく。
しかし、姫巫女は俺達の動揺など気にもしない。
美味そうに喉を鳴らし、恍惚とした表情を浮かべた。その目線は、ハンカチで押さえたガジュルシンの左手の指を見つめていた。
「イケズぅ。布に吸わせるぐらいなら、麿にくれればええのんに」
ぺろりと唇を舐め回し、甘えるように姫巫女がガジュルシンにしなだれかかる。
ちょっ……
流血プレイ……？
「契約成立ですね」
「せやな」
妖艶に姫巫女が笑う。
うわぁ……
ドキドキする……
見てはいけないものを見てしまったような……
「これで麿は、そもじのものにもなった。しばらく遊んだるわ」
「よろしくお願いします」
「今夜、結界の為に、そもじさんを使わせてもらうよって、精進潔斎しといて」
と、言ってから、俺の方をチラリと見て、
「吸うたらあかんえ」
と、ウフフと妖しく笑った。
「ひもじゅうなったら、あの子の代わりに、御神酒（おみき）でも食べとき」
へ？
俺達完全無視で姫巫女がガジュルシンの腕をとり、べた～とくっつく。
お色気たっぷりの、ゾッとするほど綺麗な顔で。
ガジュルシンは……無表情だ。

けど、払いもしない。姫巫女に好きにさせている。

何か……変だ……

何か……もやもやする……

どうしちまったんだ、俺？

契約っていったい、何なんだ？

契約を結んだ者を好きな時に呼び寄せて、その力を意のままに行使させられる権利を持つ事だとガジュルシンは言っていたけれど……力を欲するのならば、タカアキの方がいいじゃないか。あっちは三大魔法使いだ。

なのに、何故、わざわざその妹の方が欲しいなんて望んだんだ……？

「商売女じゃあるまいし、キショイお愛想ふりまいてんじゃないわよ、馬鹿！」

あ。

姉貴が切れた。

うん、まあそろそろだよな、姉貴の限界。

背後にアジンエンデをくっつけながら、姉貴が姫巫女を睨みつける。

「私の義弟から離れなさいよ！　義弟が化粧臭くなっちゃうじゃないの！」

「そないなこと言うたかて無理やで」

姫巫女がホホホと笑う。

「麿はもうこのお方のものやさかい、身も心ももう捧げてしもうたんや」
「体はいりません」
と、すかさずアーメット。
そうか……肉体めあてじゃないのか……良かった……
「あぁん、イケズぅ。もらうなら、みぃんなもらって。子種もちょうだい。ミズハを試してみてぇ」
何か性格変わってないか、この姫巫女……
発情モード……？
お伴のサムライと神官はあさっての方向を向いて、姫巫女のご醜態を無視してるが。
「くっつくなって言ってるでしょーが、この尻軽女！」
姉貴が、ガジュルシンと姫巫女の間に割って入る。
その背後のアジンエンデはひぃぃと声をあげ、姫巫女から顔をそむけた。が、姉貴の背中が一番、安全とばかりに必死にしがみつき離れようとはしない。
「なんやのん？　麿と旦那様の触れ合い（スキンシップ）の邪魔しをってからに。そもじのような鬼瓦みたいなおなご、旦那様は相手になんかせえへんえ」
「旦那様？　ふざけんじゃないわよ！　私はそいつの義姉なのよ、あんたとの交際なんか認めないわ！」
姫巫女は余裕たっぷりにホホホと笑ってから、無理矢理ガジュルシンにべったりくっつく。
「義姉と義弟の禁断の関係なんて古いわ。今更、流行（はや）らんで」
「ンな軟弱で病気がちな義弟に恋心なんか抱くわけないでしょ！　渋みも深みもやさしさも落ち着きも全くない、頭でっかちの青瓢箪には興味ないもん！」
「ラーニャ……」
あ、さすがにガジュルシン、落ち込んでる。
「けど、あんたは気に喰わない！　大嫌いなあんたが義弟とくっつ

くなんて許せない！　あんたよりはアーメットの方が百倍マシだわ！」

え？　俺？

「いい、耳の穴をかっぽじいて聞きなさい。ガジュルシンが好きなのはうちの」

「ラーニャ！　待って、ちょっと待って！」

ガジュルシンが横から姉貴の口を覆う。が、けっこう力持ちの姉貴を、ガジュルシンが押さえていられるはずがない。

首をぶんぶん振りまわし、手をふりほどくと、姉貴が又、叫ぶ。

「ガジュルシンはね、私の弟の」

その姉貴の口を、ふぅ〜やれやれといった顔のガジャクティンが無理矢理塞ぐ。

ガジュルシンが泣きそうな顔で、ガジャクティンにすまないと言っていた。

しかし……

ガジュルシンに姫巫女がくっついてて、間をわろうとしている姉貴の背にアジンエンデがくっついてて、姉貴の口をガジャクティンが覆ってるって……

密集しすぎ。

と、そこへ。

「ミズハ様、たいへんにおざります」

巫女の衣装の女が小走りに廊下を走って来て部屋の前で平伏した。

「僧侶ナラカが、キョウの街に現れました」

「来たか」

姫巫女はにぃぃと笑い、ガジュルシンから離れた。すくっと立ちあがったその姿は、恋に狂う女ではなく、歴戦の戦士を思わせた。

「案内せい。どこや？」

「東の大橋におざりまする」

「わかった、行こか」

姫巫女は、従者の二人を手招きする。

「我々も同行してもよろしいでしょうか？」
と、ガジュルシン。ガジャクティンも『雷神の槍』を拾いに戻っている。
姫巫女がフフンと笑う。
「ええよ。旦那様の働きも見たいし、思う存分戦ってぇな」
「お待ちを、ミズハ様」
女は必死の顔だ。
「僧侶ナラカは十人おりまする」

え？

「分身十体？」と、姫巫女。
廊下の巫女は懸命にかぶりを振った。
「申し訳ござりませぬ。我らではわかりかねまする。全部が分身か、本体がおるんか、我らではわからんのんです」
「せやったな。しゃーないなあ」
「今、向こうには、トシユキ様とナツメが居るだけです。結界を張り、僧侶ナラカ達を監視しております」
「二人か」
自分の部下と姫勇者一行。一同を見渡し、姫巫女は溜息をついた。
「数、増やすか」
姫巫女がおいでおいでと手招きすると、キヨズミと呼ばれていた神官が暗い顔で近付いて来る。
「きばって働きや、キヨズミ」
そう言って、姫巫女は……
お伴の神官と接吻を始めたのだった。

驚いて硬直している俺達……
これって、練気の受け渡し……？
かと思ったんだけど、そうじゃなかった。
なんか、魔法とか霊的なものだ。
姫巫女に口づけされている神官が、徐々に変身していった。
肌の色がどんどん白く、いや、青白くなっていったのだ。まるで姫巫女のように……
姫巫女が顔を離した時、そこには……
たいへん女性的ななよやかな線の、妖しく微笑む男がいた。顔こそそのままだったが、その顔から受ける印象は目の前の女性と瓜二つだった。
「ハルナは不浄中やったな？」
そう問われ、廊下の巫女が深々と頭を下げる。
「すみません」
「もう巫女は居らんかったよな？」
「はい。今はあいにく一人も……」
姫巫女はもう一度室内を見渡す。
いったい、何が起きたんだ……？
茫然としている俺達。
姫巫女はピタッと視線を止め、アジンエンデを指さした。
「旦那様、それ貸して」
否も応も聞かず、姫巫女はアジンエンデと唇を合わせていた。

＊　＊　＊　＊　＊

ちょ、ちょ、ちょ！
ズブ、ズブ、ズルリ……と、何か変な音がした。アジンエンデの口の中から！

何かが、姫巫女の中から、アジンエンデの口の中に入ってった！
姫巫女に接吻されてるアジンエンデは、硬直状態。
昨日がジライで、今日がこの白粉女とキスだなんて……
どんだけ不幸なの、アジンエンデ！
取り乱し二人を裂こうとしたガジャクティンを、姫巫女のサムライが抱きついて止める。義弟を押さえこむなんて、こいつも相当な怪力だ。
アジンエンデの肌は徐々に青白くなってゆき、昨日から感情の抜け落ちていた顔に表情が戻る。
嬉しそうに緑の目を細め、にぃぃと妖しく色っぽく笑う。
まるで、姫巫女のような笑い方だ。
対する白粉女は体から力が抜け切ったみたいで、床の上に崩れていった。
「何やこの子、無粋なもの着とるなあ」
エーゲラ風の衣装の上から胸や腰のあたりを触り、アジンエンデが唇を尖らせる。
綺麗な赤毛を一本頭から抜き、彼女が何かを唱えたら……いろんな事が一瞬で起こった。
髪の毛が徐々に大きくなってゆき、アジンエンデそのものの大きさとなって、裸体の彼女が現れた！　と、思った時には裸体の上に赤い鎧四点セットをつけていた。
でもって、本物のアジンエンデは……
いつの間にか、廊下の巫女さんそっくりな衣装を着ていた。
一瞬の早変わりだわ！
私は髪の毛の分身の方にみとれてて劇的瞬間を見損ねたんだけど、着替えの瞬間をモロに見たと思われる、デカイ義弟と弟は口と鼻元を押さえて床にしゃがみこんで震えていた。
ど～して、男って、こう……
巨乳好きのスケベなのよ！
すっぽんぽんのアジンエンデを見ただろうに無反応なガジュルシ

ンも、それはそれで問題とは思うけどね！
アジンエンデは上機嫌そうに、ガジュルシンの前でくるりと回ってみせた。
「ええわ。この子、いい巫女（シャーマン）やわ。こないに具合のええ子、初めてかもしれん」
「その体はあなたが契約を結んだ一族の者ではありません。決して長く使わないでください」
アジンエンデがお色気たっぷりに、ガジュルシンに微笑みかける。
「わかっとる。僧侶ナラカを倒したら返す」
「お忘れなきよう……」
んっと……
ようするに……
アジンエンデの体を姫巫女がのっとったって事……？
あれ？『極光の剣』の使い手って、そうそう簡単に体をとられないんじゃなかったっけ……？
ああ、でも、先祖の守護の力って魔族に対してだけだったか……？
むぅ？
アジンエンデは、彼女なら絶対に浮かべない、妖しい笑顔を顔に刻んでいる。
「旦那様、東の大橋まで跳べはります？」
「いや、行った事が無い」と、ガジュルシン。
「あらぁ、そんなら後から来て。かんにんえ。麿はタカアキの一族しか運べんよって、先に行って、僧侶ナラカを叩いてるわ」
ガジュルシンにうっふ～んと熱い視線を送ってから、アジンエンデと神官のキヨズミが消える。
後に残ったのは……
鼻血を押さえてるスケベ二人と、ガジュルシンと、廊下の巫女と、サムライのマサタカ。後、人形みたいに動かない赤い鎧四点セットのアジンエンデの分身と、抜けがらとなっている姫巫女の体。
「なんや……もう、朝かいな？」

どこからともなくタカアキの声がしたと思ったら、姫巫女が上体を起して大きく欠伸をした。

「寝足りん気ぃするんやけど、今、何時や、マサタカ……」

そこまで言って、姫巫女の体の者は口を閉ざした。私やガジュルシン達を見渡して。

その顔に、乾いた笑みが浮かぶ。

「なんや……もうバレてまったん？」

あちゃあと額に手をあてるその者は、顔は姫巫女だけど……肌の色が違う。白粉の下の肌は普通の色だ。

「タカアキ……？」

私に名を呼ばれた者は苦虫を噛みつぶしたかのような顔をして、胸元から扇子を出しバッ！　と、広げた。

「ま、そういうこっちゃ……」

て……

ええええ～～～！

嘘！

姫巫女がオカマでタカアキでガジュルシンにメロメロなホモなわけぇ！

「オカマでもホモでもないわい！　憑依されとっただけじゃ、ミズハは麿の『主さん』や！」

えええええ～～～！

「僧侶ナラカが十体？」
サムライのマサタカからかいつまんで事情を聞いたタカアキが、表情をひきしめる。何だ、真面目な顔もできるんじゃない。まあ、姫巫女の顔だけど。
「……とりあえず、送っとくか」
タカアキの周囲で白い煙がボン！　とあがったかと思うと、姫巫女の格好のタカアキがいきなり十人も現れた！　分身魔法だ！　白粉女が十人？　正直、キモすぎ！　鳥肌が立っちゃったじゃない！
分身は現れるなり消えた。移動魔法で姫巫女を追いかけたのだろう。
マサタカは急ぎ、主人の為に着替えを取りに走った。
「何で、今、みぃんな、出払っとるんや、ハルナ？」
タカアキに問われ、廊下の巫女が深々と頭を下げる。
「申し訳もおざりませぬ。オオエとナガンサに魔族が出現いたしまして救援要請がござりましたので、ミズハ様が主だった方々をそちらへ……。更に、先ほど、ヒエのお山にも魔族が現れまして、残られていた方々も」
「ミズハが送ってまったんか？　あ～ぁ、あの阿呆、御所詰めの神官・巫女切らしてどうするんや、まったく、もう」
「現地にはトシユキ様とナツメが居ります。一族の者はキヨズミ様と合わせて三人におざります」
「それと、麿とミズハか……麿の分身では賑やかしにしかならんしなあ」
「よろしければ、僕等も戦力にお数えください」
ガジュルシンだ。扇子を弄ぶタカアキに、静かな、しかし、決意のこもった声で義弟が覚悟を伝える。
「魔族の浄化が姫勇者の望みであり、大伯父を今世から消し去るの

が僕の望みです」
　タカアキは扇子をパチンと閉じると、フフンと口元に笑みを浮かべた。
「強いで、分身でも。並の魔族とちゃうで」
「僕等も並の戦士や魔法使いではありません。姫勇者一行ですから」
　タカアキはニッと笑ってから、あの薄ら寒いホホホ笑いを始めた。
「頼もしいわぁ。ほんなら、二人に一体づつお頼みしよか」
「一人一体でもいけるわよ！」
　思わず言ってしまった。私達が姫勇者一行だって、本当にわかってるのかしら？　勇者なのよ、この地上最強の戦士なのよ、私。
　しかし、タカアキはあくまでも考えを変えない。
「二人で一体。倒せたら、次の一体でええ。舐めてかかると痛い目にあうで」
　マサタカが着替えを持ってきた。着替えながらタカアキが尋ねてくる。
「あの赤毛の娘はん、巫女として、どんぐらいの能力あるん？」
　私達は顔を見合わせ、ガジュルシンが答えた。
「アジンエンデ本人の能力はわかりません。が、彼女の父は先代勇者一行の従者、赤毛の戦士アジャンです。神魔をほぼその能力通りに、その身に降ろせたシャーマン戦士といわれています」
「なら、今、ミズハ、相当、強いわけやな……まずいなあ」
　ん？
　強いのが、何でまずいの？
「『主さん』が降りて来ている間のご記憶はないのですか？」
「まったくない」
「タカアキ様と『主さん』が入れ代わりでその肉体を使っているのですか？」
「せや。一緒に時を過ごすといろいろと難儀やから、交替でこの体を使っとる。あっちが半霊体になってくれれば、話しぐらいはできるんやけどな」

女物の衣装を脱いで（一番下の肌着の着物は着てるんで裸にはならなかった）、タカアキは神官服に袖を通し始めた。
「アレ、何なの？」
と、私が聞くと、タカアキはふぅと溜息をついた。
「だから、『主さん』や。お母様の一族が代々奉ってきた神様や。今は、キョウの街の守護神も務めてはる」
「神様……？」
「ジャポネには八百万の神様がおるんよ。そのうちのお一人。古えから生きてあらしゃる尊い神様や」
「アレが？」
神官衣の上からたすき掛けをしつつ、タカアキは言葉を続ける。
「『主さん』、一族の男ん中から憑代を選ぶんよ。『主さん』に器に選ばれた者が一族の長となり、その者の体ん中に『主さん』の霊体を棲まわす契約を結ぶ。まあ、たまに、今日みたいに魂だけよそに遊びに行かはったりもするけど、長時間は離れられれん。『主さん』は契約で縛られとるさかい」
詳しい話は帰ってからなと言うタカアキに、一つだけと断ってガジュルシンが尋ねる。
「『主さん』が離れても、タカアキ様は三大魔法使いとして働けるのですか？」
髪の毛をうなじで一つに束ねながら、タカアキがフンと息を吐く。
「いらん心配や。『主さん』の器となった男は、『主さん』の御力のおこぼれを頂戴できる。麿は長く器やっとる。『主さん』がのうなっても、三年は三大魔法使い張れると思うえ。『主さん』無しでもナラカ封印できるわ」
ああ、だから、タカアキから離れてアジンエンデに憑依したわけね。戦力を増やす為に。
私はちょっと気になったので聞いてみた。
「女に手を出すと、今、体に残ってる、貰った魔力とかはどうなるの？」

タカアキは苦笑した。
「自分の為には使えんようになる。『主さん』以外のおなごはんに心奪われた者への当然の罰やな」
あのバケモノ、牝なのか……まあ、性格も口調も女よね……だから、タカアキ、オカマになっちゃうのか、憑依されると……
マサタカから手渡された、大弓を手に腰に矢筒をつけてもらいながらタカアキが私達を見渡す。『虹の小剣』を持った弟につきそわれるガジュルシン、『勇者の剣』を背負い『雷神の槍』を持ったガジャクティン、それと私。
「ほな、行こうか」
化粧を落とす暇はないので、姫巫女のメイクのまま行く気のようだ。顔がそれで、声が男はちょっと嫌かも。
「ちょっとだけ待って」
私は息を吸いこみ、天井を睨み、思いっきり大声で叫んだ。
「ジライ！」
一呼吸後……
「お呼びでございますか、ラーニャ様」
どこからともなく現れた忍者が、私の前に跪く。インディラ忍者の格好だが、背には忍刀、腰には『ムラクモ』がある。
私はもう一度、大きく息を吸いこんでから、
「やっぱりついて来てたわね！　留守番してろと言ったでしょうが！　このストーカー！」
馬鹿忍者にかかと落としをくれてやってから、タカアキへと顎をしゃくった。
「アレも連れてってくれる？　聖なる武器を持ってるから」
「……むちゃくちゃしはるなあ」
タカアキは変な顔をしていた。
「……そそるわぁ」
「ん？」
「ええなあ、そもじさん、お姫様らしゅうなくて奔放で……惚れて

まいそうやわ」
オカマでホモでMかよ！
どんだけマニアックなのよ！
「ほな、行くで」
三大魔法使い様は、姫勇者一行とサムライのマサタカを移動魔法で運んでいった。

＊　＊　＊　＊　＊

ええわ、ええわ、もう最高やわ、この娘。
止まらんわぁ。
行使しよ思わんでも力が使える。
大橋をうろついていた魔族どもは、麿の一睨みで逃げ去った。小物ばっかやない、中級のモノもおったけど、力量差は明らかや、みぃんな逃げてった。
手近にいた僧侶ナラカの結界は、一噛みで砕け散った。
嘘みたいや。この前、結界に穴開けるんが、あないたいへんだったのに。
器がええとこうもちゃうのんか。
僧侶ナラカも、一撃で沈められた。
ほんまは丸のみしたかったんやけど、したらタカアキに怒られるから、牙で砕いといた。
薄氷を砕く感じや。弱いなぁ。
麿の敵やない。
塵や塵。
本体出て来い。
分身じゃ、麿に勝てへんで。

快感……

二人目のナラカは絞め殺した。
美味そうや……
食べたいなあ……
タカアキは、ほんま、イケズや。

何で魔族を食べたらあかんのん？
こない、美味しそうなのに。

血も肉も魔力も瘴気も穢れも……
みぃんな……
麿の好物やのに……

＊　＊　＊　＊　＊

東の大橋の前の大通りに、僕等は転移した。
アーメットや弟は武器を構えていた。ジライも多分、『ムラクモ』をすぐに抜ける体勢だったと思う。
しかし、人通りの多い通りはのどかなもので、大川の上にかかる大橋の上にも人の往来があり、荷車が通っていた。僧侶ナラカの分身が十人も出現したと聞いていたから、激戦中かと思ったのだが。
「こっちや」
と、進むタカアキの後について数歩歩くと、ふいに視界が変わっ

た。
空気が変わったというべきか。
周囲に魔力の気が満ちる。
突然、前方から紅蓮の壁が迫る。炎の魔法だ！　と、構える間もなく、それは消滅する。
タカアキが左手の大弓を水平に突き出し、結界を張ったのだ。
聖なる武器を媒介にしているとはいえ、無詠唱で結界を張るなんて……
さすが三大魔法使い。
雷、氷、水。襲い来る魔法の全てが、彼が大弓を媒介に発生させた結界に阻まれる。
橋もその周囲も、異空間となってしまっていた。
異次元と現実が混じっているのだ。
建造物も人も木々も全てが消えている。
あるのは僕等が立つ道と、その先の橋だけだ。
だが、その橋に欄干は見当たらない。橋の幅は果てなく広く、どこまでもどこまでも横に続いている。
橋の長さもそうだ。大川にかかっているはずの橋に終わりはなく渡るべき先が見えない。
「何、これ、幻術？」
魔力のないラーニャが、当然の疑問を抱く。
「異界化だよ。現実に異次元空間が接続しているんだ」
「幻じゃないのね？　ぶった斬れるわけね？」
僕の説明を自分なりに解釈してラーニャが聞く。
「破壊できる」
その橋の上に、複数の『僧侶ナラカ』と、アジンエンデ、姫巫女姿のタカアキの分身が数体いた。
それに、タカアキの部下と思われる神官も二人、遠くで戦っているようだ。一人は鞭のような木の枝を用い、もう一人は全身に水と雷をまとわりつかせ、それぞれナラカの分身と戦っていた。タカア

キの分身が、彼等について援護しているようだ。が、ニ対一でもナラカを追い込めない。

アジンエンデは橋の上を歩いていた。ジャポネ風の巫女装束で。優雅な所作でゆっくり、と。橋中に散らばっているナラカ達の間をただ歩いているだけのように見えるが。

魔法使いの杖を持った黒のローブの男――僧侶ナラカは、それぞれが独立した意志を持って動いているようだ。挑み来るタカアキの分身を軽くあしらっているようだが。

ラーニャが右手をあげる。弟の背にあったものが空間を渡り彼女の元へ現れる。

『勇者の剣』。

魔族ナラカを前にして、聖なる武器は闘志と共に義姉の手の内に素直におさまる。

全てが分身だろうが、本体がいようがいまいが、『勇者の剣』にとっては同じなのだ。

穢れたものは今世から消し去る。

剣の望みはそれだけなのだ。

「待ち」

橋に向かって走ろうとした義姉を、タカアキが止める。

「橋ごと壊す気かい？　正しく壊さんと、そもじの仲間もうちの者も、異空に飲まれてまうで」

『勇者の剣』と義姉との共鳴の高さを感じ取ったのだろう、タカアキが義姉に軽挙を慎むよう忠告する。『勇者の剣』を持った義姉がブチ切れれば、この空間自体を破壊しかねない。『勇者の剣』の破壊力は凄まじいのだ。

「それに、今、異界化を解けば、往来の激しい現実の橋にあのバケモノ僧侶を八体連れてく事になる。阿鼻叫喚の地獄になるで」

「八体？」と、ラーニャ。

「監視役のナツメが教えてくれた。二体、ミズハが倒した。この空間の異界化も広がらんよう、今、ナツメが術で押さえとるよって、

今のうちに、橋は手をつけんと上の者の掃除だけしてまおう。麿の分身は……五体になったそうや。あかんわ。麿の分身、あんま役たたんよって、急ご」

おそらく、タカアキは分身魔法は苦手なのだろう。いきなり十体も出現させたものの、その能力はかなり低いに違いない。たとえば、本体の百分の一とか千分の一といった程度の、戦力として使い物にならないレベルではないかと。本人も『分身は賑やかしにしかならない』と言っていたし。

更に数歩進むと……

前方の橋の上のナラカの一体が、血飛沫をあげ、ひしゃげた。

「え？」

目を疑った。

何が起きたのか、さっぱりわからなかった。

ジャポネの巫女の衣装をつけたアジンエンデが、そばを通っただけなのだが……

僧侶ナラカの体がいきなりぐしゃりと潰れ、肉片となってしまったのだ。

激しく飛び散る血や肉。だが、アジンエンデは清浄そのもので、全く血がかかっていない。橋も汚れていない。宙で切り刻まれた血肉は消えてしまった。僧侶ナラカがただそこから消えただけのように見える。

アジンエンデの内に宿るモノがどんな攻撃を仕掛けたのか、僕には見えなかった。

「あと、七体か……ご機嫌やな、ミズハ」

タカアキは、ふぅと溜息をつき、僕等を見渡した。

「神通力ある者と無い者で組み。魔法障壁を張れんと、死ぬで」

それだけ行って走り出した彼の後を、僕等も駆ける。

橋の手前でタカアキが立ち止まり、矢を抜き、つがえ、大弓を引き絞る。『破魔の強弓』だ。僕と変わらぬ細身なのに、よくこんな腕力が必要な武器を使えるものだ。

ラーニャは構わず橋へと走り、ジライとガジャクティンがその後を追いかける。
タカアキが放った矢は、どこまでも、どこまでも真っすぐに橋の上を飛んでゆく。
ただ真っすぐ飛ぶだけだ。矢は何も貫かない。ラーニャ達の横を走り、橋の上のナラカの分身・アジンエンデ・タカアキの部下のそばをただ通り過ぎるだけだ。
飛距離が異常だ。
何をしたんだ？　いや、何の為の矢なんだ？
何の説明もせず、三大魔法使いが再び走り出し、サムライのマサタカが主人の後を追う。
僕も続き、その後をアーメットが僕を守るようについてくる。
橋を踏んだ途端、違和感を感じた。
泥を踏んだような、靴裏のねっとりとした感触。
濁った空気。
周囲に満ちる敵意。
なるほど、異界だと思った。
横から氷の魔法が飛来したので、口の中で準備していた結界魔法を発動させる。
僕等を貫く前に、氷の魔法が四散する。
タカアキがいない。姿が見当たらない。遠くへ走り去ったのか？
黒い靄のようなものが満ち、周囲がよく見えない。周囲が瘴気に包まれている。
だが、背後には僕の大事な義弟がいる。目に見えなくとも、気配でわかる。
「僕から離れないで、アーメット」
「わかった」
返事が、やけに遠くから聞こえる。距離が開いている？　いや、違う。アーメットはそばにいる。狂っているのは感覚の方だ。惑わされぬな。

黒い靄の中で、ゆらりと何かが動く。
視界がきかないのに、それだけがよく見える。妖しく微笑む男の顔だけが、闇から浮かび上がっている。
大伯父だ。
魔力すら高めず、大伯父は静かに微笑んでいるばかりだったが……まずは、圧縮。頭上からかかる凄まじい圧力がかかってくる。
続いて、幾筋もの雷が天から轟き落ちる。
更には腐敗。全てのものを朽ちさせる、汚らわしい魔の力が襲い来る。
全て結界ではじけた。が、しかし……
同時に幾つの魔法を操れるんだ？　僧侶ナラカは、自らの前に結界すら張っている。『聖なる力をはじく、えらい変わった結界』だろうか？　結界こじあけねば、こちらから何もできないとタカアキは言っていた。
雨のように降り注ぐ攻撃を避けつつ、相手が結界を張る為に用いている力を凌駕する魔力で攻撃をしかけろと？
しかも、敵はまだ本気ではない。魔力を高めていない。軽く遊んでやろうって態度だ。それで複数の魔法を同時に発生させている。
なるほど……これはバケモノだ……
だが、目の前の敵は……分身だ。
本体ではない。
僕は、分身ごときに負けるわけにはいかないのだ。
「アーメット」
僕等の声は敵に丸聞こえだろう。だが、構わない、どうせ、その手しかないんだ。
「合図を送ったら、『虹の小剣』を構えて走って、僧侶ナラカを斬って」
「承知」
アーメットからもナラカは見えているようだ。
落ち着け……

焦るな……
冷静にゆく。
機会は見逃さない。

＊　＊　＊　＊　＊

前々から思っていたけれども、ジライは異常に勘が鋭い。
五感が通常の人間よりも発達している。常人の目には止まらぬものが見え、聞こえぬものが聞こえる。気配を読むのもうまく、視界を封じられても普通に動ける。
一流の忍者だからか……
悔しい。僕には闇しか見えない。敵がどこにいるのかも、何をしようとしているのかもさっぱりわからない。それどころか味方のジライすら見えない。
ジライに左腕を掴まれ、僕は進んでいる。結界を張れと命じられたので、自分を中心に周囲を包みこむ形で結界を張っている。
カルヴェル様から魔力増強の腕輪・足輪をもらっていなければ、結界魔法なんて張れなかった。違う目的の為に貰ったモノだけれども、貰っておいて良かった。僕が結界を張れなきゃ、僕もジライも多分死んでいた。僕が結界を張るまでの間、ジライが『ムラクモ』で僕を守ってくれたから、結界が張れたわけだけど。
周囲から何度となく魔法攻撃がある。だが、何処に敵が居るのか、僕には見当もつかない。
「居られぬなあ……」
ジライが、残念そうにボソリとつぶやく。
周囲の気配を探っても、ラーニャが見つけられないということだ。
ほぼ同時に橋に着いたはずなのに、僕等はラーニャからはぐれてしまった。

迷いなくまっすぐ走れる彼女に対し、僕は完全に闇に視界を奪われて動けなくなった。

驚いたのは、その時、ジライがラーニャの後を追わず、僕の元へ帰って来た事だ。半ばまでラーニャについて行っていたようなのに。セレス様とラーニャ至上主義で、他の者は歯牙にもかけないジライが……

何で僕を助けてくれたんだろう？

来てくれなきゃ、間違いなく、死んでいた。何処から攻撃されてるのか、わかんないんだもの。

「すまない……」

アジンエンデとの絡みで僕はジライに腹を立てていて、昨日からずっと態度が悪かったのに……

何かちょっと鼻の奥がツンとした。

「ありがとう……」

それに対しジライはフンと荒い息を吐いた。

「やくたいも無い礼なぞいらぬ」

ああああ、そういう言い方、ジライっぽい……というか周囲に他人の目がないから、敬語やめてるし。

「それより、きさま、役に立つ魔法を使えぬのか？　千里眼とか、探知の魔法とか」

「千里眼は駄目だった。使ってみたけど、無効化されてしまう。探知もここじゃ意味がない。辺りの瘴気はナラカが生み出したモノだもの。どこもかしこもナラカの気だらけで、周囲の状況が読めない」

バチバチと周囲で、何か音がした。攻撃を結界がはじいたんだ。

「ならば、感覚を鋭敏にする魔法は？　魔の気の察知でもいい。一人で動いてもらえねば困る」

う～ん？　妥当な魔法あったかなあ。

試しに光球をつくってみたけど、球が生み出す光は闇に吸収されてしまう。まったく周囲を照らせない。

「いた仕方ない。亀のように結界に籠っておれ。何があってもそこから出るな。迎えが来るまでそうしておれば、きさまは死なぬ」
左腕を握っていたジライの指の感触が無くなる。
「ジライ？」
剣戟のような音がする……
吹雪のような音……
大波のような音も……
「ジライ！」
僕の結界外に出てジライが戦っている。
ラーニャのもとへ行こうとして？
いや、それなら僕も連れて行くだろう。
外に出て戦わないとマズかったんだ……
僧侶ナラカが僕の結界を壊そうとしたとか……？
僕を守る為に結界外で戦っている……？
魔力のない彼には結界は張れないのに。
僧侶ナラカの魔法攻撃を全て、勘だけで避けきる気なのか？
無茶だ。
死んでしまう。
相手は僧侶ナラカなんだ。
本体は魔法使い五百人分から千人分の魔力があるって、カルヴェル様は言っていた。
相手をしているのが分身だとしても、何十分の一かの魔力＋魔族の力があるんだ。何種類もの魔法を同時に使えるはずだ。
どうしよう……
体ががくがくと震えた。
僕が役立たずのせいで、このままじゃジライが……
怖くて叫び出しそうだったけれども……必死に声は飲み込んだ。
僕は『雷神の槍』を握り締めた。
泣くものか……
僕は役立たずじゃない……

守られているだけの子供でもない……
勇者の従者なんだ……
仲間の危機に、結界に籠ってるだけなんて、絶対に、嫌だ。
何かないだろうか……？
今の僕にできる事……
懸命に思いだそうとした、今までの出来事や会話、カルヴェル様の分身に習った魔法の授業、独学で学んだ書物から得た魔法の知識、大好きな勇者の冒険譚、武芸の達人達の極意……
何かこの場で役に立ちそうな知識や情報はないか？
何か……

＊　＊　＊　＊　＊

周囲は真っ黒。ナラカから生まれた瘴気に満ちている。
でも、私には、求める者がどこにいるかわかった。瘴気なんかじゃ私の目から隠れられないわ。

目についた所に、僧侶ナラカがいた！　あのムカつく顔で笑ってた！　だから、ぶった斬った！　結界があるって聞いてたけど、ンなの、私の知ったこっちゃない！　斬りたいと思ったら、ナラカまで刃が届いた！　だから、斬った！　それだけだ！
残り六！
水と雷を使う神官がひぃひぃ青い顔で、ナラカと戦ってた。姫巫女の格好のタカアキの分身は倒されたみたいで、側にいなかった。
ので、横から加勢して、ナラカをちょいと斬り捨ててやった。
残り五！
神官が奇妙な顔で私を見た。キヨズミって名前の奴だ、たしか。

肌が真っ白だ。よく見れば、そいつの体の中にあの白粉お化けと同じ気配がある。口移しでさっき何か入れられたのだ。姫巫女の分身だ。そっから力を引き出して戦ってたのか。

あの女の一部を助けてしまったのかと思うと、ムカついた。気に入らないと思った途端、はっきり見えていた神官が闇の中に埋もれて消える。

今の私は見たいものしか見えないらしい。

僧侶ナラカを、もっと斬りたい。

『勇者の剣』も、そう望んでいる。

もう一人危なそうだった神官のもとへは、サムライが援護に駆け付けたようだ。さっき助けた神官も向かうだろう。姫巫女もどきのタカアキの分身もまだ残ってるみたいだし、彼等がナラカにすぐに殺られちゃう事もなさそうだ。

僧侶ナラカも倒したいけど……

私の心の半分は他の事を気にかけていた。

あの馬鹿女に体をのっとられたアジンエンデは無事かしら？

そう思ったら、アジンエンデが見えた。

巫女さんの服を着て、ゆっくりと橋を歩いている。

綺麗な赤い髪を揺らし、醜いほど顔を歪めて笑って。

気に喰わない顔だ。アジンエンデは、無骨で真面目でとっても奥手で照れ屋で……絶対、そんな風に、笑わない。

彼女の体の中から現れている半透明のものが、彼女の体に巻きつき、彼女の左肩の上から鎌首をもたげていた。

ああ、あれが、姫巫女か……

あれは現実には血肉のない、霊体だ。

霊力の無い人間には見えない精神的な存在のくせに、現実に干渉できるみたい。その牙と体で僧侶ナラカと戦っているのだ。

その姿には……

すっごく納得がいった。

ねちっこくって媚びっぽくっていやらしくって虫唾が走る……私

にとって、そんな存在。
姫巫女は、デッカイ白蛇だったのだ。

チロチロと口から舌を出して姫巫女は、僧侶ナラカの分身を見つめていた。
高位魔族を三体も倒し、その血と肉を霊体の牙や体で感じてしまった彼女は興奮状態にあった。
その眼がらんらんと輝いている。
殺意にではなく、食欲に。

僧侶ナラカの分身を丸飲みし、その血肉も魔力も瘴気も穢れも全て吸収したがっている。

姫巫女が魔を食して穢れようが何だろうが、私の知ったこっちゃない。
神から邪神に、堕ちたかったら堕ちればいい。
だけど、アジンエンデの肉体を使っての食事は許さない。
彼女の体が魔で穢れてしまう。姫巫女が離れても、彼女の体が無事ですむはずがない。

そんなの許さない。
私の友達を汚すものは、私の敵だ。

絶対、許さない！

「待った！」
私の前方にタカアキが現れる。移動魔法だろうか？　唐突な現れ方だ。
「まだや。まだミズハは穢れとらん」
穢れてからでは遅いのだ。私の友達まで穢れてしまう。
「うん。わかっとる。麿が止める、でな、姫勇者はん」
タカアキは目を細めて笑みを浮かべた。化粧を落としてないのでタカアキは、私が大嫌いな姫巫女の顔のままだ。
「ごめんな」
タカアキの足がタンと橋を蹴った時……
私はもう闇の中にはいなかった……

闇を斬る！　僧侶ナラカの狙い？

ここは何処だろう……？
私は何でこんな所に居るんだろう……？

殺風景な所だった。
戦場跡のような……焼けた大地、炭となって燃え残った木、焦げて転がる死体の山。焦げ臭い大地が何処までも続いている。
私は周囲を見渡し、黒一色の世界の中で異質なモノを見つけ出した。
大岩の上に男が、座っている。逞しい体の男だ。戦士のようだが、身分は低そうだ。鎧は肩当てと胸当てしかつけてない。休憩中なのか、鞘に入った片手剣を大地につけ柄頭に右手と顎をのせ、眼を閉じている。
知らない人だが、何処かで見たことがあるような気がした……
とても見事な赤い髪をしている。けれども、お手入れなど気にしていないのか、髪は獣のたてがみのように好き勝手な方向を向き、額に無造作にバンダナを巻いていた。
『勇者の剣』を握ったまま、私が近づくと、男は眼を開け、ぎょろりと私を睨んだ。鷹のように鋭い緑の瞳……
誰かに似ている。だけど、誰だか思い出せない。頭がボーッとしている。
「珍しく客人が来たと思えば……馬鹿女の娘か」
え……？
「ケッ！　親子そろって悪趣味なこった！」
私をジロジロ見て、男が野卑な顔で毒づく。
馬鹿女の娘……？
お母様を『馬鹿女』と呼ぶ男（ヒト）は、この世に一人しか居ない。『女

勇者セレス』を読んだ限りでは。
まさか、この男……
赤毛の戦士アジャン……？
に、しては……
私は男の左半身へと視線を向けた。左腕がある。義手じゃない。
普通に自分の腿の上に手をついている。
それに……この男がアジンエンデのお父さんだなんて……
ありえない……
どう見ても三十歳前よ、この男……
「俺に何か用か？」
そう聞かれても……
「あんたに用なんかない。気がついたら、ここに居ただけ」
この男の人から嫌な感じはしない。魔に堕ちたわけではないようだ。でも……何で若返ってるの？
「どうせクソ坊主の計らいだろう。まあ……せっかく来たんだ。特別に稽古をつけてやろう」
クソ坊主……？　て、あれ？　この人が『クソ坊主』って言うのナーダお父様の事じゃなかったっけ……？　ああ、でも、お父様、もう僧侶じゃないし。僧侶相手の悪口なら、みんな『クソ坊主』か。
「私、稽古料なんか払わないわよ」
お金なんか持ってないもの。
「初回サービスで、タダにしてやる」
男がニヤリと笑う。
「おまえ、敵との間合いの取り方が悪いぞ。少し、そこで素振りをしてみろ」

＊　＊　＊　＊　＊

「食べたらあかんえ」
半霊体のミズハが僧侶ナラカを口にくわえたまま、麿をいまいましそうに睨む。
あかんなあ、完全に目ぇ、座っとる。
ミズハに憑依されとる赤毛の女も、同調して、おっかない顔で睨みつけてくる。
「もうちょいと我慢すれば御馳走やで。南国の王子はんと交わるんやろ？　精気と血とついでに子種ももらってまえ。卵、産みたいやろ？」
離さんなあ……
ああ、もう、ほんまに困った神様や。
上物の魔族ほど食べたがるんやさかい。
そないなもん喰うたら、魔に堕ちるど。
枷のない体に勝手に憑依しおって、阿呆が。麿の体に憑依しとる間は、我がままさせんのに。
あの体、本体との共鳴もよさそうやしな。このままくっつけとくと、千年前から眠らせとるご神体の本体に戻ってまいそうや。契約残ったまんま暴れたら、死ぬよりひどい目にあうでミズハ……
さっきからちょっかい出してくるナラカの攻撃は全部、結界で防ぎ、分身に戦わせ相手させとる。正直、今はナラカよりもミズハが怖い。
ナラカは後四体やとナツメが言うとる。インディラの第一王子はんが一、忍者が一、トシユキと応援のマサタカとキヨズミが合わせて一を相手しとって、麿の分身に相手させとるのが一。これで全部や。
それ全部を食べられたらと思うと……ぞっとするわ。
「三日、続けてこの体、貸したる。好きに遊んでええ。ミズハの好きなタカアキの体やで。後で治してくれるんなら何してもええよ。ひもじかったら、半分、食うてもええ」
お、さすがに反応した。くぅぅ、喰われるのは痛いからややねん

けど、まあ、しゃあないな。
ようやっと口のもん捨ててくれたと思うたら、麿のそばにいた奴（ナラカ）がミズハの方へと走り……
ちょっと待てい！
ミズハの阿呆！　飛び込んで来たからって、そない（ナラカ）なもん、丸飲みすな！
「お仕置きや、ミズハ。食べたらあかんと、教えてきたやろ！」
『破魔の強弓』を引きしぼり、ミズハめがけて聖なる矢を放つ。
それを、ミズハは大顎で噛み砕いた。

＊　＊　＊　＊　＊

光の接近を感じた。
清らかな力が膨らんでくるのを感じるとともに、周囲の瘴気が祓われてゆく。
光をまとった矢が宙を飛んでいる。
タカアキの矢だ。
橋の上を光となって巡回しているそれが、瘴気を弱めるてくれたのだ。この為に最初に矢を射たのか？
僕はアーメットに合図を送った。『影』である彼と二人で決めた二人しか知らない暗号。それで『攻撃』を指示したのだ。
タカアキの矢の光に照らされ、アーメットが走る。しなやかな動きで僧侶ナラカへと迫る。
彼を狙う攻撃の全てを僕の魔力が弾く。大伯父の分身は次々とさまざまな魔法を用いてくるが、それぞれに応じた対抗の魔法を僕が放ち相殺する。
『虹の小剣』が僧侶ナラカの結界に刺さった時、僕は高めていた魔力を小剣の刃へと送った。

通常の何百倍に威力を高めた『祝福』だ。刀身に魔を斬る威力を宿らせる魔法、それを増幅して、聖なる武器に送ったのだ。
武器本来が持っている浄化の力は、更に高められ……
僧侶ナラカの結界を破り、『虹の小剣』はナラカの分身を貫き通した。
やった。
分身とはいえ、大伯父を倒せた……
光の矢の下で見えた大伯父の分身は……笑っていたようだ。
非常に満足そうに微笑んでいるようだった。
『よくやった』と、褒め称えるように……

優しそうな笑みを浮かべたまま、浄化の光に包まれ大伯父の分身は今世から消滅した……

「ガジュルシン？」
アーメットが心配そうに、うつむいていた僕に声をかけてくれる。
僕は、彼に対し静かに頭を横に振った。

大伯父は魔族なのだ。
惑わされるなんて……愚かだ。
大伯父が大魔王であろうとそうでなかろうと……今世から消し去るのが僕の使命だ。

＊　＊　＊　＊　＊

『小夜時雨（さよしぐれ）』の浄化の力、刀身より生まれる聖なる水。我の持つ浄化の力はそれだけだ。

又、体術と勘では、魔法攻撃を避けるにも限界がある。

超一流の僧侶兼魔法使いである相手に、魔法支援がないのは正直辛い。防戦一方となる。

魔法に囲まれかけた時に逃げ込める第三王子の結界が近くにあるだけ、マシと言えばマシだが。

僧侶ナラカの分身の居場所はわかるのだが、近づけん。

《ジライ》

頭の中に声が響いた。第三王子の思念だ。

《今、『ムラクモ』を抜いてる？》

抜いて戦っていると心の中で思うと、そのまま抜いていてくれとの思念が伝わって来た。

ふむ。何ぞ手を思いついたのか、ナーダの息子。

《『ムラクモ』の放つ聖なる気の波動を察知し、『ムラクモ』を中心に結界を張った。魔法攻撃は無効になるから、ナラカに近づけるよ》

ほほう。

魔力が無いので変化がわからぬが、結界を張ってもらえたのならありがたい。

可能な限り、体術で攻撃を避ける。第三王子を信用せぬわけではないが、攻撃を回避するのは習慣のようなものだ。

《刃が届く距離になったら教えて》

ナラカの前だ。

ナラカの気が目の前にある。

だが、届かない。刃ははじかれる。結界が張られている。

物理＋魔法＋聖なる力を祓うとかいう新種の障壁か？

「チッ」

舌うちが漏れた。結界があってはこちらは手出しが出来ぬ。

結界を破るには、術師を倒すか術師の魔力切れを待つかしかない

が……

術師が結界の中に居っては殺す事かなわず、僧侶ナラカ本体は幾日も結界を張り続けられるほど結界魔法が得意だ。

敵が結界外に出てくれねば、何もできぬ。

《『ムラクモ』を振る挙動をイメージしながら振って。で、振り下ろしたら急いで後退して》

む？

小僧、又、何ぞ、策を思いついたのか？

いつもはいちいち意識して『小夜時雨』を振るうわけではない。が、求めに応じ、意識しながら、振りあげ、結界へと振り下ろし、後方に飛び退った。

「雷よ、来たれ！」

第三王子の声。

第三王子の持つ聖なる武器が、持ち手の求めに応え雷をもたらす。雷は『小夜時雨』が振りおろした先、つまりは、僧侶ナラカの結界に直撃し……

結界が、ふっと消えた。

いや、結界ばかりではない。

僧侶ナラカの分身の気配をも消えている。

どういう事だ？

《ここが異界化してるのを利用させてもらったんだ》

第三王子の声、いや、王子の思念は興奮しているようだ。

《さっき、タカアキ様が言ってたじゃない？　この空間の異界化が広がらないように、部下のナツメって人に術で押さえさせてるって》

ふむ。橋に突入前にそんな事を言うておったな、三大魔法使い。

《だから、探知の魔法でそのナツメって人を探して心話で相談してみたんだ。異次元通路を押さえてるって事は、次元を開く能力もあるんじゃないかなあと思って。そしたら、ここは異界だから簡単に開けるって答えだったんで》

第三王子の思念は得意そうだった。

《次元通路を一瞬だけ開いてもらったんだ。周囲は瘴気だらけでナラカの位置はつかめないって言うから、結界に雷を落としたんだよ。あの瞬間に、雷撃魔法に包まれた空間の真下に、扉を開いてもらったんだ。ナラカとナラカの作りだした結界だけが異次元に落ちたってわけさ》

ほほう。

予想以上にうまくいって嬉しい！　と、思念が第三王子の感情を伝えて来る。

魔術師としても戦士としても自分の力量が不足しているのを自覚した上で、周囲を利用したわけだ。我を使ってナラカの位置をつかみ、ナツメとやらに異界を開けさせ、ナラカを葬ったわけか。

やはり、こやつ馬鹿ではない。

そう思うと、第三王子の思念が恥ずかしそうに恐縮した。

《ごめん。同調（シンクロ）したまんまだった。心を勝手に読んでごめんなさい》

異界に居る間は通じ合った方が動きやすいゆえ、このままで良いと心で思うと、

《わかった。あの……ありがとう、ジライ……褒めてもらって嬉しい》

褒めてはおらぬ。超一流の実力があったとて、もてあまし、結果を残せねば意味がない。敵は葬れればよい。大切なのは、過程ではなく結果だ。力量不足は工夫で補えればよい。きさまは、戦士として及第だと思うと、第三王子の思念がますます戸惑う。

《ありがとう……》

第三王子の思念が動揺している。照れているようだ。タコみたいに真っ赤になっておるのだろうと思うと、タコじゃない！　と、怒られる。

さて……ラーニャ様を探すか。

『勇者の剣』と完全に同化していた故、お体に危険はないはずじゃが。

＊　＊　＊　＊　＊

鬼！

『女勇者セレス』にもあったけど、赤毛の戦士アジャンは鬼教師だ！　お父様よりも暴力的な鬼教師だって書かれてた！　その通りだ！　リオネルよりひどい！

頭やら、背中やら、腰やら、足やらを、さっきから剣の鞘でバンバン叩かれている。

白銀の鎧つけてなきゃ、間違いなく、青痣ができてる強さだ。

足さばきがなってない、姿勢が悪い、バランスが崩れている、と、赤毛の戦士が怒鳴る。

無神経！　十八歳の可憐な美少女への扱いか、それ！　少しは遠慮しろ！

「ちょっとはマシになってきたな」

赤毛の男がニヤニヤ笑いながら、言う。

「素振りを続けろ。『勇者の剣』が敵に届く距離、届かぬ距離を意識して振るんだ。その剣自体が持つ浄化の光に、おまえ頼りすぎだ。剣から浄化の光が伸びねば、斬れていない敵も結構いたぞ」

「何で、あんたがそんな事を知ってるのよ？」

「姫勇者一行の戦いぶりを見せてくれる親切な野郎がいるんでね……後は、『極光の剣』のおかげだな」

「え？」

「時々、あの娘が見ているものが見える……血と剣の絆のせいかもしれん」

それって。

「アジンエンデと通じ合ってるって事？」

「そうだ。だから、あの女の目を通してみた、おまえのへっぽこぶりも知っている」

むぅ。
「何で斬るかを考えて、剣を振るえ。刃か光か」
「どっちだっていいじゃない。殺せてりゃ何でも」
「殺す場合はな」
ん？
「勇者ならば、生かす剣も使え」
へ？
「良いから、素振りしろ」
姿勢矯正を受けながら、赤毛の戦士に質問をした。
「何で若返ったの？」
「ん？　俺か？」
赤毛の戦士は眉をしかめた。
「おまえの目には、幾つぐらいに見えてるんだ？」
「二十五前後ぐらい？」
「ほほう」
男が面白そうにニヤニヤ笑う。
「なるほどな」
「で、何で若返ったの？」
「若返ってはいない」
え？
「この空間は、心の願いを映す鏡なんだ」
「はぁ？」
赤毛の戦士は肩をすくめた。
「おまえの目に映る姿が、俺の理想形だ」
「理想形……？」
「技も充実し肉体も完成した二十五歳頃が、俺にとって『理想の体』なのだろう。むろん、老いた今、当時の動きは無理だ。老人には老人なりの戦い方がある。だが、少しでも昔の動きを取り戻したい…心の中で、そう願っているから、おまえの目には若い俺が映るんだろう」

「老人って年でもないでしょ、まだ五十前よね？」
「まあな」
「体が資本の傭兵じゃ老いは死活問題だろうけど、そういう自己憐憫ってみっともない。本当の老人に失礼だとも思う。『老人』なんて言うのはやめなさいよ」
私がそう言うと、赤毛の戦士はゲラゲラと笑った。
「口のきき方がなってないところも、馬鹿女にそっくりだな。似てるのは顔と胸だけじゃなかったのか」
胸……？
えぇ～～～～～？
お母様の胸と私の胸が似てるですって！
「ねえ、あなたの目に、私、どう映ってるの？」
「おい、手を止めるな」
「今、大事な事を聞いてるの！」
私は赤毛の戦士に詰め寄った。
「私、どんな風に見えてる？」
赤毛の戦士は鼻じろんだようだった。
「黒のボディースーツにピンヒール姿」
女王様スタイル？？？？
「私の胸、どれぐらい大きい？」
赤毛の戦士が首を傾げる。
「馬鹿女と同じぐらいじゃねえか？」
て、ことは……
巨乳？
私は私をチラリと見た。白銀の鎧姿だ。これを装着してると体型なんかわからない。だけれども、この鎧の下の胸は残念なことに……
あああああ……
何で私の目には自分は現実の通りにしか見えないの？
せっかくの巨乳が見えないなんて……
落ち込みのあまり、しゃがみこんでしまった。

「ここ……何処なの？」
「修行場だ」
赤毛の男がそっけなく答える。
「俺の為に、ナラカが準備した異次元空間だ」
ナラカ……
そうよ！　僧侶ナラカ！　それに馬鹿姫巫女！　私、悠長に修行してる場合じゃなかったんだ！
「帰らなきゃ……」
「帰る時に時間を同期すりゃいいだろ。もうちょっと修行してけ」
「帰る！　アジンエンデが心配だもん！」
そう言うと、赤毛の戦士はやれやれとばかりに溜息をついた。
「なら帰れ。だが、いいか忘れるな、クソ馬鹿女二号、『勇者の剣』の刃の攻撃力は凄まじい。岩をも礫に砕く。しかし、剣の刀身を包みこむ浄化の力は現実を斬れん。浄化の光が斬れるのは、魔だけだ」
「そんな事、言われなくても知ってる」
「そうか？」
男がニヤリと笑う。
「なら、魔だけを斬れ。俺の娘を斬るなよ」
え？
男の姿がどんどん遠のいてゆく。
帰りたいと思ったから、帰ることになってしまったのだろうか。
『勇者の剣』の力だろうか？
アジンエンデのお父さんの姿が、もう小指の先のように小さい。
「そっちの様子は見えている。おまえが下手すぎたら、又、稽古をつけてやる」
赤毛の戦士アジャンは僧侶ナラカと一緒にいるの……？
囚われているわけでもなさそうだけど……？
どういう事なのだろう……？
異次元空間は消え……
周囲は闇に包まれた。

＊　＊　＊　＊　＊

ミズハの後ろから飛来した矢が、そのまんまミズハの霊体を貫いた。

まっぷたつや。頭から先のナラカを飲んだ部分は消滅し、しっぽから腹の方までが橋に落ちる。

憑きモノを無理やりはがされた憑依体がもんどりをうって苦しみ、半分以下になった霊体のミズハも痛みのあまり橋を転げまわる。

「すまんなあ。さっき、麿が射た矢は、ひっかけや」

ミズハがおかしゅうなった時用に、橋に着く前に一本放っておいたんや。保険ちゅうやっちゃ。そいつを呼び寄せ、ミズハと憑依体の絆を断たせてもろた。

呪を唱え、急ぎ、体を三つに分ける。

一体は、残っているナラカの元へ走らせた。後三のはずやけど、一になったとナツメが言う。

もう一体の分身はミズハ用や。分身をミズハの元へ走らせると、傷ついたミズハが、ぬるりと分身の中に入ってゆく。

ひぃひぃと苦しそうな声をあげ、麿そっくりだった分身が、へたりと橋に座りこむ。ミズハに憑依された証に、体を白く変えながら。

「タカアキのイケズぅ……」

ぞっとするような色香を漂わせて、ミズハを宿した分身が麿を見る。

「悪いもん食べたらお仕置きする言うたやろ？」

涙目となったミズハが、上目づかいに怨めしそうに麿を見上げる。

「ミズハを魔族にしたくないんや。麿の命がつきるまで一緒に居たいんやろ？」

「居たい」

「なら、変なモン食べたらあかん。言いつけはお守り」
「でもぉ」
「でも？」
「ご馳走が目の前にぶら下がっとるのんに、食べたらあかんなんて殺生や」
くっすんと、ミズハが泣く。しなをつくって媚びまくる……
あ～ぁ、もう……
あかん……
自分の顔やのに……
ミズハが入ると、ほんま……
かわええわぁ……
「後で磨あげるから、機嫌直しぃ」
「ほんま？」
顔をパーッと華やかに輝かせ、瞳をとろんと潤ませる。
「今回の件が落着したらな」
「食べてもええのん？」
一年、お預けさせたしなあ……霊体の大部分を失って、今、力、減っとるし……しゃあないわい。
「ええよ。けど、全部はあかんえ」
「ちゃぁんと残す。残して蘇生して治す」
ミズハの入った分身が抱きついて来る。
「タカアキ、大好き」
すりすりと甘えて身を寄せてきたので、よしよしと背をさすってやった。
「体も三日、使わせてくれるんやったな？」
理性失っとったくせに、そないな事ばかし、覚えておって……
「そっちも、全部、終わってからな」
「うん、わかった。待っとる」
ミズハが、かぁいらしい顔でにっこり笑う。くぅぅぅ～～～三日のご乱交コース決定やな……

ミズハとイチャイチャしながらも、一応の仕事はしていた。
失神した赤毛の女に、癒しの魔法をかけている。
ミズハが、僧侶ナラカを喰ったせいで彼女の中に穢れが残ってしもうた。すぐにミズハを切り離したから、量自体はたいした事ない。しかし、穢れは穢れ。きちんと祓わにゃ、あかん。無理させたせいか、赤毛の女戦士は意識を失っとる。
「タカアキ、どいて！」
姫勇者はんの声。
ナラカの結界外に出したはずやのに、何で？
『勇者の剣』の力で舞い戻ってまったんか？
『勇者の剣』を構えた姫勇者はんが走って来たので、慌てて赤毛の女から離れて少し下がった。
姫勇者はんは、倒れている赤毛の女の体を袈裟掛けに斬るかのように、『勇者の剣』で宙を斬る。
だが、剣先はぎりぎりの所で仲間に当たらんよう振るっている。
剣から放たれた浄化の光が、赤毛の女の体の中の穢れだけを祓った。
ほほう。
器用なもんやな。
空間がズン！　と、揺れる。
最後のナラカが沈んだと、ナツメからの心話が届く。インディラの王子様方もちゃぁんと働いてくれて、助かったわ。こっちはミズハ押えでろくにナラカの相手できひんかったし。
次元と次元の間が揺れ、今世と異空間が分離していく。
その混乱の中、嫌らしい気配を感じた。
全てを終えホッと息をついた姫勇者はんの背後から、次元通路を抜け飛び出して来た者がおった。
魔族や。
姫勇者はんを狙っておる。
このどさくさに紛れ、姫勇者はんを殺る気か。

弓では間に合わん。
胸元の扇子を取り出し、それへと投げつけた。
麿の気を帯びた扇子が刃となり、魔を貫く。
扇子に浄化の念もこめておるよって、それはあっさりと無に帰した。
《お見事》
人を食ったようなしゃべり方……
このいけ好かん思念は……
こんところずっと相手をしていた男や。
「僧侶ナラカか……」
おそらく、本体。
何処にも気配はない。
別の次元からこの場所を覗いておるんやな。
周囲から瘴気が晴れゆく。インディラの王子様方、忍者達、キヨズミ達もはっきりと見えるようになる。皆、橋の上に居る。
《さすが浄化に関しては世界一ですね、タカアキ様。異次元通路から魔が実体化した瞬間に、倒しちゃうんだから恐ろしい。今、あなたが、あっさりと倒されたのは、大魔王四天王の一人バデンサです。敵に名乗りもさせず何も仕事させないでやっつけちゃうなんて駄目じゃないですか、『姫勇者ラーニャ』が盛り上がりませんよ》
混乱に乗じ姫勇者はんを討とうとした今のが四天王？　矜持のないボケカスやないか。高位魔族ならもちっと美しい戦いをせんか。
《まあ、でも、大魔王四天王バデンサをタカアキ様が倒されたので、四天王の残りは後一人。神速の勇者ラーニャ様に、又、一つ、伝説ができましたね》
明るく思念が笑っている。仲間倒されたっちゅうのに、何が楽しいんや、この男。
ナラカの思念は遠のき……
麿達は皆、今世の東の大橋に戻っていた。
人や荷車が通ってゆく。

分身一つは消し、ミズハには扇子で顔を隠してもらった。同じ顔が二つはマズいけんども、今、同化したら麿の意識なくなってまうもんな。

さすがに往来ん中でひっくり返ってては、邪魔や。赤毛の女戦士はんどけたらなあかんと思うたら、姫勇者はんが前までずんずん歩いて来た。『勇者の剣』は橋の上に置いてきとる。ええのか聖なる武器、放っておいて？

「大魔王四天王を倒した……？」

ナラカの思念は他の者にも伝わっておったみたいやな。

「あんどさくさに紛れ、そもじさんの背中、狙いおった魔を倒した。ナラカは四天王バデンサや、ちゅうとったな」

「そう……」

姫勇者はんの体が、ぶるぶる震えとる。

何や？　怖くなんたんか？

そう思った時には、右の拳でぶん殴られ、宙を舞っていた。

「馬鹿ぁぁぁ！　何で四天王、倒しちゃうのよ！」

て、そもじさん、背中、狙われてたんやで～

「タカアキに何するのん！　この山猿が！」

扇子を放り投げ、ミズハが牙を向いて、姫勇者はんを威嚇する。

「あんたには関係ないわよ！　そばに寄るな、バケ蛇！」

「粗忽者！　ほんま、そもじなんて『勇者』なんて名ばかしの乱暴女や！　ただ暴れるだけの無能やないの！　虫けらにも劣るわ！」

「うっさいわよ！　白粉ブス！」

あああ、もう、しょうもない。

橋の上に転がりながら、懐から扇子を出し、広げて顔を隠した。

往来で口喧嘩を始めたおなごはん二人を、キヨズミとマサタカ、インディラの王子はん方が必死に押さえようとする。

が、全然、止められん。

まあ、ええか。今のミズハは弱っとる。雷はそうそう呼べんさかい、好きにさせとこ。

起き上がらん麿を心配してそばに寄って来たナツメには、大丈夫やと答えておいた。

赤毛の女戦士は、トシユキが端へと運んだようや。

ミズハと姫勇者はんの声を聞きながら、橋に転がっとる。

面白くって笑いが止まらん。

世の中、広いなあ……

ミズハなみに身勝手で阿呆なおなごが居るとはなあ……

もしかしたら、姫勇者はん相手なら心ときめくかもしれん……

そないな事、思いながら道を塞いで転がっていた。

闇を斬る！　僧侶ナラカの狙い？（後書き）

大魔王四天王を倒したのは、一人目はアジンエンデ、二人目はシャオロン、そして三人目はタカアキ。四人目こそラーニャが倒せるのか？　それとも……

次回「異種婚は命がけ！　ある愛の形！」でジャポネ編、終わります。

異種婚は命がけ！　ある愛の形！（前書き）

マイルドな表現としましたが、残酷な描写ありです。ただの、のろけのような気もしますが。

タカアキは、赤毛の戦士など知らないと言った。
「姫勇者はんがミズハを殺そうとしとったから、橋の外へ移動させただけや。異空間には送ってないで」
て、ことは、結界外に送られた私を、僧侶ナラカが勝手に赤毛の戦士の元に更に転送したってこと？
何の為に？
剣の稽古をつけてもらいに行ったみたいよね、あれじゃ。
異空間での赤毛の戦士との事を話すと、ガジュルシンは困惑した顔となった。もう一人の義弟と弟は、ただびっくりしただけ。ジライは無関心そうに聞いていた。
アジンエンデに、一番、赤毛の戦士の事を伝えたかったんだけど……話せなかった。ずっと眠っていて起きないのだ。上皇様の呪いの赤い鎧四点セットを着たまま眠っている。
「神様の憑代になって疲れきっているんだよ。しばらく起きないと思う」と、ガジュルシン。
タカアキとかお伴のキヨズミとかは、白蛇に憑依されてもピンピンしてるのに～
「あちらは『主さん』と契約を結んでいる一族だからね、肉体への負担はずっと軽いんだよ」
時間がかかる場合は数日から数カ月、アジンエンデは目覚めないだろうとガジュルシンは言った。肉体への負担の度合いは憑代の体質次第なので、何時、目覚めるのかは周囲ではわからないのだとも。
そんなにかかるの？
あの馬鹿姫巫女～～～～！
アジンエンデに何ってことを！
顔がひんまがるぐらい、ぶん殴ってやれば良かったわ！（タカアキの顔がひんまがるだけかもしれないけど、構うもんか、あいつも

同罪だ！）

ガジュルシンが心話でインディラ国のお父様と相談して、後宮に彼女を預ける事にした。

北方人である彼女の立場は複雑だ。確かにお父様の庇護下の後宮なら、差別なく治療してもらえる。お父様も超一流の回復魔法の使い手だし、後宮の人間は全員ジライの部下のくノ一だから安全上も問題ないし。

故国のケルティの方がいい気もする。でも、上皇様はちょっと変態だし、国には帰りたくなさそうだったし……うん、インディラの後宮に預けるのがベストよね。

アジンエンデがいなくなるのは寂しいけれど……

東の大橋での戦いの翌日、ガジュルシンはアジンエンデを移動魔法でインディラに連れて行った。むろん、『極光の剣』も一緒に運んで。

＊　＊　＊　＊　＊

「最長は一年と二か月やな、記録にあった憑代の眠りは」

そう言って三大魔法使いタカアキは、扇子をパチンと閉じた。

「すまんなあ。記録調べさせてこっちも驚いたわ。一族以外の者（もん）が『主さん』に憑依されるんが、そないな大事（おおごと）となるとは知らんかった」

「知らなかったからで済ませられる問題ではないと思うのですが……」

と、僕が言うと、タカアキは真面目な顔で頷いた。

「まったくや」

今日のタカアキは、姫巫女の姿ではない。神官衣で、うなじで髪を束ねている。髪は腰を過ぎる長さだ。初対面の時はジャポネの男

性にしては長い髪だと思ったが、姫巫女の為に伸ばしているのだろうと今ならわかる。彼女に女性らしい装いを楽しませる為に。

「あの赤毛の娘はんに、何ぞ償いせな、あかんなあ……」

タカアキは思案するように、扇子で口元を軽く叩いている。

「うちで預かって治療してもええんやけど……ここで治療すると、目覚めがいっそう遅くなるやろしなあ」

タカアキに僕も同意した。

姫巫女を本能的に恐れていた彼女には、ここは恐怖の館だろう。

今、僕が居るのはキョウの街のタカアキの屋敷だ。御所の彼専用の小さな離れから、普通の扉のように見えた次元通路でここに来てしまっている。

彼の母方の一族――白蛇に仕える一族もここに数多く寝泊まりしている。

彼等が信奉する古えの神の霊体もタカアキの体に憑依して、ここをうろうろしているわけで……

こんな所に置かれては、アジンエンデの魂は恐怖に縮みあがり、意地でも安らかな眠りに逃げるだろう。

今、僕はガジャクティン達と別れてタカアキの元を訪れている。

アーメットだけは一緒だ。タカアキのこころづかいで、今、同じ部屋にいる。物陰から覗かなくていいと、忍者である彼を同席させてくれたのだ。アーメットは僕等から少し離れた、廊下の前で控えている。

「お詫びは何ぞ考えとくとして……」

タカアキが扇子をバッと開いた。

「結界の話をしよ」

「はい」

「今、ミズハ、弱っとるけど、儀式自体はできる。今日の夜中から明日にかけてやりたいんやけど、ええ？　あかんかったら明後日の夜中からしあさってになる」

「今日で構いません」

「助かるわぁ。早いとこ、結界だけは張りたかったんや。あのバケモノ僧侶、キョウからはよ追い出したい」
「結局、僧侶ナラカの狙いは何だったのでしょうね？」
「四天王をおびき出す為ちゅう感じでもなかったしなあ」
不機嫌そうな顔でタカアキは言う。
「まあ、ミカドの神官長としては、キョウの都さえ安泰ならええ。バケモノの心ん内なんぞ知らんでも構わんのや」
神官長としてはそうでも、タカアキ本人は現状が不満そうだ。キョウの街をひっかき回した大伯父に対し、それなりの制裁を加えねば溜飲は下がるまい。
「僧侶ナラカとの決戦にはミズハ様の御力をお借りする事となるでしょう」
僕は三大魔法使いに対し、頭を下げた。
「あのバケモノ相手に、タカアキ様の肉体が一矢報いる機会もあるかと」
「肉体は、な」
ホホホと笑ってから、タカアキは扇子を閉じて、僕を面白そうに見つめる。
「そいや、婿殿は、早くからミズハの正体に気づいとったようやけど、何でわかったん？」
婿殿……
ミズハ姫と仮の婚姻を結ぶとはいえ……仮だろう？　婿は嫌だなあ……
「ミズハ様とがタカアキ様が、同じ肉体である事は一目でわかりました。二重人格かとも疑ったのですが、タカアキ様とミズハ様では魔力量が全然違います。三大魔法使いよりも魔力量の多い『人間』なんているはずない。だから、ミズハ様は人外の存在なのだろうと察しました」
魔術師協会本部には魔力量を純粋に測る大水晶がある。その魔法道具が世界中の人間の魔力量を測って、タカアキを三大魔法使いの

一人と見極めたのだ。タカアキ以上に魔力のある人間なんて、いるはずがない。まあ、水晶では計測不能なカルヴェル様という規格外の方もいる。ミズハ様もカルヴェル様のご同類の可能性もあったが、タカアキが古えの神を祭る一族の長だと知っていたので『主さん』なのではないかと推測したのだ。

「なるほどなあ……強い魔力のある人間の前には、どっちかしか顔出さんようにしよ」

「最初、ミズハ様でいらしたのに、翌日はタカアキ様でしたね」

「しゃあないやろ」

タカアキは朗らかに笑った。

「この体、一日交代で使っとるんやもん。ミズハが表に出とる日は麿は一日体ん中で休み、その逆の日はミズハが寝とる。入れ替わり前には霊体のミズハと話すようにはしとるが、後の時間はだいたいすれ違いや」

＊　＊　＊　＊　＊

麿が生まれる前の話や。

古代神の血をひく皇家も時の流れと共に神秘から遠ざかり、『神事を司る皇家』は有名無実化しとった。

魔力のない人間ばかしになっとったのや。

キョウの守護神にも逃げられ都は荒れ放題、ええ加減な神事ばっかやっとって民からの敬意もどんどん失っとった。

先代ミカド、麿のおじい様は、古えの力が復古せな皇家は滅びる思うてな、国中の巫女を皇族の妃に数多く召し上げたん。

麿のお母様（たあ）も、そんで、御所にあがったんよ。

そこそこ皇家と血の相性がよろしかったらしゅうて、生まれた麿もそこそこの魔力を持っとったんやけど……

四つでミズハに見染められてからこっちずっと一緒やもんで、年々、魔力や霊力が強うなっていってな、おととしには三大魔法使いちゅうもんになってまった。

魔術師協会から表彰してもらえるとか報奨金もらえるとか特に何もないんやけど、麿のおかげで皇家の権威が高まったとミカドは万々歳々なんや。

それよりも前から、ミズハが都の守護神やってくれとるし、ジャポネのあっちこっちで雨乞い成功させて民からの人気とりもしてくれとるし……

麿のおかげで、皇家、だいぶ勢力取り戻せたんやで。ショーグンに比べれば、まだまだやけどなあ。

けど、こんなもんや終わらない。年ごとに麿は強くなっとる。

麿がミズハと一緒に居れば……これから、もっともっと凄い事になってゆくんは間違いない。

お母様の実家な、キョウからちょっと離れた山んそばの大神社なんや。

雨と雷、多産と豊穣をもたらす『主さん』を奉ってきた、由緒ある、えらい大きい神社なんやけど……

麿が四つの時なあ、先代の長の麿の叔父さん、やってまったんよ……女の色香に惑って、おなごはん断ちの戒め破って……

『主さん』の怒りを買ったんよ。

一族の長は『主さん』の夫や。

夫が願うからずぅっと『主さん』は力を貸してきてくれはったのに、その夫が不義を働いたんや。

怒った『主さん』に叔父さんは喰われ、一族と『主さん』の契約は宙に浮いた。

契約破棄して山に帰るか、お母様の一族から好きな男を夫に選び直して人の元に留まるか、選択権は『主さん』にあった。

あん時、山に帰れば良かったのに……
『主さん』、一人は寂しいちゅうて、夫選びを始めたんや。
新たな夫ちゅう、神官に支配されるだけってわかっとらんかったんや……阿呆やさかい。
それまでの婚姻は数人の夫候補の中から『主さん』に選んでもらう形式やったんやけど、そん時は人間側の制約なしで選べるっちゅうんで『主さん』はりきって、一族の全部の男を見たんや。
それで、一番、好みの麿を夫に選んだんや。外戚やったんやけど、血の匂いをたどって御所まで『主さん』押しかけてきてなあ。
あの日のことは、よう覚えとる。
半霊体の『主さん』が綺麗な白蛇の姿で、部屋で一人で遊んどった麿の前に現れたん。
怖くはなかったで。前々から麿は『見える』子やったから、ただ綺麗や思っただけやった。
名前つけて欲しいと頼まれたから、『ミズハ』って名前あげたんや。
けど……それが婚姻の契約だったんや。
その日から、麿の体ん中に『主さん』が棲みついてまった。
四つの幼児が『主さん』の夫で、一族の長なんて無理な話やのに。
麿が選ばれた理由？
決まっとるやろ。
顔や。
『主さん』、面喰いやさかい。
麿は、それは、もう、天から降りて来たみたいな、かぁいらしい子供やったからな。『主さん』は麿の美貌に惑ったんや。全ての不幸も喜びも、この美貌から始まったんや。
て、そこ、笑うとこやない、インディラの王子はん。
たいへんだったんやで、神官の勉強を何もしとらん幼児が『主さん』の夫になるんは。
『主さん』の夫は憑代。『主さん』に今世で力をふるわせる為の器

や。
　ほんまもんの神官なら儀式の時だけ『主さん』に体を貸せばええんやけど、四つの子供では『主さん』を支配できん。『主さん』に好き放題、体を勝手に使われたわ。
　四つの幼児の体を使って子作りしたがるわ、腹減ったちゅうて人間を食べたがるわ、あげく麿の体を喰いおってなあ……
　ああ、『主さん』、憑依体を喰えるんよ。白蛇だからやな。尻尾から自分の体、がっぷり飲み込むようなもんやな。
　半霊体となった『主さん』が巻きついてきて体中の骨を砕いて、足から徐々に飲み込んでゆくんよ。
　もう半端なく痛い。
　死にそうやけど、死ねない。
　気も失えない。
　狂えない。
『主さん』に憑依されとると、異常なほど丈夫になってまうんでな。泣きわめくと『かわいい』ちゅうって興奮して喜ぶんやから、もう……どなんしようもない変態や、あれは。
　人間食べたがるんは魔力・霊力・精気を求める本能やけど、麿に対してのんは愛情行為でもあるわけや。
　あ？
　ああ、大丈夫、そもじさんとミズハの婚姻は形だけやから、食べるまではやらん。安心してええで。
　あれが、今、食べるんは、麿だけや。
『全部食べたいけど、タカアキがいなくなったら寂しい』って、いつもちゃんと少し残してくれて、再生して蘇生してくれる。
　昔っから、むちゃくちゃ愛されとるん。
　御所でミズハが悪さばっかしおったから、じきに麿はお母様の実家の蔵に閉じ込められた。
　術で蔵ごと封印されたんよ。
　神官として一人前にならなあ外に出さん言われてな、十になるま

で蔵の中で暮らした。
　教育係の神官が毎日決まった時間に来たけど、後の時間は一人っきりだったんや。お父様やお母様から引き離され、召使もなく一人。幼児に対してひどいと思わん？　寂しかったわぁ。霊体となった『主さん』しか話し相手おらんのやもん。
　泣いてばかしの麿を、ミズハはミズハなりにかわいがって慰めてくれた。
　麿のこと食べた化け蛇やってわかっとったんやけど、いろいろ話すうちになあ、何とも……。
　ミズハもかぁいそうなおなごでな……あぁ、いや、かわいそうな白蛇はんでな……
　つれあいに先立たれ寂しがってたところをご先祖様に捕まってな、夫になってやると騙されたんや。
　で、千年、いろんな制約の術をかけられて、夫への奉仕という形で使役されとったんや。本体も魂も封印されてて、人間の望む時に魂だけ起こされて、力使えと命じられてたんよ。旱の時の雨乞い儀式とか、不妊の治療の時とかなあ。
　ちゃんとした夫のいないまま千年……
　夫と仲良くつれそって子供いっぱい産みたいとしか思ってなかった白蛇はん、麿の先祖のせいで千年も孤独だったんや。
　そないなのに、あれ、阿呆やさかい……
　麿とは、ずっと一緒に居られて嬉しいちゅうんや。扱いに困った一族の者に蔵に幽閉されとっただけやのにな。
　大好きや言うてすり寄って来た。
　デレデレに甘えてきてる思うと、突然、お腹すいたぁ言うて麿を襲うし……
　ぺろんと一のみしてくれりゃ、まだ体、楽なんに、『かわいい、かわいい』言うてな、ゆっくり、ゆっくり飲み込んでくんや。じっくり味あわな、もったいない言うてな。
　こっちが、痛がっても暴れても泣いて許しを乞うても、おかまい

なしなんやから、まったく、もう……。
おっかない化け蛇やけど……阿呆すぎて……
だんだん、かわいそで、かわいくなってきてな……
ほんまはな、一族に内緒で、契約解除の法探して自由にしたろ思ったんやけど……
本人が嫌やとだだこねおって……麿の寿命がくるまで一緒に居たいなんて、まあ、かぁいらしいことを……
十になって蔵から出る頃には、ミズハを体ん中から追い出して封印できる術も習っとったけど、一回も封印しとらん。
ずっと体ん中に棲ませてやっとる。
人の世に長く留まれば留まるほど、ミズハは腹が減る。麿が喰われる頻度も増す。
代々の神官は、体からミズハの魂をひきはがして箱ん中に封印した。その箱に霊力をそそいで、代わりに箱からミズハの御力を引き出してた。そんやり方なら、ミズハは飢えんし、夫の神官も喰われんですむ。
けどなぁ……封印して闇の中に一人ぼっちにさせるのなんて、かわいそやろ?
ミズハ、寂しがり屋やから……
一緒にいるんは難儀やけど、時たま、痛いの我慢すればええことやし……
なんや?
そうや、その通りや。
麿は、『主さん』に惚れとる。熱烈の恋愛中や。
そらぁ……食べられるのは凄い嫌やし、嫌なことは結構あるんやけど……
まあ、しょうがないわな。相手、白蛇やし。
他の嫌なこと……
う〜ん……
王子はん、さっき、ミズハと麿が一日交代でこの体を使ってるっ

ちゅうたら変な顔したやろ？
それも、しゃあないことなんやで。
ミズハと一緒にこの体を使うのは難しいんよ。いろいろと面倒なんや。互いにやりたい事ちゃうよって。
蔵ん中にいた頃は、この体を二人で使っとった。麿に霊体のミズハがまとわりつく形でな。
けどな、ず～と起きとるとミズハの腹の減りは早いし、麿もうるさくてかなわんかったんや。
麿はな、勉強したかったんよ。騙された憐れな白蛇はんを幸せにしてやりたい、その為には守れるだけの力持たなあかんと思ってな。なのに、ミズハ、勉強の邪魔ばっかしくさりおった。そんなん退屈や、遊んで～　と、もう……邪魔しかせえへん。はっきり言って勉強の邪魔やった。ミズハの為に勉強しとったんに、あの阿呆。
んで、ミズハはミズハで、この体を使ってやりたい事があった。
子作りや。
白蛇は多産な生き物。なのに千年も禁欲生活を強いられたんで、子孫残したいっちゅう本能に責められとったらしい。
昔、子作りしたいから体を貸してって頼まれてなあ、子供やったさかい深く考えずに許してまった。
蔵から出てからこっち、もんのすごく後悔したけどな……
綺麗な格好したい言うて勝手におなごはんの服を着て、ほんでであないな事しおって……
あないな気色悪いもん、いっぺん付き合っただけでこりごりや。
せやから、一日ごとに交代してこの体を使い、使わん方は眠る事にしたんや。互いに相手のやる事には干渉せんちゅう約束で、な。
表向きは、ミズハは麿の妹ちゅうことにした。が、まあ……御所でも子作りしとるんや、女装とバレとる。『タカアキ』ん時にも言い寄られたりして、閉口しとるんよ。
子作りの仕方って……
まあ、ええか、教えたっても。そもじにも関わりある事やしな。

人間の子作りとはちゃうねん。『主さん』の欲しいのは、『精気』やら『魔力』やら目に見えない生命力と、その人間の一部や。血や肉や……その……人間が子作りする時の子種のアレとかや……

そういういうもんを取りこんですぐに、卵、産むんよ。麿の中に、な。で、卵を孵す為に、何百倍のモノをこの体に取り込む。

せや、アレやアレ。言わんでもわかるやろ？　麿の体を使って、『主さん』がアレで男から必要なモノを吸うわけや。

人間を食べたらあかんと麿が禁じたから、アレがてっとりばやいんや。子作りと、卵をあっためる為には、な。

だから……

その変態を見るよな目、やめて。

麿には、男色の気も、M嗜好も、女装癖もないんや。

ミズハの為や。ミズハがかわいそうでかわいいから、体、貸したってるだけや、しゃあないやんか。

麿なんぞ、もって数十年や。あれが、又、一人きりになる前に子供もたせてやりたい。そんだけや。

男なんぞ興味ないわい。

『ミズハ』は魔力や霊力や精気の強い男が好きで渡り歩いとる。けど、『タカアキ』ん時はおなごはんとしか遊ばんわ。最後までできへんけどな。

まあ、ミズハとは諦めてやるけんど……

ん？

ミズハと？

いややわぁ、そない露骨な……

うんまあ……週に一、二度は……

ミズハがミズハの時間を使って犯りたいって誘ってくるんや。

ええやん、夫婦なんやから。

やり方？

そらぁ、体つくらなできひんから、分身とかキヨズミとかの体にミズハに憑依してもらってなあ……

ほんまはハルナとかナツメとかおなごはんに憑依してもらいたいんやけど、それだと『おなごはん断ち』の戒め破る事になってまうから、泣く泣くなあ……

自分の分身とか男とか気色悪いんやけど、ミズハが中に入ると不思議とかぁいく見えるんや……愛の力やわ。

契約のせいでミズハの霊体の大元は麿ん中に残ってまうから、他の体に魂を移して麿と交わっても卵は作れん。麿と寝ても不毛なだけや。なのに、好きやから抱いて欲しいってミズハからいっつも求めてきてな……

くぅぅぅ、もう、たまらん。

かわええやろ、ミズハ？

おや？

青い顔やな。

どしたん？

仮婚姻の儀式？

気が重い？

何で？

食べられて飲み込まれるわけやなし。ちょいと体から、気と液体、抜かれるだけや。痛いこと無い。

大丈夫や、ミズハ、上手やさかい、気持ちええ間に終わるで。

は？

そうや。儀式の時は、麿のこの体を使う。

けど、ちゃんとミズハの顔の化粧するし、中身はミズハやん。ええやん、蛇やけど、おなごはんなんやから、寝ても。

何か問題か？

頭ん中、切り替えられん？

難儀やなぁ。

ま、嫌なら、目、つぶっとき。

すぐ終わる。

ミズハは気位高くてわがままやけど、尽すおなごや。

蔵を出てから、ミズハが陰に日向に麿の為に術を使って助けてくれたから一族の鼻つまみから一族の長に復帰できたし、ミカドの神官長なんて偉そうな職にもつけたんや。

やってくれって頼んでもないのんに、今は、キョウの都の守護神まで務めてくれとる。麿が神官長になったからや。麿を喜ばそと思って励んでるやで、いじらしいやろ？　かぁいいやろ？

そもじもミズハを召喚魔法で使う気なら、あれにたっぷり愛情注いでかわいがってやりぃ。期待以上の働きをしてくれるで。大魔王戦も楽になるの間違いなしや。

だから、ミズハに、そもじの種のええ卵、産ませてやりぃな。ミズハ、誰も彼もの卵、産んどるわけやない。気に入った男のだけや。うん、マサタカとかキヨズミの卵もあるで。恐れ多くもミカドのも、な。

知った男の子供がいっぱい居れば、麿が死んでも、ミズハ、寂しゅうないやろ。

そや。ミズハが子種欲しい言うんは、かなぁり気に入った相手だけなんや。他の液体からでも作れるけど、やっぱ子種から作った卵のが具合がええそうや。

良かったなあ、愛されとるで。子種やって、あれ、喜ばせたってや。麿からも頼むわ。

＊　＊　＊　＊　＊

駄目だ……

話が通じない……

愛するあまり相手を食べてしまう、神の愛……

そんな強烈な愛の形を、幼児の頃から与えられ続けてきたタカアキは……仕方がない事なのだが、感覚がおかしい。
食人以外の神の行為を些事だと思いすぎだ……
肉体を男性との性行為に使われ、体に卵を産みつけられてるだなんて……異常過ぎる。
嫌は嫌みたいだけれども、タカアキは、そのへんのことは、あまり気にしていない。
けろっとしている。
だから……
僕には無理だってわかってくれない……
……今、目の前に居るこの男性の体と子作りなんかできるわけないじゃないか……
僕は女性が苦手だ。でも、積極的に男性が好きってわけでもない……と、思う……
そりゃあ、男性しか居ない総本山とか落ち着くけど……
いや、違う。
僕は、ただアーメットが好きなだけなんだ。
目の端でアーメットを見てみると……
兜と口布から覗く目は『？』となっている。いまいち、タカアキの話についていけていないようだ。
良かった。
神様とどうやって子作りするのかわかってないようだ。このままわからないままでいてもらおう。
儀式の時は結界張って、中を覗けないようにしておこう……
僕に儀式が果たせるのか……
無理だと思う……子種は無しにしてくれないかなあ……

「今、卵って幾つあるんですか？」
「百ちょっとや」

「百？」
　予想以上の数。実体は無いんだろうけど、百以上もタカアキの体内に卵が……
「むっさい髭面になったら、いっくら中身がミズハでも男はん誘惑できんと思ってな、麿が綺麗な内にと思って十代の頃、励ませたんや。それで凄い数になってるんやけど」
　タカアキは自分の頬をさすった。
「焦らす必要なかったわ。もう二十七やのに、まったく髭が生えんし、体もほっそくて逞しゅうならん。ミズハが中に居るせいやと思うわ。後、二十年くらい、ミズハに子作りさせられそうや」
　幾つ卵を産ませる気なんだ……
　しかし、二十七か。そうは見えない。
「老化が止まっているのでは？」
「う～ん、そうかもなあ。ようわからん。『主さん』をずっと体ん中に棲ませとった神官、今まで居らんかったんで前例がない」
「魔力と霊力をわけてもらい続けるのでしょう？　いただける量も年々増えているのなら……肉体もそれに見合ったものに変化するかもしれません。たとえば……不老不死とか」
　僕がそう言うと、『そうだとええなあ。ずっと、ミズハと一緒に居てやれる』とタカアキはホホホとおかしそうに笑った。
　三大魔法使いの一人のエルロイ様は長寿の法で三百年以上生きていらっしゃるし、大僧正様ももうすぐ二百歳だ。強い魔力・霊力があれば半永久的に生きるのも不可能ではないはず。
　タカアキの場合、生き続けるという事は、白蛇様に食べられ続けるという事だけど……
　あ、でも……
　気になったので、聞いてみた。
「ミズハ様がタカアキ様を食べると、中の卵はどうなるんです？」
「卵も一緒にミズハの腹の中や。けど、そっくりそのままの体で再生してもらえるから、卵も元通りになる」

そういうものなのか、精神体というのは？
「まだ一つも孵ってないんですか？」
「いいや」
タカアキは扇子を広げては閉じ、閉じては広げと遊び始める。
「二十ぐらい孵っとる」
え？
「では、もうミズハ様にはお子様が？」
「まだ、居るとは言えん。産まれたばっかの子供は霊体なんや。実体化するんには、普通、何十年から何百年かかるんやて」
「はあ」
「母親と一緒に、みぃんな麿の中に居るけど、空気みたいなもんや。まだ話せんし、何も自分じゃ考えられん」
自我がない段階という事なのだろうか？
「だからな」
開いた扇子で口元を隠しながら、タカアキが言う。
「麿が死ぬか、ミズハを裏切ったら、この肉体を餌にやるて約束したんや」
「え？」
「魔力・霊力の高い人間の血肉は、神様にはごっつい御馳走やからな。麿を食べれば、子供達も実体化できるやろ」
タカアキの目元が、にっこりと笑みをつくる。
「麿の死と共に一族との契約も切れる。術も書き変えてあるし、一族にもミカドにも、まあ、脅してやけど、納得させた。麿が死ねばミズハは子供とお山に帰れるんや」

狂気と決めつけ、切り捨ててはいけないような……
何とも……
凄まじい愛の形だ……

「ミズハ様を裏切るというのは……？」
「浮気や。おなごはんのアソコを使ったら、麿は子供達の餌になる」
ホホホとタカアキが笑う。
「だから、ミズハにもちゃぁんと断ってある。命懸けても惜しゅうないおなごはんに出会ったら男やからフラフラと浮気してまうと思うけど、その代わりミズハには子供を残してやるてな」

それは確かに、命懸けの恋だ……

神に魅入られた男の愛を知るにつけ……
儀式なんてたいした事ではないような気になってきてしまう。
危険な精神状態だ。

異種婚は命がけ！　ある愛の形！（後書き）

姫巫女ちゃんはフェロモン出しまくりです。普段、高ビーなくせに、好みのタイプの男性の前ではコロッと態度を変えて媚びまくるという、クラスに居たら女子一同から総スカンをくらうタイプ。
でも、白蛇なので、そんな生態で、私的にはＯＫですｗ

タカアキとミズハが気に入ってしまったので……
もしかすると、ムーンライトノベルズに、このバカップルの話、書くかもしれません。
タカアキは男色が嫌いなのに、ミズハがほぼ男性にしか憑依しない為、ＢＬになってしまう難儀なカップル。いちゃいちゃラヴラヴで、血なまぐさい、おまぬけなコメディになると思います。
とちくるって書いてしまった時には活動報告でお知らせしますので、十八歳以上の方、よろしかったらご覧ください。

＊　＊　＊　＊　＊

次章は番外編。『ぼーちゅーじゅつを教えなさい！　恋する九才！』より少し前の話。夏の別荘での親子の触れ合いの話。
お父様大好きなラーニャや、まだ王子のアーメット、ガジュルシンが弟を猫っかわいがりする理由、インディラ王家の乱れた大人の夜とか描きたいなあと思っています。次回はアジンエンデはお休みです。

＊　＊　＊　＊　＊

明日からムーンライトノベルズに『女勇者セレス――ジライ十八番勝負』をアップします。十二番勝負までアップしたら、ひさし

ぶりに『女勇者セレス』を更新します。ラーニャちゃんの更新は、
少し先です。

夏の思い出！　お父様と一緒！（前書き）

ラーニャが九才、ガジュルシン・アーメットが7才、ガジャクティンが5才の話です。

夏の思い出！　お父様と一緒！

五月のウッダルプルは、盛夏となる。

平均気温四十度。

毎年、熱射病、熱疲労、熱中症、で倒れる民が多く、暑さの為に死に至る者も少なくない。

対策として、水を生み出せる魔法使いを国で雇い無料の水分補給所をもうけ、施療院の数を増やし、その時期の水ものの価格高騰を抑える為に井戸・用水路の工事を進め、チャイ屋を始めとする飲用水・果物屋に補助金を出して低価格での商品の販売を促進させた。

患者数は減少傾向にある。しかし、この時期の死亡者数の多さに変わりはない。体力のない老人・子供、貧しさゆえに炎天下で働く労働者。彼等が死すべき運命だったとは決めつけたくはない。医療が充実し、国がもっと豊かであれば死なずにすんだかもしれない。

そう思う。

先程まで、新国土大臣と面会していた。今後の治水事業計画案関連の書類をもらい、各地からよせられている灌漑工事の申請書・嘆願書・調査書の一覧も提出してもらった。

有限の水を全ての民にあまねくゆきわたらせるのは、この国では無理だ。現状を考慮した上で、最も民の利益となる開発を行わねばならない。

書類に目を通していると、手の中のものをいきなり奪われてしまった。

「国王陛下、お時間にございます」

そう言ってかしこまりながらも気安げに笑みを浮かべたのは、私の侍従の役も務めているヤルーだ。

本業は忍者。私の影武者であり影の一人でもある。ヤルーは表向きは私のお気に入りの侍従であり、白髪白髭の老人の顔をつくって仕えている。

「ご移動ください」
ヤルーが部下の小姓達（彼等も本業は忍者だ）に命じ、政務机の上の書類をさっさと片付けさせる。
「皆様、首を長くして国王陛下のご到着をお待ちです。ご政務に滞りがないよう、私どもで準備を進めておきますので、まずはご移動を。本日、午後にはあちらでのご政務も可能となります」
即決なんか無理でしょ？　書類なんか後回しにしてくださいよ、と、ヤルーの目が訴えている。
確かに、一、二時間悩んだところで答えは出ない。治水工事の専門家・学者にも目を通してもらい、事業計画が妥当であるか意見をあげてもらうべきだろう。
適当な人物の手配をヤルーに頼んでから、移動用の魔法陣のある部屋へと向かう。床に魔法陣が描かれているだけの、窓もない小部屋。
そこで待っていた二人の宮廷魔法使いは入室した私に対し、深々と頭を下げた。
この部屋の床には、中央高原デカンティナの別荘と繋がっている魔法陣がある。魔法陣を利用すればデカンティナと王宮の間だけならば微力な魔力で移動できる。足元の床に刻まれている円陣は、移動魔法を援助する魔法陣なのだ。
王宮には他の魔法陣もある。別室の小部屋に一室ごとに国内の他の施設や他国への移動用の魔法陣があり、宮廷魔法使いによって厳重に封印・管理されている。
本来、緊急避難用に設置されているそれを、今は、別の目的の為に使用する。
避暑の為だ。
毎年、この季節になると良心の呵責に苛まれる。
国は税収で支えられている。税金で豪奢な王宮に暮らし、その上、暑いからと言ってその王宮を離れるのだ。国民は盛夏の中で暮らしているというのに。

できるだけ国民と痛みを分かち合い、彼等と共に国を豊かにしていきたいのだが……

前に、そう心の内を語ったのだが、セレスに怒られた。

『馬鹿ね。あなた、この国の王様でしょう？　代えがきかないんだから、健康管理は義務よ。もの凄く暑い首都で、わからんちんの大臣相手に熱が出そうな書類と格闘するなんて、馬鹿げてるわ。避暑は、効率良く政務をこなす為に必要なの。健康で有能な王様で居たいんなら、特権階級の富を享受なさい』

盛夏の別荘行きは、家族サービスでもある。

デカンティナの落ち着いた静かな自然は子供達のすこやかな心の成長を助け、親子の触れ合いの時間を作ってくれる。

特に、今年は……

デカンティナの自然が、子供達を癒してくれる事を強く期待している。

早めに行って家族の時間をもうけようと、睡眠時間を削って政務を片付けた。例年より一週間早い。先週から別荘で暮らしている妃と子供達と合流し、あちらに三週間滞在する予定だ。

「移動します」

円陣の中央に、私とヤルーと書類を抱えたヤルーの部下、それに宮廷魔法使いがたたずんでいる。

魔力によるきらめきが魔法陣を包み……一瞬、浮遊感が訪れる。

移動魔法はそれで終わりだ。

周囲が王宮とは違う部屋になっている。窓一つない小部屋という造りは一緒だが、壁や扉の色が違う。

その部屋で待っていた魔法使いも、私に対し恭しく頭を下げる。

私が歩み、出入口の前に進むと、扉が開く。この部屋の管理者の魔法使いが、魔法で開いたのだ。

一歩、進みでると、

「ナーダお父様！」

「とーさま！」

「ナーダ父さん！」
三方から、熱烈な歓迎の抱擁を受けてしまった。
先に別荘に来ていた子供達だ。
廊下で待っていてくれたのか。
抱きついて来たのは、ラーニャと、ガジャクティンと、アーメット。
壁の前にたたずんでいるガジュルシンは、私の視線に気づくと小さく会釈した。
「お父様、お待ちしてたのよ！　こちらに三週間もご滞在って本当？」
「とーさま、だっこ！　だっこして！」
「父さん、オレら午前中に今日の勉強、終わらせたんだよ、だから」
「ガジャクティンはしてないじゃない」
「いいんだよ、オレが言った書き取りしたもん。な、ガジャクティン」
「うん」
「みんなちゃんと勉強したからさ、昼食の後、お母様の牧場の」
「私が言う！　みんなで話し合って決めたの！　今夜からお母様の牧場の別宅に泊まろうって！　お父様も一緒に行ける？」
遊んで～と子供達が目をきらめかせている。
子供達は先週からこの別荘に来ている。
普段、私は可能な限り、家族と過ごすようにしている。どんなに忙しい時でも、週に二日は子供達との時間をもうけるようにしている。しかし、先週は家族の時間はなかった。私が政務の為にウッダルプルに残っていたからだ。
その分、これからの余暇、楽しませてもらえるのだろうと、皆、期待に胸をふくらませているのだ。
「至急吟味しなければいけない案件があるのですが……」
そう言うとラーニャとアーメットが不満そうに、え～と声をあげる。遅れてガジャクティンも真似をする。

本当にかわいい。
私は、にっこりと笑みを浮かべた。
「あなた方からのお誘いの方が大事です。仕事は、明日にしましょう」
きゃぁ～と歓声があがる。
きゃいきゃい抱きついてきたガジャクティンを肩にのせ、右腕だけでラーニャとアーメットの体を抱き抱え足を床から浮かせてやると、全員おおはしゃぎだ。ラーニャとアーメットが私の体にべったりとしがみついてくる。ガジャクティンが落ちないよう、左手は肩の上の五才児の背にそえた。
だが、視線が合っても、ガジュルシンはかぶりを振るばかりで近づいて来ない。淡く微笑んでいるだけだ。
先日までは、皆と一緒になって私に抱きついてきたのだが……
報告にもあったが……
まだ気にしているのだ……
「ガジュルシン」
声をかけると、第一王子は困ったように私を見つめた。
「ウシャスの具合はどうです？」
「まだあまりお加減がよろしくありません。悪阻がおつらいらしく、お食事が喉を通らないそうです」
七つの子供とは思えない理知的な答えが返る。
「これから大荷物を」
と、言って子供達の体を大きく揺すってやる。再び歓声があがった。
「この重たい荷物達を抱えて、妃の部屋に向かいます。先触れ役となって、私の来訪をセレスとウシャスに伝えてくれませんか？」
「はい、父上」
用事を頼まれ、ガジュルシンはホッと安堵の顔となる。この場にいるのが気が引けていたのだ。アーメットに誘われ、半ば無理やり連れて来られていたのだろう。

去りゆくガジュルシン。
肩の上のガジャクティンが、ひしっと私に抱きついてくる。
兄を見たくないのだ。
別荘滞在中に、ガジャクティンの心の傷を少しでも癒せればいいのだが。

「国王陛下、おいでをお待ちしておりましたわ」
妃の部屋で、侍女達にかしづかれながら、セレスは立ち居で私を迎えた。金の豪奢な髪を結いあげインディラ風衣装をまとうその姿も、実にさまになってきたものだ。第一夫人にふさわしい。
「良き日のおいでを心からお祝いいたします」
セレスの背後に控えていた女性が、私に対し深々と頭を下げる。セレス同様小柄で、結いあげた黒髪はつややか、その顔はガジュルシンとよく似ている。第二夫人ウシャスだ。
私は二人に対し鷹揚に頷いてから、子供達に支度をして待っているように命じ廊下に下がらせた。
妃の部屋の周囲は、私と子供達以外男子禁制だ。ヤルー達は既に執務室へと移動し、私の側仕えについた宦官も部屋から下がらせる。私の代からは一人も数を増やしていないが、父の代から既にその体になっていた者達のうち、希望者はずっと雇い続けている。
セレスは私とウシャスをテーブルに招き、侍女にお茶の用意をさせる。
「今夜から子供達としばらくあっちに泊まろうと思うんだけど、ナーダも来られる？」
セレスの問いに、私を頷きを返した。
「ええ、お邪魔させてくださいい」
セレスはにっこりと笑みを浮かべてから、自分の隣に座っているウシャスへと視線を向けた。
「でね、ウシャスはこっちに残ってもらおうと思うのよ、いいかし

ら？」

特に理由が無ければ、余暇では家族は行動を共にする。そう私は決めている。

「加減が良くないと、ガジュルシンから聞きました。大丈夫ですか？」

私の問いに、慎み深い第二夫人が恐縮したように頭を垂れる。

「ご心配をおかけし、申し訳もございません……」

「大事にしてください、あなたは今、一人ではないのですから」

「あたたかいお言葉、嬉しゅうございます……」

全然、嬉しくなさそうな声だ。

セレスが溜息をつく。

「悪阻がひどいのは本当。だから、一人でこっちでのんびりさせてあげた方がいいと思うの」

言外に子供達から離した方がいいと、セレスは言っているのだ。

更に目で、動けと命じてくる。

仕方なく私は頷きを返し、立ち上がった。テーブルを回り、向かい合って座っていた妃の左肩にそっと触れる。

「あなたは、私に二人の子を与えてくれた大切な方です。三人目の子供ももちろん大事ですが、なによりも、あなたが気がかりです。今はゆっくり休んでください」

「陛下……」

アーモンドのような印象的な瞳に涙をため、ウシャスが私を見上げてくる……

彼女には好意を抱いている。信仰心に篤くおとなしくまじめな彼女は、常に良き母・良き妻であろうとし、私やセレスに心から仕えてくれている。

だが、しかし……

駄目なのだ……

触れると、どうしても鳥肌がたってしまう……

化粧品の香りが嫌いな私の為に女としての装いすらやめてくれた

心優しい女性（ヒト）だというのに……

もっとガバッとくっつきなさいよと、ウシャスの隣席のセレスが動作（ゼスチャー）で命じてくる。

それに対し私は目で『無理だ』と答えを返す。無理して接触すれば、おぞましさのあまりお腹に命を宿している彼女を突き飛ばしかねない。

セレスはぷぅと子供っぽく頬をふくらませてから、微笑んだ。実に意地の悪そうな笑みだ。

「今は無事に三人目を産むことだけを考えてなさい。楽しみよね、子供が増えるのも嬉しいし、あなたと、又、プレイできるようになるんですもの。国王陛下もあなたの艶姿を楽しみに待ってるのよ。ね、陛下？」

ウシャスに、どんな艶姿をさせる気なのだ……

答えを求める瞳が私を見上げている。

溜息をつきたいのをこらえ、無難な答えを返しておく。

「さまざまな形であなたと触れ合えるのは、私にとっても喜びです」

ウシャスの頬がポッと赤く染まる。

性的な意味合いなどゼロの答えだったが、彼女が誤解して喜んでくれるのならそれはそれでいい。

「政務の為に、私だけこちらに戻る機会もあります。その時にはお顔を見に伺ってもよろしいでしょうか？」

「よろこんで、国王陛下……おいでをお待ちしております」

忍達の報告によると、別荘に来てからも、ガジャクティンに変わりはない。

勉強の時間は脱走し、アーメットとラーニャとしかまともに口をきかない。どんなに話しかけられても母にも兄にも答えを返さず、触れられそうになると何処までも逃げてゆくのだそうだ。

召使に対しては実に横柄で、そのわがままをいさめる者には暴力

で応えている。脛を蹴る、物を投げつける、殴る、噛みつく……ガジャクティンの召使は全て忍にした。彼等ならば怪我はしない。

よく笑い、誰に対しても愛想がよく、ものおじしない子供だったというのに……

あの教師達……まったくもって許し難い。

ガジャクティンが今のままでは、ガジュルシンの傷も深くなってゆく。三人目の子供を宿しているウシャスは悪阻の為というより、心労のせいで体調を崩しているのだ。

だが、焦りは禁物だ。

言葉では駄目だ。心無い大人の言葉で深く傷つけられたあの子に、言葉で何を伝えようとしても心に届きはしまい。

自分は愛されているのだと、あの子が感じられるようになるまで……あの子が満足できるまで愛を注いでやるべきなのだ。

中央高原のデカンティナは、一年を通して涼しく過ごしやすい気候で、昔から王侯貴族の避暑・保養地で別荘が多い。

王家の別荘は城と呼べるほどの規模がある。その敷地内に、森あり人工湖ありの実に緑豊かな広い別荘なのだ。

九年前、ラーニャの生誕祝いとして敷地に牧場と別宅をつくり、セレスにプレゼントした。

デカンティナの気候はエウロペに近い。彼女お気に入りの別荘に、エウロペの田舎屋敷によく似た別宅を建て、エウロペ人を雇い、馬を中心に牛と鶏を飼わせ、畑も作らせている。

『つつましい生活が好きなわりに、あなた、豪快にお金を使うわよね』と笑いながらも、セレスは故国によく似た環境に喜び、こちらに滞在中、半分は別宅で暮らす。

エウロペ風の屋敷には、女主人の私室の他に客間が十ある。

子供達が新たに生まれる度に、セレスは客間を一間ごとプレゼントして与えた。私の部屋、ウシャスの部屋の他に、ラーニャ、ガジュルシン、アーメット、ガジャクティンの部屋があるのだ。そして、来年にはウシャスの胎内に宿っている子供の部屋も出来る予定だ。

子供達は自室の内装を好きに変えられ、私物も好きなだけ持ち込める。

ラーニャが五才となった年から、毎年、セレスは、子供達に小遣いを与えるようになった。現金を渡すわけではなく、それぞれに相応の金額を提示し、その予算内での買い物を許可しているのだ。

内装・家具・美術品・日用品・玩具の業者のカタログを見せて本人に購入計画をたてさせ、セレスやウシャスと相談の上で部屋に新たに増やすものを決めているのだ。

幼児に大金を渡したところで正しく使えるはずはない、当初、私はそう反対した。しかし、

『親や周りからモノを貰ってばかりじゃ、自分じゃ何も考えないおバカな子になるわよ』

と、セレスは言った。予算内での買い物計画をたてさせるのは、算数の勉強であり、空間把握の勉強であり、自主性や美的センスを培う為である。購入品については母親達が責任をもって吟味・指導すると約束したので、許可している。

実際、後宮育ちで買い物に縁のなかった子供達は、自分で考え自分で欲しいものを買って部屋を豊かにできる事を喜んでいる。子供達はこの屋敷にも、それぞれの部屋にも愛着を持っている。

セレスの別宅に来たら、子供達それぞれの部屋を表敬訪問するのが私の義務だった。

どの部屋からどの順番に私が見て回るかは、子供達がくじ引きで決めている。今年はラーニャ、ガジュルシン、ガジャクティン、アーメットの順番だ。

ラーニャは満面の笑顔で、部屋を訪れた私を迎え入れた。
ラーニャの部屋の基調は赤と黒だ。女の子らしいかわいらしい色合いは好きではないらしい。しかし、彼女からすると、彼女の部屋は『愛あふれる夢の世界』なのだそうだ。
「ここにね、エーゲラ風の半裸の乙女の石膏を設置してね、あっちにね向かい合う形で白鳥のガラス細工を置くの。白鳥、実物大なんですって、孔雀より大きいのかしら？　明後日、注文した品が届くのよ。綺麗に飾りつけたら、是非、又、部屋にいらして」
「ええ、ご招待いただけるのでしたら喜んで」
ラーニャは大型の美術工芸品が好きで、よく購入している。部屋中の壁の前には、さまざまな国のさまざまな芸術品が並んでいる。格好いいからと獅子の毛皮つきの模型を、綺麗だからとガラス玉を散りばめた巨大な陶器の花瓶を、かわいいからと木彫りの巨大蛸を、セクシーと海馬の石膏を、表情が素敵！　とジャポネの石仏を購入し、設置……
彼女の部屋には、無国籍な無秩序な空間が広がっている。
私はもちろん、アーメットも、セレスも、彼女の趣味がわからないのだが……
私を部屋に招き入れると、彼女は新しい美術工芸品について嬉しそうに語る。彼女の作った物語と共に。この彫像とあっちの金メッキの置物は忍ぶ恋中なのとか、ここは巨大渦のある大海で姫君を巡ってタコと海馬が戦ってるの、のように。規模の大きな人形遊びをしている感じだ。
彼女なりの想像力や感受性をもって、この部屋は構築されているのだ。特殊な設置物のせいで、一種、異様な雰囲気があるが、根は恋愛好きな少女趣味の部屋なのだ。そんな気がする。
しかし……
「あの石仏、位置が変わったのですね」
私は寝台の横にあるモノを指さした。サイドテーブルの隣という不似合いな位置に、ジャポネ式の宗教仏がたたずんでいる。

「前はテーブルの横にありませんでした？」
「いやん、お父様、覚えていてくださったのね」
ラーニャが嬉しそうに笑う。
「紅茶を飲みながらお話をするのもいいかと思ってたんだけど、朝、目覚めた時、一番最初に御挨拶できるのも素敵だと思って変えてみたの。どうかしら？」
褒めて欲しい！　とラーニャの顔は訴えている。
朝、目覚めてすぐに石仏を目にしたいねえ……荒いノミで削られたシンプルな石像の顔が、彼女にはうっとりするほど美しく見えるのだそうだ……彼女曰く、究極の美なのだとか。
「目覚めた時、最初に美しいものを目にすれば幸福な気分になれるでしょうね」
「そうなのよ！」
ラーニャが私に抱きついて来る。
「私、この石仏のストイックな美しさが好きなの！　このほっそりとした、やさしそうな目が好きなの！」
思わず笑みが漏れた。
「あなたにそこまで思われたら、この石像も幸福でしょうね。あなたの心に応え、あなたを命がけて守護してくださるでしょう」
「ま」
ラーニャは満面に笑みを浮かべた。
「ナーダお父様！　大好き！」
私はラーニャの部屋を見回した。
彼女は、美術品の真贋はあまり気にせず、気に入った物を設置し、物語が無くなったモノは処分する。出入りの商人に下取らせ、その分のお金も加算して別の美術品を買い上げているらしい。
なので、彼女の部屋は模様替えがたいんへん激しい。来る度に部屋の中の物語が変わっている。
「でも、お父様もいらしたし……本物には負けるし、当分、ここじゃ寝なくなるから、又、模様替えしようかなあ……」

ん？

「石仏はお顔が素敵だけど、白鳥の置物もいいのよ！　純白なの！　カタログの絵も神々しくてうっとりしたけど、実物はすっごく綺麗みたい！　あそこに設置すれば、朝日を浴びるでしょ？　絶対、キラキラ光ると思うの。穢れのない美しさってヤツ？　本当は設置した後の美空間をお父様に見ていただきたかったんだけど……」

いつもは皆より二週間遅れて来るので、私が到着する頃には部屋の模様替えが終わっているのが常だった。が、今年は例年より一週間早くこちらに着いている。

まだ模様替え終わってないのよと、ラーニャは少し不満そうだ。細かな事に拘泥しないおおらかな性格だが、凝るところにはとことん凝る主義なのだ。

しかし、白鳥か……

「白く美しい……まるで、ジライみたいですね」

と、私が言うと、とろけそうだったラーニャの顔が急に不機嫌なものとなる。

「違うわ！」

頬をぷぅとふくらませ、ラーニャが私を睨む。そういう表情をすると、実にセレスに似ている。

「全然、違う！　私は白く美しい純潔の美が欲しかったの！　あっちの乙女と向かい合う形で！」

「はあ」

「エーゲラの古代神話にあるでしょ？　主神が白鳥になって乙女と結ばれる話」

エーゲラの神話？

今はエーゲラものに凝っているのか。

「星座の白鳥の話ですね」

「そうなの！　やっぱり、お父様、ご存じだったのね！」

ラーニャがポッと頬を染める。

「この部屋で、乙女が白鳥と出会った瞬間を描くのよ。恋に落ちた

二人は、この後、濃厚でラヴラヴな愛の時間になだれこむの！　肉体関係になる前の二人、その至宝とも言える精神的な愛の絆の美しさを表現したいのよ。おわかりになって？」

「……」

どうも少女趣味は理解できない。あの神話は、エーゲラの最高神の浮気話の一つだ。そんな神話の一場面を、何故、この部屋で描きたいのかさっぱりわからないが……

「ラーニャがそう考えているのなら、きっと美しいものになるでしょうね」

と、私が言うと、

「そうなのよ！」

ラーニャが嬉しそうに、更に私に抱きつく。

「きっと、お父様も気に入ると思うの！　こうやって二人で愛に満ちた世界を見つめましょうね！」

「はい、よろこんで」

ガラス細工の白鳥と石膏の乙女に、少女らしいロマンを感じたのだろう。

ラーニャの少女趣味も美も、私にはわからないが。

この部屋も、子供らしいゴチャゴチャした部屋というのが私の印象だが、彼女が彼女なりの裁量で美しいものを集めた『美のお部屋』なのだ。敬意を忘れてはいけない。

彼女が美しいと感じているものが少しでもわかるように、共に同じものを見てみよう。

万能に至高なし！　すれ違う心！

雑然としていたラーニャの部屋に比べると、ガジュルシンの部屋はたいへん大人しい。

私物をあまり増やさないし、家具も調度品もほぼ備え付けのモノのままだからだ。

この子が自分の意思で替えたのは寝具のカバーだけだ。全て水色だ。だが、それも、仲の良い義弟が『お揃いの寝具にしよう』ともちかけてくれたからであって、その誘いがなければ他の客間と同じままだったろう。

そして、勉強机の横にある棚が、必要を感じ彼が増やしたこの部屋の唯一の家具だ。その棚だけが、ガジュルシンの部屋に個性を与えていた。

王国の世継ぎのガジュルシンには、物欲が無かった。きらびやかな後宮で、望む前からさまざまなモノを周りから与えられてきた為だった。

セレスが子供達に部屋の模様替えをさせようと考えたのは、多分にガジュルシンのせいであろう。後宮においても、子供達に何か好きなものを与えようとしても、ガジュルシンは無関心そうにアーメットと同じものをいただきますと言うだけだった。

私の息子は『欲しいものが何もないのです』と、言う。『今のままで生活に支障がないので、このままで問題ないはずです』とも。

神童と称えられている早熟な世継ぎには、子供らしい夢や憧れもなければ、美に接する喜びもなかった。何事にも無関心だったのだ。

ガジュルシン四才の夏、共に森を散策し植物を採集させた。

小さな植物を何種類も根から摘ませ、湖で根を洗わせ、よくふきとらせてから野冊に挟ませた。帳面に日付・採集場所・高さ・花や実の色などをメモらせる。

セレスの別宅に戻ってから、その日採取したもので、植物標本を作って欲しいと求めた。

小さなガジュルシンは首を傾げた。

『何の為にそんなものを作るのです？』と。

別荘にも王宮にも立派な植物図鑑が数十冊に渡ってあるのに、こんな微々たる量の標本を作っても無意味ではないか？　と。

『今のこの時期ここでしか出来ない事に、あなたが挑むから意味があるのです』と、答えた。今年の夏は植物標本作りをして、部屋に置きなさい、あなたの知識とセンスで良いものになるよう工夫するのです、とも。

『どういうものが良いものなのでしょう？』と、尋ねてきたので、『自分で考えなさい』と、笑いかけた。自分にとって美しいと思える作り、或いは利用しやすさ、或いは資料としての充実、或いは他人の目を喜ばす作り、何でもよいのだ。

『あなたが満足ができる作りを目指すのです。標本の作り方や管理の仕方は、書物を調べるなり知識のある大人に尋ねるなりしてやってみなさい』。

『何時までにどれほどの数を作ればよいのでしょうか？』

幼児らしくない質問ばかりする私の子供。私もきっとこんな子供だったのだろうと思うと、おかしくてたまらなかった。

『期限も数もあなたが決めなさい。この夏の間、ずっと続けてもその作業に何の愉しみも見いだせないようなら、来年は他の事に挑戦してみましょう』。

真面目で几帳面な私の息子は、私に命じられたことだからと、書物を調べ、植物の標本作りを始めた。

夏とはいえ涼しいデカンティナでは『おしば』を作るのに時間がかかる。ガジュルシンは、魔法使いに相談し、魔法授業の時以外は

封印している魔力を解放してもらい、魔法使いの指導の下、魔法で植物を乾燥させる努力を始めた。火と風の魔法を操り、熱風を生み出す。二系統の攻撃魔法を同時に操るなど大人の魔法使いでも制御が難しいものなのだが、ほんの数十分でガジュルシンは植物をバラバラにする事なく温風を送れる加減を習得したそうだ。

更に、乾燥植物の標本の台紙にその植物が生きている時の姿の絵を添付した。原色のままの標本は作れないので、森に行き、採取したものと同じ植物を写生したのだ。

作りかけの彼の標本に、大人達は注目した。添付されている絵を見て、『上手だわ、さすがナーダの息子ね』とセレスは褒め、『とても綺麗ね』とウシャスは微笑んだ。姉弟達も無邪気にガジュルシンの器用さに賛辞を送った。

自分の作ったモノが人を楽しませるなど、思いもしなかったのだろう。褒められると、ガジュルシンははにかんだように微笑んだ。

その夏の間にも、彼の植物標本は増えてゆき、それを箱に入れて置いておく為の棚を彼は自分の意思で購入した。

そして、セレスから『部屋に飾りたいから、綺麗な押し花の作品を貰えないかしら?』と、頼まれた事によって彼は新たな喜びを見つけた。

セレスに渡すのなら、植物標本ではなく、綺麗な絵の方がいい…そう考え、本を参考に、押し花を組み合わせた一枚の貼り絵を作ったのだ。赤味がかった花びらを並べ、薔薇の絵を作ったのだ。それを額縁に入れてセレスに贈り、母親にももっと淡い色合いの花びらを集めて作った同じ絵柄の薔薇を贈った。それらは、四歳児のものとは思えない完成度だった。『作品』といっていいレベルだ。

喜ぶ二人の母、羨ましがる姉弟が、彼の心にものをうみだす喜びを教えた。

後宮に帰った後の彼は賢い世継ぎの王子に戻り、決して植物採集も作品づくりもしなかった。

が、翌年、別荘に来ると、精力的に植物採集や写生を始めた。余

暇の間だけの『趣味』とわりきったのだろう。子供らしからぬ判断だったが、別荘での彼が楽しそうだったのでとやかく言うのは止めた。

昨年は姉弟達に作品を贈っていた。標本作りも続けてはいた。が、どちらかと言うと、写生の方が気にいったようで、植物だけではなく、風景、空、王家の別荘である城、別宅のそれぞれの部屋、家族を描いていた。

『にーさま、じょーず』と、ガジャクティンは絵を描く兄にまとわりついた。それをうるさがりもせず、ガジュルシンは紙と筆やペンを弟に渡し共に写生をしたり、一枚の紙にそれぞれが好きなモノを描き二人で一つの作品を作っていた。体を動かす方が好きな弟が飽きて何処かへ行ってしまっても怒る事なく、弟がそばによって来る度に一緒に描かないか？　と、誘っていた。

そう、昨年はとても仲の良い兄弟だったのだ……

来室した私に、ガジュルシンはすまなそうに頭を下げた。

「今年はお見せできるようなモノが何もありません……」

昨年はこの部屋を訪れた私に、私が来るまでに描きためたモノを見せくれ、これからアーメットの部屋を飾る作品を作るのだと嬉々として語ってくれたものだが……

私はガジュルシンの勧めるままにテーブルの椅子についた。その向かいに息子も座る。

「こちらに来てから、植物採集も絵もまったく？」

「絵は描いていますが……」

ガジュルシンは眉をしかめた。

「人に見せられるようなモノではありません」

「習作なのですか？」

「そうではなくて……」

ガジュルシンは言いにくそうに、言葉を濁す。

「気持ちが悪いモノしか描けなくて……」
「気持ち悪い？」
「見てると嫌な気分になるんです……」
「見る者に、不安や不快を与えるような絵という事ですか？」
「……そうです」
現状に対する不満を絵にぶつけているという事なのだろう。

先月半ば、ガジャクティンの家庭教師達を解雇した。
彼等が幼い子供にもたらしていた害を知ったからだ。

その数日前、ガジュルシンが私の私室を訪れ、青ざめた顔で言ったのだ。
『このままでは、僕がガジャクティンの周りの者を殺してしまいます。彼等を解雇してください』と。
殺すとは穏やかではない。
理由を尋ねると、勉学の時間、ガジャクティンは、毎日、虐待されているのだと言う。
『最近……ガジャクティンが僕を避けるので、何故かと思い、ハンサに探ってもらったんです。ハンサに手伝ってもらって、ガジャクティンの勉強部屋もこっそり覗きました。目の前が真っ赤になりました。あいつら、僕のガジャクティンにあんなひどい事を……』
ガジュルシンはぶるぶると小刻みに震えていた。彼から荒れ狂う魔力の波動を感じた。日常生活に支障のないよう封印したはずの魔力が異常なほど高まっていた。激しい感情に揺さぶられ、魔力封印が解けかけていたのだ。『殺してしまう』というのは確かに冗談ではないようだ。この子が魔力を解放し、暴発させれば人などやすく殺せるのだ。
『あいつら、椅子に縛りつけてガジャクティンを勉強させているん

です』

そこまで言うと、ガジュルシンはポロポロと涙をこぼし始めた。

興奮している王子に代わり、王子の影のハンサに説明させた。

現在、ガジャクティンの家庭教師を務めている者達は、世継ぎの王子たるガジュルシンの為に招聘した者達だった。王侯子弟の一般教養の為の教師だ。

聡明なガジュルシンはより専門的な高度な知識を求め、もう彼等からは教わっていないのだが……

ガジュルシンの教師であった事が、彼等を奢り昂ぶらせたようなのだ。

彼等は、事あるごとにガジャクティンを兄と比較した。神童と称えられているガジュルシンと比べ、あまりにも出来が悪いとガジャクティンを蔑んだのだ。

もの覚えが悪い、応用力がない、堪え性がない、本当に出来の悪い子だと、言葉にも態度にも表して。

そんな環境で学ぶ楽しさなどわかるはずがない。ガジャクティンは、勉強なんかしたくない！　と、家庭教師達に逆らい、勉強部屋から逃げようとしたのだが……

職務に忠実な側仕えの者に阻まれた。

人の上に立つ者は、施政の為の知識や教養を身につけるのが当然の義務。私は子供達に勉学を義務付け、周囲の者にサボらせぬよう命じていた。

ガジャクティンの側仕えの忍者達は、勉強が嫌だと暴れる子供を無理やり押さえつけ、時には椅子に縛りつけて強制的に勉強させているのだという。

すみません、と、ハンサは謝った。『彼等は決して悪意があるわけではないのですが……忍の常識を後宮に持ち込む愚を犯したようです』。非人道的環境で忍者修行をつけられた彼等にしてみれば、その程度の事は虐待でも何でもないのだろうと察せられたが……

動けぬように縛りつけられた上で、『兄上様はこの年にはコレが

できた』、『この年にはここまで理解していた』、『せめて、これぐらいができなければ恥ずかしいですよ』、『こんな事すらわからないのですか、本当に先が思いやられますね』などと毒を吐かれてるのだとしたら……

幼い子供には耐えがたい苦痛だろう。

ガジャクティンの警護の忍を呼び事実を確認した上で、事実ならば教師達を解雇する。又、そのような教育を施す教師を問題と思っていないようなら、警護の忍者達も他の者に替えさせると言うと、ガジュルシンは安堵の表情を浮かべた。

家庭教師達は首にし、副頭領のムジャに頼みガジャクティンの警護の者も替えさせた。忍としての腕も重要だが、人柄の良い者を担当にしてくれと。

けれども、深く傷ついたガジャクティンは、周囲の大人とまともに接する事ができなくなっていた。又、縛られるのではないかと絶えず警戒し、相手が意に沿わない行動をすると怖がって暴れるのだ。縛られまいと、暴力で抵抗するようになってしまったのだ。

そして……『出来の良い兄』を嫌ってしまったのだ。声をかけられても無視し、触られそうになると逃げてしまう。顔を目にするのすら厭うている。母親までも避けるようになったのは、兄と容貌が似ている為かもしれない。

ガジャクティンに怯えられてガジュルシンは、ひどく落ち込んでいる。自分のせいで母までも弟から避けられているのかと、母の事まで気に病んでいるようだ。

国王の義務で多忙すぎ、家族の為の時間がとれずにいたのが本当にはがゆかった。

もっとこじれる前に、二人の兄弟と母の仲をとりもちたかったの

だが……

「心の中の苦しみや葛藤が描かれた作品には、えてして傑作が多いものです」

私は穏やかに言った。

「あなたが見せてもいいと思える日が来たら、見せてください」

ガジュルシンは苦しそうに笑った。

「本当にみっともない絵なんですよ……」

「それが、その時のあなたの気持ちでもあるのです。否定せずに、絵を受け入れてあげなさい」

「……」

「あなたの絵、私は大好きです。昨年の皆の似顔絵は、とても良かった。ラーニャは愛らしく、アーメットは勇ましく、ガジャクティンは可愛く描けていました。あなたは情感あふれる絵が描ける。明らかに、私よりも絵の才があります」

「え？」

「意外そうな顔ですね」

「僕は下手くそです。筆が遅いし、何度も描き直すし……父上とは違います」

「私は総本山で写字も学びましたから、筆が早く、精確に物を写せます」

「はい、その通りだと思います」

「ですが、ガジュルシン……私の絵はその程度のものなのですよ」

「え？」

「精確で写実的なだけ……他人の心を動かす真に美しい作品が創れないのです」

「……」

「絵だけではありません。何事においてもそうなのです。私は少し学べばどんなモノもある程度のところまでは己のものにできます。

飲み込みが早く器用な為、非常に多才に見えますが……その実、どれも中途半端なのです」

「そんな事はありません。父上は、すぐれた施政者で、あらゆる学問の才も武闘の才も魔法の才もあり、絵画・音楽・書・舞踏・分筆にも才があって……父上ほど優秀な方を、僕は他には知りません」

「ありがとう、ガジュルシン」

私はにっこりと微笑んだ。

「でも、どれも一番ではないのですよ。その道一筋に精進している方に、浮気者の私が及ぶわけありませんから」

「……」

「格闘だけは……真にインディラ一(いち)となりたかったので、昔、本気で精進しました。それ以外はどれもこれも一流半の実力しかありません」

「ですが……」

「何事にも優秀な完璧な人間などいないのです。けれども、誤解はある。あなたが私を超優秀な人間(スーパー・ヒーロー)と思いこんだように、ガジャクティンもあなたを超優秀な人間(スーパー・ヒーロー)だと思いこんでいて自分では足元にも及ばない巨大な存在と怖がっているだけなのです」

「……」

「あなたのいろんな面を見せてあげなさい。あなたの駄目な点、悪い点も、ね。あなたが超優秀な人間(スーパー・ヒーロー)でない事がわかれば、あの子もあなたが大好きな兄なのだと思い出してくれますよ」

雑然としていても、全く違う。ラーニャの部屋が統一感のない無国籍な空間ならば、ガジャクティンの部屋は男の子らしい玩具部屋だ。床やテーブルに玩具が散乱している。

セレスの方針はなかなかに豪快で、自分の部屋の中ならばいくら散らけても良いと子供達に許可していた。勉強机と寝台の上を使用

しないこと、そこまで大人がいきつける道を確保する事、その二点さえ守ればいいのだ。

『小さい頃、お部屋に玩具をいっぱい広げてお人形のお家をつくったりがんばって街をつくったら、そこで片付けなさいって言われた事があるの。何度もよ。残しておければ、明日、遊べるのにと、その度に悲しく思ったわ』

と、セレスは笑って言った。

『ここは日常の生活の場じゃなくて、日常の疲れをとる別荘でしょ？　お片づけは最終日前日にきちんとさせるわ。それまでは、後宮じゃできなかった楽しみを満喫させてあげたいの』

ガジャクティンの部屋は所々に座る為の空間はあったが、床は玩具だらけだ。

兵隊の人形、木馬、剣や盾や槍などの玩具。昨年より玩具が増えただけで他のモノは変わっていないようだが……玩具の中に、セレスの実家からアーメットが貰った『歴代勇者』の木彫りの人形が混じっていた。

アーメットがくれたのと、ガジャクティンは嬉しそうだった。次から次に人形を私に見せ、これは誰それ、こっちは誰と教えてくれる。

「アーメットは優しいですね。どうして、ガジャクティンに譲ってくれたのです？」

先祖の人形をアーメットも気に入っていたはずだ。三歳の誕生祝いにもらったそれらで、よく遊んでいるのを見た。

「おにーちゃんだから、もういらないんだって」

ガジャクティンがあっけらかんと答える。

「でも、ときどき、あそばせてって」

気風のいいアーメットのことだ、ガジャクティンが前から『歴代勇者』人形を羨ましがっていたので、譲ってあげたのだろう。家庭教師の騒動があってから、王宮でも義弟の面倒をよくみてくれていた。大切な玩具だったろうに。

ガジャクティンは勇者人形の中からランツ様の人形をぬきとり、部屋の壁際の木馬の前に置いた。急いで兵隊人形を二つ持って来て、ランツ様人形の後ろに置く。

「これ（と言って木馬を指差し）、ヘスケト。火をふくおうま」

にこにこ笑ってガジャクティンが説明する。ヘスケトはランツ様の代の四天王で、火を噴く馬に騎乗していた。

絵本で読んだ通りに物語を再現しているのだ。ランツ様の従者の数も、ちゃんと二人だし。

ガジャクティンは普通の子供だ、知能の発育に何の問題もない。神童と呼ばれている兄が側にいるせいで、不当に未成熟と思われているだけだ。

同じ床に座ってしばらく勇者遊びにつきあってから、私は尋ねた。

「今夜、私の部屋で一緒に寝てくれます？」

「うん！」

と、すぐさまガジャクティンは勢いよく答える。

例年、夜は子供達と同じベッドで眠る。その為に、この別宅の私の部屋のベッドは特注の巨大サイズとなっている。

「みんな一緒ですよ？　全員、一緒に同じベッドで眠るんですよ？」

とたんに、ガジャクティンの顔から明るさがなくなる。

私の顔をチラチラ見る。

ガジュルシンと一緒は嫌なのだろう。

だが、ここは一歩も引く気はない。

「今夜は私の左腕をガジャクティンにあげます」

「とーさまの、ひだりうで？」

私は武闘僧時代に築いた逞しい筋肉のついた左腕を息子に見せた。今でも左腕一本で大の大人の体重を支えられる。子供の太腿よりも私の腕は逞しい。

「こっちの手じゃ、他の子は抱えません。頭上より高く持ち上げてあげましょうか？　それとも、振りまわしてベッドの上に飛ばす方がいいです？　抱きマクラみたいに私の左腕に抱きついて寝てもい

いですし、手をつなぐ方がいいのなら一晩中、握っていてあげますよ」

「ぜんぶ！」

ガジャクティンが目をキラキラと輝かせる。

「ぜんぶして！」

たちまち嫌な事は忘れてしまったようだ。

力持ちで物知りな私を、この子は無邪気に尊敬してくれている。

全部は無理だが、できるだけ希望をかなえてあげよう。

まずは兄と同じ場所にいさせる事から始めるのだ。焦ってはいけない。ゆっくりとこの子の心の傷を癒していこう。

アーメットは水色が好きだ。

五才になった途端、部屋の中を水色に統一した。壁紙も家具も寝具も水色だ。

何故、好きなのか？　と、聞くと、首をひねり、しばらく頭を悩ませてから『何となく』という答えが返った。

好きなものに理由はないのだろう。

水色の壁紙の中には、ガジュルシンの作品が数多く並んでいる。普通の押し花から、枯葉・押し花を使って描かれた貼り絵の作品まで。

何かをガジュルシンが作り上げる度に、アーメットは義兄を褒める。贈られれば喜んで部屋に飾る。自分の作品が大切にされていると知って、更にガジュルシンは喜んでいる事だろう。

本当に、優しい子供だ。

アーメットに勇者人形の事で礼を述べると、

「オレ、もう大きいから、いいんだ」

と、照れたように頭を掻いた。ほほえましい。まだ七つだというのに。

部屋の隅には玩具箱や模型の武器が並んでいる。が、姉と異なり、アーメットはあまりモノを増やさない。部屋を水色にした事で、ほぼ満足してしまったようだ。

アーメットは私に長椅子を勧め、共に並んで腰かけた。

「あのさ、オレさ、このところ、ガジャクティンの味方してるんだ」

ちょっとムスっとしたような顔で、ジライとセレスの子供は言葉を続ける。

「本当は二人を仲直りさせたかったんだけど、ダメだった」

ふぅと溜息をついて、アーメットは金の短髪を掻いた。

「オレとガジャクティンが遊んでる所に、ガジュルシンをいれてあげようとかしたんだけど……ガジュルシンを入れるとあいつ逃げるんだ。ボクなんかほっといて、にーさまと遊んで、なぁんて拗ねちゃってさ……」

やれやれといった風に、頭を振る。

「ガジュルシンがさ……ガジャクティンの味方をしてあげてって言うんだよ……オレまでガジャクティンの敵側に回ったなんて思われちゃいけないって。アーメットまで信じられなくなったら、ガジャクティンがかわいそうだって」

「……そうですか」

「あんなに嫌われてるのに……本当、弟思いだよな、ガジュルシン」

「ええ」

「あの二人……仲直りさせられない？」

すがるようにアーメットが、私を見上げる。

私は静かに答えを返した。

「残念ですが、今のところ良い方法が思いつきません。仲直りさせる方法を探しているところです」

「そっか……」

「ですが、ガジャクティンとは、今夜、一緒に寝る約束をしました。アーメット、あなたやラーニャ、ガジュルシンも一緒だという事は承知させています」

「ほんと？　そりゃすごいや。同じ部屋に居るのも嫌がってるのに、同じベッドに入るなんて」
「焦るとろくな結果にならないと思うのです」
アーメットに対し、私は頭を下げた。
「時間をかけて二人の距離を縮めていこうかと思っているのです。ご協力をお願いできますか？」
「うん、もちろん」
アーメットは元気よく答えた。
「寝台の二人の間にオレや姉様が入るよ」
「ありがとう、アーメット」
「いいって、お礼なんかやめてよ、ナーダ父さん」
アーメットが笑う。はにかむような笑みで。
「オレもあの二人を仲直りさせたいんだから。共同戦線でいこうよ」

囚われて？　魔力があふれる時！

昨夜は同じ寝台で寝かす事こそできた。が、ガジャクティンの頑な態度は軟化しなかった。兄と口もきかなければ顔を見ようともしなかったのだ。

ガジュルシンは、かわいそうなほど萎れてしまった。弟から一番離れた寝台の端に移動し、弟に顔を見せないよう背を向けて小さくなって眠ろうとしていた。

ガジャクティンが眠ってからガジュルシンを慰めようと思ったのだが、息子の隣のアーメットがしっかりと手をつないでくれているのが見えたので、慰め役は義理の息子に譲った。

心許せる兄弟がいるというのは良い事だ。義理の間柄ではあるが。

今日の早朝、私はセレスの別宅の庭で格闘を子供達に教えた。

格闘の型を教え、模範演技をし、子供達に拳と蹴りをさせどこを直せばいいのかを教えた。

体があまり丈夫ではないガジュルシンは、運動の時間、いつもは離れたベンチに座って皆がやる事を見ているのだが……

『弟に、みっともないところを見せてあげなさい』と、ガジュルシンに耳打ちし、今日は一緒に参加させた。

構えの姿勢も、ガジュルシンは満足にできない。両足をひらき、腰を落とす姿勢をとろうとするだけで足がぶるぶると震える。重心も定まらない。蹴りをしようにも足が高くあがらず、拳にもまったく力が入らない。

活発なアーメットや、ラーニャ、そして幼いガジャクティンすらできる拳法の所作がまったくできず、姿勢矯正だけで息もどんどんあがっていった。

「やはり、あなたは、運動は苦手ですね」

ガジャクティンに聞かせる為に、淡々と事実を言った。
「勉強は一番だけど、体を動かすのは本当、駄目だよな」
アーメットも心得たもので、侮辱とならぬよう明るく言う。
完璧に見える兄にも苦手なものがあるのだと、ガジャクティンにわかってもらおうと思ったのだが……
そこへ、
「あんた、格闘の才、ゼロよ。才能ないんだから、格闘はやめたら？」
と、きっぱりとラーニャが言ってしまう。
しまった、ラーニャに協力を仰ぐのを忘れていた……
それでは才能がない（と、周囲や自分が感じた）事はやらなくてもいいと推奨しているも同然……
僕は勉強の才がないからやらなくていいんだと、ガジャクティンが解釈しかねない。
血が下がり立っているのも難しくなった息子を私が抱き抱えた時、ガジャクティンはチラリと兄を見上げた。が、すぐに視線をそらした。
幼い心なりに何かを感じ取ってはくれたようだが……
それが良きものであって欲しいと思いながら、ガジュルシンに疲労回復の魔法を唱えた。
子供達は国王の私が治癒魔法を使う様を珍しそうに見つめ、ガジャクティンも目の端でチラチラと見つめているようだった。

子供達の勉強の時間、セレスの別宅から別荘の城に戻った。ウシャスの顔を見に行き昼食の約束をしてから、政務にとりかかる。
明日の午後に治水の工事専門家と学者の来訪がある旨を報告してから、ヤルーは至急の案件から順に私に手渡してくれた。
書類に五つほど認可のサインを記した時だった、執務室に、突然、知った顔が現れる。覆面・黒装束の忍者だ。扉を通らずに、忍の技

で現れたのだ。
「ジライ……」
口元に笑みが浮かんだ。
王宮付き忍者の忍者頭。セレスの伴侶でラーニャとアーメットの父、そして私の恋人だ。
どんな時でも彼の顔を見ること、その声を聞くことは、私にとって喜びだった。
だが……
「あいかわらずくだらぬ事で頭を悩ませているようだな」
現れるなり、遠慮のない口調で、そう切り捨ててくれる。
私はムッと眉をしかめた。
ペリシャ国境での仕事だった彼が、家族と合流するのはほぼ一か月ぶりのこと。その間、王宮で何があったのかは部下からの報告で聞いているであろうし、ジライの事だ、私の前に顔を出す前にセレスの別宅で愛する者達に会って話を聞いて来たのだろう。王宮付き忍者頭のくせに、いつも国王への報告は二の次、三の次なのだ。
「くだらなくなんかありませんよ、大切な事です」
ジライからの報告書を受け取りそれに目を通しながら、私は不機嫌な気持ちのままに答えた。ペリシャでは国境警備が更に強化されているようだ。現国王サラディアス様は熱心なペリシャ教徒。インディラ教もと大僧正候補が国王である事が、あいかわらずお気に召さないらしい。
「もと大僧正候補様は、甘すぎるのだ」
ジライがフンと鼻で笑い、美しい目を細めた。
「我に任せてみよ。きさまの悩みなど、一日で解決してやる」
一日で解決？
「どうやって？」
「第一王子と第三王子が納得するまで話し合えばすむことだ」
「ガジャクティンが兄を避けているのに？」
「そこはそれ」

ジライが両腕を組む。
「一室にとじこめるのだ」
「却下」
「話し合いが終わるまで出られぬよう、出入口も窓も外から打ちつけてしまえばいい」
「却下」
「食べ物も飲み物もなく、明かりもない部屋とか……第三者の助けも期待できぬ造りがよい。共に危機を乗り越えた方が絆が深まる」
「却下」
「む。ならば、灯りありの部屋で、動けぬよう向かい合う形で柱に縛りつけてやろう。互いの目を見て話せるよう、どうあっても顔を背けぬようにしてやるのじゃ。頭を固定するか、髪の毛を」
「却下だって言ってるでしょ！」
「……」
ジライが不満そうに私を睨む。
「上策だと思うが？」
一歩も引かぬ覚悟のまま、私もその黒い瞳を睨み返した。
「下策です。子供への虐待は許しません」
その程度のものが虐待なものかと言いたげに、ジライはわざとらしく溜息をついた。
ジライが何と言おうが、虐待だ。縛られた事がトラウマになってる子を縛るとか……非常識極まりない。
「ヤルー、きさま、どう思う？」
ジライは、突然、私の影に話を振る。振り返ると、老人の姿に変装しているヤルーは、迷惑そうな顔をしていた。私とジライを順に見つめ、仕方なさそうに肩をすくめる。
「早期解決をお望みでしたら、頭領のおっしゃる通り、荒療治の方が効果的かと思います」
「さもあろう」と、ジライ。
「ですが……ナーダ様がここにきて方向転換して子供を部屋に閉じ

込めるのは、確かに下策かと。行動に一貫性のない大人は尊敬の対象となりません。お子様方の信頼を失いましょう」

「むむ。では、我(われ)が独断で閉じ込める事にしよう。ナーダ、おまえはあずかり知らぬ事だ。後で救出役をやらせてやるゆえ、我がやる事を黙認しろ」

「拉致監禁なんて駄目です！　許可しません！　無理矢理早期解決しても、ガジャクティンの心に傷を残すだけです。それぐらいなら、時間をかけます」

「……」

「政務の後、又、ガジャクティンと話します。私だってできるだけ早期の解決を望んでいるんですよ」

ジライが舌うちを漏らす。

「きさまに任せたら何年かかるやら。あの二人が仲直りせねば、セレス様のご心痛が解けぬではないか……」

珍しく私の息子達の事を気にかけてくれると思えば、やはり、そんな理由からであったか。基本的に、ジライはセレスとラーニャ以外の事はどうでもいいのだ。

＊　＊　＊　＊　＊

『策があるんだとしても、まずは、ナーダの許可をとりに行きなさい。あの二人はナーダの子供なんだから、親御さんの許可を得られない事はしちゃ駄目よ』

と、セレス様がおっしゃったので、計画実行前にナーダのもとへ顔を出した。

案の定、ナーダの許可は得られなかった。

しかし、予定通り言質は得た。

『子供への虐待は許しません』『拉致監禁なんて駄目です』

と、国王陛下は言った。
ならば……それ以外の事は禁止されていないという解釈も成り立つ。
『拉致監禁状態とし、虐待する』事さえ避ければいいわけだ。
最悪、『あなたは何も手を出さないでくださいよ』と、言われる覚悟はしていた。その場合、『我は何も手を下さず』部下に命じて部下に実行犯をやらせようとは思っていたが。

セレス様の別宅に戻った。
部下より、第一王子は外出中、第三王子は自室で一人遊び中との報告があがる。
ナーダのもとへ向かう前に、国王からの手紙をガジュルシンに渡した。むろん、我が書いた偽の父からの手紙だ。ナーダの筆跡など真似られる。
足の遅いガジュルシンとて、そろそろ湖の船着場のそばまで着いている頃。
弟を連れていくか。

＊　＊　＊　＊　＊

ジライから渡された父上からの手紙には『ガジャクティン達には内緒で一人で船着場まで来てください』と、記されていた。
僕とガジャクティンの仲をとりもとうと父上は必死だ。余暇に入る前からだ、無理に時間をつくられて僕等と過ごされている。ご政務がお忙しいのに。
申し訳ないと思う。
本当に僕は不甲斐無い。

ガジャクティンのあの怯えた瞳を見ると、何も言えない、何もできなくなる。弟の目の届かぬ所に逃げたくなる……

あの子の劣等感と恐怖と絶望が、痛いほど伝わってくるのに……

傷ついた弟を慰めることすら、満足にできないんだ……

こんな情けない子供が、王国の世継ぎだなんて馬鹿げている。

統治者に必要な決断力も行動力も包容力も、僕には全くない。学問の理解が早くても、僕は父上のような『人物』ではない。めめしく、ひよわで、根暗な、無能者なのだ。

約束の場所に着く前に、息が乱れていた。ただ歩いているだけでこの体(てい)たらく。朝に、父上に疲労回復の魔法をかけていただいたばかりだというのに。

僕が足を止めると、背後から木に隠れてついて来ているハンサも止まる。僕を守ろうと常にハンサは真剣だ、周囲への警戒を怠らない。

忍者の気配が子供の僕にわかるはずがない。だが、僕はハンサが何処にいるのかわかる。

僕の魔力はたいへん強いので、日常生活に支障がないようにと、宮廷魔法使いから魔力封印の魔法がかけられている。魔法の授業以外、封印が解かれる事はないのだけれども……

僕は身近にいる人間の思考を、常に大まかにだが察知してしまう。細かい思考までは読めないけれども、どんな気持ちなのかおおよそわかるのだ。何度かけ直してもらっても駄目なのだ、宮廷魔法使いの封印魔法では僕の能力を封印しきれないということなのか？

ガジャクティンは……

本当に綺麗だったんだ……

幼いあの子は、兄である僕を信頼し、愛し、尊敬してくれていた。

常にキラキラした純粋な光を向けてくれていた。

それを……あいつらが……

僕は目元を右手でぬぐった。

僕の事なんか、どうでもいい。

今、苦しいのは、僕じゃない、あの子だ。
あの子を救う術を考えなくては……お忙しい父上の御力に頼るのは申し訳ないけれど。

しばらく進み……

船着場に着く前に僕は駆け足となっていた。
ガジャクティンの悲鳴が聞こえたのだ。
声ではない声で。頭の中に。

船着場の側に父上はいない。
いるのはガジャクティンとガジャクティン付きの忍者、それに宮廷魔法使いと……
それから……

「何をしている、ジライ?」

走り寄ろうとしたのだが、
「ハンサ、お止めしろ」
忍者頭の命令に、僕の護衛役『影』のハンサが従う。背後から抱き締め、僕の動きを奪う。大人の力の前に、僕はなすすべもなくつかまる。
僕は前方の忍者達を睨んだ。
「おまえ達、僕の弟に何をしているんだ?」
大人達に囲まれて、僕の大切な弟は真っ赤な顔で泣いていた。目

を閉じ、眉をしかめ、顔中を皺だらけにして。太い木の幹に縛りつけられ、口には猿轡を噛まされている。激しく泣いているのに、声はうめきのようにしか聞こえない。

「忍者頭として、先日の部下の非礼をお詫びしたく思ったのですが」

覆面に黒装束の忍者が、丁寧に、しかし、情のこもらぬ声で言う。

「ガジャクティン様は一箇所にとどまられるのも苦手なれば、他人の話を邪魔せず最後までお耳に入れるのも苦手なご様子。それゆえ、お話ができる状態となれるようお手伝いしておる最中にございます」

「な」

僕の顔に血がのぼる。

「ふざけるな！」

僕は、アーメットの父を睨んだ。

忍者の覆面から覗く目が、冷たく僕を見つめる。

ジライは、何を考えているのかわからない。精神障壁を張っていないのに、何も読めないのだ。魔力が封印されている今でも、他の者の感情はわかるのに、ジライのものはさっぱりだ。

ガジャクティンの忍者や宮廷魔法使いは、王子に対し無礼を働く事への躊躇とジライへの恐怖がないまぜた感情だ。命令には承服できないけれど、ジライが怖いので仕方なく命令に従っている感じだ。

「二～三時間も泣き続ければ、疲れて声も出なくなりましょうし、暴れて逃げる気力も失せましょう。それを待っておる次第で」

「このまま縛って、僕の弟を泣かせ続ける気か？」

「はい」

しれっと忍者が答える。

「泣き疲れて眠ってしまうようでしたら、尻でもつねってお起こしすれば、話もできましょうから」

猿轡のせいでくぐもったガジャクティンの泣き声。ずっと泣き続けているせいか、ひどく苦しそうだ。

顔に更に血があがったのを感じた。

「僕の弟を放せ、ジライ！」

両腕を組んでたたずむジライは何も言わない。
「今すぐ僕の弟の縄を解け！　王家の子を侮辱して許されると思うのか？」
僕の剣幕に、ジライの周囲の大人の感情に動揺が走る。表面は、皆、無表情をつくっている。が、僕には彼等の戸惑いがわかる。
だが、覆面から覗くジライの目は、あくまで冷たい。
「無能者に人の上に立つ資格などない」
「！」
「王家の子と甘やかされ、感情のままに暴れる人間など主人とあがめられようか？」
「……」
「幼い内から徹底的に躾けてやるのが本人の為じゃ。きさま、弟を王族という血の上に胡坐をかくだけの阿呆にしたいのか？　どれほどの家臣がこの餓鬼から迷惑を被ったか、知っているのか？　王家の子だからと遠慮し、怪我をした者が幾人いると思う？　憐れなのはその我がまま小僧一人だけではないわ」
「それは……」
僕はうなだれた。
「そうかもしれない……ガジャクティンは、今、王家の子供にふさわしくないふるまいをしている」
僕は震える手を握りしめて、頭をあげた。
「でも、それは、本人のせいだけではない。弟がそうなったのは愚かな大人のせいだ。本当は、とても素直ないい子なんだ。僕が絶対、前のガジャクティンを取り戻させる。僕が心の傷を癒してやる。ジライ、おまえは手を出すな」
ジライはフフフンと笑うと身をかがめ、弟の耳元に口を近づけ、
「ガジャクティン！」
と、大声をあげた。
その大きな声に弟がビクッ！　と、驚き、目を見開く。
「聞こえたか、弟は素直な良い子ゆえ放してあげてくれと、おまえ

の兄は言うておる」
　ひくひくとひきつりながらも、弟が目を見開き、僕を見ている。大きな衝撃を受けたせいか、茫然とした顔だ。
「笑ってしまうの。怖い者からは逃げ出し、弱い者には暴力をふるう、根性無しのおまえが良い子だとはな」
「ガジャクティンは心の綺麗な子だ。僕は知ってる。素直でやさしい、僕の大切な弟だ」
　僕は声を荒げた。
「縄を解け、その子は縛られるのは嫌いなんだ」
　しかし、ジライは鼻で笑うだけ。
　怒りが僕の中を駆け巡る。
「弟への侮辱は許さない。今すぐ弟を放せ、ジライ！」
　ジライが左手をあげた時だった、ぐぅんと何かが体を駆け巡る。
　心の枷が外れる感覚だ。
　僕を押さえつける不快な封印が解けた時の感覚だ。
「弟を放せ！」
　僕の怒りは形となり、僕を押さえつけていたハンサの体が後方へと吹き飛ぶ。加減はした。ハンサならば受け身がとれるはずだ。
「放せ！」
　ジライ達の周囲を、刃のように鋭い風が駆け抜けてゆく。
　彼等に到達するはずの風は進むべき道を変えて左右へそれ、木々を葉を削ってゆく。
　宮廷魔法使いが結界を張っているのだ。
　やはり……と、思う。僕の攻撃など、あちらは予想済みなのだ。
　ガジャクテインが驚いたように僕を見ている。
　魔力をまとわりつかせている僕を。
「争い嫌いのひよわな王子かと思ったが、なかなかやるではないか」
　覆面の忍者がにやりと笑う。
「きさま、その力をもって、兄としての責任を果たすと誓うか？」
　僕はすかさず答えた。

「誓う」
「その馬鹿弟を、正しい道に導くと約束するな？」
「ガジャクティンは馬鹿じゃない。とっても優しいかしこい子だ。心の中の悲しみが去れば、もとのガジャクティンに戻る」
「では、その悲しみを取り除いてやれ」
芝居がかった仕草で、ジライが肩をすくめる。
「我らは引き揚げよう。第三王子はきさまに譲ってやる。きさまが言に責任を持てれば良し。果たせぬ時は、第三王子ではなくきさまを我(われ)が懲らしめてやろう」
ジライが右手をあげる。彼等の姿がフッとその場から消えた。忍者の体術ではなく、移動魔法でこの場を去ったのだろう。
「ガジャクティン！」
僕は急いで弟に駆け寄り、猿轡を外してやった。結び目が後頭部にではなく、ガジャクティンの左耳の下にある。外しやすいようにという配慮だろう……
「怪我はない？　ガジャクティン？」
ガジャクティンが僕を見つめ、目からポロポロと涙をこぼす。
「にーさま……」
「痛いところはない？　待ってて、今、縄を解いてあげるから」
「にーさま……」
鼻をすすりあげ、ガジャクティンが顔をくしゃくしゃにする。
「ごめんなさい、にーさま」
僕はかぶりを振った。
「僕こそごめんね、ガジャクティン。おまえが泣いていたのに、気づいてあげられなくて……」
僕を木の幹に縛りつけられている弟に抱きついた。
声をあげて泣くガジャクティン。
僕の頬にも涙が伝わった。
木の幹の後ろの地面には、ご丁寧な事にナイフが刺さっている。これでガジャクティンの縄を切れと、あの賊徒達が置いていってく

れたのだ。

僕をここまで呼び出し、囚われの弟を救う英雄（ヒーロー）に仕立てたのはジライだ。

気をぶつける事で泣いていたガジャクティンを泣きやませ、弟思いである優しい兄の姿をこの子に見せてから、宮廷魔法使いに僕の魔力封印を解かせて活躍の場を与えてくれたのだ。

ジライの掌で踊らされたんだと思うと癪だけど、弟に触れられ、声をかけてもらえたのだ……

嬉しい……

ガジャクティン、二度とおまえを泣かせたりしない。

何があっても、僕がおまえを守ってやる。

おまえは僕の大切な弟なのだから……

ナイフなんか使い慣れてないので、時間がかかったけれど、どうにか縄をほどいてやれた。

縄が直接かかる胴体や手首にはやわらかな布が巻かれていた。本当に誘拐ごっこだったんだなあと改めて思う。

近くからハンサの感情を感じる。姿は見えない、何処かに潜んでいるのだろう。仲直りした僕等を嬉しく思っているようだ。本当に……僕等兄弟は多くの人間に心配をかけてしまっていたんだ。

「帰ろう、ガジャクティン」

僕は弟をおぶってやろうとした。

でも、弟は大きくかぶりを振って、右手で僕の左手を握ってニコーッと笑った。

「おててが、いい」

「うん……」
僕の体力のなさを気にしてくれたのだろうか……？
僕等は手をつないで森の中を歩く。
ガジャクティンが、元気に明るく童謡を歌う。
このかわいい歌声を聴くのも久しぶりだ……
「にーさま、かっこよかった」
「そう？」
「ゆーしゃの、じゅーしゃみたいだった」
「勇者の従者か……魔法使いの？」
「にーさま、カルヴェルさま。ぼく、ランツさま」
「うん、いいよ」
ごっこ遊びだ。
ガジャクティンの大好きな遊びだ。
「いっしょに、おうたうたおう、カルヴェル」
「歌？」
僕は困ったように弟を見つめた。
「お歌はごめん、ダメだ」
「どーして？」
「うん……」
僕はちょっとためらってから、正直に言った。ガジャクティンには隠さずに僕のみっともないところも見せた方がいい。
「僕は……お歌が下手なんだよ」
「へた？」
「音痴なんだ……」
頬が少し赤くなる。
「僕が一緒に歌うと、おまえまで下手になってしまう。せっかく綺麗な声なのに」
そう言うと、弟はケラケラと笑った。
「いいよ、にーさま」
そして、とても愛らしい顔で微笑んだのだ。

「いっしょがいいもん。うたおう」

ああああああ、本当にかわいい！

歌うのなんて何年ぶりだろう。

ラーニャに音痴を指摘されてから、ずっと歌は避けていた。

僕の調子はずれな歌と、弟のかわいい歌。

決して音は重ならないけれど、同じ歌詞を口にし僕等は歩いて行った。

囚われて？　魔力があふれる時！（後書き）

ガジュルシンはこのへんから、重度のブラコンに。ガジャクティンは、まだ勇者おたくになる前（でも、勇者ものも好き）です。

今回の話は、正義のヒーローと、（幼稚園バスをのっとるレベルの）悪役と、囚われの園児を意識してお送りしましたｗ

万事解決？　大人達のイケナイ夜！

「拉致はしたが、監禁ではないぞ。森の中で懲らしめたのだ、閉じ込めたわけではないゆえ『監禁』はあてはまらぬ」
あっさりとそう言い切る、ジライが憎たらしい。
覆面を外し白い美貌を私に見せているのだが、その表情も実にふてぶてしいものだ。
「縄痕も残らぬよう全身にも手首にも布を巻いてやった。虐待もしておらん」
殴り飛ばしたい衝動をかろうじて堪える。
この部屋にはセレスも、ガジュルシンも、ガジャクティンも居るのだ。
怒りのままにジライを殴るわけにもいかない。

政務を終えセレスの別宅へ戻った私を、手をつないだガジュルシンとガジャクティンが迎えてくれた。
「ごめんなさい、とーさま」
と、頭を下げたガジャクティン。
「ご心配をおかけしてすみませんでした。僕達、仲直りできました」
と、晴れ晴れとした顔で微笑むガジュルシン。
これは夢だろうか……と、思った。私の息子達が揃って笑顔で迎えてくれるだなんて！
良かった。
本当に良かった。

そう思ったのだが……

事の経緯を聞いて、怒りのあまりめまいを感じた。

私の頬がぴくぴくとひきつっているのを見てとったのだろう、父親と義理父親が喧嘩を始める前に、セレスが子供達へと声をかける。

「二人が仲直りしたって、ウシャスの所には使いを送っておいたわ。ガジャクティン、明日でもいいけど、早い方がいいと思うの。お母様の所に謝りに行く？」

「行く」

「いい子ね」

セレスがにっこりと微笑む。

「じゃ、今晩はあっちで、お母様のお部屋にお泊りしてらっしゃい」

「かーさま……ぼくと、ねてくれる？」

「ん？」

「にーさまと、おなかのこがいるから、できのわるいこは、いらないんでしょ？」

それも、家庭教師に言われたのか？

「馬鹿ね」

セレスがガジャクティンの額を、右の二の指で小突く。

「ガジュルシンはガジュルシン、あなたはあなた、お腹の子はお腹の子よ。みんな違う子だから面白いのよ。ウシャスは、みんな、大好きよ」

「ほんと？」

「本当よ」

セレスが私の息子を抱き締める。

「あなたがう～んと甘えれば、ウシャスも喜ぶわ。でも、乱暴にドーンってぶつかっちゃ駄目よ。お腹の子がびっくりしちゃうから」

「うん」

「お部屋に帰ってお泊りの支度してらっしゃい。ガジュルシンに手

伝ってもらうといいわ」
「うん」
「行こう、ガジャクティン」
促す兄に、弟が勢いよく頭を横に振る。
「まって」
そうして、私の前にトコトコと歩いて来る。
いや、私の前にたたずんでいる男の前へか。
私によく似た糸目で、ガジャクティンがジライを見上げる。睨むかのように。
「ぼく、もう、らんぼーしない」
「……」
「わがまま、いわない。りっぱなおうじになる」
「さようか」
さようか？　さようかって……ジライ！　意を決してこの子が話しかけているんだ、もう少し優しい態度をとってくれても！
「だから……」
ガジャクティンが怒りの為か恐れの為か、ぶるぶると体を震わせながらも、懸命に、自分を縛った男を睨みつけた。

「にーさま、イジめちゃダメだからね！」

「ガジャクティン……」
目に涙をたたえ、ガジュルシンが弟を見ていた。今すぐその体を抱きしめたい！　と、その顔を感動に染めて。
セレスも、けなげな子供を微笑んで見つめていた。
だが、ジライは……
「今、きさまが何を言おうが信用せぬ」
と、ジロリと睨みつけたのだ……五歳児を。

「いいか、小憎、よく聞け。失った信頼を取り戻すには時間がかかるのだ」
「しんらいを、とりもどす？」
ジライは頷いた。
「きさまは、このところずっと悪い子供だったのだ。後宮の者もこの別荘の者も、おまえを悪い子と思うておる。なのに、いきなり、今日から良い子ですと言われても信じられるものか」
「いいこになるもん！」
「皆から良い子だと思われたいのなら、ずっと良い子で居続けろ。さきほど言った言葉をやり通せ。一年後まで、おまえが自分の言葉を守れたのなら、我も信用してやろう。きさまは良い子で『立派な王子』だとな」
ジライ……
「まもるもん！」
「では、やってみせよ」
フフンとジライが笑う。五歳児に対し嘲るように笑いかける。約束を守るなど、出来ないだろう？　出来なければ思いっきり笑ってやると言うかのように。
そうか……
好き勝手に生きている我がままな男ではあるが……ジライは人心掌握に優れた忍者なのだ。私とは全く違う教育方法だが、子供の自発意志を促すのは非常に巧みだ。
「さ、行こう、ガジャクティン」
兄に促され、ガジャクティンが廊下への扉に向かう。部屋を出る前に振り返り、『にーさま、イジめちゃダメだからね！』と、念を押すところが……実にかわいい。我が子ながらいい子だ……
子供達が部屋から出ると、ジライは更に煽るように嘲笑を浮かべた。
「で？　国王陛下、何が言いたい？　聞いてやるぞ」
「……」

私は喉まで出かかっている言葉をのみこみ、礼儀正しくジライへと頭を下げた。

「私の家族の問題を解決してくださった事は、深く感謝します」

しかし、結果良ければ全て良しとは言えない。

「ですが、命令の拡大解釈や、禁止事項以外は何でもＯＫなんて考えはやめてください。私が望んでいない事は、絶対にやらないでください」

「承知しておるぞ、国王陛下」

そんな事を言われるのは心外だとばかりに、ジライが片眉をしかめる。

「国王陛下ならばこう望むであろうと考えて行動しておるわ。まあ、もっとも、我らは違う人間。うっかり主君のお心を読み違える事も、たまにはあるやもれしぬな」

「ジライ～～～」

ジライは顎をしゃくりあげ、冷たく笑う。

「間違った解釈がされるのが嫌ならば、何がダメなのか事前に明確にしておけ。ご命令には従ってやる」

嘘ばっかり。

細かくあれこれ禁止したところで、駄目だ。命令の抜け道を探し出し、命令違反とならぬ形で、自分の意志を通す……

ガルバもそうだった……

忍者とはそういうものなのだ……

睨みあう私とジライの間に、セレスが割って入る。

「さ、国王陛下、子供達と一緒にあなたも別荘に戻りなさいな。今夜は家族水入らず。ウシャスを安心させてらっしゃい」

＊　＊　＊　＊　＊

廊下には、アーメットが待っていた。心配そうに僕等兄弟を見つめる義弟に、僕は事情を説明した。
「今夜は、城の方に泊まるよ。母上のお部屋にガジャクティンと一緒に」
そう言うと、アーメットは満面の笑顔で喜んでくれた。
「それがいいよ。よかった。ガジャクティン、いっぱいいい子にして、ウシャス様を喜ばせてやれよ」
素直な弟が『うん』と答える。
「ありがとう、アーメット」
「ん？」
「君がいてくれたから、僕は頑張れた」
そう言うと、義弟は明るい笑みを浮かべた。
「オレ、何もしてないよ。ガジュルシンが強いから頑張れたんだよ」
アーメット……いい奴。本当に気持ちのいい笑みだ。
僕と手をつないで歩くガジャクティン。アーメットは弟にニコニコ笑顔を向けてくれる。
「よかった、ガジャクティンも元気そうで、普通に縛られただけみたいだな」
「ん？」
「ジライ父さんが縛ったって聞いたからさ、逆さ吊りとか、海老責めとか、タヌキ縛りで宙吊りとかされたんじゃないかなあって」
はい……？
アーメットが明るく笑う。
「ジャポネじゃその手の拘束が盛んらしくてさ、忍術修行させられてんだ。ああいうの、むちゃくちゃ痛いからさ、ガジャクティンがされなくて良かったよ」
なに、それ……？
忍術修行ってそういう事もするの？
「ガジャクティン、ごめんな、忍者ってさ、感覚変なんだよ。オレも縄抜けの練習してるし、縛り縛られってあんま気にしないんだよ

ね。だから、ジライ父さんもガジャクティンの警護の奴もやっちゃったんだと思う。悪気はなくても、びっくりするよな、ごめんな」

「ボク、びっくりしなかったもん」

「そっか？　うん、なら、いいや。ごめんな」

「アーメット……」

忍者って危険なだけではなく……常識からかけ離れた職業なんだろうか？

義弟はジライから忍者修行をつけられているけど……

「忍者になるの……？」

よくセレス様もジライも、アーメットが王子でいられるのは十才までだと言っている。

『ジライの息子のあなたが第二王位継承者じゃ、マズいでしょ？十才になったら後宮から出て行ってもらいますからね』

セレス様は、世俗を捨て髪を剃ってインディラ寺院に入るか、病死の工作をして以後お庭番として新たな人生を進むかのどっちか選んでね、とも言う。

冗談なんだろうと思うようにはしてる。二人ともふざけてるだけだって……王子から忍者なんてありえない……

「なんねーよ、忍者なんか」

アーメットが嫌そうに顔をしかめる。

「闇に生き闇に死すなんて、向いてねーもん」

「それは……そうだね」

君は太陽みたいだから。

「オレは、ずっと王宮にいるよ」

アーメットが僕とガジャクティンを見渡す。

「ずっと、ガジュルシンとガジャクティンと一緒だ」

「いっしょだ」

アーメットと顔を合わせ弟がキャッキャッと笑う。

僕もずっと一緒がいい……

でも……

あのジライとセレス様を相手に、アーメットの希望が通るのだろうか？

言い知れぬ不安を感じた……

アーメットが僕のそばから居なくなるだなんて、想像もしたくない……そんなの耐えられるわけがない……

＊　＊　＊　＊　＊

夕食の席は、お母様、私、アーメットの分しかなかった。

「お父様は？」

と、尋ねると、

「今夜はガジュルシンとガジャクティンとウシャス様のお部屋に泊まるんだって。さっき出かけたよ」

と、既に席に着いているアーメットが答える。

何それ？

私がお部屋の模様替えをしてる間に何時の間にそういう事になったわけ？

「今夜は、一晩中、お父様と手をつなごうと思ったのに～～～～～」

昨日はガジャクティンがお父様の左腕を独占したから、今夜は私の番だと思ったのに～～～

「ラーニャ様、よろしければ、ナーダの代わりに私めが一晩中」

何処からかわいて出た変態忍者は、右足で蹴り飛ばして黙らせた。

「私もお城に行く！」

「いけません」

女主人の席に着いているお母様が、威厳にあふれた顔でおっしゃる。金の髪を美しく結い上げたお母様は、胸元が大きく開いたセクシーな夜用のエウロペ風ドレス姿だ。

「今夜は、ガジュルシンとガジャクティンの仲直りを、親子で祝う

のよ。よその子は我慢なさい」
「よその子じゃないわ！　私もナーダお父様の姫だもん！」
「戸籍の上では、ね。でも、あなたの本当のお父様は、ジライでしょうが。今日は本当の親子のお祝い日なの。無関係な子は邪魔しちゃ駄目です」
「う～～～」
私は床に転がっている変態忍者を目の端で見てから、お母様をうわめづかいに見つめた。
「今夜一晩だけ？」
お母様は肩をすくめた。
「たぶんね」
一晩なら……我慢しよう。
すっごく嫌だけど。
お父様とずっと一緒にいたいけど。
でも、泣いて暴れてひっくりかえって手足をジタバタさせるお子様（ガジャクティン）とは私は違う。九才のレディーなんですもの。我慢しよう。
明日の夜、今日の分も含めて、お父様にかわいがってもらおう。

向こうが親子水入らずなら、こっちもそうか……ジライは食事をとらず、給仕してるけど。
でも、変態忍者と生意気な弟と一緒でも、楽しくも何ともない。
ドレスアップしたお母様はお綺麗だけどね。
お父様と一緒の食卓のウシャス様と義弟達が羨ましかった。

＊　＊　＊　＊　＊

「今夜は一晩中、ラーニャのおててを繋いでいてあげるんじゃなか

ったの？」

胸元がおへそまで開き、左側に腿までのスリットの入った真黒なイブニングドレス。椅子に座るかなりHなドレスの私と、その前に跪く私の奴隷。子供達はもう寝床に入った時間、これから楽しい夫婦の時間が始まるのだ。

私の足を食い入るように見つめているから、わざと両脚を組み直した。ジライの興奮が手にとるように伝わってくる。スリットから脚のラインが綺麗に零れるようにしてから、意地悪く言ってやった。

「ほぼ一か月ぶりの再会なのに……ラーニャを誘うなんてねえ……おばさんより、若い子の方がいいんでしょ？」

そして、冷たい目で見下してやる。

「本当、残念だわ。セレス様こそ唯一の女王様と、私を崇め奉っていた第一の奴隷はもはやこの世の何処にもいないのね」

「めっそうもございません」

慌てて平身低頭するジライ。

体を低くしたところを狙い、踏みつける為にわざわざ履いたピンヒールで、椅子に座ったまま、ジライの左肩から背をぐりぐりと踏んでやる。

痛みよりも喜びの濃いうめきを漏らしながら、ジライが女主人の心をほぐそうと言葉を続ける。

「セレス様こそ至高の美。この世にセレス様ほどお美しく貴き女王様はおれらませぬ。他の者など、セレス様の前には塵芥（ちりあくた）も同然。私はセレス様からお声をかけていただけば、幾千幾万の彼方より駆けつけましょうぞ」

「あら。ラーニャも塵芥なの？」

「ラーニャ様は特別」

ジライが顔をあげる。ほれぼれするような美しい顔。でも、その美は歪んでいる。私からのいたぶりも、軽蔑も、嘲りの言葉も、ジライには快感なのだ。

「ラーニャ様はセレス様のお身体より生まれた、セレス様の分身。

セレス様への愛ゆえに愛しいのです」
「うまくごまかしたわね」
口元に手をあててクスクスと笑いながら、踵に力を入れた。
低い声で嬉しそうにジライが喘ぐ。
「でも、体は二つには割れないわ。ラーニャから今夜一緒に寝てあげると言われてたら、あなた、どうするつもりだったの？　あっちへ行ったわよね？　愛しい私を捨てる気だったんでしょ、卑しい奴隷の分際で？」
そうだと認めたら蹴ってやるつもりだった。でも……
「そのようなお答えをいただければ、そういうこともあったやもしれませぬが……」
ジライの顔に、プレイの為の芝居ではない感情が浮かぶ。
「まずありえぬこと。お声はおかけしてみましたが……断られると見越した上の戯れにございます」
私の可愛い奴隷の笑みは寂しそうだ。
「私はラーニャ様に好かれておりませぬゆえ……」
胸がキュンとなった……
「馬鹿ね」
そんな憐れを誘う顔をしちゃ駄目よ、ジライ。
かわいくってかわいそうで……
かわいがってあげたくなっちゃうじゃない……
「あなたみたいな変態M男が父親だなんて、誰だって嫌に決まってるじゃない」
私は執拗に踵でジライの左肩と背中を責めた。
「女に踏みつけられて、アソコを嬉しそうにピクピクさせてるんでしょ？　そんな異常者が父親だなんて……ラーニャもかわいそうだわ」
「う」
「目の前に尊敬に値する立派な義理の父親がいるだけに、嫌よね。本当の父親が、あなただなんて、幻滅だわ。きっと視界の端にも入

れたくないと思ってるわよ」
「あぅ……」
「なあに、想像したらますます嬉しくなっちゃった？　そんなに実の娘に蔑まれたいの？　あなた、頭がおかしいんじゃない？」
「……申し訳ございませぬ」
「いい事、思いついた」
私はフフンと鼻で笑った。
「あなたのいやらしくって情けない姿を……ラーニャに見せてあげるの」
「！」
「あなたの、とびっきりを見せてあげましょう。私の鞭に悶え悦んでいる姿がいい？　蝋燭を何本も体にたてて、ひくついている姿のがいいかしら？　Hな性具で身動きできないほど縛りつけられてるのもいいわよね。どうせ嫌われてるんですもの、格好つけないで、徹底的に嫌われちゃいなさいよ。男としての尊厳の欠片もない白豚ぶりを、たっぷりと見せてあげるといいわ」
「あ、あ、あ、あ」
「想像して御覧なさい、今、ここにラーニャがいるのよ。あの子がジーッとあなたを見てるの。何って、きたならしくって、みっともないのかしらって、うんざりするでしょうね」
「……っ」
「目の穢れだと思うわね。大きく溜息をついて、嫌そうに言うんじゃないかしら。あきれかえった顔で、あなたにふさわしい言葉を投げつけてくるわよ……ほら、聞こえない、あの子の軽蔑しきった冷たい声が……」
「……」
「『変態』って」
「あああああああ」

ジライがやたら興奮してくれるので、プレイのダシにラーニャを使って三回ほどやってしまったわ……

終わった後、二人で寝台に寝そべる。
許可してあげたから、ジライは私を抱いて腕枕をしている。
けだるさと充足感を感じうつらうつらとしていた私に、ジライがもじもじとして質問してきた。
「それで、あの、セレス様……さきほどの話……」
話……？
「私達の……その営みに……ラーニャ様をご招待するというのは……何時のことでございましょう……？」

（……）

恥じらいながら、頬を染めて、視線を外して言うセリフ？　いかにも楽しみにしてますって、雰囲気いっぱいじゃない、それ！

「ラーニャも他の子供達も、寝室には招きません」
え～～～！　と、不満顔の忍者。
私はジロリと睨みつけた。
そんなに見てもらいたいの？　実の親のＳＭ性行為を。
「早すぎる性教育は子供の健全な発育の障害となるわ。閨房のことを匂わすのも駄目よ」
「ですが、セレス様、実際、世の中で行われている事を隠し蓋をしては偏った教育になるのでは」

「隠すのが普通のものをわざわざ露出するのも、偏った教育よ！」
「む」
「婚約とか結婚の話があがるまで、性教育は本の上だけで充分です」
「しかし」
「いいの！　私だって十八まで知らなかったんだから！」
「では、ラーニャ様が十八となったら解禁に」
「なりません！」
「むむむ」
思わず、溜息が漏れた。
「……あなた、ラーニャの性奴隷にもなりたいの？」
「私といたしましては、ラーニャ様がそうしたいとお望みでしたら……否があろうはずもございませぬ」
又、もじもじしながらジライが言う。
んもう。
台詞も動作もかなり変だけど……
頭の中までちょっとアレなジライにしてみれば、親子の触れ合いをするのも、ＳＭ主従関係になるのも一緒なのよね。大好きなラーニャに気にとめてもらいたいってだけなんだもの。

ラーニャがジライにそういう関係を求めるなんて、絶対ありえない事だけれども……
ありえない事が起こってから慌てても手遅れだわ。
もと大魔王教徒で、東国忍者の里で育ったジライにしてみれば、近親相姦は禁忌（タブー）じゃない。世間一般の親子の常識なんて通用しないのだ。
ラーニャから求められても、絶対に応じちゃいけない事だけは明確にしておこう。間違った解釈がされないように、具体的に。
自分の都合のいいように曲解されたら困るもの。

ジライを思い通りに動かすのは難しい。
ちょっとだけナーダの苦労がわかったわ。

万事解決？　大人達のイケナイ夜！（後書き）

セレスに褒められるジライは描けず……残念。でも、ラヴラヴです！

子供の目！　大人達のイケナイ昼！

きのうは、おうまに、のった。
セレスさまの、ぼくじょうには、きれいな、おうまがいっぱい。
こうまじゃなくって、おおきな、おとなの、おうま。
みんな、ひとりでのった。にーさまも、ひきうましてもらって、
ひとりでのった。
ぼくは、ちっちゃいから、ひとりじゃ、のっちゃダメって。
とーさまといっしょに、のった。
ラーニャがズルイっておこった。ラーニャはすぐおこる。
とーさまといっしょはうれしいけど、ボクだって、ひとりでおう
まにのりたい。
はやく、おおきくなりたい。
おおきく、つよくなりたい。
まいにち、かみさまに、おねがいしている。

きょうは、ふなあそびにいく。
みんな、いっしょにのれる、おっきなおふねに、のる。
たのしみ。
でも、ぼくはちっちゃいから、きっと、きょうも、できないこと
がいっぱいだ。
ちっちゃいのは、つまらない。
とーさまみたいに、おおきくなりたい。
いっしょうけんめい、かみさまに、おねがいしている。

かみさまに、おいのりすれば、なんでもかなう。

やさしい、にーさまに、してくださいって、おねがいしたら、かなった。

ずっと、にーさまは、こわかった。

まっくろな、うずが、にーさまのからだに、ついていた。

よるよりも、ずっと、くらくて、あらしよりも、ゴーゴーしてて、こわかった。

そばにいるのも、にーさま、みるのも、こわかった。

なまえをよばれると、こわくて、もらしそうになった。

かていきょうしは、くちから、へびをはくから、きらいだった。

でも、にーさまは、ぜんぶが、こわかった。

めしつかいたいちは、こわくないけど、くろい。みんな、ぼくの、そばにいるのが、いやだっていってた。こえはださないけど、そういってた。だから、あっちへいけっていったら、ますます、みんな、くろくなった。

かーさまは、ボクがいると、なく。だから、そばによれなかった。かーさまがなくと、おなかのなかの、おとうとも、くるしそう。かーさまは、なかせちゃ、ダメなんだ。

でも、にーさまは、いまは、ひかりといっしょ。

まえのやさしいにーさまにもどった。やみのうずが、きえたから、いつも、わらってる。

めしつかいたちは、まだ、くろいけど、そうじゃないのもいる。

かーさまは、わらってる。おとうとも、スースーねてる。

みえると、きになる。

だから、かみさまに、おねがいしてる。

くろいにーさまは、きらい。

こわいものは、みたくない。
にーさまがくろくなっても、そばにいたい。
だから……

かみさま、おねがいです。
みえなくしてください、かわりに、はやくおおきくしてください。
とーさまみたいに、おおきくて、つよいおとなにしてください。
ボクは、にーさまも、かーさまも、とーさまも、アーメットも、
ラーニャも、セレスさまもまもります。
ゆーしゃみたいにせかいをすくうから。

ぼくは、きょうも、おいのりする。

＊　＊　＊　＊　＊

「代役？」
国王陛下が眉をしかめ、我とセーネとヤルーを睨む。ヤルーは侍従の変装ではなく、インディラ忍者装束だ。
ナーダは就寝前に、翌日の予定を侍従に確認する。その役は別荘の城ではヤルーが、後宮やセレス様の別宅ではくノ一が務めている。
まあ、別宅の男子禁制など有名無実なのだが。我以外にも王子方の護衛の忍者もそちこちに潜んでおる。ナーダの方針で王宮付き忍者の去勢は、一切、禁止となったゆえ、皆、男だ。
だが、夫人方の周囲は慣習上、男子禁制とせねばならず、侍従が内部に立ち入ることは表向きはできないのだ。
セーネは後宮におけるナーダの女官役、女嫌いのこの男が比較的

まともに相手をできるくノ一だ……昔、部下として使っていたから免疫があるのだろう。昔はエウロペ風にローラと名乗り、髪も金に染めていたが。

「何で代役なんてたてる必要があるのです？」

明日は休息にあてるよう進言すると、予想通りナーダは不機嫌になった。

「明日は休め。きさまには、休息（オフ）が必要だ。きさまがなすべき義務はヤルーが代行する」

「明日の国王予定は？」

「明日のナーダ様のご予定は、ご家族と共にデカンティナの郷土祭りへの来賓、その後、式典、デカンティナ領主の館での歓迎の宴へのご出席となっております」と、セーネ。

「でしたよね。宴にはデカンティナ滞在中の貴族も数多く出席しますし、庶民との触れ合いの場もある祭りです。国王たる私が率先して参加すべき行事でしょ？　なぜ、ヤルーが私の代役を？」

「健康であれば、な」

そう言うと、ナーダが糸目を細めた。

「早朝とも言えぬ夜中より書類のチェック、子供達の起床に合わせ朝食まで家族サービス、城に移動して昼食まで政務、午後は家族と遊びに興じ、その後はセレス様の別宅で書類チェック、夕食は家族と共に、入浴中すら休まず口頭で報告を聞き、子供達の就寝につきあうぎりぎりまで政務……それを毎日とか……どれだけMなんじゃ、きさま」

「休暇中ぐらい家族の為に時間を使いたいんです……大丈夫ですよ、疲労回復の魔法かけてますし」

「しかし、術のかかりが悪くなっておるぞ」

我は今、覆面をしていない。額当てで長すぎる前髪を流しているが。

「顔色が悪い。倒れられては困る。明日は休め」

「ですが……」

「おまえの可愛い息子も心配しておる」
「え？」
「明日の式典の王族からの祝いの言葉は、世継ぎの王子様がしてくださるそうじゃ」
「ガジュルシンが？」
「うむ」
我は頷きを返した。
「影武者に、国王を慕い集まった国民の相手をさせる事をおまえは好まぬ。不誠実とかぬかして、な。世継ぎの王子様はおまえの考えをくみ、世継ぎである自分が王族の役目を果たすと言うておる。ヤルーには必要最低限の仕事しか頼まぬとも言っていたな」
「しかし」
「孝行な息子に従っとけ。子供達は日中、外出して別荘におらぬ。仕事も家族も忘れて眠れ、国王陛下」
「そういうわけにも」
「ごちゃごちゃ言うな。おまえ自身の休暇じゃ」
我はナーダへと近寄る。こやつの好きな白い顔に笑みを浮かべ、ヤツの頬に両手をそえ我が顔の前にぐいっとひっぱる。背の高いナーダは身をかがめ、接近中の我が顔をどきまぎと見つめている。
「明日の昼間は寝ろ。我（われ）が添い寝をしてやるゆえ」
「……」
何か言いかけた口を閉ざし、ナーダが我が顔をまじまじと見る。
さすがに、喰いついたな。
「……添い寝？」
「うむ」
妖しく微笑んでやる。
「良い子に寝ると誓うのなら、寝る前の運動にも付き合ってやるぞ」
「……」
ナーダの頬が朱に染まる。そらせぬ目が我を見続けている。
「……ですが、私ばかりかあなたまでいなくなってしまうのでは、

子供達が」

「我が部下は優秀に育っておる。魔の襲撃を警戒し、移動には常に宮廷魔法使いとインディラ僧侶も同行させておる。我(われ)がいなくても護衛に問題ないわ」

熱っぽく我を見つめながら、うらみがましそうにナーダが聞く。

「……仕事だって言って、私を捨てません？」

信用がないな。

「明日の日中は体をあけた」

少しづつ顔を近づけてやる。口づけをするかのように。

「国の大事か、子供達の大事がない限り、そばにいてやる」

「私が寝た後は……？」

「きさまが起きるまで、同じ寝台にとどまり、その身を守ってやろう」

「嘘だったら許しませんよ……」

ナーダが我をひきよせ、顔を重ねてくる。

目の端で見れば、ヤルーとセーネはそっぽを向いていた。国王の情事を目にせぬように。

接吻ぐらいならば許してやるが、寝るのは明日だ。それ以上の事をしようとしたら、罰してやろう。

いいオヤジになったのに、未だに盛りのついた若者のようだ。許してやれば、すぐにこの体にくらいついてくる。

こちらももう若くない。房中での価値はかなり下がった。だが、ありがたがってくれるのだから、いいだろう。

利用するだけだ。

＊　＊　＊　＊　＊

おとーさまと遠出なんて逢瀬(デート)みたい！　って思ったから、重たい

姫の衣装も着たのに……

サギだわ……

お祭りの場所まで馬車で約一時間。

楽しいはずの一時間が、ムカつくほど退屈な時間になっちまったわ。

ガジャクティンはなにが楽しいんだか、外を眺めている。変わりばえのしない田舎道なんて、見たってつまらないのに。

アーメットとガジュルシンはあーでもないこーでもないと式典の挨拶について話してる。

馬車の中にはいざって時の用心に宮廷魔法使いと僧侶様もいる。

後、居るのは一人だ……

私は向かいの席のお父様そっくりの男を見つめた。不機嫌だから、きっと睨んでいると思う。申し訳なそうに微笑を浮かべながら、ヤルーは口を閉ざしている。私が『あんた、お父様じゃないんだから、役目以外の場所で父親ぶらないで』って言ったから沈黙を守っているんだ。

ヤルーは、顔や背格好はお父様と似ている。でも、お父様の優しさ、上品さ、包容力は再現できてない。雰囲気が違う。似せようと頑張ってるけど、似ていない。

だから、私やガジャクティンには一発でわかる。馬車に後から『お父様』として乗り込んで来たのが誰か、私達にはバレバレなのだ。

ヤルーはちょっとショックだったみたいだけど。『一目で見破られるとは……さすが、親子の絆はあなどれませんねえ』って。

お父様が体調不良なのなら仕方ない。休息も必要よ。というか、式典なんかに行かないでお見舞いに行きたいぐらい。今更、別荘に戻れないけど。

だけど……

正直、かなりがっかりしている。

私はもう九才だ。

お父様がお許しくださっているから、今までかなり自由に過ごせ

てこられたけれど……

そろそろ『王女』にふさわしい振る舞いを求められる年齢だ。王家の姫として……貴き血にふさわしく後宮に籠っていなければいけなくなる。式典に出席なんて、もうすぐ、できなくなる。

私は『王子』達とは違うのだ。表の舞台でお父様の凛々しいお姿に触れられる機会は、間もなく、終わってしまう。

だから、今日を楽しみにしてたのに……

ふぅと溜息が洩れる。

「ラーニャ、あれ、みて、あれ」

隣の席のガジャクティンが外を指さす。アンニュィな乙女をわざわざ呼びつけて、義弟が私に見せたものは木々の間にある白い大岩だった。大の大人ほどの大きさがありそうだが、ただ大きいだけの岩だった。

「すごいねえ」

と、義弟がニコニコわらう。

「ランツさまってかっこいいよね」

脈略もなく話題が変わる。もう、あきれる。こいつの頭の中って、変。真面目に相手するのも面倒なので、そうねと答えておいた。

ガジャクティンが舌っ足らずな幼い声で、どーでもいい話ばかりをする。

あんなにお父様にベタベタだったくせに、ヤルーでは嫌なのか、甘えようとしない。隣の席の私にばかり話しかけてくる。うるさくてたまらない。

なにが見えるの、なにが綺麗だの、そんな事を言ってたかと思うと、勇者と従者の物語中の話題になったり、突然ごっこ遊びを始めて勝手な配役をしてくる。

ついていけないから、適当に生返事をしていた。

「ラーニャ！」

見れば、ガジャクティンがプゥと頬をふくらませていた。ちゃんと聞いてなかったと、バレたようだ。これだから嫌なのよ、神経過

敏なガキは。
「ラーニャなんか、きらい！　もうおもちゃ、かしてあげない！」
「いいわよ、あんたの玩具なんか、興味ないもん」
「おとうととも、あそばせてあげないんだから！」
「弟？」
ふきだしてしまった。
「まだ産まれてないのよ、ウシャス様の子。弟か妹かわかんないわ」
「おとうとだよ」
「どうして？」
「おとうとだもん」
「あ～、はい、はい。弟がいいのね、わかったわよ。でも、妹でもガッカリしてイジめちゃダメよ」
「いもうとじゃないよ」
ガジャクティンが更に頬をふくらます。
「ラーニャの、バカ。おとうとだって、いってるでしょ、おはなし、きいてる？」
「馬鹿ですって？」
ムッとした。
「馬鹿はあんたでしょ？　ごっこ遊びと現実の区別もつかないんだから、本当、おチビすぎて嫌になっちゃうわ」
「おチビじゃないもん！」
「あんたは、チビ助よ。私の左手一本で、あんたなんか転がしてやれるわ」
「おおきくなるもん！」
ガジャクティンの顔は真っ赤だ。
「ラーニャより、にーさまより、ずっと、ずっと、おおきくなるもん！」
「ふぅぅん？　そんな日くるのかしら？　おチビちゃん？」
「すぐに、おおきく、なるよ！　とーさまみたいに、つよく、おおきくなるんだ、ボクは！」

興奮のあまり泣き出す寸前になったガジャクティンを、ガジュルシンが慌てて抱き締め自分の横に座らせる。そうよ、最初からそうしてりゃ良かったのよ、ガキの面倒はおにーちゃんがみなさい。

ガジャクティンに席を譲ったアーメットが、私の横に座って一言、小さくつぶやく。

「鬼」

むむむ。

九才のレディーに対して、失礼しちゃうわ。

＊　＊　＊　＊　＊

「ジライ……」

離れようとする白い体を抱き寄せ、寝台に押し倒し、口づけを贈った。

「逃げるなんて約束違反ですよ」

「きさまこそ、眠らねば約束違反だ、とっとと寝ろ」

腕の中でジライが暴れる。といっても本気ではない。身じろぎし、私の胸を軽くおしとどめただけだ。

「二回もやれば、寝る前の運動は充分であろうが」

「眠りますよ、もちろん」

ジライの頬に耳にと口づけし、その体を愛でる。

「かなうことなら、このままあなたとずっと睦み合っていたいのですけれどもね……」

「警告する」

ジライが溜息をつき、ギン！　と、私を睨んでくる。その瞳に見つめられると、ぞくぞくする……

「後、五分で動きを止め、寝台に睡眠の為に転がり、目を閉じろ。従わねば『眠り』の忍法を使う」

そんなもので眠りについては、面白くも何ともない。
「眠ればいいんでしょ……」
最後に、濃厚な接吻を贈ってから、指示通り横になり、瞼を閉じた。
「眠るから……いいでしょ？」
離す気はない。
腕に愛しい者を抱いて眠りたい……
ジライと向かい合い、抱き合う形で体を横にした。
「眠るまで……このままでいさせてください」
「眠ったら、離れてもいいのか？」
「……あなたに騙されるのは慣れてます。他に気にかかる事があれば、あなたは、私を見捨てる……そういう方だって、よく知っています。でも……」
ジライの背をそっと撫でた。
「私が眠るまでは、嘘はつき通してください……添い寝をしてくれるって言ったじゃないですか。私が起きるまで、同じ寝台で過ごしてくれ、私を守ってくださるんでしょ？」
「言ったな」
「……一人にしないでくださいよ」
「うむ」
「目覚めた時、あなたがいなかったら……泣きますからね」
「気色悪いぞ、ナーダ」
ジライが小さく笑う。
「そんなデカい図体で甘えるな、四十親父が」
「愛しています、ジライ」
ジライは息を吐き、私の唇を指で触れる。もう黙れと言うように。
「阿呆め」
それから、私の胸に顔を預けてくれる。
「おまえは嫌いではない」
それは……

「おまえも守ってやるゆえ……今は眠れ」

『おまえも』か……

セレスとラーニャとアーメットの次ぐらいだろう、守ってくれるのは……

だが、嬉しい言葉は貰えた。

『嫌いではない』と。

房中術の演技ならばもっと直接的に、『愛している』だの『好き』だのの言葉を返してくれただろう。

本音を言ってくれたのだ、そう思う事にする。

ジライを信じ、心を寄せても、たいてい、ひどい目に合う。なので、夢はあまり見ないように、その場その場の小さな幸福に酔う事にしている。

自虐的な恋愛だが、仕方ない。

惚れた相手が、ひとでなしなのだから。

＊　＊　＊　＊　＊

今年の夏は楽しかった。

ガジュルシンとガジャクティンが仲直りをしてからは、みんなで、いろんな事をした。

ナーダ父さんは、こっちに三週間もいてくれたし、いつもよりいっぱい遊んでくれた。

三週間はあっという間に過ぎ、ナーダ父さんはウッダルプルに帰った。
オレ達はそっから更に二週間滞在したけど、そろそろ休暇も終わりだ。明後日にはオレ達も後宮に帰る。

ガジュルシンは最後の作品制作中だ。仲直りの印にガジャクティンに、愛をこめてウシャス様に、敬意をこめてナーダ父さんに、お礼だってオレに、それぞれ似顔絵をプレゼントしてから、おしばの貼り絵の大作を作り始めたのだ。
来年の夏にはここにいる弟か妹への贈物らしい。その子の為の部屋ができたら、壁に飾ってあげるんだと笑っている。

「ちょっとそれって卑怯じゃない？」
姉様はガジャクティンと遊んであげている……と、いうか、オレとガジャクティンが遊んでいるのを横で座って見てて、オレのあまりの情けなさに『よこしなさい、代わりに私がやるわ！』と、対戦人形遊びの選手となったのだ。
場所はガジャクティンの玩具だらけの部屋。明日には一日かけて（ガジュルシンと召使に手伝ってもらって）部屋を片付けねばいけないから、最後の遊びおさめに勇者ＰＴ対勇者ＰＴの戦いをしているのだ。
今、対戦しているのは、初代勇者ラグヴェイ様ＰＴ（姉様）ＶＳひいおじい様のランツ様ＰＴ（ガジャクティン）だ。当代随一の大魔術師と結界魔法の達人が従者にいる上に、本人の攻撃力も半端ないランツ様は、ガジャクティンの一番好きな勇者だ。
姉様が初代勇者ラグヴェイ人形を手に、ガジャクティンに文句を言う。
「こっちはマジャロ様の究極魔法『闇路』を使ったのよ、魔法無効

の封呪空間を生み出し、周囲の全てを次元の彼方に飛ばす吸引魔法よ。結界魔法だって無効化されるんだから、ランツ様が無傷なんて変だわ」

ランツ人形を持ったガジャクティンは、けろっとした顔で姉様の兵隊人形をひとつ奪う。

「マジャロさまは、『ヤミジ』をつかえないよ」

「何でよ？」

「『ヤミジ』は、えいしょうに、じゅうごふんかかるまほうだよ？はつどうするまえに、ランツさまがきれる」

「むぅ」

姉様が眉をしかめ、それからガジャクティンの手から兵隊人形を奪い返す。

「じゃ、『幻影』よ。魔法使いの祖のマジャロ様ですもの。敵との戦闘前に、自らに防御魔法をかけてないはずないわ」

「いいよ。じゃ、いま、きられたのは『げんえい』ね。『げんえい』つかっちゃったから、にどめは、ないよ」

ガジャクティンはそれぞれの勇者や従者の特徴をよく覚えている。従者の魔法使いが本で使った魔法の名も全部暗記しており、従者達の持つ聖なる武器の名もその性能も全部頭の中だ。

勇者の子供として『勇者の歴史』やらの授業も受けてるけど……勇者は十三人、従者なんて多い代には十人以上居るのにそれが十三回分だ、細かい事なんか覚えてるもんか。

そんなオレが対戦して勝てるわけもなく……

勇者の娘としての自負から、姉様が参戦したのだ。

『お子様の遊びなんて、馬鹿らしくってやってらんないわ。私、もう九才のレディーなのよ』と、言うわりに、負けず嫌いの姉様は真剣に勝負するし、ガジャクティンのマニアックな知識についていけるのも姉様（と、ナーダ父さん）だけだ。

王宮中の人間を嫌い、ガジュルシンやウシャス様からすら逃げていた時期も、ガジャクティンはナーダ父さんとオレと姉様にはよく懐いていた。

姉様なんて、短気だし、乱暴だし、意地悪ばっか言うし、真先に嫌われそうなもんだけど……

『ラーニャは黒くないから、へーき。アーメットも』

と、ガジャクティンは言った。ガジャクティンは嫌いな奴を黒いと言う。

姉様の何処がいいんだろ？

遊ぶとなると真剣に遊ぶのがいいのかな？　それともガジャクティンが一人っきりだと放っておけず、『面倒くさいけど、おねえさんだから相手してあげるわ』ってかまってやるところか？

なんて考えてたらいきなり姉様にぶん殴られた。

なにするんだよ！　って睨んだら、

「あんたがおバカだったから、負けちゃったじゃない！」

と、姉様がオレを睨み返す。

「ああ……そう、負けたの。五歳児に、九才のレディーが……」

「あんたの勝負の続きなんか、引き受けるんじゃなかったわ！　下手っぴ！」

むか！

勝手に、オレから勝負も人形も奪ったくせに～～～～～

「ガジャクティン、勝負よ！　今度は六人ＰＴの対決にしましょ！」

「いいよ」

余裕の笑みでガジャクティンが応じる。

「ラーニャ、すきな、ゆうしゃ、えらんで。ボク、あとで、いいから」

「五歳児に譲られてる……」

と、つぶやいたら、姉様に、又、殴られた。

くそぉ～～～～バカ、ランボーもん！　レディーなんて、口先だけじゃん！

ガジャクティンは勇者人形を、後宮に持って帰ると言っている。毎日のように、勇者人形で遊んでいるようだ。そこまで気にいってくれたんなら、譲った甲斐もある。

ガジャクティンはほんとう、かわいい。義理だけど、ほんとの弟のように思える。

オレ達が勉強していると、そばに来てガジャクティンは一緒に絵や字を書いたりする。オレ達と同じことをやりたがるんだけど……あいかわらず、家庭教師が現れると部屋から出て行ってしまう。ガジャクティン用の新しい家庭教師も、オレらの先生も、みんな怖いみたいだ。

なにもかもが元通りってわけじゃない。

ナーダ父さんは、焦らずにガジャクティンを見守ると言っていた。学ぶ楽しさを本人が見つけられる助けていくと。

姉様相手に得意そうに知識をひけらかしてる今の姿を見た限りじゃ、もう大丈夫そうなのに……うまくいかないものだ。

オレはガジャクティンとの勝負を姉様に預け、自室に戻った。

オレの部屋。

壁紙も家具も寝具もみな水色の、オレの城。

海の中みたいだねとガジュルシンは言い、御伽の世界みたいだとも言って、オレの部屋を気にいってくれている。

水色の世界に浮かぶガジュルシンの作品群は鮮やかだ。そこだけ生きて活動しているようにも見える。

オレは寝台に座って、部屋を見渡し、あれこれ考えるのが大好きだ。

たいてい、くだらないことだけど……
なんもしないで、ここにいるだけで幸せだった……

この幸せが後二年で終わるなんて、嫌だ。
事あるごとに、お母様もジライ父さんも言う。十才になったら王子をやめてもらう、と。

毎日、ジライ父さん達に忍術修行をつけられ、王宮じゃない所で暮らす……
そんな生活が楽しいとは思えない。ガジュルシンともガジャクティンともお別れなんて。
十才の夏にはオレはここには居ないのかもしれない……
そう思ったら、何だかむしょうに悲しくなってきた。
オレは、水色の布団を被って寝台に丸まった。

十才になんかならなければいいと、思いながら

子供の目！　大人達のイケナイ昼！（後書き）

ガジャクティンの体が大きい理由。父親がずっと己に無い事を残念に思っていた神の祝福――真実を見抜く目を持って生まれてきたのに、それを手放してしまっていたガジャクティン。彼がその過ちの意味を知るのは、もうちょっと先の事です。

インディラ王家の大人の方々を描けて楽しかったです。ヤルーもローラ（セーネ）も出せましたし。

＊　＊　＊　＊　＊

次回はラーニャの家庭教師リオネルの話です。

教育係の独白！　彼女の心は……

「よく来てくれたね、リオネル」

そうおっしゃって、グスタフ様が微笑まれる。

お訪ねすると、たいていサンルームにいらっしゃる。肘掛け椅子に身を預けてお座りになられ、観葉植物を眺めておられるのだ。

心なしか金のおぐしにも、お髭にもツヤが無い。お顔も少しおやつれになったようだ。

エミール病はゆるやかに、しかし、確実に進行している。指先から手の甲までが波紋のような黒い模様に覆われている。手の甲まで麻痺が進行したという事だ。強い倦怠感もあり、身体を動かされるのも、ひどくお辛いようだ。

治癒魔法でも医療でも治癒不可能な奇病『エミール病』。その発症者は、グスタフ様がお二人目だ。

治癒方法が見つからねば、先々代勇者ランツ様のお兄様エミール様のように一年少しで全身に黒い模様が広がってそのままお命を落とされるだろう。呪いの一種と思われているものの、エミール様の時はお祓いがかなわなかった。

呪いであるのなら、術師を倒せば呪いが解ける可能性は高い。だが、何処の誰がかけた呪かわからず、倒す敵が誰かもわからない。大魔王教徒か魔族の仕業とは思われるが。

グスタフ様の代わりに勇者に立たれたお方が、冒険の中で、グスタフ様に呪いをかけた不埒者をも手にかけてくだされればいい……

そう一縷の望みをかけながら、学者としてできる事をしている。

世界各国の呪い・病に関する文献をあたり、エミール病と類似したものやその治癒方法を探しているのだ。

後、もう一つ、私にできる事は……

幼い頃のグスタフ様とラーニャ様の教育係を務めた、勇者一族と親しい者として、お話相手となる事だ。

私でも、多少ならば無聊をお慰めする事ができる。
「新刊にございます、グスタフ様」
そう言って、私は鞄から安っぽい印刷の大衆読本を取り出した。
グスタフ様のお顔が破顔する。
『姫勇者ラーニャ』の最新刊だ。シャイナで発売されるこのシリーズ本の新刊を、現地の知人に物質転送で送ってもらっているのだ。
ラーニャ様の冒険にそって、わずか一ヶ月後にはそのご活躍が描かれた新刊が発行される。その冒険は私のよく知っている方々ならば確かにそう行動するであろうと納得がいく内容で、非常に現実的だ。
ラーニャ様への美辞麗句がやたら多い事から察するに、このシリーズ本の発行にはラジャラ王朝が……特に、ラーニャ様の実の父が関わっているように思われた。
冒険の当事者達が関わっている本なのだ、伏せねばならない事実は伏せられているだろうが、真実に近い冒険が記されていると思ってよかろう。
グスタフ様のおそばにより、新刊をお近くでお見せする。
「今はジャポネなのだね」
表紙の絵は、ジャポネのオオエの城が背景だった。
「早く読んでおくれ」
グスタフ様が微笑まれる。
いとこの活躍を我が事のように思っておられるのだ。
いや……
まさに、我が事なのだ。ご病気に倒れられねば、グスタグ様こそが勇者として現地で活躍されていたのだから。
おいたわしい……
私は大衆読本を開き、音読した。
慣れぬジャポネの風習に戸惑い、ジャポネ語がわからずお困りとの描写が続く……
読みながら、やはりこうなったかと思う。

ジャポネ人の特殊な宗教も身分制度も言語も歴史も生活スタイルも全てお教えしたはずなのに、何一つ身についていない。真面目に授業を聞かぬからだ。

たいへん優秀な教え子であったグスタフ様に比べ、ラーニャ様は本当に駄目な生徒だった。

私のお教えできた事など、数えるほどしかないのではないだろうか。

私が家庭教師となった時、ラーニャ様は十ニ歳だった。

グスタフ様の教育係だった私に、『是非、孫娘の教師を務めてくれないか?』と、祖父ヤンセン様からご依頼があったのだ。セレス様の血を引く男子アーメット様が病死（と、公式発表された。が、実は違うともその時、ヤンセン様は教えてくださった）した後のことだった。

私に否は無かった。むしろ、願ったりだった。

異国の王族であるラーニャ様も、侯爵家のご子息の方々のように教育したいものだと私は密かに望んでいたのだ。

インディラ国王と十二代目勇者セレス様の娘……と、いう事になっている彼女が、本当は忍者ジライとセレス様の娘である事は、王宮に来る前から知っていた。侯爵家とたいへん親しい一族である私に秘密は不要、ヤンセン様が『いずれわかる事だから』と教えてくださったのだ。

私にとって重要なのは、ラーニャ様の母の血の方。父親が誰であっても構わなかった。むろん、醜聞と言えるその事実を口外する気もなかったが。

『はじめまして、先生。私の為にはるばるインディラまでおいでいただき光栄に存じます』

離宮での初顔合わせ、ナーダ国王と共に現れた美少女は、王家の

子女にふさわしい完璧な所作で私に対し挨拶をした。ウェーブのかかった髪はつややかで、茶の瞳はこぼれそうなほど大きく、頬はふっくらとし、唇は可愛らしく、溌剌とした健康的な美しさにあふれていた。

『勇者の娘の嗜みとして、勇者の歴史や魔族学は学んでまいりました。が、勇者学問の本場エウロペの一流の先生に改めて教えていただける事を嬉しく思います。どうぞよろしくお願いいたします』

にっこりと微笑む顔はたいへん愛らしかった。内面も立ち居振る舞いも外見も、完璧だ！　と、その時は私も思った。勇者道においては人相も大切なのだ。悪人面では残念な事に世の中に受け入れられづらいのだ。

しかし、ラーニャ様は理想的なまでに完璧だったのだ。女性であるという性別のみが欠点ではあったが。

この方ならば、もしもの時、勇者の代役をご立派に務められるだろうと、思ったのだが……

あの時、ラーニャ様は国王が立ち合っていたから猫を被っていたのだ。

ラーニャ様のダメっぷりは、すぐにわかった。

最初の授業から、ラーニャ様にはやる気がなかった。

ラーニャ様は座学がお嫌いだった。

離宮での授業では、一時間とまともに座っていられない。

最初は背筋を伸ばしていても、すぐにだらけて机につっぷす。物語めいた話や魔や武に関わる話は耳を傾ける事もあったが、道徳や倫理や訓話が大嫌いで教科書を開いているふりだけして聞き流していた。たまに口を自ら開けば、『飽きた』だの『知ってるわよ、そんな事』だの『興味ないわよ、そんな話』だのろくな事を言わない。

愚かというわけではない。少しお話すれば、直観力に優れている事がわかる。だが、応用力がなく、継続も苦手。嫌いな分野の勉強は最初から真面目に聞こうともしない。

私は通常授業を一ヶ月ほど行い、授業中はラーニャ様をよく観察し、後宮内での振舞いについては彼女の実の父を通して情報をもらった（×月×日、ラーニャ様は白魚のような手で××を優美に××なさり、その愛らしい顔に輝かんばかりに高貴な笑顔をお浮かべになった。うんぬん。起床から就寝までの実に細かい記録で、山のように美辞麗句がついてくるので読みづらかった）。

その情報と私の観察から判断するに、ラーニャ様は……わがままで傲岸、忍耐力に欠け、女王様気質（と、実の父は言っていた）、暴力的、勝気、性的興味が早熟……と、思われた。

王族としての作法は身につけてはおられたが、好き嫌いがはっきりしており嫌いな相手とはまともに相手をしようとはしない。実の父親に対してなど実に横柄、まあ、相手の身分が低いという事も原因なのだろうが。

召使をなぶるような真似こそなさらないものの、国王とセレス様以外の人間に対しては常に喧嘩腰だ。

セレス様から剣を教わっているだけあって、両手剣の腕前はかなりのものであったらしいが……

大甘の採点を下しても……『勇者』向きの人間とは思えなかった。

私の使命は、勇者たるべき人物を育てる事だ。

この世に繰り返し現れる大魔王ケルベゾールド。

光の世界を滅ぼし、世界を闇にもたらそうともくろむ魔界の王。

その忌むべきモノを葬れるのは、勇者が操る『勇者の剣』のみ。
この地上より勇者を絶やさぬ為に、私は……私の一族は生きてきたのだ。
信心深く、君主への忠義にあふれ、悪を憎み、正義に燃え、弱者への労りの心を忘れぬ高潔なる『勇者』を育て上げる事こそが私達の使命なのだ。

その為には、ありとあらゆる手段を用いる。
世に非人道的と思われる教育すらも。
我が一族には独自の暗示教育法があった。
暗示、即ち、洗脳である。
暗示教育は、勇者にふさわしからぬ人間を矯正する為の、最終手段であった。

私はラーニャ様に対し、暗示教育も行う事を決めた。
せめてもう少しお小さければ対処も変わるのだが、自我の確立された十二歳の子供の性格を矯正をするのは非常に困難なのだ。まともな手段では。

ラーニャ様に暗示教育を行いたいと申し出ると、人道的なナーダ国王は難色を示した。
博識な国王はご存じとは思ったが、私は改めて我が一族の歴史とその暗示教育についてご説明した。

勇者一族と私の家は長い付き合いだ。

二代目勇者ホーラン様と懇意だった私の先祖が、ホーラン様のお子様の家庭教師となった日から、代々、私の家の者が勇者の教育係を務めている。

勇者一族と共に歩み、栄え、勇者の輝かしい生きざまも、その陰にまつろう闇も、私達はずっと見つめてきた。

大魔王ケルベゾールドを葬れる唯一の武器『勇者の剣』。

初代勇者ラグヴェイ様がエウロペ神より賜ったそれは、ラグヴェイ様の血を引く者であり、且つ、両手剣の技量の高い者しか振るえない。

刃そのものに凄まじい浄化の力があり、無限の力を発揮する類い稀なる魔法剣……この地上最強の武器。

『勇者の剣』は話す事こそできないが、意志を持っており、持ち手を自ら選ぶ。

剣に選ばれた者が『今世の勇者』となり、剣と共に大魔王を滅ぼした者が真の『勇者』となる。

この地上の救い手たる勇者なのだ、その人物は……

正義感、道徳感、慈愛、博愛、慈悲、高潔さ、騎士道精神にあふれた清廉な神の使いであろうと、誰もが思うところだが……

剣に選ばれる持ち手は、必ずしも心の美しい人物とは限らない。

剣が振るい手に求めるのは、剣の技量であり、見目のよさであり、魔を憎む心なのだ。

残虐・強欲・卑劣な人物であっても、魔と敵対さえしてくれれば、剣は持ち手に力を貸す。

つまり……持ち手が品性下劣な悪人であっても、剣は構わないのだ。

しかし、剣が構わなくても、人間は構う。
勇者にふさわしからぬ人物が勇者となれば、勇者の主君であるエウロペ国王の名誉も地に落ち、世に深刻な被害が広がるからだ。
古くは四代目勇者リシャール様。リシャール様は酒と魔薬に耽溺した社会的落伍者で、あまりにも欲望に忠実すぎた。大魔王退治の旅で各国を転々としたリシャール様は、その犯罪行為と奇行で各地で勇者及びエウロペ国の評判を地に貶めてくれた方だった。
勇者リシャール様の被害を被った方は、二百人と推定されている。大魔王退治の名の下に、この地上最強の武器を持った犯罪者は大暴れをし、各国に被害がもたらしたのだ。
大魔王退治後、リシャール様は幸いな事に早世（失言）なさったのだが……
リシャール様の事もあって、エウロペ国王は我が一族に密命を下された。

勇者にふさわしからぬ人間が二度と勇者とならぬよう教育せよ、その為には思想矯正も許可する、と。
思想矯正、即ち、洗脳である。
王家の諜報機関に代々伝わっていた秘儀、宮廷魔法使いの魔法、拷問術の手管を取り入れ、我が一族は独特の精神暗示法を発達させた。
勇者にふさわしからぬ人間を矯正する為の、最終手段として。

リシャール様以降、我が一族が最も重視した勇者一族への教育は……人格形成であった。
世を救うに値する、信心深く、エウロペ国王への忠義にあふれ、悪を憎み、正義に燃え、弱者への労りの心を忘れぬ高潔なる人物を

育て上げる事こそが真の使命となったのだ。
勇者候補には幼い時分から、先祖の偉業（リシャール様も偉人として教えている。エウロペでは彼の犯罪行為は隠蔽されている）を説き、勇者に憧れを抱かせる。心に一点の曇りもなく『勇者候補』である自らを誇りに思う……そんな人物を育成する。
我が一族の教育は功を奏し、勇者たる事を誇りに思う勇者が数多く生まれた。
だが、ごく少数ではあったが、侯爵家にも勇者にふさわしからぬ資質の子供が生まれる事があった。
ひどく臆病で他人と争えぬ者、逆に残虐な嗜好が強く弱者をいたぶる事を好む者、万人には理解されぬ特殊な趣味を持つ者。
普通教育で不適切な面を矯正できない子供に対しては、家長たる侯爵と国王陛下からご許可をいただいた上で暗示教育を施してきた。
勇者として争いを厭わぬよう、勇者として弱者をいたわるよう、勇者として万人から好かれるように、矯正が完了するまで暗示をかけ続けたのだ。

我が一族の働きもあってリシャール様より後、高潔な高貴な魂の所有者が剣の持ち手となり続けた。
神を称え、国王に忠誠を誓い、祖先を敬う……そんな勇者達ばかりだった。勇者にふさわしい人間によって、世の平和は守られ、今世における勇者一族の主君であるエウロペ国王の評判も称えられた。
十二代目勇者ランツ様の登場までは。

ランツ様は子供時分から我ら一族を嫌い、その教育の一切を拒否した。礼儀作法も一般教養も拒む、野生児のような子供であったと聞く。
私の祖父は彼の未来を憂い暗示教育を施そうとしたのだが、凄ま

じい抵抗にあい、それはかなわなかった。
ランツ少年は暗示をかけようとした私の祖父の右腕を……『勇者の剣』で叩き落としたのだ。まだ七つであったのに、『勇者の剣』を呼び寄せ抜き、全力で抵抗したのだ。それが、ランツ様と『勇者の剣』の初共鳴だった。
無限の守護の力を発揮する『勇者の剣』と共鳴している子供に、暗示などかけられるはずもない。
その粗暴さを放置するのは危険ではあった。が、勇者の位は我々の教育を正しく学んだ彼の兄エミール様が継ぐ事となっていた（エミール様も『勇者の剣』を扱えた）し、七つで有資格者となった者はランツ様が初めて。一命をとりとめた祖父がランツ様を庇われた事もあり、我が一族はランツ様の教育を諦め、その生を見守る事とした。

しかし、大魔王復活前にエミール様は『勇者病』に倒れ……街のごろつきのような品性下劣な男が勇者とならざるをえなくなったのだが……

世の中、何が起きるのかわからない。勇者候補のスペアであっても、いつひょんなことから勇者となるかわからないのだ。
勇者一族であれば継嗣でなくとも、教育は必要だ……
ランツ様のことは我が一族にとって、良い教訓となった。
むろん、私にも。

私はナーダ国王に暗示の程度を説明した。
『理想の勇者』になるまで洗脳をかけ続けては、彼女は彼女ではな

くなってしまう。
そこまで非道な事をする気はない。
ラーニャ様の性格をいじる気はない。
傲慢でかわいげがなく学問に不熱心ではあるが……根は悪い方ではない。家族思いで、弟思いのやさしい性格をなさっている。インディラ国も愛しておられる。
そして、何よりラーニャ様には強い『我』がある。己を正義と信じ、何事にも立ち向かってゆく強さがある。
その点は、勇者にたいへん向いている資質である。
その強い個性を、暗示で良い方向に向けたいのだ。
ラーニャ様が勇者となられる可能性は限りなく低い。が、もし、勇者となったとしても、戦えるような方にしたい。
性別で『勇者の剣』との相性があまりよろしくない以上、ラーニャ様が勇者になるには『勇者の剣』との強い共鳴が不可欠である。
ご本人が座学で己を高める気がない以上、暗示は必要だ。
決して、強い思想誘導は行わない。
ラーニャ様本人がもともと持っている感情を増幅するだけの、軽い暗示しかかけない。
何の為に剣を振るうのか……それを強く心に刻ませたいのだ、と、私は訴えた。

ナーダ国王と相談を重ねた上で、ナーダ国王と三人の宮廷魔法使いに立ち会ってもらい、洗脳魔法を数回にわたってラーニャ様にかけた。
ラーニャ様が本来持っている感情を、特殊状況下で増幅させる魔法……と、いったところだ。
ラーニャ様は、闇も魔も人間の本能として漠然と嫌われていたが、信仰に篤くないのでさほど強い感情ではなかった。
その魔への嫌悪感が強くなるよう煽りたてた。

魔は、ラーニャ様の大切な家族を、穢し、奪おうと機会を窺っている。
隙を見せれば魔は喰らいついてくる。
人の世を壊す事が魔の望みである為、際限なく、魔が滅びるまで、魔は人の世への侵攻をやめない。
魔は『絶対、許してはいけない』。
許せば大切なものが、危機にさらされる。
魔を憎み、神の使徒として戦え。
常に光と共にあり、己の為ではなく、愛する者を守る為に剣を振るうのだ……
そんな事を心にふきこんだ。
倣岸な彼女が独善に走らぬように、人の為、世界の為、光の為に戦うのだと暗示をかけたわけだ。
その為には人を斬る事も厭わぬように暗示をかけた。魔族だけではなく、大魔王教徒つまり人を斬る事もためらわぬよう、精神を操作した。
魔との戦いにおいては、彼女は迷いはなくなる。愛するものを守るという正義を貫く為、煩わしいものは全て忘れる……そんな暗示をかけた。

暗示をかけない時間は通常の勇者教育を続けた。
ラーニャ様のお嫌いな座学だ。
飽きっぽいラーニャ様に刺激を与える為、義弟のガジャクティン様を同席させる事もあった。
勇者に対するたいへん深い知識をお持ちのガジャクティン様は、真摯に授業に臨まれた。事前に教科書を読んで質問事項をまとめておき、答えをもらってもさまざまな角度から検討した上で納得できるまで思考を続け、教育係である私への感謝を常に口にし、授業を終えてからはきちんと復習もするという……理想的な生徒だった（

正直……何度、ガジャクティン様がセレス様のお子様であれば良かったのにと思った事か……あ、いや、いや、その考えはラーニャ様に対しあまりに不敬。決して口にはせぬようにした）。

ガジャクティン様は、グスタフ様の教育係も務めた私の授業を喜び、熱心に学習にうちこんでくださった。

四つも年下の義弟が好成績をあげれば、ラーニャ様も焦ってくださるのではないかと思ったのだが……

残念なことに、無関心。『私の知ったこっちゃないわ』と、あくまでマイペースに本を斜め読みしていらっしゃった。

勉学にいそしみたくなる洗脳をかけてやりたくなるほど……ラーニャ様は勇者勉強に不熱心だった。

嬉々として学んでくださるガジャクティン様を見るにつけ、その百分の一でもラーニャ様に熱心さがあればと思ったものだが……

『姫勇者ラーニャ』を読んだ限り、どうにか役目を果たされているようだ。

又、私の教育の効果のほども窺えた。

シャイナにおけるエーネ戦のラーニャ様の変貌には、暗示の影響がある。

大切な仲間を傷つけられ殺されかけて、ラーニャ様は『絶対、許さない』と、お怒りになられた。その怒りが『勇者の剣』との共鳴を生んだのだ。

「ラーニャの旅は順調だね」

私が本を閉じると、グスタフ様は椅子に身体を預け目を閉じておられた。
「四天王の討伐が驚くほどに早い。大魔王すらも最速で討伐してしまうかもしれないね」
「信じがたいことですが、その可能性も高そうです」
「神速の勇者と呼ばれているとか」
「そんな尊称をいただく方になろうとは、夢にも思っておりませんでした。授業中、だら～とばかりしていましたしね」
私は大きくため息をついてみせた。
「ひどい時には、私の定規を一週間で五本も駄目にしてくださいましたよ」
そう言うと、グスタフ様が小さく笑われた。
「そういえば、机を定規で叩いていたね。私が集中力を欠いたり、よそみすると、おまえは机をバチンと叩いた」
「注意を促す為、音による刺激を与えたのです」
「静かな部屋に、もの凄い音が響いたっけ。あれはビックリした。心臓に悪かった」
「グスタフ様の授業で定規を使うのは、二週間に一度あるかないかでしたよ。優秀なグスタフ様とラーニャ様とでは、私の定規の使用頻度が全く違いました。ラーニャ様のおかげで私、年に五十本から百本、定規を新調したんですから」
なら叩くのはやめれば良かったのにと、グスタフ様が愉快そうにお声をあげて笑われる。

グスタフ様の元気なお声を耳にすると、私も元気がいただける。
出来の悪かった生徒であった方も頑張っていらっしゃるのだ。
私も勇者の教育係として、ラーニャ様に恥じぬ働きをしなければ面目がたたない。
グスタフ様におすこやかな体をお戻しする為、『エミール病』の

治癒方法を探すのだ。

教育係の独白！　彼女の心は……（後書き）

『勇者としての初仕事！　魔族召喚阻止！』で、ラーニャが自分の暗示のことを言ってます。が、本人は魔族に関わるモノを斬る事への罪悪感が無くなる暗示をかけられただけだと思っています。

この暗示の影響については、先の話で。

＊　＊　＊　＊　＊

次章からは、新展開。シャイナに戻った勇者一行に思いがけない所から、魔族情報がもたらされます。

一方、インディラの後宮で目覚めたアジンエンデは、ラーニャの母――ジライの伴侶セレスと対面します。

明日からムーンライトノベルズに『女勇者セレス――ジライ十八番勝負』をアップします。その後、ラーニャちゃんに戻ってきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8448v/

姫勇者ラーニャ

2011年12月24日01時54分発行